まんじ

No. 95

2005.2.1

まんじ第九十五号　目次

針の穴を通った駱駝（一）……鍋屋次郎…4
孔子春秋（二）　第三章・第四章・第五章……三戸岡道夫…16
茉莉花伝―東丹国使と来た娘―（二）……森下征二…25
義人・伊豆頭七異聞……堀内永代…44
政争の国……新井宏…62
焚き火　―大林和光君のこと―……大和禎人…71
還暦からの考古学（一）
伊場遺蹟出土の物差しと伝伊場遺蹟出土の小銅鐸……中山喬央…73
周作と一堂　司馬雑感二……山田嘉久…83
短歌　行雲流水（八）……石黒修身…91
台湾万葉集について……石黒修身…93
現代詩　友に寄す（十四行詩三題）……松下壽男…100
ロダンの二宮金次郎……松下壽男…101
古い物・遠い夢　茶道具三昧……忠内正之…112
南洲屋のこと……吉田忠雄…117
小野小町物語（四）……島津隆子…121
丙午の女（五）……太田和貞…128
遥かなるカメルーン（六）……太田精一…132
体当り戦法を強制された神風特別攻撃隊の人びと（十七）……千坂精一…142
紙透家の人びと（二十三）……紙透寛夫…156
漢詩潮騒録（四十二）……鯨游海…159
撞木　編集子…165
表紙……田寺怜葦
カット……宮城正彦
鈴木國男
清水トム

針の穴を通った駱駝

鍋屋次郎

第一章　暗雲

寂寥山竹林寺、筑前博多の丘陵の林の中にひっそりと建っている。この寺の山門に掲げられている寺号額は墨の色はややかすれ、文字が浮き上がっていて、いかにも時を経ていることを思わせる。しかし、一歩山門から中にはいると、自然の佇まいの中に庭は掃き清められ、水も打たれ、この寺に仕える人達の心が偲ばれてくる。

利休は、秀吉の島津征伐への随行を命ぜられ、博多に来て何気なく立ち寄ったこの寺が気に入って、住職に頼んで、その一隅を借りて宿舎としていた。

住職仙遊師は利休に対して

「仏に仕える身、世の誉れも富も、愚僧には全く関係ございません。ただ衆生の救いだけを仏に願って生きております」

の言葉と、寺の佇まいや質素な調度品の中に、侵しがたい気品すら感じられ、利休は「侘び・寂び」の世界に通じた所のある趣が大変気に入った。

住職が

「この部屋で宜しければ」

と案内してくれた部屋は奥庭に面していて、八畳の和室と六畳の次の間があって、利休と従者二人には十分であった。

天正十五年（一五八七）六月十日、その竹林寺の奥まった部屋に、人目を忍ぶような形で千利休と高山右近は向き合っていた。

利休の従者は席を外し、右近の従者も境内右側の四阿に待たせていた。

聞こえてくるのは蝉の声だけである。

「右近様、このような所に貴方様をお呼びだてしたことをお許しいただきたい」

「いや、宗匠様、右近とお呼び戴きたい。私は茶の湯では貴方の弟子。右近様はおやめ戴きたい」

「いや、茶の湯の道ではそうであっても、右近様は歴きとした明石六万石のお大名様」

右近は突然笑い出して

「宗匠、高山でも右近でもお好きなようにお呼びなされ。今日の宗匠は難題を抱えていらっしゃるようにお見受けするが」

と、右近は意識的に目に笑みを浮かべて利休の目を見つめた。

利休は、右近のこの一言に救われ、ホッとしたような溜息をつき

「実は上様より頼まれましてな」

ここまで言った利休は、部屋の片隅に、竹筒に慎ましやかに活けられた一輪の紫陽花に目をやって後は黙した。

しばしの沈黙の後、右近は

「西国を手中に収められた上様は、ついに拙者にキリシタンを捨てるよう命ぜられましたか」

と言って利休の顔を見つめ

「ご免」

と、団扇を手に取り胸元を広げて風を入れた。

利休は右近と目を合わせるのを避けるように、相変わらず紫陽花一輪を眺め続け、右近の質問に肯定も否定もしないで黙している。

二人の沈黙が続くと、気のせいか蝉の声が一段と激しく聞こえた。

一昨日の夕方、秀吉の陣所から利休に呼び出しがあり、何事かと駆けつけたところ、秀吉は

「利休、今日はそちの意見を聞きたい。袴を脱いで二人だけの話としようぞ」

と言って、何事かと不安げに面を上げた利休に対して、

「利休は九州のバテレンとキリシタン大名をどのように思うか」

と言いだした。質問の意味が分からない利休は

「上様、手前は一介の茶人でございます。政治向きのことはとんと分かりません。また口を挟む立場にございません」

と用心深く答えた。

「利休、そのように予防線を張るな。こんな時に呼んだのは他の者にも聞かれたくないからだ」

ここまで言ってから秀吉は一気に核心に触れて

「島津は征伐した。この戦で気がついたことは高山右近をはじめとした大村、大友、有馬、小西などのキリシタン大名達のことよ。海上には小西勢のキリシタンの幟が、

また、陸地では有馬勢などのキリシタンの幟がはためいていた。この者達はよく働いていた。そのキリシタン大名どもは、デウスが一番で我国古来の神に対しては何とも思っていない。もしかすると、この儂もデウスよりも下にいるのではないかと感ずることがある」

利休は目を伏せたまま聞いている。秀吉はなおも続けて

「それとな、もしも島津がキリシタンになったと考えると、九州はキリシタン国になってしまう。港の外には鉄砲を何挺も備えたポルトガルのフェスタ船がいる。これらが力を合わせてこの儂に向かってきたら、天下統一どころではない。東の徳川、その奥の伊達、伊豆の北条と言った連中は、心を許すわけには行かないし、目が離せない。東西というか南北というか、腹背に敵を迎えることになってしまう危険がある」

更に続けて

「利休、そうなると南蛮貿易による莫大な利益もキリシタン大名共のものとなってしまう。そのようなことを放って置くわけには行かない」

利休にとっては、こんなに正直に本音というか、心配事を漏らす秀吉は初めてであった。何処まで頷いたり意見を言って良いものか不安であった。

「大友は豊後一国くらいにしてしまい、その他のキリシタン大名の国替えと、国替えの時にキリシタン大名の間に必ず別の大名を持って来るようにして、キリシタン大名をそれぞれ孤立させ、監視させることが必要だ」

ここまで言ったとき、部屋の外から

「ご酒をお持ち致しました」

と声があり、侍女が酒肴をささげて入ってきた。秀吉の前に膳を置いて部屋から出てゆくのを目で追って

「ところで右近のことであるが、見ていると、キリシタン大名連中から最も信望があるように思われる」

秀吉は酒を口に運び、再び語り出した。

「右近はな、天正十三年八月、丁度二年前のことだ。儂は高槻四万石から明石六万石に替えた。これは右近がそれまの戦いでよく仕えてくれた褒賞だ。まだまだ右近には儂のために働いて貰いたいと思っている。そのためにはキリシタンであっては困るのだ。分かるだろ、利休」

と言って杯を下に置いた。

利休は恐る恐る

「上様、仰せの通りかと存じます。先程仰せの国替えなどのことでございますが、キリシタン大名はどなたも今回の島津征伐で武功をあげておられますので、いずれ時期を見て思いの通りになさいませ」

ここまで聞いた秀吉は

「今は何もするな、と言うことか利休」

「恐れながら申し上げます。キリシタン大名の中で最も慕われているのが高山右近様でございます。高山右近様がキリシタンを捨てることが出来れば、キリシタン大名達に大きな影響を持ちましょう」

ここまで言うと、秀吉は我意を得たとばかりに

「そうよな。奴にキリシタンを捨てさせる妙案はないか」

暫し考えてから

「利休、右近をキリシタン大名達の近くに置かない方がよい。そうだ、儂はいずれ北条を滅ぼす。右近がキリシタンを捨てると約束すれば、その後、伊豆を中心に三十万石を与えると約束しよう。そうすれば徳川への備えにもなる。利休、そちは右近の茶の湯の師匠だ。この使いに行ってくれぬか」

秀吉がいつもの調子の命令でなく、依頼であることに利休はただならない秀吉の思いを感じた。

「上様、お言葉のように行くかどうか分かりませんが、この利休、上様のご意向をお受けし、高山右近様にお伝えさせて戴きましょう」

利休のこの言葉に、秀吉はホッとしたような笑みを浮かべ

「利休、儂は高山右近を信頼している。儂に対して、あれほど忠実に戦ってくれた大名はいない。何度も儂を助けてくれた。それだけに右近がキリシタンであることが残念でならない。利休、頼んだぞ」

竹林寺の狭い一室で右近が

「西国を手中に収められた上様が、ついに手前にキリシタンを捨てろと命じられましたか」

と言った後、利休は一昨日の秀吉とのやりとりを反芻し、右近は右近で、十二歳の時、日本人イルマン、ロレンソを招き父高山飛騨守と共に洗礼を受けてから今日までの自分のキリシタン信仰を振り返っていた。

約半刻の沈黙の後、利休は

「右近様、如何でござろうか」

と回答を促した

「宗匠、私がこれをお断りしたら、一番お困りになるのが宗匠でございましょう。私にはよく分かります。」

ここまで言って、利休の目をじっと見つめ

「宗匠、私が上様に従って島津征伐にお供したのは、上様の下で万民が楽しく平和に過ごすことが出来るような世の中になれば、との思いで従っています。上様の天下統一にはそのような目的がなければなりません。」

更に続けて

「我々キリシタンは、万民が楽しく仲良く過ごすことが出来れば、自分の富にも地位にもこだわりません。これがデウスの教えです。デウスの前では地位の高いも低いもありません。皆平等です。しかし、私は上様をこの日の本の秩序を正す御方として、そのためにお仕え申し上げております」

利休はただ頷いていた。

「宗匠、上様に、『キリシタンである我々は、何処までも全ての人の幸せを願っている』と言うことをお伝え願えないでしょうか。そして、『そのために上様に天下を統一して戴いて、この日の本から争いをなくして戴きたいのです。この右近、そのためのお手伝いは今迄以上に働かせて戴きます』と」

利休はこの時、キリシタンである右近達と秀吉の人生観・価値観の決定的な違いに気がついていた。

秀吉の生い立ちから来るコンプレックス。自分の財と地位と名誉が全てである人生観と価値観。その上、それの実現のためと、自分の安泰のためには、邪魔なものは全て切り捨てる。この冷酷極まりない独裁的政治手法は信長仕込みのものである。

暫くして利休は、

「右近様、その旨は上様に言上致しますが、ご一族、ご家来衆、領民のことを良くお考えになって、その人達に対して、上に立つものとしてどのような振る舞いが必要か、とくとご案じ召されよ。差し出がましい失礼をお許し願いたい」

と、茶道の門人を諭すように、静かに話して一礼した。

既に夕闇が迫っていた。右近が先に庭に下り、続いて利休が部屋を出たところへ住職がやってきて

「利休様、寺のこと故何もご用意できませんが、一汁一菜の夕食で宜しければご用意致しますが」

と言ってきた。

右近が

「ご住職、お気遣い召さるな。身共はこれにて失礼致す」

と言ってから、利休と住職に対して深々と一礼して、山門に待っている従者の方へと去っていった。

利休と別れて自分の陣所に戻った右近は、家臣の前では何事もないよう陽気に振る舞い、家臣達と共に夕食を取り終えて自室に戻った。

一人になって暫く瞑目していた。

今の秀吉は、言い出したことは絶対に通す。またそうすることを、天下統一を図るための、組織にけじめをつけるために絶対必要な政治手法としている。従って、右近に対してのこのことは、利休を使っての意向打診だけでないことが、永年秀吉に仕えている右近には分かっていた。では、自分にキリシタン信仰を捨てることが出来るか。自分の薦めもあったが、この右近の生きざまを見てキリシタン信仰に入った多くの人達を裏切ることは出来ない。

家族も、家臣達も、特に十三年間も右近を慕ってくれた高槻の領民達をも裏切ることは出来ない。

バテレン・オルガチイノ様、イルマン・ロレンソ様から教えて戴いたデウス様の愛、これこそ人として生きる上に絶対に持たなければならない真実だ。

人間の一生涯は、パライソ（天国）で、デウス様の御許で永久に生きることを許されるための道程である。この道程の歩き方を誤ってはならない。世の富と名利を追う、自分勝手に生きることが誤りの道であり、多くの人が歩みたがる、歩んではならない広い道である。自分は狭い道を歩まなければならない。今、自分の力で富と名利を手に入れているわけではない。デウス様が自分を大名として用いてくださっている。だから自分は、争いがない世を作ることがデウス様から託された使命であり、そして家臣・領民が安心して日夜励むことの出来る領国を作っていかなければならない。自分にとっての狭い道、これはキリシタンとして歩み続けることなのだ。

ここまで思いを巡らせたところで、右近の心は動揺した。

自分がキリシタン信仰を捨てなかったときは、家族・家臣・領民はどうなるのだろうか。生きる術を奪われて、皆塗炭の苦しみを味わうことにならないだろうか。我が身一人が、どのような苦しみを受けようと、これは避けることなく潔く受ければよい。しかし、自分がキリシタン信仰を捨てないことによって、家族・家臣・領民が苦しむこととなれば、これをデウス様はどのようにお考えなのだろうか。自分一人が信仰を捨てて我慢すべきことなのか・・・・・・。

一方、その翌日、利休は秀吉の前に平伏して

「上様、右近様のこと、今暫くこの利休にお時間を下さりませ」

と願うと、秀吉は

「そうか、簡単には行かないと見えるな。しかし利休、時は待てない。明後日迄に説得せよ。さもないと予が直々に右近に命じなければならないこととなる」

と言ってから、部屋の片隅に侍っている三成を見て

「三成、南蛮ポルトガルのフェスタ船の船長はなんと言ったな。ドミン・・とか何とか言ったな。そ奴に明後日、予の所に来るように伝えよ。要件はその時命ずるとな」

三成が平伏して復命し終わらないうちに、秀吉は立ち上がり奥に入っていった。

右近は小西行長に会って行長の意見も聞きたくなり、翌朝、密かに行長の陣営に使者を出した。半月ほど前行長に会ったとき、彼が大友宗麟の葬儀の模様を語ってく

れたことを思い出した。
それは約一ヶ月前の五月六日に大友宗麟がキリシタンとしてこの地上の生涯を終えたとき、キリシタン葬が盛大に行われ、その式は、バテレン三名（ラグーナ、レペロ、フランシスコ）とイルマン二名が司り、棺の周りには十字架の旗が無数に翻っていたという。
勝手に自己の陣営を離れ豊後まで行くことの出来ない右近や小西行長などは、参列したくも出来なかったが、小西行長が彼の名代として密かに派遣した家臣の報告を聞き、右近に語ってくれていた。
それを思いながら右近は、自分が秀吉の命を断れば、打ち首か、切腹か。その上、自分の葬儀は罪人として寂しいものになるだろう、等と思いめぐらしていた。

その日の夕刻、使いは戻り行長の文を持ち帰った。それには
「明日上様に呼ばれているので、その帰途立寄る。多分夕刻になるだろう」
と書かれている。秀吉からの呼出し要件には何も触れていない。

行長の文を読み終わった時、利休の使いが文を持ってやって来た。それには
「明日正午、竹林寺にてお目に掛りたい。ご都合を承りたい」
とだけ認めてある。
これを読み終わった右近は、状況が差し迫って来たことを察知して、使者には口答で
「承知仕った、と利休宗匠にお伝え願いたい」
とだけ返事をした。

右近はその夜一人になったとき、彼が秀吉の命令を断った場合、キリシタン布教そのものに秀吉が大きく切り込んで来るか否かを考えた。しかし、小西、大村、大友、有馬、黒田など秀吉を支えるキリシタン大名の存在と、秀吉が独占したがっている南蛮貿易による利益との二つを考えた場合、秀吉は、キリシタン大名への牽制として自分を処分して終わるだろう。キリシタン布教へも多少の注文は付くかもしれないが、大きな影響はないだろう、と考えていた。

翌日の午後、竹林寺の一室で利休は茶の用意をして待っていた。
部屋に入った右近は茶釜・茶道具が並んでいるのを目にして客座に座り一礼した。それを見た利休は黙って茶を点てた。
作法通りにお点前全てが終わり、利休は茶釜・茶道具から離れて、改めて下座に座り直し

「右近様、重ねてご意向をお伺いしますが、右近様のご内心は別として、表向きだけでもキリシタンを捨てては下さいませぬか」
と単刀直入に切り出して右近を見つめた。
右近は黙して語らない。
半刻近く無言が続いた後、右近が口を開いた。
「宗匠、表現は悪いが、浮き世の便法を使え、と言うことですな。そして嵐が静まるのを待て。いずれ便法を使わなくても過ごせる時が来る。身どもが頑なな振る舞いをすることにより、家臣、領民は勿論のこと、多くの人達が迷惑する。良く考えてみなされ、と仰りたいのですな」
利休はそれを聞いて苦笑いしたが、直ぐ真剣な面持ちで
「右近様、全てお分かりではないですか。でもそれをなさることは、右近様にとっては命を取られるよりもお辛いことと拝察致しますが」
と言った。
「宗匠こそ身どもの心を、鏡で映すようにご存じで。さすが宗匠です。これから申し上げることは宗匠限りとしてお聞き下さいますでしょうか。上様や世の心ない人達には言いたくありませんので」
「どうぞ何なりと仰せ下さいませ」
の利休の一言で右近は語り始めた
「キリシタンの神デウスの教えの中で『人は神と富の二つに仕えることは出来ない』とあります。便法を使うことは、世の富に仕えることとなります。人が富みに目が向けば神の教えに対してなおざりになります。反対に、神の教えに忠実であれば、人は富や名誉や地位に拘らなくなります。拘っていては神の教えを忠実に守れないからです。デウスの御子ゼスズ・キリストは財産があり地位がある者達をこのように戒めています。『金持ちがパライソにはいることは難しい。金持ちがパライソに入るよりも、駱駝が針の穴を通る方がまだやさしい』（新約聖書マタイによる福音書十九章二十四節）と」
更に続けて
「宗匠、お分かり頂けますか。身どもは十二歳の時、父飛騨守の生きざまに傾倒してキリシタンになることを決心して洗礼を受け、十五年経っています。父飛騨守もキリシタンとしてこの地上を去りました。多くの家来や領民が、父や身どもを信じてキリシタンになっています。その人達の信仰は徒や疎かな信仰ではなく真剣な信仰です。そのような人達に対して身どもが便法を使うことが出来ますか。もし身どもが便法を使えば『右近は嘘つきだ。富みに仕えている。右近の信仰はまやかしだ。自分の立身出世のための信仰だ。キリシタンを利用している』と言われるでしょう。それに対しては一言も反論できません。そして、身どもは生きてはいられないでしょう。従って、潔く信仰に殉ずることこそデウスが身どもに与え給うた道と信じます」

利休は一言も発しない。右近は続けて
「ですから宗匠から上様に対して『右近は宗匠が言っても返事をしてくれません。それは、上様が本当にそのようなことをお命じにになっておられるのか。右近は信じないからです』とご返事していただけないでしょうか。そうすれば上様直々に身どもにお命じになられることでしょう。その時、身どもの口からはっきりと申し上げましょう」
右近のこの言葉に利休は
「そこまで御覚悟のほどを承れば、もうこれ以上貴方様に申し上げることはありません。更に、私の立場までお考え下さり大変有り難くお礼を申し上げます。では、明日、上様にその旨言上仕りましょう」
話し終えて部屋に静寂が戻ると、我が世を謳歌しているかのような蝉の声が耳に入ってきた。
　利休は
「まさに『蝉時雨』ですな、右近様。長いこと暗い地中にいて、やがて地上にでて、地中にいる間は想像もしていなかったであろう美しい緑の空間を、飛び、歌い、そして地上での短い命を全うして行く。あわれにも美しいではありませんか」
の言葉に、右近はにこりとして
「いかにも、宗匠様」
と答え、一礼して部屋を出ていった。

その日の夕方、小西行長が右近の陣所に現れた。
　二人だけになってから、行長は、秀吉からポルトガルのフェスタ船の戦装備について詳しく聞かれ、彼の頭の中に入っている船内の装備やその配置などを、秀吉の目の前で図面に書いて説明したところ上機嫌であった等、暫く陽気に話し
「ところで右近殿、何か差し迫った話でもおありか」
と尋ねた。右近は
「小西殿、お忙しいところをお立ち寄り戴き恐縮です。本来はこちらから出向くべきことなのですが。実は上様が身どもに『キリシタン信仰を捨てるように』とのご命令が近々あるようなので、小西殿はその辺のご事情を何かご存じかとお伺いしたくて、使いを出した次第です」
右近のこの言葉に驚いた行長は、やや声を大きくして
「右近殿、それは真実か。どこからそれを知られたのか。つい先程の上様にはそんな素振りは見られなかった。話の中で、『キリシタン信仰はその者次第』と仰せになり、上機嫌であった。そして右近殿のことを『右近のような忠実な者に、予の天下で東方の盾になって貰いたい』と仰せになっていた。『キリシタンを捨てろ』との仰せは何かのお間違いではないのか」
　この行長の言葉に、右近は全く分からなくなった。利休があれほど真剣に心配していたことは嘘ではない。暫

くしてから
「小西殿、上様はキリシタンが広まり、キリシタン大名が多くなることを御懸念遊ばされておられるのではなかろうか。」
　暫く二人とも宙を見つめて考えていた。右近が口を開いて
「小西殿、御貴殿は先程上様がフェスタ船について大変お詳しいお尋ねがあったと申されましたな。御貴殿の軍勢が海上から島津へ向かっておられたとき、ポルトガルのフェスタ船はご一緒でしたか」
と尋ねた。行長は
「ドミンゴス艦長が乗っている一艘だけだ。たった一艘だけだけれども、船足は速くて、その上鉄砲などの戦装備は沢山あり、海上戦では大変な威力を持っている。また海上から陸地の砦を攻撃するのにも威力は十分だ。我々の船は兵を運ぶことだけで、戦力的には船上から弓矢で射るだけだから、陸からの鉄砲にはかなわない」
ここまで聞いた右近は大きく頷いて
「行長殿、上様の御懸念はそこにおありなのではないか。何かあれば、南蛮船はキリシタンに組みする。反キリシタンには組みしないだろう。そこで、キリシタン勢力が大きくなって南蛮船と組んで事を起こす危険をお考えではなかろうか。貿易のこともあり、上様は表向き『キリシタン信仰はその者次第』として南蛮船とは摩擦が起きないように配慮して、その上で国内的にはキリシタン勢力が大きくならないようにする。そのために大名を押さえる。従って大名は『その者次第』ではなく人別規制をするのではなかろうか」
右近は更に続けて
「だから御貴殿にフェスタ船の戦装備などを詳しくお聞きになったのではないのか」
暫く行長は腕を組み考え込んでいたが
「右近殿、確かにキリシタンを押さえながら南蛮貿易を独り占めしようとするならば、御貴殿の言うとおりだと思う。しかし、今、キリシタンに対して上様が危険に思う理由は何も見あたらない。現に、今回の島津征伐でも、中心的に活躍したのはキリシタン大名ではないか。むしろその忠節を評価すべきだと考える。ましてや、御貴殿の永年にわたる身命を賭しての上様への忠節は誰も知らない者はいない。それを羨んでいる訳の分からない仏僧達の画策があったのではないか。心配することはない。もっと気楽に考えて上様のご意向を聞かれたら宜しいのでは」
　行長のこの意見で、右近は「そのような考え方もあるか」と一瞬は思ったが、秀吉と愉快な時を過ごしてきたばかりの行長と、議論を深める時ではないと思い
「行長殿、御貴殿のお考えはご尤もと思う。身どももゆっくりと考え直してみたい」

続けて

「行長殿、これからお帰りの夜道をほろ酔い機嫌でお帰りになるのも悪くはなかろう。さ、一献酌み交わそう。ご家来衆にも用意はしてある。ご遠慮召さるな」

と言って手を叩き、かねて用意してあった行長の大好きな「鯛の刺身」と酒を運ばせ、後はキリシタン同信の友としての会話が弾んだ。

行長が帰ってから、右近はもう一度行長が語ったことを反芻、考えてみた。どう考えても行長の考えは甘い。しかし、秀吉の「キリシタン信仰はその者次第」と言っていることも事実だろう。諸般の事情から、その中で「大名だけは別」と考えるのが尤も妥当な線であると自ら結論を出し、床に就いた。

翌日の夕方、秀吉本陣からの使いが、馬上のまま右近の陣所へ駆け込んできた。何事かと驚いた右近の近習が出てみると、馬上の武士は

「上様よりの使者である。高山右近殿にお目通しあれ」と書状を持った右手を高らかにあげて大声で叫んでいる。近習は慌てて、馬上の武士を陣中の幕屋に居合わせた右近の所へ案内した。

右近は床几から離れて下座に回り平伏して、使者を上座に迎えた。

「お役目、ご苦労に存じます。上様からの御用向き、謹んで拝聴致します」

と言う右近に対して、使者は書付けを開き、おもむろに

「役目上、上様からのご命令を申し述べる。『高山右近殿には来る六月十八日未の刻、上様陣所まで出頭のこと。用向きの義はその折りにお達しあるべし』以上」

これを聞いた右近は

「謹んで承りました。上様によしなに言上給りたい」

と述べ、立ち上がった。

その場に急いで用意した酒肴が運ばれ、右近自ら使者をもてなした。

秀吉からの使者が帰ってから、家来達が心配そうに

「殿、上様からいかようなお召しでありましょうか。上様のご信頼の厚い殿でございますから、万に一つもお叱りはないでしょうが、先程のお使者の態度がいささか気になります」

と言う。その場で立ったまま、右近は並み居る家来達に

「皆の者、心配は無用にいたせ。人の知恵よりもデウスの知恵が勝ることは良く承知しておろう。我らのこの世の歩みは、例えそれが試練の歩みであろうともデウスがお決め下さる。全てをデウスに任せるのだ。それが我らキリシタンの取るべき道だ」

と話して自室に入っていった。利休とのことは家来達には一切話してなかった。

その夜、右近は一人跪いて祈った。

「天におられるデウス様、弱い僕を強めてください。何処までもデウス様に従順な僕として歩ませてください。貴方は富と神の双方に仕えることは出来ない。また金持ちはパライソに入ることは難しい、と教えておられます。僕は今は確かに一人の大名として、この世では人も羨む立場にいます。しかし、パライソで貴方に迎えられないとしたら、この世の富も名誉も地位も何の価値がありましょう。デウス様、いかなる時も貴方の僕としての態度を崩すことがありませんよう、この僕を強め助けてください」

一方、秀吉は利休から

「右近は何も答えない。上様がそのようなことを仰るはずがない、と言って利休の話を一切取り合ってくれなかった」

としか聞かされていなかった。

秀吉は、キリシタン大名達に最も影響のある右近にキリシタン信仰を捨てさせ、その上で伊豆へ移封して三十万石を与えて東の守りをさせ、またポルトガルからフェスタ船を一艘献上させた上で、子飼いの大名を肥後または肥前辺りに配置して、そのフェスタ船を与えて九州諸大名に睨みを利かせ、また、貿易の実利を確保するためには、キリシタン信仰については大名とそれに準ずる高官のみを許可制として、その他は形式上自由とする考えでいた、と言うよりも、これらの構想は、秀吉の頭の中には既に描かれ決定されていた。

（続く）

孔子春秋（二）

三戸岡道夫

第三章　仕事と学問

しかし孔子はいつまでも、母の死を嘆き悲しんでばかりはいられなかった。なんとか自分の学問を武器にして、世の中へ出ていかなくてはならなかったからである。

すると十七歳の孔子の前に、千載一遇ともいえる絶好のチャンスがやってきた。

魯の国で一番の権力者である季孫氏が、人材登用のために宴を開いて、士人を招いたのである。

その頃の魯の国は、「三桓」と呼ばれる、

孟孫氏
叔孫氏
季孫氏

という三家によって、権勢が独占されていた。三家とも、魯の桓公の子から派生した家柄であるので、三桓と呼ばれ、権勢をほしいままにしていた。

三家は互いに勢力の拡張を競いあっていたが、勢力拡大のために人材をたえず集める必要があった。その中でも一番勢力の強かったのが季孫氏で、

（魯国はイコール季孫氏だ）

といわれるほどの権勢をふるっていた。その季孫氏が人材を募集するために、魯の国の「士」を招いて宴を開いたのである。

この頃になると孔子の学問もそろそろ評判になりはじめていたので、もちろんまだ「士」などではなかったが、孔子も「士」の一人として招待を受けたのだった。

孔子はよろこび勇んで出掛けていった。

だが、行ってみると、受付け係りをしていた季孫氏の家老の陽虎から、

「今日の季孫氏の宴は、『士』というお歴々をお招きしているのだ。お前のような小僧っ子に用はないのだ」

とののしられ、追い返されてしまった。

孔子はこれまでにいろいろな祭祀を手伝ったりしてきたが、そのとき厭味を言われたり、また「貧しい出のくせに生意気だ」などと、嫌がらせを受けたことがあった。孔子にとって新しい人生のスタートになる重要な宴でも、またしてもその嫌がらせを受けてしまったのである。

仕方なく、孔子はだまって引き下がるよりほかはなかった。これが孔子にとって生涯宿命のライバルとなる陽虎との出会いであった。

この時の屈辱は孔子の中に、終生忘れえぬ記憶として残った。孔子の人生のスタートともなるべき時に、このような屈辱的な挫折に出会ったのである。貧しく身分は低くても、自信を持って青春の野望にもえていた孔子が、小僧っ子と呼ばれ、分限をわきまえよと追い返された屈辱は、生涯孔子の中に陽虎への憎悪となって残った。しかしこの怨みをはらし、世の中を見返してやろうとする思いが情熱となって燃え、孔子を発憤させるのだった。

こうした紆余曲折を経ながらも、孔子は次第に公私ともに充実をとげていく。

まず家庭的な面でいえば、十九歳のときに結婚した。相手は宋国出身の幷官氏の娘であった。そして翌年、鯉という名前の子供が生まれた。

仕事の面では二十代の後半のころ、孔子は委吏という、穀物倉を管理する村役人に採用された。当時としては得がたい孔子の読み書きの知識が認められたのであり、孔子は穀物倉の出納事務を正確に行った。

その仕事の業績が評価され、やがて孔子は、司職吏に栄転した。司職吏というのは、牛馬を飼育する役である。いわゆる牧場を管理する役人になったのである。動かない穀物相手の倉庫番より、家畜相手の飼育係の方が難かしい仕事であるから、この職種の変更は、職務が昇進したことを物語っている。孔子はこの仕事にも一生懸命はげんだので、孔子の牧場の家畜は、よく肥っていたという。

しかし、たとえ司職吏に昇進したといっても、職種は依然として下級役人であるから、六芸を必要とする上級役人ではない。いくら頑張ってみても、これ以上の出世の途は孔子にはないのだった。

一般に当時の中国の制度では、下級役人といえども、村役人になればそれでもう一生食いはぐれのない、立派な出世なのだった。貧しい下層階級からの出世者には、それで満足すべきポストであった。

しかし、孔子はこの程度の役職には甘んずることができなかった。孔子としては、なんとしてでも下級役人か

ら上級役人へ、よじ登る途を探さなくてはならなかった。権門の子弟なら容易に上級役人になれたが、庶民出身の者でも、実力次第では抜擢される可能性があったからである。

孔子は学問の力によって、末端の行政官から、国政の中枢へ進む途を目ざしたのである。そのためには、何が何でも勉強しなくてはならなかった。生来学問好きの孔子には、それが向いていたといえよう。後世、孔子は、

（私のように勉学を好む者はいないであろう）

と、自分の学問好きを自認している。

だから孔子は仕事のかたわら、苦労をいとわず勉学にはげんだ。

このように青年時代の孔子の、小役人の仕事をしながらの勉学は、その後の孔子自身の人間形成や、深く幅広い人間学の成立に、有益だったのである。

第四章　学問への道と私塾開設

勉学するといっても、孔子にはとくに親しく師事する師がいたわけではなかった。

と言っても、遠くから心の中で、師と仰ぐ人物はいた。建国時代の周の文化を築いた周公旦（武王の弟）と、鄭国の子産であった（子産は孔子が三十歳の頃、この世を去った名宰相で、民の意見に熱心に耳を傾けた政治家であった）。

若き孔子は、これら昔の賢人たちの言行を記憶し、復習し、思索して、体得した。その勉学の熱心さはおそろしいほどで、賢人の言動にふれて感動し、夢中になって寝食を忘れるほどであった。

そのため、孔子は村役人として働くかたわら、次第にその学識が魯の国で評判になっていった。

孔子の学問は、政治への道の学問である。すなわち「士」になるための学問である。「士」になるためには、礼、楽、書、数などの学問が必要であるが、孔子はその学問を着々と身につけていった。

すると世の中には、孔子と同じように「士」になるための学問を身につけて、世の中に出ようとする人間が大勢いた。その人々が孔子の学識の深さを聞いて、遠い各地から、教えを乞いに次第に孔子のまわりに集まるようになってきた。

そこで孔子は思いきって勤めていた村役人の仕事をやめて、学問を教える塾を開くことにした。中国史上ではじめての私塾であり、それを魯の都、曲阜の一隅に開いたのである。

当時、名門の子弟は、公立の郷校へ行って勉学していた。しかし貧しい人々は郷校へは行けず、勉学の道が閉されていた。だが郷校へ行けない人々の中にも、向学に燃える人々が大勢いた。そういう人々が、孔子の私塾へ

集ってきたのである。

孔子がこのように弟子を集めて教育をはじめたのは、三十歳前後の頃かと思われる。論語の中に、

（三十にして立つ）

という孔子の言葉がある。三十歳で自分の立場が出来たといっているのであるが、それはこの辺の事情のことを言っているのではあるまいか。三十歳の孔子が、みなぎる自信をもって世に出ようとする意欲を表した言葉である。

子路とか、顔路、曽点、曽晳、秦商などという、初期の弟子たちが集ったのは、この時である。

顔路というのは、後年に孔子の第一の高弟となった顔回の、父である。

が、初期の弟子の中で、特別大書すべきは子路であった。

子路は孔子よりも九歳若く、武勇を好む、粗野で気の荒い青年だった。まるで任侠の世界にいたかと思える乱暴者であり、最初は、孔子の塾を武道塾とでもまちがえたのか、孔子のところへ来るのに、鶏の羽をつけた冠をかぶり、豚の皮で飾った剣を付けるという異様な格好で、乗りこんできた。そして、

「音楽よりも剣術が好きだ」

と、うそぶいていた。今でいえば、まるで暴走族の出で立ちとでもいえばよかろうか。おそらく子路は、孔子のところへ弟子入りするというよりも、「礼」とか「楽」などという軟弱なもので荒廃する国を救おうとする、孔子のやり方を批判し、脅かし、懲らしめてやろうと思って、やってきたのにちがいなかった。

ところが子路の思惑は、見事に外れてしまったのである。

というのは、まず子路は、孔子の百九十センチメートルもある巨大な身体と、そこから発散する精気に、すっかり圧倒されてしまった。さらに孔子から、文化や知識の重要さをさとされて、孔子の深い学識に心服して、ついに弟子入りしてしまったのである。

この時以来、子路は忠実な弟子に変身し、政事軍事に力のある力強い弟子として孔子を支え、生涯、孔子と苦労を共にする筆頭弟子となるのだった。もし孔子を悪く言う者があれば、子路は腕力で脅してまわる用心棒の役目も果した。だから孔子は、

「子路が弟子になってからは、私の悪口を言う者がいなくなった」

と、にが笑いしながら語ったということである。

言ってみれば子路のような人間でさえ心服させてしまう力を、すでにこの時の孔子は備えていたということになる。

そのようにしているうちに、有力貴族の子弟の中から

も、礼を学ぶために、孔子の塾に入門する者も出てきた。

もちろん貴族の子弟は公立の郷校へ通っているのであるから、孔子のところへ入門といっても、郷校をやめて転校してくるというのではなかった。郷校で学ぶかたわら、孔子の塾でも学ぶということである。現在でいえば、学校へ行きながら塾へも通うということであろう。しかしこのことは、孔子の学問がそのように注目されるまでに、評価が高まっていたことの証明である。

その貴族の子弟の中で特筆すべきは、魯の国の三桓の一つである孟孫氏の、息子が二人、入門してきたことであった。

それは孟孫氏の嫡男の懿子と、その弟の南宮敬叔という二人の青年であった。魯の国でもっとも権勢をふるっていた三桓の子弟が、孔子の塾へ入ってきたということは、画期的な出来事だった。いやが上にも孔子塾の名声が高まったことは、言うまでもない。

この二人の青年の孔子塾への弟子入りは、孟孫氏の当主である僖子の遺言だった。僖子は死の間際に、

「聖人の子孫はたとえ不遇をかこっていても、必ず一かどの人物になると言われている。孔子は聖人の末裔であり、『礼』を好んでいる。必ず一かどの人物になるにちがいないから、私が死んだら、行って師事しなさい」

と言い残したのである。僖子はずっと以前から孔子を、

として、目をつけていたからである。

というのは、僖子は昭公七年、まだ孔子が二十歳のころ、昭公のお伴をして楚の国へ出掛けたことがあった。そのとき、鄭の国と楚の国で、僖子が礼を十分わきまえなかったので、主君昭公への務めが、うまく果せなかった。それで僖子は、

(礼というものの必要性)

を痛切に感じたのである。帰国後、礼の勉強を始めたのであるが、その時、

(孔子という男がいる。彼は若いけれども礼をよく知っている)

ということを知った。それで子供たちへ、

(孔子のところへ入門しなさい)

と遺言したのである。

おそらく二人の子供は、まだ十代の青年だったであろうが、すなおに父の遺言にしたがって、孔子を師と仰いだのである。

こうして名家の御曹司を弟子に抱えることによって、孔子は世間的に認められ、名声も一段とあがり、また孟孫氏から財政的にも援助を受けることが出来た。

かって孔子は陽虎という男の意地悪によって、三桓の一つである季孫氏の宴に入ることを拒まれ、せっかくの人材登用のチャンスを失してしまったことがあった。が、その代わりに、同じ三桓の一つである孟孫氏との結びつきが出来、世へ出る糸口を掴んだわけである。

孔子の胸の中で、陽虎への怨みが少しは晴れたのではなかろうか。

なお孔子は後になって、この弟子になった南宮敬叔の力によって、周の都である洛陽へ遊学して、見聞をひろめることが出来た。そして世に名高い老子との会談を果すことができたのである。

第五章　周の国へ行く

孔子は、塾の運営が安定してくると、塾は高弟に任せて、かねてから憧れていた周の国へ、勉学のために留学してみたいと思うようになった。

すると弟子の南宮敬叔が、君主の昭公へ、

「師の孔子といっしょに周の国へ留学してみたいのです」

と申し出てくれたのである。

南宮敬叔は三桓の一つの孟孫氏の御曹子であるから、昭公も心よくこれを許してくれた。そして馬や馬車、それに小間使いまで与えてくれて、孔子・南宮敬叔たち一行を、周に送り出してくれた。孔子が三十代半ばの頃であった。

その頃の周の国はすでに勢力が衰えて、周の都の洛陽にはかつての繁栄の面影はなかった。

というのは周王が実権を失い、周王朝の権威が衰えていたからである。孔子が目にした、憧れていた周王朝の現実は、悲惨で、浅ましいものであった。

当時の周の王は景王といったが、そのような情勢の中で皇太子が死去した。すると側室の子供を皇太子にしようという思惑から、後継者問題で混乱し、周王朝衰微にさらに拍車がかかったのであった。

しかし王朝は衰微したが、周の都の洛陽は依然として周文化の中心であり、古い歴史のある周文化の集積は、洛陽に繁栄していた。孔子は周王朝には幻滅したけれども、周の文化には傾倒し、その崇敬さと、永遠性とを、見出すことができた。

すなわち今でも洛陽は、儀礼や音楽など、文化や歴史、社会制度などの資料が集っている場所であり、孔子がかねがね夢見ていた周公旦の遺した文化を、十分学ぶことが出来たのである。すばらしい学問的収穫を得た孔子のよろこびは、大きかった。

そこで孔子は思ったのである。

(周王朝の現実の政治はもう駄目であるが、しかし伝統的な周王朝の文化は、国家儀礼、社会儀礼として厳然と生きて続いている。自分がこの貴重な周の伝統的文化を受けつぎ、これを持ち帰って魯の国にひろめよう)

と決意を固めたのである。

かって周の文化を魯の国へひろめたのは、魯の国の開

祖である周公旦である。だから孔子の中で、周公旦への崇敬の念がますます高まっていくのだった。そして孔子の中に、

（周文化―魯国―儒教）

という新しい思想構想の発想が、芽生えたのである。その中味は、

（詩書礼楽）

であり、

（この思想によって、自分こそ魯の国政へ参与できるのだ）

という、ゆるぎない自信と、希望が、孔子の胸の中に、燃え上っていくのだった。

さて、『史記』孔子世家によると、孔子はこの周の都洛陽で、老子と会見するのである。老子は王立図書館の館長をしていたといわれる。

老子は老荘思想・道家の祖で、「老子」を著したといわれる人物で、孔子とともに、現代に至るまで、世界の思想史に大きな影響を与えている人物である。

老子は、「礼」に開する知識をいろいろ孔子に教えた後、別れる時に、次のように言ったという。

「地位や金のある人は、餞別に金品を贈り、仁を旨とする人は、餞別として言葉を贈るというが、私は地位も金もないので、仁にあやかって、餞別として言葉を贈りましょう」

すなわち餞別の言葉に託して、青年孔子を諫めたのである。

「聡明で物事をよく理解しているのに、死ぬような危い目に逢う人がいるが、それは他人をあれこれ非難するのが好きだからである。また博学で広い見識があるのに、自分の身を危くしてしまう人がいるが、それは他人の悪を暴きたてるからである。人間というものは、あまり自己主張ばかりしてはならない。社会人というものは、我を張らず、私利私欲をすてて、己れを空しくしなくてはならないのです」

すなわち、孔子のような、

（おれが、おれがという気持）

をなくせと、さとしたのである。

このように老子が説いたのは、老子から見ると、若い孔子はまだ野心と知性にみなぎる青年であり、したがって自信家であるために、自分の学問が世に用いられない不満があり、それが過激な舌鋒となって世を批判するようになる、そのような青年論客孔子を、

（いつまでもそのようにおごり高ぶっていたのでは、身のためにならない。世に出ることもできませんよ）

と老子は注意したのである。

この老子の諫めを聞いて魯の国へ帰った孔子は、弟子たちに次のように話した。

「鳥には飛ぶ力があり、魚には泳ぐ力があり、獣には走る力がある。だから飛ぶ鳥は矢で、泳ぐ魚は釣り糸で、走る獣なら網で捕えることができる。しかし周の国で会った老子という人物は、鳥でも、魚でも、獣でもなく、まるで竜のような人物である。竜は風雲に乗って、天に昇ってしまう。矢でも、釣り糸でも、網でも捕えることができない。さすがの私も、どうすることもできなかった」

と脱帽したということであった。

おそらく孔子は、老子に会うまでは、

（いくら天下に名高い老子でも、自分が論旨鋭く説けば、かならず説得できる）

と思っていたのにちがいない。しかし、それができなかった。できないばかりか、

（他人や世の中ばかりを批判していても駄目ですよ。我を張っていないで、もう少し大人になりなさい）

と、さとされてしまったのである。だが孔子はそのいましめを、

（老子はまるで竜のように偉大な人だ）

とすなおに受け入れて、さらに自己精進の糧として身につけていくのだった。

老子はその存在自体が謎に包まれた人物である上に、老子と孔子の会見については『史記』においても、

（けだし老子を見るという）

と、その可能性を示唆する表現にとどまっていて、会見の有無はさだかではない。

しかし老子と孔子という東洋を代表する二大思想家の会見は、二人の聖人の特徴を端的に表わしているエピソードといえよう。

孔子が周で学んだ礼楽は、これまで孔子が学んだものよりも、上位の国政レベルの礼楽であった。それを受けついだ孔子の喜びは、誇らしいものであった。孔子はさらに弟子たちを教える情熱に燃えるのだった。

こうして孔子は周の国での遊学を終えて、祖国の魯の国へ帰ってきたのであるが、その頃になると孔子塾へは、さらに多くの弟子が集まるようになってきた。

まず特筆すべきは顔回である。顔回は、父の顔路がすでに孔子の弟子になっていたので、その関係から弟子入りしたのかもしれなかった。すなわち顔路、顔回は、親子がそろって弟子入りしたわけである。ということは、顔回は孔子よりも三十歳も年下であったのであるから、顔回が入門したときは、まだ五、六歳の子供にすぎなかった。したがって弟子になったというよりも、父の顔路が孔子塾へ勉学にくるときに、いっしょに子供の顔回をつれてきた、というようなものだったのではなかろうか。

しかし顔回は成長するにしたがってその天性の才能を発揮し、弟子の中ではもっとも孔子の教えを極めたといわれるようになり、孔子が自分の学問の後継ぎとして顔回を期待するような人物に成長するのである。

また商才にたけ、孔子塾へ財政面での貢献が高かった子貢が弟子入りしたのも、この時である。しかし子貢も、孔子よりも三十一歳も若かった。とすると顔回よりもさらに一歳年下であったから、弟子入りしたのは顔回と同じく、五、六歳の少年だった。その財政上の辣腕を発揮したのは、もちろん成人した後のことである。

さらにこの他にも、仲弓、宰予、冉有、閔子騫、などという後の高弟なども集まり、孔子の塾は次第に賑わいはじめていった。

こうして孔子のもとには大勢の弟子が集まり、孔子は有名になり、政治家として登用される日を待っていた。

しかしその機会はなかなかやって来なかった。

すると、そんな孔子の思いを吹き飛ばすような事件が、魯の国で勃発したのである。

（つづく）

社　告（内規）

☆　同人参加へのお誘い

私達はひろく同志の参加を歓迎致します。

「まんじ」は作品発表のための共有の（ひろば）として季刊発行しております。

同人は同人費として月額二、〇〇〇円を拠出し、雑誌発行の経費の一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆　維持会会員へのお誘い

本誌愛読者の内、一部有志の方々が、誌友として維持会員になっていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、数カ月分をまとめて前納して頂いております。

季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の紹介等を行ない、また出版記念会や「まんじ」記念号パーティーへのご案内などを差し上げ交流を行なっております。

＊同人費・維持会費の納入は郵便振替口座への振り込みを左記へお願い申し上げます。

郵便振替口座　〇〇二七〇―〇―六四五九二

加入者名　まんじ

茉莉花伝（二）

―東丹国使と来た娘―

森下征二

（七）

三月に入った。すっかり春めいてきた丹波路を、渤海客存問使藤原雅量の一行が帰京を急いでいた。彼らは下人を含めても精々二十名ほどで、この険しい山道を今日で三日も歩いている。随員を従えて前を行く、雅量と裴璆から少し遅れて、茉莉花を中に挟んだ小次郎主従が続いている。彼等は男装した茉莉花を含め、皆同じ浅黄色の小袖と袴姿で、荷駄を運ぶ馬のほか数頭の空馬を曳いていた。

今年は年が明けてから、ずっと晴天が続いている。悪くすると旱魃になるかもしれない。都の方では、性質の悪い咳病がはやり始めたようである。しかし、陽射しに恵まれたからだろうか？　この雪が深い丹波路は、春の香りが何時もより濃厚である。彼らが進む山の中は、気だるく饐えた空気に包まれ、蒸せるような匂いが立ち込めていた。

国府を出発する間際になって、雅量は小次郎を呼んで茉莉花の身分を密かに明かした。驚いた小次郎が、彼女のために輿を用意したが、茉莉花は何故か歩いて行くと言い張った。道は険しく先も急ぐ、途中で音をあげても知りませんぞと顔をしかめる小次郎に、誰があなたより先に音を上げますかと切り返す。そして、美しい顔をまともに向けて、私は馬にも乗れますのよとにっこり笑う。癪に障った小次郎が、猪と言う名の暴れ馬をあてがった所、茉莉花は難なく乗りこなしてしまった。何のことはない。気性の荒い猪までが、茉莉花に手なずけられてしまったのである。

ところで、茉莉花は確かに健脚である。あの細い身体の何処に、そんな力が隠されていたのだろうか？　小次郎は山道を登りながら、ときどき茉莉花を振り返る。髪の先を襟の中に隠した茉莉花が、小次郎の直ぐ後をわき

目もふらず登って来る。彼女が息を弾ませると、小袖の下の豊かな胸が大きく喘ぐ。振り返った小次郎が思わず見とれていると、気がついた茉莉花が、道の下から大げさに睨んだ。小次郎が慌てて目をそらし、足早に道を登って行く。彼の後ろで、茉莉花が軽やかな笑い声をあげた。

小次郎は、思わず軽く舌打ちをした。彼女に限りなく惹かれて行く。彼はこのとき、自分の気持ちを量りかねていた。山道へ差しかかった頃から、彼女のちょっとした身振りや歩き方までが、気になって仕方がないのである。俺は一体、どうしたのだろうか？　名もない花の美しさに驚き、鳥のさえずりを器用に真似る彼女の声が、小次郎の胸を強く揺さぶる。それだけではない…。遠い異国から来た世子の妃は、道を横切るリスを見ては喚声をあげ、敏捷に追い回して笑い転げる。何とも言えず愛らしい。

しかし、彼女は所詮、渤海国の世子の妃である。手が届く相手ではない。それどころか、想いを寄せてはならない人である。小次郎が懸命になって、自分の気持ちを抑えている時に、成熟した女の匂いがこれ見よがしに横切った。茉莉花が彼を追い越して、笑いながら走って行く。小次郎の目が、思わず後を追いかけた。荒々しい野生の血が音をたてて迸る。

好きだ…。小次郎は、言葉に出して呟いて見る。小袖と袴で男装した茉莉花の姿が、却って小次郎の血をかきたてる。彼女が人妻であることも、何でもないように思われた。彼は身体の中から突き上げてくる理不尽な激しさと、歯を食いしばって闘い続けていた。

しかし、小次郎は結局…、野生へ戻ることはできなかった。心の中の激しい動きを、どうしても彼女にぶつけることができなかったのである。彼の胸の奥で、茉莉花がにっこり笑っている。小次郎は、思わずため息をついた。俺は、彼女から軽蔑だけはされたくない…。手荒な真似などできるものか！　彼は唇をかみながら、今まで経験したことがない、臆病な気持ちにとまどっていた。彼はその時、茉莉花を失うことを何よりも怖れていたのである。

（八）

一方、茉莉花は茉莉花で、自分の気持ちがわからなかった。小次郎と一緒にいるだけで、何故こんなに心が弾むのだろうか？　彼女には歴とした良人がある。滅んだとは言え、渤海国の世子で、美男の誉れ高い大光顕である。二人は契丹が侵入して来るまで、仲の良い似合いの夫婦であった。大光顕は詩賦が巧みで笛もたしなむ。何処へ出しても恥ずかしくない男であった。少し尊大なところがあったが、若い茉莉花には、それも魅力の一つであった。しかも繊細で優しく、何よりも彼女を愛して

くれたのである。

しかし、新婚生活が始まって間もなく、渤海国は契丹帝国に滅ぼされてしまった。二人の間に微妙な隙間ができて来たのは、その後である。

契丹皇帝耶律阿保機は、渤海王大諲譔の降伏を受け入れた後、忽汗城内へ進駐して麾下の兵士に三日間の略奪を許した。勝ち誇った契丹兵は、我がもの顔で民家へ押し入り、狼藉の限りをつくした。彼らは男を見れば、怒声を浴びせて斬り殺し、女を見れば見さかいなく、その場に押さえつけて犯したのである。それだけではない。彼らは、幼い子供を捕えてむぞうさに放り上げ、落ちて来るところを槍で串刺しにして楽しんだ。

凄惨な地獄絵が、城内に幽閉されていた渤海国の貴族たちが見下ろす街で、何時果てるともなく続けられた。たくさんだ…。もう、沢山だ！　思わず床にしゃがみこんだ茉莉花は、父に助け起されながら、固く復讐を誓ったのである。

一方、良人の大光顕が受けた衝撃は、彼女よりも遥かに深かったようである。彼は大宿祢の手を振り払って、窓の傍から離れようとしなかった。血の気を失った青い顔で、契丹軍の殺戮を食い入るように見つめている。茉莉花は今でも、良人の凄まじい形相を忘れることができない。眉間に寄せた眉の下で、大きな眼が異様に光り、頬が何度も引き攣っている。引き攣る頬が一際大きく震えた後、いきなり激しく啜り上げた。大きな反吐の塊が、彼の口から二度…、三度と、立て続けにほとばしる。女たちの悲鳴の中で、彼は身体を震わせてもどし続けた。夥しい汚物が、彼が自慢にしていた顎鬚を伝って滴り落ちて来る。鎮まり込んだ人々の間に、漣のように動揺が広がって行く。茉莉花は、何時までももどし続ける良人の姿を呆然として見つめていた。

しかし、大光顕はその後、見違えるようにたくましくなった。忽汗城から脱出した大宿祢の下で、契丹軍とのゲリラ戦を、血みどろになって戦った。彼は常に第一線に立ち、我が身の危険を顧みなかった。契丹軍と戦うためには、全てを犠牲にすることも憚らなかった。それだけではない。彼は捕らえた契丹人を残酷な刑に処し、彼らが苦しむのを見ても、眉一つ動かさなかった。彼は全く人が変わってしまったのである。

それは…、彼があの時、自分の優しく華奢な古い身体を、反吐として、すっかり吐き出したからではなかろうか？　彼は、復讐の権化として生まれ変わり、王家の冷たい血を取り戻したのである。彼はそれ以後、浴びるように酒を飲んだ。酒を飲んでは茉莉花を求めた。彼の行為は荒々しく、茉莉花の気持ちを考えなかった。彼らの間に、微妙な隙間ができてきたのは、当然なことかもしれない。

この、二人の間にできた溝が、思ったよりも遥かに深

いものだったことに気がついたのは、日本へ向かう船の中のことである。

日本へ向かう航海は、彼女にとって、非常に長く苦しいものであった。途中で何度も、嵐に見舞われたのである。そのなかでも、日本へ近づいた時に襲ってきた最後の嵐は、雪をまじえた凄絶なものであった。船は、一晩中、波に揉まれ弄ばれた。茉莉花は終に覚悟を決め、死が訪れるのをじっと待った。暗闇の中でなすこともなく、ただ死を待つのは辛かった。良くも狂わないでいたものだと、今更ながら茉莉花は思う。恐怖に襲われた彼女は、何故か良人を呼んでいた。良人の昔の優しさが、たまらなく欲しかったのである。

船がきしむ…。壊れた船室の扉が風に煽られて、がたがたと鳴る。風雨が激しく入り込んで顔を撃つ。鼠の大群が船室の梁の上を駆け巡り、船荷が崩れて転がった。立ってなんかいられない。茉莉花は床を転がりながら、必死で柱にしがみついた。彼女はもがきながら良人を呼んだ。夫の名前を、口に出して呼んでみた。助けて欲しい。死んでも良いから助けて欲しい。彼女は胃液を吐きながら、懸命に良人を呼んだ。しかしいくら呼んでも、良人が傍にいるはずがない。

私は、一人で…、たった一人で、海の中へ沈まなければならないのだろうか？　孤独だった。惨めだった。孤独の怖さを、つくづくと味わった。何も見えない暗闇の中で、一人ぼっちで死を見つめながら、茉莉花はふと、恐ろしいことに気がついた。良人は私を、見捨てたのではなかろうか？

大宿祢（だいしゅくでい）が、日本国へ茉莉花を派遣しようとした時、ためらう茉莉花を励まして、日本へ行くことを決心させたのは良人である。彼はひょっとしたら、私が死んでも良いと思っていたのではなかろうか？　今の彼なら、妻の命と引き換えに、契丹軍に復讐することを選んでも不思議はない。茉莉花は、彼のまるで物でも見るような、冷たい視線を思い出した。

船がきしんだ。船体が悲鳴をあげて大きく傾く。激しい浪がぶつかる音が、身体に直接伝わってくる。茉莉花の身体が宙に跳んだ！　身体が跳んで吹き飛ばされ、奈落の底へ沈んで行く。跳んで転げて、壁にぶっつかりながら、彼女は思った。私は、これから死んで行くのだ。傍に居ない男など、私は良人と呼びたくない！　私は一人で死んで行こう。二人は所詮、肌を合わせただけの縁だったのだ…と。

雨の音が激しくなった。風も一段と強くなってきた。もう直ぐ、私も楽になる。彼女がすっかり覚悟したとき、甲板の方から、陸が見えたぞ…と叫ぶ声が聞こえて来たような気がした。

茉莉花は、九死に一生を得て大津浜へ上陸したとき、

身体の中から湧きあがる解放感に酔いしれた。私は今、生まれ変わったのだ！　彼女は心の中で、大声で叫んだ。一度は捨てた命である。何もかも新鮮で、何もかもが素晴らしく見えた。彼女は、生命の息吹に敏感に反応していたのである。

そんな時に、茉莉花の前に小次郎が現れた。彼は良人の光顕とは、全く違う型の男であった。詩を賦すことや笛を吹くことは出来ないが、裏表がない、誠実で朴訥な雰囲気をそなえている。何よりも冷たさがない。彼と一緒にいるだけで、不思議に心が安らぐのである。茉莉花の心が、やっと回復してきた後だけに、小次郎の印象が胸の中で大きく育って来たのだろう。

彼女は山道を登りながら、小次郎の眼差しを背中に感じて、弾む心にときめいていた。

（九）

小次郎が、再び足を速めて茉莉花を追い越したとき、前の方から郎党が、大声で叫びながら駆け下りてきた。一言二言…、言葉をかわした小次郎は、周りへ声をかけて走りだした。馬を曳き、荷物を運んでいた郎党たちが、一気に茉莉花を追い越して行く。茉莉花も急いで後を追った。

十間ばかり登りきった道端の杉の木の根本に、三体の屍が横たわっているのが見えた。そのうち一人は、まだ小さな子供である。幸いなことに、死体は人の手で荒らされた跡がない。粗末な衣服を身につけて、頭髪もきちんと揃っている。しかし、死体のまわりで、蝿が勢いよく飛び回り、蛆が湧いているのが見える。小次郎が、ゆっくり近づいて言った。

「見ろ！　行き倒れだ。多分、流行病（はやりやまい）だろう。雅量の殿が丹後を出るとき言っていたが、畿内ではまた、咳病（がいびょう）が流行っていると言う。しかも、今度のやつは、恐ろしく性質（たち）が悪いらしい。移ったら最後、殆ど助かる者がないようだ。見ろ！　だから、死体が荒らされていない。六郎太…、汝（われ）、一っ走りして、雅量の殿に待って下さるように伝えておけ。それから、子春丸（こはるまる）…、汝（われ）らは皆で、穴を掘るのだ」

六郎太は、年をとっていても機転が利く。待ち構えていたように走り出し、山道を駆け登って行った。残った子春丸を中心に、若者たちが鍬を取って穴を掘る。彼等が黙々と掘り始めるのを見て、茉莉花は次第に気持ちが和んで来た。穴が十分に深くなったのを見極めて、小次郎が子春丸に命じた。

「それで良い！　今度は汝（われ）らで、死体を穴に埋めてやれ！」

子春丸が一瞬怯んだ。直ぐ傍の死体は、思ったよりも崩れているようだ。眼窩の縁に溶けた眼球の滓がこびりつき、蛆が唇の肉を食っている。彼は思わず後ずさりを

した。

「殿、はやり病で死んだ者にさわると、病が移るというではねぇか？」

「それがどうした？」

「おら、こんなことで死にたくはねぇ…」

次の瞬間、小次郎は子春丸の顔を力一杯張り倒した。

「意気地なしめ！　はやり病など、恐いと思えば移るものだ。そこをどけ！」

倒れた子春丸を蹴飛ばして怒鳴りつけると、小次郎はつかつかと杉の木の根本へ向かった。彼は、ためらう様子も見せず、蝿がたかった死体を抱き上げて、穴の傍へ運んで行く。蛆が音をたててこぼれ落ち、凄まじい悪臭がそこらじゅうに広がった。

「殿、おらが悪かっただ！　許してけろ。おらがやるだに…」

子春丸が慌てて立ち上がり、小次郎に泣きながらむしゃぶりついた。小次郎は、じろっと子春丸を見下ろした後、彼の腕の中に死体を投げ下ろして言った。

「よし、子春丸。汝に任せる！　大事に扱え」

子春丸が死体を穴の中へ運ぶのを見て、二人の若い郎党がそれに続いた。彼らは競うように、残った死体を抱えて穴へ運ぶ。暫くして六郎太も帰り、土饅頭が作られた。小次郎が、軽く目をつぶって手を合わせると、茉莉花がそっと近づいて来て、道端で手折った花を盛土に挿した。

「ありがとう、これで彼らも成仏できる…。さて、大分手間取ってしまった。六郎太、出かけるぞ！　雅量の殿に出立するよう伝えてくれ」

六郎太が再び走り出すのを見ながら、小次郎が袂から布を取り出した。彼は無心に、顔から首筋へかけて汗を拭いて行く。茉莉花は、小次郎を見つめながら思った。多分、先を進んだ雅量の一行も、屍があることを知っていたに違いない。しかし、はやり病は恐ろしい。彼らは係わりたくなかったのだろう。不用意に係われば、何時自分に移るかもしれないのである。雅量たちが、知らぬ顔をしたのも良くわかる。

しかし、それでは人も獣と変わらないではないか。渤海人は、戦で死んだ契丹人さえ葬った。旱魃や洪水などの天災が続き、飢饉が何度も起こった日本の国にも、やはり小次郎のような人がいた。彼もまた、死んだ人を放っておけなかったのである。小次郎の顔が爽やかに見える。彼ならきっと、弱い女を見殺しにしないだろう。彼女は、微笑みながら小次郎を見つめた。

汗を拭き終わった小次郎が、怪訝な表情をして茉莉花を見た。茉莉花もじっと見つめ返す。小次郎の顔が、気の毒なほど赤くなった。彼の額に再び汗が滲み出る。茉莉花が、袂から赤い布を取り出して言った。

「ほら、こんなに！」

「え？」

「汗が…」

茉莉花が背伸びしながら、小次郎の額を優しく拭う。彼の直ぐ目の前で、茉莉花の胸が大きく揺れる。彼女の匂いが小次郎に迫った。思わずたじろいだ小次郎が、慌てて身体を離して言った。

「ありがとう…」

茉莉花が、にっこりと笑って彼を見上げた。小次郎はまぶしそうに顔をそむけながら、郎党たちへ向かって大声で叫んだ。

「行くぞ！」

彼らが一斉に持ち場へ戻った。小次郎はそれを確かめた後、茉莉花に背中を向けて、逃げるように雅量の後を追った。

（十）

愛宕山を南から東へ向かって、蛇行しながら登り切ると、直ぐ下に広い草原がひろがっている。その遥か彼方に、都が見える。丁度峠を越えた辺りから、俄かに空が曇り始め、あっという間に大粒の雨が降り出した。峠を下るにつれて風雨が益々激しくなり、嵯峨野へ入る頃になると、それこそ一寸先も見えなくなった。

おそらく、今年に入って初めて降る雨である。これはまた、一体どうしたことだろうか？　雅量は、久しぶりの雨を喜ぶよりも、却って不吉なものを感じたのである。しかし、それにしてもものすごい風雨である。雅量の一行はやっとの思いで、道端に聳える大木の下へ駆け込んで、とりあえずそこで、雨宿りをすることにした。

遠くの方で、稲光が走っている。雷の音から判断すると、次第にこちらへ近づいて来る。雨にうたれながら裴璆は、都の方を透かすように見つめた。何か不思議な気配を感じる。誰かが、自分達の入京を待ち構えているのだろうか？

彼もまた、雅量と同じような不安に襲われていた。何だかわからないが、異様な力が都の中に巣食っている。十年前に、この国へ来た時とは明らかに違う。一体、都はどうなっているのだろうか？　彼は、激しい雨にうたれながら、懸命に考えていた。

突然…、闇を切り裂いて稲妻が走った。少し間を置いて、凄まじい雷の音が大地を穿って轟いた。裴璆の目が鋭く光る。

天神か！　思わず身構えた裴璆の傍を、音をたてて疾風が過ぎった。稲光に立ち向かうように、得体の知れないものが渦を巻いて走って行く。直ぐ傍で人々が、口々にわめいた。

「あっ、茉莉花さま！」

「茉莉花さま！」

人々が茉莉花の名前を叫んでいる。茉莉花が雷雨の中

を、草原へ向かって猪を駆りたてたのである。雷鳴がここを先途と鳴り響く。稲光の合間を縫って、馬の蹄が小気味よく響く。呆然と見つめる裴璆の横で、再び旋風が巻き起こった。

「殿っ、殿！」

「小次郎さま！」

再び起きたざわめきは、小次郎が馬に飛び乗り、茉莉花を追いかけたことを示していた。激しい風雨の中を、立て続けに稲妻が走る。闇の中から草原が、途切れ途切れに浮き上がる。裴璆の目に、茉莉花と小次郎の姿がはっきり見えた。茉莉花が走る…。稲光の間を縫って、思う存分駆け巡る。猪を操る彼女の姿は、この世のものではないように見えた。

あの時…、雷雨が激しくなったとき、茉莉花は身体の中から、急に突き上げてくる強い衝動を覚えた。目の前に、嵐の海が甦ってきたのである。強い風雨に弄ばれ、逆巻く波に揉まれて、茉莉花の船は木の葉のように翻弄された。彼女は、その時、狭い船室の中で為すこともなく震えていた。ただ死ぬことだけを、じっと待っていたのである。

しかし今は？　今は違う。今度は、私の身体も動くことができる。待つのは嫌だ！　待つことなんか、もう嫌だ…。闘おう！　誰かが自分を呼んでいる。茉莉花の耳に、得体の知れない声が聞こえてくる。何処かで聞いたような、懐かしい声である。お祖父さまか…？　茉莉花は惹かれた。声に惹かれて馬を駆った。何だか良くわからないが、行くほかない。行けば、全てがわかるだろう。茉莉花は叫んだ。心の中で叫んだ。行け！　駆けるのだ。何処までも、何処までも！

ここはもう、海の上でも船の中でもない。荒涼たる草原が雨に煙って広がっている。豪雨の中から、ほら！　誰かが私を呼んでいる。行け！　構うものか。何処までもついて行こう。行け！　行け、行け！　茉莉花は叫んだ。心の中で叫び続けた。ただ、ひたすらに猪を駆る。猪は走った。水溜まりを蹴飛ばしながら、飛沫をあげて走り続けた。走れ！　稲妻へ向かって走りまくれ。負けるな！　走り続けろ。

走り続ける茉莉花の耳に、地の底から湧いてくる不思議な喚声が聞こえてきた。大勢の兵士たちが威嚇するようにわめいてくる。喚き声が次第に近くなった。歓声がとどろく、鳴り響く。歓声がますます大きくなり、渦となって茉莉花を襲う。

止めて！　茉莉花が、思わず悲鳴をあげた。何なの、これは？　何だろう？　契丹兵か？　悪魔の軍団が、私をここまで追ってきたのか？　あ！　暗闇の向こうが明るくなった。燃えている、燃えている…、大きな炎が、真っ赤になって燃えている。何かが見える、誰かいる…。

誰？　あの人はだれ？　黄色の服を着て、立派な髭をはやしている。だあれ？　誰なのよ！　黄色の服、黄袍、契丹皇帝？　アボキ、あぼき、耶律阿保機…？

違う！　違う！　阿保機ではない！　この顔は…？　知っている、良く知っている。小次郎さま、そうだ、小次郎さま。あ、ああ…、小次郎さま！

稲妻が走った。茉莉花の悲鳴を打ち消すように、雷鳴がとどろく。天と地が、あっという間に逆さまになった。一体、何が起こったのだろう？　倒れている。倒れている…。黄袍を纏った小次郎が、地面の上に倒れているではないか。あっ、ああ、どうした…。一体どうしたのかしら？　首が！　首がない…。小次郎の首が断ち切られている。

首が！　断ち切られた首が、真っ赤な血を滴らせた小次郎の首が！　どんどん大きくなった。大きくなって血飛沫を吹いた。血飛沫を吹くと同時に、飛んだ！　飛んでいる！　飛んでいる…。血だらけの首が、空高く飛んでいる。天へ向かって、吠えながら飛んでいる！　ああ、首が私の方へやってくる。何か言っている。叫んでいる！　なあに、何なの？　何なのよ！

茉莉花の意識が次第に薄れる。闇の向こうから、誰かが呼んだ。首か？　違う！　首ではない。誰が私を呼んだのだろうか？　一体誰の声だろうか…。呆然と、ただ呆然と、茉莉花は猪が走るままに任せた。

落ちる、落ちる。落ちて行く…。茉莉花は、薄れる意識の中で呟いた。身体の中から次第に力が抜けて行く。今にも馬から落ちそうになった。落ちても良い。落ちれば、何かが変わるだろう。ああ、私の身体が、渦の中へ巻き込まれて行く。

浮いた！　私の身体が浮いた、ふんわりと浮いた。誰かが私を抱いている…。

この時…、やっと茉莉花に追いついた小次郎が、馬を寄せて猪に跳びのり、彼女を確り抱きとめたのである。雷鳴が鳴った！　一際大きく鳴り響いた。その雷に撃たれたのか？　力を使い果たした猪が、大地へ向かって突っ込むように転倒した。

「危ない！」

遠くで見ていた裴璆が、思わず目をつぶった。彼が再び目を開いた時には、小次郎は茉莉花を抱いて、鮮やかに地面の上に飛び降りていた。

「茉莉花どの、無茶なことを！　大丈夫か？」

小次郎は大声で叫び、茉莉花の身体を力一杯揺すった。馬から落ちたとき、背中と腰を強く打ったが、不思議に痛みを感じない。小次郎の腕の中で、茉莉花は目をつり上げて、じっと虚空を見つめている。小次郎は思った。彼女は何かに、取り憑かれたのではなかろうか？

不吉な思いに身を震わせて、小次郎が懸命に彼女を抱

きしめる。氷のように冷え切った茉莉花の手が、小次郎の襟を確りとつかんで、天を見上げるように促してきた。小次郎は、茉莉花の頬に自分の顔を押しつけて、まともに雨を受けながら天を睨んだ。凄まじい音を立てて雷鳴がなった。

「誰かが私を呼んでいる。ほら！　そうでしょう？　私はあそこへ行かなければ…」

「確りしろ！　大丈夫だ。誰も呼んでいない。呼んでなんかいるはずがない！」

「離して！　行かなければ…。私を離して、お願いだから離して下さい！」

小次郎の腕の中で、悶えながら茉莉花が叫ぶ。彼は茉莉花を、力一杯抱きしめて叫んだ。

「嫌だ！　誰が離すものか。俺は貴女を誰にも渡したくないのだ！」

小次郎は叫びながら、茉莉花の顔を無理やり自分へ振り向かせた。刺すような彼女の目が、狂ったように光っている。小次郎は、思わずたじろいだ。茉莉花は完全に物の怪に取りつかれている。俺は彼女を取戻さなければならない。彼の腕の中で、茉莉花がもがく。身体を弓なりにのけぞらせる。彼は懸命に、暴れる茉莉花を抱きしめた。

茉莉花の身体が激しく震えた。小次郎は震える身体を抱きしめながら、髪を優しく撫でつけた。少しずつ…、彼女の身体に血が通い、震えが次第に収まって行く。茉莉花が、不思議そうな顔をして小次郎を見上げた。初めて彼に気がついたようである。茉莉花は泣いた。小次郎の腕の中で、声をあげて泣きだした。小次郎にすがりつきながら、童女のように泣きじゃくった。彼女は声を振り絞って、泣きながら言った。

「小次郎さま、私は怖い！　私は、あなたの未来を見てしまった。あなたは黄袍を着て、皇帝のような格好をしていた…」

「なに？」

驚いた小次郎が、思わず茉莉花の顔を離して、彼女の顔を覗き込んだ。

「でも、その後…」

「その後？　何だ！　何が起こったのだ？」

「首が…。あなたの首が」

「首？　首がどうした！」

小次郎は狼狽し、息を飲んで茉莉花の顔を覗き込んだ。茉莉花が再び、小次郎の胸にすがりつきながら泣き始めた。彼女は恐怖と寒さに身体を震わせ、泣きながら思った。

喋れない。私は喋れない…。喋れば小次郎の首が断ち切られ、空を飛び始めるに違いない。稲妻が走った！　茉莉花の美しい顔が浮き上がる。凄まじい雷鳴が立て続けに鳴った。

（十一）

傾きかけた陽射しが雲に隠れて、柔らかな春風が次第に冷たくなってきた。右京の西市の近くにある小次郎の屋敷は、没落した親王家から買取ったもので、南北に伸びた半町（約二千坪）ほどの広い敷地にある。寝殿造りの古い屋敷は傷みが目立ち、手入れが行き届いた部屋の数は多くない。荒れ放題の庭に雑草がはびこり、池の水も枯れている。ただ、池のほとりの二、三本の山桜がほぼ満開に咲き誇って、いきいきとした春の訪れを告げていた。

茉莉花は、暗くなってきた縁側に一人で腰をかけて、風に揺れる花を見ながら考え込んでいた。今日でもう、三月になって十日を数える。都に着いてから、早くも五日過ぎたことになる。雅量はあの後直ぐ、小一条第へ赴いて左大臣忠平に面会し、到着した東丹国使船の詮議の結果を報告した。茉莉花のことも伝えたはずだが、今日まで何の沙汰も無い。不安になった茉莉花は、ふと裴璆を疑った。裴璆は東丹国使である。雅量と結託して、自分の仕事だけを、進めているのではなかろうか？　裴璆を全く信頼しきって良いだろうか？

裴璆が雅量に、茉莉花の使命を手伝う理由をあげたとき、東丹国使船の建造に触れなかった。裴璆が吐号浦へ乗って来た小さな船では、とても海を渡ることはできない。彼は大宿祢に向かって、風待ちするだけでなく、海を渡ることができる船を無心したのである。遊牧の民が支配する東丹国で、渤海人の船大工が優遇されるはずがない。彼らは広く四散しており、東丹王は大船をつくることができなかったのである。

大宿祢は、裴璆の求めに応じて、戦に使うために建造した船を東丹国使船として提供した。裴璆が茉莉花に協力するのは、彼が信義を知る限り当然である。しかし、裴璆は雅量に説明したとき、敢えて、それに触れなかった。彼には何か、含む所があるのだろうか？　それとも、ほかに何か…？　止めよう、もう止めよう…。根拠が無いのに、人を疑ってはならない。茉莉花は心の中で、そんな自分をひそかに恥じていた。

都へ着いた翌日、茉莉花は小次郎と一緒に雨上がりの街へ出かけた。しかし、そこで目にした光景は、非常に凄惨なものであった。都の中の至る所で、咳病が猛威を振るっていたのである。都大路は人影もまばらで、犬走りの隅の方に、沢山の屍が放置されていた。ときおり、風に乗って死臭が漂う。全く手がつけられない有様である。

しかし、茉莉花はおかしなことに気がついた。前日、雷雨の中で垣間見た、怪しい妖気がすっかり消えて、街の中に奇妙な明るさが溢れていたのである。私はどうかしたのだろうか？　不思議な違和感を覚えた茉莉花は、朱雀大路の真ん中で、思わず立ち尽くしてしまったのであ

る。

それにしても、この違和感は一体何処から来るのだろう？　それは多分、この都に城壁がないことから来るのではなかろうか。この都は、四方が開けっ放しで、何処からでも簡単に中へ入り込むことができる。このように無防備な都があることは、戦乱の大陸で育った彼女には理解できないことであった。しかしそれから、何度か外出を重ねるうちに、茉莉花も次第に都の様子をつかむことができるようになってきた。

この都は、南北に伸びる幅三十丈（九十メートル）近くもある朱雀大路が、全体を左右両京に分けており、縦横に走る大小の道路が、街を碁盤目に区画している。東西両寺の五重塔を横目に見ながら、羅城門をくぐって朱雀大路へ入ると、広々とした道路から視界を遮るものは殆どなく、都の三方を青く囲む美しい山々を眺めることができた。華やかな桜並木に蔽われた剥き出しの土の道路と、人の背丈ほどの築地塀が朱雀門まで延々と続いている。途中で目につくのは、東西鴻臚館の赤い建物と緑色に輝く瓦だけである。城壁を持たず、木と土で出来たこの都は、不思議な開放感を漂わせていた。

一方、茉莉花が育った渤海国の都は、忽汗城の名にふさわしく、高く険しい城壁を三重に回らしていた。巨大な石組みの城壁は、高さが優に二丈（六メートル）を超え、外敵に対する備えは、ほぼ鉄壁と言えた。それでも忽汗城は、契丹軍の攻撃を十日と持ちこたえることができなかったのである。もし、この都が契丹軍から攻撃されたら、おそらく一日も持たないだろう。

茉莉花は大宿祢から、この国は外敵に侵入された歴史がないと聞いている。しかし、内乱や反逆もなかったのだろうか？　天皇に取って代わり、自ら天皇になろうとする野心家は、一人も現われなかったと言うのだろうか？　何れにしても、これほど無防備な都は考えられない。契丹人が見れば、余りのことに呆気に取られるに違いない。

それから、これはまた、一体どうしたのだろう？　兵士の姿が街に見えない。なるほど、小次郎のような数人の武士が宮城を警護しているようである。しかし、組織化された武装軍団はどこを探しても見当たらない。これでは、治安を保つことができても、戦争に対応できるはずがない。

これで、もし契丹軍に襲われたら？　結果はあまりにも見えすぎている。しかも、契丹軍が来寇する可能性は明日にもあるのだ！　契丹帝国が、渤海人の叛乱を平定した後に向ける矛先は、平和に倦んで無防備な、この国なのかもしれないのである。彼等が中国征服の野望を確実に果たすため、先ず日本国へ侵入して人民や財産を略奪し、国力の充実を図ることは十分に考えられることである。

茉莉花はふと、契丹軍に捕らわれて、忽汗城の一室に押し込まれていた時のことを思い出した。あの時、窓から見下ろした城下の街では、勝ち誇った契丹兵が暴行の限りを尽くしていた。血に飢えた兵士が若い女をさらおうと、抱いていた赤ん坊をむしり取り、路上へ投げ捨てて踏みつけた。赤子のけたたましい泣き声に、女の悲痛な叫び声が重なった。阿鼻叫喚の修羅場が、延々と続けられたのである。茉莉花の耳に、あの時の悲鳴がよみがえる。

彼女は思わず両手で耳を蔽った。この国も、今のうちに軍事力を強化しなければ、とんでもないことになってしまう。渤海国の悲劇は、この国にとっても他人事ではないはずだ。

私は、この国の支配者へ、契丹来寇の可能性があることを伝えなければならない。しかし、城壁がない都に住む人々に、侵略の悲惨な実態を理解させることができるだろうか？　茉莉花は自分の使命の難しさに改めて気がつき、思わず深く溜息をついた。夕日が再び、雲の間から顔を出して来る。茉莉花の顔が赤く輝き、周囲がほんのりと赤くそまって来た。

（十二）

あの時も確か…、夕陽が真っ赤に輝いていた。早いもので、茉莉花が父の大宿祢と吐号浦の酒楼で別れてから半年以上が過ぎている。彼らは質素な卓を囲んで、二人だけの時間を過ごした。その時、良人の大光顕は出てこなかった。親子二人を水入らずにするため、遠慮すると言い出したのである。しかし、今から思えば頷けない。それは多分、妻を一人で死地へ追いやるひけ目から出た言葉ではなろうか？

父は、茉莉花の酌で酒を楽しみながら、珍しく自分の過去を口にした。多分、二人きりであったことが、彼の心をほぐしたのだろう。茉莉花は今まで、父の過去を直接聞いた覚えはない。もの思いに耽る茉莉花の顔を夕陽が照らす。彼女はその時の様子を、昨日のように思い出していた。

あの時…、父は盃をかざして、いきなり詩の一節を口ずさみながら話し始めたものである。自分の過去を口にする気恥ずかしさを、少しでも紛らわそうとしたのかも知れない。

「阿満　亡きよりこのかた夜も眠れず
偶々眠れば　夢に遇いて涕漣々々たり
身の長は　去夏　三尺を余し
歯立ちて　今春　七年になるべし
事に従いて　人の子の道を知らんことを請う
書を読みて諳誦す　帝京篇
薬の沈痛を治むること　纔かに旬日

風の遊魂を引くこと　是　九泉
余後　神を怨み兼ねて仏を怨む
当初　地もなくまた天もなかりき‥‥」

彼は目を宙に据えながら、朗々とした声で歌い終えたあと、娘に目を移して微笑んだ。

「これはね、茉莉花‥‥。私が死んだ時、おまえのお祖父さまが詠んだ哀悼の詩だ。そう、阿満と言うのは、私の以前の名前なのさ。私はね、七歳で死んだことになっている。お祖父さまは、私の墓を建てたうえ、おまけに、この七言で二十八句もある、長い詩を詠んでくれたと言うわけだ」

「まあ！」

「お祖父さまには‥‥な、私が知っているだけでも、何と二十人以上もお子がいる。うん、相当なものだ。しかし、本当に可愛がられた子がいただろうか？　平気で人を死んだことにしておきながら、その子を悼んで詩を詠む。お祖父さまはね、そう言うお人だ。菅原道真と言う方は本当に怖い人なのだよ‥‥。私はお祖父さまに、心を許したことは一度もない」

茉莉花は驚いて父を見つめた。そして、驚きながらも疑問に思った。何故だろう‥‥？　何故お父さまを、死んだことにしなければならなかったのかしら？　父が、茉莉花の心の中を読み取って答えた。

「私はね、長兄高視の双子の弟にあたる。高視の幼名は阿視、私は阿満‥‥。あの国では、双子が極端に嫌われていた。勿論、それだけが理由ではない」

「‥‥‥‥‥‥」

何れも初めて聞く話である。茉莉花は次第に、父の話に引き込まれていった。

「そのころ唐土ではね、国が非常におかしくなっていたのだよ。内乱がひっきりなしに起こり、各地に地方政権が独立して、唐の王朝には殆ど力がなかったのさ。おまけに、皇帝が全くのお飾りでね。宦官がほしいままに、政治を壟断していたのだ。それだけではない。隣国の新羅や渤海国までが、まるで、申し合わせたように衰えて、多くの民が塗炭の苦しみに喘いでいた。そう、今からおよそ五十年も前のことだがね。お祖父さまは、その頃から、外国の情勢を考えながら、日本国の将来を考えておられた節がある」

「‥‥‥‥‥‥」

「唐だけでなく、新羅も渤海国も一斉に滅びようとしている。外国で一体、何が起こっているのだろうか？　何故、一斉に滅びようとしているのか？　それを見極めなければならない。お祖父さまはね、そのように考えられた。茉莉花。これは凄いことなのだよ。考えて見てごらん、現実に今、唐も渤海国も滅んでしまったし、新羅もやはり、高麗に滅ぼされようとしている‥‥」

茉莉花は大きく頷いた。明日のこともわからない激しい時代に、祖父はどうして、正確な見通しを立てることができたのだろうか？　大宿祢が続けた。

「それらの国が滅びるなら、日本国だけが無事で済むはずがない。日本国も、このまま放っておくと、大変なことになるかもしれない。お祖父さまはね、日本国の将来に強い危惧を持っておられた」

それも、良くわかる話である。周りの国が全て滅びて、一つの国だけが生き延びられるはずがない。茉莉花は頷きながら、大宿祢に酌をした。父は、一気に盃を飲み乾した後、娘を見て微笑んだ。娘の反応に満足したのかもしれない。

「さて、外国で何が起こっているか？　正確に把握しなければならない。急には無理かもしれないが、何れ、信頼のおけるものを唐土へ派遣して、情報を集めさせる必要がある。そこで、お祖父さまは考えられた。自分の子供の中の一人位は、唐土で働くことができる者を育てよう‥‥とね」

茉莉花はじっと、父の顔を見つめた。そうか、そうだったのか‥‥。大宿祢が、にっこりと笑った。

「そう！　そうだったのさ。そこで白羽の矢に立ったのが双子の弟、日陰者の私だったと言うわけだ。しかし、私は将来、密かに国を出なければならない。菅原家の籍に置いておくことはできなかった。お祖父さまはね、厳しく冷たいお方なのだ。話が決まればためらわない。私は、こうして否応なく、七歳の時に殺されてしまったのだよ」

父が皮肉な笑みを洩らした。勝手に死んだことにされるなんて‥‥。父の気持ちは、察しても余りあると言うものだ。父が続けた。

「そこで私は、乳母の家に預けられて、武芸を厳しく仕込まれた。武芸の合間も遊ぶことなく、異国の言葉を教わった。後でわかったが、乳母の家は、大陸から渡って来た者の裔らしい。私は表向き、乳母の子として厳しく育てられたのさ。菅家の門をくぐるのは、お祖父さまから直接、学問を教わる時だけだったかな‥‥」

父の表情がふっと緩んだ。彼はうまそうに杯を口に運びながら言った。

「ほら！　さっきの詩にあったね。帝京篇を諳誦させられたのもその時だ。私は兄の高視よりも、遥かに筋が良かったらしい。他家の子として、厳しく鍛えられたお陰だろうか？」

「でもお父さまは、その時まだ七歳でしょう？　淋しかったのではございませんか？」

「それは、淋しかったさ。それも単純な淋しさではない。淋しさと悔しさが入り混じったような複雑なものだったよ。しかし、それが役に立った。私は十九歳になった時、とうとう唐へ渡ることになったのだからね」

父の言葉に力がこもった。たぶん話は佳境に入ってき

たのだろう。

「本当はね、茉莉花。お祖父さまがご自分で、唐へ渡る積りだったらしい。帝から正式に遣唐使に任命されて、渡航の準備を急いでおられた。しかし、唐の国にはもう、使いを受け入れるだけの力が無かったのだよ。日本の国が遣唐使を派遣したくても、受け入れてくれる相手がいなかったと言うわけさ」

父が十九歳の頃なら、その話も良くわかる。それから十数年後に唐は滅びた。遣唐使を受け入れることができるはずがない。だがそれだけに、日本国は外国の情報が欲しかったはずだ。茉莉花が父の話を引き取った。

「結局お祖父さまは、遣唐使にはなれなかった。それでも、異国の情報は欲しい。それで、お父さまに出番が回ってきた…」

「そう言うことだ。お祖父さまは私を、何と十二三年も前から用意されていたことになる。今更ながら、怖いお方だ…」

「お墓を作って、その上、哀悼の詩まで詠んで…」

「ふふふ…、その通りだ」

大宿祢が機嫌よく笑みを洩らした。娘の軽口が嬉しかったのだろう。

「私はね、自分の仕事を良く理解していた。お祖父さまが折にふれて、教えてくれたお陰だろう。しかし、いくら私でも、自分の一生を、お祖父さまの意志で左右されることは面白くなかった。腹に据えかねる所が、全くなかったわけでもない…」

それもまた良くわかる。茉莉花は軽く頷いた。大宿祢の眉間に皺がよった。

「私はね、おまえが生まれた後、初めて肉親の情を知ることができた。私がお祖父さまに反発したのは、幼い時から肉親の愛情を断たれた怒りが、心の底に積もっていたからだと思う…」

大宿祢が盃を置いて、茉莉花の顔を覗き込んだ。父の目が、苦しそうに揺らいでいる。

「だからね、茉莉花…。本当のことを言うと、私はお前を日本国へ遣りたくない。家庭は壊すものではないからね。私はおまえと光顕を、生木を裂くようにしてまで、引き離したくはなかったのだ。しかし…」

大宿祢が、何故か、ここで言いよどんだ。父は、私たち夫婦の微妙な隙間に、気がついているのだろうか？茉莉花が強い調子で遮った。

「良いのですよ、お父さま。もう決めたことですわ」

「済まない。この仕事ができるものは、お前しかいないのだ…」

「わかっています」

茉莉花が微かに微笑んだ。私の顔はこわばらなかっただろうか？　大宿祢が小さくため息をつきながら、呟くように言った。

「私はね、おまえのお祖父さまが嫌いだった。尊敬しているが、好きではない。しかし、良く考えてみると、私は今、父にされたと同じことを、おまえにしているようだね…」

「いいえ！」

茉莉花は、微笑みながらきっぱりと言い切った。

「だって、私…。お父さまが大好きですもの」

「ありがとう…」

父が目をしばたかせた。彼は再び盃を取り上げると、一気にそれを飲みほした。そして、再び厳しい顔に戻って語り始めた。

「もう、余り時間が残っていない…。最後にどうしても、おまえに言っておかなければならないことがある。それはね、何故おまえが、裴璆どのと一緒に行かなければならないかと言うことだ」

茉莉花は、椅子に坐りなおした。そして一言も聞き逃すまいと、大宿祢の顔をまともに見つめた。

「我々は今、契丹人からやっと、渤海国の領土の半分を取戻すことができた。彼らの主力は、忽汗城からずっと南の東平郡に移っている。しかし残念ながら、我々はまだ、国としての形ができていない。我々の力が充分についていないからだ。多分、契丹人を完全に追い出さない限り、国をつくることはできないだろう。わかるね？」

「はい…」

大宿祢は、頷く茉莉花を見つめながら、ゆっくりと諭すように言った。

「私は、だから…、外交に必要な国書をおまえに持たせることができない。茉莉花、良いかい？　ここが大事なところだよ。国書がなければ、日本国はおそらく、おまえを相手にしない。非公式に接触することもできないだろう。我々はもともと、外交ができない立場なのだ」

「はい…」

「しかし、東丹国使の裴璆どのと同行すれば話は別だ。彼らは東丹国の国書を持っている。彼らと一緒に行けば、日本国のしかるべき人と接触できる可能性がある。わかるね？　我々はだから、この機会を絶対に逃すことができない。私が裴璆どのに、船を与えたのもそのためだ。彼が信義を守れる男なら、間違いなくおまえを手伝ってくれるだろう」

茉莉花は頷いた。父の言うことが、良く理解できたのである。大宿祢が続けた。

「しかし茉莉花、良くお聞き…。国書がなくても、おまえは正真正銘の渤海使だ。闘う渤海人の代表なのだ。渤海人を代表して日本国へ行き、何とかして、あの国の援助を勝ち取ってきて欲しいのだよ」

茉莉花が大きく頷いた。頷きながら更に、大宿祢に念を押した。

「わかりました。でも、お父さま。日本国は、この話に乗ってくるでしょうか？」

大宿祢が、落ち着いた声で娘を励ますように言った。

「これはね、おまえに何度も言っていることだよ…。渤海人が契丹人と戦っているのは、日本国のためでもある。覚えているね？」

「はい…。契丹帝国は、中国を征服する野望を持っている。そのため、彼らは日本国を攻撃して、その富と人民を調達しようと考えている。しかし彼らは、渤海人が戦っている限り、日本国へ侵入することが出来ない。従って、渤海人が契丹軍と戦うのは、日本国のためでもある…。そうですわね？」

「その通りだ！」

大宿祢が嬉しそうに言った。茉莉花の、暗誦するような答え方が面白かったからでもある。

「日本国はね、渤海人と手を結んで、契丹軍と戦わなくてはならない。彼らは少なくとも、渤海人の手助けをするべきなのだ。後は、おまえが日本国の人々に、どうやってそれをわからせるかということだね。それができれば、彼らは、この話に必ず乗ってくるだろう」

父の言葉に熱がこもる。しかし、熱がこもればこもるほど、茉莉花は逆に心配になった。彼女は、首を傾げながら尋ねた。

「でも、そのような大切な役目が、私に勤まるでしょうか？」

大宿祢は微笑んだ。そして、娘を勇気づけるようにはっきりと言い切った。

「勤まるとも！　私を除けば、おまえは渤海国の滅亡を知っている、たった一人の日本人だ。契丹人の脅威を伝えるのに、おまえほどふさわしい者はいない。ねぇ、茉莉花…。真心をこめて交渉すれば、きっと道が開けるはずだ。日本人も、私がいた時より少しは変わっているだろう。また、変わらなければならない。白村江以来、あの国は、余りにも中へこもりすぎてきた。しかし、何時までもそれで、済むものでもない…」

「はい」

「それにね、日本国の今の法皇さまは、お祖父さまと特に縁が深かった方のようだ。また、お祖父さまの良き理解者であった藤原忠平どのも、今では相当な顕職についておられるだろう。お二人はおまえのために、必ず便宜を図ってくださると思う。大丈夫！　自信を持って行きなさい」

大宿祢は、茉莉花を励ました後、ゆっくりと盃を口に運んだ。そして、燭台の炎の向こうを見つめながら、呟くように言った。

「昨夜、お祖父さまの夢を久しぶりに見た。何だかわからないが、おまえに向かって頬りに、帰れ、帰れ…と叫んでおられた。あの方は、おとなしく成仏するような方ではない。私がおまえを、日本へ帰すことに気がついたのだろうか？」

驚いた茉莉花が、思わず身体を乗り出した。

「お祖父さまが？　私に、帰れ…とおっしゃったのですか？」

「そうだ…。何を一体おっしゃりたいのか？　私はこの夢の意味を解くことができない。しかし何れにしても…、妙な因縁だ。お祖父さまが私を外国へ遣し、今度は逆に、私がおまえを日本国へ帰すことになった。何だか私は、お祖父さまの掌の中で、動かされているような気がする…」

父はあの時、私に何を言いたかったのだろうか？　死んだ祖父の霊魂が、父を操っているとでも言いたかったのだろうか？　しかし余人は知らず、父は渤海国で武勇の誉れ高い大宿祢である。いくら父親であるとは言え、怨霊などに左右されるはずがない。

しかし、私が都へ入る前に、嵯峨野で襲ってきた雷雨は不思議な妖気に満ちていた。私を誘い翻弄し思うままに操った。あの私を呼んでいた声は、私の胸に浸み込んで懐かしくて仕方なかった。あれはやはり、お祖父さまの声だったのか？

帰れ…、かえれ？　茉莉花は、思わず考え込んだ。お祖父さまは、一体私に、何処へ帰れと言うのだろうか？　私に向かって、帰って来い…と言ったのだろうか？　もしかしたら？　そう！　渤海国へ帰れ…と言った可能性もある。もし、そうであったら？　わからない、わからない…。お祖父さまは、一体、私に何をさせようと言うのだろうか？

茉莉花は思わず身体を震わせた。震わせながら懸命に考えた。勿論、何もわからない。しかし、彼女は祖父の霊が存在することを、疑ってさえも見なかった。私は小次郎の未来を、この目で確り見たのである。あれは、決して夢ではない。私も父も、祖父が紡いだ見えない糸で、引き寄せられているのではなかろうか？　祖父は私を、父の代わりに都へ呼び戻したのだ。茉莉花は、それを確信し、募る不安を口に出して呟いてみた。

お祖父さまは、私を、一体どうしようと言うのだろうか？

春先の陽射しは傾くのが早い。木漏れ日がすっかり薄くなって、冷たい風が吹き抜ける。廊下を歩く足音が近づき、物思いに耽る茉莉花に、若い婢が遠慮がちに声をかけた。

（続く）

義人・伊豆頭七異聞

堀内永代

一

伊豆国田方郡仁田村の稲七少年が、隣村の原木へ使いに行った帰り道、狩野川の土手沿いに歩いてくると、船着場の近くで、夕闇を突き破って若い女の悲鳴が聞こえた。

「助けてぇー」

稲七は悲鳴が聞こえた方へ駆けつけた。見ると、土手の窪みで一人の女を五人の無頼漢が押さえ込んでいた。紺地の脚絆を穿いた女の脚は大きく広げられ、胸元もはだけてまさに危機一髪の様相だ。女は髪を振り乱し、馬乗りになった男の胸倉に両手を突っ張って必死に抵抗していた。

稲七はこわごわ近寄って見ると、女は顔見知りの「東の鍛冶屋」の孫娘お春だった。

(お春姉ちゃんが大変だ。助けなければ)

気が動転した稲七は、怖さを忘れ、無我夢中で馬乗りの男めがけて、ダダダ、ズドーンと頭突きを食らわせた。

不意を喰ったその男は、

「わぁー」

と叫び、土手を転がって三間下の狩野川にドブーンと落ちてしまった。

弾みで稲七も窪みにつんのめった。その時、右眦に大きな傷を負い、真っ赤な血が頬を滴り落ちた。お春は稲七の後ろへ這いずって逃げてきた。

「やいやい、この小僧何でぇ…やっちまえ」

今度は無頼漢四人が稲七一人に襲い掛かってきた。稲七は傷口から流れ出る血で顔を真っ赤に染め、死に物狂いで立ち向った。

たかが子供一人と侮っていた四人と、必死の稲七では、気迫のうえで勝負はついていた。三人は次々に狩野川へ突き落とされ、残った一人は、出血で赤鬼のような形相

になった稲七に怖気づいて逃げてしまった。

(やったぞ、お春姉ちゃんを助けたぞ)

稲七は、心の中で快哉を叫んだ。

後ろを見ると、お春は、ハァハァ息を弾ませて座り込んでいた。

「お春姉ちゃん、大丈夫か」

稲七は、流れ出る顔の血を拭いもせず、お春を背負って東の鍛冶屋まで送り届けた。

「稲七さん、ありがとう、ありがとう」

お春は、少年ながら大きくがっしりとした稲七の背の上で嬉し涙を流し、稲七に淡い恋心のような感情を抱いた。

お春と稲七を襲った無頼漢は、狩野川の向こう側、日守村の権太、吾作、茂吉らの爪弾き者であった。

十三歳の少年稲七の蛮勇は、またたくうちに近隣の村々に広がり、怪童稲七は「五人力の稲七」と呼ばれるようになった。

八歳の時に両親に死別したお春は、十六歳になった今日まで、祖父弥吉の男手一つで育てられてきた。日頃、弥吉の鍛冶場を手伝っていたお春は、顔や手足は炭や泥で汚れていたが、目鼻立ちは整い、衣服の下に隠された肢体は色白で、女の色香を匂わせていた。

お春は十三歳の稲七と歳が三つしか違わなかったが、年齢よりはるかに大人びており、村の若者たちに人気があった。この日は、弥吉の使いで船着場へ行った帰り道の災難であったが、身の危険を顧みずに戦った稲七の獅子奮迅の働きで危機を脱することができた。

この物語は、文政九年(一八一四)三月初旬、伊豆半島の北西部、東海道三島宿に近い伊豆国田方郡仁田村から始まった。

仁田村の南西を滔々と流れる伊豆の大河狩野川は、太平洋沿岸で唯一南から北へ流れる河川である。全長十二里、天城峠に水源を発し、田方平野を富士山方向へ流れて駿河湾にそそぎ、水量も豊富で川幅も広かった。川は大きく蛇行して水深もあり、五十石船が修善寺の小立野村まで運航されていた。

狩野川を挟んだ仁田村と日守村には、それぞれ伊豆半島の産物や日本各地から沼津港を経由して船で運ばれてくる船荷を積み降ろす船着場があり、二つの村はお互いに勢力を争ってきた。時には船の運航権を争い、船荷を奪い合って引き起こした流血の惨事も一度や二度ではなかった。

稲七の人気が逆に日守村の若者の反感を買い、不穏な動きが日増しに昂じてきた。稲七の事件がなくても、長い年月の間、仁田村と日守村の感情的な対立があったの

で、稲七の存在はこれに火を点けたような結果となった。

事態を重く見た韮山代官見習江川英龍（後の三十六代・太郎左衛門）は、手代斎藤弥太郎に命じ、仁田、日守両村の名主以下村役人を代官所に呼び出して厳重に注意を与え、仲直りを命じた。しかし、永年の確執もあり、真からの関係修復は難しかった。

斎藤弥太郎は、非凡な稲七の力量に着目し、父清六・母おかねを説得して、将来の英龍警護役に鍛え上げるため、内弟子として代官所に引き取った。

英龍は、武州出身の神道無念流の達人岡田十松に入門、三年で免許皆伝を許された。この道場で師範代を務めていたのが、桃井春蔵、千葉周作と共に幕末江戸三剣豪といわれた斎藤弥九郎であった。

英龍の父英毅は、文武両道に秀でた弥九郎を英龍の補佐役として招聘した。従って、英龍にとって弥九郎は実質的な剣の師であった。剣だけではない、学問においても師であった。英龍は代官所において当然身分は上位であるが、役目を離れた時には弥九郎を師として尊敬した。

後年、英龍が名代官と敬われた資質は、すでにこの頃から培われていた。

十三歳の稲七少年は、英龍、弥九郎という素晴らしい指導者について、文武両道を学ぶことになった。

今まで何一つ不自由なく両親に甘えて育てられた稲七にとって、代官所の生活は精神的にも肉体的にも非常な試練であった。しかし、父親から因果を含められ、自分も納得して代官所に来たこともあって、稲七は歯を食いしばって耐えた。身長・体重こそ大人と遜色ない稲七であるが、顔付きはあどけなさが残る少年の顔、話す声は声変わり前の少年の声であったので、江川家の下男や女中はいたく同情し、何くれとなく愛の手を差し延べた。

弥九郎は、稲七を英龍の親衛隊長に鍛え上げる目的があったので、代官所の使用人に対して稲七に同情したり、憐憫の情けをかけることを固く禁じた。

稲七は、弥九郎が命じた素振りの稽古を三ヶ月間、次いで通称・江川砦や韮山城址の山々で、立ち木を相手の一人修行が三ヶ月間続き、稲七の身体にも大きな変化が生じた。

稲七が韮山代官所に来て一年が経った。

顎には無精髭が生え、面構えも精悍となり、腕も、脚も、胸も、背も、腹もすべての筋肉が逞しく鍛えられ、十四歳とは思えない立派な若者になった。

稲七は、剣の技こそ未熟であるが、打ち込み、斬り下げ、斬り上げ、横薙ぎ、どの動作も敏捷で力を入れる時宜、加減が実に理に適っている。正に「理気合一」である。

山中での三ヶ月の修行中、木の枝で顔を払われて目を

痛め、ある時は、万丈の山、千仞の谷を駆け巡り、衣服は破れ、手にも脚にも生傷が絶えなかった。

稲七の衣服が破れればこれを繕い、怪我すれば手当てするのは、いつも久恵、雪恵の孤児姉妹であった。姉妹の両親は、江川家の遠縁で、幼くして両親に死別した。これを不憫に思った英龍の母が江川家に引き取って我が子同様に育てた二人であった。この時、久恵は十六歳、雪恵は稲七と同年の十四歳であった。久恵には、稲七が二つ年下という感覚はなかった。既に背丈は五尺六寸、無精髭の生えた精悍な稲七は、久恵の心の中に愛の対象としてしっかり芽生えていた。

稲七は斎藤弥九郎から文武両道を学び始めてから五年が過ぎて十八歳になった。

稲七は英龍肝いりの斎藤道場で、竜虎といわれる剣の遣い手に成長した。代官所に勤める二歳年長の松岡達之助は、稲七を弟のように面倒をみた。特に剣術の稽古や、「塾の間」で学ぶ時は、頼りがいのある先輩であったし、良い競争相手でもあった。

達之助の父・松岡正平も、弥九郎同様に、英龍の補佐役として父英毅が代官所に招聘した人物であった。

稲七は、師にも友にも恵まれて、ひたすら剣と学問に精進した。ただ一心に学問を研鑽し、剣の腕を磨く稲七にとって、久恵の控えめな愛の心尽くしが、この上もなく心の安らぎになっていた。

美人薄命とは久恵のことを指していうのだろうか。もともとあまり丈夫でなかった久恵は病を得て、英龍の勧める伊豆半島の南端弓ヶ浜に転地療養した。その後、一時快方に向ったが、稲七たちの願いも虚しく二一歳の短い生涯を閉じた。

二

一方、お春は、稲七に助けられてから四年後の寒の明けに、祖父弥吉の弟子義三を婿に迎えて所帯を持った。義三はお春と五つ違いの二五歳、狩野川上流筏場部落の樵の三男で、頑健・実直な男であった。

婿の義三は、十五歳の時に弥吉に弟子入りし、以来十年間、暖簾分けを許されるまで懸命に修業した。弥吉は早くから、お春の婿には腕も確かで実直な義三がよかろうと一人心に決めていた。しかし、連れ添うのはお春である。お春が義三を嫌えば別の婿をと思っていたところ、お春が承知したので急いで祝言を挙げる運びとなった。

弥吉は、お春が義三と所帯をもって安心したのか、鍛冶屋の仕事を義三に任せ、お札所巡りに明け暮れするようになっていた。

そうした或る日、ちょっとした風邪が思わず長引き、あれほど丈夫であった弥吉があっけなく息を引き取った。もうすぐ古希を迎える春先のことであった。

弥吉の七七忌の法要を済ませた或る日の正午過ぎ、義三は、隣村畑毛村の得意先へ農具を届けに行く途中、農家の幼児を暴れ牛から護ろうとして、牛の角に腹を裂かれて非業の死を遂げた。この事件は、お春が所帯を持ってから二年目のことであった。

お春の境遇を気の毒に思った伯父の鉄蔵お銀夫婦は、畑毛温泉で経営する老舗旅館「駒乃湯本家」に引き取った。鉄蔵お銀夫婦には後継者がいなかったため、お銀の縁者であるお春が望めば、駒乃湯本家の女将を任せてもよいと夫婦で話し合っていた。

お春は駒乃湯本家に来てから三年が経ち、少しずつ明るさが戻ってきた。仕事の面でも、温泉旅館の仕組みやしきたりも覚え、馴染み客もできてきたが、なぜかお春は、八年前に狩野川堤で無頼漢の魔手から救ってくれた稲七のことをしきりに思い出した。

(あの時、稲七さんは十三歳、私は十六歳、あの事件がきっかけで稲七さんは韮山のお代官所へ奉公することになり、それ以来学問と剣術の稽古に励んでいるという。今頃どうしているのかしら。稲七さんは私より三つ年下の二一歳、立派なお武家様になったでしょうね)

お春は、忙しい一日が終わって一人床についた時などに、久しく消息を聞かない稲七のことを懐かしく思った。

子供の頃から整った顔立ちのお春はまた一段と美形になった。ツンと威張ったように程よく高い鼻、ギュッと小さく蕾めた口許、切れ長の潤んだような流し眼は、男を誘い込むような色気がある。高く結い上げた黒髪に挿した赤い珊瑚の簪が色白の顔に良く映えた。大柄で均整の取れた肢体と豊かな胸は、幅広の帯を高めに結んでも、男の目から隠すことはできなかった。

お春は、温泉旅館の仕事が天職なのか水を得た魚のように良く動き、身体を休めることがなかった。温泉客には、老若男女を問わず絶えず優しい眼差しで対応し、時々見せる艶冶な流し目にすっかり魅入られて入れ込む湯治客も少なくなかった。さらに、興奮すると朱色に染まる右口許の淡いホクロが色香を漂わせ、一層男心を刺激した。

若女将になったお春の対応振りが人気を呼んで、三島周辺は勿論、遠方からも温泉客が足を運び、以前に増して駒乃湯本家は賑わった。

しかしお春は、お客の思惑とは全く無縁の身持ちの固い日々を送っていた。

その頃仁田村では、田植えの農繁期を過ぎた或る日、名主仁田太左衛門以下、村役人が寄り合って菩提寺慶音寺の恒例の勧進相撲について相談した。一昨年九月二六日の狩野川台風で、村のために命を落とした稲七の父親清六の供養塔建立についての話もあったので、稲七も寄り合いに出席した。

寄り合いの決め事も順調に進み、農繁期の直会も兼ねて畑毛温泉でさやかな宴会を催すことになり、稲七も誘われて同行した。

太左衛門以下十五人、揃って駒乃湯本家に向かった。

一同が旅館に着くと、帳場の前で数人のやくざ風の大男が、若い女将を相手に怒鳴っていた。

「おい、女将、駒乃湯の客あしらいは何だ。俺を箱根の剛右衛門と知っての客あしらいか。先に玄関へ入った俺を後回しにして、後から入った奴等を先に客間へ案内しようとはどういう了見だ。返答次第では只ではすまさねえ」

「いぃえ、決してそのようなことはございません。後回しなどと。こちらのお客様は、先程お見えになられましてから、御用がおありとかおっしゃって、表にお出になられたのでございます。どうぞお腹立ちをお納め下さいませ」

若女将のお春は、ことの経緯を懸命に説明した。

「いぃーや駄目だ。勘弁ならねぇ。今日の宿賃は払わねぇぞ」

お春は、無頼漢の横車に美しい顔を曇らせて立ち竦んだ

一方、けちを付けられた先客は、

「よぉ、箱根の親分、まぁ、いいじゃぁねぇか。俺たちゃぁ一旦外に出たが、親分より先に玄関の敷居をまたいだこたぁ間違いねぇ。我慢しねえか…」

「誰だ手前ぇは。横から口出しすると手前ぇも勘弁ならねぇ」

「下手に出りゃぁいい気になってなんでぇ。俺らぁ日守の権太だ。こっちは兄弟分の吾作兄ぃと茂作兄ぃだ。日守の船着場じゃあ知られた顔だぁ」

お春は、日守の権太と聞いてドキッとした。今から八年前、狩野川堤で襲われた事件が一瞬脳裏をよぎった。あのときの無頼漢だ。気丈なお春も逃げ出したくなった。

権太らは脇差を差し、いっぱしの侠客気取りだ。胸をはだけ、腕まくりして桜吹雪の刺青をちらつかせている。

稲七は、代官所から、住民たちの私的な争いには、訴えがない限り介入してはならないと命ぜられていたので、仲間の人たちの後ろから様子を見ていた。

箱根の剛右衛門とその手下どもは、箱根街道の篭舁き連中を束ねる雲助の親分だ。若女将の評判を聞いて難癖を付けにきていた。

一方、日守の権太らは、八年前狩野川堤で手篭めにしようとして果たせなかった東の鍛冶屋お春であることを知っての投宿であった。

「いやぁ、もう勘弁ならねぇ。野郎ども、衝立でも何でも叩き割れ…」

剛右衛門の合図で、バシーン、ドシーン、と手下どもが、手荒く神代杉の大きな衝立を突き倒した。箱根の雲助連中も、船着場の人足も、山と川で勢力範囲を広げる

魂胆があるから、派手に暴れている。
番頭も板前も相手が悪すぎて手が出せなかった。
稲七は、血でも見るようなことになっては若女将も困るだろうと思い、つかつかと喧嘩の中に入っていった。
「やめろ…」
一喝した。稲七の声は、低いが武術で鍛えた気合だ。ビビッと鋭く響く。気持ちが高揚してくると、八年前にお春を助けた時に負った右眦の傷痕が朱色を帯びて凄みを増す。
「な、な、なんでぇ、手めぇは…」
「貴様、引っ込んでいろ。この若造…」
剛右衛門も権太もびっくりした。俺たちの喧嘩に口出しする奴がいる。
「手前ぇ、どこのどいつだ」
剛右衛門は、大きな声を出して稲七を威嚇した。剛右衛門は雲助を束ねるだけあって身体も大きく、人相も強面だ。
その時、同行の村役人の一人が思わず声を掛けた。
「稲七さん、危ないよ…」
(ええ、稲七さん。あの稲七さんがこの人)
お春はわが眼と耳を疑った。
(八年前にわたしを助けてくれた稲七さんがまた助けてくれる…)
お春の胸がジーンと熱くなった。
(稲七さん、嬉しい…)
お春は嬉しさのあまり思わず両手で顔を覆った。片時も忘れたことがないあの人が目の前にいる。
(それにしても、見違えるようにご立派になられて)
子供の頃から体格が良かった稲七は、身の丈六尺、武術で鍛えた筋肉質の堂々たる若武者となっていた。
(稲七さん、お会いしたかった)
お春の両眼から懐かしさで涙が溢れ出た。
「なに、稲七だと。お前は仁田の稲七か」
「如何にも、稲七だが」
日守の権太は手にした脇差に力が入った。
「箱根の親分、奴の始末は俺に譲ってくれ。俺には積年の恨みがある。稲七、手前ぇに出会ったが百年目、今日は思いっきり痛めつけてやる。吾作兄ぃ、茂吉兄ぃ、やってしまえ」
「野郎、くたばれ」
三人は同時に脇差を突き出した。
(危ない)
お春を始め、村人も、旅館の人たちも、
(やられた)
と一瞬目を閉じた。
稲七は、刀身が身体に触れる間合いを見切ってサッと体をかわし、手にした矢立で、ビシ、ビシ、と権太らの手首を打ち据えた。

ガラガラと音を立てて脇差が床に転がった。
「イテテ…」
三人とも、手首を抑えて蹲った。
稲七は、村人と一緒に温泉客として来ていたので刀は持っていなかったが、役人の常として長さ一尺足らずの真鍮の矢立を腰に差していた。それを素早く手にしたのだ。
稲七は、韮山代官所斎藤弥九郎道場で鍛えられた神道無念流の名手だ。やくざ風情の二人や三人どうということはなかったが、その場にいた人たちは稲七の腕前を知らないので驚いた。
稲七は床に落ちた脇差を素早く手にし、刀の峰を返して権太、剛右衛門らをグッと睨んだ。
「ここでは旅館に迷惑が掛かる。表に出てやろう。存分に掛かって参れ」
稲七の声は、低いが響く。鷹の目のように鋭い眼差しで無頼漢を見据えた。
稲七の気迫に圧倒された権太、剛右衛門らは、外で立ち合ったら足腰立たなくなるほど打ちのめされるのではと怖気づき、先程からの威勢はすっかり萎えてしまった。
「よーし、喧嘩は止めろ。今日は私が仲裁する。双方とも手を引け」
「へ、へえ…」
「恐れ入りました。どうか勘弁なすっておくんなさいまし」
「その方たち、異論はないな。不承知とあらば、改めて私が、韮山代官所・仁田龍郎稲七として相手する。事と次第によっては、双方とも無宿者として代官所へ引っ立てるが、それでもよいな」
見事な貫禄である。権太も剛右衛門も稲七の腕と度胸、間髪を入れない鮮やかな仲裁振りに、すっかり男惚れしてしまった。
「今日の仲裁の宴は私が持とう。女将さん、席を設けて下さい」
稲七は、そう声を掛けながら女将の顔を見て、ハッとした。
「女将さん、もしや、お春姉さん…」
「稲七さん、お久し振りです…ありがとうございました。また、稲七さんに助けられました」
お春は人目も構わず稲七の胸に飛び込んだ。
お春の計らいで、仲裁の席も整い当事者が揃った。太左衛門なども加わった。駒乃湯本家の主人鉄蔵お銀夫婦も騒動の話を聞いて駆けつけた。
仲裁の宴も進んだ時、剛右衛門は、
「俺は今日まで、先生のように強くて、度胸があって、気風のいい方にお目に掛かったことはなかった。脇差を手にして『表に出ろ』と睨まれた時には、身が竦みました」

「こりゃあ、えらい人に打ち当ったものだ。手足の一本ぐらいへし折られるかと、震えました」
権太も先程の恐怖がまだ消えていなかった。
「ところでお願いがございます。先生、俺たちを先生の子分にしてやってくれませんか。なぁ、日守の親分」
剛右衛門は、威儀を正して申し出た。権太も全く同じ考えだった。権太は、
「先生、先生は俺たちと十も十五も年下かも知れませんが、先生は剣ばかりではない、学問も、人の道もすっかり修められ、代官所ではなくてはならぬお人と聞いております。子分になった暁には、決して先生のお名を汚すようなことはいたしません。お願いします」
「こんなしがない雲助ですが、俺も男だ、誓ってお約束いたします。」
剛右衛門も必死で頼み込んだ。
「折角ですが、私は代官所に務める身です。子分を持つことはできません」
稲七は、頑なに断った。
この時、鉄蔵が話の中に入り込んできた。
「稲七さん、それでは剣術と学問の弟子ということでは如何でしょうか。この人たちも真人間になろうというのです。稲七さんの先生、二宮尊徳先生は『報徳は人の心の荒蕪を開く道である』と説いているというではございませんか。時々報徳のお話も聞かせてあげて下さい」
「そうですね、剣と学問の弟子ならば、お断わりする理由がありませんね。それでは、今後一切人様に迷惑を掛けないことを誓って下さいますか」
「先生、お誓いします。ここにお出での皆様が証人です。先生は、やがて伊豆の稲七ここにあり、といわれる立派なお人になる方です。人のお頭になる方です。そうだ、これからは仁田の稲七さんではなく、『伊豆の頭七』さんと呼ばせて下さい」
「そのとおりです。稲は人間が生きていく上になくてはならないお宝ですが、日本国中どこでも作れます。先生は、たった一人の方です。『頭七先生』と呼ばせていただきます。」
(ここからは、この物語でも「稲七」を改め、『頭七』と呼ぶことにする。)

その夜頭七は、鉄蔵お銀夫婦の計らいで、離れ座敷で一人就寝した。昼間の出来事や、思いがけないお春との出合いがあって、なかなか寝付かれなかったが、やがてうとうとした。子の刻を過ぎた頃か、頭七は人の気配を感じ、夜具の中で身構えた。女のようだ。誰だ、物取りか。女は夜具に近づくと、その端をそっと持ち上げて足から入り、頭七に添い寝する形で静かに横になった。
女は無言でいるが、鼓動は激しく、荒くなった息遣いが頭七にも伝わってきた。頭七が女の方を向うとした時、

「頭七さん、お春です。今日はありがとう。また、あなたに助けられました。私お礼をいいたくて我慢ができなかったの……それで押し掛けて来てしまいました。許して……」
「お春姉さん……私は、お春姉さんが駒乃湯の若女将になっているとは知らなかった。あの時はびっくりしました」
「お春姉さんなんて呼ばないで。お春と呼んで……」
お春は、身を固くしている頭七の逞しい胸に手を乗せた。
お春は、いままでどんなに言い寄られても誰にも靡かなかった。頭七に巡り合わなかったら、生涯孤閨を守り通したかも知れない。お春はそのように身持ちが固かった。しかし、頭七との間は別であった。お春は頭七を心から愛していた。総てを捧げ尽くしたい。お春はその思いを抑えることができなかった。だが、頭七の代官所での出世を妨げてはいけない。自分は日陰の身でもよい。頭七になにかしてやれればそれで満足しよう。お春はそう心に決めていた。
お春は帯を解き、静かに頭七の逞しい身体に身を重ねた。
その年の秋、お春は、伯母のお銀を通して、頭七の母親おかねに、身籠ったことを報せた。おかねは、早速頭七とその師斎藤弥九郎にそのことを伝えた。弥九郎は大いに喜び、江川英龍に報告した。英龍の肝いりで、頭七とお春の婚礼が行われた。月満ちて生れたのが、長女の『恵理』である。

三

「ブォーォー　ブォーォー」
春寒の未明、伊豆国仁田の村人は時ならぬ法螺貝の音に春眠を破られた。
法螺貝の音は、狩野川の「流れ堤の川原」と呼ばれる辺りから聞こえてきた。この辺り一帯は、築いても築いても洪水で堤が流されてしまうのでそう呼ばれていた。法螺貝を吹いていたのは、弟子二人を連れた老修験者であった。
一刻ほど経った頃、流れ堤の川原に集まった村人へ、老修験者は神のお告げを伝えた。
「村の衆、よく聞かれよ。拙者が精進潔斎して身を清め、七日前から護摩を焚いて今秋の五穀豊穣を祈祷したところ、念力が通じて明け六つ前に、大御神の啓示がござった。もったいなくも啓示によれば、この地は幾世の昔、心無き者が神に不敬を働いた土地である。それ以来、神は人間の行いを戒めるために、洪水で堤を流され給うた。大御神の許しを得たくば生贄として人柱を立てよ。その人柱は、去る寒の明けに三歳になった女児である。人柱を立てる日は、明日の昼九つである。村の衆、お判りか

な」
　老修験者の話を聞いた村人たちは驚いた。
「なに、人柱だと……」
「三歳の女児を人柱だと、そんなことができるか」
　村人たちは口々に騒ぎ出したが、人柱を立てれば、仁田村の何十町歩もの田に稲が植えられ、大勢の農民が救われる。そんな思いが一瞬村人たちの頭の中をよぎった。
　名主の仁田太左衛門を始め主だった村人は、人柱の犠牲となる幼い女児の不憫を思って声がなかった。やがて、意を決した太左衛門は、
「仕方あるまい。これから後、何十年もの間に何千、何万人もの命が救われるのだ。誰かに人柱になってもらわねばなるまい」
「三つになったばかりの女児はいるのか」
　村人たちは、それぞれ組内の子供の顔を思い浮かべた。
　韮山代官所から、仁田村の自宅に帰っていた頭七も村人に混じって老修験者の話を聞いた。我が子の恵理も三歳になる。恵理の顔が目に浮び、頭七は体中の血がいっきに引くのを感じた。
　その時、村役人の一人が苦しげな顔で呟いた。
「おォ、俺の組の太平ッさの娘は、今年三つの祝いをするといっていた」
「そうだ、俺の隣の藤吉ッさのところの娘も三つだ」
　もう一人が独り言のように呟いた。
「申し遅れたが、私の娘恵理も当年三歳になります。人柱の一人に加えていただきたい」
　日頃大きな声ではっきり話をする頭七も、声が震えてよく聞こえなかった。
　頭七は先程から覚悟を決めていた。
（我が家は先祖代々村役人を務めている。父清六も六年前に、狩野川大洪水の折に、命を捨てて船着場を護った。今度は自分が村人に尽くす番だ。恵理には不憫だ、お春は悲しむだろう。だが、誰かが人柱に立たねばならぬ。他人が悲しむのを見ているより、自分が代わってその悲しみを引き受けるべきだ。恵理の命と引き換えに多くの村人が救われるならば恵理も成仏できるだろう）
　ややあって、太左衛門は沈痛な面持ちで、
「三歳の女児は三人か。さて、誰を人柱にしたものか」
　村人に問い掛けたが、誰も答える者はいなかった。太左衛門は考えあぐねた末に、籤引きで人柱を決めることにした。異論を唱える者はいなかった。しかし、誰も籤を作るとは言い出さなかった。人柱を決める籤、そんな非情な籤を作るのは誰も嫌だった。
「そうだ、修験者殿にお願いしよう」
　修験者はしぶしぶ承知した。
　太左衛門の出した使いの者が、太平、藤吉、頭七の妻・お春の所へ飛んだ。半刻後、三人が、それぞれ娘を背負って流れ堤の川原にやってきた。太平と藤吉の女房も付いてきた。
　老修験者が、即製の籤を手にして村人の輪の中に入ってきた。
「さあ、村の衆、拙者が三本籤を作った。籤の長さは三寸だ。そのうち一本だけ一寸ほど長くしてある。その長い籤を引いた人の娘さんが、お気の毒だが人柱になる」
　老修験者は、籤を持つ手を頭七、太平、藤吉の三人の前に差し出した。だが、誰も籤を引く勇気はない。集まった村人たちも息を凝らして老修験者の手許を見詰めていた。
「私が引こう」
　最初に頭七が籤を掴んだ。お春の顔から一瞬血の気が引き、眼を閉じて神を念じた。頭七の指は硬直して動かない。ようやく引いた籤は短い外れの籤だった。
「おぉー」
　頭七の口から思わず安堵の吐息が洩れた。
　お春は気が抜けたように跪き、両手を合わせて神に幸運を感謝し、恵理を抱きしめた。
「次はどなたの番かな」
　老修験者は太平と藤吉の方へ籤を持つ手を差し出した。
　二人は後退りするばかりで、籤を引こうとはしなかった。
　二人とも籤を引くのが怖かった。やがて老修験者に促されて太平が籤を引いた。
「おぉ、外れだ」
　太平は満面に笑みを浮かべた。残った藤吉は籤を引かなかった。自分の娘が人柱に決まったからだ。藤吉の娘は、藤吉夫婦が四十歳を過ぎてから授かった一人娘だ。神に祈り、待って待ってようやく生れた子供だった。名前も「まつ」と付けて可愛がっていた。
「俺は嫌だ。まつを人柱になんか出さない」
　藤吉夫婦は、まつを抱きしめて泣き叫んだ。
　村人たちは困惑した。その時、恵理の手を離した頭七は進み出て、
「藤吉さん、うちの恵理がおまつちゃんに代わって人柱になろう」
「えぇッ」
　藤吉夫婦は驚いた。村人も驚いた。一番驚いたのはお春であった。
「お前さま、恵理を人柱になんて……、お前さま、恵理が可愛くないの」
　お春は半狂乱になって頭七の胸を叩いた。
「お前さまの人でなし……」
　恵理はその雰囲気に驚き、
「かあさま、かあさま……」
　お春にしがみ付いて泣き出した。
「お春、恵理、許してくれ……。藤吉さんのたった一人の娘、おまつちゃんを人柱に立てるわけにはいかないのだ」

頭七は、右手で恵理を抱き上げ、左手でお春を抱きしめた。両眼から大粒の涙が溢れ出た。これが我が家の宿命なのだ。頭七は歯を食いしばって耐えた。

人柱の儀式は明日の昼九つだ。その夜、頭七とお春は悲しくて眠られなかった。恵理の不憫を思って泣き、恵理が誕生するまでの過ぎし日の出来事を思い出していた。

恵理を中にしてお春は静かに頭七へ語りかけた。

「お前さま、今日までの間には色々なことがございましたねぇ。お前さまの家は、頼朝公旗揚げのときに武勲のあった仁田四郎様に繋がる立派なお家柄、私は鍛冶屋の娘、夫婦になるまでには色々なことがございました。恵理が生まれて幸せになれたかと思いましたのに、人柱の騒ぎが持ち上がり、恵理には不憫でなりませぬ」

「うむ、私とて辛い。代われるものなら代わってやりたい。親としてこんなに切ない話はない。恵理には本当にすまぬと思う。でも、これがあの子の前世からの宿縁なのだ。そのように思うしかあるまい。お前のご先祖も、家康公から伊豆の北部と駿河の東部を束ねる鍛冶職のお墨付きを頂き『東の鍛冶屋』と呼ばれるお家柄、ご先祖様もご照覧下さっているだろう」

「お前さまは、私を二度救って下さいました。今度は恵理が私たちを救ってくれるのね」

「お前を最初に助けたのは、あの船着場の事件であったな。もう十二年も昔のことだ」

「あの日も今日のように春寒の日でしたね」

四

三年前に恵理が生れた。そして明日は恵理が人柱になる。頭七お春夫婦は、夜が明けるまでまんじりともしなかった。

明け六つが過ぎた。眼を赤く腫らした二人は、そっと起きて身支度し、形ばかりの朝餉をとった。

人柱の話は瞬く間に近郷へ広まり、流れ堤の川原には多くの村人が集まった。

やがてお春は、恵理の身を清めて白装束を着せた。家の中には終始重苦しい雰囲気が漂っていた。恵理は両親の顔をおずおずと眺め、幼いながらも只ならぬ気配を感じていた。

三人は定刻の四半刻前に、流れ堤の川原に設けられた人柱の神事場に到着した。

その時、大柄な男が妻女を連れて急ぎ足で頭七たちの方にやって来た。小さな女の子を背負っている。

「頭七先生、日守の権太です。先生、恵理さまの人柱は、おらぁの三女のお末に代わらせてやって下さい。恵理さまは、先生と奥様の大事な一粒種。我が家にはお末の他に五人も子供がおります。お末も三歳です。恵理さまの身代わりになって大恩ある先生のお役に立ちたいのです。ぜひ人柱にして下さい」

「権太殿、お志はかたじけないが、人柱は仁田村のことです。代わることはできません」

「どうしても身代わりは駄目でございますか。さすがに俺たちが見込んだ頭七先生だ、見事なお覚悟だ。判りました。それでは心を込めて恵理さまの成仏をお祈りいたします」

恵理が身代わりになったまつと藤吉夫婦は、川原に土下座して頭七親子を伏し拝んだ。

「申し訳ねえことでございまする。頭七さま、お春さま、恵理さま、ご恩は生涯忘れません。恵理さまの菩提を未来永劫にお弔いさせていただきまする。頭七さまご一家は我が家の御仏でございます」

人柱の準備は完了した。恵理は母お春の手をしっかりと握り、不安げに母を見上げて、

「かあさま…わたし、あの竹篭に乗ってあの穴の中に入るの…一人で入るの恐いよ」

お春は今までこらえていた悲しみが堰を切って溢れ出た。

「恵理…許しておくれ…」

嗚咽を抑え切れなかった。集まった村人も嘆び泣いた。頭七は、ぐっと口を真一文字に結び、天を仰いで悲しみに耐えた。

涙の中で人柱の準備が進められた。

(こんな惨い人柱なんかやめてくれ)

村人たちは、皆、胸の内でこの悲しい儀式を恨んだ。だが、誰一人やめようと言い出す者はいなかった。名主太左衛門以下村役人も人柱用に掘られた穴をじっと見詰めて悲しみに耐えていた。

定刻、昼九つの鐘が鳴った。老修験者に促されて頭七は、お春の手から恵理を抱き取り、今生の別れに思いっきり抱き締めた。

(恵理…許してくれ…)

頭七は、無言で人柱用の竹篭の中に恵理を入れて蓋を閉めた。

「お役目の方々、お願いします。竹篭を降ろして下さい…」

竹篭から離れた頭七はお春を抱いた。悲しみに堪えるためもあったが、お春が狂乱して穴の中に飛び込むのを防ぐためもあった。

恵理を乗せた竹篭は、

(ギシ、ギシ…)

と音を立てて、静かに穴の中に降ろされていった。

その時、竹篭の中から恵理が、

「とうさまー、かあさまー、恐いよー、わたし言うこと聞いていい子になるよー、ここから出してー」

小さな手で竹篭を掴んで泣きじゃくった。

竹篭は一瞬止まった。村人はこんなむごい作業はやめたかった。竹篭を吊るした麻綱が小刻みに揺れている。
「構いません、竹篭を降ろして下さい」
頭七は、顔を真っ赤にし、眼を固く閉じて儀式の進行を促した。お春は、頭七の腕の中で身を捩って泣いた。
(ギシ、ギシ…ギシ、ギシ)
竹篭は少しずつ穴の中に降ろされ、やがて村人の視界から消えた。
「南無妙法蓮華経…南無妙法蓮華経…」
お題目を唱える声が川原を埋めた人たちから一斉に起こった。
「かあさまー、かあさまー、恵理はいい子になるから出してー」
穴の中から聞こえる恵理の泣き声は次第に小さくなっていった。
やがて竹篭は穴底の冷たい水の中に降ろされた。村人は鍬を手にしているが、埋め戻しの土砂を穴の中に入れるのを躊躇った。可愛い盛りの三歳の女児を生き埋めにするのは誰も嫌だった。
「よし、私がやろう」
頭七はよろめく足を踏みしめ、眼を閉じて土砂を穴の中に投げ込んだ。
「キャー」
頭から土砂をかぶった恵理の悲鳴が穴の中から聞こえた。
「えりー」
引き裂くようなお春の叫び声。
「なんて惨いことを…」
川原に集まっていた人々は川原に跪き、顔を覆って一緒に泣いた。
役目の村人たちは、躊躇いながら穴の中に土砂を入れた。もう穴の中からは恵理の泣く声は聞こえてこなかった。
気丈な頭七もお春を抱きしめて男泣きに泣いた。
その時、パカパカ、パカパカ……南の方角から蹄の音が聞こえてきた。
「おぉ、早馬だ、なんだろう」
村人たちは作業の手を止め、蹄の音が聞こえて来る方向を見やった。
点のようにしか見えなかった馬が、みるみる大きくなってきた。早馬は二頭だ。こちらに向って駆けて来る。
「おーい、おーい、待ってくれー」
「その人柱ー、や、め、ろー」
馬上の武士は、髪振り乱し、馬に鞭打って人柱の神事場へ乗り付けた。
「どいてくれ、通してくれ…」
さっと人垣は左右に割れ、早馬はその間を通って穴の前で止まった。
馬上の武士は飛び降りた。頭七の盟友、松岡達之助と渡辺清兵衛だ。
「間に合ったか、恵理ちゃんは無事か…」
「頭七殿、頭七殿はどこにいる」
「殿のご命令だ、人柱はやめろ」
「お代官のご命令だ、恵理ちゃんを早く助けろ」
「おー…」
穴の周りの人垣が一瞬どよめいた。
「達之助殿、清兵衛殿…殿のご命令とは…」
「頭七殿、殿は追っ付けここにお見えになる。さあ、早く恵理ちゃんを穴から引き上げろ」
「達之助殿、清兵衛殿、かたじけない、だが最早手遅れでござる」
頭七は肩を落としてうなだれた。
「そうか、手遅れか、今少し早ければ間に合ったのに無念だ。すまぬ、頭七殿、お春さん」
達之助と清兵衛は天を仰いで落涙した。
お春の引き裂くような嗚咽がまた洩れ、人々は頭七一家の不運を悲しんだ。
その時、穴の中を覗いていた一人が、
「人柱が動いているみたいだぞ…」
大声で叫んだ。半狂乱のお春は、髪を振り乱して、頭七に向かって叫んだ。
「えぇ、お前さま、早く恵理を助けて…」
頭七はすぐさま竹篭を吊るした麻綱を伝って穴の中に飛び込んだ。竹篭の中に座っていた恵理は、頭から土砂をかぶって泥だらけだ。腰から下が土砂と水で埋まっていた。
「しっかりしろ、恵理、えりー…、とうさんが今助けてやるぞ…」
穴の上から投げ込まれた土砂と、せりあがってくる水の恐怖で、恵理は失神していた。
激しく竹篭を揺さぶる頭七の大声で、恵理はハッと息を吹き返した。
「とおさま、とおさま…」
恵理は弱々しい声で父親を呼んだ。
頭七は脇差を抜いて、竹篭をバシッ、バシッと切り開き、恵理を抱き上げた。
「恵理、大丈夫か、しっかりしろ…」
「おーい、綱を引き上げてくれ…」
頭七は、麻綱を掴んで穴の外に向って大声で呼び掛けた。
「おお、よかった、よかった…」
村人はどよめいた。そして一様に安堵した。
穴の外に引き上げられた恵理は、土砂を被り、泥水で汚れた白装束姿のまま、
「かあさま、かあさま、わたし恐かった…」

お春の胸に飛び込んだ。

達之助と清兵衛は、

「よかったな、頭七殿、お春さん、貴殿ご一家の『義人の真』が神に通じたのだ。恵理ちゃんに神のご加護があったのだ」

「殿もきっとお喜びになる…」

二人は、我がことのように喜び、昨夜からの経緯を語った。

昨日の夕刻、恵理が人柱に立つという話が韮山代官所にも伝わった。

恵理の人柱を中止させることはできないか。江川英龍は代官所の主だった者を集めて相談した。その結果、頭七が十二年前に剣の修業をした江川家の守護神八幡鎮守社において、英龍が自ら神のご加護を祈ることになった。

頭七一家を悲しませてはならない。英龍は必死だった。白装束に身を清め、神殿の前に祭壇を設けて暮れ六つ頃から祈った。祈りは夜を徹して行われ、英龍は一心不乱に祈った。代官所の役人も共に祈った。

翌日の未明、意識が混濁してきた頃、早春の雷鳴がとどろき、英龍の上に神の啓示が下りた。

『頭七が神の命に従って最愛の我が子を生贄に捧げんとしたは「義」なり。英龍が民を思って祈りを捧げたは「恕」なり。我は之を聞き届けた。八幡鎮守社裏の欅の下を掘れ。石地蔵がある。それが恵理の身代わりじゃ。人柱として神に捧げよ』

英龍は、直ちに代官所の役人に命じて、欅の古木の下を掘らせた。そこは岩石が多く、容易に作業は捗らなかった。石地蔵は出てくるのか、作業をする役人たちは焦った。

この間も、英龍は一心に神に祈った。役人たちも半ば諦めかかった時、達之助の打ち込んだ鍬が、ガチッと音がして、確かな手応えを感じた。

「あったぞ…殿、見付かりましたぞ」

達之助の呼び声で、一同は達之助の周りに集まった。さらに掘り進むと、幼児ほどの大きさの石が見付かった。用意の手桶の水で石を洗い清めた。神の啓示どおり、まさに人形そのものの天然の石地蔵であった。

時刻は、昼九つが真近に迫っていた。英龍は、即座に命じた。

「よし、人柱の儀式はまだ終わっていなかろう。達之助、清兵衛、すぐ行け。ぬかるな。私は早篭で、身代わり地蔵を奉じてすぐ参る。急げよ」

達之助と清兵衛は代官所の駿馬に飛び乗り流れ堤の川原まで十三町を駆け抜けた。

やがて、英龍が身代わり地蔵と共に到着した。伊豆国最高の権力者、江川英龍が姿を現すと、川原に集まっていた大勢の住民から大歓声が沸きあがった。

「お代官様がお見えになった。よかった、もう、大丈夫だ…」

英龍は襟を正し、

「皆のもの待たせたな。もう人柱は必要ない。私が恵理の身代わり地蔵をここに捧持してきた。私が祈って受けた神の啓示である。神は頭七親子の『義』を認められたのだ。江川英龍、神に誓って責任を持つ。早速身代わり地蔵を人柱に立て、堤の安全を祈願しようぞ…」

「殿、ありがとうございました…」

頭七親子三人は、感極まって号泣した。

名主太左衛門以下村人一同、平伏して英龍にこもごも御礼を言上した。

人柱のやり直しである。今度は恵理の時のような悲しみはない。太左衛門の指図と仁田村菩提寺・慶音寺住職の読経の中で、身代わり地蔵の人柱は粛々と進められた。

身代わり地蔵の人柱により流れ堤も安泰となり、仁田村の荒れ田も美田に変わった。

それから毎年秋には、五穀豊穣の祝いが仁田の家々で行われるようになり、村人たちは、「身代わり地蔵」に感謝して人柱の日を地蔵の命日として末永く祭った。

身代わり地蔵が人柱になった日から数年後、川船運送に伴う船主、荷主の弾圧に耐えかねた荷揚げ人足たちが賃金騒動を起した。頭七はこれを見事に納めて人足たちの困窮を救った。さらに、二宮尊徳の創始した組合様式を導入して「荷揚げ人足組合」を結成し、労使双方から厚い信頼を得た。

続いて、箱根の箕舁き人足を集め、元締めの剛右衛門と協力し、適正な箕賃を決めてこれを守らせ、違反者には厳しく諭した。

二宮尊徳の訓えに基づく頭七の時宜を得た指導により、箕舁き人足の生活も安定した。さらに頭七は、代官所支配地の和平を願って箕舁き人足、馬方たちの組合を創るなど大いに世のために尽くした。

頭七の行った数々の事績により『義人・伊豆頭七』の名は一層高まった。

それから幾星霜、度重なる狩野川護岸工事のために「身代わり地蔵」の所在も何時しか不明となり、その伝承も聞かれなくなってしまった。今は狩野川の某処ここに、かたちを変えて人柱の伝説が残っている。

了

政争の国

新井　宏

日本人は「いいかげん」である。お宮参りで始まり、七五三で神社に参り、教会で結婚式を挙げ、葬式は仏式で行っても、まったく違和感がない。漢字の「行」を「コウ」「ギョウ」「アン」のほか「ゆく」「おこなう」と読んでも、不便だと思わないし、軍隊のないはずの国に立派な軍隊があっても、「まあいいじゃないか」と済ましている。

それに比べると韓国人はもっときちっとしていて、漢字の読みなどは全てひとつに統一している。ひとことで言えば、日本人よりも「いいかげん」ではなく、原則を重視する人たちである。

ところで、精神分裂症患者は「いいかげん」ができないという。例えば、一から九までの数字をでたらめに言ってくださいと指示されても、一二三四と順番にしか言えないし、軽症でも一の次に九とか、できるだけ離れた数字を言うそうである。

これを政治の場に当てはめたらどうなるであろうか。政治とは、もともと妥協の場であるから「いいかげん」ができないと現実的な対応にならないし、その結果として、政治に分裂症が発生してむしろ対立が激化する。朝鮮の歴史がまさにその代表例である。

だから韓国の学生たちにしばしば「いいかげん」の効用を説く。その時に持ち出すのが、十九世紀初の日本と朝鮮の比較である。

その頃、日本も朝鮮も厳しい鎖国を行っていたのは同じであったが、「いいかげん」だったのは日本である。オランダという風穴を通じて最新の医学書や大砲、製鉄書が次々ともたらされ、またたくまに筆写され、各地に広まっていた。幕末にはオランダ語を解するものが三千人にのぼったとの説さえあり、鎖国の原則とは異なり、それらの人材が身分を問わずどんどん登用されていた。攘

夷を唱えて幕府を揺さぶっていた薩長が政権を掌握するや、いきなり開国にふみ切った。

それに対して朝鮮の両班支配層には、西欧語を解するものなど皆無であり、条約文の読解さえ宗主国の清にたよらざるを得ない状況であった。そのため日本は西欧に半周遅れでついて行けたのに、朝鮮はレースに参加することさえできなかった。

いまも韓国は政治の国である。いや政争の国である。全斗煥や盧泰愚・元大統領にいったんは死刑あるいは懲役刑を下さねば気がすまず、金泳三や金大中・元大統領の息子たちもいったんは獄に繋ながれた。

その上に現在の盧武炳政権は、「親日真相糾明法」をつくり親戚縁者の過去まで遡及して政敵を圧迫しようとしており、それでも足りずに「過去清算法」を作って、「漢江の奇跡」をもたらした朴正熙元大統領さえ断罪しようとしている。日本人の感覚ではもう「いいかげん」にしたらどうかと思う。

しかしそれは朝鮮の歴史そのものである。一三九二年に太祖・季成桂が建国してから、日本に併合されるまでの五百年間に、どれだけ多くの党派抗争が起こり、どれだけ多くの王族や士林たちが粛清されたことであろうか。

日本で言えば、室町から徳川幕府の時代に相当する期間。類例として思い浮かぶのは豊臣秀吉が養子秀次を高野山に追放し切腹させたことと、徳川家光が実兄・駿河大納言忠長を甲府に蟄居させた上で高崎で自刃させたことくらいであろうか。

それに対して朝鮮王朝は初代の太祖時代から政敵の殺戮で始まる。余計な議論よりも史実の羅列の方が迫力がある。以下、朴永圭『朝鮮王朝実録』(新潮社)をもとにして年表風にまとめる。

[第一代太祖]明の遼東を攻略するため、威化島に陣をおいていた季成桂は、矛先を変えて高麗の都・開京を陥落させ、一三九二年に季氏朝鮮を建てる。高麗の最後の王に擁立した恭譲王は後に処刑してしまう。

◇第一次王子の乱(一三九八年)　太祖が八男の芳碩を世子に定めたことに反対して、建国の功労者・五男芳遠(第三代太宗)は、異腹の実弟の芳碩と芳蕃および儒教面の建国指導者・鄭道伝などを殺害する。

[第二代定宗]一三九九年、クーデター実行者の芳遠が、時期尚早と見て王位を辞退したので、太祖の次男・芳果が暫定的に定宗となる。

◇第二次王子の乱(一四〇〇年)　太祖の四男・芳幹が起こした反乱を芳遠が鎮圧し、芳幹を配流する。

[第三代太宗]一四〇〇年、定宗は自ら身を引き、芳遠が太宗となる。

◇閔無咎兄弟の獄(一四〇七年)　太宗の世子問題をめぐる外戚・閔氏の反乱。結局、閔氏一族をほとんど自決させる。

[第四代世宗]一四一八年、太宗の長男がいったん世子となっていたが、奇行ありとして廃され、三男の忠寧が世宗となる。ハングルをつくった聖君として知られ、肖像が一万ウォン札に使われている。

[第五代文宗]一四五〇年、世宗の長男が文宗となるが、在位二年で病死。

[第六代端宗]一四五二年、文宗の唯一の子が十一歳で端宗となる。

◇癸酉靖難(一四五三年)　幼い端宗に代わって、文宗の遺命を受けた金宗端や皇甫仁などが執権するが、世宗の次男・首陽大君の勢力に対抗するため、世宗の三男・安平大君と組む。これに対して首陽大君が起したクーデターで、金宗端・皇甫仁など多くの大臣たちを惨殺し、実弟の安平大君を自決させる。そしてその後も端宗をとりまく実弟・錦城大君や王族、宮人、官人を配流に処する。

[第七代世祖]一四五五年、首陽大君が王位を簒奪して世祖となる。

◇端宗復位運動(一四五六年)　端宗の復位を計画した集賢殿出身の学士たち十七名を処刑、その後、配流していた錦城大君を殺害し、端宗に死薬を与える。

[第八代睿宗]一四六八年、世祖の次男が睿宗となるが在位一年で夭逝。

◇南怡の謀反(一四六八年)　世祖治世下で武人として実力を蓄えた南怡に対して、世祖の遺臣の申叔舟(ハングル創成の中心人物で、日本にも来たことがあり『海東諸国記』を編んだ)たちが、柳子光の計略を入れて謀反を起させ、武人官僚を約三十名を処刑し、その一族を奴婢に落とした。

[第九代成宗]一四六九年、世祖妃の貞熹王妃は、夭逝した長男・懿敬世子の次男で十二歳の者乙山君を成宗として王位に就ける。

◇亀城君の配流(一四七〇年)　幼い成宗の即位は、端宗の場合と状況が似ていて、実力者となっていた世宗の四男の息子・亀城君に対する警戒が必要であった。そのため先手を打って亀城君を執拗に弾劾し配流してしまう。

◇尹妃の廃妃(一四八二年)　第十代となる燕山君を生んだ尹妃は嫉妬深く、成宗の顔に爪で傷つけ廃妃されたが、その後の処遇を巡って政争が起こり、ついに尹妃は死薬を与えられる。これが後の甲子士禍の原因となる。

[第十代燕山君]一四九四年、成宗が後継に望んだ晋城大君は、まだ六歳で現実的ではなく、既に世子の地位にあった燕山君が廃妃の子であるが王位につく。稀代の暴君として知られる。

◇戊午士禍(一四九八年)　成宗は世祖時代の功臣(勲旧派)に対抗するため、性理学(朱子学)の士林勢力を引き入れる。その代表格が金宗直である。ところが燕山君時代になると柳子光を中心とする勲旧勢力が、金宗直の書いた「弔義帝文」を見つけ、これが世祖の王位簒奪を非難するものだと反撃にでる。これに学問嫌いの燕山君がのり、故人となっていた金宗直を「剖棺斬屍刑」に、その門下生を「凌遅処斬」の極刑に処し、多くの士林たちを配流、左遷してしまう。

◇甲子士禍(一五〇四年)　戚臣勢力の任士洪が勲旧派と残存士林派を一挙に除去しようと考え、燕山君に実母の廃妃賜死事件の真相を知らせたことから生じた事件。燕山君は、まず成宗の妃・厳貴人と鄭貴人を宮中の庭で斬殺し、鄭貴人から生まれた弟の安陽君、鳳安君を配流し死薬を送り、ついには祖母の仁粋大妃を撲殺してしまう。そして廃妃賜死に賛成した者を徹底的に探し出し、三十名以上を残酷な刑に処し、子供や家族にまで累をおよばせた上に、故人の場合は「剖棺斬屍刑」に処した。

[第十一代中宗]一五〇六年、中宗反正で成宗の貞顕王妃の長男・晋城大君が中宗となる。

◇中宗反正(一五〇六年)　燕山君は学問を嫌い、学者を排斥し、気に入らない臣下を殺し、各地から美人を集め侍らせ、伯母にあたる美人の朴氏夫人を宮中で暴行して自死に追いやるなど異様な行動のため、成希顔や朴元宗(朴氏夫人の弟)のクーデターで王子の身分に落とされ、江華島に流され、二ヵ月後に死亡する。

◇己卯士禍(一五一九年)　勲旧派によって推戴された中宗は、かれらの過大な勢力膨張を防ぐため、士林派の巨頭・趙光祖を起用した。しかし趙光祖の過激で性急な改革は、勲旧派を追い詰め、ついには中宗まで圧迫するようになり、中宗は逆に趙光祖などを自決させ、数十人を配流してしまった。

[第十二代仁宗]一五四四年、二十九歳で即位した中宗の長男・仁宗は己卯士禍の際に被害にあった士林派の名誉を回復するが、わずか九ヶ月の在位で死亡する。義母の文定王妃による毒殺説もある。

[第十三代明宗]一五四五年、文定王妃から生まれた中宗の子・慶源大君が十一歳で明宗になる。

◇乙巳士禍(一五四五年)　仁宗の生母である章敬王妃の弟・尹任やその一派を除くために、文定王妃の弟・尹元衡一派が仕組んだ粛清で、成宗の三男・桂林君や尹仁など十名を自決あるいは処刑し、彼らの家族や一派の士林勢力を配流した。

◇良才駅壁書事件(一五四七年)　これも尹任一派の残党狩りで、中宗の八男の鳳城君を自決させ、尹任の親戚の季約寿などに死薬を下し、士林系人物を二十余名配流したほか、あいまいな理由で多くの人びとを殺した。

［第十四代宣宗］　一五六七年、明宗に嫡子がなかったため、中宗の庶子・徳興君の三男で十五歳の河城君が宣宗となる。初めての庶出の王であり、外戚がなかったことと、宣宗が性理学の信奉者であった関係で、千ウォン札の季滉(退渓)や五千ウォン札の季珦(栗谷)を国師として待遇し士林勢力を重用する。

◇己丑獄事(一五八七年)　士林派の重用は士林派内に西人(主気哲学的な季珦の畿湖学派)と東人(主理哲学的な季滉の嶺南学派)の対立をもたらした。その最初の大事件が東人・鄭汝立の謀反容疑で、西人の巨頭・鄭澈によって、東人派は杖殺などを含め千人近くが粛清された。

◇世子問題の抗争(一五九一年)　こんどは逆に鄭澈が、宣宗の世子問題をめぐって、東人派の李山海の計略にかかり、流血の粛清にあい西人派は失脚する。しかし東人派もこの粛清過程をめぐって、過激派の北人派と穏健派の南人派に分裂し、さらに北人は小北と大北に、大北は骨北、肉北、中北の三派に分裂する。一方の南人は西人に近づく。

◇壬辰倭乱および丁酉再乱(一四九二～一四九八年)　日本の情勢をさぐるため送られた西人派の正使・黄允吉は豊臣秀吉が必ず侵攻してくると報告したのに、東人派の副使・金誠一は侵攻の兆しはなく、秀吉は恐るにたらぬ人物と報告した。この時は、世子問題で西人派が失脚した直後であり、朝廷は金誠一の意見を採る。党派抗争の弊の典型であった。戦争中に宣宗の庶出の臨海君(長男)と順和君が加藤清正の捕虜となっている。

［第十五代光海君］　一六〇八年、壬辰倭乱後に宣宗が没すると、庶出の次男・光海君が即位する。庶出の長男・臨海君は粗暴との理由で除かれ、嫡出の永昌大君は宣宗の望みにもかかわらず三歳では現実性がなく対象とならなかった。

◇臨海君殺害(一六〇九年)　光海君は王位継承に反対した小北派・柳永慶を殺害する一方、王位の障害となる同腹兄の臨海君も殺してしまう。

◇金直哉の獄事(一六一二年)　永昌大君を支持する小北派が、光海君と大北派を除こうとしているとの疑いがかけられ、虚偽の自白を強いられたことから大規模な獄事に発展した。この獄事で宣宗の孫の普陵君(順和君の子)や金直哉などが処刑されたほか百余名の小北派が粛清された。

◇七庶の獄・癸丑獄事(一六一三年)　有力者の庶子たち七人が起した殺人強盗事件が政争に利用され、永昌大君の生母の父・金悌男が自決を命じられ、翌年には八歳の永昌大君が蒸し殺しにされてしまった。この事件で西人派・数十人投獄され、壊滅的な打撃を受けた。

◇申景禧の獄(一六一五年)　申景禧が謀反を起すに際し、綾昌君を推戴しようとしたという理由で綾昌君を配流

後、殺してしまう。綾昌君は宣宗の五男の定遠君の子で、後に仁祖となる綾陽君の弟。

［第十六代仁祖］光海君は王権強化のため、王位を脅かす人物を全て除去するのに成功したが、宣宗の王妃であった仁穆大妃の尊称まで廃して西宮に幽閉してしまう。そのことが、かえって反正の名分を与えてしまった。外交政策面で新興の金(女真族)に現実的な対応をとる光海君に対し、「親明背金」を採る西人派の巻き返しでもあった。一六二三年、宣宗の孫・綾陽君が仁祖となる。

◇仁祖反正(一六二三年)　綾陽君が西人派と起こしたクーデター。光海君を捕らえ江華島へ配流する。この結果、西人派が第一党、南人派が第二党になるが、地方には実力ある北人派が残る。

◇李　の乱(一六二四年)　西人派が仁祖反正後も残る北人派の勢力を殺ぐ目的で、金(女真族)へ備える北方守備の任にあった李适に謀反の疑いがあると上疏した。そのため、謀反の疑いが、ついに実際の反乱にまで発展してしまい、一時的とはいえ李适がソウルを占拠するほどの勢いであった。この時、西人派は獄に閉じ込めていた大北派を数十人処刑してしまう。

◇丁卯胡乱(一六二七年)丙子胡乱(一六三六年)　金清の侵攻により、仁祖は最終的に清に降伏し三田渡で屈辱の城下の盟の礼を行う。当時の西人派が大明事大主義に陥り国際情勢を読み取ることができなかったことに原因がある。ここにも党派抗争の弊がでた。

◇昭顕世子の死(一六四五年)　丙子胡乱で清の人質となった昭顕世子と鳳林大君は対照的な反応を示す。昭顕世子は清で西洋文明に触れて親清的になり、清との円満な関係を持つようになる。そのことが三田渡の屈辱でますます反清的になっていた仁祖との対立を生み、仁祖は清が昭顕世子を王位につけるのではないかと恐れるようになった。その結果、昭顕世子を毒殺し、その妃一族を配流した上で、さらに妃にまで死薬を下し、彼らに仕えた宮女たちまでも杖死させてしまう。そして反清的な傾向を強めた鳳林大君を世子とする。

［第十七代孝宗］一六四九年、仁祖の次男・鳳林大君が孝宗となる。

◇金自点の謀反(一六五一年)　孝宗となった鳳林大君はますます反清的な性向を深め、北伐のための軍事力増強に乗り出す。そのため親清派が除去されるが、その過程で金自点が反乱を起す。彼は息子たちとともに死刑となり、仁祖の後宮の趙夫人にも死薬が下される。

［第十八代顕宗］一六五九年、孝宗の嫡男が顕宗になる。

◇南人派と西人派の礼論政争(一六五九～一六七四年)　顕宗の時代は礼論政争に明け暮れる。まず孝宗の服喪期間をめぐって大論争となる。これは本来なら長男の昭顕世子の系統に王位を継ぐべきなのに、次男の孝宗が

継いだことによって生じた混乱で、それぞれの主張は党派の正当性ともからみあい、極端な感情的な対立を生んだ。この政争は孝宗の妃・仁宣王妃の死の時も、顕宗の死の時も繰り返された。

[第十九代粛宗] 一六七四年、顕宗の嫡男が粛宗となり、王権を強化するため故意に換局政治を行い、各派を操った。

◇庚申換局(一六八〇年) 軍需物資のテントを南人派が勝手に使っていたことを咎めて、南人派が占めていた軍権を全て西人派に与え、南人派を大量に殺害し配流した。この結果、西人派が政権を執るが、その西人派も南人派に対する処分をめぐり、強硬派の老論派と穏健派の小論派に分裂する。

◇己巳換局(一六八八年) 粛宗が後宮・張氏の生んだ庶子・昀を世子にし、仁顕王妃を廃妃にして、張氏を王妃とようとしたことに対して、西人派、特に老論派が強く反対した。その結果、反対した首謀者たちは捕らえられ、政権は再び南人派に渡った。

◇甲戌換局(一六九四年) 粛宗が仁顕王妃を廃妃としたことを後悔しているとの情報に西人派が動いた。それを察知した南人派が西人派の完全な駆逐の機会として粛宗に報告した。しかし粛宗は南人派がこれ以上強大になるのを警戒し、かえって南人派を追放し、仁顕王妃を復位させ、張氏をもとの嬪に落とし小論派を復活させた。

◇巫蠱の獄(一七〇一年) 仁顕王妃が亡くなった時に、嬪におとされていた張氏が、仁顕王妃を呪詛しようとしていたことが判明する。粛宗は張氏に死薬を下し、彼女の兄を処刑しようとするが、小論派は張氏が世子・昀の生母であることからこれに反対する。その結果、小論派は除けられ、また老論派が政権を握る。しかし時間の経過とともに、世子を支持する小論派が巻き返し、再び対等な勢力関係となって行く。

◇世子問題論乱(一七一七年) 世子・昀は病弱無子の身体であったため、粛宗は崔氏から生まれた延礽君を世子に据えることを意図し、延礽君を世子代理聴政とした。このため世子・昀を支持する小論派と延礽君を支持する老論派の間で党争が激化する。

[第二十代景宗] 一七二〇年、党争激化の最中に粛宗が亡くなり昀が景宗となる。

◇辛壬士禍(一七二一～一七二二年) 景宗は病弱で政治を執れないことで、老論派の主張を入れて延礽君を世子に決めた。しかし老論派はそれでは満足せず延礽君の代理聴政を強硬に要求する。これに対して小論派が上疏し老論派を一掃する。そればかりでなく、かって世子時代に景宗殺害計画があったとして、四大臣を自決させ、百名近くを処刑し、配流した者も百名以上にのぼった。生母に死薬を与えるのを傍観した老論派への仕返しであった。

[第二十一代英宗] 一七二四年、延礽君が英宗となる。

◇乙巳処分(一七二五年) 景宗の時代に、用心深く振舞って生き延びた英宗は、各派の人士を公平に取り扱う蕩平策をとり、報復的なことはあまり行っていない。しかしそれでも老論派の上疏を受けて、辛壬士禍をおこした小論派領袖・金一鏡などを処刑し、大臣たちを追放している。

◇李麟佐の乱(一七二八年) 政界から追放された小論派の一部と南人の過激派が連合して、武力で政権を奪取しようとした事件。乱後、小論派が勢力を弱めたが、そのことでかえって蕩平策が順調に進むようになる。

◇荘献世子事件(一七六二年) 英宗が健康上の理由で荘献世子に代理聴政を命じると、また世子を取り巻く南人派、小論派、小北派とそれに反対する老論派との対立が生じ、継妃たちによる世子と英宗の離間工作が生まれる。荘献世子にも宮女を殺すなど異様な行動があり、非行を訴える上疏によって、英宗は荘献世子に自決を命じ、それに応じないと米櫃に閉じこめ餓死させてしまう。原因は老論派と小論派の党派争いにあった。

[第二十二代正祖] 一七七六年、荘献世子の子が正祖となる。父親の餓死で党争に嫌悪感をいだいた正祖は、英宗の蕩平策を受け継ぎ王権を強化するが、党争は四党派争いから時派(時流に迎合する南人派と小論派および一部の老論派と僻派(時流に乗らぬ老論派)の葛藤という新しい展開をもたらす。正祖の考えに沿う時派が勢いを得たが、カトリック問題で、僻派が巻き返しを図り、実学者・丁若鏞(筆者が最も尊敬する学者)らを左遷してしまい、近代化に乗り遅れてしまう。

[第二十三代純祖] 一八〇〇年、正祖の嫡子が夭逝したため、次男が十歳で純祖となり、英祖の継妃・貞純王妃が垂簾聴政を行うようになる。貞純王妃は荘献世子の非行を英宗に告げた人物で、僻派を強力に支持しカトリックを排除する。時派にカトリックが多かったためである。

◇辛酉迫害(一八〇一年) 貞純王妃がカトリック禁止令を出し、連座制を採用して大規模なカトリック迫害を行い、殉教者や犠牲者が八百名以上にものぼった。南人派や進歩的な人士を除去するための政治的な一大粛正の面もあり、丁若　の兄弟たちも殺されたり配流された。

[安東金氏の勢道政治] 一八〇五年、貞純王妃の垂簾聴政が終わると、娘を純祖の妃に入れた安東・金氏の勢道政治が始まり、これが第二十四代憲宗、第二十五代哲宗を通じて、六十年間も続く。この間は、党争もないが反対派もない独裁政治で、官僚社会の腐敗と社会の疲弊を生む。その間にも、西北人差別と勢道政権への反発から没落両班層と新興社会層が起こした洪景来の

乱(一八一一年)などがあるが、この乱は後に農民蜂起の性格を帯びて朝鮮社会の崩壊を加速することになった。そのほかにもカトリック迫害やいくつかの反乱が起こっているが省略する。

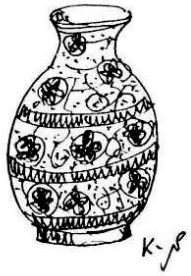
政争の歴史の紹介が長くなり過ぎてしまった。王位継承と複雑に絡み合った党派の盛衰は、とてもこの程度の整理では判るものではないが、韓国が政争の国であったことだけは理解していただけたであろう。

いま盧武炳政権は四大法案すなわち言論改革法、私立学校改革法、過去清算法、国家保安法廃止の成立を強行に推し進めている。いずれも民主化の流れに沿っているかのようではあるが、その裏には過去の政敵に対する牽制や報復が見え隠れしている。

このような国がらであるから、小泉首相の靖国神社参拝問題などで、政治家が多少ゆるい発言でもしようものなら政治生命を失ってしまう恐れがある。しかし内心では「いいかげん」にしたいと思っている人達が増えているのも確実であり、韓国は急速に変わっている。

むしろ小泉首相の方が、日本人らしくなく原則にとらわれて、靖国参拝を繰り返しているようにも見える。日本人ならもっと「いいかげん」な対応の方がふさわしいと思うのだが。田中角栄元首相は意表をついて中国との復交をはかっていたではないか。

だから、小泉首相はある意味で韓国で人気がある。現実主義者は憎まれるが、理想主義者や原則主義者はむしろ敵から愛される。



焚き火

―大林和光君のこと―

大和禎人

(刺を通じる)という言葉は名刺を出して挨拶をするというほどの意味に使われる。わが大林和光君の場合、それが一風変わっていて、

「これ使って呉ませんか」

「おやおや、いいのこんな貴重なものを」

柱掛けのかなりの長さの鏡だった。バイエルの社名入りの鏡なのである。つまり彼の勤め先のコマーシャル入りというものだった。この外国薬品の商社は当時博多駅に近い呉服町に店があって、彼はそこの社員であった。折から戦時下、同盟国だったから、この外国商社の存在は無事を得ていたのだ。

下宿仲間は八室八人、県庁、保険局勤めなど馴染みがたい連中だったが、一号室の彼は異色の尺八青年としてかねて関心を寄せていた。一室を隔てた三号の私は彼の調べを耳に、(変わった青年もいるものだな)とほどほどに興味をもっていたのだ。奇妙なこの贈り物をうけとったことで私は年少の友を得ることになった。

和光君は尺八のただならぬ名手であった。普化尺八の言いがあってみれば、仏門と無縁ではないはず、はたして彼は讃岐の梵刹(ぼんさつ)の次男坊と聞き及んだ。

半音刻みで竹管は長短さまざま、いずれも指穴は前面四孔、背面一孔。指孔の半開などによった音の高低微妙な変化が導かれる。和光君の嗜みは六段はもとより、俗曲におよんで、興のまま佐渡おけさ、時局がら軍歌の愛馬行進曲などにおよぶのであった。彼に学んで私もと思って手ほきを請うこともあったが、とうてい及ぶ技ではなかった。一音も吹鳴し得ず諦めている。

私たち二人は急速に親密を通じるようになった。

ほど経た後日、和光君の誘いがあって、日帰り阿蘇登山の挙に及んでいる。彼のだしぬけの提案であった。

「日帰りなんて無茶だよ、きみ」

「いや、大丈夫、ちゃんと列車時刻表をあたってあるか

ら、まかしてください、そのかわり早起きをして熊本行きの一番列車に乗るんです」

彼の果敢、行動的なプランに私は従ったのだ。二人とも若さにまかせた冒険旅行であった。今にして思えばこの際に、同君が阿蘇行きに猪突した心のうちを察するなら、間もない召集への危機感にせきたてられた事情が考えられる。火の国の象徴を極めたかったのであろう。

それから幾日も経ないある日、彼は私の部屋を訪れ、窓辺に腰をかけ、黙々として例の愛馬行進曲を奏鳴し、やがて一曲を終わると、

「ボクもとうとうお別れの時がきました」

静かな一言が彼の口からもれた。

「そう、とうとう君も、大変だね、残念だな」

「いえ、覚悟はしていました、……、お別れに愛馬をもう一曲だけ聞いてください」

そう言ってふたたび尺八を口にあてた。洒脱な例の技である。なぜ彼は軍歌氾濫の時代にとくに愛馬行進曲を好んで選ぶのか、和光君の心情を察するなら、歌詞の内容そのものが、もの言わぬ戦士である馬匹であり、情を交わす人馬、そしてそのメロディーには深々と聞く者の心に響くものがあった。

昭和十三年、陸軍馬政局の公募に応じ入選した作詞の久保井正夫氏は琴平の人、白秋門下の歌人であり、和光君に同じ四国の人という縁があり、新城正一氏の作曲もまた余韻嫋々、人馬の情を通わせる哀感が主流であった。好んでこの曲を選ぶ彼の優しさが思われ、幾千と数知れず無言犠牲の軍馬を慈しみ、また一方、(お前らは一銭五厘の令状でたやすく集められるが、軍馬はそうはいかん)こんな侮辱に耐えた兵士の身にも思いを馳せる異色の歌詞だった。和光君の共鳴はその辺だったろう。

(涙ぐみてあり、讃岐丸亀の人発つ)

彼は現役兵として善通寺の西部第三十九部隊に入隊する予定であった。

私は博多駅まで見送った。

彼は家郷の丸亀にまずむかったはずであるが、その途次一通のはがきを私に寄せている。消息によると、数日を費やして、札所めぐりをしているようで、吉野川の河原に野宿したとあり、焚き火をして夜露をしのいだという一節に心をうたれた。月下に彼は尺八を唇にあてたのであろうか、火むらの傍に立つ青年の像が泛かんで消えた。勇を鼓して入隊に向かう旅路の彼を私は思わずにはいられなかった。

(H一六・一二・一二)

還暦からの考古学(1)

伊場遺蹟出土の物差しと伝伊場遺蹟出土の小銅鐸

中山喬央

物差し

「え!伊場遺跡で物差しが出土していたのですか!」思わず新井宏氏に聞き返していた。平成十六年十月二十七日、史遊会の十月例会において同氏の「わが旅路、古韓尺への凱旋」の講演を聞いた直後の同氏と三戸岡道夫氏の会話を聞いた時のことである。其の後の二次会で、この説は従来いわれていた高麗尺・東魏尺を完全に否定するものであるとの説明を受けますます興味が湧いた。

翌日は早大オープンカレッジでのハングル語講座受講日で、授業終了後中央図書館に入り該当する発掘調査報告書を確認(一、二五頁・四八頁)、コピーを新井宏・三戸岡道夫・鯨游海の三氏に送付する。折り返し鯨游海氏よりは、学士会会報に掲載されたばかりの、川端俊一郎氏による「法隆寺の物差しは中国南朝尺」という題名の論説を送っていただき、中国側から考えた場合の異なる見方につき、面白く拝読した。

其の後新井宏氏よりも「古代結負制の復元と代制の起源」「三国史記・遺事の記事による新羅王京の復元と古韓尺」「高麗尺説論拠の綜合批判—古韓尺説との関連で—」「古墳築造企画と代制・結負制の基準尺度」の論文と『考古学雑誌』八八巻に掲載される「古墳築造企画と代制・結負制の基準尺度」抜刷をご恵送いただくと共に、古韓尺の物差しが扶余官北里の百済王宮地にある蓮池の干拓地より出土し、二六㎜の目盛とあるが、木材等は劣化すると縦方向で二%くらい収縮するので、その尺長は二六・五㎝程度であったと考えていること及び、韓国で統一新羅以前の物差しとしては、これを含めて三本が出土しているが、他の二本はすべて唐尺二九・五㎝である旨ご教授をいただいた。

新井論文の特色は、先ず日本列島と朝鮮半島に遺存する古代建造物等の計測値につき、コンピュータを利用し

て同氏が帰納的に求めた尺度を古韓尺（二六・七～二六・八cm）とし、四世紀から八世紀の日本列島と朝鮮半島で、そのシステムすなわち尺（二六・七cm）、歩（6尺―一・六m）、量田歩（三歩―四・八m）、里（三百歩―百量田歩―四八〇m）の計量制度が行われていたとの新説を唱えたことである。

同氏のこの説は近日中に『考古学雑誌』と『朝鮮学報』に掲載される予定であるが、特に焦点となっていると考えられる高麗尺・東魏尺との対立については、未だ勉強不足なので日を改めて考えてみることとしたい。

いずれにしても、どのような尺度が採用されていたのかを研究する為には、文献史料、物差しに代表される遺物、及び遺構、遺蹟と古代建造物等の詳細な調査が必要である。

人類は、長さを測るためにまず体の一部を単位とした。エジプトでは、腕・掌・指を単位としていたが、BC三千年頃から木や石の尺（六七・一～六八・一cm）を用い、二十八等分して寸とし、又その寸を二等分三等分から十六等分した目盛のある物差しが出土している。

一方中国では、中指と親指の股を単位とし、また歩幅を重ねて単位としていた。物差しとしては殷墟（殷、BC一六〇〇～BC一〇二七）出土の骨尺が一六・七九cmのものを十等分して寸を刻んでいるのが初見である。寿

県楚墓出土の銅尺は二二・五cm、洛陽金村戦国墓（戦国、BC四〇三～BC二二一）出土の銅尺は二三・一cmで後者は側縁に寸を刻んでいる。前漢（BC二〇二～AD八）の物差しと考えられているのは、長沙墓出土の二三cmのもので、幾何学文、龍鳳文を鋳出している。後漢（AD二五～二二〇）初頭の使用と思われている敦煌烽台出土の木尺と木杖は、共に一尺二二・九cmである。後漢の代表的な官尺と考えられている建初銅尺は二三・五二cmで、寸分を刻んでおり、背に「慮俌（山西省の県名）建初六（AD八一）年八月十五日造」と整然たる小篆の文字がある。

新（AD八～二三）の王莽の時代は、官制の度量衡が多いが、殆ど始建国元（AD九）年制である。銀象嵌で「始建国元年正月癸酉朔日制」の文字があるノギス形の尺は、なかに四寸の刻みがあり、各寸は二・四cmである。しかし北京の新故宮博物館にあった新嘉量から計算した一尺は二三・〇八cmで、これとは異なっている。

一方官尺ではないが牙尺は変化が少なく、白鶴美術館の流雲文が美しい彩画牙尺は二三・一〇cm、トルコ石を象嵌し、緑色に染め、紅黒紫の三色を塗り龍形を描いた、伝洛陽晋公主墓出土の牙尺は二三cmである。

又長沙出土の銅尺には、二四・四cmに及ぶものもあり、あるいは南北朝期（AD四三九～五八九）にさがるかもしれない。

『隋書』律暦志によると次第に長くなり、その中の最長尺は東魏尺（東魏AD五三四～五四九）の三〇・〇三四cmである。

北周は、建徳六（AD五七七）年劉宋尺を以って鉄尺（二四・五六cm）を作って律を調し、後魏後尺を以って市尺（二九・五七cm）とした。これが大尺小尺併用制の始まりとなる。

隋（AD五八一～六一八）、唐（AD六一八～九〇七）は、共に大小尺があり、一般には大尺である開皇官尺（二九・五七cm）が使われた。

上海博物館の鏤牙尺は三〇cm、寸ごとの刻みがあり、微細な線で宝相花、鳥文、堂宇などを両面に彫っている。白鶴美術館の撥鏤牙尺は三一・二cm、鍍金花鳥文の銅尺は三〇・二～三一・四cm、貞元十二（AD七九六）年墓出土の花葉水雲文の銅尺は三一・五cmあり、みな唐の大尺である。

宋（AD九六〇～一二七九）尺は、河北省鉅鹿から粗末な木尺が三本出土しており、三〇・九～三一・九cmで、寸または寸分を刻んでいる。

其の他「大明嘉靖年（AD一五二二～一五六六）制」の文字がある牙尺があり、三一・七cmで、両面に小銅釘をうって寸をあらわしている。ほぼ営造尺の三一cmに合致している。

我国では、正倉院に伝わる紅緑白の牙尺四と、法隆寺の紅牙尺は、みな唐制により二九・三～三〇・四cmで、唐尺よりやや短かったと思われる。

しかし大宝律令以前は高麗尺が使われ、令注によると大尺の十二寸であったというから、三六cm位のものになる。又諸寺には律尺を伝えているが二三～二五・四cmである。実用ではなく儀物で、小尺の名残であろう。大尺は、其の後あまり変化無く今日の曲尺三〇・三〇三cmになっており、裁衣の鯨尺は曲尺の一二・五寸（約三七・九cm）で、明の裁衣尺三四・五cmに由来するといわれている（二、九六七頁・九六八頁）。

静岡県川合遺蹟出土の物差しは大小二本ある。包含層Ⅲ層出土のものは小型で、時期的には平安後期に属するが、断面が隅丸方形状を呈する丁寧に面取りされた棒の一面に、断面薬研状の目盛を、ほぼ等間隔に刻んでいる。目盛の間隔は一・一～一・三五cmで、平均は一・一九五cmである。目盛の一つには、×印となるように刻みが加えられており片方が欠けているが、完形で出土した大型の物差しからみると、この部分が丁度真ん中にあたるものと思われる。そして実測図から、欠けていない端から真ん中まで十一等分されていることが分かるので、一・一九五cmを掛け二倍すると全長は二六・二九cmとなり、新井宏氏の述べている古韓尺の長さとほぼ符合する。

次にⅣ層低地部分（奈良～平安、あるいは古墳時代後期）出土の大型のものは、全体の長さは概ね一尺（三二・二cm）であるが、断面長方形の両端に行くに従って若干

幅を狭める棒の一面に刻みを入れて目盛とし、これを十等分している。中央の目盛には直交して十文字になるよう刻みが加えられている（三、一〇頁・六五頁・六七頁・六九頁・七二頁・一〇五頁）。

浜松市伊場遺跡出土の物差しは、断面半円形を呈する材の上面に、ほぼ等間隔に刻線をつけたものである。一端を欠くが現在長二二・九cmで八箇所に刻線がある。目盛幅は最長二八㎜、最短長二六㎜で、他はこの間に平均してばらついている。奈良時代のものである（一、二五頁・四八頁）。更に二〇〇二年には実測図が描かれた報告書が刊行されたが、その中の記載は「物差しは一点（八世紀代）が出土している。長さは二二・八cm、幅一・五cm、厚さ〇・九cmで檜製である。二・六～二・八cm単位の刻線がある」と記されている（四、二六頁・六〇頁・九九頁）。

この物差しについては十一月二十六日小学校同窓会参加のため浜松を訪問した際、浜松市博物館を訪問、担当辰巳均氏のご好意で見せていただくことができた。また実測図についても報告書の該当部分をコピーしていただいた。物差しは二箇所で折れており、片方は欠けていたが、一方は完存しており、目盛の刻みも分かった。新井宏氏が作成した全長二二・九cmの実測図によると、八つの目盛の間隔の平均値は二・六七四cmであり、川合遺蹟出土大型物差しの例からみても、十等分されていた可能性があるので、物差しの長さは古韓尺と一致する二六・七四cmとなる蓋然性が高い。

又この際展示室入口に、伊場遺跡出土のものとして、小銅鐸が展示されており、これに関する情報が求められていたので辰巳均氏にお話したところ、後日小銅鐸担当の太田好治氏より神奈川県下の小銅鐸に関してのお問い合わせをいただき、手許にあった海老名本郷遺蹟出土小銅鐸のレプリカに当該報告書のコピー及び、かって早大修士論文提出時に小銅鐸を八点実地調査したので、その記載を含んだ修士論文の該当個所をお送りした。又十二月四日の考古学研究会東京例会において浜松市博物館・佐藤由紀男氏におめにかかったので、新井宏氏の新説をお話すると共に小銅鐸の件についてお伺いしたが、同氏よりこの小銅鐸は正式の伊場遺跡出土のものではなく伝として取り扱う方針である旨、ご教授をいただいた。

次に東魏尺（高麗尺）、晋尺、唐尺について若干説明する。

東魏尺は高麗尺ともいい、中国東魏の孝静帝の天平三（AD五三六）年に制定されたもので、高句麗の影響も受けており、高麗尺の名前はここからきている。日本列島では大化の改新前はもっぱらこの尺度が使われた。現行の三五・六cm（一・一七六尺）にあたる。古墳墳丘などはこれによったとの説もあるが、東魏尺の定まった時との関係を考えなければならない。又関野貞氏が法隆寺非再

建論で、堂塔の柱間がこれによったとすることを一つの傍証とした事は有名である（五、三一一頁・三一二頁）。

中国東魏考静帝の天平三年に決められた尺度で、高句麗とも関係が深いところから高麗尺とも呼ばれる。東魏尺の一尺は三五・六cm（一・一七六尺）に当り、日本の古墳墳丘尺度論に問題とされるが、いまだに定説化していない（六、二三二頁）。

晋尺とは、中国古尺のなかで晋代に作られた尺度である。晋の泰治一〇（AD二七四）年に荀勗（ジュンキョク）がつくった律尺（晋前尺）は音律を調えるものであった。晋代の実用尺度は次第に変化して、東晋代の晋後尺は、一尺が二四・五六六三二cmであった。晋尺は一般的に二四・五cmと考えられ、日本列島の古墳時代に一部用いられたとする説がある（六、一六一頁）。

唐尺は令制に基づくもので『続日本紀』大宝二（AD七〇二）年三月の「初めて度量を天下に頒つ」により用いられた。尺には大小の二種があり、大尺は小尺の一寸二分にあたる。このうち小尺は和銅六（AD七一三）年二月『続日本紀』度量衡の改正に伴い廃止される（五、一九七頁）。

唐尺は中国唐代に制定された尺度で、一尺は二九・五七～三一・五cmにあたる。古代日本でも古墳時代の東魏尺（高麗尺）に続いて、令制以後は唐尺が用いられた。『続日本紀』大宝二年に「度量を初めて天下に頒つ」と記され

れており、天平尺ともいわれた唐尺（大尺）が用いられた。唐尺の小尺は東魏尺同様一・一七六尺（三五・六cm）であったが、和銅六年に廃止された（六、二三四頁・二三五頁）。

最後に古墳作成の基準になる尺度の選定について述べる。

尺度を選定する為には対象物の寸法が確定されていなければならない。しかるに現存大型古墳で完全に発掘調査された例は少なく、従って長さも確定していないものが大半である。

例えば最初の大型前方後円墳として万人が認めている箸墓古墳については、全長二八〇mの古墳時代前期前方後円墳（七、五五五頁）、主軸全長二七五m、後円部径一五〇m（八、四六三頁・四六四頁）、国立歴史民俗博物館復元案は、全長二七六m、後円部径一五六m、寺沢薫氏の案は、推定規模全長二九〇m、後円部径一六五m（九、一四一頁）と定まらず、二〇〇四年十二月四日の考古学研究会東京例会における新納泉氏の発表においても、近藤義郎氏の前方後円墳集成を引用して全長二八〇mとしている。又今回ご送付していただいた新井宏氏の抜刷は後円部径が一六一mとなっている。

このような現状であるから、古墳尺度の選定は慎重に考えなければならないと思っている。

小銅鐸

遠江は三遠式銅鐸の中心地で、それは三遠式という型式名そのものが、三河と遠江の頭文字から採ったことからも明らかである。

一方小銅鐸は西遠江では出土していなかったが、本年九月、浜松市在住の人から伊場遺跡群の発掘調査が本格化する以前、昭和二十八～三十年ごろ出土したものが、周囲で見つかった弥生土器と共に浜松市博物館に寄贈された。正確な出土位置は明確でないが、弥生時代の環濠から出土したものと推定されている。この小銅鐸は高さが七・八㎝、重さが八四・五ｇ、型持たせ孔の位置、両面貼り合わせの鋳型など、銅鐸の作り方を踏襲しているようにも見えるが無文である（十）。

まず銅鐸について述べる。

佐原真氏は朝鮮小銅鐸を祖形とし、弥生時代前期後半に製作が開始されたと考えている。すなわち朝鮮の小銅鐸に鋳型の合わせ目からはみ出た部分を残し、鰭の発生を考えさせるもののあること、日本の銅鐸のうち鰭の狭い古い一群の鐸の形態が、朝鮮の小銅鐸に近いこと、朝鮮の小銅鐸が鋸歯文鏡や、細形銅剣などと伴出することを根拠とした。

一方型式編年につき、銅鐸そのものが吊るして鳴らすものから、飾って祀るものに変化していったとの考えから、鈕の変化に着眼し、鈕がふくらんで菱形をしているものを菱環鈕として最古のものに設定し、次を鈕がふくらんだまま外縁につながる外縁付鈕、三番目が、吊るして鳴らす必要が無くなって、鈕が平べったくなった扁平鈕、最後に鈕を目立たせる為に突線を浮かび上がらせたものを突線鈕として置いた。

そして弥生中期初頭土器の櫛描流水文が外縁付鈕一式銅鐸と関係するところから、それに先行する菱環鈕式銅鐸は、それより古い前期後半に設定した。

田中琢氏も、銅鐸と弥生式土器の文様と原始絵画について比較検討し、佐原真氏の説を補強する形で弥生時代前期の終りごろに製作開始年代を考えている。

一方梅原末治氏は、中国戦国時代（ＢＣ四〇三～ＢＣ二二一）の編鐘にその祖形を求め、それが朝鮮半島を経由する際に朝鮮小銅鐸の祖形になったことを考えた。同氏は朝鮮小銅鐸を馬鐸としているが、狭義の馬鐸は日本列島で四例出土している。

岡崎敬氏も馬鐸を含むセットが対馬で弥生後期初頭から前半に集中することに着目、馬鐸が銅鐸の祖形である可能性を示唆している（十一・十二）。しかし馬鐸は年代的に合わなくなってしまった。

話は変わるが、呪的宗儀発展のなかに銅鐸の歴史を考えた一文がある。

三品彰英氏は、銅鐸に関する記事が古事記、日本書紀を始めとする、神話や古伝説に一切記載されていないことから、銅鐸によって象徴された宗儀が完全に没落したのだと考えた。

そして銅鐸が本来持っていた楽器としての性格に着目し、『魏志韓伝』にみられる韓族の春秋の農耕呪儀に行なわれた鐸舞と結び付け、銅鐸は地的宗儀であり、これが支配者交代による天的宗儀に変更された為、突如として廃止されたのだと考えたのである(十三)。

これは現在諸国の一の宮に祀られている神々が、『日本書紀』神代巻の高天原系の天つ神と、大国主神の国つ神系の二つの神々の系統に分かれていることと思い合わせると興味深い（十四、一九頁）。

銅鐸発見の記録上の初見は、天智七（ＡＤ六六八）年大津京の土木工事中の発見であり、奈良時代には、紫式部が源氏物語を書いた石山寺の創建工事現場から出土して『石山寺縁起絵巻』に宝鐸出現縁起として描かれている（十三、三六二頁）。

次に朝鮮小銅鐸の概要について述べる。

製作上の特徴は、殆どすべてが鋳放しのままで、銅鐸の鰭と同様の形を成す例もあり、他の朝鮮製青銅製品の精緻さとは大きく異なっていることである。これは実用的性格を有していた為と考えられる。

分布は大多数が平壌を中心とする大同江流域であるが、調査の偏在も考えられる。

年代は同一遺蹟で最多の十二個が出土した「夫租蔿君（ツソワイクン）」墓は、夫租が楽浪郡（ＢＣ一〇八～ＡＤ三一三）初期の一県名であり（十五、七五頁）、その設置期間あるいは「蔿君」の名称使用年代から、前漢後半（ＢＣ二〇二～ＡＤ八）～後漢初頭（ＡＤ二五～二二〇）に考えることができる。

又田村晃一氏が、我国銅鐸の祖形とするのに最もふさわしいとされておられる（一六、一七頁）慶州入室里遺跡では、銅剣、鉄剣と共に、小銅鐸七点が出土しており、時期はＢＣ一世紀前半から後半に及ぶものと理解されている（十七、一〇〇二～一〇〇三頁）。

ところが近年の理化学的年代測定法の進歩により、弥生時代の実年代が大きく変わりつつある。すなわち畿内中期末の年代については、光谷拓実氏が行なった年輪年代法により、池上曽根遺蹟の柱材がＢＣ五二年と測定されて、約百年古くなった。加えて最近国立歴史民俗博物館では積極的にＡＭＳ年代による測定を行なっており、昨年九月十三日現在で八五〇点を超えているが、そのうち畿内の弥生前期から中期の唐古鍵遺蹟出土遺物の測定結果をみると次のようになっている。

すなわち前期Ⅰ様式の土坑出土炭化米は二四九〇＋－五〇、中期Ⅱ様式土器付着炭化物は二二六〇＋－四〇、中期Ⅱ様式大型建物ピット出土の枝三点は二二四〇＋一

三〇～二二一〇＋－三〇、同じく中期Ⅱ様式の大型建物ピット出土木材十点の年代が二四八〇＋－三〇～二二五〇＋－三〇となっている。

しかし佐原真氏の弥生前期後半銅鐸成立論の時期は影響されないと判断されるので、銅鐸の中心地である畿内でそれが盛行した時期は、朝鮮半島で祖形になると思われていた朝鮮小銅鐸と同時期か、あるいは銅鐸発生の方が早まる可能性が生じている。

次に日本列島における小銅鐸について検討してみる。

小銅鐸には、小型銅鐸と銅鐸型銅製品があり、後者には銅鐸に先駆けて作られた銅鐸試作品と、銅鐸を真似して作った銅鐸模倣品がある（十一、三八四頁）。

大きさは高さが三・四～一四・二cm位である。

小銅鐸は、朝鮮半島で紀元前四世紀から紀元前後にかけて馬鐸を祖形として作られたものとの考えもあり、半島では副葬品として扱われていたものが、直接渡来人達によって持ち込まれた朝鮮式小銅鐸と、それらを列島で模倣し鋳造した朝鮮式系小銅鐸、畿内を中心に分布する銅鐸を模倣した小型銅鐸及び銅鐸型銅製品に大別され、更に関東タイプと西日本タイプがあるとされた（十八、一一頁）。

そして現在管見している四十八例（十八、一九）のうち、朝鮮式小銅鐸は別府遺蹟（大分県宇佐市）の一例のみで、弥生時代終末期に廃棄された竪穴式住居を利用したゴミ捨て場的遺構から出土しており、伴出の土器などと共に投げ込まれていた（二十、二〇二頁）。

一方朝鮮式小銅鐸を模倣したと考えられている朝鮮式系小銅鐸は東奈良遺跡（大阪府茨木市）他四遺蹟の五例であるが、このうち小銅鐸としては、現在のところ最古の出土例と考えられてきた、東奈良遺蹟のものについて考察したい。

この小銅鐸は弥生時代中期後半の環濠の底から出土しているが、類例のない吊手の形や、弥生時代前期に特徴的な文様、舌のあたる銅鐸内側部分がかなりすりへっていたこと等から約百五十年間六世代にわたって使われていたものとして弥生時代前期末に製作されたものとした。高さ一四・二cm、最大幅九・一cm、舌長八・三cmである。

正面から見た形が四角張るなど韓国大田槐亭洞遺蹟出土の小銅鐸に似ており、鋳造作業で出来る型持ち孔が中央にある朝鮮式の特徴を持っているが、両面に楕円や綾杉文の文様があり、側面からみるとやや裾広がりの列島産銅鐸の特徴も併せ持っている。

一方大田槐亭洞遺蹟の年代はBC四世紀に設定されており（十七、九八頁・九九頁）、この影響をうけたものとすると年代観に矛盾が生じる。加えて周辺で出土した小銅鐸の時期は何れも弥生後期であり、現在の弥生時代の実年代は長期化の傾向が見られることもあり、時期は弥生中期にした方が整合性があると思う。

次に列島における銅鐸と小銅鐸の違いについて考えてみたい。

まず出土時期と地域である。

銅鐸は佐原真氏が述べているように弥生前期後半に畿内で製作が開始され、それが中期に入ると北九州、山陰東海に広がり畿内を中心に盛行する。時期はやや遅れるが東海で三遠式という独自の銅鐸が発生する。そして北九州、山陰ではいち早く消滅し、畿内、東海を中心に弥生後期までは続くが、古墳時代に入ると一斉に姿を消す。

これに対して小銅鐸は弥生中期前半に北九州で発生、最盛期は銅鐸よりも遅い弥生後期で、且つ銅鐸が見られなかった関東地方を中心に、古墳時代前期まで続くのである。

又出土状況をみても銅鐸は殆どが平野に臨む丘陵の、頂上から少し下がった斜面で、山の入口といったところから出土しているのに対し、小銅鐸は墳墓、住居址、井戸、溝状遺構、包含層、表採等様々であり、銅鐸は共同所有、小銅鐸は個人所有ということが考えられる。

これらのことを綜合して判断すると、銅鐸は墳墓における前方後円墳と同じく、列島独自の発生と展開を示した青銅製品であり、それは弥生前期末に突如として畿内で発生したことからも明らかである。これに対し小銅鐸は北九州で発生してから畿内に伝わり、それが関東地方にまで及ぶという東漸傾向が見られ、こちらは中国戦国時代の編鐘等が祖形で、半島・列島にそれが広まった可能性が高い。

これを社会構成の変化とか、祭祀の推移という点からみれば、銅鐸は共同の指導者を必要としたレシプロケーターからエンタプレニュアー時代の社会の産物であり、世襲の権力者としての地位が成立したチーフダムズの時代には不用となったから廃止されたものであり（二十一、三一頁）、一方小銅鐸は権力者に付属した呪術祭祀を営む個人に属したものであったから古墳時代に入っても続いたが、これも古墳時代中期における石製模造品祭祀と交代することになったと考えている。

結び

新井宏・三戸岡道夫両氏の会話のお陰で本文をかくことができた。小生の考古学の原点である伊場遺跡については、従来の西遠江における山中式・欠山式土器のタイプサイトであるとか、弥生時代後期の祭祀遺蹟ではないかとの見方から、広く大陸・半島・列島全体を視野に入れた、尺度とか青銅祭祀の点からも見ることのできる端緒になったのではないかと思っている。特に尺度の問題については、新井宏氏の新説を支える重要な史料が出土しており、又これは同氏の新設のお陰で脚光を浴びる事ができたのである。

古来より大陸・半島・列島における文化の相互交流は活発に行なわれていたと考えており、その実情を明らかにする為には東アジア全体にわたる年代観が必要となる。本文では、半島は文字史料の分析と韓国考古学事典に記載された年代、列島は、国立歴史民俗博物館によるＡＭＳ年代を用い、結果として従来の定説とは異なる結論を出した。先学諸氏のご叱責ご指導を切にお願いする次第である。　以上

参考文献

一、辰巳均「伊場遺跡遺物編」１『伊場遺蹟発掘調査報告書』第３冊・一九七八年

二、水野清一「ものさし」『考古学辞典』・一九九四年

三、静岡県埋蔵文化財調査研究所「川合遺蹟・八反田地区」１『静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告』第三十三集・一九九一年

四、辰巳均「伊場遺跡遺物編８（木製品Ⅱ・金属器・骨角器）」『伊場遺跡発掘調査報告書』第十冊・二〇〇二年

五、斎藤忠『日本考古学用語辞典』・一九九八年

六、大塚初重・戸沢充則『最新日本考古学用語辞典』・一九九六年

七、石野博信「箸墓古墳」『日本古代遺蹟事典』・一九九五年

八、高島徹「箸墓古墳」『日本古墳大辞典』・一九九五年

九、寺沢薫「箸墓古墳築造プランの復元」『箸墓古墳周辺の調査』・二〇〇二年

十、浜松市博物館「伊場遺蹟出土の小銅鐸」『浜松市博物館情報』一五一号・二〇〇四年十月十五日

十一、佐原真「銅鐸の始まりと終りと」『展望アジアの考古学』・一九八三年

十二、高倉洋彰「銅鐸製作開始年代論の問題点」『九州考古学』・一九七三年

十三、三品彰英「銅鐸小考」『朝鮮学報』・一九六八年

十四、入江孝一郎『諸国一の宮』・二〇〇一年

十五、田村晃一『楽浪と高句麗の考古学』・二〇〇一年

十六、田村晃一「朝鮮半島からみた日本の青銅器」『ＭＵＳＥＵＭ』三一一・一九七七年

十七、韓国国立文化財研究所『韓国考古学事典』・二〇〇一年

十八、小山市立博物館『弥生時代の祭祀と信仰―小さな銅鐸が使われていたころ―』・二〇〇一年

十九、富樫雅彦・徳沢啓一「小銅鐸の研究」『国学院大学考古学資料館紀要』十一号

二十、高倉洋彰「九州の銅鐸」『宇佐』・一九七八年

二十一、ＢＲＩＡＮ・ＨＡＹＤＥＮ「ＰＡＴＨＷＡＹＳ　ＴＯ　ＰＯＷＥＲ」『ＦＯＵＮＤＡＴＩＯＮＳ　ＯＦ　ＳＯＣＩＡＬ　ＩＮＥＱＵＡＬＩＴＹ』

（司馬雑感　二）

周作と一堂

山田嘉久

（一）神田お玉が池

「神田お玉が池」といえば時代小説はもちろん映画、講談にまで出てくる幕末における江戸名所のひとつにもなっているが、今はこの地名はない。

今の地名でいうと神田岩本町、東松下町、須田町二丁目あたりに当たるようだ。都営地下鉄岩本町駅の近く、立ち並ぶビルの合間にひっそりと小さな「お玉が池跡」の案内板が建っている。

それによると最初は桜が池と呼ばれたが、ほとりにあった茶店のお玉という女性が池に身を投じたとの故事からお玉が池と呼ばれるようになった。

司馬遼太郎も「街道をゆく（神田界隈）」で平成三年頃、この辺を歩いている。

しかしお玉が池（同書では於玉ヶ池）の名の由来については戦国時代、太田氏が江戸城主だったころに江戸に茶店などあったかどうか疑わしい。むしろこの辺、峠が多くてオタマジャクシがたくさんいたからお玉ヶ池という伝説のほうがいいと書いている。

北辰一刀流の開祖千葉周作（一七九四～一八五五）が文政八年（一八二五）に日本橋品川町からこの地に移ってきた頃には池はすでになかったようだ。

江戸の初めには不忍池よりも大きかったが、その後次第に埋め立てられて地名だけが残った。

そして江戸末期にはこの界隈には名ある詩人や学者、医者などの塾が軒を並べ、さながら江戸市中の諸学の中心のようなところだったという。

周作は旗本屋敷の跡を買って道場としたが、その隣がそのころ既に江戸では評判の高い儒者東条一堂（一七七八～一八五七）の塾だった。

このあたり武家地と町屋が入り組んだ町だったらしく、

江戸古地図を広げてみると周作たちの塾の隣地は市橋下総守（滋賀、一万八千石）の広大な屋敷となっている。その周作や一堂の塾の跡も司馬は歩いている。

都心の変貌振りに驚きながらも「今は小学校となっているときいてほっとした。」「都心の学校だから全校でわずか九一人だということだった」と書いているが、その後、その小学校（千桜小学校）も廃校になってしまったらしく、私が訪れたときは「錦城学園高校」という私立高校に替ってしまっていた。

校門を入ってすぐ右手に横長の大きな碑石がある。周作の塾（玄武館）と一堂の学塾（遙池塾）の由来が記されているが、一番上に大きく「右文尚武」とある。

司馬によると「文ヲ右（トウト）ビ、武を尚ブ」は中国古典の熟語「右文左武」と同じで文武両道で天下を治めることだという。

そして周作と一堂の関係はまさしく右文左武であったと書いている。

また一堂の塾名（遙池塾）はお玉が池から取ったことは明らかだが、そのほかでも佐久間象山が若い頃この地で開いた塾は「玉池書院」。また幕末の詩人梁川星巌のこの地でおこした結社名は「玉池吟社」といずれもお玉が池にあやかろうとしたものだとも書いている。

（周作、一堂の塾跡を探し歩いているときにこの付近のもう一つの名所「お玉が池種痘所跡」にぶつかった。案内板によるとシーボルトの弟子だった伊東玄朴が江戸蘭方医八〇余名の拠金により幕臣川路聖謨の屋敷内に開設した種痘所跡で東京大学医学部の前身とあった。）

（二）北斗の人

周作と一堂の「右文左武」の関係については、周作を主人公にした「北斗の人」に詳しい。

「北斗の人」は昭和四〇年、「週刊現代」に連載された長編小説で、従来の古法の兵法に対して合理的な竹刀剣術を目指す周作が上州の馬庭念流などと対決、夢を実現していく物語だが、周作の描き方は同じ剣豪でも宮本武蔵とは対象的である。司馬の「真説宮本武蔵」は吉川英治を意識してか「剣聖」武蔵よりも「天才が往々にして持っているいやらしさ」を強調した作品となっている。

これに反して「北斗の人」の周作は従来のこけおどしやめくらましを一切排除した、まことに司馬好みの剣豪として描かれているが、この本の最後に一堂が登場する。

（なお、司馬はこの数年前に短編「千葉周作」を書いたが、このなかにも一堂についてわずかに触れている。「ついでながら」この頃の司馬は同一主人公を短編から長編へと展開させる作法が目立っている。昭和四〇年前後の中間小説ブームの影響だろう。「千葉周作」から「北斗の人」のほか「真説宮本武蔵」から「宮本武蔵」、「英雄児」（河井継之助）から「峠」、「鬼謀の人」（大村益次郎）から「花神」、「俠客万助珍談」（明石屋万吉）から「俄」などである。

彼の短編は定評ある長編歴史小説とはまた色合いの違ったキレのよさ、文章の巧みさの光る好編が多い。）

周作がお玉が池に道場（玄武館）を移した頃には、隣地に塾（遙池塾）を構えていた一堂は既に江戸では押しも押されもせぬ大儒者だった。

盛岡、庄内、沼津、敦賀、伊勢長島の諸侯があらそって師として迎えていたが、いずれも出講の送迎には駕籠を差し向け、その前後には供の近習数人がつくという派手なものだったので江戸の庶民は彼のことを駕籠学者と噂した。

この頃の一堂の盛名が想像できよう。

諸侯のなかでも最も一堂を知遇したのは開明派として名高い福山藩主阿部正弘で正弘は受講するときには一堂の下座に就いたといわれる。正弘が始めて一堂を招いたのは二〇歳のときだから、この一〇年後には正弘は老中首座として日本の運命を担うことになる。

水戸徳川家や一橋家からも招聘されたが、その遇し方が気に食わないといって一堂のほうからことわっているくらいだった。

そんな一堂を若い周作は引っ越してきてすぐに訪問する。

「（なるほど、これが天下の一堂先生の学塾か）と周作は長い土塀に沿って歩き、やがて門前にたった。」

小説では周作は一堂宅では大分待たされる。先客があり正弘の家老が挨拶に伺っていた設定になっている。ようやく面会を許された周作だが、一目みた一堂は「（この若者、いける）と東条一堂はその一流の人物眼で周作を見抜いた。」

そして辞去する周作を引き止めて家人に酒肴の用意をさせ酒を酌み交わす仲となる。

しかし謹厳実直な学者が初対面の場でそんなに早く打ち解けた間柄になるものであろうか。

おまけにこのとき一堂は既に五〇歳近くに対して周作はまだ二〇歳台、親子ほど年齢の差はある。そのうえ高名な学者とまだそれほど有名ではない剣術使いの「共通の話題」はなんだったのだろうかと詮索したくなる。

そこで両者の数少ない共通のものを探してゆくとどうしても二人とも「千葉県ゆかりの人」だという結論に落ち着く。

千葉県生まれの私にとっての身勝手な推論とご容赦願いたい。

一堂は生粋の房総人、周作は生まれは陸前だが先祖は房総第一の豪族千葉氏。

多分、周作は初対面の相手に対して「私の先祖は先生と

同郷人です」といったようなことを最初の話柄にしたのでないかというのが私の推論である。

一堂は上総国埴生郡八幡原村（現千葉県茂原市、なお「北斗の人」で夷隅郡八幡原村となっているのは誤り。さすがの司馬も土地勘のない地ではこのような間違いを冒す。）の豪農の生まれである。父自得は医術にも長じた。一堂は若くして京に学び二二歳で江戸に帰り佐藤一斉等と交友を深めた。

一方、周作は陸前国栗原郡花山村の生まれ。幼くして家伝の北辰夢想流を学んだが、彼の先祖は房総千葉氏の千葉常胤といわれる。

千葉氏は遠く桓武天皇の曾孫高望王が臣下に降って興きた平家の名門だが常胤（一一一八～一二〇一）の代に地元関東だけでなく全国各地に所領を獲得した。これらの所領は六人の子（千葉六党）に継承されたがその一つが奥州千葉氏である。（そのため現在でも岩手、宮城には千葉姓が多い。）

常胤は「街道をゆく（三浦半島記）」の中の「房総の海」でも頼朝との関係で登場している。頼朝はその父義朝が家来のだまし討ちに遭って殺されたこともあって極めて猜疑心の強い性格だったが常胤にだけは例外だったようで終生、実父のごとく接した。この表裏のない老人には絶対の信頼を寄せて、部下には「常胤を見習え」と常に言っていたという。常胤は頼朝の鎌倉幕府樹立の最大の功労者といっていい。

千葉氏の中興の祖といわれ、いま千葉市内の中心部に胸像が建っている。

なお千葉氏はその約四〇〇年後、秀吉の小田原攻めの際、北条氏に味方して滅びた。

その常胤を先祖に持つ周作だが、彼の開いた流派「北辰一刀流」は千葉氏の守護神である北斗七星（妙見大菩薩）に由来している。

また彼の塾「玄武館」も北辰の北をあらわす。古代中国人は東西南北をそれぞれ象徴する想像上の神獣を作り出したが東は青竜、西は白虎、南は朱雀に対して、北は玄武からきている。

ともかく周作と一堂は初対面からすっかり意気投合してしまう。

そして両者で一種の業務提携を結ぶ。すなわち「文は遙池塾、武は玄武館」である。

江戸の若者にとっては文武隣り同士になっているから両方学べて便利この上ない。瞬く間に両塾とも江戸第一の繁盛ぶりを示すことになった。

現に両塾から後に幕末の志士や学者となる人材を輩出している。

遙池塾からは清河八郎、頼三樹三郎、安積五郎など。安積五郎は一時、吉田松陰が師事していたから一堂にとって松陰は孫弟子に当たることになろうか。

玄武館からは清河八郎、坂本竜馬、それに後に井伊大老を討った有村治左衛門、その後援者だった海保帆平など。文武両道の達人清河八郎は両塾に学んだ代表格だ。尤も竜馬は正確には玄武館ではなく周作の弟貞吉の京橋桶町道場の出身であるが遙池塾で学んだ形跡はない。彼は学問はあまり好きでなかったようだから。

一堂は遠く九州や奥州の果てから彼の盛名を慕って入塾する者にも「剣は隣で学びなさい」と露骨に薦めた。

「最初は千葉の若造はおれの学問のおかげで剣を繁盛させた。しかしあとは逆におれの学問は千葉の剣のおかげで天下に普及した」と晩年の一堂は語ったというが、まさしく「右文左武」の間柄であった。

幕末において周作の玄武館が剣術道場でありながら一面、思想学校のような性格を帯びていたのは一堂の影響と司馬は見ている。「千葉の剣は仏理でなく儒理である」と一堂は云ったという。

また周作が終生、どの藩にも仕えず浪人の身であったのも一堂の教えに従ったものであり、浪人の自由な境涯にいてこそ新しい思想を天下に流布できるというのが一堂の意見であった。

そのため諸藩はやむなく藩費による留学生として藩士を玄武館に送り込んだ。

そして彼らが続々と幕末の志士に育っていった。

（三）周作と一堂の子孫たち

一堂の晩年にペルーの来航がある。

このとき一堂は弟子である老中阿部正弘に建白書を出して献言した。

「洋夷の航海術、砲術を積極的にとり入れてしかるのちに国是をきめよ」

ペリー来航時直後の献策だったので当時の知識人としてはきわめて先進的だったと司馬は評価している。

しかし一堂には後継者がいなかった。

安政四年、八〇歳で死んだがその数年前に遙池塾の跡地は全部、玄武館に譲るむねを周作に約した。しかし周作は一堂よりも一足先に世を去ったので周作の遺族がそのとおりにした。そのため玄武館は一丁四方もある大道場となった。

当時、江戸では位の桃井、力の斉藤と並んで技の千葉と呼ばれ江戸三大道場の一つだった。周作亡きあとは弟の貞吉が道場の面倒を見たが、三男道三郎が千葉家を継いだ。

次男の栄次郎は「千葉の小天狗」といわれたほどの剣

客だったが、坂本竜馬の影響を受けて幕末の時代を奔走家として過ごしたのは「竜馬がゆく」に詳しい。

その「竜馬がゆく」にも登場する貞吉の娘千葉さな子は艶福家だった竜馬の恋人の一人だが、司馬には竜馬とさな子の恋を描いた「千葉の炎」という優れた短編がある。

それによるとさな子は維新後、女子学習院の前身である華族女学校の舎監などをしたが、竜馬の思い出を胸に生涯、空閨を通した。そして時折、生徒たちに竜馬の形見となった着物の片袖をみせて「私は竜馬の許婚でした」と語っていたという。その後、さな子は甥の経営する灸治院を手伝った。千葉家には幕末から「千葉の炎」なる独特の灸が伝わっていて、維新後、剣術がはやらなくなってからは千葉家の生業となったものである。

千葉さな子の墓碑には「坂本竜馬室」と刻み込まれているという。

現在、半蔵門にある東条会館は一堂の曾孫が創った東条写真館が前身である。

数年前、私はそれを確かめたくて直接、同館に電話したことがあった。レストランの予約と勘違いされて大分電話をたらいまわしされたが最後に電話口に出た男性は一堂の名を知らなかったが「先祖は茂原の出と伺っております」との回答に満足した。

その後、同館編纂の「儒者東条一堂小伝」なる小冊子を手にしたが、それによると昭和三二年七月に同館で「東条一堂没後一〇〇年祭」が催されている。

小冊子もそのときの記念出版らしい。塩谷温や諸橋轍次といった大家が寄稿しているが、日頃、司馬の易しい文章に接している私には大げさに云えば古文書を読むように難解だった。

現在、一堂の生まれ故郷の茂原公園の一隅にある三メートル余の立派な一堂碑はその子孫たちを発起人として昭和一四年に建てられたものである。また数年前には市立郷土博物館で「東条一堂展」が開かれた。

(四) 湯島聖堂

「茂原市史」にも「八幡原が生んだ大儒学者」として一堂の生涯が書かれているが、お玉が池に移る前の一堂についても触れている。

文化二年(一八〇五)に弘前藩校稽古館の督学を辞して江戸に帰った一堂はまず駒込吉祥寺に塾を開く。それから一〇年後に移ったのが本郷湯島の聖堂の隣だった。

所もあろうに、幕府の官学である朱子学の総本山昌平黌の隣である。しかも一堂の学風は朱子学に批判的なものだったらしい。

「茂原市史」にも「一堂の面目躍如たるもの」と書かれているが、案の定、昌平黌側から誹謗する紙を門扉にはられたり投石されたりの嫌がらせを受けたのでやむなく、

文政四年(一八二一)に神田お玉が池に塾を移した。周作がこの地に移ってくる丁度、四年前のことである。

司馬も前記「街道をゆく(神田界隈)」で昌平坂付近を歩いている。

このあたり、お玉が池付近が自由で庶民的な雰囲気の町に対して昔から直参の子弟のほか諸藩の俊才が集まる学府の町だった。

司馬は昌平黌(昌平坂学問所)のことを考えている最中にそれと関連して唐突なことを思い出した。「助勤」という言葉である。

「助勤」とはあの新撰組が使った役職の一つ。助勤は副長の土方の幕僚でありながら配下の隊士を指揮して争闘の場に臨む。戦闘上の指揮権はあるが戦略上の指導権はないこの不思議な名称は誰が考えたか。

国語辞典にも漢和辞典にもないこの言葉の来歴を司馬は調べあぐねていたそうである。

しかしそのうち昌平黌の書生寮の内規にこれを見つけた。書生寮は自治制が敷かれ舎長の下に、それを補佐する者を「助勤」といった。これを新撰組に持ち込んだのは昌平黌の書生寮にいたこともあり、新撰組の前身の新徴組を作った清河八郎に違いないと司馬は推論している。

しかし新撰組を扱った「燃えよ剣」には「助勤」の由来は同じように昌平黌の書生寮の内規から取ったとしながら、「物知りの山南敬助」から聞いた土方歳三が採用したとある。

いくら「物知りの山南敬助」でも書生寮の内規までは知っていなかっただろうから、山南は多分、清河からこのことを聞いたのだろう。

ともかく清河は前述のように剣を玄武館で文は遥池塾で学んだ文武両道の達人だが安政元年(一八五四)には更に官学の総本山昌平黌にまで入学した。

そしてその年、彼は独立して神田三河町に北辰一刀流の町道場をひらき、同時に学問も教授した。まさに才人というほかない。

その才人が策に溺れた(将軍警護と称して関東の浪士を募って浪士組を結成して京に上ったが、急遽朝廷側に走った)事情を司馬は短編「奇妙なり八郎」で描いている。

また、「上総の剣客」は周作門下の四天王の一人だった森要蔵の生涯を叙した短編である。要蔵は譜代大名のなかでも名家といわれる上総飯野2万石の領主保科弾正忠の江戸詰め剣術指南役をつとめていた。

幕末、藩主弾正忠正益は譜代大名であるにもかかわらず家臣に一切諮らず、いち早く所領を朝廷に献上してしまった。上総の田舎に残った家臣たちは誰もが「捨てられた」と思ったに違いない。そのため要蔵の隣家の野間

銀次郎（のち講談社を興した野間清治の伯父）はいち早く藩士二十名とともに脱走し旧幕府軍の遊撃隊に参加した。（のちに敗れて切腹）

要蔵も会津藩に組して明治元年七月一日に板垣退助指揮の官軍に向かって最後の突撃を行い、その子寅雄とともに戦死している。

この日、要蔵は古風な長沼流の軍学どおり、日の丸の軍扇をあげて突撃を命じたが、この模様を白虎隊の生き残りで、のちに東京大学総長にもなった会津旧藩士山川健次郎は晩年、涙を流して繰り返し物語ったという。

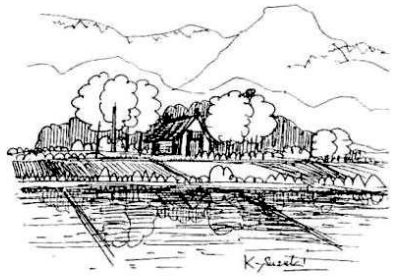
また敵将板垣退助も要蔵親子の活躍ぶりのみごとさに一時、味方の斉射を禁じたほどだった。

森家には昭和に入って後日談がある。

昭和九年の天覧試合の予選で要蔵の孫（子と同名の森寅雄）と決勝を争ったのが前記、幕末時に隣家だった野間家の子孫（野間清治の子）だったというのも奇縁というほかない。

森寅雄はその後渡米し、米国剣道連盟の総師範をつとめたという。

—了—



短歌

行雲流水 (八)

石黒修身

二千四年十月のロシア紀行詠十二首他五首

王朝の栄華と革命刻みこむ
聖ペトロの若き帝都は

琥珀もて覆われし部屋に眩惑(めまい)せり
エカテリーナの宮殿燦たり

世界から文化の粋を集めたる
エルミタージュにロシア史を視る

赤とうは美しき意なりモスクワの
広場は冬陽に人々憩う

蒼穹に尖塔仰ぎ佇みし
赤の広場に風花が舞う

王朝の栄華を語る宝物殿
嬌奢の極み革命の因か

民謡もコサック踊りも素朴にて
ロシアの民の哀楽惨む

「白い湖(うみ)」分水界に南下して
ヴオルガ滔々カスピに注ぐ

ヴオルガ河の水系は「白い湖」を分水界として、北はバルト海、南はカスピ海に注いでいる。

「キジ島」の旧き農家の舎に見る
ロシアの農民の生活逞まし

キジ島は、オネガ湖に浮ぶ小島で、島全体が、景観保存区となっている。ユネスコの世界遺産と指定されている木造教会はじめ古いロシアの農村風景が残されている。

ウグリッチは古きロシアの名残り留め
ヴオルガのほとりかもめ飛ぶ邑

ウグリッチは、「曲り角の町」の意という。ヴオルガ河が、モスクワの方へほぼ九十度に大きく蛇行する地点にある。
世界初の女性宇宙飛行士テレシコーヴアはこの町の郊外に生まれており、彼女が、上空から地球に送ったメッセージ「ヤー・チヤイカ（私はかもめ）」は、今もこの町が誇る時計工場「チヤイカ」の名前に残っている。

雨岸の黄葉映し滾々と
流れるヴオルガを航く船に居り

「カチユーシヤ」も「舟唄」も遠き追憶に
今ヴオルガにてその唄を聴く

日常は軛に似たり生活に
休符打つべく旅に出んか

幻の木葉天目現代に焼く
陶人ありき上総の窯で

保田勝久氏　千葉県長生郡一宮町

陶芸を見た帰り途そぞろゆく
暮色の銀座に追憶淡く

シオンとの闘争に果てしアラファトは
悲業なれども敗者にあらず

五年もの使い終えにし日記帳
次は何年悩む年の瀬

「台湾万葉集」について

石黒修身

（一）はじめに

筆者が、台湾万葉集の存在を知ったのは、今から五年ほど前のことである。

拙作の短歌を、折に触れて批評してくれる学友のひとりNが、ある時、「台湾では、今でも日本語で万葉調の短歌が詠まれており、それは、滑稽なほど素朴、実直で、それが却って読む者の胸をうつ」旨語ってくれた。

Nは、短歌を詠む訳ではないが、公私にわたり台湾を訪れることが多かったらしく、その折に現地の人々の短歌に触れる機会があったのだろう。

それ以降、筆者は、台湾の短歌が気に掛かり、ぽつぽつと文献等を探したが、日本の短歌界では、結社、商業誌を含めて、これというまとまった資料に出会うことがなかった。

そのうちに、文筆家等の片々の文章や、関心のある人々の情報から、「台湾万葉集」正、続編の存在を知った。

これを手許に取り寄せて読むにつれ、台湾における短歌界の成因と言うか、淵源から生い立ち、そしてその現状に興味を持つに至った。

（二）淵源と変遷

今さら言うべくもないが、台湾は、従来の中国支配から、日清戦争後の下関条約（一八九五年）により、日本に割譲され、五十年余にわたる日本の統治時代を経て、第二次大戦後（一九四五年）中国に復帰した。

日本統治時代の、所謂植民政策の功罪は、種々議論のあるところだが、日本語教育にはじまる日本文化、思想の影響は強いものがあったらしい。

その中で、各階層に対する学校教育のひとつとして、和歌の作り方があったらしく、多くの人々が、当時の心境や、日本への思いを短歌に詠んだ記録がある。

それは、大学、高専、旧制中学等の上級教育のみではなく、初等教育や職業訓練の場でも教えられていたことが窺い知れる。

その辺の事情を映すひとつの挿話を紹介する。

作家阿川弘之が、文芸春秋二〇〇三年八月号に載せた随想から引用する。

前大戦末期に、神奈川県にあった、高座海軍工廠には、徴用された当時十四、五才の台湾出身の少年工八千人余が働いていたが、二〇〇三年十月に、日本で来日六十周年記念大会に千人を越す老少年工が集まると言う。

それに先立って作られたパンフレットに、次の短歌があった。

北に対き年の始めの祈りなり　心の祖国に栄あれかし　台北市　洪坤山

無謀な戦争をやって、負けて彼等を見捨てた日本を「心の祖国」だなんて思ってくれる老人の大勢ゐる国が世界中の何処にあるか……

と阿川は感涙したと記している。

このような話しは、他にも多くあると思うが、この稿では、「台湾万葉集」の編者である、呉建堂（筆名　孤蓬万里）を中心とした記述にまとめよう。

呉は、一九二六年台北に生まれ、台北二中四修で旧制台北高校理乙を経て、台北帝大医学部、海軍、終戦により台湾大学医学部を卒業、各所の公立病院長を勤め、一九九二年定年、剣道八段教士、一九九八年十二月、台湾万葉集続編発刊の三年後に他界した。

呉が短歌に馴れ染めたのは、台北高校在学中に、当時教授として万葉学を講じていた、犬養孝の影響を受けたものとされている。

台高に犬養先生と出逢ひしが　台湾万葉集生みしきっかけ　孤逢万里

犬養は、台湾版「台湾万葉集」の中、下巻、更に日本版正編、続編に、大阪大学名誉教授として、夫々に序文を寄せている。

それは何れも感動的な記述であるが、その一部を引用しよう。

呉君が、旧制台北高校の学生であった頃、同君に万葉集の講義をした。

私も若かったから懸命に講義した。彼も懸命に耳を傾け、細大洩らさず講義を聞きとって呉れたのであろう。私には彼のその姿が昨日のように思いうかぶ。

あれから何十年、国を異にし、いろいろの事情を異にして、なおかつ台湾の方々によって作られた「台湾万葉集」こゝに在り。

私は、原稿を前にして慟哭の思いでいっぱいだ……

犬養は、引揚げ後大阪大学でも万葉学を講じ、文、理系を問わず学生に大きな感化を及ぼしたと聞く。

身近かな証人として、まんじ同人である鯨游海、維持

会員の山中淳、の両氏が当時阪大に在学しており、「犬養先生は、講義に先立ち、万葉秀歌を朗々と吟じた云々」との証言がある。

なお、犬養は、一九九八年十月にその生涯を終えている。これは愛弟子であった呉建堂より二ヵ月早く、奇しくも師弟がほゞ同時期に天界に旅立ったことになる。

呉は、一九六八年より、結社「台北歌壇」を主宰し、逐次同志を集め歌集を出していたが、その間に自叙歌伝「孤蓬万里半世紀」を出し、一九八一年台湾の歌人三十二人を紹介する「花をこぼして」を自費出版している。一九八八年、更に三十四名を紹介した歌集を出すにあたり、前の二冊を合併し「台湾万葉集上巻」とし、新刊の本を「台湾万葉集中巻」と名付けた。

一九九三年、この中巻に加え更に三十四名を追加、巻末に、その他多数の歌人の五百首を加え、下巻として全二千首を発表した。

その中で呉は、夫々の作者につき、その生い立ち、経歴、境遇等作歌の背景となった事柄を懇切に愛情に満ちた解説を付している。

日本で「台湾万葉集」として刊行されたのは、この下巻である。

（三）日本への浸透

詩人で文芸評論家の大岡信が、呉から、台湾版「台湾万葉集下巻」の寄贈を受け、一読その面白さにうたれ、朝日新聞の「折々のうた」に前後十九回にわたり、その一部を紹介した。最初が、

万葉の流れこの地に留めむと　生命（いのち）の限り短歌（うた）詠みゆかむ　孤蓬万里

の一首であった。

「折々のうた」に紹介した反響は大きく、そのひとつに「台湾万葉集」を復刻刊行してみたいと、いくつかの出版社から提案があったと言う。

そして、集英社からの刊行により、その提案が実現した。一九九四年二月のことである。

はからずも台湾万葉集陽の目見て　集英社より再販見るとは　孤蓬万里

大岡によれば、これ以前にも、この台湾版「台湾万葉集」が日本の短歌関係者に大量に寄贈されていたことが判ったが、日本歌壇の反応は殆んどなかったと言う。

その理由は、「台湾の素朴な写実、生活報告の範囲に限られている」と言うのが、大方の歌人の見方であった。

現代の日本の短歌の繊細巧緻を極めたものから、多様な分化を遂げ、ついには玩物喪志の観を呈するにいたるものまで含め、微分化された現状から、日本の歌壇からは所詮自からが作るものとは異質のものと映ったのであろう。

そして、そこには根深い差別意識があると大岡は断じ

ている。

台湾短歌は形式に遊ぶ楽しさがあり、機智、諧謔、皮肉な眼差しが自からに向けられており、そこに人生を客観化する逞しさ、余裕、明るい諦観のようなものがあり、人生が生き生きと詠まれている。

この点、日本の短歌界が晦渋な歌に陶酔している頃に台湾ではこのような万葉調が守りつがれていたことは刮目すべきことであろう。大岡はこのように述懐している。

更に背景を探ると、政治的な思惑も見え隠れする。

一九七三年日本は中国の承認に踏み切り、大使館の代りに交流協会を、台湾には亜東関係協会を設立し、経済関係を維持させた。

但し、それ以来読売、朝日、毎日の三大新聞の紙面から、台湾関係のニュースは消え、産経新聞のみが、掲載を許されていたと言う。文芸欄についても同様であった。

中国大陸に対する政治的配慮によるものと思われるが、何時の世も政治の打算が文芸に及び、短歌においても例外ではなかったと言うことか。

昭和五十五年に、講談社から出版された、「昭和万葉集全二十巻」からも取り除かれていたが、締め切りの頃に、講談社剣道部の台湾遠征で、主将の某の努力で、編者の一人である、上田三四二が奔走して、呉の二首のみが漸く採用されたと記録に残っている。こゝに引用する。

十五巻所載

載きし往診料を仏前に
そのまま供え足重く去る　　孤蓬万里
歌集「椰子の如くに」より

十六巻所載

吾子は今手術受け居り父われは
医師にしあれど全身震ふ　　孤蓬万里
歌集「いのちの限り」より

話題を敷衍するが、美智子皇后の短歌の指導役であった、歌人五島美代子に、呉も指導を受けたことがあり、呉が剣道の大会で来日した折に、来臨された皇后に、その旨申し上げたところ、後日「折々のうた」に載った際に、皇后が、待従に命じ呉に伝えさせたとのエピソードがある。

もうひとつ挿話を記そう。

一九八八年、国民政府の総統に就任した、季登輝が、呉の台北高校の一年先輩であることから詠んだ一首がある。

思はざり台高マンの一員が
中華民国の元首たり得し　　孤蓬万里

「旧制高校物語」秦郁彦、文春文庫より。更に一首。

独立も統一も夢蓬莱の民に
幸福何時なむぞ来る　　孤蓬万里

この二首から、台湾独立の意識が呉にも強くあったことが読みとれて興味がある。

ついで、呉は自身の筆名「孤蓬万里」につき、次のように述べている。

日本語の既にすたれた台湾において、日本独得の短歌を詠むのは、孤蓬すなわち〝根無し草〟が万里を行くようなもので、幾多の苦難を伴うものであるが、万難を排して、命の限り歌い続けていこうとする決意を示したものと言っている。

出典としては、李白の「送友人」の一節に、風に飜る一本の根なし草のように万里を遠く流れて行ってしまうとある。

「此地一為別　孤蓬万里征」

この一連の言辞から、自分達で、台湾の日本語詩歌はほゞ途絶えるだろうと思っていた世代であり、その思いは如何に複雑で、痛切なものであったかが偲ばれる。

呉は、日本版「台湾万葉集」正編のあとがきに次のように感懐を記している。

台湾島の歴史を語る語り部たらんには、筆者はあまりにも浅識である。しかし、この「台湾万葉集三部作」を通じ、二十世紀に台湾に生きた人たちの思想と生活と歴史的事情の一班をくみ取ってもらえたら幸いである。

台湾を愛しむ人ら心血を
注ぎ重ねたり万葉の短歌　　孤蓬万里

（四）結び

何はともあれ、日本の教育を受けた年代の多くが老齢化し、第一線から退き、戦後生まれの若きらにバトンタッチされつつある時期に、台湾の歌人らが、揺れ動く世情をよそに、喜怒哀楽を短歌に詠み次いで来た訳である。

いま、その人々はみな七十才以上になり、続く世代はない。

滅びゆく運命と終末の重さを実感せざるを得ない。

政治、外交と文化は一体と称する人も居る。それなのに、台湾の政治、外交に関わる歴史に一見識もない筆者が、ひとつ短歌についてのみ、憶面もなく論ずることには、最後までためらいを禁じ得なかった。

しかし、「台湾万葉集」全篇に流れる、素朴、真摯、実直な詩想に触れた感動と「台湾万葉集」の成因と、今日までの経過を、知り得た範囲で記しておきたい衝動を抑え切れずに、この一文をまとめた次第である。

文中に事実との相違、齟齬等があれば、それは筆者の調査不足と浅識の故としてお許し頂ければ幸いである。

文中敬称略

参考　台湾万葉集　正　集英社　九四年二月刊
台湾万葉集　続　集英社　九五年一月刊

追記

おって、筆者の畏敬する曽根竣作氏が、今は亡き呉建堂氏と旧制台北二中に於て、同級の友人であったことを

奇貨として、「呉建堂学兄を偲ぶ」の一文を寄せて頂いた。

呉氏の生い立ちと、「台湾万葉集」の生じた時代的、地域的背景が、達意の文章で活写されており、筆者の記述の至らざるを補って余りあるものと思料する。

なお、曽根氏は歌人で筆者の所属する短歌結社「万象」の選者である。まんじの維持会員で、近く同人に参加される予定である。

呉建堂学兄を偲ぶ

曽根　竣作

「台湾万葉集」に寄せて

台北歌壇を統括し、医業の傍ら「台湾万葉集」の編纂に心血を注いだ呉建堂君（筆名は孤蓬万里）が、心疾患で急逝されてよりはや三年の歳月を閲した。

呉建堂氏と筆者は、台湾の台北州立台北第二中学校に於て、四年間共に学んだ間柄である。一、二年の低学年の頃は、氏も筆者もどちらかと言うと背の低い方で、確か教壇に近い、前方の席であり、氏は筆者の二つ位前に座って居られたように記憶している。従って、休み時間になるとお互いにノートを見せ合ったり、教師たちの品定めをしたりして折に触れて歓談したものである。

当時の印象としては、丸顔で背は高くないが、割合がっちりとした体型で、台湾の良家の坊ちゃんらしく上品な感じであった。

二年生くらい迄は、成績も体育もそれ程目立った存在ではなかった。

三年生の二学期ぐらいであろうか、急に一念発起されたようで、猛勉強を始められ、且つ体育の方も剣道部に入部し熱心に稽古を続けられるようになった。

そして、四年生になると文武両面で頭角を現しはじめ、模擬試験も常に上位にランクされ、剣道の方も確か二段の免許をとられたように憶えている。

粘り強く、元々秀才でもあったと思うが、大変な努力家で、四年生になって一気に才能が開花したものであろう。

当時、台湾人の子弟にはこの上もない狭き門であった、旧制台北高校理乙に四修で見事合格されている。

その頃には、休み時間に友達と談笑はせずいつも前時間の復習と次の時間の予習をきっちりとやっておられた氏のうしろ姿が今でも脳裏に焼き付いている。その頃は、もう既に親友を通り越して畏友と言っても過言ではない。

＊　＊　＊

氏が短歌を作り始めたのは台北高校に入学してからである。それは台北二中の校友誌には氏の作品が載ったのは殆んど見たことがない状況からも想像できる。

台北高校に於て、万葉集の碩学であられる犬養孝先生に短歌の手ほどきを受けたのが、短歌開眼の第一歩であったようである。

万葉の流れこの地に留めむと
　生命（いのち）のかぎり短歌（うた）詠みゆかむ　　孤蓬万里

日本語のすでに滅びし国に住み
　短歌（うた）詠み継げる人や幾人　　孤蓬万里

この二首でも分かるように、半世紀以上植民地であり、終戦後中華民国となった異郷の地にあって、よくぞ日本語を駆使して短歌を作りつづける集団があると言うことは正に驚異ではなかろうか。

日本人に非ざるわれら台北に
　短歌（うた）詠む結社作りて久し　　孤蓬万里

昭和四十年より、結社「台北歌壇」を結成し、有志の人々をここ迄まとめてくるのはどれ程の苦労があったことであろうか。正に、呉建堂氏の渾身の力業（ちからわざ）の成果として余りあるものがある。

＊　＊　＊

今から三十年余前であろうか、呉建堂氏より質素なうすいピンクの表紙の「台湾万葉集」が遥々海を越えて送られて来た。これが「台湾万葉集」のオリジナルである。

結社の個々人のストーリーを織り込みながら一冊にまとめた正に労作であった。

その後、大岡信氏をはじめ心ある読者のあいだに意外な反響があり、朝日新聞の「折々のうた」には台湾の人々の作品が十数回採り上げられている。

「台湾万葉集」の特徴は、衒うことなく素朴に日常生活を活写するところにあり、繁文縟礼なる文学的嬌態（しなを）をつけることを嫌うことである。また、もう一つの特色として、底抜けに明るく、諧謔に富んでいる作品も散見され、ウエットな暗さが無いと言うことであろうか。

以前に、呉建堂氏が来日して、夕食を共にした折、氏が、「台北歌壇のうたは、全般的にあゝそうですか的な報告歌が多い、もう少しポエムが欲しい」と、ポロッと筆者に洩らしたことがある。

筆者は、短歌の一つの方向として、これはこれで充分であると応えた記憶がある。

＊　＊　＊

呉建堂氏歿後も「台北歌壇」は連綿として続いている。筆者が所属している台湾協会（新宿区）の毎月の協会報には、短歌抄として、今でも台湾人の方々の短歌が五、六首は掲載されている。嬉しいことである。

呉建堂氏は一度宮中の新年歌会始にゲストとして招聘されている。昭和四十年の歌会始に入選の栄に浴した一首（あとにもさきにもこの一首のみ）を記して結びとしたい。

魚群（なむら）追ふ鴎の群が朝凪の海を
　変速しつつ飛び行く　　呉　振蘭

見事な叙景歌である。

友に寄す（十四行詩三題）

松下壽男

読んでくださる方々へ

私の心に引き出しがあって
とっておきの悲しみが
ガラスのかけらや石ころとなって
その引き出しにしまわれる

四連の十四行の引き出しに
ソネットというよび名もあるが
韻さえふめない言葉ではペトラルカにも
シェークスピアにもしかられる

青春の心のつねにせわしなく
ぬきさししながら拾い集めた
ヴィヨンの毒やらマラルメの謎

わがくにの三好達治や立原道造
楽譜のような詩集にくらべ
軋んだような音しかたてない私の引き出し

ありがとう

おもえば野分のせまる朝
ごくあたりまえの賜物は
ジーパンの尻に挟まれて
麦わら帽子の街に出た

街角公園けやきの木陰
書店のまえも素通りに
汗をふきふき水を飲み
そうだおでんを食べにいこう

それでも落ち葉の舞うころは
さすがもみくちゃの紙切れも
しなやかな手にちぎられて

臆病な数学教師のたまごこそ
高名な歴史学者との邂逅を
いま『中世の秋』に実らせる

春の別れに

詩情をたたえる器ではない
悪童どもとわたりあい
食っていくだけの数学さ
そういうおまえが詩人のようだ

あたりまえの日々がやってくる
臆病者の行くすえに
おめでとうとは言うものか
おまえの詩なぞを書いている

一人一人のさびしさを
語り明かせば今朝のむなしさ
友情なんてこんなものさと

そんなおまえを唆らせようと
おまえになれない悔しさが
いまでもものを言っている

ロダンの二宮金次郎

松下壽男

一

「陛下はことのほかお喜びのご様子であらせられる。そこで・・・」

時の枢密院顧問官松方正義は、パリ滞在中の三男幸次郎に宛ててこう書き綴った。

「かのロダンに二宮金次郎像の制作を依頼して欲しいのだ。」

正義にしてみれば、明治天皇が報徳記を出版せしめ、官僚県令吏員に至るまで二宮尊徳の勤倹譲の教えを学ばせたこと自体は、誠に喜ばしいことであった。日本が近代国家として生まれ変わるためには、富国強兵の他に道は考えられなかったが、そのためには国民にはさらに一層の忍従を強いなければならない。それには官が範を示さねばならないのだ。しかも富国強兵の道は歩み始めたからには決して後戻りの許されない道であった。確かに日本は日露戦争でも負けはしなかった。しかし実のところ勝ったといえるのか。国を挙げての戦勝気分の中、国家の台所は火の車なのである。欧米の列強にもそれは見透かされている。それゆえまさに後戻りはできないのである。日本人が紅毛碧眼の仲間入りの道を選んだ以上、毒食わば皿までの気概で事に当たらずして、どうしてこの危機を乗り越えることができようか。

「しかるに陛下は、古臭い髷を結った金次郎像を殊の外お気に召され、表御座所の玉案に置かれて日々愛玩遊ばしておられる」

幕臣となり徳川家の霊廟日光の経営に関わった尊徳を、幕制の亡霊と忌み嫌う官僚もないではない。金次郎ごとき百姓上がりの成り上がりと、歯牙にもかけない官吏もいる。とんでもない輩だ。報徳は我が国の人づくり家づくり村づくりを指南し、ひいては国を富ます教えである。富国強兵を国是として歩んでいくうえで、報徳は国民の

心の拠り所になる。

「間違いなく報徳は和魂をもって国を富ましむ教えである。しかし一方・・・」

ちょんまげに刀では列強には勝てんのだ。目には目をの譬えが然り、是が非でも文明開化の進んだ欧羅巴の才を身につけねばならぬ。

「洋才をもって兵を強からしむるの国是を、くれぐれもお忘れなきようお諭し申し上げるために、洋才をもって二宮金次郎像を形作り、陛下に献上奉ろうと思うのだ」

幸次郎のパリ便りによると、ロダンという工人は、土くれを自在に操り、裸の人物像を通してさえ、人の魂を生き生きと表すことができるという。

「仏蘭西語に堪能なお前なら、ロダンに尊徳の人となりや報徳の教えを伝え、彼の技を存分に発揮させることができると期待しておる。」

明治四十三年正月吉日。松方正義が筆をおき、書斎の障子を開くと、庭にはうっすらと雪が積もっていた。彼は一つくしゃみをすると、自ら手あぶりの炭を継ぐのであった。

二

「なんとも親父らしい」

松方幸次郎は、書簡をたたみながら微笑んだ。学制の元で育った幸次郎の世代にとっては、和魂洋才も最早古臭い言葉であった。しかし、幸次郎には父親を笑うことはできなかった。父は倒幕の志士の生き残りであったが、漢籍に通じ書画に詳しい通人であった。幼名を金次郎と名付けられたせいか、持って生まれた、武家に似合わぬ算盤の才覚のせいか、父正義は二宮尊徳に心酔していた。のみならず、報徳を富国の教えと考えるのは、長年努めた大蔵大臣の経験の上に立ってのことであろう。三十年前には博覧会副総裁としてこの巴里に滞在していたはずではあるが、とうとう外国語には馴染めなかった親父である。しかし西洋の文物情勢には常に注意をはらっている。今にして思えば息子の自分が実業に就き、国を離れてこうしているのも親父譲りというものであろう。欧羅巴の芸術の都は巴里であるから、巴里の最新の美術品を買い漁って日本に広めよ。一幅の絵は、万巻の書に勝る。これは親父の持論であった。なんと乱暴な芸術論であろう。しかも言い出したことは決して曲げない薩摩のもっこすであった。しかし私心は微塵もなく、天下国家のためならいつでも腹を切ろうという潔さを漂わせている。子供のころ幸次郎は、父正義は生きながらにして銅像のようだと感じたことがあった。それは今でも変わらない。父は大きく固く、中に虚心を湛えている。だからこそ打てば響くのである。

和魂洋才というが、そもそも魂と才とを切り離して、

桜の木に薔薇の花を接ぐようなことを考えることが未開なのである。文明とは魂であり、才である。文明が開化すれば魂も開かれるものなのだ。しかし、そのことは西洋人もわかってはいない。

幸次郎が初めて仏蘭西を訪れて何より驚いたのは、その歓待ぶりであった。その訳は程なくわかった。欧羅巴はまさにジャポニズムの花神の振り撒く灰の渦中にあったのだ。

江戸ならば長屋の壁の穴を塞いでいたような錦絵が、高価な額に納まって画廊の玻璃窓に飾られている。けばけばしく輸出向けに作られた薩摩焼が客間の暖炉を飾っている。排仏毀釈の煽りを受けてはるばる流れてきた仏像が、埃及の木乃伊の棺と一緒に古物商の店先に並んでもいた。そして画商に連れられてアトリエを訪ね、画家と語り合って、彼らのジャポニズムが本気だとわかった時には、幸次郎は素直な感激とともに、大きな割り切れなさを味わったのである。

巴里の街から鉄道に乗り、馬車に揺られ、ジヴェルニーの村が見えると、彼は心に懐かしさを感じた。モネの館を間近に見て懐かしさは心の安らぎに変わったのである。そこには色とりどりの花々と共に江戸の情緒の名残りのような池の端の柳や繁みの情景が、庭園として造作されていたのであった。

浅葱色の木漏れ陽が降り注ぐ、壁一面に錦絵の飾られたサロンで、幸次郎はモネと語り合った。モネは立ち上がり、時折自慢の髯をしごいては、コレクションについて話したのだった。

「お前は、もちろんウタマロは知っているな。振り向く女の後ろ姿の美しさを私に教えてくれたのはウタマロの人物画だった。儂は先妻のカミーユをモデルにして、それを試してみたのだった。陰を見るな色を見よと教えてくれたのはヒロシゲの風景画だった。儂とルノアールはイーゼルを並べてヒロシゲのように見る練習をしたのだ。ホクサイは真の天才だ。見る世界を型にはまった構図から解き放してくれたのだ。そして儂を連作に向かわせたのがこれらのフジヤマだ。儂らヨーロッパの絵描きは、変わらぬものを描くことを学んできたが、ホクサイは変わる姿を描くことを教えてくれたのだ」

幸次郎は歓喜した。日本の絵が文明の進んだ欧羅巴で、誰もが巨匠と認めるモネの手本になっていたというのだ。しかし日本ではどうだろう。ここに飾られている錦絵も、画商が片目をつぶりながら教えてくれたように、おおかた輸出された焼き物の荷の、詰め物の反故紙の中から見つけ出されたものだろう。東京の美術学校では、お針子に駄賃を与えて丸裸にして直立不動をとらせて描いたり、希臘彫刻の模造品をわざわざ取り寄せて、それを見ながら陰のつけ方を学んだり、伊太利のお雇い教師から遠近法を学んだりしている。そうして学んだ画法を洋画と呼

んで崇めているのである。日本が崇め奉っている洋才は欧羅巴ではすでに古いのだ。一方日本が反故のように棄てようとしている和才が、欧羅巴では新しいのである。

ところで、このサロンの居心地の悪さといったらなんだろう。錦絵は額に入れて飾るべきものではない。畳に並べて楽しんだり、屏風に散らして飾ったりするものなのだ。それに、ダゲレオタイプで見た、モネの「ラ・ジャポネーズ」の後ろ姿からは、肉と媚は感じても、歌麿の美人画のような色香は微塵も感じられなかったのである。俺は抱きたいとは思わないとは友人が漏らした率直な感想であった。モネの風景画でさえ、額縁を窓枠にして外の景色を眺めているようなものである。広重や北斎の絵に見るような軽妙洒脱で仙境に入る趣はない。まして錦絵のように、粋に斜めに崩して飾られたところなど見たこともないのだ。やはり洋画は洋画なのである。ジャポニズムといっても、西洋の絵画の行き詰まりを打開する手がかりになったにすぎないのである。

しかし、幸次郎は、モネの絵の虜になってしまった。その後も一人で度々ジヴェルニーの館を訪れた。相変わらずサロンは居心地が悪かったが、庭は心からくつろげた。それはモネにとっても同じであった。二人は、太鼓橋を見通せる池のほとりのベンチで、睡蓮の花を眺めながら語り合った。

「儂は睡蓮を描いているうちに、実際の風景も、水に映る風景も共に幻のように感ずる時がある。かろうじて睡蓮だけが幻の中に漂っていて、儂を正気に連れ戻してくれる。睡蓮の葉や花がそこになければ、儂の魂は、幻の世界から永遠に戻れないかも知れないと感じることがあるのだ」

「あなたの感じる幻の世界とは、実は永遠の世界なのだと思います。あなたは、絵を描くことを通して永遠の天の道に踏み込まれたのでしょう。色と形を追い求めてきたあなたは、とうとう色も形も必要ない境地に達したのでしょう。日本の哲人が、音もなく香もなく常に天地は書かざる経をくり返しつつ、という歌を詠んでいますが、まさしくその時のあなたは自然の無限の呼吸と一つになっているのだと思います」

幸次郎がこう語ると、モネは、『そこひ』のせいで、すでに緑色に曇りはじめていた瞳を見開いて、幸次郎を見つめた。そして低い声で尋ねたのだった。「その世界とは、天国か?それとも地獄か?」

「我々東洋人はためらうことなく天国だと答えます」

モネの皺だらけの大きな手が幸次郎の手を包み込み力強く握ってきた。

「メルシー、コージロー。儂は救われた思いがする」

その出来事以来、幸次郎はモネを始め、印象派の作品を気に入れば迷うことなく買い求めることにしたのだった。

和魂洋才も洋魂和才も歴史の中の一時の事柄に過ぎない。天の道も、それを求め究めんとする人の道も、洋の東西を超えて普遍である。印象派の絵画は、そのことを日本人の心に無言で語るはずである。今は受け入れられなくても必ずや歴史が証明するであろう。

日本の松方伯爵の息子が印象派を買い漁っているという噂は、巴里の社交界に広まった。彼は欧羅巴文化のいわば通行手形を手にしたのであった。彼は、進んで芸術家に会いに行った。時には日本の要人を伴ったりもした。そうしたなかでロダンの館へも足を運んでいたのであった。

モネとの対話で、書かざる経をくり返しつつの、二宮尊徳の道歌が頭に浮かんでくるとは思ってもみなかったが、今はモネの魂にも、尊徳の魂にも、相通ずるものがあることをつくづくと感じている。そして自分の魂にも。だからこそモネの絵に惹きつけられていったのだ。

ならばロダンにも報徳が通じないはずはなかろう。

幸次郎は明日にでもロダンのアトリエを訪れてみようと決心して、窓に目をやった。そのホテルの窓からは、築後二十年が過ぎ今や巴里の代名詞にさえなったエッフェル塔の、そそり立つ様がよく見えたのである。

三

久しぶりにロダンの館を訪れた幸次郎は、ギャラリーの作品群をあらためて見上げて歩いた。無造作に置かれたブロンズや石膏の一体一体が、欧羅巴彫刻界の頂点に立つロダンの傑作である。それらは、すでに美術史上の作品であるが、過去のものではない。現に今日も、アメリカの私立学校からの注文ということで、「考える人」の雌型を取る作業が行われていた。

幸次郎は初めて出会った時の感動を確かめようと「青銅時代」の前に立った。

生身の青年から型を取ったのではないかと噂されたように、実物の人間同様のプロポーションで作られていながらも人体を超える生命感を湛えたその造形美は、今日でも際立っていた。人類の歴史で青銅器時代が占める、若さと、希望を表現した彫刻。いや青銅像一体が人類の精神史までも表現し尽くしているのだ。それはロダン自身の青春の表現でもあった。そして幸次郎がその彫刻に初めて出会ったのは、丸善から取り寄せた洋書の図版の中であったが、それは幸次郎にとっても文明開化東京の青春時代の思い出であった。

見比べてみると、その後のロダンの作風はどんどん力強く大胆になってきていた。その肌は瘤のようにむくむくと土くれだってきている。その塊は、土でもなく、石膏でもなく、青銅でもなく、紛れもなく肉であった。そ

の一くれ一くれが命の漲った生きた肉の塊なのである。
ロダンは今や世界から注文を受ける巨匠である。いくつもの制作に同時に取り組んでいるのだ。「ロダンは注文を断わることはしないが、仕上げることもしない」と陰口をたたく者もいる。それは一面事実かも知れない。しかしこうして作品群を眺めていると、その事実は彼の商魂からくるものではなく、超人的な創作意欲からくるものだろうと幸次郎には思えた。文豪バルザックの像だけでも、髪振り乱して睨め付ける首像、ふやけた裸の腹を突き出したトルソ、果てはこの目の前の、自らのそそり立つ男根を握って胸を反らす全身像までも次々と飽きることなく生み出し続けているのである。
巨匠ロダンは今さら何を求め、何に駆り立てられているのだろう。露骨で尊大で、青銅時代の容姿に比べれば醜悪以外の何ものでもない。しかしこの造形には確かに圧倒的な命の存在感があるのだ。
「その像はお気に入りかな、ムッシュ・マツカタ、お待たせした」
奥のアトリエから出てきたロダンの姿は、さながらバルザック像であった。首から垂らした前掛けには、粘土のはねが飛び散っていた。髯を蓄えた赤ら顔には深いしわが刻まれていたが、同い年というモネより一回りも若く感じられた。とても喜寿の齢には見えなかった。
「メートル・ロダン、今日は、あなたに作ってもらいたい像があってやってきました。それは、日本の少年の像なのです。」
眉間に縦じわのある気難しい顔が綻んだ。
「日本人は実に謎めいた容姿と心の持ち主である。承知した。こちらへ来たまえ」
首像ばかり並んだ一角に一目で日本人とわかる娘の像があった。
「これはハナコである。結局こうして首だけを作ったが、神秘の国からやって来た娘だった。」
巨匠の目じりが笑った。巴里の場末の酒場で親父らが見せる好色そうな笑いと変わりはなかった。
その日のロダンはいつになく冗舌であった。彼は幸次郎を書斎に招き入れると、戸棚からカルトンを取り出してきた。中には色鮮やかな浮世絵が詰まっていた。東京でも今となってはなかなか手に入らない春画の品々であった。
「実はこの最初の一枚はハナコから取り上げたものなのだ。」
花子は、軽業師一座の一員であった。カフェの舞台で振り袖姿で妖艶に舞う彼女の容姿に魅せられたロダンは、毎夜通い詰めた。女座長に、花子をモデルに雇いたいと交渉し、前金を払った。公演のない午後に、花子はロダンのアトリエにやって来た。彼女は部屋に並んだ裸婦像を見ると身を固くした。彫刻家は娘に「裸になりなさい」と命じたが、彼女は首を横に振って、頑として聞かなかった。業を煮やして着物の襟に手をかけると、指に触れるものがある。取り上げて開くとあられもない男女の姿を描いた春画であった。それは庶民向けの粗末な刷り物であったが、男根と女陰をことさら大きく描いたおおらかな造形に、さすがのロダンも度肝を抜かれたのだ。
「これはどうしたのだ」と、娘に尋ねると片言の仏蘭西語と十字を切る仕草で、座長にお守りだといって持たせられたという。その時女座長の顔は笑っていたのかもしれない。それでも言葉を信じた花子は、開くこともなく懐に大切にしまっておいたのであろう。
「蒐めただけではなかった」
別のカルトンから抜き出された彼のデッサンは、ぬめぬめと幾重にも重なる鉛筆の線で描かれ、淡彩がほどこされた、あられもなく大股を開いた仏蘭西女の寝姿であった。
「ウキヨエはキモノを着た男女の交接で愛を表現する。しかるに儂は裸の男女の肉体で愛を表現するのだ。入りたまえ」
幸次郎は初めてアトリエ内部に案内された。そこは、重なり合う裸像で埋め尽くされていた。それらは赤裸裸に愛し合う男女の肉体の姿であった。あるものは男が女の尻にしがみつき、あるものは互いに体をくねらせて固く抱き合っていた。
ロダンはさらに奥手のアトリエに幸次郎を招き入れた。天井の高いその部屋の中央に巨大な門が形作られていた。その分厚い門扉の至る所に裸の人物が蠢いていた。人々の叫びやうめき声が聞こえてくるようであった。太い框の、天にあたる場所には「考える人」の像が据えられていた。彼は繰り広げられている全ての光景をそこから静かに見つめているのであった。幸次郎はしばらくは口もきけなかった。
「地獄の門である」
ロダンが口を開いた。それから詩句を唱えたが、聞き慣れない伊太利の言葉のようであった。
部屋から立ち去り際にロダンはこうつぶやいた。
「しかしこの門は、永遠に開かれることはないであろう。なぜなら、地獄はすでに門のこちら側にあるものなのだ」
サロンでくつろいでいても、もはや幸次郎には、モネと語り合った話題をロダンの前で切り出す勇気はなかった。しかし、金次郎像をロダンに作らせなければならない。
「ところでメートル・ロダン。私の作って頂きたい日本の少年の像とは・・・」
幸次郎は、少年金次郎が焚き木を採って町に売りに行くことになった経緯や、その行き帰りの時間を惜しんで書物を読んで学んだことなどをロダンに話して聞かせた。すると巨匠は、大きくうなずきながら身を乗り出してき

た。赤ら顔は益々赤みを帯び、しわの奥の鋭い目は潤んでいた。それは感動と創作意欲の表われに違いなかった。

「ムッシュ・マツカタ、今のキンジローの話は私の青春そのものである。実は私にも徒弟時代があったのだ。石工の親方の元で、来る日も来る日も石を刻む毎日。そんな毎日を支えてくれたのが、一冊の書物だったのだ。親方の使いで品物を納める時には、背中に荷を背負いながら、手にはその本を持ってこうして歩いて行ったものじゃ。いかにもキンジローであろう。それを読んでいれば石の重みも忘れたのじゃ。儂は鳥のように口ずさみながら歩いた。そして覚えた。覚えた言葉を唱えながら石を刻んだ」

その書物は彼を憧れの国伊太利へと誘った。伊太利での修業で自らの作風の開眼を果たしたロダンは、巴里に帰って青銅時代を制作したのである。

「青銅時代を作った時はとうに三十路を過ぎていた。しかし儂の心は青春であった。人生の全ては、重い荷を背負いながらも読みふけった一冊の書物、神曲の中にあるのだ」

幸次郎にはロダンが地獄の門の制作に執念を燃やし続けてきた謎が、解けていくのを感じた。それは神曲への熱烈なオマージュであり、同時に生への飽くなき欲求でもあったのだ。

「よろしい、ムッシュ・マツカタ、早速キンジロー制作に取りかかろうではないか。よい知らせを待っていてくれたまえ」

すでに夕暮れが迫っていた。館の部屋部屋に、召使いがランプを灯し始めた。節くれ立った大きな手と握手を交わして別れた後は、辻馬車に揺られながら幸次郎は強い疲労感に襲われた。風邪を引いたのかも知れない。ホテルに戻って横になっても、地獄の門に蠢く肉体の数々が目の裏に焼き付いているようで、なかなか眠りにつけなかった。

四

その日は意外にも早くやって来た。そう感じたのは、ロダンは仕上げようとはしないという噂を真に受けていたからかも知れない。これからロダンが作った二宮金次郎と初めて出会うのである。車窓から眺める並木には茶色い芽が顔を出していた。

「ムッシュ・マツカタ、これが儂のキンジローである」

勢いよく引き下ろされた白布の下に、石膏で象られた金次郎像が佇んでいた。

注文通り机上に置ける小ささであるが、周囲の像に負けないほどの大きさを感じた。二本の足は大地を踏みしめながらも、大股で力強く歩み続けていく勢いがあった。背中には岩のような薪の束を背負っているが、それをも

のともせず上半身は、しなやかに反り返っている。ページの翻った本を持つ右手は頭上高く掲げられ、左手は、拍子を取るように軽やかに空を切って、振り上げられている。愛でるようにして肉付けがなされたのであろうか、その肌合いは近作に見られる土塊だったものではなく、かつての青銅時代の肌理の細かさがよみがえっていた。細やかさは、とりわけ顔の表情に顕著であった。扁平ではあるが目元や口元の凛とした彫りは、花子の弟ならばと思わせる顔立ちを示していた。顔面は斜め右上に向けられ、ためらいのない一彫りで円形に穿たれた小さな両の瞳は、書物の字面を貫いて天へと注がれているようであった。そして口は明るく開かれ、朗らかに歌っているようであった。

だが、その金次郎像は頭にちょんまげも結っていない代わりに、一糸纏わぬ裸であった。いや、衣服の代わりにしなやかな筋肉を纏っているという方が適切なのかも知れない。そしてその肉体の中心には若々しい男根がそそり立っているのである。

幸次郎は声も出せなかった。見事な青春の表現に圧倒されてしまったのである。この感動は青銅時代に出会った時以来のもの、いやそれ以上かも知れない。我を忘れた時間が過ぎていった。

「お気に召されましたかな。ムッシュ・マツカタ」

彫刻家が、誇らしげに話しかけてきた。

「メートル・ロダン、これは傑作です」

巨匠はほくそ笑んだ。だが我に返った幸次郎には、使命が待っていたのである。

「しかし、メートル・ロダン、私は、この像が帝の机の上に置かれたときのことを考えているのです」

「そうであろう。ジャポンは若さをもっている。ヨーロッパの文明を受け入れて三十年そこそこで、かのロシアを打ち負かしたのだ。ジャポンは生まれ変わろうとしている。いかにもミカドの机上に似合うであろう。」

「その言葉は、日本国民として光栄に思います、メートル・ロダン。しかし一方で日本は古い国なのです。芸術の世界でも裸体は未だに特別な目で見られます。ましてや、帝のお前で裸体をさらすことは、失礼きわまりないことなのです。」

ロダンは明らかに不服そうであった。

「しかし、コージロー、儂に春画を売りつける画商が言うには、ミカドこそがその道の最高のコレクトールであるという。ミカドに献上するために贅を尽くした春画の作品が作られており、そのことを誰もが知っているというではないか。」

「確かにその通りです。メートル・ロダン。しかしながら、日本の春画は日本古来の宗教的な意味を持っているのです。それに日本の春画の男女は衣服を纏っているのです」

ロダンの顔は真っ赤になってきた。明らかに怒り出している。

「分からん、儂にはお前の言うことは分からん。男女の交接が宗教的な意味を持つというのか。儂も好んで女の股をデッサンしてきたし、愛し合う男女の像を作ってきた。この年になってそそり立つ男根を堂々と形作ることもできる。しかし男女の交接そのものを描いたり作ったりしたことは一度もなかった。芸術家の誇りが許さなかったし、何より神を冒涜する思いがあったからだ。そんなことは魂を悪魔に売ったポルノグラフに任せておけばよいのだ。しかし日本の春画には悪魔の臭いはしなかった。それを見て春情を満たす時、日本の春画は地獄から救われる思いすらするのだ。しかしそれが宗教的な意味をもつなどとは、神に対する冒涜以外のなにものでもないではないか。」

「いいえ、日本では男根にも女陰にも魔除けの力があると信じられています。そして交接は豊穣の象徴です。しかし裸体は忌み嫌われます。衣食足りて礼節を知るという言葉の通り、裸は礼儀知らずの極みです。そして日本は命よりも礼儀を重んじる国なのです」

ロダンはもはや怒りを隠そうとはしなかった。

「何を言うか。肉体より襤褸切れの方が大切というだな、この野蛮人め。」

そう言い残すと彼は手を振り上げた。幸次郎はその一瞬の姿が彫刻のように感じた。振り上げた手は、しかし彼に振り下ろされはしなかった。ロダンは、その手で壁の工具棚からハンマーを取り出すと、

「誰がお前たちなんかに作ってやるものか。この作品はなかったことにするのだな。」

と、金次郎像めがけて振り下ろした。石膏は鈍い音を立てて崩れ落ちた。そしてロダンは、奥の間に消えていった。

咄嗟のことで幸次郎は混乱した。立ち尽くすしかなかった。やがて弟子の一人が、砕かれた石膏の破片を片付け始めた。幸次郎はその場から立ち去るほかはなかった。

幸次郎にとって誠に後味の悪い出来事だった。

画商に相談してみると、片目をつぶって、

「ムッシュ・マツカタ、ご心配には及びません。その石膏像は恐らく二番取りですよ。傑作は、粘土像から直接型を取った一番取りを大切に秘蔵しておいて、二番取りをわざと壊して見せて値をつり上げようという魂胆でしょう。ロダンはそういう男です。なんなら私が仲介してあげましょう」

「いや、もうけっこう・・・」

そもそも和魂洋才などという姑息な企てが無意味だったのだ。二宮金次郎の存在は、確かにロダンに傑作を生ましめた。幸次郎にとってはそれだけで十分であった。

親父には黙っておけばいいのだ。聞かれたら、ロダンは何でも引き受けるが、何も仕上げないという噂を伝えて、うそぶいておればいいことだ。

幸次郎は、できることならもう一度ロダンの金次郎像を見たいとも思った。しかしあの出来事以来、彼の館には足が向かなかった。

ロダンのヨハネ像に出会った時には、福音を伝えるために大きく開かれた口や力強い歩みに、あの金次郎像の面影を感じた。ロダンのアトリエに出入りしている画商から、

(とうとうロダンも狂いだした、バルザックの像に粘土のガウンを着せている)

という話を聞いた。しかもその衣服の量感たるや、かつての「カレーの市民」の比ではないという。カレーの市民も東洋の羅漢像を彷彿させたが、そのバルザックたるや生身の肉体は顔だけで全身衣服、まるで日本の達磨の置物のようだというのであった。

春が過ぎても、父正義からは何の催促もなかった。それから二度の春が過ぎ、幸次郎の心もロダンの金次郎を忘れはじめていた夏の朝、明治天皇崩御の知らせが届いた。

古い物・遠い夢

忠内正之

第十一章　茶道具三昧

若い頃からの「古い物好き」が昂じて古陶磁中心の骨董マニアになってしまった。何時の間にか彼此骨董狂い四十年程になるが、途中から茶道具集めに転換することにした。

その理由は、第一に、多少眼が肥えて来て単なるガラクタ集めでは満足できなくなった。第二に、狙いを定めて集中した方が効率的である。第三に、これが最大の理由であるが資金捻出の遣繰りから妻の抵抗に逢って悶着の挙げ句、妻の趣味である茶道具類への転向で妥協しなければならなかったのである。

日本の茶道は奥深い伝統と文化を包含しており、茶道具もまた佗び、寂びの心を生かし汲めど尽きせぬ興趣を呼び起させる。結果オーライであった。

この二十年程の間は、茶道具集めに専念して来た。妻と仲直りが出来たのは幸いであった。形勢は婦唱夫随に逆転したが夫婦の会話が復活した。この章では茶道具関係の成果を逐次紹介致したい。と言って大上段に構えてもさ程、誇り得る優品は少ないのでお恥ずかしい次第である。

（一）茶掛け「烏丸光広卿の色紙」

金龍寺の花を

「茶掛け」とは茶席に掛ける書画の掛物であり茶道具の中で最も主要なもの、一つである。茶掛けには書跡と絵画の二通りあるが、画についてはあまりに高踏的であり、簡単に手が出せないので専ら書跡に傾中した。最初の獲物を紹介したい。

平成四年春の頃、私は「K美術店」を訪問したが店内の雰囲気が、何時もと違う感じがした。ウインドに新しい陳列があった。飛鳥井雅章の書や宗祇の連歌の掛物がある。渋い粉引きの茶碗がある。仁清の水指がある。K店は従来、鑑賞陶器・時代屏風・古画等の専門店である。茶道具はあまり得意ではない筈なので、変った感じがしたのであろう。店主は鼻をうごめかしながら挨拶に出て来て、嬉しそうに笑う。「良い仕入れが出来ました」と言う。聞けば仲介によって或る数寄者の老人からかなり沢山の茶道具類を譲り受けた由。一応整理が出来た段階だと言うが、かなり優品があって古天明の茶釜、芭蕉の俳句の掛軸等は早々と売れた由である。

払い下げした老人はかなりの茶人で、数寄のレベルも高かった様だが、相続人の事情があって道具類をまとめて売却したらしい。商売上のことなので余り詳しくは言わないが、ニコニコした表情からかなり旨い商いが成立したと察せられる。一般的にコレクションの一品を見ればそのコレクターのレベルが分かり、すべての道具類を一括して買っても失敗しないと言うがこの老人の場合も同様のケースらしい。現代では、美術品の価が高くなっており、良品は得難いので今のコレクターには通用しない。

さて私の茶道具への傾斜を知っている店主は、適当な茶掛けがあるので見せたいと言う。それは烏丸光広筆の自詠色紙の掛物であった。値段は少し張るが気に入ったので思い切って求める事に踏み切った。これが茶道具らしい道具購入の第一歩であった。掛物は数年経って、夫婦で共催した初陣茶会の本席を飾った。

次に内容に移ろう。

「金龍寺の花を」

光広

あかなくのゆふへを

のこす鐘の

をとに

ちりしく花を

かさねてそみる

出典は光広著「黄葉和歌集」巻第二・春の部である。

烏丸光広（一五七九―一六三八）は、江戸時代初期の公卿で歌人の准大臣光宣の子として天正七年に生まれた。天正九年三才で従五位下に叙位、同十一年元服、侍従に任じた。以後十一才で右少弁、十五才で左少弁、ついで左中弁、右大弁と順調に昇進を果たした。

しかし、慶長十四年、三十才、参議・左大臣のとき、光広ら青年公卿は後陽成天皇寵愛の宮廷女房たちと集団輪姦事件を起してしまった。所謂猪熊事件である。勅勘を蒙って、それぞれが死罪・配流の身となったが、光広は徳川家康のとりなしで許された。（慶長十五年、後水尾天

の。墨量たっぷりに悠然と運ぶ筆には、光悦流が垣間見える。光広が光悦流の書を書き始めるのは四十才前後。この色紙も油の乗ったその頃の作であろう」との説明を受けた。

和歌は金龍寺の桜を詠んだ光広の自詠である。金龍寺は攝津の国にあって、寺のまわり一帯が桜の名所であったとの事のみが分かった。

金龍寺の所在と現状につき確認につとめたが、当初は仲々判明しなかった。近畿地区には同名の寺が数軒も存在すると言う。（インターネットでの調査）一軒一軒問い合せたがそれらしい該当がなく、茨木市・高槻市に聞き合せても解らずじまいであった。結局高槻市役所の一中年女子職員の記憶で、「自分達が幼少の頃、縁日でお団子を貰った寺ではないかしら」との一言がヒントとなって改めて高槻市教育委員会の文化財課に問い合せて詳細が分かった。金龍寺は高槻市の郊外に存在したが、明治期に荒廃し、戦後の火災にあって今は廃寺となってしまったとの由で資料を得ることが出来た。

資料に依れば、金龍寺の草創は古く恒武天皇延暦年間と言われ、数多の変遷はあったものの第二次大戦前まで存在した由緒正しい寺であった。

金龍寺が中世末期に支配していた寺領はかなり広範囲にわたっていた。天正の頃兵火にかゝって堂宇は消失したが豊臣秀吉の援助を受けて再興した。その後も徳川幕

皇が即位さる）慶長十六年四月参議・左大弁に復帰。翌十七年権中納言、さらに元和二年正二位権大納言に至った。三十八才であった。寛永十五年七月十三日六十才で没した。

家康の信頼が篤く、朝廷と徳川幕府間の斡旋役として活躍した。三代将軍家光より、江戸城近隣の溝ノ口（今の丸ビル所在の地）に江戸在府のための邸を与えられたと言う。

茶の湯を好み、造詣が深かった。また和歌は、細川幽斎（一五三四―一六一〇）より教えを受けた。歌集は「黄葉和歌集」、歌学書は「耳底記」、紀行文ほか多くを著わした。

書は、近衛信尹・本阿弥光悦・松花堂昭乗の「寛永の三筆」に伍して、その盛名を讃えられた江戸初期を代表する能書家である。当時の貴族の子弟の常で、はじめ持明院流に入門した。やがて、定家流、さらに光悦流にも影響を受けて、ついには光広流とも言うべき独自の書風を形成した。それは、数々の逸話を生んだ自由奔放なその性格を反映しているかのように闊達な筆使いにあると言う。

以上が、光広の略歴である。更にこの書跡について識者に鑑定してもらったところ「間違いなし」の折紙をもらった。なお、「この色紙は金の砂子や金箔をふんだんに蒔き、さらに金銀泥で細密な下絵をほどこした華麗なも

府は旧朱印地を安堵して庇護したので繁栄したと言う。

多くの信者達が西方浄土を念じて祈った金龍寺から見る落日の景観は有名で霊場として、また花見、茸狩りの名所として親しまれた。長い歴史の中で、顕官・文人・墨客等が数多く訪れた形跡がある。次の様な歌も遺されている。

春風に今は氷も玉坂の
　池のおもてはさゞ波ぞうつ
　　家隆

うき世には有りへんことも邂逅の
　いけらんとだに思いやはする
　　和泉式部

山寺の春の夕ぐれきて見れば
　入相の鐘に花ぞ散りける
　　能因法師

おほつかないつれの山の嶺よりか
　またさく花の咲きはしむらん
　　西行

茸かりや　ある道をいて　物の中
　　加賀千代

様々に、詠まれた歌によっても如何に金龍寺を中心とする一帯が先人達の信仰を聚め、また今で言う観光名所

烏丸光広の色紙

であったかゞ理解される。

さて、これらの情況を背景にして烏丸光広の色紙を読んで見ると、明らかに能因法師の歌の影響を受けている事が分かる。

能因の歌は新古今にあって「山ざとにまかりてよみ侍りける」と前置きがある。能因はこの地区にかなり縁を持っていたので、光広が金龍寺に来て能因の歌を意識したとして当然であろう。但し年代は六百年程度後となるが、そこに秀れた歌人同志の時代を超越した脈絡が感じられ面白い。

光広の歌の“あかなくの”は飽きない、名残り惜しいの意である。私なりにこの歌を訳して見ると「金龍寺の境内に立って桜の景色を眺めていると。いつまでも見飽きない。とうとう夕をつげる寺の鐘が鳴ってしまった。鐘の音を聞きながらなお散りゆく花の名残りを惜しもう。」この様な意味と思う。

金龍寺からの日暮れの景観は西方浄土の姿を現世に彷彿させると、かねて信じられて来た。まして満山桜の中の絶景を光広は如何なる感慨をもって眺めたのであろうか?。そして先年情事の果てに失った女房たち（大方は遠島となった）への万感を込めてこの歌を詠んだのではなかろうか?。こんな事を想像しながら色紙を目の当りにすると私の心は一段と躍動するのである。

尚、この色紙には「古筆了任」の極と「古筆学研究所」の鑑定書がある。

（一）終わり

祝出版

「10倍の大国に日本はなぜ勝ったか」

滝澤 中 著

中経出版社 1600円+税

20世紀の初頭10倍の大国を破った日露戦争をとおして21世紀初頭からの日本のあり方と行方を解剖する。興（国づくり）、盟（外交）、信（信義）、武（軍事力）、技（技術）、謀（はかりごと）、財（国家財政）、資（資金）、智（叡智）の九つの戦略から日本を分析。
今日本は何が必要なのか、何が足りないのか。
日露戦争をとおして根本から考え直すには格好の書。

南洲屋のこと

吉田忠雄

昭和五十年ころ、私の研究室の院生竹山象三君から「先生、南洲屋に行きませんか」と誘われた。それが南洲屋に通い出したはじめである。

南洲屋は東大農学部の並びにあり、俗に言う泡盛屋であった。三十五%の泡盛を受皿上の小ぶりのコップにこぼれる程度に注いで出してくれる。最初飲んだときは強い酒だと思った。しかし、しばらく通ううちに甘味を感ずるようになった。当時私は四十五歳前後で、体力もあり、この強い酒に違和感はなかった。

南洲屋に通い出してから間もなく、同じ学科の助手の米田さんととなり合わせて飲んでいた。米田さんには私が会社から大学に転職して以来親しくしていただき、今日までその関係が続いている。

はす向かいの席に知り合いが座っていた。その人が「吉田先生に」といって、南洲屋のおばさんにビールを注文した。おばさんはそのビールを私のところには持ってこずに、米田さんの前に置いた。

米田さんは事情をわきまえていて、そのビールを私のコップに注いでくれた。私は理解した。米田さんは南洲屋の永い付き合いのお得意であり、私はどこの馬の骨ともわからない新米の客であった。

しばらく南洲屋に通ううちに、南洲屋における私の地位も着実に上がっていった。最初私を馬の骨扱いしたおばさんも私を大事な客として扱うようになっていった。

南洲屋は家族経営で、かよちゃんとあっちゃんの二人の姉妹が母親のおばさんを手伝って、運営されていた。姉のかよちゃんは美人で、近所に住んでいる米田さんが「昔かよちゃんの浴衣姿をみて本当にきれいだと思った」といったのを聞いたことがある。

かよちゃんの娘がまた美人で店で時々見かけた。息子はいたずら坊主で、ちょろちょろしていた。数年前に見かけたら立派な青年になっていた。かよちゃんの妹の

あっちゃんは気さくな娘で、料理が上手く、南洲屋を背負って立っていた。

南洲屋の常連が飲む酒は、特別なルートから仕入れられた泡盛である。私はこれを十年以上飲み続けた。他所で泡盛を飲んでも、あまり旨いと思ったことはない。沖縄に一度行き泡盛を飲んだがやはりあまり旨いとは思わなかった。強い酒は相性や慣れがあるのかもしれない。

南洲屋の肴の定番は肉豆腐である。年季の入った銅鍋のだし汁の中に豆腐と牛肉が入っている。これを皿にとって汁をかけてくれる。肉豆腐は泡盛との相性が絶妙である。

その他南洲屋で特徴的な肴は、馬刺とさくら鍋である。大勢でいったときはさくら鍋を注文する。柔らかくて体があったかくなり、豊かになった気がする。極め付きは鮟鱇鍋である。南洲屋に通うようになってから初めて鮟鱇鍋をつっついた。こんな旨いものもあるんだと思った。しかし、毎日食べているとそのうまさがわからなくなってしまうと思い、時々しか注文しなかった。

南洲屋で最も多くとなり合わせたのは米田さんである。米田さんとは、私が昭和三十八年に日本化薬（株）から東大に転職して以来の同じ学科の同僚である。研究室は違うが、同じ火薬分野のとなりの研究室同士なので、親しくしていただいた。

学科行事、野球などでよくご一緒した。そして良く世話をしてくださった。もう一面は、工業火薬協会での関係である。米田さんは疋田強教授（工業火薬協会会長）、平田理久三さん（同事務局長）の下で火薬協会の世話をしておられた。私は火薬協会の編集委員をしていた。米田さんは仕事が良くでき、少々口は悪いが、信頼できる人であった。またお互いに酒と野球が好きであるという共通点もあった。米田さんは現在火薬学会の事務局長であるが、時々お会いして仕事を頼んだり、一緒に飲んだりする。

次に、南洲屋で多く顔を合わせたのは竹山象三君である。竹山君も酒が好きで米田さんにかわいがられた。竹山君が南洲屋を私に紹介してくれた恩人である。それ以来私は米田さんと飲む機会が多くなった。

竹山君が修士の院生のころ、私と二人で密封セルDSCという方法を開発した。この方法は安全の方面で今でも使われている。また二人で公害の研究も行い、産業公害防止協会から優秀論文賞をいただいた。

竹山君は博士号をとってから、近畿大学、福岡大学で働き、現在は岡山商科大学の助教授である。米田さんと私は、竹山君と安藤君に招待され、京都に遊んだことがある。お返しをしなくてはと思っているが、未だ果たせないでいる。昨年の年賀状には、最近ヨットを楽しんでいると書いてあった。

私の竹山君に相当するのが米田さんの越光男君である。

越君も米田さんと共にときどき南洲屋に現れた。私たち四人で飲んで、酔うと二次会に行き、挙句の果ては米田さんのお宅にお邪魔して泊めてもらうこともあった。米田さんの奥さんには大変ご迷惑を掛けた。

ときどき越君のお嫁さんの話が出て越君は冷やかされていたが、残念ながら私は越君の奥さんを見ていない。越君は二人の娘さんの写真を常に身につけていて、私も見せてもらった。東大と京大に入った自慢の娘さんらしい。

私が五年前に法政大学から足利短期大学に移ったとき、米田さんから足利で花見をやるようにいわれた。二年目にこの要望は実現した。足利短期大学がその中腹にある織姫山は、四月初旬には満開の桜で覆われる。その頂上の特等席を予約して米田グループ、吉田グループ、火薬グループ、吉田家族で四月の第一日曜日に花見大会を開いた。

絶好の日和に恵まれ、この花見大会は大好評であった。米田グループからは、越君と橋爪さんがきた。小川先生、若倉さん、黒沼君夫妻、新井君家族もきた。彼等はその後足利工業大学「風と光の広場」に場所を移して続けられている足利花火大会の常連となった。越君は若くして東大教授となり、現在将来を嘱望される要職にあるらしい。うかつには越君と呼べなくなった。越君はその人柄から、最初の花見大会で知り合った中華屋「子鉄」の親父と親しくなり、足利に来たときは二次会の後で子鉄に行っている。

藤原謙二君は、竹山君の後で私の研究室で博士の学位を取った人である。酒はまったく飲めないが、付き合いが良く、私たちの酒の席に良く付き合ってくれた。私はこういう人を尊敬する。南洲屋にも米田さんや竹山君と共に時々来ていた。

藤原君は酒が飲めず車を持っているので、便利であった。南洲屋で飲み終わってどこかに行くときは、藤原君の車に乗って出かけた。しかし、それが裏目に出たことがあった。南洲屋で飲んだ後、総勢五人が藤原君の車に乗って、本郷から新宿に向かった。途中の交差点で、赤信号で止まった。

そこは交番の前であった。藤原君以外は、酔っているので車の中で騒いでいた。交番の警官が車の中を覗いた。まず藤原君が飲酒運転の嫌疑をかけられた。この嫌疑は晴れた。しかし、定員超過で罰せられた。ある期間の運転免許停止である。藤原君には申し訳ないことをした。

藤原君は一年間ロンドン大学のユニバーシティカレッジに留学した。指導教授のリッド先生からは「藤原君は良くやった。彼のためなら何でも援助するつもりです」という手紙を貰った。

藤原君の特技は、料金を負けさせることである。研究

室や学科で毎年スキー旅行に行った。藤原君が係になると、バス料金が驚くほど安くなった。値切りの名人である。独特の口調で交渉し、相手はいやな顔をしないで負けてくれる。人徳であろうか。

南洲屋の会があり、私も長年の付き合いで入れてもらった。東大では米田さんが代表幹事であった。夏は東京湾の納涼船に乗ったり、春秋は旅行に行ったりした。そのたびに、本郷界隈に住む南洲屋の常連の人たちとも親しくなった。

その中に出版社養賢堂の若旦那がいた。養賢堂は仙台ゆかりの農学系の出版社である。お得意様の農学部の熊沢教授と時々一緒であった。おかげで私は熊沢先生とお話が出きるようになった。

背が高く、あごひげを長く伸した人がたまに南洲屋に現れた。おばさんは大事に扱っていた。どこかの馬の骨ではないことはわかった。誰かから東大経済学部宇沢弘文教授であると聞いた。その後文化勲章を受けられた。ある席で会って、「南洲屋で見かけました」と言ったら苦笑いしていた。

南洲屋は研究室の会合でも利用させてもらった。あるとき、誰が泡盛に一番強いかという話になった。私の場合適量は二杯である。四杯以上飲むと翌朝にこたえた。正式記録は七杯となった、加藤一成君である。それほど乱れた様子はなかった。加藤君は羊羹を肴に酒を飲むそうである。正式記録とはされなかったが、それ以上飲んだとされる人もいた。この人は時計をはじめとして持ち物を殆ど壊してしまったという伝説がある。

工業火薬協会編集委員会の忘年会も南洲屋でやらしてもらった。酒の飲める人には大好評であった。発破工学の権威である山口梅太郎先生も大変喜んでくださった。山口先生は俳人山口青邨先生の長男である。二代そろって東大教授を務めた珍しい家系である。

希ではあるが酒の好きそうなお客を南洲屋にお連れした。その後資源環境技術研究所所長となる横山長之先生を南洲屋に案内して、泡盛を飲んでもらった。うまいといって飲まれた。その後お会いしたとき、「泡盛はいかがでした」とお聞きした。「少し腰をとられました」と言われた。やはり泡盛は強い酒なんだと思った。

南洲屋は東大農学部のとなりで、ある意味では一等地である。予備校河合塾がそこに建つとの噂が立った。それは実現しなかったが、南洲屋は土地を売って立ち退いた。米田さんと私は話した。「われわれは命拾いしましたね」と。そのころ二人とも泡盛の酒量が上がって内心びくびくしていたからである。

南洲屋はその後千駄木に店を出した。時々そこにも顔を出さしてもらった。しかし、私は東大を停年になり、法政大学に移ると、自然に足も遠のいた。その後千駄木の店も閉めたと聞いた。

小野小町物語（四）

十五　深草少将の百夜通い

島津隆子

大昔から街道と旅情とは決して切り離すことができない。人が旅情を求めて旅するかぎり、その出発点に立ち、地の道を自らの足で歩かなければならない。

旅人のいるところ、道は永久に生きつづけることだろう。

自然の中にも至るところ道がある。一峠への山道、松林の小道、谷あいの細道、暗い獣道、小高い丘への坂道などなど……。

そして、情念の道はそれよりさらに多い。

支配者たちの栄光の道、挫折の哀しみに満ちた敗者の道、落人や捕われ人の道、道、道。また、信仰と思索人の一筋の道もある。

幽玄の道、遊興と享楽の道、さまざまな恋の道、戦乱の道、反逆の道、巡礼の道、詩情豊かな道、道、道。道は行き交う人々のいろいろな思いを運ぶ。

そこを往来した人々の哀しみや喜びの足跡を刻みつけた何気ない道に、ひたむきな思いをかけてこそ、道も人も生き生きと甦るというものだ。

今、千年の想念を抱きながら、深草少将の歩いた幻想的な恋と詩情の道を辿ろう。

花の色は移ろいにけりないたずらに
わが身世にふる眺めせしまに

この和歌に描かれた美を惜しみ、惜しみつつなおも、一輪の花に妖しい艶を滲ませようとする、狂おしい情念の男性がいた。それは、ひとりの美しい宮仕えの娘に入れあげた年嵩の京の貴人であった。

年齢、身分の差も意に介さない恋愛至上主義者は、伏見区、現在の京阪線墨染駅近くの欣浄寺付近に立派な邸

だが、困るのは女性がノーでも男性の側が一方的に求愛してやまない時だ。それは女性にとれば少々厄介なことになる。つまり男性は「百夜通えば恋が叶う」という、当時の恋愛観というか、掟に従うことになる。

恋愛観とか掟といっても、それは迷信、慣習の類である。だが、迷信であっても、かなわぬ恋を成就させようとする非常手段としては、今日にも通じるものだ。あの〝押しの一手〟として。

深草少将はその山道を小町の許に通いつづける。

長い土塀が格式の高さを思わせる貴族公家の高級住宅街を、人目を忍ぶように足早に行く。

やっと東山の深い山道を抜けると、広々とした田園の風景が広がり、あとは小高い丘陵の坂道があるばかりだ。

ここまで来ればもうしめたもの。〝小野の里〟は目と鼻の先である。蛇行する細い道程を少将は急ぐ。

薄暗い竹藪に苔むした石灯篭が、人間の像のように傾いて立っている。池の面には落ち葉が腐蝕して溢れるほどだ。しかし、小野の里に入ると、少将の目にはそれら一つ一つが、雅な気品漂う名園のように映る。

やがて、小町の住まいの前に佇む少将の目は熱く燃えているかのようである。

「これで五十日目、やっと半分が過ぎた」

少将はそう呟くと、傍らの石に腰を下ろし、大きく深い吐息をつく。そして、今日も訪ねた印に五十個目の榧の木の実を門口に置いた。

しかし、小町はそんな少将の前に姿を現しはしない。それどころか少将の熱意も意に介さぬ風情で眠っているのだ。

思いつつ寝ればや人の見えつらむ
夢と知りせばさめざらましを

その人を思いつづけながら眠ってしまったので、恋しい人を夢にみたのだろう。もし夢と知ったらずっと覚めずにいようものを。

黄昏の薄明かりの中で、小町は目を覚ました。現実には満たされることのない想念でも、夢で満たし得た痴情に、わずかに動揺する心があった。

少し乱れた髪の陰影が、灯を点けた障子を透して流れるようだ。

「ああ……」

少将は嘆きにも似た呟きをこれまで何度発したことだろう。しかし、不思議に悔恨はない。少将は単純に、また、来た道を帰ってゆく。

少将の通う時間帯は、その日の天候や歩行の状態によってあやふやになってきて、白昼、小野の里に着いてしまうこともある。そんな時さえも、小町は姿を見せはしない。

うたた寝に恋しき人を見てしより
夢てふものは頼みそめてき

うとうとした転寝にさえ恋しい人を夢に見てしまった。現実とちがって頼りにならないことはわかっていても、夢にこそ頼みをかけるような癖がついてしまった。

小町はずいぶん睡眠をとるようだが、それが美しさを保つ所以だったのだろうか。恋愛小説も映画もない当時のことゆえ、夢が恋のスクリーンだったのかもしれない。

だが、日毎の強行軍に疲れている少将にとれば、それどころではない。衣服は汚れ、足の皮は剥け、睡眠不足で目は赤く充血していた。

そうした少将のひたむきな姿を垣間見て、切ない心境を知りつつも、なぜか小町は応えようとはしない。

やがて秋の季節が訪れる。

秋の夜も名のみなりけり逢ふといえば
事ぞともなく明けぬるものを

秋の夜が長いというのは名前だけのこと。たとえ人と逢ったところで何ということもなく、瞬く間に明けてしまうだけですもの。

そんなある夜、少将は一つの影を見た。もちろんわが身のではない。他の、それも男性の影である。

限りなき思いのままに夜も来む
夢路をさへに人はとがめじ

限りない思慕のままに、また夜が来て、その夜が過ぎてゆく私の夢の通い路までも、世間の人は咎めることはないでしょう。

と、小町が誘う。相手は、

したにのみ恋ふれば苦し玉の緒の
絶えて乱れむ人なとがめそ

心の内でだけ恋しているのは苦しいものです。幾つもの玉をつなぐ緒が切れるように、思い切ってひたすらわが心の糸を乱そうと思う。世間の人々よ、このことを咎めるなかれ。

そう返歌したのは、多分、紀友則(きのとものり)だろうと、少将は思った。

そしてまた、ある霧雨けむる夜には、

今はとてわが時雨(しぐれ)に降りぬれば
言の葉さへに移ろいにけり

今はお別れのときです。私の身は時雨にあって冷えてゆくように、お約束の言葉さえ、季節が移りゆくように変ってゆきます。

と、戸口に立つ小町が言うと、

人を思う心木の葉にあらばこそ
風のまにまに散りも乱れめ

あなたを思う私の心が、木の葉のように心ここにないものなら、風に吹かれるままに、どこかへ散って乱れ飛んでいきましょうに。

これははるか年下の美青年小野貞樹(さだき)の震えるような声だった。それから二、三度の押し問答があったが、小町はぴしゃりと戸口を閉ざしてしまった。その前で、しばらくは身動きひとつしないで立ち尽くしていた貞樹であったが、やがて、悄然と立ち去っていった。

少将はこれまでに、移り気そのものの小町を、何度目撃したことだろう。

窓越しに月の光が射し込んでいる。月は無表情だが、燐光を放つ空気のように、部屋中を隈なく照らしている。そして、静寂な夜をよそに、揺籃(ゆりかご)の中で眠っているような小町の姿は、発光する毒花にもみえる。

少将は音もなく、帰路につく。

それは、恋する女と、訪問者に対する、せめてもの男らしい度量にちがいない。

朝になる。

極度の寝不足と疲労からくる感覚の鈍化(マヒ)を、少将は化粧と身嗜みで繕おうとする。

髪を梳り、白粉や薄紅を引く。そして、季節に似つかわしい衣装をつけ、香を滲ませるのだった。それは、王朝の絵巻物に展開される、あのしめやかな落ち着きと、ほのぼのとした教養の深さと、端麗な容姿そのものだ。

その風姿はあまたの上臈や貴公子からさえ一目おかれる存在でありえたはずであった。

しかし、この冬を迎えて、少将の頬はこけて、この世のものでないほど蒼ざめている。打萎れた風貌、硬直(ひきつ)った頬、落ち窪んだ目、苛立たしげな足取り。どんな化粧も、身の飾りも、今は暗雲に閉ざされた陽の光のようなものである。

その日は朝からどんよりと重く曇っていた。

少将は東山の山道を出て、田圃が灰色に広がるところで急に疲れを感じて立ち止まった。

「ああ……今日で九十九日目か……」

溜息まじりに呟いて、空を仰いだ。

その時、少将は軽い目眩を覚え、その立ち眩みの中に螺旋を描きながら舞い降りてくる白い雪片がみえる。

体が急に冷えてゆくようだ。手や足の温もりの感覚が消え失せてゆくのがわかる。

少将は自然とその場に腰を落として屈みこんだ。そして、どのくらいの刻(とき)が過ぎたのか？　その丸い背は孤独と寒さにじっと耐えている風だった。

死の予感がかすかに少将の胸の隙間を掠めたようだ。その瞬間、少将は反射的に立ち上がろうとしたが、雪が積もりはじめた道端に、前屈みにのめりこんでしまった。

少将の顔は雪をのけて、湿った地べたに突っ伏していた。痩せた顔の深い皺に泥が滲みて、汚れた。

少将は地を這った。寄る辺ない自らの体力が、抗し難い何ものかに引きずられるように……。だが、それも所詮、空虚な動作に過ぎなかった。

枯色織りの唐衣の盛装は泥にまみれ、芋虫さながらに這う少将の顔は、極度に憔悴して色を失い、次第に動作も緩慢になっていった。

「ああ……」

引き攣った顔で空を見上げた少将の両の目は、重い涙をたたえている。その涙の中には、今しも暖かい部屋に導き入れようとする、人の心を惹きつけずにはおかない小町の、嬌色ある身のこなしが映っている。

その疑う余地のない無邪気さで、風のように翔んできて、自分の上にそっと白絹のベールを何枚も掛けてくれ

るのを少将は感じる。そこには裏切られた恋愛も砕かれた心も、閉ざされてゆく狂おしい心もない。

あるのはただ、説明しがたい小町という華麗な一輪の花に包まれてゆく、もう一日の奇跡を夢見るだけのわが身である。

だが、幻影がそうであればこそ、しんしんと降りしきる現実の白い雪のベールは、掌に九十九個目の榧の実を握りしめたまま、埋もれてゆく少将の姿を痛ましくみせつけるばかりだ。

悲劇的でありながら、執拗な求愛と犠牲への嗜好―それだけの単純な道こそが、この深草少将の辿った生涯のすべてであった。

ところで、この平安王朝を舞台にした悲恋物語は、謡曲の「通い小町」とか「百夜通い」として今日まで語りつがれている。だが、深草少将とは一体何者なのかという点になると、皆目定かではない。古来から噂されているのが在原業平と僧正遍昭である。他は架空の人物というわけになる。

ただし、前者は余りにも説得力に乏しい。業平は平城天皇第五皇子の子であるが、その官職は右近衛中将で、相模守と美濃守を兼務していたので多忙の身であった。一人の女性の許に「願」をかけて百日間も通いつめるほどの暇はないはずである。

また、別称にしても「在中将」「在五の君」(在原五番の子の意)といい、「深草少将」という名称には結びつかない。

その上、業平は例の藤原高子との恋愛沙汰で東国に左遷され、その地で五十六歳で没していることは確かなことらしい。

また、その耽美的享楽的で多情多感な性格は、いかに絶世の美女とはいえ、ひとりの田舎娘にこうまで溺れるなど、一寸考えにくいことかもしれない。

では、僧正遍昭はどうだろうか。

遍昭は賢帝の誉れ高い桓武天皇を祖父に、漢文学者として有名な大納言良峯安世を父にもつ。本名を良峯宗貞というが、仁明天皇の寵愛をほしいままにし、右近衛少将の時点で、突然出家してしまう。そのまま宮中に留まれば右近衛中将、同大将と順調に出世したであろうことは間違いない。

そんな超エリートコースを、突然放棄するなど、よほどの原因か、理由がなくてはならない。しかも、出家した年齢は三十五歳という男盛りの年代である。

一体に遍昭は、客観的に美を歌う洒脱で軽妙な即興歌を得意としているが、それこそ言わせてもらえば、出家と同様、遍昭の隠れミノというべきものではなかったか。

僧正といえば、後には上に大僧正、下に権僧正が置かれはしたが、当時は尼僧や寺院法務を統括する僧侶の最

高職である。

彼ははじめ遍照、つまり、あまねく照らすという僧号を考えたらしい。たが、所詮、多くの人々に仏果、仏意を、照らしもたらすなどという倫理的な人間ではない。ひとえに明(昭)むという「遍昭」の名こそが自分に相応しいのだと考えた彼は、その号をもって花山の元慶寺座主になった。そして、別称として「花山の僧正」「良僧正」などと呼ばれたのだ。

しかし、俗世間に「良僧正」というもう一つの呼び名のあることが気にかかるところである。

俗世間を絶って出家した者が、良峯の良をつけ、「少将」と呼び、また呼ばざるをえなかったところに、俗世間を絶ち難い遍昭の生き方があったのではないかと思われる。

天つ風雲の通い路吹きとじよ
おとめの姿しばしとどめん

うら若き乙女なら知らない者はない、あの百人一首の詠み人こそ、遍昭なのだから、彼が小町に永遠の乙女の姿を見たとしても不思議はない。さらに、石上寺での小町と遍昭との問答歌など、出家後の彼の性癖をいっそうよく現してはいまいか。

深草少将とは伝説化された遍昭の姿でもあろうか。

丙午の女（五）

太田和貞

「蛍火」開店

斉藤真紀がこれまで看護した患者のなかでは、桂女がいちばん有名だった。

俳壇の長老として、小料理屋の女将として、華やかな恋の遍歴者として脚光を浴びてきたが、その脚光のひとつ、ひとつが消えた今、老残の身を狭いベットに横たわせていた。

その小さな体を見ていると、『蛍火』の句とあまりにも掛け離れているので、違和感があった。

桂女をよく知るために、『蛍火』などの句集を買った。

やはり、恋の句に真紀は心を引かれた。

恋を得て　蛍は草に　沈みけり

人盗めども　ものは盗まず　簾捲く

蛍火や　女の道を　ふみはずし

波瀾の人生を十七文字に凝縮させた桂女のすばらしさに、真紀は圧倒された。

しかし、真紀の前にいる桂女は、個室のトイレにも満足にいけない老婆に過ぎなかった。

壁伝いに、苦労してトイレにいく桂女の姿に見兼ねて、真紀はベットの脇に簡易便器を用意した。

最初は、便器を嫌って無理してトイレに通っていた桂女も、腰の痛みに負けて便器に座わるようになった。

各病室の検温が終わって桂女の個室に戻ってきても、桂女は、まだ便器に座わっていた。

「桂女さん、便秘ですか?」

真紀が聞いても、桂女は返事をしなかった。

便器に座わっている姿が、その返事だった。

「桂女さん、ちょっと失礼します」

真紀は下腹部を押してみた。左の下腹部にコリコリした固形物の感触があった。

「桂女さん、何日ぐらいお通じがなかったんですか?」

真紀は桂女の顔をのぞき込んで聞いた。

聞いた途端に、

「新橋の女将は、トイレに入る姿も、出てくる姿も、お客さまに見せてはならないのよ」

と言っていた桂女の顔を思い出した。

桂女を静かに立たせて、ジャージのパンツなどを脱がせてから、逆向きの姿勢で便器に座わらせた。

右手の指先を消毒してから、軟膏を塗った。

「痛かったら、痛いと言ってください」

真紀は指を桂女の肛門に深く入れた。指先に、固形物が触れた。直腸の粘膜を押し広げて、宿便に爪を立て掻き出そうとしたが、宿便はクルリと向きを変えた。

「宿便をとらないと、下剤はかけられませんからね」

真紀は桂女にやさしく言いながら、折り曲げた指先を宿便に突き立て、そーっと手前に掻き出した。

固まって黒くなった宿便がコロッと出てきた。

「ひとつ出てきましたよ。出口の固くなったのが取れれば、あとはスムーズに出てきますからね」

真紀は根気強く、黒く固まった宿便を掘り出した。

桂女は時々、腹に力を入れることはあっても、痛いとも、嫌だとも言わなかった。

直腸の粘膜が緊張したり、弛緩したりするのが指先に伝わってきた。

「さあ、これで貫通です。これからは、アローゼン（緩下剤）を忘れずに飲みましょうね」

真紀は手早く、お尻の始末をして、桂女がお気に入りのピンクのジャージを着せてベットに寝かし付けた。宿便との格闘に疲れたのか、桂女はすぐ眠ってしまった。

（こんなに小さかったかしら…）

桂女の体なりに起伏している毛布の山脈の低さに、真紀は胸のつぶれる思いだった。

そこには、人を悲しませる恋も、細腰にして不逞なりの気概も潜んではいなかった。

桂女の呼吸のままに、小さく上下している毛布の動きだけがあった。

昼食を持った真紀が桂女の個室に入ると、桂女は和服姿で文机の前に正座していた。

「お着物、よくお似合いですよ」

「ありがとう。真紀さんは、よく褒めてくれるわね。女は褒められると、その気になるのよ」

桂女のこの言葉に、真紀は驚いた。

（脳の神経細胞が繋がったんだ）

と思った。

「なにをお勉強ですか…」

「いいえね。お店のお品書きを考えているところなの。冷蔵庫に牛乳とジュースしか無いので、どうしようかと迷っていたの。真紀さん、築地の魚清に電話して、生きのいいお魚をみつくろって持ってくるように頼んでちょうだい」

桂女の変わりように、真紀は目をみはった。

腰が痛いからと、いつも体を折り曲げていたのに、ビシッと背筋を伸ばして正座していた。

新橋の路地裏に開いた小料理屋「蛍火」で約五十年間、毎日書き続けてきた「お品書き」の記憶が残っていたことに真紀は驚いた。

その反面、午前中に真紀が宿便を指先で掻き出したことは忘れているようだった。

「どんなお魚がよろしいでしょうか？」

真紀は桂女に逆らわずに聞いた。

「なまこの酢のもの、小鯛のうしお汁、それからおいしいお刺身もお出ししましょう。木の芽田楽、塩いり銀杏。白身魚のみそ焼きには、いろどりに菊の花を添えましょう。納豆の小松菜あえに、もみのりを散らしましょう。いろいろと想像するだけで胸がワクワクするわ」

真紀に語り掛けてくる桂女の瞳はキラキラと輝いていた。白い肌の顔に、ほんのりと赤みがさしていた。

真紀が一礼して、部屋を出ようとしたとき、

「お酒は辛口ですよ。忘れないでね」

と念を押された。

桂女からいろいろと宿題を投げ掛けられて、真紀は気が重かった。

「お酒は辛口ですよ」と駄目押しされたのが、いちばん心にこたえた。

桂女が元気になるならば、桂女の願いを聞いても、いいなと思った真紀も病院内でお酒を出すことの是非はわきまえていた。

今にも死にそうだった桂女が急に元気になり、あれほど生き生きと目を輝やかせ始めた小料理屋ごっこの真似事をさせてやりたいと真紀は思った。

桂女に残された時間は、そんなに無いはずだった。

ベットに寝付く前に、最後の願いをかなえさせてやりたかった。

それは、桂女ばかりでなく、入院患者にも好ましい影響を与えるだろうと真紀は思った。

真紀に相談された婦長は、一瞬、顔をこわばらせた。

「わたしにも決め兼ねます。院長先生に、うかがってみましょう。真紀さん、院長先生によくご説明してください」

二人で院長室に入るとき、真紀は半ばあきらめていた。桂女の濃い口紅と和服姿がチラッと頭の隅に浮んで、消えた。

院長は真紀の話を黙って聞いていた。真紀が話し終わると、院長は「フーッ」と太い息を吐いた。

「わしは、長い間、桂女さんに恋い焦がれていた。恋い焦がれると言っても、桂女さんの妖艶な俳句だからね。誤解しないでくれ給え。だから、わしは桂女さんに、わしの病院に入院して貰った。桂女さんが喜ぶことなら、なんでもやりたいと思っている。小料理屋で使う食器はわしの家のを使えばいい。蛍火という暖簾もつくろう。これでも病院だからね、酒は勘弁して貰うことにしてくれ。それから、もう一つ……」

ここで院長はことばを切って、婦長と真紀の顔を見た。

「わしをその蛍火の板前に使って貰いたい。勿論、無給で結構。板前にしてくれたら、蛍火の経費は一切合財、わしのポケットマネーから出す。これで手を打とう」

院長は笑顔で、二人の顔を見た。

婦長と真紀は深々と頭を下げて、しばらく顔が上げられなかった。

こうして、病院内に開店した「蛍火」は一日限定五人の客（入院患者）を迎えて、三か月と十二日間、続いた。

それから三月後、桂女はこの「蛍火」の個室で亡くなった。

享年九十六歳。

辞世の句も、戒名も無い。

（完）

「まんじ」季刊発行内規

	（発行日）	（原稿締切日）〔注〕
春季号……	二月一日……	十二月三十一日
夏季号……	五月一日……	三月三十一日
秋季号……	八月一日……	六月　三十日
冬季号……	十一月一日……	九月　三十日

〔注〕円滑な発行を期す為「一週間前編集長宛到着」に努めましょう。

遥かなるカメルーン（六）

太田精一

住民の多くはムスリムで、ズボンとシャツの上に長い貫頭衣のような服を着て、頭には色とりどりのデザインを施した帽子を被っている。女は踝まで隠れるワンピースを着て、腰や肩に色彩豊かなデザインの布を巻き付け、頭には外衣に合った色調の布を帽子代りに被っている。

古くから住民が住んでいた街の一角は、細い道が迷路のようになっていて、円錐形の藁葺の屋根が地面近くまで垂れ下がっている家が多い。その屋根のデザインは、家によって少こしずつ異なる。壁は、泥壁で塗られているがよく見ると装飾が施してある。

ンガンデレは、数世紀の間、幾多の部族が侵入し、異なる部族間の征服や略奪が繰り返されてきた。

桂木の訪れた一九七五年にはスーダンから来たキルディス族と最も組織化され活動的なムスリムのフルベ族が多数を占め、それにチヤド盆地から来たアラブ系のチョア族が混在していた。

（三十二）

桂木の家族は、カメルーンエアーラインのプロペラ機に乗りドアラ空港を飛び立った。一九七五年二月九日早朝のことである。空席は少なく機内は混雑していた。鬱蒼とした密林の上空を越え、首都のヤウンデを経由しての三時間を超える空の旅だ。やがてアダマワ高地のンガンデレに到着した。空港は乾いた爽やかな風が吹いていた。

ンガンデレは高原の街である。標高千百五十メートル、背の低い草や潅木の台地が広がり、ところどころ落葉樹が見られる。

この街はまた北カメルーンの交通の要衝でもある。ドアラからヤウンデを経由して南北を結ぶトランスカメルーン鉄道はここが終点となっている。

中央官庁の出先機関も多く、人口も五万を超える。

ンガンデレの街のあるアダマワ高地は、森林と草原地帯の境い目にあり、双方の顔を持っている。草原地帯とはいえ南は樹木も多く、赤土の中にバオバオの木などが生えている。北部は、牧草の多い大草原で、刺のある潅木が生え、バオバオの木もまばらにしか見られない。桂木の訪れた時は、乾季であったが牧草は枯れることなく、山羊、羊、セブ牛（瘤牛）がいたるところに群をなし草を食んでいた。

空港からホテルに向かう途中、桂木たちを乗せたタクシーは牛の群に道を塞がれしばらく立往生した。すると群れを追う父親と少年が現われて、牛を道路脇に寄せ、車の通り道を空けた。ドアラでは味わえないゆったりとした時間が流れている。桂木は、空を見た。抜けるような青空の中に白い雲が、漂っていた。

ホテルはトランスカムホテル、ンガンデレでは一流のホテルだ。桂木の家族は、チェックインを終えると直ぐ市内見学をするためタクシーをチャーターすることにした。

「ンガンデレの駅、マルシェ（市場）、部族の有力者の家、一般市民の家の順で案内して貰いたい。二時間ほどチャーターしたいが、いくら位かね」

「一万ＣＦＡフランです」

当時の価格で日本円に換算し、一万二千円位である。

「それは高過ぎる。三千ＣＦＡフランでどう」

「旦那、それは無理だよ。三千ＣＦＡフランでは、ガソリン代位しか出やしない。せめて八千ＣＦＡフランは出して貰わないと」

「それでもドアラに較べて高いな。もう少こし安くならないか」

桂木は、子供たちを乗せて走ることになるため、あまり値切って乱暴な運転でもされ、怪我でもしてはつまらないと考え適当なところで妥協するつもりであった。

「旦那は、ドアラに住んでいるのですかい。カメルーンにいる人なら仕方がない。五千ＣＦＡフランに負けとくよ」

「いいだろう。それで頼む。ンガンデレの街は小さいから、二時間もあれば、ほとんど見学できるだろう」

「そうですね、博物館に入って見学したりすれば、二時間では足りないかも知れないが、ざっとひとわたり街を見るだけなら、十分でしょう」

予定通り市内見学を終えた桂木の家族は、ホテルに戻り夕食までの間ひと休みすることにした。

夕闇が迫るにつれ、外の冷たい空気が部屋に流れ込み、由美は、急いで部屋の窓を閉じた。

夕食の時間となった。桂木の家族は、ホテルのレストランで食事をすることにした。ヨーロッパ風のレストランは、ホテルを除いてはほとんど皆無に近く、メニューも限られていた。

桂木の家族は、野性のアンチロープ（かもしか）のステーキを注文した。つい昨日まで草原を走り回っていたのであろう。肉は固く、筋が多い。草の臭いが鼻をついて、桂木にはとても美味しいと言える代物ではなかった。

カメルーン人には、これ位固い肉でなければ歯ごたえがなく食べた気がしないのかも知れない。

（三十三）

翌日、桂木の家族は、プロペラ機に乗り、午前中にンガンデレを発ちガロワ経由でマロワに向った。マロワには二時間足らずで着いた。

桂木の家族は、マロワ空港から百三十キロ離れたリュムシキに宿泊を予定していた。リュムシキは、ナイジェリアとの国境のマンダラ山地にある小さな町である。

「ムッシュー桂木、お待ちしていました」

マロワ空港に降り立った桂木の家族をエチオピア人のような顔立ちの男が出迎えた。トランスキャップを通し予約していた同社の契約運転手である。

「出迎え有難う。これからリュムシキまで行ってそこで一泊する。翌日ワザの自然公園を見学して再びここに戻って来る旅行を計画している。そのことはトランスキャップから聞いているね」

「ウイ、ムッシュー、私は、ハモワと言います。これから二日間、私の車でリュムシキとワザをご案内します。乾季ですから、車は通ることができますが、でこぼこ道で、川床を走ったりしてよくパンクします。ですから予備タイヤは二本積んで行きます。でも心配ありません。私にまかせて下さい」

ハモワは自信あり気に胸を叩いた。

マロワを午後二時に出発した。桂木はモコロ経由でリュムシキに入ることとした。マロワ付近の道路は舗装されていたが、途中から砂利道となった。干からびて、砂埃りが舞い上がり、車のすれ違う度に前方は煙幕を張ったようになる。その埃道を水瓶を頭に乗せてトボトボと歩く女性をときどき見掛けた。水の大切さがひしひしと伝って来る。

砂埃りを浴びて黙々とただひたすら、家族のために水を運ぶ姿は、桂木には求道者のように見えた。

モコロからリュムシキまでの道は、とても道路などと言える代物ではなかった。干からびた川床がところどころ道路となっている。乾季だけ通行できる道だ。運転手は、川床の石ころや流木の剥出した個所を避けて通る高度な運転技術が要求されることになるのだ。予備のタイヤまでパンクしてしまえば手の施しようはなく、山中で野宿しなければならない。幸いにしてハモワの車は一度もパンクすることはなかった。

いよいよマンダラ山中に入った。八百～千メートルの

岩山が続く。長い年月の侵食によって母岩が塔のように聳え立った景色が、目の前に現われた。

陽が沈みかける頃、桂木たちの車はバンガロー形式のホテルリュムシキに到着した。飾り気のない部屋にツインベットと子供用の補助ベットがポツンと置いてあった。

大きな食堂が山の斜面の少こし平坦となった土地に設けられていた。テーブルは野外に置かれており、各テーブルにはローソクが灯っていた。テーブルを囲んでフランス語、ドイツ語が飛び交っている。トランスキャップのフランス人職員の言った通り、小さな子供連れの家族はいない。

月が上った。月光は、屹立したカプシキの奇岸を照らし、地上に影を投げかけている。まるで月世界を写し出したような冷たく乾いた世界が広がっていた。この光に照らされ荒涼とした静寂の中に、レストランの喧噪は吸い込まれ幽な囁きとしか聞えない。

桂木は、アンドレ・ジイドが「リュムシキの景観は世界の三大美観の一つだ」と言った言葉を思い出した。

風化によって形造られた自然の造形が、夜のしじまの中で、月の光を浴びて岩肌を晒し、巍然と佇んでいる。美しさを超越した幽幻の世界がそこにあった。

食事を終え、バンガローに戻る途中、再び奇岩を見上げた。月は、岩の上の真上に差しかかり、あまねく地上を照らしている。だが、そこには生命の息吹は感じられない。レストランのローソクの灯と微かに聞こえる人の声が生命の営みを感じさせてくれるだけであった。

バンガローの部屋の中には暗い裸電球が一つぼんやりと灯いていた。シャワーはあるが水しか出ない。マンダラ山地の夜は冷える。気温も十度を下回っていた。

桂木は、体の汗と埃を洗い流すため水のシャワーを浴びた。しばらく水を体に掛けていると急に震えが来て止まらなくなった。

（マラリア原虫が、ここに来てまた暴れ出したのかも知れない）

不安が桂木の頭の中をよぎった。

震えながら長袖のシャツを着て、毛布を頭から被り、一時間ほどじっとしていた。すると体が温まって震えが止まった。

「シャワーは浴びないほうがいいよ。タオルに水を浸し、体を軽く拭く程度にしなさい」

桂木は、妻と子供たちに冷たい水で体を冷やすことのないよう注意した。震えは、なんとか治まったようだ。

翌朝、桂木の家族は、バンガローの回りを散歩した。瓦礫の山の中から針鼠が飛び出してきて何か餌をあさっている。ところどころ潅木が生え、食堂の入口附近にはブーゲンビリアの花が咲いていた。

（三十四）

朝食を終えた桂木の家族は、マロワから乗って来たハモワの車で、ワザ国立公園に向った。

途中、小さな円筒形の家が立ち並ぶ集落に立ち寄った。屋根は藁葺きで、頂上は尖った陶器の帽子を被せてある。遠くから眺めると〝おもちゃの家の群落〟のように見える。

それぞれの家は、きわめて簡素である。細木、粗朶（そだ）、モロコシの茎、石、粘土、藁などの限られた材料を使って建てたものだ。

石を粘土で固めて壁を作る。屋根はモロコシの茎を編んだり、草紐で縛ったりして葺いてある。屋根の頂上に被せる陶器の帽子は、陶工の仕事だ。帽子は同じように見えるが、少こしずつデザインが異なっている。

家の中には屋根裏部屋が設けられている。日干し煉瓦で造ったものだ。食糧の少ない乾季の期間中、飢えることのないよう食糧貯蔵所として設けるのだと言う。

集落の附近には、日本の段々畑に似た階段状の畑もあった。

ワザ国立公園に入る時、桂木たちの車に一人の男が乗り込んで来た。この国立公園の案内人（ガイド）である。この公園は、野性動物にとって天国だ。広大な湿地帯は、乾季になっても完全に水が無くなることはない。このため近隣に棲む野性動物が乾季になると水を求めて集まって来るのだ。

ライオン、象、豹、シマウマ、キリン、駝鳥、犀（さい）、猿などあらゆる野性動物がこの湿地帯で、乾季の厳しい期間を過す。狩猟を禁じ、自然のままの状態で置くことが保護に繋っているのだ。

そのため、公園内は危険性が高く、徒歩での入園はもちろん、車で入る場合でも必らずガイドを同乗させなければならない。ガイドはライフル銃を携え、トランシーバーを持って不慮の事故に備えている。

「象のいる場所に案内して欲しいのですが、何処にいるか分かりますか」

桂木は、ガイドに聞いた。

「今、案内して上げますよ」

ガイドは車から下りて、いきなりそこに落ちている糞をつかんだ。糞の感触を手で確め、臭を嗅ぎ、しばらく考えてから運転手のハモワに方角を指示した。

数分間ブッシュの中を走って、ガイドは車を減速するようハモワに言った。ガイドは再び車から下りて糞をつかんで眺めながら象が近くにいることをハモワに告げた。

ハモワは、エンジンの音をできるだけ立てずに、そっとガイドの指示する方向に進んだ。緊張感が車内に漂いこれまで燥いでいた子供たちは声も立てない。

「あの林の陰に象がいる。今出て来るからよく見ていて」

ガイドの囁きを遮ぎるように、突然前方に一頭の雄象が現われた。桂木の乗っている小型のタクシーなどひとたまりもなく踏み潰されそうな巨象だ。アフリカ象は、インド象に較べはるかに大きく性質も荒い。

巨象に続いて数頭の象が現われた。桂木は、車の外に出て、八ミリカメラを構え、象の群を撮影した。象との距離は七、八十メートルだ。

巨象は、桂木たちの車の前に立ちはだかるように鼻と前足を上げ、大きな叫び声を立てて、桂木たちを威嚇している。

「摩耶、登、ほら見てごらん。アフリカ象って大きいだろう。あの雄象は、牙だけでも二米近くもあるよ。車から下りて見てごらん」

桂木は、子供たちを車の外に出し、象の群の動きを観察させようとした。ガイドは、銃を下に向け車の外に出てこれ以上近付くことは危険だとのサインを桂木に送った。子供たちは、恐がって一歩も車から外へ出ようとはしない。

巨象は、桂木に向って十メートル位突進してきては引返す威嚇行動をしばらく続けた後、立去った。緊張の瞬間が過ぎ再び林の中に静寂が戻った。

「恐かったかい。車の外に出なかったね。ガイドさんがいるから大丈夫だよ。このガイドさんは象が襲って来そうかどうか分かるんだ」

桂木は、折角の機会だから子供たちに恐がらずよく観察するように言い聞かせた。

「ライオンの群を見たくてここまで来たんだが、この辺りにいますか」

桂木は、ガイドに聞いた。

「この辺りのライオンは警戒心が強くてなかなか姿を現わさないのです。ワザは自然の国立公園ですから動物は野性のままに放置されていて、人間が近付くと警戒します。車の音には特に敏感で、木陰に隠れていてなかなか出て来ません」

ガイドは、そう言いながら、ライオンの潜んでいそうな場所を探し、あちこち走り回った。

だが、とうとうライオンは発見できなかった。

キリン、シマウマ、駝鳥、アンチロープなど草食動物の群れは、いたるところにいる。車の音を聞いて無数のフラミンゴが一斉に水辺から飛び立った。猿の群れが奇声を発しながら木々を揺すっている。

三時間ほど公園内での野性動物を観察した後、桂木はハモワにワザのホテルに行くよう指示した。昼食をするためである。そこはヨーロッパ風の食事のできる唯一の場所であった。

（三十五）

昼食を簡単に済ませた桂木の家族は、ハモワの車で再びマロワに向けて出発した。マロワへの帰路は、モラ経由の幹線道路だ。簡易舗装されていたので、百五十キロの道を二時間余りで走ることができた。

モラは、十九世紀末にはマンダラ地方の中心都市であった。山岳地帯に住むアミニズム信仰の先住民と平野に住むムスリムのフルベ、チョア、マンダラ族などが混住し、交易を行っている。このため、多様な習俗や生活習慣を一度に見ることができる。

交易は、山岳と平野に住む各種族にとってきわめて重要な経済活動であるだけでなく情報交換の場でもある。特に日曜日に開かれる市場は、各種族が交易品を持って各地から集まって来る。

マンダラ族は、ドアラで作られた多種多様の生活用品を運び込んで売っている。ボルヌア族は、ナイジェリアのボルヌアからやって来て自分の土地で収穫した穀類や玉ねぎなどを並べている。牧畜を営むチョア族の売り物は、ミルクとバターだ。山岳民族は、段々畑で苦労して育てた穀類を袋に詰め売っていた。

山岳民族の女性は、防主頭で腰布をまとい、豊かな乳房を露わにし、座っていた。それとは対照的にムスリムの女性は、頭髪を丁寧に編んで、体全体をすっぽりと踝（くるぶし）まで隠す衣服を着ている。

桂木たちを乗せた車は、モラで小休止した後マロワの街に着いた。街は、三つの大通りに区画されている。強烈な太陽の光が降り注ぎ街は燃えるような熱さであった。大きな中央広場がある。そこには、技能訓練センターと地方芸術博物館のピンク色の建物が建っている。だが、その博物館も小さなもので入館者も少なくときどき閉鎖していると言う。桂木の家族が訪れた時も閉っていた。

しかし、その近くにある市場は、モラと同様活気に溢れていた。

市場で物を売っている人たちを見るのは実に楽しい。商人や職人がそれぞれ取扱商品別に分かれて売っている。肉屋は、ハゲワシに肉を盗られないように注意しながら、牛肉や羊肉を並べて売っていた。染色屋、生地屋も軒を連ねていた。

トランジスターラジオを売る店が最も人気が高い。黒山の人だかりだ。音楽がガンガンと鳴り、その傍では、サッカーの中継を聞いている人がいる。

伝統的な薬を売る店があった。乾燥ハーブ、木の根や花びらから作った薬。なかには泥棒が入った時に目潰しして使う粉薬まで売っている。

客は言い値で買うことはまずない。値段は交渉次第だ。ここでもドアラのマーケットと同様「高い」「安い」「もっと負けろ」と言った会話が飛び交っている。

観光客は、法外な値段をふっかけられることが多い。買う気があるのかないのか分からないような態度で、値段交渉を行うのが安く買うコツだ。必ず「それではいくらなら買う」と聞いて来る。もし買う気があるのであれば、言い値の三分の一程度の価格を〝差し値〟することが適当であろう。そこから本格的な交渉が始まるのだ。

ひとわたりマロワの街を見学した桂木の家族は、ホテル・ルレ・ドラ・ポルトマーヨに宿泊した。マロワでは一流のホテルで、エアコン付きである。ホテル内のレストランの料理はフランス風で、まずまずの味だ。

桂木夫妻は、文明社会に戻ったような気分を味わい暖たかいシャワーを浴びて、旅の疲れを癒（いや）した。子供たちも柔らかなベットの上で、燥いでいたが、登は何となく元気がなかった。

部屋の窓から月が見えた。カプシキで見た月の光と違い、桂木の目には、その光が何んとなく穏やかに感じられた。

翌日、桂木夫妻は、朝の飛行機でガロワに向った。

（三十六）

ガロワは、北部州の行政の中心都市である。ベヌエ川のほとりにできた街で、当時の大統領アヒージョ氏の生誕地であったことから、道路も良く整備されていた。

北には、ワザやカプシキの自然公園、南には、ベヌエ、ブウバ・ンジダ、ファロの自然保護区がある。ベヌエ川には長い橋が架っていて、川堤では漁夫が網を繕っていた。橋の近くでは、子供たちが泳ぎ、そのすぐ近くで女たちが洗濯をしていた。燃えるような太陽の下で、洗濯物もすぐ乾いてしまう。

昼頃、ラ・ベヌエホテルに到着した。

桂木は、昼食後、ベヌエ川の支流の河馬の棲息地の見学に家族揃って出掛けるつもりでいた。ところが、昨日の夜から登の様子がおかしく元気がない。熱もあるようだったので、桂木は登と由美をホテルに残し、娘の摩耶を連れて河馬を見に行くことにした。

ホテルから紹介されたガイドに案内を頼み徒歩で川に向った。しばらく行くと一面の葦で覆われた湿地帯に出た。乾季のため、その湿地帯も干からび、固くなっていて歩くことができる。だが、葦は二メートルを超え、視界は全くきかない。

カメルーン人のガイドは、摩耶を肩車し、葦原の中に分け入った。

桂木は、ガイドの後に続き、葦を払いながら三百メートルほど歩いた。すると突然視界が開け、川がすぐ足下に広がっている堤に出た。川幅は二十メートル程度だが水量は豊富だ。三人は、堤の上に佇（たたず）み、じっと川面を見つめ一時間ほど過した。だが、河馬は水面に姿を現わさ

なかった。
「今日は、河馬がどこか遠くへ出掛けてしまったらしい。河馬は陸の上では、動作が鈍いけれど水の中では意外に素早く、泳ぐことも上手で、一日に八十キロも移動することがあるそうです」
ガイドは、水面を見ながらそう呟いて、石を拾って川に投げ入れた。石はバシャと音を立て静かな水面に波紋を描き沈んで行った。
桂木も摩耶もガイドの真似をして石を投げ込んでみたが、反応はない。河馬は、川下に移動してしまったようだ。川は葦原の中を縫うように蜿々と続いている。
日暮れが迫ってきた。冷たい空気が流れ始めた。
「残念だが帰るとしよう」
桂木は、腰を上げガイドに摩耶を肩車するように言って、来た道を引き返した。
「河馬を見るのも今度の旅行の大きな目的であったのに残念だったね」
「でも、お母さんや登が見られないのに私たちだけが見てはいけないってきっと神様が河馬を遠い処に連れて行ってしまったのだわ。そうよそうに違いないわ」
摩耶は、自分たちだけが河馬を見ては母と登に済まないと秘かに思っていたに違いない。
ホテルに帰ってみると登の容態は更に悪化していた。熱は四十度を超え、顔を真赤にして苦しそうに呻いている。マラリアに違いない。過労からマラリアが発症したのだ。やはり幼い子供には北カメルーンの過酷な環境の中を強行スケジュールで旅を続けることは無理であったのだ。
医者を呼び解熱剤を飲ませた。
(薬が効いて、今夜中に熱が下がれば明日には予定通りドアラに帰ることができる。そうすれば、掛り付けのギリシア人の医者カスカディアーデスに診てもらい、場合によってはポリクリニックに入院させることもできる)
桂木は、祈るような気持で、熱の下がるのを待った。
夫妻は、その夜一睡もせず、登の看病に当った。
幸いにして翌朝熱は三十七度五分まで下がった。タクシーを呼び空港に直行、朝の便でドアラに戻った。桂木は空港から直接タクシーで、カスカディアーデス医院の門を叩いた。やはりマラリアであった。
それから登は十日間もベットに伏すことになった。
登がマラリアに罹ったのは、これが始めてではない。これまで二回罹ったが、いずれも三日ぐらいで治った。だが、今回はいつもと様子が違っていた。カスカディアーデス医師から処方された薬を飲み安静にし、四、五日経ったが一向に治る気配が見られない。食事もほとんど受け付けず四十度以上の高熱で体力も消耗し、痩せるばかりだ。一週間が過ぎ、意識も朦朧となり、錯乱状態

となって、時々譫言まで言うようになった。
桂木は、トランスキャップ旅行社のフランス人スタッフの言葉を思い返していた。
「よしたほうがいいと思いますがね。当方としてはお客様から航空券を求められれば売りますし、ホテルも予約しますが責任は持ちませんよ」
(もし、登が命を落とすようなことがあれば、北カメルーンへの旅行は悔やんでも悔やみ切れない。それ以上に、二年前わずか三才の子供をカメルーンに連れて来たこと自体が間違いではなかったのか)
桂木は、今直ぐにでも日本に連れて帰りたい気持になった。
だが、体力の残っていない登には、十六時間の飛行時間は耐えられない。日本への帰国途中で、幼い生命の灯が消えてしまうだろう。
桂木は、祈るような気持で、カスカディアーデスに往診を頼んだ。
「これは大分悪くなっていますね。飲み薬で治ると思っていたのですが、この状態では注射しなければならないでしょう。後遺症が心配されますので、なるべく注射はしないでおこうと思ったのですが、仕方ありません。皮下注射をお尻にします。子供は注射後筋肉が固まり易いので、よく揉んで下さい」
カスカディアーデスは、注射器を鞄の中から取り出した。アンプルを割り、注射針をその中に差し込んで液を吸い上げ、登のお尻に注射した。登は、お尻をピクリと動かしただけで、ぐったりしている。体は、火のように熱く、真赤に充血した虚な目で天井を見ている。
由美は一晩中登のベットの脇に付き添いまんじりともしなかった。
夜が明けた。登はかすかに口を動かした。
「お母さん、喉が渇いた」
水を飲ませた由美が、登の額に手を当てると昨日までの熱がまるで嘘のように下がっていた。注射が劇的に利いたのだ。食欲も少こし出たのか、由美の作った粥を小さな茶碗に一杯食べた。
由美は、ほっとした表情で、登の体を拭きながら呟いた。
「この子がもしここで亡くなったらどうしょう。登に何とお詫びしたらいいか。そればかり考えていた」
「よかった。なんとか峠を越したようだ。これから良くなるよ」
登はその日から高熱が出ることもなく、三日後には、家の回りで遊ぶことができるほど回復した。
(つづく)

体当たり戦法を強制された神風特別攻撃隊の人びと（十七）

千坂精一

七〇一空派遣隊の奮戦

七〇一空は、三日間の戦闘で未帰還四一機のほか、毎日延一〇〇〇機余りの空襲で保有機の七割を喪失した。

敵機動部隊の正規空母五隻、駆逐艦一隻に損害を与えて、急降下爆撃隊の真価を充分に発揮したものの、戦力を逐次投入していったために、じり貧になってしまった。

二十三日敵機動部隊が沖縄各地に猛攻してきたが、長駆攻撃する余力がなく、さきに南西諸島哨戒強化で小禄に派遣しておいたK一〇三彗星六機が敢然と迎え撃った。

まず三機が空襲の間隙を縫って攻撃に向かったが、グラマンの猛烈な阻止に遭って果たせず、空母三、四隻を含む三群を発見したことのみを報じたに留まった。

翌二十四日、〇六〇〇に発進した二機のうちの一機、

（操）前橋　典美　二飛曹　（20）　丙飛15期

（偵）米森　義治　上飛曹　（20）　甲飛10期

が発見打電後体当たりをしたらしく、還らなかった。

米森上飛曹は、昨年のフィリピン戦に深堀直治大尉指揮の〈純忠隊〉三番機で特攻出撃したが、被弾してレイテ海岸に不時着、一命を取り止めて、二十一日後の十一月十七日にようやくマバラカット基地に帰着していた。

二十五日には、昨日出撃していったん帰投していた、

（操）石淵　利也　少　尉　（21）　東北薬専　13期

（偵）石川　貫二　中　尉　（22）　南満工専　13期

が、〇五〇〇に再出撃して敵艦船を発見すると、グラマンの追跡を躱し敢然として突入体当たりに成功した。

この日は、駆逐艦キンバリー、施設駆逐艦ロバート・H・スミス、高速輸送艦ギルマーにそれぞれ特攻機が体当たりしているが、忠誠隊の彗星一機、勇武隊の銀河三機も出撃しているので、個々については確認できない。

沖縄各地を艦砲射撃した敵機動部隊は、二十六日に慶良間列島に迫ってきたので〈天一号作戦〉が発動され、七〇一空はこの日彗星一八機を喜界島に進出させた。

翌二十七日、〇五五〇からK一〇三、K一〇五の彗星一二機が単機ずつ発進する予定であったが、K一〇三橋本飛長機とK一〇五宮原一飛曹機が離陸時に相次いで海辺の岸礁に接触して爆発する事故を起こしたので、あとの一〇機は日の出を待ってから次々に出撃していった。

うち八機が突入したらしく還らなかった。

（操）田中　巽　二飛曹　（21）　丙飛14期

（偵）佐藤　一義　少　尉　（23）　徳島商工　13期

（操）細江　志朗　二飛曹　（22）　丙飛17期

（偵）高橋紫壽雄　上飛曹　（21）　甲飛10期

（操）内田　續　二飛曹　（22）　丙飛11期

（偵）武士　精三　一飛曹　（20）　甲飛11期

（操）正木　廣　二飛曹　（24）　丙飛16期

（偵）船橋　良三　一飛曹　（20）　甲飛11期

（操）横山　作二　二飛曹　（20）　乙飛14期

（偵）藤丸　哲　上飛曹　（19）　甲飛10期

（操）谷　節夫　少　尉　（19）　中央大　13期

（偵）椿　昇　一飛曹　（20）　甲飛11期

（操）菱沼　一　飛　長　（19）　乙（特）飛1期

（偵）廣田繁次郎　一飛曹　（20）　甲飛11期

（操）木場　愛　二飛曹　（20）　丙飛17期

（偵）青木　清　一飛曹　（20）　甲飛11期

であった。

このなかの正木廣二飛曹は、昨年十月二十九日フィリピン特攻神兵隊三番機で出撃したが、途中敵戦闘機と交戦して偵察員相田展生二飛曹を戦死させてしまった。

十一月一日、相田二飛曹の遺骨を抱いて再出撃したが不時着して果たせず、三度目の出撃で還らぬ人となった。

この日は銀河隊と陸軍部隊も特攻出撃しているので、挙げた戦果を分類して特定するのは至難であった。

一〇機を喪い三機故障で実動五機になってしまった派遣隊は単独行動できず、本隊に合流することになったが、二十八日は雨になったので国分帰隊を一日延期した。

だが、この日北上してきた敵機動部隊の一部が、南九州に散在する各基地目掛けて一斉に攻撃をかけてきた。

そうとは知らぬ派遣隊の五機は、二十九日〇六二〇に逐次離陸して帰途に就いたが、種ヶ島南東海上で南九州各基地を空襲にゆく敵戦闘機群と遭遇して交戦となり、

K一〇五隊長北詰實大尉機、同分隊長梅田章大尉機、後藤優一飛曹機が壮烈な自爆を遂げてしまった。

一国からは彗星四機が一二三七にこの種ヶ島南東洋上の敵機動部隊攻撃に向かったが、うちK一〇五の、

（操）伴　隆　一飛曹（22）
（偵）菊池　久　中尉（22）盛岡高工　13期

（操）山本　治　少尉（24）立命館大　13期
（偵）川野　巖　少尉（24）明治大　13期

の二機が発見して体当たりを決行したらしく還らなかったが、他の二機は捕捉できずに虚しく帰投した。

さらに、一六〇〇に二機発進させたが、推定位置付近に大きな油紋を発見しただけで捕捉にいたらず帰投した。

国分は他隊の出撃基地になる

こうして、七〇一空はK一〇三、K一〇五ともにその保有機のほとんどを喪ってしまったので、空き家になった一国、二国は以後他隊の出撃中継基地に提供された。『特攻戦歿者名簿』から抽出してみると、一国からは、

〔四月三日〕
○茂原の第三御盾第二五二部隊（爆戦二機、彗星二機）
○鈴鹿の第三御盾第六〇一部隊（彗星四機）
〔四月六日（菊水一号作戦）〕
○茂原の第三御盾第二五二部隊（爆戦五機、彗星四機）
○鈴鹿の第三御盾第六〇一部隊（彗星四機）
〔四月七日〕
○鈴鹿の第三御盾第六〇一部隊（彗星一一機）
○茂原の第一御盾第二五二部隊（零戦五機）
〔四月十一日〕
○鈴鹿の第三御盾第六〇一部隊（爆戦二機）
○明治の第二一〇部隊零戦隊（零戦三機）
○茂原の第三御盾第二五二部隊（爆戦五機）
○明治の第二一〇部隊彗星隊（彗星二機）
〔四月十二日（菊水二号作戦）〕
○佐世保の第二至誠隊（九九艦爆一機）
〔四月十五日〕
○鈴鹿の第三御盾第六〇一部隊（零戦二機）
〔四月十六日（菊水三号作戦）〕
この日、K一〇三とK一〇五の三機が〇九二〇に出撃、

（操）大田榮次郎　少尉　上智大学　13期
（偵）岩見　健　少尉　明治専門　13期

（操）石川　定男　上飛曹
（偵）外山　正司　少尉　神戸高商　13期

（操）棚田　茂見　飛長
（偵）（生還）

三機とも「我今より空母に突入す　一一四八」の電あり。

そのほか、

○鈴鹿の第三御盾第六〇一部隊（爆戦二機）
〔四月十七日〕
○鈴鹿の第三御盾第六〇一部隊（彗星四機、爆戦一機）
○茂原の第三御盾第二五二部隊（彗星五機、爆戦一機）
〔四月二十二日（菊水四号作戦）〕
○茂原の第三御盾第二五二部隊（爆戦一機、彗星二機）

であり、私のいた二国からは、

〔四月六日（菊水一号作戦）〕
○百里原の第一正統隊（九九艦爆一〇機）
○宇佐の第一八幡護皇隊（九九艦爆一五機）
○名古屋の第一草薙隊（九九艦爆一三機）
〔四月十六日（菊水三号作戦）〕
○宇佐の第三八幡護皇隊（九九艦爆一七機）
〔四月二十八日（菊水四号作戦）〕
○名古屋の第三草薙隊（九九艦爆一四機）
○百里原の第二正統隊（九九艦爆六機）
〔五月二十五日（菊水七号作戦）〕
○百里原の第三正統隊（九九艦爆一機）
〔六月三日（菊水九号作戦）〕
○百里原の第四正統隊（九九艦爆三機）

となっている。

他隊の出撃は二箇月のあいだに僅か五回八隊であるが、これは各隊の出撃日であって、かならずしも飛来して翌日飛び立つわけではなく、整備点検や天候次第では長引くから、それまで搭乗員たちは居候して待機する。

筋金入りの軍国少年に育てられた私は、国家防衛の一員たらんとして海軍飛行兵を志願したのだが、その意志は天に通ぜず、適性検査で不合格になってしまった。

そのとき、試験官が、第二志望の通信学校でも成績によっては偵察員への道も展けると希望を持たせてくれた。

通信学校で練習生として励み、卒業試験の結果航空隊への配属が決まって幽かな希望が現実味を帯びてきた。

赴任した七〇一空は、南九州国分基地で毎日彗星艦爆の急降下爆撃猛訓練が繰り返されていて、そのなかにときおり偵察員の航法、無線通信、旋回機銃操作訓練機九〇キ練（九〇式機上作業練習機）も混じっていた。

近いうちに訓練を受けられるものと内心胸を膨らませて待っていたが、いつの間にか飛ばなくなってしまった。

降爆訓練だけが激しさを増して、騒然となっていった。

そして、あの三日間の特攻出撃で七〇一空は保有機の大半を喪い、私の希望は断念せざるを得なくなったのだ。

当座は落ち込んでいたが、しかしもし飛行科に合格していたらまだ練習生教程のはずだから、実施部隊にいて防衛戦に参加しているだけよしとしようと思い直した。

だから、私たちに他隊搭乗員の食事運搬役が廻ってきたとき、僅か二十年足らずで生命を断たれる先輩たちの世話ができるならと、率先してその役を買って出た。

そのことで、特攻隊員の実像を垣間見ることができた。
夕食後の食器と残飯を回収に行くと、どの宿舎でも大抵は車座になって肩を組み、高歌放吟して士気を鼓舞していたが、なかで一棟遠くからでもそれとわかるどんちゃん騒ぎで荒れている宿舎があった。
その宿舎に入ってゆくと、なんとみな上半身素裸になっていて、逆立ちをしている者、相撲を取っている者、板壁に体当たりしている者など様々で、いまにも天地が引っ繰り返りそうな大騒ぎの真っ最中であった。
近くで板壁に体当たりしていた一人が、私を認めると、
「おい、若、一杯やってゆけ」
そう言って、湯呑みを突き出した。
私が、酒は飲めないことを告げると、
「酒も飲めねえ、屁も放らねえ、それでも海軍軍人か」
酔いに任せて執拗に絡んできた。
困惑していると、背後から抱え出してくれる人がいた。
「世話になっているのに、悪かったな」
その人は、丙種出身らしい年嵩の人だった。
「俺たちは明朝出撃することになったんで、居た堪らず酒で紛らわしているんだ。だから勘弁してやってくれ」
私は、出撃前夜は遺書と遺品を揃えて身辺整理をすませ、心静かに刻限のくるのを待つのだと教えられていた。
「そりゃ、貴様らは生きながらにして神であるという殺し文句で温順しくさせられているだけなんだ。だが俺たちは木偶じゃねえ血の通った人間様だ。誰だって明日冥途行きだと宣告されて平静でなんかいられるものか」
私は、駭きのあまり声も出ず、ただその大先輩搭乗員の顔を食い入るように凝視めているだけであったが、
「俺たちは、追い詰められてあの乱痴気騒ぎになっているんだ。解るか。死を宣告されていない貴様らに判るはずはないが、とにかく貴様ら若は先輩出撃隊員の本当の姿を確りとその眼に焼き付けておくんだ。いいな」
そう言われて、急に悲しくなってきた。
「俺は南方戦線でなんども死に損なったが、明日は確実に死ぬとなったら居ても立ってもいられなくなって宿舎を抜け出し、こうして林の中を彷徨き廻っていたんだ」
こんな歴戦の勇士でも、死を宣告されたら動揺するものなのか、と私は唖然とした。
「若、元気で頑張れよ。そして、偶には俺と会ったことを思い出してくれよ。な」
そう言うと、大先輩は踵を返して静かに歩いて行った。
私は、明日は神となる人が宿舎に入って行くまで、挙手注目の礼で見送ったことを現在でも忘れてはいない。
また、こんなこともあった。
朝食を届けての帰り道に、三種軍装に半長靴姿の中尉と出会った。入湯上陸（一泊外出）の帰りらしい。
敬礼して通り過ぎようとしたら、呼び止められた。
立ち止まって向き合うと、唐突に年齢を訊かれた。

私が、すかさず生年月日を申告すると、
「そうか、貴様たちの二年先輩が出撃するようになったところだからまだ当分間があるな。それまでにはこの戦争は終わるだろう。平和な世の中になったら文学をやれよ。俺はもう必要なくなったからこれをやろう」
そういいながら、上着の隠しから小型本を取り出した。
読み古した岩波文庫で、森鴎外の作品集であった。
終戦のどさくさで紛失してしまい、残念なことをした。
現在も大切に保管しているのが隊員たちの写真である。
見知らぬ他隊の隊員から押し付けられたのだが、一面識もない私になどなぜくれたのか理由が解らなかった。
いまにして思えば、二十年そこそこでこの世を去らねばならない未練に取り付かれての淋しさから、せめて肖像写真を残しておこうと考えたのではなかっただろうか。
それは、とりもなおさず生きていたいという切実な希いの現れであって、肖像写真も年を経て黒褐色になった。

水上特攻戦艦大和の最期

七〇一空のK一〇三、K一〇五両飛行隊が保有機の大半を突入させても阻止できなかった敵機動部隊は、三日後の四月一日ついに沖縄本島に上陸を開始してきて、その日のうちに北・中両飛行場を占領されてしまった。
地上基地占拠によって、役目を終えた空母は南方泊地へ引き揚げてゆくから、攻撃の機会を失ってしまう。
焦った大本営は、陸海軍の総力を挙げての一大特攻戦を決断して、航空部隊に〈菊水作戦準備〉を命じた。
このとき航空部隊側は、なぜ水上部隊を協働させないのか、連合艦隊司令部への不信感が噴出したという。
そこで司令部は、軍令部の反対を押し切って柱島泊地の第二艦隊司令長官伊藤整一中将に、航空部隊の特攻を成功させるため敵の眼を艦隊に引き付ける囮役を命じた。
戦艦大和を旗艦とする軽巡矢矧、駆逐艦冬月、涼月、朝霜、初霜、霞、磯風、雪風、濱風の一〇隻である。
四月六日菊水一号作戦が発令されて一国から第三御盾二隊、二国から第一正統隊、第一八幡護皇隊、第一草薙隊が出撃したことはすでに述べたが、そのほか串良基地からも天山艦攻、九七艦攻、彗星艦爆隊が多数出撃した。
この日、一五二〇大和以下の一〇隻は一斉に錨を上げて瀬戸内海徳山沖を出港し、沖縄目指して出撃した。
矢矧を先頭に豊後水道を九州東岸に沿って南下し、夜半過ぎに九州東南端の大隅海峡から東シナ海に入った。
七日、〇六〇〇大和を中心に輪型陣を組んで進んだ。
一一〇〇ごろ大和と矢矧は搭載の水上機を鹿児島基地に帰すと、上空直衛の零戦二〇機も基地に帰っていった。
一二三〇、上空の雲間に敵機がちらついた途端、二〇〇機あまりが大和と矢矧を標的にして攻め掛かってきた。
フィリピン戦までは戦闘機、爆撃機、雷撃機の順で攻撃してきていたが、この空軍部隊は同時攻撃であった。

二〇分ほどで引き揚げると、次は五〇機、さらに一三三〇には一〇〇機を超える怒涛の波状攻撃であった。

大和は魚雷で左舷に穴をあけられた。このときは右舷に同量の海水を注入して平衡（バランス）を保てば、速力（スピード）は衰えるが艦は水平に復元するのだが、雷撃は左舷に集中したので右舷の注水が間に合わず、左へ一五度傾斜した。

こうなれば、もはや大和は雷撃、爆撃の餌食であった。

交戦二時間、大和はついに力尽きて一四二三九州南西端坊ノ岬二六〇度六〇浬付近で沈没した。乗組員約二八〇〇名のうち救助された将兵は僅か三〇〇名足らずで、実に二五〇〇名がこの巨大戦艦と運命をともにした。

大和のほかに矢矧、霞、濱風、朝霜の四隻も沈没し、無傷だったのは初霜一艦で、損傷した雪風、磯風、涼風、冬月の四隻とともに佐世保に帰港した。

大艦巨砲の華やかな時代から航空機万能の近代戦に移り変わって、もはや無用の長物化した大和であったが、それでも武蔵とともに一世を風靡した海軍の象徴だったことを考えれば、海軍の凋落を思わせるものであった。

七〇一空美保で再々建

沖縄奪還の菊水作戦は、以後六月二十二日の一〇号までつづくのであるが、七〇一空は四月十八日に再編成して本土決戦に備えるよう命ぜられ、比較的空襲のすくない山陰鳥取県の美保基地で再々建することになった。

美保基地は、米子から境港にいたる地方線（ローカル）の大篠津が最寄駅だったというから、現在の米子空港であろう。

国分基地には少数になった歴戦の精鋭だけが残り、若手搭乗員たちは江間飛行長に率いられて、空襲頻繁の僅かな合間を縫って順次美保基地へ移動していった。

基地は美保湾と中海に囲まれ、風光明媚の地であった。

七〇一空は、その中海の標的に高々度から模擬爆弾投下の猛訓練で若手搭乗員を錬成しながら、併せて逐次搭乗員と彗星の補充を得て、順調に戦力を回復していった。

そして、五月中旬にはK一〇三隊長森山勝文大尉が、錬成なった一部搭乗員を率いて国分へ戻っていった。

その国分の司令部では、木田司令が二十九日付で航空本部へ転出となり、新司令に軍令部作戦課作戦班長だった榎尾義雄大佐（海兵五一期）が着任した。

七〇一空は、K一〇三、K一〇五両飛行隊の戦力が回復して、ようやく本土決戦準備態勢が本格化していった。

沖縄攻略を支援した敵機動部隊は、一旦南方泊地に戻ったが、再び北上すると七月十日には関東沖に迫った。

艦載機が東京や関東方面に来襲したのをはじめ、四国、東北、北海道と広範囲に空襲してきて連絡船が撃沈され、北海道、本州、四国、九州は孤立状態になった。

本土攻撃は艦載機だけではなく、艦艇も加わってきて、釜石、室蘭、日立が艦砲射撃を浴びせられた。

この敵の本土来襲を防衛せねばならぬ航空部隊は、戦

力低下と燃料逼迫で温存せざるを得ず、傍若無人の一方的攻撃にも隠忍自重するよりほかなかった。

大本営発表も、ただ敵機来襲を告げるだけでいつもの戦果発表はなく、戦闘はまさに末期的症状を曝け出した。

そんななかで、七〇一空美保部隊は江間飛行長の指導のもとで懸命な錬成に努めた甲斐あって、見事八月上旬には彗星八〇機を擁する精鋭部隊に再々建されていた。

八月三日、五航艦司令部が前触れもなく鹿屋から大分へ移動した。理由は定かでないが位置的に見ればより安全地域への後退であり、司令長官の前線脱出であった。

その夜、海軍総隊矢野参謀長から電話で宇垣長官に、「近々、聯合航空艦隊が編制されることになり、貴官が長官兼三航艦長官に親補される」

旨の内示があった。三航艦司令長官寺岡謹平中将は出仕になり、五航艦の後任には聯合艦隊参謀長のあと出仕になっていた草鹿龍之介中将が親補されるのだが、八月十七日付だったため異動せず、悲劇は起こってしまった。

それはさておき、美保の七〇一空に五航艦司令部から一箇中隊派遣を命じてきた。司令部所在基地に攻撃隊がいなくては恰好がつかないということになったのだろう。

江間飛行長は、派遣隊長選任に珍らしく迷ったという。

というのは、先任順では当然K一〇五隊長本江博大尉なのだが、分隊長中津留達雄大尉が大分から近い津久見市徳浦の出身で、昨春結婚したばかりの新妻保子が留守宅をまもり、七月末にめでたく女児を出産していた。

人情家の江間飛行長は、中津留を派遣隊長に命ずると、（家族に会ってこい）

の温情を籠めて送り出した。

中津留は、江間飛行長の厚意を謝して大分へ出向いた。

そして、わが子の御七夜に津久見へ戻り、対面した。

中津留は、愛娘に鈴子と命名してまた会う日をたのしみに帰隊したのだが、一週間後に悪魔の策略に塡められて妨げられ、二度と会えぬ薄い縁で終わってしまった。

このころになると、戦力差は歴然となり、もはや一方的に蹂躙されるがままの状態になってしまっていた。

六日、広島に新型爆弾（原爆）が投下されると、三日後には長崎にも投下されて大惨害を受けてしまい、さらにソ連（現ロシア）が不可侵条約を一方的に破って連合軍に参加するにおよんで、ついに断末魔に陥った。

宇垣中将を新長官に据える聯合航空艦隊の編制が急がれたが、傘下に入る五航艦、木更津の三航艦、霞ヶ浦の十航艦はともに防戦に大童でいっこうに進展しなかった。

十四日、一国では陸軍司偵から敵艦隊坊ノ岬沖を南下中との連絡を受けて、K一〇五の彗星四機が攻撃に向かったが発見できず、佐久川春隆中尉機（操縦西川公人一飛曹）が消息不明になり、益田秀夫一飛曹機は帰投途中霧島山中に不時着して益田一飛曹は死亡、偵察員の山本次郎一飛曹は片腕と片足を骨折して霧島病院に入院し

た。

これが、国分の七〇一空にとって最後の出撃になった。

いっぽう、美保の七〇一空は関東、東海方面に来襲中の敵機動部隊撃退のため、十五日朝一部を挙母（現豊田市）へ進出させる準備をすすめていたが、正午に天皇のラジオ放送があるとのことで、拝聴後出発となった。

江間飛行長は、せめて今生の名残りに陛下の玉音を拝聴させようと考えて、搭乗員全員を指揮所に集合させた。

だが、玉音は雑音が多くて聴きとれず、江間飛行長は、（要するに、しっかりやれとのお言葉であろう）と理解したが、間もなく進出は取り止めになった。

長官の道連れにされた大分派遣隊

大分基地では、一〇〇〇ごろ七〇一空宿舎に番兵が、「搭乗員全員飛行場に集合」を伝達にきた。

気侭に寛いでいた隊員たちは、素早く半長靴を突っ掛けると、手にした飛行服を身に着けながら駆け付けた。

五航艦参謀の指示は、

「敵艦隊が本土上陸を目指し、東シナ海を済州島に向けて北上しているとの報により、これを攻撃する」

であった。

機付整備員が入念に試運転をしているあいだ待機して互いに励まし合っているところへ、またも伝令がきて、

「敵艦隊は本土上陸を中止し、沖縄に反転した模様につき、攻撃は取り止めになった」

ことを告げた。

「反転した模様」

であるから、確実にそうだとはいっていないわけだ。

艦隊がとつぜん海中に潜ったり羽が生えて飛んでゆくはずはないから、一時見失ったわけで、いつまた発見するか判らない状態にあるなかでは待機も落ち着かなかった。

中途半端で士気は萎え、日蔭に散って配られた潜水艦糧食の赤飯缶詰で昼食をすませると、所在なく休息した。

正午に玉音放送があったことは、それとなく伝わった。

停戦なのか終戦なのか、判らぬまま臆測が乱れ飛んだ。

司令部が正確に拝聴しておらず、聯合艦隊司令部からの通達をいまや遅しと待っていることで混乱を招いた。

電波状態が悪く、雑音混じりで跡切れがちの玉音放送ではあったが、しかし、宇垣長官はそれが陛下の無条件降服宣言であるらしいことは薄々察しがついていたようだ。

（国家の不滅を信じてその楯となり、南溟深く眠る青少年特攻隊員たち多くの犠牲と引き換えに得たものが無条件降服とは、あまりにも情けなく顔向けができない）

深く心痛したであろう宇垣長官は、せめてもの償いに、（特攻を実施した最高責任者として、彼等とおなじ最期を遂げなくては、幾多の英霊に対して申し訳が立たない）

そう覚悟を決めたのであろう、

「七〇一空大分派遣隊は、彗星五機をもって沖縄の敵艦船を攻撃すべし。本職これを直率する」

命令を下した。

参謀長横井俊之少将が、懸命に出撃を止めたのだが、

「最高指揮官として、このままおめおめと生き恥は晒せぬ。君たちも武人ならどうか私に死場所を与えてくれ」

そう言って、頑として諾き入れようとはしなかった。

宇垣長官とともに彗星五機で出撃を命ぜられた派遣隊長中津留達雄大尉は、一〇名に限っての人選に苦慮した。

終戦宣言の玉音放送があったとはいえ、まだこの時点では停戦命令は下されていなかったから、戦闘終了の感覚などは微塵もなく、長官直率の異例出撃の栄誉に浴したいものとわれもわれもの申し出で収拾がつかなかった。

やむなく、中津留隊長は全員出撃させることにして搭乗機を点検してもらったところ、一一機が可能となった。

黒板に白墨で搭乗割が書かれ、指揮所前に掲出された。

（操）中津留達雄　大　尉　海兵70期
（偵）遠藤　秋章　飛曹長　乙飛8期
（操）伊東　幸彦　中　尉　海兵73期
（偵）大木　正夫　上飛曹　乙飛17期
（操）山川　代夫　上飛曹　丙飛
（偵）北見　武雄　中　尉　海兵73期
（操）池田　武徳　中　尉　学生13期
（偵）山田　勇夫　上飛曹　甲飛11期
（操）渡邉　操　上飛曹　甲飛11期
（偵）内海　進　中　尉　学生13期
（操）後藤　高男　上飛曹　丙飛
（偵）磯村　堅少　尉　生徒1期
（操）松永　茂男　二飛曹　乙（特）1期
（偵）中島　英雄　一飛曹　乙飛18期
（操）藤崎　孝良　一飛曹　丙飛
（偵）吉田　利　一飛曹　乙飛18期
（操）川野　和一　一飛曹　乙飛18期
（偵）日高　保　一飛曹　乙飛18期
（操）二村　治和　一飛曹　甲飛12期
（偵）栗原　浩一　二飛曹　甲飛13期
（操）前田　又一　一飛曹　丙飛

（偵）川野　良介　中　尉　学生13期

の二二名であった。

一六〇〇、五航艦司令部食堂で宇垣長官別離の宴がさやかにひらかれた。再考を説得できなかった一二航戦司令官城島高次少将、七二航戦司令官山本親雄少将、三〇航戦司令官田口太郎少将も出席して訣れを惜しんだ。

席上、宇垣長官は、

「ついに任務を達成できずに終戦となったからには、身をもって沖縄に突入する。あとはよろしく頼む」

そう簡潔に挨拶すると、微笑を浮かべて盃を上げた。

宇垣長官が、司令官や幕僚たちと三台の車に分乗して飛行場に着いたのは、一七〇〇すこしまえであった。

車から降りた宇垣長官は、濃緑色の第三種軍装に戦闘帽姿で双眼鏡を首からかけて、右手に山本元師から贈られた遺品の脇差をしっかり握っていた。

飛行場では、すでに一一機の彗星が試運転中で、中津留大尉以下二二名の搭乗員が指揮所前に整列していた。

それを見た横井参謀長が走り寄ってきて、

「指揮官、命令は五機のはずではないか」

そう咎めると、中津留大尉は激情に駆られて答えた。

「長官が直率なされる隊が、たった五機では淋し過ぎます。わが七〇一空派遣隊は全機でお供をいたします」

この遣り取りを聴いていた宇垣長官は、出撃隊員の前に用意された折り畳み椅子の上に立つと、

「これより沖縄に突入する。私につづく者は手を挙げよ」

その問いかけに、全員間髪を容れず気迫の挙手をした。

「そうか、みんな一緒に征ってくれるか。私はこの攻撃の成否に拘わらず生きては還らぬ覚悟である。もし不成功に終わるようなことがあれば機上に於て割腹する」

そう言って微笑しながら脇差を突き出してみせたが、この期に及んでもなお二二名の逞しい青少年たちに慕われているとでも思ってか、眼に薄すらと涙を泛べていた。

指揮所前につくられた食卓に鯣が並べられ、幕僚が各自の洋杯に白鶴一級酒を注ぎ廻って別盃が交わされた。

そのあと、各組搭乗機前に整列して宇垣長官を迎えた。

中津留機の前で車を降りた長官は、組の遠藤飛曹長に、

「交代せよ」

と命じて、さっさと偵察席に乗り込んでしまった。

長官機は別仕立てと思い込んでいた遠藤は慌てた。

「長官、そこは私の席です」

譲らぬ宇垣長官の股のあいだに強引に潜り込んだ。

この出撃の攻撃目標は、空母、戦艦、その他の艦、地上施設の順で、一一機を四小隊に分け、奇数小隊は太平洋を、偶数小隊は東シナ海を沖縄に向けて進撃する。

そして、敵の電波探知機に捕捉されぬために、高度七五〇〇以上を単独飛行することに決められていた。

宇垣長官搭乗、中津留隊長操縦の三人乗り彗星一番機が滑走をはじめたとき、見送る基地隊員たちのなかから、

「帽振れッ」

の叫び声が挙がり、一斉に千切れんばかりに振られた。

最後に飛び立った前田一飛曹操縦の川野中尉機は、整備に手間どったために一機だけ大分遅れてしまった。

実はこの機は中津留機で、発動機の調子が悪かった。

「長官直率の隊長機が、万一途中で故障しては困る」

そう川野中尉が口説かれて、渋々交換させられたのだ。

はたして、飛び立ってまもなく宮崎上空あたりで機体震動が起こり、燃料が吹き出したので南下を断念して沖へ出ると、爆弾を投下して志布志湾の海岸に不時着した。

東シナ海を南下した二村機は、甑島の上空あたりで機体変調を起こしたので、やむなく爆弾を海中に投下しておいて、川内川の川口に近い海上に不時着した。

太平洋側を南下した川野機は、沖縄本島近くまで行ったが、敵艦船を発見できず、燃料が懸念されたので爆弾を投下して引き返し、辛うじて鹿児島湾に不時着したのだが、衝撃で日高一飛曹が空二号で頭を割られ即死した。

最後に打電してきたのは磯村機で、「一八三〇発見突入」の報であったが、まだ沖縄到達の時刻ではなかった。

一九二四長官機から「訣別電発信せよ」の指令がきた。

司令部に預けた『訣別の辞』を発表しろというのだ。

過去半歳に亘る麾下各隊将士の奮戦にも拘らず、驕敵を撃破し皇国護持の大任を果すこと能はざりしは本職不敏の致す所なり。本職は皇国の無窮と天航空部隊特攻精神の昂揚を確信し、部下隊員が桜花と散りし沖縄に進攻、皇国武人の本領を発揮し驕敵米艦に突入轟沈す。指揮下各部隊は本職の意を体し、凡ゆる苦難を克服し、精強なる皇軍の再建に死力を竭し、皇国を万世無窮たらしめよ。

大元帥陛下万歳。

昭和二十年八月十五日　一九二四　彗星機上より

この一時間後、

「ワレ奇襲ニ成功セリ」

の打電が入り、つづいて、

「ワレ突入ス」

のあと、長符（——）がいつまでもつづいていたという。

だが、アメリカ側に確かな記録がないのが不思議だ。

この日沖縄のアメリカ軍基地では、皓々と明かりをつけて戦勝宴会をひらき、騒ぎまくっていたというからまったく無防備だったはすで、損害がないのはおかしい。

ひょっとして、宇垣長官は敵艦船への体当たりではなく、自決の場所に沖縄の海を選んだのではないだろうか。

だとすれば、司令長官という武人の高位にあった者が、なぜ一人で清算せずに将来ある若者たちを道連れにしたのか、一七名の家族ならずとも憤りを禁じ得ない。

また、江間飛行長にとっても中津留大尉を道連れにされたことは、温情が仇になってしまった痛恨事であった。

聯合艦隊司令長官で、海軍総隊司令長官と海上護衛総司令長官を兼務している三期先輩の小澤治三郎中将は、「玉音放送で大命を承知しながら、私情で部下を道連れにするとはもってのほか、自決するなら一人でやれ」

そう激しく難詰したというが、多くの将兵を死地に赴かせた最高指揮官は責めを一身に負うべきであろう。

もう一人の特攻推進者

昭和十九年十月のフィリピン攻防戦で、起死回生の非常手段としてはじめて特攻戦法を実施した当時の一航艦司令長官大西瀧治郎中将は、終戦時軍令部次長であった。

徹底抗戦を主張して豊田総長を手古摺らせた大西だったが、米内大臣に説得され無念泣きで玉音を拝聴した。

その夜、大西は若手部員たちを次長官舎に招いて労を犒い、あれこれ話が尽きずに深更にまで及んだという。

そして、そのあと大西は午前三時ごろ日本刀で腹一文字に掻き切ったが、介錯がなく苦しんでいるところへ報らせを受けた副官が軍医をつれて駆け付けてきた。

大西は、苦しい息の下から軍医に、

「一命を取り止めることはしてくれるな」

と治療も入院も断わり、その日午後六時に絶命した。

遺書は二通あった。夫人宛のものと、一通は特攻隊員とその遺族へ統率の外道を断行したことの詫び状だった。

特攻隊の英霊に曰す。善く戦ひたり。深謝す。最後の勝利を信じつつ肉弾として散華せり。然れども其の信念は遂に達成し得ざるに至れり。吾死を以て旧部下の英霊と其の遺族に謝せんとす。

次に一般青壮年に告ぐ。

我が死にして、軽挙は利敵行為なると思ひ、聖旨に副ひ奉り、自重忍苦するの誡めともならば幸なり。隠忍するとも日本人たるの矜持を失ふ勿れ。諸子は国の寶なり。平時に處し猶克く特攻精神を堅持し、日本民族の福祉と世界人類の和平の為最善を盡せよ。

ほかに、『辞世の句』もあった。

之でよし　百萬年の　假寝かな

戦い熄んで日が落ちて

十六日、大本営はようやく〈停戦〉を発令したが、現場は渾沌としていて戦闘終結までにはいたらなかった。

十七日、七〇一空司令榎尾義男大佐は五航艦司令部から大分派遣隊の補塡を命ぜられ、美保から一二機を送り込むと、終戦か続行かの確認に大分へ出向いたが、司令長官亡きあとの収拾に大童わで埒が明かなかった。

現在でこそ終戦日は広く知られているが、このときはまさに晴天の霹靂で、未曾有の大事だったから、怪情報が乱れ飛び、指示命令系統は大混乱していた。

榎尾司令は、十八日に横須賀へ飛んで上京し、海軍省で情況を確認すると、二十日に国分へ戻り、美保と大分の派遣隊に帰隊を命じて、翌朝全隊員を集結させた。

隠蔽機も含めた一〇〇機余りの彗星が飛行場に並んだ光景は盛観で、七〇一空の戦力健在を誇示していた。

だが、榎尾司令から終戦のご聖断が明らかになったことを告げられると、暫し唖然としていた搭乗員たちのあいだからやがて嗚咽が漏れて、伝播していった。

「全員いったん休暇帰省するが、原隊復帰の連絡あり次第直ちに集合せよ。只今より七〇一空を解散する。まず機体とともに搭乗員を先とする。第一団出発は一四〇〇」

これが榎尾司令の訓示と解隊宣告であったが、全員寂として声なく、ここにいたってもまだ悪い夢を見ているようで、突然の帰郷命令が信じられず狼狽えていた。

搭乗員を優先復員させるというのは、進駐してくる連合軍将兵との不測の事態を避けるためで、出身地別に分乗して最寄りの飛行場へ着陸後乗り捨てろの指示を受けると、互いに連れ立って慌ただしく飛び立っていった。

神風特別攻撃隊の戦死者三五〇〇余名は、いずれも十代後半から二十代前半にかけての青少年たちであった。

十死零生の呪縛を解かれた生き残り組は、国家ぐるみの精神統制で純粋培養されたそれまでの価値観を全面否定する社会構造の変化に途惑いながら、挫折感と劣等感とを引き摺って新しい時代を生きてゆくことになった。

（完）

参考・引用文献

吉村昭『戦史の証言者たち』（文春文庫）

森本忠夫『特攻・外道の統率と人間の条件』（光人社NF文庫）

内藤初穂『極限の特攻機・桜花』（中公文庫）

神野正美『梓特別攻撃隊』（光人社）

猪口力平・中島正『神風特別攻撃隊の記録』（雪華社）

七〇一空会『七〇一空戦記』（私家版）

十三塚原特攻碑保存委員会編『鎮魂白雲にのりて君還りませ・特攻基地第二国分の記』（私家版）

別冊歴史読本『日本海軍艦隊総覧』（新人物往来社）

別冊歴史読本『日本陸海軍航空隊総覧』（新人物往来社）

歴史と旅特別増刊『帝国海軍提督総覧』（秋田書店）

紙透家の人びと（二十三）

第七章　第五野戦憲兵隊終戦を迎え捕虜として収容さる

（父紙透小太郎の手記より）

紙透寛夫

一　比島（フィリピン）戦犯裁判変遷略史

昭和二十年十一月、セレベス島にいた憲兵隊本部を除く全員は、入院中の憲兵まで含めて、アンボン島の刑務所に移され、アンボン分隊と合流させられた。

父小太郎の裁判や足跡は、後で述べることにして、まず、父の書いた比島戦犯裁判変遷略史を転載したい。

昭和二十年十月、マニラ市元米国高等弁務官邸内軍事法廷にて、在比米軍による裁判開始（山下奉文陸軍大将より）

昭和二十一年七月　比島政府独立

昭和二十二年四月　米国軍より比島政府へ裁判権委譲決定、米軍による裁判終了

昭和二十二年六月　米人関係容疑者を米軍横浜裁判へ移管、巣鴨拘置所へ（在比島残留三百余名）

昭和二十二年六月　右三百余名、ラグーナ州カンルーバン付近ルソン第一俘虜収容所より、マニラ市郊外マンダルヨン米軍憲兵隊収容所へ移管

米軍裁判により死刑囚合計七十二名は現地及び巣鴨にて死刑執行済み、終身刑以下は巣鴨に在監

昭和二十二年七月　比島政府による戦犯裁判条例公布、日本人弁護士及び通訳団着任

昭和二十二年八月　マニラ市役所隣師範学校校庭内比島軍軍法廷開く（工藤忠四郎陸軍大尉ケースより）

昭和二十二年十一月　日本人弁護士団引き揚げ、比島人法務官弁護人となる

昭和二十二年十二月　外務省円に比島裁判事務所設置さる

昭和二十三年四月　GHQ（連合国最高司令官総司令部、一九五二年、講和条約発効とともに廃止）法務局に比島部設けられ、比島政府法務官ドリエテ大尉部長として着任

昭和二十三年中　三名死刑執行さる

昭和二十三年十二月　残留者身柄、米軍より比島政府中央刑務所（モンテンルパ町）に移管さる

昭和二十四年十二月　軍事裁判終了

昭和二十五年一月　デルロサリオ少佐帰任、同時に比島部閉鎖、爾後半か年残務整理

昭和二十六年一月　十四名死刑執行さる

昭和二十七年六月までに、再審により、死刑より無罪へ一名、終身刑へ二名、及び大統領特赦により終身刑以上三名の釈放あり。

現在、残留者、死刑五九、終身三十、三十年六、二十年七、十七年一、十五年一、十二年一、十年三、六年一、計百九名（了）

二　マニラ収容所

二七、七、二〇

私の事件は元和蘭領セレベス島で起きたのでありまして、裁判は米軍関係であった為、フィリピン、マニラへ護送、同地の米軍軍事法廷で行われたのであります。

昭和二十七年といえば、戦後七年がたっていた。この年、講和条約が発効した。が、期待していた戦犯の釈放はなく、収監されていた父小太郎は、巣鴨拘置所の中で、これから述べる『マニラ収容所』を書いたのである。

私がセレベス島からマニラへ護送されましたのは、昭和二十一年七月末でありました。当時マニラに軍事法廷があり、容疑者収容所はマニラ郊外のラグーナ州カンルーバンと言う所にあったのであります。カンルーバンと言う所には終戦後、全比島の日本軍投降者の一般収容所と別に、戦犯容疑者収容所ありまして、この戦犯容疑者収容所には千数百名の収容者が、天幕張りの中に収容されていたのであります。私達のように他島から来たものは極く少数でありまして、他島からの者は皆米軍関係事件の容疑者で、セレベス、アンボン、ニューギニアから若干名来たのでありまして、他は全部皆比島にいた者ばかりでありました。

私が最初、戦犯容疑者として拘引されましたセレベス島マカッサル郊外のマンダイ収容所の状況につきましては、しばらく措き、マニラへ護送されて、収容所へ着いた時に、感じた事は、ここに収容されております全員が、非常に衰弱し切って生気のなかった事であります。

話にきゝますと、

「これでも最近非常に良くなったのだ」

と、異口同音に言うのであります。でも給与の悪さはお話になりませんでした。或る程、食事は一日三回食べさせられましたが、来る日も来る日もお粥です。お粥と言いましても米粒はほんの少量で、ある人が米粒を数えましたところ、十八粒しかなかったのです。皆、水ばか

りです。

人間、飢え程恐ろしい事はありません。皆、生きた骸骨のようになり、あばらは洗濯板のようになったのであります。仲間の軍医の意見は、このカロリーでは運動は絶対しない事、寝ているに限るとのことでしたが、寝る事は許されなかった事は勿論、毎日強制的に作業を課せられたのであります。

その作業の大部と言うものは、収容所付近草原の除草であります。御承知の方もありましょうが、常夏の熱帯地で毎日のようにスコール（夕立）がありまして、草の生育は素晴らしいもので、除草して二、三日すれば、又、元通りになるのであります。限りない大草原を毎日除草を繰り返す無味乾燥の仕事は、とても堪えられるものではありません。満腹しての時でさえ、あの炎天下で、この非生産的な仕事に堪えられるものではありません。しかも、飢餓と他面、裁判対策に一分一刻の余裕が欲しいのですが、その自由さえなかったのであります。時間を与えず思考力を喪失させ、無法の裁判に抵抗力を削ぎ、ついに屈服させるための一つの手段だった事は疑いの余地がないのであります。

この事は横浜裁判でも同様です。私が昭和二十二年七月、巣鴨に移送されました当時、未決で裁判中の人達は私達既決の食事より数等悪かったのであります。その理由は未決者は重労働をしていないとの理由です。しからば、既決に十分のものを与えていたか？「しからずです」

これは皆、裁判対策を不可能にし、彼等が思う通りの判決をするための一つの方法手段だったのです。この作業は重症患者を除くほか、強制的なものでした。あの炎天下、牛馬のように鉄の鞭の下で酷使されました事を思い出す時、よく身体が持ち耐え、気が狂わなかったと思い、ゾッとするのであります。否、そのためか、数名の者が発狂してしまったのであります。そして私達を待っておりますものは、起訴。公判。死刑の宣告であります。当時、一番、裁判事情の悪かった時期でありましたので、毎日の情報は、今日はどこのケースの誰々以下は死刑何名という、悲惨極まる情報ばかりでありました。

こうした日々を送っていたのでありますが、給養は依然改められないのみならず、ますます低下する一方でありまして、止むを得ず、代表者を出し、米軍当局に再三再四改善方を懇請したのでありますが、容易に認められなかったのであります。

（つづく）

漢詩

潮騒錄（四十二）

鯨游海

二宮金次郎は幼少時より両親を助け田畑の耕作に励んだが、毎朝起きるのが早くて働き出してから鶏の鳴く声を聴くのを常とした。

一方、愚かなる老人の私は若い頃から怠け者で寝床の中で夢うつつに鶯のさえずるのを聞くのを常とした。

さて比較するのもおこがましいことだが、金次郎とこの老いぼれの私との共通点は一坪の土地も一銭の財産も遺さなかったことにあるのだが……、

それにしても金次郎の生涯を通じての行いや徳の何と素晴らしいことであろうか。正に私とは雲と泥との差が出来て了った。所でこの差は何時何処で生じて了ったのであろうか…。実はこの答は起承句で既に詠んでいる。

「朝早く起きて働くか否かの違いなのだ」と。

☆鍬ふれば燃ゆるかぎろひ号ぶ鶏

凡夫ただ知る梅と鶯

賀乙酉春

平成十七年元旦

尊翁就勞聽鷄鳴
愚老惰眠聞囀鶯
相似無共一抔土
雲泥行德奈邊生

押韻・鳴鶯生

〈乙酉（鶏）の春を賀す〉

尊翁就労して　鶏鳴を聴くも
愚老惰眠して　囀鶯を聞く
相似たるかな　共に一抔の土なくも
雲泥なるかな行徳　これ奈辺より生じたるや

〔注　解〕

尊翁＝尊徳。二宮金次郎。囀＝さえずる。
一抔の土＝掌ですくえる程の土。一坪にも満たぬ土地。
ここでは遺された財産が皆無であることを指す。

二宮金次郎之一生（二十二）幕臣登用
平成十六年三月

此頃黒船侵犯繁
蘭英佛米露旗飜
驚天動地幕令下
一介田夫登武門

押韻・繁飜門

〈二宮金次郎の一生（二十二）幕臣への登用〉

此の頃黒船　侵犯繁りなり
蘭英仏米　露旗ひるがえる
驚天動地の　幕令下り
一介の田夫をして　武門に登らしむ

〔注　解〕

金次郎は五十六歳となり諱を尊徳と名乗った頃、小田原藩江戸藩邸および総州代官篠田藤四郎から出頭命令が相次いで来た。

勘定奉行岡本近江守宅に出頭すると厳しい面談があり眞剣勝負のような緊張感の中で行われた。実は老中水野越前守の指示による幕臣登用の為の面接試験であった。

合格した彼は袴と小袖を授与される。一介の田夫が異例中の異例として終に武門―それも幕府直轄の幕臣に列せられたのであった。

与えられた仕事は「利根川分水路疎通」や「印旛沼開拓」「下総大生郷村復興（幕府の直轄領）」等の大土木工事の計画書作成であった。

これは治水の他に東北地方からの物資を房総半島沖の海路を避け、内陸の水路によろうとする意図もあった。日本近海は黒船が遊弋していたのである。

幕府の鎖国政策による永い平穏な時代が大きく揺らぎ始め、風雲急を告げていた。

☆秋津島大和ゆるがす黒き船
功に免じて武士に叙すかも

二宮金次郎之一生（二十三）再度眞岡
平成十六年三月

佐幕勤皇公武論
攘夷開國世喧喧
命降立案復興策
荒廢日光神領村

押韻・論喧村

〈二宮金次郎の一生（二十三）再びの眞岡〉

佐幕か勤皇か　公武の論か
攘夷か開国か　世は喧々たり
命降る「復興策を立案すべし
荒廃せる日光神領の村々の」

〔注　解〕

佐＝助ける、補佐する。勤＝励む、努める。攘＝追いはらう、うちはらう。短歌の大筒とは大砲の異名。

金次郎は異例の取立により幕臣となったものの、その処遇は単なる土木技術屋としてのもので、諸藩復興事業の功が認められたのではなかった。

為に彼の斬新かつ抜本的工事案は、保守的な上司の元締、取締、御普請役らによって殆んど先送りされて了い陽の目を見ず、皮肉にも当面やる仕事が無い状況であった。士農工商の壁は依然として厚かった。

百姓を先ず富ますという正攻法の報徳仕法によれば、巨費と長期間が必要となる。風雲急を告げる時勢下では幕閣らも安直な突貫工事を望んでいた。

その頃日光神領の復興計画書の作成を命じられる。ここは家康公墳墓の地でもあり、名誉この上ない事と理想案作成に着手した。富田高慶以下勝れた門人を集め、二年余をかけて全八十四巻の厖大な労作を完成した。日光の地以外にも応用可能な普遍的仕法として「富国仕法書」と名付けた。その間、眞岡の手付として転じ、棹ヶ島村等の開発を行ない大きな成功を治めることとなった。

☆大筒に公卿おののき志士奔る
吾は愚直に田畑拓かん

二宮金次郎之一生（二十四）日光神領開發事業
平成十六年三月

大著終成富國篇
百村巡檢老昂然
幾人無賴化君子
何里荒蕪變美田

押韻・篇然田

〈二宮金次郎の一生（二十四）日光神領開発事業〉

大著ついに成る　富国の篇
百村巡検し　老いて昂然たり
幾人の無頼ぞ　君子に化したるは
何里の荒蕪ぞ　美田に変じたるは

〔注　解〕

二年余の歳月をかけ門人達を動員し、心血を注いだ仕法書の集大成―国富論が完成したものの、多事多難な幕府の事情から実施が見送られていた。七年後漸やく実施命令が下った時、金次郎は六十七歳となっていた。

そんな時病魔が襲う。この為長男の弥太郎、富田高慶、伊藤発身ら若手の門人らが分担して実施に当った。

病の小康を得た金次郎は、命により今市に住居を移し家族とも別れて取組んだ。先ず日光山に登り成功を祈願、次いで八十九ヶ村全村を検分して廻った。素衣素食し、

早朝より夜遅く乞歩き、地形によって具に指示し村民と親しんだ。新たに水路を堀り荒地を水田に変え、米が穫れるようにもした。また無頼の徒をわざと褒めて感激させ、改心させるような事も度々で、村民を心から慈んだ。

☆老いてなお百村巡り民と議す
瑞穂の郷を如何で富まさん

二宮金次郎一生（最終回）大推譲
平成十六年三月

譲世推人無一杯
遺風脈脈八州培
尊翁没去幾還暦
報徳精華将欲開

押韻・杯培開

〈二宮金次郎の一生（最終回）大推譲〉

世に譲り人を推し　一杯の土なくも
遺風脈々として　八州に培わる
尊翁没し去って　幾たびの還暦ぞ
報徳の精華　まさに開かんと欲す

〔注　解〕

一杯とはひとつまみ。一杯の土＝一つまみの土。とるに足りない土地。ここでは私財を指す。杯とは異字異義。

日光の開発が軌道に乗った安政二年は、病気勝ちだった六十九歳の金次郎にとって祝事が続いた。初孫金之丞の誕生と、日光法親王から「日光開発の段まことに奇特なり」と羽二重二疋を賜わった事であった。

既に死を予感していた彼は、大晦日の日記に次の如く記した。

「余が足を開け。余が手を開け。余が書簡と日記を見よ。戦々兢々として深渕に臨むが如く、薄氷を踏むが如くせよ。鳥のまさに死なんとする、その声や悲し。人のまさに死なんとする、その言や善し。慎めや小子、倦むこと勿れ」

論語にある曾子の言を借りたものだが、幾多の困難を乗り越え世に尽してきた己の生涯を返り見、後事を門人に遺託したのである。公に奉仕した一生だった。

翌安政三年、金次郎は七十歳の生涯を閉じた。彼の遺訓は安居院庄七、岡田佐平治らによって遠州を始め各地に拡がっていった。明治維新は目睫の間に迫っていた。

☆人を推し世に譲るこそ嬉しけれ
我れ一杯の土もなけれど

（完）

漢詩「二宮金次郎之一生」あとがき

明治時代の創刊であろう伝統を誇る月刊誌「報徳」（大日本報徳社）への二年余に亘る拙詩の連載が終ったのは昨年末、二〇〇五年一月号（通算№一一八一号）であった。全二六篇の詩は昨年初には一応完成していたので、丁度その頃募集中であった国際二宮尊徳思想学会第二回学術大会の論考締切に間に合い応募する事が出来た。

幸い選に入ったうえ、図らずも大会当日発表する日本側八名の中の一人に指名された。四十八篇の応募という。

二〇〇四年七月二十日、神宮外苑の日本青年館ホールに於て学会は開催された。猛暑の最中だった。

国際学会々長の北京大学教授兼日本文化研究所々長劉金才博士や中国社会科学院哲学研究所教授卞崇道博士ら三十余名の中国、韓国、英米加各国の錚々たる碩学、研究者らに加え、日本側参加者である皇紀夫京大名誉教授、安丸良夫一橋大名誉教授、並松信久京産大教授等々約二百名の前で発表する光栄に浴した。

筆者にとっては思ってもみなかった生涯唯一の晴れ舞台となり相当緊張したが、案ずるよりは無事に終った。

発表した論考は「漢詩で綴る二宮尊徳の生涯と哲学」と改題し、若干の概要に加え英訳を付したものである。殊に漢詩の英訳は難かしく娘夫婦を煩わせた。これらは後日、同学会の記念論文集に搭載、刊行される。拙考が更に内外の識者の眼に触れ、学会の歴史に残るのは面映ゆいが、誠に光栄の至りである。

このような機会を与えて下さった同学会（日本側代表は小田原二宮神社宮司、報徳博物館々長、同学会理事長草山昭氏）、大日本報徳社（社長榛村掛川市長）ならびに作家、史家三戸岡道夫先生（大日本報徳社副社長）らに厚くお礼申し上げる。

さて詩作の参考文献は主として三戸岡先生の名著「二宮金次郎の一生（栄光出版社）」に依ったが、参考というよりは同書の章に沿った抄訳といった方が適切であろう。故に多少でも学術大会や報徳運動に裨益する所があったとするなら、その功は全て同書に帰せられる。

抑も「この伝記を漢詩で詠んでみないか」と慫慂されたのも先生であった。「報徳」誌に連載中は全ての句についてご指導を忝のうし、推敲、修正を繰り返した箇所も少なくない。力量及ばず、むしろ同書の真髄と格調を損ねたのではと畏れる所である。掲載誌の性格上、敢えて倹勤、分度、推譲、報徳、至誠、積小為大、一円観等々の語を多用し、平易に尊徳像に迫る必要から極力難解な字や表現を避けるようにした。また各地での復興といっても、所詮は分度を守り勤勉に働らくという地味な営為の繰り返しである。而も伝記の史実に忠実にという点からは一ヶ所も欠落させる訳にはいかない。この事は読者に飽きさせ単調平板たる誇りを免れない。詩の芸術的表現美と史実の忠実な描写とを両立させるという矛盾、相

克もある。力及ばず猶忸怩たる所も多く、また文法上の無理や和臭、平仄の誤用等多々あるかも知れない。博雅のご叱声を俟つ所以である。

拙作に多少でも意義を見出すとすれば、漢詩という表現で尊徳を語った点にあるかも知れない。これは参加者の意表を突いたに違いない。また漢詩という言語芸術の復活に一石を投じ得たかも知れないと夢想するのも楽しい。

凡そ詩歌に最も適した言語は漢字である。とりも直さず漢詩は詩の最高の形式であった。それが本家中国も日本も長期凋落の傾向にあった。所が昨年十月の日本経済新聞によれば、中国で文化大革命以降軽視されて来た方針が転換され、伝統と古典が復権し漢文教育が重視されつつあるという。台湾では小学校で日本の約三倍の漢字を履修させ、古典、詩歌に注力しているという。更に韓国ではハングルに加え中学校で漢字教育を始めたという。これらのテキストには必ず漢詩が教材として登場する。

日本でも幼少時に漢詩を暗記、朗唱させよと説く識者が多い。漢詩は情緒を育くみ儒教の道徳を呼び覚ます。

かかる状況下、拙作が突如出現した。序章以下全二六篇、総字数七二八言の長篇叙事詩に驚ろかれた参加者も多いと思う。私の知る限りこれより長い詩は魏の鐘繇の「千字文」を詩として算入しても世に七篇しか無い。

日本では江戸時代広瀬旭荘の「送桑原華子歸天草」が一八三四言で日本漢詩史上最大長篇といわれる。彼にはもう一首「論詩」という二番目に長い詩がある。

中国では漢代無名氏の「孔雀東南飛」があるが一部散佚し数千字といわれている。次で唐末韋荘の「秦婦吟」一六六六言、無名氏の「津陽門詞」が一四〇〇言、中唐白楽天の「長恨歌」が八三三言である。

即ち拙詩は「長恨歌」には及ばないが、白楽天の「琵琶行」六一六言、蘇東坡の「前赤壁賦」五三六言等よりは長い。つまり日本では三番目、中国を入れても八番目となろうか。尤も長いだけでは好しとしない事勿論であるが、漢字文化圏に於ける国際学会らしい雰囲気とはなった。余談だが当日夜の宴席で前述の中国社会科学院哲学研究所卞崇道教授から即興に作られた応答の漢詩二首を贈られた。流石文の国の文人だと感動した。図らずも漢詩の応酬という親善外交となった。

近世、近代を通じ五〇〇年間世界に君臨した西欧文明が成熟し衰退期に入った（S・ハンチントン）という。これに替る文明は中華文明及び日本文明、ヒンズー文明の東アジア連合文明と期待されている今日、それに相応しい思想が求められよう。その一つが近世日本が生んだ二宮金次郎の報徳思想である。この偉大な思想家、道徳家、大事業家、大政治家、革命家そして何より良き教育者であった翁が世界に認知される日も近いであろう。

筆を擱く今、改めて尊徳を追慕、尊崇する所以である。

撞木

☆「まんじ語録」が本誌九四号に掲載され話題を呼んだ。新井宏氏が最近五年間のまんじ掲載作品の中から印象に残った作品のエッセンスとも言うべき至言をとりまとめ発表したものである。

☆まんじは創刊以来二四年目を迎えようとしている。その間数々の優れた作品が生まれ、中には、キラリと光る名言も少なくない。だが、これまでこのような形でとりまとめられることはなかった。この語録には、新井氏自身の言葉も解説もないが、まんじに寄せる新井氏の愛着が感じられ最近五年間のダイジェスト版を見る思いがした。

☆「理論や学問は完成度が高ければ高いほど現実に運用するといびつになる」滝澤中氏大山巌外伝。「俗説には権威がない。しかしより合理的であれば何れは定説にとって替る。正論は権威に勝る」鯨游海氏論語の解釈。「物を担保に金を貸すのではなく、人の心を担保に金を貸すのである」三戸岡道夫氏報徳の人二宮尊徳。「女というものは自分の美しさのゆえに犯される行為ならば、それがどんなに悪徳に満ちていても自からを許してしまうものか」島津隆子氏妖花藤原薬子。「品物は自分の金で買って触って、時には使ってみて本当の良さが解る」忠内正之氏古い物・遠い夢。

☆まだまだたくさんの名言を新井氏はあげている。創刊号から数え上げれば、相当の量に達するであろう。同人が増加し、質量ともますます充実してきた昨今、さらに多くの名言、名句が生まれることを期待したい。（OS）

まんじ　第95号

平成17年2月1日発行（非売）

発行人　三戸岡道夫（みとおか　みちお）
編集長　太田精一（おおた　せいいち）
事務局長　鍋屋次郎（なべや　じろう）

（事務局）〒223-0056　横浜市港北区新吉田町2477－3　太田善朗方
TEL・FAX　045（544）5947

（郵便振替口座）No.00270-0-64592　加入者名　まんじ

（印刷製本）大和印刷株式会社
〒332-0031　川口市青木1－12－20
TEL 048（254）3311　FAX 048（254）3313

表紙の絵について　田寺怜葦　画
仏が邪心のない童児の表情を借りて人の世に
あまねく光明をもたらしてくれる。

まんじ

No. 96

2005.5.1

まんじ第九十六号　目次

裏切られて……千坂精一…4
天城の鬼火……堀内永代…14
もたれ柱……太田和貞…22
消えた「誉れの家」……大和禎人…25
「ジロー」とともに暮らした日々……伊治哲…27
古い物・遠い夢〝茶道具三昧〟……忠内正之…35
志まや……吉田忠雄…40
「街道をゆく」のなかの荻生徂徠（司馬雑感三）……山田嘉久…46
「卑弥呼の鏡」の焦り……新井宏…56
還暦からの考古学（二）玉の話（1）……中山喬央…62
短歌　行雲流水（九）……石黒修身…74
短歌　北よりの使者……曽根竣作…78
現代詩　「ろかいゆ」より（十四行詩三題）……松下壽男…81
ハート・トウ・ハート　第一話サマータイム……松下壽男…82
針の穴を通った駱駝（二）……鍋屋次郎…97
孔子春秋（三）第六章、第七章、第八章……三戸岡道夫…110
茉莉花伝（三）―東丹国使と来た娘―……森下征二…126
小野小町物語（五）……島津隆子…148
遙かなるカメルーン（七）……太田精一…158
漢詩　潮騒録（四十三）……鯨游海…167
撞木……編集子…172
表紙……田寺怜葦
カット……宮城正彦
鈴木國男
清水トム

裏切られて（二の一）

千坂精一

「いくら突いても、魚のほうで逃げてしまうのじゃ」

龍若丸は、泣き出しそうな顔を新介に向けて弁解した。

龍若丸の父関東管領上杉憲政は生来軟弱な人で、能や茶の湯を嗜み、音曲を好んで蹴鞠や乱舞に興ずるといった、およそ武将の器には程遠い多才な趣味人であった。

妻鹿田新介は、かねてからそんな憲政を苦々しく思っていたので、己れが龍若丸の傅役に選ばれたとき、

（この御曹子は、是が非でも関東の諸将を束ねる頭梁に相応しい凛々しい若武者に育て上げねばならぬ）

と固く心に決めたのだった。

上杉氏は、丹波国何鹿郡上杉荘（京都府綾部市上杉町）の領主であったが、後嵯峨天皇の第一皇子宗尊親王が初の宮将軍（六代）として鎌倉幕府に迎えられたとき、始祖の重房が側役に選ばれて上杉荘を離れた。

関東へ移った上杉氏は、重房の孫娘清子が足利貞氏に嫁いで尊氏、直義兄弟を産んだことから、のちに室町幕

一

天文二十年（一五五一）秋―。

収穫を終えた長閑な村里の静寂を馬蹄の響きが破った。

思い思いに寛いでいた農民たちは、咄嗟に緊張して戸外へ飛び出した。戦乱の世に慣れた機敏な行動であった。

三人の騎馬武者が、平井城のほうへ疾駆していった。

（また、合戦がはじまるのか）

農民たちは異変を覚り、不安な眼差しで見送った。

恰度その頃、妻鹿田新介は城近くの鮎川で管領家の御曹子龍若丸に武術鍛練のあと魚獲りを教えていた。

ときおり浅瀬へ紛れ込んでくる小魚を先の尖った竹竿で突いて獲るのだが、もう半刻余りもやっているのに、龍若丸はまだ一尾も仕留めてはいなかった。

「若君。もっと眼を凝らして素早く突かねばなりませぬ」

新介は、龍若丸の腑甲斐なさに呆れ果てていた。

府の世になると将軍家の外戚として関東公方を補佐する管領職に重用され、四家に分かれて勢威を誇った。

ところが、そうなるとこんどは他家より一歩抽ん出ようとする競合がはじまり、たがいに傷つき衰退した。

全盛期には山内、犬懸、宅間、扇谷とあった四家が、山内、扇谷の二家になり、さらに性懲りもなく競いつづけている間隙を衝かれて、新興勢力小田原北條氏の擡頭で関東の北隅へ追い遣られ、山内家は上野平井城に、扇谷家は武蔵河越城に逼塞させられてしまったのである。

扇谷家は、朝興が病死すると、ふたたび北條氏綱に攻められて防ぎ切れず、河越城を捨てて松山城に退いた。

そうなっては平井城も焦眉の急となった憲政は、河越城の奪回を図り、扇谷家の当主上杉朝定を誘って結集した兵力六万五千に、古河の関東公方足利晴氏軍とも連合して、都合八万五千の大軍で河越城を囲んだ。

しかし、小田原から駆け付けた北條氏康率いる八千の援軍に乾坤一擲の夜襲をかけられて敗れ、朝定が戦死して扇谷家が滅び、山内家だけになってしまった。

新介は、衰退した主家の恢復に日夜腐心し、重臣たちにも献言をつづけてきた。山内上杉譜代の臣としての歯痒い思いも嫡子龍若丸傅役の幸運を掴んでからは、己れの栄達も含めて捲土重来を期すことに拍車がかかった。

たとえ一豪族の傅役でも、その子が当主になれば人も羨む権力者になれるのである。ましてや関東管領御曹子

の傅役ともなれば、将来は破格の出世が期待できた。

だが、関東管領とは名ばかりの尾羽打ち枯らした現在の状態では、与党と恃む国人たちもみな打算で動くから、ひとたび抗争になると優勢なほうに馳せ参じる日和見ばかりで頼りにならなかった。

管領家が見縊られるのは、棟梁が脆弱だからである。

（再興は棟梁の器量に因る。強い武将に育てることだ）

新介は、そう心に決めて龍若丸の養育に励んできた。

しかし、龍若丸は軟弱で、武事より遊芸を好んだ。

（血筋はあらそえない）

そう思いながらも、遮二無二叱咤激励しつづけた。

「管領家の御曹子が、魚一尾刺せぬとあっては嗤われますぞ」

だが龍若丸は、新介の叱責に発奮するどころか、弱音を吐いて泣き出さんばかりの体たらくであった。

そんな軟弱さが焦れったくて、遣り切れなかった。

「どれ、新介がやってご覧に入れまする」

ついに苛立って替わると、浅瀬の一点を凝視した。

ほどなく魚影が新介の視野を掠めた。と同時に竹竿を持った腕が素早く動いて、みごとに小魚を刺し貫いた。

「なんども申しますように、全神経を水面の一点に集中して、気配を察知すると同時に突くのでござりまする」

新介は、突き刺した小魚を龍若丸の眼の前に差し出してそう教えた。龍若丸は唖然として声もなかった。

「さ、もう一度おやりなされませ。心して武道に励み、優れた棟梁におなり遊ばさなければなりませぬぞ」

そう言って、小魚を抜いた竹竿を龍若丸に手渡そうとしたとき、遠くでなにやら叫んでいる声が聞こえた。

新介が、声のするほうへ顔を向けると、家中の誰かが川原伝いにこちらへ疾駆してくるのが認められた。

駆け付けたのは、憲政の側近曽我兵庫介祐俊であった。

「只今白井城から異変の報らせが届きました。後刻長尾一聲齋殿が詳細を持って参られるそうにござりまする」

長尾一聲齋とは左京亮景盛が薙髪法体しての号で、白井城（群馬県北群馬郡子持村白井）主。代々関東管領山内上杉家の上野守護代をつとめる家格である。

新介は、咄嗟に、

「なに、また武田か北條が攻めてくるというのか」

ときき返した。

「しかとは判りませぬ。ともかく、急ぎお戻り下さるようにとのことでござりまする」

そう伝えると、曽我兵庫介は慌ただしく駆け去った。

（また攻められるのか。甘く見られたものだな）

新介は、うんざりして虚空を見上げた。

この春には、北條氏康が攻めてきていた。

上杉氏を凋落させて関東管領の地位を奪い取ろうとする氏康が、三万の大軍を率いて北上してきたのだ。

これを迎え撃つ上杉方は、東上野の諸将の応援を得て、両軍神流川を挟んで対峙した。

三月十日未明、北條軍の仕掛けで火蓋が切られた。

緒戦は地の利を得ている上杉軍が有利に展開して、手古摺った北條軍はいったん後退したのだが、百戦錬磨の氏康がみずから陣頭に立って全軍の士気を鼓舞すると、奮い立った北條軍は劣勢を盛り返して上杉軍を攻め立てたので、形勢は逆転した。

受け身に廻った上杉軍は、陣容を立て直す遑もなく総崩れになり、平井に退くと、金山城も固めて籠城した。

北條軍は、分散して諸城の攻撃にとりかかったが、どの城も堅固で容易に陥ちず、攻め倦ねた氏康はついに諦めて兵を纏め、小田原へ引き揚げていったのである。

このとき氏康は、遠征で疲労の濃い将兵たちをこれ以上長陣させては不利と判断して他日を期したのであるが、管領家の部将たちのなかには北條軍は攻め切れずに諦めて撤退した、と見縊る者が多かった。

二

平井城の大広間に老臣、部将、側近たちが集まった。

そのなかに妻鹿田新介と曽我兵庫介もいた。

上段の間の白面の貴公子は、二十九歳の関東管領上杉四郎憲政で、その横に龍若丸が神妙な顔で控えていた。

憲政は苛立っていた。額の青筋が癇癖を露わしていた。

刻が過ぎた。

「一聲齋はまだ到着せぬのか」

憲政は、痺れを切らしてそう叫んだ。

「ほどなくお着きになられましょう。いましばらくお待ち下されますように」

そう答えたのは曽我兵庫介であった。

「使者が到着してからいつまで待たせるのじゃ。遅い、遅い。早馬仕立てで火急の用向きと大仰に申して遅過ぎる。一聲齋はなにを愚図愚図いたしておるのじゃ」

「恐れながら、使者は屈強の若者でござれば早駆けも厭いませぬが、長尾様はご老体ゆえ刻もかかりましょう」

曽我兵庫介は、一聲齋を弁護して憲政を宥めた。

白井城は、おなじ上野国といっても、高崎の北方渋川市に隣接する子持村の利根川との合流点に近い吾妻川の断崖の上にあった。現在は田畑の奥の森の中に大きな石垣が二つ三つ名残りを留めているだけである。

「予は待ち草臥れたぞ。使者を出して急がせよ」

「畏まりました」

曽我兵庫介が立ち上がろうとすると、憲政がさらに、

「そうじゃ。酒を飲んで待つといたそう。これへ持て」

と命じた。

「はっ、只今」

そう答えて兵庫介が大広間を出て行こうとするのを、

「兵庫介、待て」

と制止したのは、老臣の三田五郎左衛門であった。

三田五郎左衛門は、もと扇谷家の家老であったが、河越の夜戦で当主の朝定が戦死して滅亡してからは、山内家に仕えている沈着冷静で智謀に長けた人格者であった。

「徒事ならぬ前触れなれば、酒はおひかえなされませ」

「すこしぐらい飲んだとて、酔いはせぬわ」

「なにとぞ素面で長尾殿とご対面なされますように」

「煩い五郎左じゃ。一聲齋がすぐに参るのであれば酒など飲まぬわ。兵庫介、早々に迎えを出して急がせよ」

「それがしが途中までお迎えに参じましょう。ごめん」

兵庫介は大広間を退ると、早馬を駆って藤岡へ急いだ。

晩秋の日はすでに暮れようとしていた。

憲政の苛立ちが、居並ぶ家臣たちのあいだにも伝播した頃になって、ようやく長尾一聲齋の一行が到着した。

大広間へ通ったのは、一聲齋と二人の家臣であった。

「一聲齋、待ったぞ。早馬など寄越して何事じゃ」

「お待たせをいたしました。ご一同もお待たせ申した」

「一聲齋、挨拶などはどうでもよい。用向きを申せ」

「さればでござりまする。背後に控えておりまする両名はそれがしが小田原へ潜入させた者たちでござりまする」

「本間近江でござりまする」

「猪股左近でござりまする」

「うむ。大儀であった。して小田原でなにがあった」

「はい。近頃氏康はふたたびわれらを攻めんと目論み、小田原の諸将に陣触れをいたしたそうにござりまする」
「なにッ。氏康がまた攻めてくるとな。それはまことか」
憲政の顔がさっと青褪めた。
「まことでござりまする」
一聲齋にかわって猪股左近太夫が答えた。
「氏康は、春の決着をつける覚悟にござりまする」
「しかと左様か」
「相違ござりませぬ。氏康の身辺を限なく探索り出しての確証なれば、すわ一大事とわれら両名夜陰に紛れて小田原を脱出し、急ぎ馳せ戻りましてござりまする」
本間近江守が自信を持って答えた。
連座している家臣たちのあいだに動揺が起こった。
「ご苦労でござった。ひとまず別間でご休息下され」
三田五郎左衛門は、老体の長尾一聲齋を犒った。
「ご案内つかまつりまする。いざこちらへ」
曽我兵庫介が立ち上がって、三人を促した。
「では、お言葉に甘えて暫時ご無礼つかまつる」
一聲齋らは憲政に挨拶すると、兵庫介の案内に従った。
老臣、部将、側近たちのあいだの私語が次第に高まり、やがて大広間は騒然となっていった。
「おのおのがた、お鎮まりなされ」
三田五郎左衛門が、大声で一座を制した。
「北條が攻めてくるなら、急ぎ対策を立てねばならぬ」
五郎左衛門の言葉を受けて、すかさず声が挙がった。
「神流川に陣立てして、迎え撃つことにいたそう」
そう口火を切ったのは、菅野大膳亮であった。
「いや、春の合戦からして、上野軍だけでは心許ない」
五郎左衛門が渋った。
「春のおりには混成軍の弱点を衝かれて不覚をとり申したが、そこのところを反省して団結いたせばこんどは大丈夫でござる。管領家の威光を示すためにも上杉麾下の総力を挙げて迎え撃とうではござらぬか」
「なれど、上野の諸将には春の敗戦の後遺症がある。聊かなりとも劣等意識があっては合戦には勝てぬものじゃ」
五郎左衛門は断固反対した。
「しかし、籠城戦では持ち堪えましたぞ。まさかのときには、またこの城に立て籠もればよいではござらぬか」
「氏康ほどの武将が、おなじ戦術をとろうはずはない」
「では、この城も陥とされると申されるのか。それほどまでにわれらを腑甲斐なく思っておられるのか」
上原兵庫助が、菅野大膳亮を援けて噛みついた。
妻鹿田新介は、双方の遣り取りを聴いていて、三田五郎左衛門のほうが情勢を適確に把握していると思った。
菅野大膳亮にしても上原兵庫助にしても、関東管領家の勢威をいまだに過信していて、鎌倉以来の名門に拘泥わりすぎているために、凋落した現実を見失っていた。
(虚勢で合戦に勝てるはずはない。ここは面目を捨てて家

名を長らえねばならぬのだ)
新介は、無謀な好戦派を苦々しく思った。
菅野大膳亮と上原兵庫助は、感情を剥ぎ出しにして吠え立てたが、五郎左衛門は飽くまでも冷静であった。
「どう贔屓目に見ても、北條軍を防ぐことは難しい」
「では、三田殿はどうなされまするか。まさか一戦も交えずに北條の軍門に降るおつもりではござりますまいな」
「この期に及んで管領家の存続を図る手段はただひとつ、信ずるに足るおかたに庇護をお頼みするしかない」
「お説ごもっとも。かくなるうえはそれしかござらぬ」
新介は、五郎左衛門の考えに頷き、そう合槌を打った。
「それは、どこの誰じゃ。申してみい」
菅野大膳亮が、新介に鉾先を向けてきた。
氏康と拮抗する武将は甲斐の武田晴信(後の信玄)であったが、武田とは先年こちらから事を起こしていた。
あのときも、菅野大膳亮と上原兵庫助が急先鋒だった。
菅野と上原は、河越の敗戦以来、武田が上杉を見縊って上信国境を脅かしていることに我慢がならなかった。
佐久の大井貞清が武田晴信に内山城を陥とされると、志賀城の笠原清繁は透かさず上杉に救いを求めてきた。
菅野と上原は、ここで武田軍を挫けば北條氏康も上杉の底力に舌を巻いて一目置くようになるだろうと考えて、
「武田晴信は、只今瘧で臥しているとのことゆえ、討つのはいまが好機でござりまする」
と憲政を唆して、その気にさせたのである。
憲政にしても、扇谷上杉や古河公方と連合しての大々的な河越城奪回戦の敗戦は、忘れられぬ屈辱であった。
その汚名挽回の好機到来と、勇躍して救援を承諾した。
それを伝え聞いた箕輪城(群馬県群馬郡箕郷町)主長野信濃守業正が、急ぎ憲政の許へ駆けつけてきて、
「お屋形様が武田攻めをなさることはまったく道理の通らぬ企てにござりまする。この春の河越での大敗は、勝敗はときの運とは申せつまりは軍法のお心得薄きがゆえによるもの。左様なれば当家の宿敵は氏康一人に定めて、これを退治する謀を巡らすのが急務でござりまするに、それをさておき、なにゆえに意趣遺恨もなき武田を攻めようなどと思し召されまするか。毛を吹いて疵を求むるようなことなされようには業正同意いたしかねまする」
と諫めたが、失権回復を焦る憲政は菅野や上原の口車に乗せられて北條に敗れた無念を晴らす好機と勇み立っているところへ水を差されたことが面白くなく、せっかくの業正の諫言を素直に聴き入れようとはしなかった。
翌天文十六年(一五四七)八月、上杉の援将金井秀景は、三千の兵を率いて笛吹峠(現入山峠)を越え、浅間山南麓の佐久郡小田井原(佐久市小田井)へ進出した。
だが、板垣信方を先鋒とする甘利虎泰、横田高松、多田満頼らの武田軍の猛攻に遭って支え切れず、たちまちのうちに笛吹峠の東に敗退した。

河越につづくこの敗戦で、憲政の威信は地に墜ち、武蔵や上野の諸将は次第に管領家から離叛していった。

そんな経緯から、武田に頼れるはずはなかった。

（もう一人いる）

新介は、菅野大膳亮の詰問に胸を張って、

「越後の長尾景虎殿でござる」

と答えた。

「そうじゃ。妻鹿田の申す長尾景虎殿に頼るほかはない」

五郎左衛門が大きく頷いた。

「長尾景虎は、お家の敵の血筋ではござらぬか」

上原兵庫助が、むきになって否定した。

山内一門上條家の越後守護上杉房能が、永正四年（一五〇七）守護代長尾為景に弑逆されていた。

山内家へ養子に入っていた関東管領上杉顕定は、ただちに越後へ軍勢を向けて弟の敵長尾為景を越中へ追い遣ったが、盛り返してきた長尾軍と越後の長森原（南魚沼市）で戦って返り討ちされてしまったのである。

景虎は、その長尾為景の子であった。

「景虎殿は、汚名を晴らさんと越後守護家に恭順された」

「だからと申して、管領家がそのような血筋は頼れぬ」

「さりとて、氏康に匹敵する武将はほかにおらぬ」

「おろうとおるまいと、景虎を恃むは不承知でござる」

三田五郎左衛門の説得に押され気味の上原兵庫助を援けて、菅野大膳亮が、

「景虎などに頼らず、上野の諸将を叱咤激励して応戦するのが管領家の面目でござる」

と突っ撥ねて、飽くまでも徹底抗戦を譲らなかった。

新介は、

（たとえ面目を失おうとも、危険な賭けは避けるべき）

であろうにと、我を張り通す二人が忌ま忌ましかった。

大広間での論争は、双方対立したまま膠着した。

こういうときは、棟梁の憲政がみずからの意見を開陳すれば、異論を唱える家臣たちも否応なくその決断に従うのであるが、憲政は敗戦の憂き目を恐れながらもなお一縷の希望も捨て難く、どうしたものか迷っていた。

顧みれば、先年の河越夜戦も、小田井原の戦いも、結局は今川義元に誘われたり側近の好戦派に唆されて起ったのであって、みずからの決断ではなかったのである。

優柔不断な憲政には、自信をもって決断するだけの器量がなく、菅野や上原ら好戦派の強硬意見を聴くたびに、うちつづく敗戦の惨めさに苦渋し、迫りくる危機に怯え戦く小心翼々とした哀れな棟梁であった。

晩秋の夜は更けていったが、三田五郎左衛門や妻鹿田新介らの穏健派と、菅野大膳亮や上原兵庫助らの強硬派との論争は、いつ果てるともなく空転しつづけた。

三

その後も評定は毎日つづいたが、越後の長尾景虎を頼るか、上野の諸将を集めて応戦するか、の両論が激しく対立したまま決着がつかず、徒らに日は過ぎていった。

戦力差を自覚している者は前者を支持し、猪突猛進する好戦派は後者を固執して互いに一歩も譲らなかったが、しかし繰り返される激論に酔うほどに後者を支持する者たちが漸増してきていることを新介は憂えた。

このまま推移すれば、やがて評定は北條軍と戦うことに決定してしまうだろう。それは同時に名門上杉家の潰滅をも意味していた。上杉家が滅亡すれば、将来を夢見て築き上げてきた栄達への道も水泡に帰してしまう。

いまでこそ憲政の側近に過ぎないが、龍若丸の世になれば、傅役として権勢を誇れる立場になれることを約束されていながら、それが泡沫と消えてしまうことが無念で口惜しく、新介はなんとしても諦め切れなかった。

思い詰めた新介は、苦悩のすえに、

（北條軍を迎え撃つことに決したならば、合戦準備のどさくさに紛れてお屋形様と龍若丸様を密かに城から脱出させ、春日山の長尾景虎殿に庇護を頼みに行こう）

と臍を固めた。

冷たい夜気のなかで、半刻も腕組みして思案を重ねていたので、躰がすっかり冷え切ってしまっていた。

われに返った新介は、身震いして歩きはじめた。

その頃、会談を終えた三田五郎左衛門も城を出た。

はじめは五郎左衛門に同調していた老臣たちも、菅野大膳亮や上原兵庫助らの好戦派に籠絡されて、評定は次第に北條軍を迎え撃つ気運が高まっていった。

五郎左衛門は、一人減り、二人減りして、だんだん少数になってゆく穏健派の先頭に立って、好戦派に傾いて行く老臣たちを思い留まらせることに苦慮しつづけた。

今宵もそれらの老臣たちを説得しての帰りだった。

疲れた老躯を引き摺るようにして鮎川の辺りを歩いているとき、ふと前方の闇の中に人の気配を感じた。途端、駆け寄ってきた黒い影が五つ六つ行く手を遮った。

「三田殿でござるな」

低い声が不気味にひびいた。

「そうじゃが、ぬしらは何者じゃ」

言い終わらぬうちに、ぞっとする殺気を感じた。

五郎左衛門を庇う三人の供侍の前で白刃が閃いた。

五郎左衛門と供侍たちは、素早く刀を抜いて身構えた。

主従を遠巻きにした黒い影が、徐々に囲みを狭めてきて数呼吸の後、曲者たちは一斉に斬り掛かってきた。

五郎左衛門と供侍たちは、咄嗟に離れ離れになった。

五郎左衛門に斬り掛かってきた曲者は、刺客の首領らしくかなりの遣い手だったので、懸命に斬り結んだ。

しかし、気力はあっても、躰の自由がきかず、息切れしてたちまち鮎川の土手に追い詰められてしまった。

（無念じゃが、もう駄目だ）

と五郎左衛門は思った。精も根も尽き果てていた。

そこへ、おりよく城へ戻る新介が通りかかった。
異変に気付いた新介が、足早に駆け寄り、
「妻鹿田新介だが、なにごとだ」
と叫んだとき、黒い影がいきなり斬り掛かってきた。
新介は、素早く刀に手をかけると、影を横に払った。
その一太刀で曲者はその場にどうと倒れた。
「おお新介か。よいところで出会った。曲者に襲われた」
嗄れ声が三田五郎左衛門と判ってすべてを覚った。
菅野大膳亮か上原兵庫助が差し向けた刺客に違いない。
(卑劣な奴等め)
新介は、心底から怒りが込み上げてくると、その思いを刃に托して曲者めがけて躍り込んでいった。
闇の中で新介の白刃が目紛しく閃いた。
敵わぬとみた刺客の首領が、
「退け、退けッ」
と叫ぶと、曲者は一斉に闇の彼方へ逃げ去った。
「ご老体、大事ございませぬか」
新介が駆け寄ると、五郎左衛門は片膝をついて肩で荒い呼吸をしていたが、
「なんの、なんの。大事ないわ」
と虚勢を張った。
気丈な五郎左衛門であったが、口では強がりながら立てずにいるのを供侍たちが駆け寄って肩を貸した。
「お屋敷までお送りいたしまする」
新介が先に立って、あたりを気配りながら歩いた。
「新介。われらの身辺も危うくなって参ったのう」
背後から五郎左衛門が声をかけてきた。
「くれぐれもご油断なきようお気を付けなされませ」
身辺を固めねば好戦派の刺客に斃される虞があった。
五郎左衛門を無事に屋敷まで送り届けた新介は、すすめられるままに客間へ通って酒を馳走になった。
先刻刺客に襲われたとも思えぬ静かな夜であった。
「新介。これからは得体の知れぬ刺客にたびたび狙われることも覚悟せねばならぬ。われらの身に危険が迫ったとて断じて挫けてはならんぞ。現在の管領家にはぬしや兵庫介のような人材が頼りなのじゃ。ここはなんとしてでも越後の長尾景虎殿を恃むことにいたさねばならん」
「ごもっともでござりまする。北條軍を迎え撃つことになりますれば、お家の滅亡は眼に見えておりまする。氏康の強さは春の合戦でいたく思い知らされました」
「尊氏将軍以来、関東管領としてこの東国に君臨してきた名門上杉四家も、いまや山内家だけになってしもうた」
「その山内宗家も、現在は北條に逐われておりまする」
「せめてもわが旧主扇谷家が健在であったならば、関東管領家は成り上がりの北條などにこうまで蹂躙されることはなかったであろうに、口惜しいことじゃ」
「いまさら悔いても詮ないことでござりまする」
「栄枯盛衰は世の倣いと申すが、上杉のお家はなんの因果か知らぬがながいあいだ同族同士の内輪争いがつづいたために、互いに勢威を衰えさせてしもうた」
「ご老体。もう繰り言はお止めなされませ」
「こうなってしもうたからにはもはや山内家も扇谷家もない。われら同族の家臣たちが結束して是が非でも山内管領家を守り通さねばならぬ。それが上杉一門の家臣たるわれらのつとめじゃ。新介、頼むぞ」
「もとよりそれがしとて、ご老体と同心でござる」
「うむ。新介、ぬしは頼もしいのう」
「なんの。扇谷、犬懸、宅間それぞれの旧臣と雖も上杉家の家臣に相違ござりませぬ。一蓮托生でござりまする」
五郎左衛門と新介は、顔を見合わせて嗤った。
晩秋の夜は、いつか更けていった。
新介は、引き止めを固辞して夜半に三田屋敷を出た。
空には月も星もなかった。その暗闇のなかを冷気を浴びてゆっくり歩いたが、ほろ酔い気分ではなかった。
五郎左衛門と差し向かいで迫り来る主家の危機を語り合いながら交わした盃は、酔える酒ではなかった。
新介の伎倆をもってすれば、好戦派の差し向ける刺客などは歯牙にもかけなかったが、北條軍が攻めてくれば万に一つも勝ち目はないから、ここは難を避けるが上策と主張はしているものの、果たして推挙した義侠の人と噂に高い越後の長尾景虎を頼ってみたところで、かならずしも庇護して貰えるという保証はなかった。
大事をとって、密かに同意してくれている白井城主長尾一聲斎から越後北魚沼郡葎生城(小千谷市)主平子房長を介して長尾景虎の意向を伺って貰っているのだが、否か応かの返事はまだ届いていなかった。
たとえ吉報を得ても、叛服常無しの世であれば、越後へ足を踏み入れた途端に襲われて潰滅する不安もあった。
だが、一半の危懼はあるにしても、始めから負けると判っている北條軍と合戦して全員玉砕の憂き目を見るよりは、一縷の希望のあるほうを選ぶべきであった。
北條軍を迎え撃つと決まれば、好戦派の者たちは憲政と龍若丸を本丸に移して士気を鼓舞し、脱落者が出ないよう厳重に見張るであろう。その監視の眼を掠めて二人をどう脱出させるか、新介の頭のなかはそのことだけで占められ、あれこれ具体策を立てるのに懸命であった。
(なんとしてもお二人を城から脱出させねばならぬ)
と焦るのだが、確実な方法となると自信がなかった。
(とても一人では駄目だ。兵庫介に協力して貰おう)
新介はそう肚を決めると、闇路を辿る足取りを早めた。
(つづく)

天城の鬼火（その一）

堀内永代

一

「やけに今夜は蒸すなぁ」

「ほんとに暑いはねぇ、もう一週間もすれば梅雨だものねぇ」

「うん、梅雨は温泉場にとっては歓迎せざる季節だな。登世子さん、本谷楼の景気はどう。相変わらずお客を断わるのに忙しいかい」

「いいえ、うちの旅館もこの頃は暇になったわ。今までみたいに、土地転がしで儲けたとか、株で儲けたというお客様はめっきりなくなったわ」

「やっぱりお客が減ったのはうちの旅館だけではないんだ。景気がこれから悪くなるという話がＪＣＣの会合で聞かれるが本当なんだなぁ」

「ＪＣＣって健太郎さんが入っている青年会議所のこと？　そこではいろいろな話が出るんでしょうね」

「先週の講演会での話だが、一九八五年に開かれた先進五ケ国蔵相・中央銀行総裁会議のプラザ合意以来円高ドル安になって、日本は金余り現象が生じたんだ。その結果、その金が不動産や株式に投資されて異常な好景気となり、土地は持っていれば必ず値上がりするという土地神話が生まれた。こういう見せ掛けの景気のことをバブル景気というんだそうだが、その反動と、大蔵省・日銀の金融引締め政策があって、やがて土地や株式が値下がりしてデフレとなり、日本は不況になるそうだ。そうなれば、一番先に不況の波を受けるのが観光産業なんだ」

「難しい話はよく判りませんが、嫌な世の中になりそうですわね。健太郎さんは経営者だから大変ね」

「そうだな、ところで隣の家はばかに静かだけれど留守なのかい」

「お隣りは、奥さんの実家から貰った土地に家を建てて先週引っ越したので今は空き家なの。向こう端は老人夫婦だから気にすることないわよ。でもわたし嬉しかったわ。健太郎さんみたいな優しい人に巡り逢えて……」

青山健太郎の家は、ノーベル賞作家が書いた小説の舞台にもなった伊豆・湯ケ島温泉郷の老舗旅館白雲荘。一方、大沢登世子が働いている本谷楼は、明治時代から今日まで、文人墨客が逗留することで知られている当地を代表する有名旅館である。

青山健太郎は今年三二歳、地元の進学校の元野球部員で、同校が甲子園で全国制覇したときの強肩強打の名センター、そのうえ老舗旅館の後継者であったので、お嫁さんの候補者が多く、選ぶのに困っているという噂であった。本人は自分の立場を心得ており、特定の女性に深入りすることはなかった。

大沢登世子は秋田生まれで、短大卒業後、雄物川河口の海産物問屋の事務員となったが、日本人離れした容姿が災いして男性との噂が絶えず、会社に居づらくなって二年ほどで退職した。一度は東京で勤めたが、そこも長続きせず、天城湯ケ島温泉でようやく落ち着いた生活を始めるようになった。

登世子には、温泉旅館の仲居の仕事が性に合っているのか、今までにもまして明るくなり、旅館の主人夫妻からも、同僚の誰彼からも好かれていた。しかし、登世子は自分の出生地以外は、年齢も過去も一切語ろうとせず、ちょっと謎めいたところがあった。

そんな登世子であったが、去年の蛍祭りの夜、やくざ風の男に絡まれていたのを健太郎が助けてから、二人は急速に接近した。

登世子は、背が高く、高学歴で、高収入と若い女性が理想とする三高青年であった健太郎に夢中になったが、健太郎は素性の知れない登世子にちょっと距離を置いて付き合っていた。しかし、二人の仲は、健太郎の意思とは反対に次第に深まっていった。

「ねぇ健太郎さん、本谷楼の板長さんがね、時々絡み付くような目付きをしてわたしの顔を見ているのよ。気持ち悪いわ。ぞっとするの」

「おれは、板前の関戸由三って人には会ったことはないが、本谷楼の板前はいい腕をしてるっていう評判だ」

「そうなのよ、最屓のお客さんが、由さんの料理を目当てに泊りに来るから、女将さんも由さんのわがままを大目にみているの。それをよいことにして、由さん、一寸きれいな仲居さんがくるとすぐ手を出すの。そしてトラブルが起きるのよ。わたしあんな人嫌いだわ。なにか恐いのよ」

「こっちがしっかりしていればどうということないさ。ところで今何時だ。十時過ぎか、もう二時間も経ったのか。登世子さんと一緒にいると時間の過ぎるのが早いな」

「ねぇ、健太郎さん、汗が凄いわよ。浴室で汗を流してきたらどう、タオルは脱衣所の棚にあるわ」

健太郎は、登世子の声を背に受けて浴室の蛍光灯のスイッチを入れた。蛍光灯の明りが眩しくて思わず目を細めた。その時、ガタッと外で物音がして、浴室の窓を黒い影のようなものが横切った。健太郎は一瞬ドキッとした。脱ぎかけた下着を身に着け、急ぎ足で勝手口から外へ出ようとした。しかし、築二〇年の三軒長屋の借家は傷みが酷く、家人でない者には勝手口のガラス戸はすぐには開けられなかった。

「チェ、今の物音の正体を掴みそこなった。それにしても、こんな夜更けに人が徘徊することも考えられないし、猪か野猿でもきたのかな。不用心だから大家のYさんに話して、戸締りを直してもらった方がいいよ」

「建物の修理は無理だと思うわ、大家さんは農協に勤めていて、息子さんの学資を貯めるのに精一杯。借家の修理まで手が回らないのよ。でも、今の物音は何かしらね。ちょっと気持ち悪いわ」

「Yさんの次男は、N高校のトップクラスで、東大現役合格間違いないという評判だから、Yさん夫婦は期待してるんじゃないかな」

「それにね、長男の連一さんは鉄工場に勤めていて、まだ独身だから、お金の方はあまり期待できなさそうね」

二

翌日、勤め先の本谷楼に出勤した登世子は、昨夜の健太郎との逢瀬を思い出し、梅雨前の気だるい陽気の中でなんとなく心が弾んだ。

本谷楼は、五月の行楽シーズンが過ぎた閑散期でもあり、旅館の中は静かであった。登世子が配膳室で、泊り客の夕食の後片付けをしていると、背中に人の視線を感じて振り返った。配膳室の入り口の向こう側から、板長の由三が、じっと登世子を見詰めていた。

「あら、板長の関戸さん。今日は休みの人が多くて、富美さんと良子さんの三人だけなの。誰かに用事でもあるの？」

通常ならば、料理の盛り付けが済めば、板前の仕事は終わっている。それをこんな時間にここに居るのは何故だろう、登世子はあれこれ思いを巡らした。

（由三さん、まさか、わたしを口説こうというのではないでしょうね、おお嫌だ）

五年前、秋田市内の海産物問屋で事務員をしていた登世子は、経理係の上司とトラブルを起こして秋田を逃げ出した。その上司は、仕事は出来るが陰気な男で、いつも登世子を金壷眼でじっと見詰めていた。登世子はこの男の眼つきに堪えられずに秋田を離れたのだ。由三もあの男と同じような眼付きで登世子を見詰めていた。

「登世子、ちょっとおれに付き合ってくれないか。手間は取らさないからさ、頼むよ」

「関戸さん、堪忍してね、又にして。今夜はわたし用事があるの」

「お前は何時もそんなことばかり言っている。登世子、お前、誰かいい男でもできたのか」

「いやだわ、わたしにはそのような人はいません」

「それは嘘だ。おれはな、登世子が最近白雲荘の若旦那と何かあるっていう噂を聞いたぜ」

登世子は、一瞬ドキッとしたが、

「なにをでたらめ言うんですか。あの方は老舗旅館の後継者、わたしなどとは身分が違います。冗談言うのは止めてください」

「おれは知っているんだ。あいつの自転車がお前の家の近くに置いてあったのをな。あいつの自転車はドイツ製だから見間違うことはない」

丁度その時、同僚の富美と良子が泊り客に出したお膳を下げて戻ってきた。由三は（チェッ）と舌打ちしてしぶしぶ姿を消した。

登世子が住んでいる借家は、湯ケ島小学校の近くで、山の緩やかな傾斜を整地して建てられた三軒長屋であった。周囲には民家も少なく、地元の人でなければ人家があるかどうか判らないような人目に付き難い所にあった。

（昨日の夜、健太郎さんが聞いた怪しげな物音は、由三の足音だったのか。まさかあんな夜更けに、おお恐い）

登世子は恐怖で身が震えた。不安を感じた登世子はすぐに健太郎に連絡を取った。二人がしばらく逢瀬を控えたこともあってか、その後しばらくは何ごともなかった。

ある日の午後、本谷楼の仲居たちの間で、夜遅く板長の関戸由三の姿を湯ケ島小学校の近くで見掛けたという話が囁かれていた。

「由さん、登世子さんにご執心のようだからね……何か事件が起きなければよいが」

仲居たちは、お互いにそんなことを心配していた。

三

今年は梅雨が遅れているのか、気象庁の梅雨入り宣言がなかなか出なかった。そんなある夜、登世子は寝付かれないままテレビのニュース・ステーションを見ていた。テレビでは、今年五月十五日に開幕した日本プロサッカー・Jリーグの熱狂的なサポーターをアップで映し出していた。

その時、どこからともなく焦げ臭いにおいがしてきた。登世子は慌てて勝手口を開けて外に出た。そこには家主が伐った敷地周りの雑木が二十束ほど借家の壁際に積み上げてあった。それが燃えていた。

火の手は二、三メートルも上がっている。

「火事だぁ……火事だぁ……」

びっくりした登世子は大声で叫んだ。

登世子の叫び声を聞いて、同じ借家の老夫婦が、消火

器と水を入れたバケツを持って駆け付けた。消火器でや
や火勢はおさまったかと思われたが、再び火の勢いは増
して、建物に燃え移り始めた。付近の住民も駆け付け、
散水用のホースで水を掛けて消火を始めた。程なく消防
車がけたたましくサイレンを鳴らして到着し、本格的な
消火が始まった。幸い壁がトタン張りであったので、空
き家になっていた三軒長屋の真中の家の軒先を焼いただ
けで鎮火した。

火災が発生してから三、四〇分後、大仁警察署から警
察官が大勢出張ってきた。直ちに警察と消防と合同で、
実況検分が行われ、火災原因の調査が始まった。未明、
ひとまず調べを中断し、改めて午前一〇時から本格的な
調べが始まった。

登世子と老夫婦に対しては、あたかも犯人であるかの
ような厳しい尋問があり、登世子らは警察の調べ方に腹
を立てた。火の気のないところから出火していたので、
放火の疑いで取調べが進んだ。登世子と老夫婦は勿論被
害者であったが、警察の調べは厳しく、不審者を見なか
ったか、誰かに恨まれるようなことはなかったか。交友
関係、特に男女関係の縺れのようなことはなかったか、
連日執拗な事情聴取があった。登世子は謎のような女で
あっただけに、身元調べまで行なわれた。

登世子は、よほど一〇日前の夜の不審な物音を警察に
話そうかと思ったが、健太郎に迷惑がかかることを懸念
して黙っていた。

警察は、本谷楼の板前・関戸由三の不審な行動を聞き
込んで、重要参考人として取り調べた。由三はアリバイ
を主張したが、日頃の怪しげな行動が災いして容疑者扱
いであったが、確定的な証拠がなかったため、嫌疑不十
分のまま一旦勾留は解かれた。取調べの中で由三が喋っ
たのか、健太郎も参考人として事情聴取を受けた。健太
郎には、アリバイもあり、放火の動機もないため、すぐ
帰宅を赦された。

警察の必死の捜査にも拘わらず、一向に犯人の目星は
付かないまま日時が過ぎていった。事件発生当時は、疑
わしい材料が次々と出てきて、早期解決と見られていた
が、日が経つにつれて捜査は難航していった。

四

最初の火事があってから一ヶ月半ほど経った七月三一
日の夜九時頃、厠信仰で有名な明徳寺の近くで火災が発
生し、住宅一棟が全焼した。幸か不幸か当夜、その家の
住人は不在だった。

火元の近くの明徳寺が、観光名所として有名であった
ので消火設備も完備しており、その設備が消火活動を容
易にした。また、隣家との距離もあって類焼することも
なかった。深夜の零時を過ぎた頃には再燃の危険もなく
なって、地元の消防団員と数人の警察官を残して消防も

警察もみんな引き上げた。

翌朝のテレビは各局とも、『伊豆の温泉郷に連続放火事
件発生、警察の捜査は難航か』とトップニュースで報道
した。新聞は朝刊の締め切りに原稿が間に合わなかった
のか、夕刊に大きく掲載された。

焼けた家は一戸建ての借家で、四〇歳前後のやくざ風
の独り者が住んでいた。出火場所は火の気のない段ボー
ル箱置き場で、放火の疑いが濃厚であった。

警察で調べたところ、借家にしてはやや高額な火災保
険が掛けられていた。この事件は、保険金目当ての放火
ではないかと捜査当局は色めき立った。

静岡県警察は、地方の温泉郷に発生した連続放火事件
が未解決のままでは警察の威信にかかわるため、県警本
部から大勢の捜査員を派遣し、大仁警察署長を捜査本部
長に任命して大掛かりな捜査体制を執ることになった。

一方、住民は六月の放火事件が解決しない中での二回
目の放火事件であったため、町中で犯人探しの流言蜚語
が飛び交った。

警察の調べが進むうちに、焼け出された住人も出頭し
て火災保険のこと、仕事の関係で不在勝ちであることな
ど事情を説明した。

事件は捜査当局の大掛かりの捜査にも拘わらず、これ
といった犯人に結びつく手がかりも掴めないまま日時が
過ぎていった。

消防団員の中原修一は、勤務先から帰宅し、新婚間も
ない妻の雅子に犯人探しの推理を聞かせた。

「入梅前の火事と、七月晦日の火事には幾つかの類似点
があるように思うんだ。まず第一は、どちらも火の気の
ないところから出火している。次は、どちらも人目に付
き難い樹木に囲まれた借家だ。三番目の類似点は、最初
が湯ケ島小学校の近く、二回目が明徳寺の近くで、どち
らもこの町では消火設備が完備している施設の近くだ。
ということは、犯人は、放火の現場を人に見付からない
ように気を配ると同時に、大火災にならないことを最初
から予測していたのではないかな。するとよほど現地を
よく知っている者か、火災についての知識がある者では
ないのかな」

妻の雅子は、修一と同じ町内に生まれ、同じ高枚の三
年下であったので、町内のことについてはある程度の知
識があった。その夜は、修一と雅子は放火事件について
あれこれと話し合った。

修一は、地元に十数箇所の支店がある信用金庫の職員
で、今年の四月から、隣町にある支店の融資係を担当し
ていた。融資係は始めての経験であったので、修一は毎
日緊張していた。今までの融資は、担保さえあれば比較
的スムーズに本部審査が通ったが、最近は審査が厳しく、
特に情実融資ついては厳しかった。

地方の金融機関は、地元との人的な結びつきが強いだ

は、続けて起きた放火魔の仕業に震え上った。まさか同じ場所に二度も放火するとは。警察も消防も、完全に裏をかかれた恰好だった。これは容易ならぬ知能犯だ。

その翌日、町当局も事態を重く見て、急遽、町長・助役以下幹部職員が対策を協議した。

対策の第一は、犯人が放火できる場所をなくすことである。早速町内に不要な納屋、物置小屋などを撤去するか、その周辺から燃えやすいものを取り除くように通達した。

第二の対策は、夜警団を組織することである。早速、現・元消防団員による夜間巡回が始められた。人口一万人に満たない小さな温泉町であるが、行政区域は広く、山間各地に点在する家屋の全てを巡回するのには限界があった。

三回目の火事も前の事件と同様に、火の気のないところから出火しており、類焼の危険も少ない場所であった。

犯人は愉快犯か、それとも世間に恨みを持つ者の仕業か、住民はお互いに疑心暗鬼になり、町内全体に気まずい雰囲気が蔓延した。

白雲荘の後継者・青山健太郎と本谷楼の仲居・大沢登世子は、内密にしていた二人の関係が、放火事件の取調べによって周囲に知られ、今は公然の仲となった。

特に登世子は、警察の調べで謎であった身元も知られた。登世子の生家は、祖父が市長を勤めたこともある秋田の旧家で、登世子が勤務先での男女関係の縺れから逃げるように秋田を離れたため、実家に迷惑がかかることを心配して素性を隠していたことが判った。

事情が判明すれば誰にも憚ることはない。もともと明るく素直な、躾の行き届いた女性であったので、白雲荘でも若女将候補として二人の仲は公然となった。このことは、連続放火事件騒ぎの中で、唯一の朗報であり、JCCの仲間からも、同級生からも祝福されたり、羨ましがられたりの二人であった。

信用金庫に勤める中原修一も高校時代からの友人として、健太郎・登世子の結婚を待ち望んだ一人であった。しかし、連続放火事件が未解決の現状では、健太郎も登世子も華燭の典を延期せざるを得なかった。

捜査当局の地道な捜査にも拘わらず、犯人解明への糸口は杳として掴めなかった。

そんなある日、消防団員の夜間巡回時に、誰言うともなく、

（巡回のある日には火事は起きない）

（三回目の火事のときに警察は、火事の様子を撮らないで、消火作業の消防団員や火事見物の野次馬の方にカメラを向けていた）

という噂が流れた。

けに、審査の公平性、透明性が求められていた。

修一は仕事を通して得た知識から、客観的な視点で連続放火事件の犯人について推理してみた。

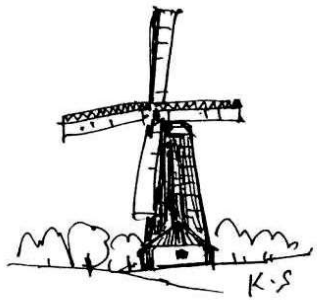
（生意気な言い方だが、捜査当局は警察自身の面子にばかり気を取られて、第三者的な視野で捜査していないのではないだろうか。これ以上放火させないためには、われわれ地元消防団員が防火対策を早急に立てるべきだ。それが消防団員の務めだ）

そう思い付くと、正義感の強い修一は、消防団幹部であり、高校時代の同級生でもある友人青山健太郎に電話してそのことを伝えた。その夜のうちに消防団員による協議が行われ、夜警団を設置することが決まった。当然、修一も健太郎も共に消防団員として夜警団の一員に加わることになった。

消防団員は、顔を合わせれば放火犯人についてあれこれ話し合ったが、小さな温泉町のこととて住民同士、お互いに誰が、どのような家族構成で生活しているか、その人たちの親類縁者は誰とだれか、など町内の事情をよく知っているだけに、めったなことは口に出せず、犯人探しについて積極的に発言することを躊躇っていた。

五

学校の夏休みも終わる八月二八日の土曜日夕方七時過ぎ、最初の火災現場の直近で納屋が燃え上がった。住民



つづく

もたれ柱

太田和貞

百姓代の七左衛門が勘八と仁兵衛を連れて、名主屋敷にやってきた。

長屋門を入っても、なおも言い争いを続けているふたりに、

「お名主さまのお屋敷だぞ。静かにせんかい！」

と、きびしく叱った。

ふたりとも不承不承に口をつぐんだが、その顔には不満がありありとあらわれていた。

仁兵衛の額は、手拭いで縛られていたが、その端に赤黒く血がにじんだ跡があった。

「吉兵衛さん、おはようでございます。お名主さまはおいでになりますか？　朝からすまんことですが、このふたりの出入りの裁定をしていただきたいと思いまして、こうして連れて参りました。お名主さまのご都合を聞いて貰えねぇべぇか？」

「こりゃ、ご苦労だのう。いま、お名主さまに、うかがってくるから、ちょっくら、待ってくらっせい」

吉兵衛は急いで奥に入っていったが、すぐ戻ってきて七左衛門を奥に連れていった。

奥から戻ってきた吉兵衛は、台所の土間に畏まっていたふたりに、

「お名主さまのお裁きがあるでぇ、ここに神妙に控えていなせい！」

と、玄関の前に控えさせてから、式台から玄関に上がった。玄関の間には四畳の畳が敷かれていた。玄関と次の間の戸障子をあけると、太い柱が現われた。

名主が百姓たちの訴えを、その太い柱に背をもたれさせながら聞くところから、もたれ柱と呼ばれていた。

吉兵衛は式台に文机を持ち出して、静かに墨をすりながらお名主さまが出てこられるのを待った。

奥から七左衛門が出てきて、吉兵衛と反対側の式台に座わった。

「ええか、お名主さまが見えられたら頭を下げるだ」

七左衛門は、ふたりに厳しく言った。

カルサンをはいた名主直右衛門が出てきた。

「へ、へーツ」と七左衛門が平伏したが、ふたりは直右衛門の顔を見上げていた。

「これッ。頭を下げるだ！」

七左衛門は平伏したまま、左手で自分の腰を叩いてふたりに頭を下げることを催促した。ふたりは慌てて頭を下げた。

「お名主さまに申し上げます。これに控えております勘八と仁兵衛は、昨夜来より喧嘩口論いたしまして、一向におさまりません」

こう話し出した七左衛門は、ふたりの争いを細かく説明した。

勘八の女房のおしづが裏庭で行水をしているのを仁兵衛が盗み見したと勘八は言い、仁兵衛は決してそんな事はしていない。たまたま通り掛っただけだと言い張った。

「おめえの女房の裸を見るくれえなら、乞食の尻を見る方がましだ」

と悪態をついたので、怒った勘八が打擲し、仁兵衛の額を割ってしまったのだった。

「よくも、男の額を割ったな」

仁兵衛が勘八に武者振りついたが、若い勘八に組み伏せられて、仁兵衛はさんざんに殴られてしまった。

負けた仁兵衛は、七左衛門の家に駈け込んで、

「なにが、なんでも、御役所に訴えて、勘八を牢屋に放り込まなければ、気がすまねえ」

と、言い立てるのを、「まあ、まあ」となだめて、ふたりをこれに控えさせた次第と言い終わって七左衛門は直右衛門の顔を仰いだ。

もたれ柱に体をもたれさせていた直右衛門が腕組みをほどいた。

「勘八と仁兵衛は同じ五人組ではなかったか？」

と勘八に聞いた。

「へい。同じ五人組です」

「組頭は、誰かな？」

勘八は、すぐには答えられなくて、モジモジした。

「誰が組頭か？」

直右衛門の声がけわしくなった。

「へい、仁兵衛さんです」

勘八は小さな声で答えた。

「なんと、仁兵衛とな」

直右衛門の声が大きくなるにつれて、「へい」と答える勘八の声がさらに小さくなった。

「組員の勘八たちが選んだ仁兵衛を組頭に命じたのは、このわしだ。その組頭を打擲したということは、わしを打擲したことと同じだ。これは誠に言語道断。わしは見逃がす訳には、いかぬ。わしを殴った節には、どのよう

なお咎を受けるか、存じているであろうな」

「……」

「知らぬか？　ならば言って聞かせよう」

直右衛門は懐から冊子を取り出して、頭上にかかげてから重々しく言った。

「これは、わしが御役所より特別に拝領した御定書百箇条なるぞ。恐れ多くも八代将軍徳川吉宗公が制定されて以来、寺社奉行さま、勘定奉行さま、町奉行さま方が遵守されたお定めである。これに、支配をうけ候名主を殺し候者、引廻しの上、獄門。但し殺すべき所存にて手疵を負わせし候者、死罪とある。勘八！　これをどう思うか？」

「……」

「さらに、口論のうえ、人に疵付、片輪にいたし候者、中追放、人に疵付候者、療治代、銀一枚となっておる」

「……」

「どれも、これも、勘八には思いもよらぬことと思うが、どうだ」

「……」

「黙っていたのでは埒があかぬ。わしが申し聞かせようか？」

「……」

「ならば、勘八！　仁兵衛に先ず謝れ！　仁兵衛が赦してくれれば、それでよし。しかし、万が一にも赦してくれぬときには、お前に縄を打って代官所に突き出さねばならぬ。この村から縄付きを出すのは、名主のわしも望むところではない。どれも、これも、お前が仁兵衛に心から謝るか、どうかにかかっておる。どういたす？」

「……」

「黙っているということは、謝るのは不服と申すのか、ならば致し方ない。七左衛門！　勘八に縄を打て！」

「ちょっと待ってくらっせい。仁兵衛に謝りますから、どうぞ堪忍してやってくらっせい」

「おうッ。謝るか？　それがいちばん、ええ。仁兵衛も額に疵を付けられて、男の一分が立たぬと思っているであろうが、勘八が謝るというから赦してやれ。それに、これからはな、よその女房が行水を使う裏庭は、よけて通ることだ。仁兵衛が勘八の女房の行水に、でっくわしたおかげで、わしまで行水の水に濡れた思いがする」

直右衛門の冗談にも、ふたりは笑わなかった。

消えた「誉れの家」

大和禎人

門口の左の柱にその古りた木札は永く掲げられていた。

その謂れは古く、家族たちにとっては遠に忘れかけているにしろ、訪れる人たちはこの家の門口に立ち、敷居を跨ぐとき、おのずから目に写るていのものであった。

だが、その木札がかかげられている意味を意識におくことは、歳月の流れとともに、大方薄れていったのは仕方のないことだったかも知れない。

今から六十年以上前に「誉れの家」というこの木札は戦死者を出した名誉の家という意味をもち、役場の人間が届けてきて、敬虔な挨拶を述べ、柱に貼りつけていったものなのであった。

大貫の家の男子三兄弟のうち、中の兄が戦死者であった。兄妹五人、下に二女があり、女児の姉の方がこの兄に可愛がられたらしく、とくにこの兄を慕っていた。

「兵隊の兄」の墓は一族の寄り合いの墓域を離れて、別格独立の位置にあった。墓石も立派なもので、往時、戦死者の名誉を顕彰するにふさわしい建墓を見たものであった。村方の注目に応えるフシのものでもあった。

一族をまとめた貧寒とした墓域に香華を捧げ終ると、

「さぁ、兵隊の兄の方にも」

と言って線香の火を手でかばいながらあたふたと彼女は駆けるのであった。

「兄は可愛そう、一人だけ不幸を背負って逝ってしまった」

彼女はそう言いつつ涙ぐむあんばいに見えた。春秋の彼岸、そして盆行事の都度、それは変わらぬ姿勢であった。生前の兄はこの妹によほど兄弟愛を注いだものだったようである。同胞五人の中、別してそうした特別の情はありうることであったろう。

次兄の戦死は上海事変の時であった。昭和七年に遡るのだ。昭和六年の満州事変を契機とする十五年戦争の初期にあたる。戦争終結から六十年の今日からかえりみて遥かな昔日である。もはや芒ぼうの時を隔てる往時なの

であった。

東京近郊の農村である大貫の家は戦後、多聞に漏れず都市化の波に洗われ、ことさら大都市近郊故に著しく変貌しつつあった。荒川の河川敷にゴルフ場ができたり、C市という町場の発展とともに農地の宅地化への浸食も年々顕著の傾向にあり、し尿処理、排水のための下水道の敷設工事、塵芥処理場、浄水池の建設などの公共施設の進展に加えて、大型スーパーの進出、病院、大手産業の工場建設など、とくにT鉄道の市駅近傍の高層建築櫛比のありようは目を見張るばかりであった。

大貴の家の長兄栄太郎は家長として、右のような世情の中、末弟の分家を市域に定めたり、自家の農事についても種々の機械化に追われ、己が家系の当代として同胞の三男二女に加えて己が子女三男二女、律儀ものの子沢山とあり、その養育、ひいては縁組におよび、心休まる日とてはなかった。しかし彼は本家という立場を守り、そうした身上にむしろ誇りをもち、満遍なく律儀を通してきた。

大勇院貫道忠範居士、(功七級金鵄勲章、勲八等白色桐葉章授与)院居士の戒名は一族にその例がなく、誉れ高くも、恐れ入るばかり戒名であった。金鵄勲章とあっては、往時、村方を震撼するに値し、寺方の住職が頭をひねった結果の戒名だったろう。金鵄勲章に該当する勲功の内容は詳らかには伝えられていなかったが、郷党に迎えられて見ると、往時の珍重ぶりが想像される。

燦然たる「誉れの家」に相違なかった。

土葬の旧習が近年まで踏襲され、村方各戸の墓域に限りがあり、近年整理改葬が議にのぼり、やがて村一統の賛同する成り行きのもと、大貴の家も家長栄太郎氏の決断の時を迎えた。各戸それぞれになま易しい経費ではなかったはずだが、この際家長の面目にかけて大貴本家も英断を迫られた。幾度も村方をあげての協議のあげく、区画線引きに同意納得が導かれ、共同墓地の面目を一新する時を迎えた。昭和も末の六十三年の秋彼岸に間に合わせて完成の日を迎えた。左右一対の見栄えの燈篭二基のほか、塔婆立て、脇御手洗、区画を御影石で縁どり、立派な累代の墓誌を備えるという体裁であった。誉れの仏は末尾に別格とし、勲記を添えるというものだった。

家長の面目に生きた栄太郎氏はやがて鬼籍、今は戦後生まれ、五十代の嗣子辰男氏が当主である。相続税負担、に喘ぎながら、家長の衣鉢を継いで、節季の親戚回りも怠りない中、家計の助けに農事のかたわら建設業者の下請けを働き、近ごろは家屋の近代化にも気配りして玄関土間を板張りしたり、浴室を設けるなどのことがあったが、この際「誉れの家」の木札も処分してしまった。

「なんだろうと思っていたらそうだったのか」

なんとアッケラカンの始末だった。(H十七・二・五)

「ジロー」とともに暮らした日々

伊治　哲

(一)その日

「ジロー君、十五年の永い間、一緒に仲良く遊んでくれてありがとう。安らかに眠ってください」

これはわたしがジローの最期に贈った別れの言葉である。

今から六年前の平成十一年五月一日午後四時三十分、ジローはわたしたち夫婦に見守られて、静かに息をひきとった。昭和五十九年八月、手のひらにのるくらいの生まれたばかりの小さなジローをもらい受けてから十五年、人間でいえば八十歳に近い生涯であった。

「ジロー」とはわたしたち家族の愛犬の名である。ペギニーズ種のオスで、原産は中国の北京周辺であるとか。目がギョロッと大きくとび出して、鼻は上をむいてペチャンコ、口のまわりは黒いヒゲで覆われ、耳は長く、フサフサとした茶褐色の長い体毛が体を包んでいる。そのうえ短足で、シェパードのような優雅さには程遠い。いささか頑固だが、人なつっこく誰にでも長い尻尾を振って頬ずりしていく可愛いジローであった。

五月一日のその日、朝からなんども排便のため〝ワンルーム〟――わが家に来てからまたたくまに大きくなり抜け毛も多く、室内では飼えなくなったため、わたしたちの食事室に隣り合わせてサンルームを作りそこに寝起きさせた。称して〝ワンルーム〟と名付けた――を出ようとするが、もはや足が立たず、這いずっても足が滑って思うように動けない。「もういいんだよ。汚してもいいからここでやりなさい」と言っても、これまでの躾を律儀に守って外へ出ようとする。やむなく後ろから抱きかかえて芝生の上に出してやると、いかにもばつが悪そうにわたしを振り返る。そのあとよろめきながら用を済ませ自分の部屋に戻ろうとするが、もう敷居を飛び上ることもできなかった。食事も全くうけつけず、うつろな目

でわたしを見るばかりである。

午後、二時間ばかり妻と買い物に出かけて帰宅してみると、ジローの容体は急変していた。わたしたちが帰ってくるのを待ち焦がれていたかのように、キャンキャンと泣くのである。その声は、まだ幼い子犬であった頃、わたしたちが出かけようとすると、庭の石垣の上に顔を出していかにも淋しげに泣きかける声に似ていた。そして足をもがきながらわたしの膝に頬を寄せてくる。息づかいもしだいに荒くなるのを見て、これはただごとではないと直感した。しかし今ここでなすべき術もない。ただいたずらに「よしよし、大丈夫だ。元気を出せ」と言いながら、頭や顔を撫でるばかり。ほどなく妻の腕のなかでか細く「キャン」とひと声泣くと、のどもとを二度ばかりヒクッヒクッとならせて、そのままがっくりとなってしまった。

わたしも妻も「ジロー、ジロー」と呼びかけるが、ジローはもうなにも応えてくれなかった。安心しきったように妻の腕に身を預けて、ただひたすら眠りこけているようにみえた。わたしと妻は、それでも涙をこぼしながら「ジロー、ジロー」と呼びつづけた。

その夜、彼の遺体をタオルに包んで柩に見立てた段ボールの箱に納め、そのまわりに花びらをいっぱい敷き詰めた。花を飾り、ジローの好物であったジャーキーやスナックパン、鶏のささみやリンゴを供えて、線香をあげ、般若心経を唱えた。冒頭の別れの言葉は、白布に墨書して柩の上を覆った言葉である。わたしたちなりに一心にジローの冥福を祈る通夜のつもりであった。

明くる朝、わたしたちの子や幼い孫たちもかけづけてくれた。線香をあげわたしが心経を唱えても、孫たちは手を合わせながらもジローは箱の中で眠っているものとばかり思っていたらしい。昨晩頼んでおいた犬の葬儀屋が来て、遺体となったジローを持ち出すにいたって、初めて「ワーッ」と大声で泣き出してしまった。ジローはもう目を覚ましてくれない、どこか遠くへ行ってしまうのだということが実感としてわかったのであろうか。

その夜お骨となってもどってきたジローは、十余年の住みかとなったワンルームの一隅に花に囲まれて安置された。その年の正月に撮った穏やかな顔のジローの写真——これがジローの最後の遺影となった——、孫が即刻に描いてくれたジローの絵も飾った。この日からジローの声を聞くことはなくなった。

六月の半ば、子供たちのなかでは一番長くわが家でジローと一緒に住み、最もジローを可愛がってくれた三男夫婦が来宅したのを機会に、ジローのお骨をわたしたちの居間からいつでも見ることのできる庭の一隅に葬ることにした。三男が自分の手で骨壺を、好物の食べ物やお椀、それに遊び道具のゴムボールなどとともに土に帰した。そして「ジロー、ここに眠る」と記した墓標をその

上にたてた。

これでジローは完全に土に帰り、永遠の眠りについた。以来わたしたちは毎朝毎夕ジローに声をかけながら、今でもジローと一緒に暮らしている。主を失くしたワンルームは今もそのまま残し、ジローがいつでも帰ってこれるようにしてある。

ジローの死をなにゆえこれほどまで悼むのか。それには次のような十五年間のジローとの暮らしがある。

(二)「ジロー」という名前

昭和五十九年の夏であった。わたしが知人から頼まれて生まれたばかりの一匹の子犬を貰い受けてきた。タオルに包んでクウクウ泣くのを気にしながらだいじに持ち帰ったのだが、途中オシッコをもらされて困ったことを覚えている。

ちょうどその年の春、ようやく自力で家を新築し、三人の子供たちにもそれぞれ自分の部屋をあてがい、親子五人と子犬一匹、合計家族六人の和やかで楽しい、そして毎日子犬を連れて散歩する、ちょっと気取った団欒の生活を夢見ていたのである。

ところがである。タオルに包んだ子犬を抱いて勢いよく玄関を入った途端、思いもかけず妻の反撃に遭ったのだ。「わたしに相談もしないでなんですか。犬の世話をするのはもうこりごりです。すぐに返してきてください」と言う。

実はその七、八年前、隣家からもらった柴犬を飼っていたことがある。「チロ」という名前をつけて元気に育っていたが、犬特有のフィラリアという病気にかかって急死してしまった。もがき苦しんで最後には血を吐いて息絶えた。それを見取った妻と次男は堪えがたい憐れみを感じ、もう二度と生きものは飼うまいと思ったそうである。そうである、というのは、その頃わたしは大阪に単身赴任中で、たまたまその場に居合わせなかったためである。

そのようないきさつを考えれば妻の怒りも当然であるが、犬の面倒はできるだけわたしがみるということにして、とりあえずその場を収めた。その夜は食事を与えたあと、首に紐をつけてピアノの足につなぎ、小さな紙箱に入れて眠らせることにした。

子犬はキョロキョロと周囲を見回していたが、やがて心地よさそうに眠っていくかにみえた。ところが一夜明けて朝起きてみると再び一大事が起きていた。餌のお椀はひっくり返してあるわ、到るところにオシッコとウンチが垂れ流してあるわ、ピアノの下から絨毯にかけて汚れ物の海のありさまである。ことここにいたって妻の怒りは頂点に達した。「わたしが出て行くか、犬が出ていくか、どちらかにして」と、冗談にしては少々きつ過ぎる

言いかたをした。わたしも負けじと「お前が出て行け」と切り返した。

子犬は、当然のことだが自分の身のまわりに何が起きたかもわからず、クウクウと泣いている。粗相をしたとはいえ、わが家に来たしょっぱなからどうしてこんなに嫌われるのかと思うと、この赤ん坊の子犬がますますいとおしくなって、わたしは思わず妻にともなく子犬にともなく、「ごめんね、ごめんね」とつぶやいた。

「そうだ！この犬の名前、『ジロー』にしよう！」と叫んだ。何という歌かは知らなかったが、その頃歌われていた〝ごめんね、ジロー〟という歌が耳の底に残っていたのである。この一声ですべてが氷解した。怒り狂っていた妻がクスッと笑い、なにごとが起きたかと二階から下りてきた息子たちが「それがいい、ジローがいい」と応えてくれたのだ。妻はそれからあきれるほど「ジロー、ジロー」と可愛がるようになったし、息子たちもなにかというとジローを話題にした。

「ジロー」という名前はそもそもこのようにして生まれた。

（三）散　歩

わたしは毎日のようにジローを散歩に連れて出た。わたしが留守をするときは妻や子供たちがジローの手綱を引いた。雨の日も雪の日も、同じ道を同じコースで、尻尾を振り振り、短い足でチョコチョコと歩く姿は、よそ目にも可愛かった。道端で遊んでいる子供たちを見ると、一層尻尾を振って擦り寄っていく。「この犬なんという名前？」「ジローっていうんだよ」「ジローちゃん、ジローちゃん」と子供たちが呼びかけるようになる。同じように犬を連れて散歩する近所の人たちからも、「ジローちゃん」と声をかけられてお互いに挨拶を交わすようになった。それでいて飼い主の互いの名前は知らないのである。

たまに幼稚園児が先生に引率されて家の前を通る。ワイワイ、ガヤガヤという園児たちの声を聞きつけて、ジローは一目散に庭を駆けて行き、石垣に手をかけて子供たちを見送る。園児のなかの一人が「あっ、ジローちゃんだ」と叫び、みんながかわるがわるジローの頭を撫でていく。いつのまにか、わが家は「ジローちゃんのおうち」、わたしは「ジローちゃんのお父さん」ということになってしまった。

孫たちが集まると大変である。ボクも、ワタシもと、われ先にジローにスナックパンを食べさせる。ジローと散歩の折は、順番と距離を決めて手綱を引きたがる、というよりも引かれてしまうのである。手綱の引き方がまずくジローの足に絡んだりすると、ジローはそれこそ〝ジローッ〟と引き手を見返すこともあった。

ジローの臭いをかぎつけて、近所の犬が「ワンワン、キャンキャン」と吠えたり、ジローにからんでくることもあるが、ジローは好き嫌いがはっきりしているのか、嫌いな犬には全く見向きもしなかった。犬にも相性というものがあるらしい。散歩コースの途中、好きな犬の家の前までくると、かならず門の臭いを嗅ぎながら相手が出てくるのをじっと待つ。実は主人が出てきておやつがもらえるのを楽しみにしていたのかもしれない。

これは妻の話だが、ジローを連れて散歩の途中、よく出会うおじいさんがいた。ある時そのおじいさんが話しかけてきて、「お宅のジロー君が大変可愛いから、ぜひ子供をつくらせてわたしにいただけないか」と頼まれたそうだ。ところがそのおじいさんの方が先に亡くなってしまった。犬が大変好きないいおじいさんだった、と話していたことを思い出す。

ジローをとおして近所の人たちと親しく話をするようになったし、この家にはなんという名前の犬がいるということも覚えた。

また、ジローがいなくなってからも、ジローとともに歩いた道を毎日欠かさずウォーキングする習慣もついてしまった。

（四）脱走事件

ジローは飼い主に似てやや肥満気味ではあったが、大きな病気をしたことはなかった。ただ平成八年に膀胱結石の摘出手術をして、一週間くらい入院したことがあった。それまで狂犬病の予防注射などで医者につれていくことがあったが、病院は徹底して嫌った。後ずさりしてなかなか入ろうとしないし、体温を測るだけでもわたしの懐の中に顔を埋めて震えていた。そんな病院嫌いのジローが一週間ものあいだいったいどうしているんだろうと心配でならなかった。病癒えて獣医がジローを送り届けてきた時は、さすがに安心したのか、門を入るや否やわたしたちに飛びついてきた。可愛さのあまり思わず抱きしめてやったことを思い出す。

ジローの毛はふさふさと密生して、瞬く間に長く伸びてしまう。時おり庭で洗髪してやるのだが、毛を刈り揃えることはできないし、とてもわれわれの手にはおえなかった。人間の散髪よりよほどお金がかかるが、二、三か月に一度は犬の美容院に連れていった。美容院に連れ出そうとすると、それを直感するのかどうか分らないが、いそいそと美容院への道を歩き出すのだ。なんということはない、美容院には手慣れたおばさんと、なによりも大勢の犬の友達がいるからなのだ。

あるときこんなことがあった。その折もわたしは家にいなかったのだが、突然美容院のおばさんから電話がかかった。「お宅のジローちゃんが一人でうちの玄関に来ていますよ！」、びっくりした三男がとるものもとりあえず引き綱をもって飛んで行った。そして無事ジローを連れ戻してきた、というのである。

わが家ではジローは庭で放し飼いにしてある。しかし外部への通路には網戸で仕切りがしてあるので、ジローの力ではどうやっても外に出られるはずがない。それをどうやって押し開けたのか、くぐり抜けたのか、今でも謎に包まれたままだ。

それにしても美容院まで五、六〇〇メートルはある道のりをどのようにして辿り着いたのだろうか。車の往き来はそれほど多くはないが、道の左右をクンクンと臭いを求めながらヨチヨチ歩いていくのだから、途中一台や二台の車には出くわしたはずである。よくも撥ねられずにすんだと思うと、思わずゾッとしたものだ。

さすがにその後このような脱走事件は起こさなかったが、犬の一念を見せつけられた思いがしたものである。

(五) ゴムボール

ジローはゴムのボールが大好きだった。噛むとヒュウヒュウと音が出るから、しょっちゅう口にくわえ、転げ回って遊んでいた。ところが口から放すとコロコロと転がっていく。それが面白くてサーッと走っていってはまたくわえてもどってくる。転がり過ぎて縁側の下などに入り込むと、足を掻きながら大きな声で吠えるので、なにごとが起こったかと大急ぎで駆けつけたこともあった。しまいには誰にも盗られまいと、庭の隅に口で穴を掘ってボールをそのなかに埋め、口の周りを土だらけにしながら得意然としていることがある。そのくせ埋めた場所を忘れてしまい、また大声で吠える。三男はボールを失くするたびに新しいボールを買ってきて与えていた。しばらくすると、真っ黒になった古いボールがどこからか迷い出てきて、ワンルームのなかに勢ぞろいすることもあった。

ワンルームを作ってジローをそこに住まわせるようにしてから、座敷の上には上がらせないようにした。しかしジローは座敷の上が余程住み心地がよかったのか、一瞬の隙を突いて駆け上がってくるのである。そのたびにわたしたちと座敷の上で追いかけっこになり、座敷の上はみるみるうちにジローの足跡が点点とのこる。雑巾片手に大騒ぎしたことも、今ではなつかしい思い出である。

たいていはジャーキーをちらつかせて外へ誘い出すのだが、ジローもいろいろと知恵を働かせた。ワンルームから口にくわえたボールを座敷にむかってフーッと吹き出すのである。するとボールはコロコロと座敷の上を転がっていく。間髪をいれず脱兎のようにボールを取りに座敷を走る。ジローはそれでとりあえずは満足していたのであろう。

わたしたちとジローの知恵くらべをしながらともに遊んだ日々であった。

(六) 老い

数年ほど前から髪に白いものが混じるようになった。あの真っ黒だった口の周りも少しづつグレーがかってきた。

ジローに明らかに老いの現象が目立つようになったのは死の前年からである。散歩の速度が徐々に遅くなり、ふとしたはずみにけつまずくようになった。それまでは軽快に飛ぶように上り下りしていた玄関の石段を、一段一段用心深く上り下りするようになった。時には飛び下りようとしてその瞬間足がもつれてよろめくこともあった。「仕方ないですよ。ジロー君も人間でいえば相当の年齢ですからね。無理をして散歩に引っ張りださない方がいいですよ」診察に連れていくと獣医は冷たく言い放ったが、わたしはなにか悪い病気にかかったのではないかとそればかり心配していた。それでもジローは、まるで自分の義務であるかのように、よろけながらも律儀に散歩をせがんだ。

亡くなる年のはじめ、カット&シャンプーのため美容院に連れていった。往きは下り坂のため時間をかけてでも自分で歩いたが、帰りはかなり急な登り坂を息を切らしながら歩くこと道半ばで遂にダウン、座り込んでしまった。医者のいうとおり少し無理をさせたかな、「ごめんね、ジロー」と、あとはダッコして家に帰った。それ以後はほとんど散歩にも出ず、ワンルームの中や庭でおとなしく遊ぶことが多くなった。

考えてみると、一年ほど前から目やにが出るようになり硼酸水で拭ってやると涼しげな顔をして気持ちよさそうにしていたが、ひょっとして視力が落ち、半ば目が見えなかったのではないだろうか。臭いだけをたよりに動いていたのではないだろうか。そう思うと言葉が通じない悲しさ、ますますいとおしさがつのってくるのである。

そして死の数日まえから、あの大好物だったリンゴもパンも食べず、水だけをペチャペチャと舐めるように飲んでいたが、五月一日の夕方遂に息をひきとっていった。ひどい苦しみようもなかったのが、せめてもの慰めというべきなのだろうか。

(七) その後

ジローがいなくなってから、かつてジローが遊んでいた庭に雀やほおじろが頻繁に飛んでくるようになった。そして冬眠から醒めたがま蛙が不思議にも毎晩現れて、ジローの墓標の前でじっと座り続けていることもあった。蛙も鳥たちも、彼らの世界でジローとなにかを囁き合っているように思えてならない。

何年も経った今も、ジローと歩いたいつもの道をウォーキングしている。その途中、散歩をしているおばさんたちから「ジローちゃんのお父さん、こんにちはー」と明るい声がかかる。

わたしはとても嬉しかった。ジローはまだ生きているのだ。わたしやおばさんたちの胸のなかに、そして蛙や小鳥たちの囁きのなかに——。

ジローは言葉ではなにも話せなかったが、そのぶん多くのことを、多くの人たちの心に語りかけてくれた。人間と動物、人間と自然とのまじわりというのは、きっとこういうことをいうのだ。

わたしは、これからいつまでもジローと心のなかで語り合っていこうと思う。

（平成十七年三月十一日・記）

古い物・遠い夢

忠内正之

第十一章　茶道具三昧

（二）茶杓「鎮信公」作

「お姉様、この茶杓は時代が古くて、とても魅力があるわ」

「そうね、江戸大名の作らしくて品があるわね。先生がいつも口癖にしていらっしゃる侘びがあるとはこの様な感じかしら。今年秋の茶会に使ったら皆さんがきっとびっくりするわよ」

「それじゃあ、買付予約の赤札を置いておきましょう」

お目当である、茶杓が展示してある場所迄、混雑する中をやっと辿りついた途端に、若々しい姉妹のこの会話が耳に入った。

「しまった、この姉妹に先を越されてしまったんだ」と臍をかんだ。「朝一番に素見した時赤札を置いておけば良かったのに、口惜しいなあ」と思わず溜息をついた。釣り落した魚は大きい。タッチの差で買損なった道具もまた、未練が残る。

平成七年七月、東京美術倶楽部、「正札会」での出来事である。茶道具の知識が、多少は解りかけて来た頃、私共夫婦は少し味のある、茶杓を求めて、この正札会に足を運んだのであった。

東京美術倶楽部（以下東美と言う）の正札会は年に二回七月と十二月に開催される美術品の売立会で関東近郊はもとより、全国から売手と買手が集まる。出品数は数万点、単価二万円以上となっており、まさしく現金で掛値の無い一大市場である。一説によれば、業者の盆と暮の資金繰を助けるための行事としてスタートしたらしい。出品種類は多岐に亙るが、玉石混合、茶道具、陶磁

器、文房具、絵画、はては古民具に等しい物まで網羅されている。昨今、神社、仏閣等の境内で展げられる青空市場の更に上質で規模の大きな催しと考えれば間違いない。

出品数が多いのと、見限品もあるので、面白い出物がある。従って、利目をもって根気よく探せば、予想外の逸品を掘出す事も可能である。土曜日・日曜日と二日間に亘って開かれるが、入場無料の故もあって毎回押すな押すなの盛況である。

二、三、四階が会場で、二階は良質なもの、三、四階は、やや大衆的なものが陳列されている。二階にある茶室では抹茶の振舞いもある。

極く最近ではPR効果もあって一般の来場者が増える反面、前述の骨董祭りの趣が強くなり、出品物は増えたもののグレードが下がって、見所のある品物が少なくなった。

この為一時程の魅力はないが、正札会の案内が来ると、ソワソワして結局私は、足を運んでしまうのである。

話を戻すと、平成七年頃はまだ良質な出物に屢々出合う事が出来たのである。

私共が求める対象の茶杓は数点、離れて並んでいたが、夫々帯に短し襷に長しの感。品物は良くても財布の都合に敵わないものもあって、散々迷った挙句、結局（この茶杓に定めよう）と思って来たのに、油断から若い姉妹に先取りされてしまったのである。

後悔先に立たず。買取予約である赤札を入れておけば良かったのにと悔やんでも、後の祭りである。

そこで私は一計を案じた。丁度赤札を置いてなおためしすがめつして、茶杓の前に座って迷っていた姉妹に、わざと聞こえる様に―正札階の二階は畳敷きで、長い机の上に道具が陳列してある―立って彼女等の頭の上から、

「この茶杓は良い品だが、この様な会に出ていて、多勢の人達の目垢が着いた物は正式な茶会には使えないね」と半ばヤケ気味に私が大声で言う。

「そうね、今度〇〇道具屋さんにウブな出物を探してもらいましょう」と妻も合せる様に言う。

決して打合せした上での発言では無かったが結果として意外な展開を招来する結果となった。

三階、四階の陳列品をあれこれ冷やかした後、約小一時間たって、もとの二階の茶杓を窺うと、何と先の予約の札が取消されているではないか。これはしめたとばかり小躍りして当方の赤札で抑えた。私の言葉の影響を受けて、あの姉妹が諦めたとすれば（悪いことをしたな）との反省も湧いたが、あの位の言葉で簡単に諦らめるとは、所詮彼女等には（この茶杓との縁も運も無かったのだ、私の故だけでは無い）と勝手に解釈して後ろめたさを振り切った。

赤札で品物を抑えた場合、極く短時間のうちに購入手

続に移らなければならない。さっと見て触っただけでは当方も心配である。その時側に立った、中年の人物が、この茶杓について説明してくれた。「筒にサインされている（円恵）は（鎮信）の号である。筒の〝トメ〟のサインは独特の刀印であり、鎮信作に間違いない」と言う。

（余計な事を言うなあ）と思い、売りたい業者の廻し者かと邪推したが、そうでなく純粋に講釈好きな手合いであった。この様な会では、多少の知識をひけらかして得々として説明したがる、野次馬が居るものだと後で解った。

いずれ私も後年は、買う力も無いまゝに冷やかし半分の、知ったか振りの評論家になるのだろうか？己の浅ましい将来像を見る気がして、自戒せねばと思った。

正札会での正式な購入手続きは、現金或はカード決済が定まりだが、美術倶楽部メンバーである美術商経由ならば付け買いが可能である。当該美術商の信用で、二週間程度の支払い猶予が出来る。

私の取引美術商は美術クラブのメンバーで「E美術」と言って日本橋にある〝宮内庁御用達〟を看板とする手堅い業者である。今の経営者は若主人だが、積極的な勉強家で信頼がおける。早速Eさんを呼んで購入手続きを依頼すると共に品物についての属性を調べてもらった。

調べた結果、出品業者は都内一流の茶道具商S店であった。長年に亘る顧客先である茶道の先生が老齢で引退されるのだが、お願いして出品してもらった。名前は出せないが、鎮信流のかなり立派な地位にあった、先生の持物であったと言う。大切に扱われて来たので状態もよく、品物は保証できるとの由であった。

かくして、念願であった時代色の濃い茶杓をウブな姿で入手する事が出来たのである。

〝茶杓とはひとかけらの竹片にみえる竹の匙だが、実は茶杓は茶の湯の歴史と密接な関係をもち、しかも茶人がこだわり抜いた道具なのである。茶杓には作者の茶道観や人格までもが削り込まれているといってよい。道具組の要となるものが茶杓である〟（池田巖著〝茶杓〟より引用）

茶杓とは何ぞや。私の稚拙な表現力でくど〳〵と説明するよりは、池田先生の文章に頼った方が賢明である。実に簡にして要を得た表現である。

私なりに補足する。〝たかが茶杓、されど茶杓である〟。茶杓とは、茶を掬う道具である。云わばスプーンである。だが、茶の湯の草創期から利休時代そして近代から現代に至る間に主要な茶道具として発展して来た。そして池田先生の説明通り、茶人の（作者の）茶境を表現する大切な手段となり、小さな道具とは言え茶杓は茶の歴史を語り、又伝来を守った人達の人物像をみごとに浮かびあがらせてくれる存在となったのである。

こゝで伝来する、古い名茶杓を二つ挙げてみたい。

千利休茶杓
銘　泪　古田織部追筒

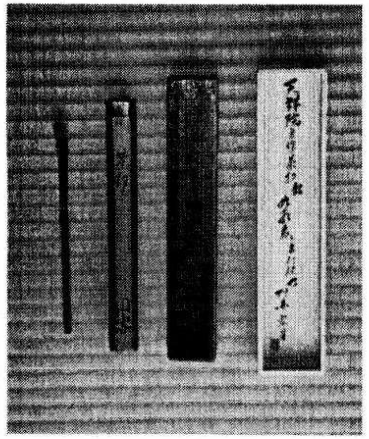
利休（一五二二―一五九一）は言うまでもなく侘び茶の大成者である。利休作の茶杓はかなり数が多いが、これは古田織部に形見として削ったと言う説があり、最も有名な作である。筒はなかほどに方形の窓をあけた特異なもので、位牌代りだとか、利休も織部もキリシタンであったとか諸説がある。いずれにせよ大変貴重な茶杓であり一度は眺めておきたいものである。徳川美術館（名古屋）では年一回展示される。仮に値をつけるとすれば天文学的な金額となろう。

蒲生氏郷茶杓　共筒

氏郷（一五五六―一五九五）は利休七哲の一人、武将で茶人、信長、秀吉に仕えた。高山右近の教化でキリシタンとなった、会津百廿万石の大名である。現存する氏郷作の茶杓は希有であるが、松永耳庵から東博に寄付されている。桃山時代の杓としてはダイナミックで武将の手らしく力強い作である。東博の常設で見る事が出来る。耳庵は昭和十二年この茶杓を一万六千円余で買ったと言うから、現在の貨幣価値に置き換えれば相当な額となる。

値段云々は不謹慎だが、両方共、歴史、文化の上からも、又美的な出来映えからしても、重要な宝の様な存在である。

さて苦労して獲得した鎮信作の茶杓について述べて見よう。前記二者のネームバリューと伝来の濃密さには比ぶべくもないが、同時代の武将・茶人の作であり私如き者が所有するのは勿体ない程の優品である。（写真参照）



松浦鎮信公作　茶杓銘九十九島

松浦鎮信茶杓　共筒

松浦肥前守鎮信（一六二二―一七〇三）は肥前平戸、六万二千石の藩主。茶は片桐名州（一六〇五―一六七三）、石州の家老藤林宗源に師事。鎮信流の祖。元禄二年（一六八九）隠居し、天祥庵（中国の雄文天祥を敬した敦器）・徳祐円恵と号す。

この茶杓は丸櫂先（見先、先端のこと）、丸撓めで撓め（丸く曲げてある）きつく鎮信作の特徴をなしている。双樋（竹の溝が二本通っている）節が高く節裏が鋭くえぐられている。節下の皮目は削がれ景色を作っている。裏行きはなめらか。筒は行削り（上下を綺削りにしたもの）保存も良く光沢がある。筒の〆印は石州系の刀印。円恵の自署がある。武将の作とは言え関ヶ原以降の大名茶人として、温厚、上品な作となっている。茶杓と筒が同じ竹で作られているのも珍らしい。前の持主に大切に扱われて来た故か、古さと綺麗さを兼ね備えている。「道具は使ってこそ長生き」と裏千家の宗匠もテレビ放送でおっしゃっていた。大切に息長く使うことが、道具の生命線を保つことゝなる。

この茶杓が自分の所有となったことを奇貨として大切に使うのは勿論だが、何とか更に箔を着けたいものと考えた。そこで「E美術」に相談すると、連綿として続いている松浦家の当代章・宏月氏が健在と解った。お願いして、「天祥院自作茶杓、銘九十九島ト名付け候也」との箱書きを戴くに至った。九十九島はかつての松浦家の領土、平戸から佐世保に至る平戸湾に点在する島々（その景観は松島に勝るとも言われる）の風景を偲んでの命名である。鎮信候はこよなく愛した領土の美しい風光に接しながら、既に徳川幕府の政権下となり色々苦労した結果本領土を安堵された、満足感からゆっくりと茶事を楽しむ心境でこの茶杓を削ったのではなかろうか？それ故この茶杓の作行きは、武将の荒々しさが消え、穏やかさと気品が感ぜられるのであろう。

平成十一年四月、私共夫婦は、私の退職と妻の教授昇格を記念して、細やかな茶会を開いた。この茶杓の晴れの初出番となったがあの姉妹のことを思い浮べた。多少の罪悪感と共に。

（二）終わり

志まや

吉田忠雄

平成十二年の五月の連休にアメリカ・イリノイ州スプリングフィールド市のカレン・ハサラ市長一行が姉妹都市締結十周年を記念して足利市を来訪した。

そのレセプションが足利市駅前のニューミヤコホテルで開かれた。そのときに同ホテル社長の小幡洋次郎氏が足利工業大学副学長早川修一郎氏に「吉田学長を紹介してください」と頼んだ。それが私が小幡さんと口を利いたはじめである。

それから半年後、二人はアメリカで一週間同じ釜の飯を食うこととなった。小幡さんは足利市教育委員会委員長として私は足利工業大学学長並びに足利短期大学学長としてスプリングフィールド市を訪問した。共に足利市長を団長とする姉妹都市締結十周年訪問団の一員としてである。

私は、そのときスプリングフィールド市にあるイリノイ大学スプリングフィールド校（UIS）とリンカンランドコミニュテイカレッジ（LLCC）との姉妹校協定締結の任務を帯びていた。この協定締結調印に当っては、早川一夫足利市長、カレン・ハサラ・スプリングフィールド市長と嫩中三十二・シカゴ総領事（前外務省アジア太平洋局長）が立会人となってくれた。

スプリングフィールド滞在中は在米の高安夫妻がかけつけて付き添ってくださった。高安夫人は足利名誉市民第一号新居善太郎氏の令嬢である。夫妻共に気さくな方で気楽にお話をしてくださった。

同じく随員の一人である板橋敏雄足利商工会議所会頭は私の小中学校同級生であるが、ジャズが好きらしい。足利で時々商工会議所主催のジャズ演奏会をやっている。スプリングフィールドでも公式行事の終わった後、皆はジャズバーに行った。足利に来たことのあるジャズ歌手などがいて盛りあがっていた。

私はジャズを特に好きではないので、外に出て休んでいた。小幡さんも同様であるらしい。外に出てきた。通訳の黒木さんと三人で四方山話をした。

それまでに小幡洋次郎（旧姓上武洋次郎）さんが東京オリンピックとメキシコオリンピックにおいてレスリングで金メダルを取ったという話は聞いていた。しかしこんな人と気楽に話はできないので、遠くで眺めていただけであった。はからずも外国の町の一隅で身近に話を聞くことができた。

そこでは小幡さん、当時の上武洋次郎青年のアメリカオクラホマ大学におけるレスリング修業時代の話を黒木さんと共に身を乗り出して聞いた。これは是非現在の日本の青少年に聞かせなければならないと思った。その望みは、その後足利短期大学で学生の前で講演していただき、その講演記録をつくり、両毛新聞に掲載したことで一部かなった。

話は酒の話に移った。小幡さんと私には共通点があることがわかった。まず共に酒が好きであるということである。つぎに行き付けの飲み屋についてである。これは個人の好みの問題であるが、似ているのではないかと思った。

小幡さんは、気の置けない人たちと飲むのがいいという。私も同感である。「足利には『志まや』という飲み屋があります。あまりきれいな店ではありません。そこのおやじは川島謙一といいます。気の置けないおやじです。その友達に町田のおやじがいます。植木屋の大将ですが、指の太さが人の二倍もあり、如何にも植木職一途に生きてきたかがわかるおやじです」といい、「毎週水曜日の夕方そこにいますから、たまには来ませんか」と小幡さんに誘われた。

帰国後、私は遠慮してすぐには志まやには足をむけなかった。翌年の一月、気が向いて水曜日の夕方六時ころ志まやに行った。そこには、小幡さん、前述の町田さん、それに足利ガス社長の石川さん、職人の本間さんが飲んでいた。店の人間としては、志まやの主人、おかみさんとおかみさんの義理の弟の通称「あんちゃん」が手伝っていた。

志まやの主人のことを小幡さんや町田さんは「志まやのおやじ」と呼ぶ。「あんちゃん」は「社長」と呼ぶ。私は「志まやさん」と呼ぶ。石川さんも私とおなじである。志まやでは私はすぐに常連の一員に加えていただいた。小幡さんの事前広報があったのであろう。

夜の志まやの肴はおかみさん手造りの野菜料理である。私は野菜が大好きなので、大歓迎であった。大根、白菜の漬物、ほうれん草のお浸し、蕗のとうのてんぷら、菊の酢びたし、同てんぷら、各種筍の煮もの、ヤマゴボウの煮物、山菜料理、冷奴、蕎麦に乗せる各種てんぷらなど多彩である。

志まやはもともと蕎麦屋である。昼にたまに蕎麦を食

べに行くが、志まやの蕎麦は逸品である。私は朝と昼の食が細いので、昼行った時は盛り蕎麦だけを食べる。ちょうどいい。三五〇円である。あんちゃんが気をきかして白菜の漬物を付けたりしてくれる。

はじめのうちは、上にてんぷらを乗せた五〇〇円のてんぷら蕎麦を食べた。これは美味いのであるが、私の腹には少しこたえる。あるとき昔の酒のみの気分になって、コップ酒を盛蕎麦を肴にして飲んだ。これは美味かった。昔の酒のみの気分がわかった。しかし癖になると困るのでやめた。

志まやの蕎麦の旨さは知れ渡っている。タクシーの運転手は皆、「店はきたないが蕎麦は旨い」と言う。足利の人は口が悪い。

お世話になっている足利コミュニティカレッジの大貫院長夫妻とも昼の志まやで時々お目にかかる。足利市長なども噂を聞きつけて顔を出すらしい。

夜の志まやの肴はおかみさん手作りの野菜料理のほかにだんなが魚料理を作って出してくれる。マグロの刺身、焼いた川魚、焼いた干物などである。たまにはとんかつなどもでる。町田さんは特注で大きな煮豆腐を食べる。

志まやさんは大きな身体をしている。足利工業高校出身であるが、そこで相撲部に入っていたそうである。一見したところこわそうである。私の甥などもそう言うから当っているであろう。しかし実際は気のやさしい人である。

志まやさんには娘さんが一人いて、たまには店に顔を出して、私にも挨拶をする。青森出身の青年と知り合いになり一緒になって近所に住んでいる。どっちも一人っ子なので、どこに住むかが問題になったであろう。できのいい孫がいて志まやさん夫婦のじまんのたねである。

通称あんちゃんは志まやのおかみさんの妹の亭主である。店を手伝っている。一見無愛想であるが、事実はそうではない。常連の客に愛されている。私もあんちゃんに大事にされて感謝している。昼に蕎麦を食べにいき、あんちゃんに「先生今日は一杯やらないんですか」などと言われて、「今日はもう帰るんだからビール一本頼むか」などと言ってしまうことがある。

あんちゃんはしっかりしている。勘定係であるが、絶対に間違えない。小幡さんに時々冷やかされている。あんちゃんは夜七時過ぎになるとそわそわしてくる。七時半になるとよほどの事がないと店を閉めて、おかみさんを送って帰っていく。一緒に飲もうと皆が誘っても絶対に店では飲まない。家に帰って落ち着いてから、焼酎を飲むそうである。

あんちゃんには良い息子がいる。足利の農協に勤めている。たまに志まやに寄っていく。好青年である。志まやさんの孫とあんちゃんの息子には三戸岡道夫「二宮金次郎の一生」を送って励ました。

町田文夫さんは町田造園の社長である。志まやさんこと川島謙一さんとは一つ違いの無二の親友である。植木職人からスタートして今日を得ている。小幡さんが言ったように手の指の太さは、並の人の二倍くらいある。今でも木に登って剪定をしているそうである。長男は大学を出てサラリーマンになったが、次男が家業を注いで家を建て、いっしょに仕事をしている。

毎日のように志まやで飲んでいる。日本酒党でコップ酒五杯くらい飲むのではないかと思う。それでも健康そのもので、朝七時過ぎ所用でお宅に伺うと、もう作業着で仕事の準備をしている。

良い奥さんと家族に恵まれ、七五三のお祝いに一族が足利の名刹ばんな寺に参詣に来ているのに出会った。写真をとってやって大変喜ばれた。

町田さんは大変気前が良くて、われわれ飲み仲間に毎年一月になると梅の植木鉢をくれる。梅ノ木に蕗のとうを配した盆栽である。私は「春の魁　町田文夫作」と書いて学長室に飾っている。

石川尚さんは足利ガスの社長である。小幡さんの早稲田大学の一年後輩である。最初のうちは小幡さんが石川さんに対して大分威張っているように感じた。一年先輩だとこんなに威張れるものかと思っていた。しかし長く付き合っているとどうもそうではないらしいとわかってきた。石川さんも小幡さんに皮肉を言ったり冷やかしたりしている。

石川さんと私は多少の縁がある。足利ガスの元社長柳田松太郎さんは旧梁田村出身で私の父と同郷である。また柳田さんは東大応用化学科の出身で私の学科の先輩に当る。柳田さんは明治一七年の生れで、戦争末期に郷里に帰り、梁田村の村長を長く続けられた。そのときに毎日私の家の前を通って通勤されていた。私が東大に合格したときは大変喜んでくださった。

また私が志まやで初めて石川さんに会ったときは柳田さんのご子息隆さんが足利ガスの役員をしておられた。そして石川さんの紹介でお会いした。口元がお父さんとそっくりで、私は大変懐かしい思いがした。

石川さんはまめな人である。町田さんのくれた植木鉢を足利短期大学と足利工業大学まで運んでくれた。石川さんは尊敬すべき社会人である。足利近隣の交通安全関係の役員をしている。足利工業大学も石川さんが代表者である協会から表彰状を貰ったことがある。そんな人柄が認められたのか、石川さんは最近栃木県公安委員に任命された。

志まやで私が親しくさせていただいている小幡、町田、川島（志まや）、石川の諸氏と私を加えると酒の強さの順番ができる。これは私の私見である。異議が出るかもしれない。

一番強いのは町田さんであろう。毎晩日本酒を五合程

度飲んでまったく崩れない。翌朝は早く起きて仕事の準備にかかる。私の見るところ、これを支えているのは、一つは酒が飲める資質であり、ひとつは毎日休まず植木の仕事をしていることである。

次に強いのは小幡さんである。毎日どれほど飲んでいるかわからない。しかも、酒が好きである。しかし飲みすぎて翌日つらいことがあるらしい。小幡さんは談論風発私たちを楽しませてくれるが、楽しすぎて私たちも一緒に飲みすぎてしまう。石川さんが私に言う。

「吉田先生、小幡さんと飲むのはいいですけど、私たちがやられてしまいます。気をつけましょう」と。

小幡さんは、世界チャンピョンの体力を持っている。そして毎朝ランニングをして体力維持に努めている。しかし昨日は飲みすぎたとこぼすところがあるところを見ると、素質的にはそれほど強くないのかもしれない。しかし、四月のはじめの足利工業大学「風と光の広場」花見大会や、四月末の小幡さんのレスリングの先輩の兵藤三郎さん招待の「館林花山つつじ」花見大会では、昼の十一時から夜の八時まで元気に飲みつづけているのを見るとやはり強いのかなあと思う。

職人の本間さんと楯建設社長の蓼沼さんや解体会社足利支所長の柿沼さんも私より古い常連である。本間さんは一人で黙々と飲んでいる。蓼沼さんの息子は私の勤務先である足利工業大学の卒業生であるから感謝している。蓼沼さんは商売が繁盛しているようである。たまに二次会でおごってもらったりしている。反省している。私も火薬による建物の解体発破に関わったことがあるので、柿沼さんの仕事には興味を持っている。

古い知り合いの須永先生と柏瀬さんとたまに志まやで一緒になる。二人は親友である。須永先生は、私の母校足利高等学校の校長を務めた漢学者である。一度足利市の市民講座で須永先生の足利学校庠主寒松の漢詩の講義を聴いた。須永先生が漢詩を朗詠するのを聞いて漢詩朗詠もいいものだと思った。そのあと、国際二宮尊徳思想学会で新しい知人鯨遊海さんの漢詩朗詠を聞いた。偶然は重なるものだと思った。

柏瀬さんは高校一年後輩の眼科医である。インドに行ったおりに、ダライラマと会って話をしたということである。その記事と写真が地元両毛新聞に載っていると志まやで聞いた。早速両毛新聞を見て切りぬいて保存した。

私は姉と二人姉弟である。私が家を出てしまったために、姉が婿をとって家業を継いだ。私の甥である姉の長男が家業を手伝っている。この甥は酒が強い。時々甥を志まやに連れて行く。甥は志まやの常連に大事にされて幸せである。

最近志まやに案内するようになったのは、谷二郎先生と中井利昌さんである。このお二人は、足利の警察官友の会常連として親しくなった。谷先生のお父さんは、私が子供のころ県会議員で有名であった。谷源吉というと、当時の足利では県会議員の代名詞であった。

谷先生とは私が足利に職を得て間もなくなにかのパーティでお会いした。気さくな方でそばに来て酒を注いでくださった。私より十一歳先輩であるが、うまが合うのか気が合うのか、気楽に話をさせていただくようになった。

谷二郎先生は足利警察署の警察医である。夜中でも警察から呼び出されると出向いて診察をされる。頭が下がる。それでいて気さくで、酒脱で、そばにいると楽しい方である。私はひそかに年をとったら谷先生のようになりたいと思っている。

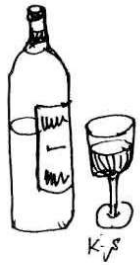
谷先生はお酒が好きである。酒を飲んで談論風発である。後輩の私たちによく注いで下さる。ご自分はペースを守っているように見える。肴には余り手をつけられない。二次会に行かれる。足利に何軒か行き付けの店がある。

谷先生は二年前に腰を痛められて療養された。それ以来外に出る回数が減った。石川さんが私に「時々谷先生をお誘いしましょうよ」といった。私は大賛成でそのように努めているつもりである。

中井さんは谷先生のお付き武官である。詳しいことはわからないが、中井さんは谷先生に仲人をしてもらったそうである。元自衛官で、足利地区の自衛隊後援会の副会長をしている。谷先生をお誘いするときは中井さんがついてきてくれるので安心である。一緒に飲んでいると、中井さんは「谷先生、もっと食べなければ駄目ですよ」と世話を焼いている。

志まやを拠点とした交友は心を癒してくれる。しかし課題も出てきた。志まやで飲んで二次会に行くと翌日酔いが残ることが増えてきた。対策として、二次会では日本酒を飲まないことを試みている。まだ試行段階である。

一方、ひと回り近い先輩の谷先生を見ると、私は老け込むには未だ早いとも思う。できれば体調を崩さない程度に志まやのつきあいを続けて行けたらありがたいと思っている。



（司馬雑感　三）

「街道をゆく」のなかの荻生徂徠

山田嘉久

（一）「街道をゆく」で一番多く登場する学者

作家の出久根達郎は大の司馬ファンで「竜馬はゆく」を何度も読んだという。そのうち彼はこの長編小説に何人の人物が登場するか数えてみようと思ったそうだ。同一の人が幼名で出てきたり、或いは途中で名前を変えたりーたとえば三岡八郎が由利公正といったようにー多少の誤差もあるが、登場人物の総数は一一四九人だった。

私はこの話を聞いたとき、なかば呆れなかば感心したが私にも多少この性癖がある。

司馬作品の多くは「彼の物語HIS-STORYである」と論じたのは本年度司馬遼太郎賞を受賞した歴史家松本健一だが、司馬の後半生のライフワークとも言うべき「街道をゆく」シリーズもこの例外ではない。全巻四三巻、歩いた街道の数七二に及ぶこの大作も日本の、そしてときには世界各地の風土と歴史、民族を語りながら、「彼」の物語へと発展し、内外の歴史上人物を数多く登場させている。

ではこのなかで一番頻繁に登場する人物は誰か。

私の調べたところでは予想どおり司馬の好きな太閤さん豊臣秀吉で全巻の六割にあたる二六巻に出てくる。ついで信長、家康と続くが、そのほかの戦国武将としては石田三成、加藤清正も一〇巻以上に登場している。幕末では西郷隆盛、勝海舟が多いが、竜馬は以外に少ないのは「竜馬がゆく」で書き尽くしてしまったせいだろうか。

源頼朝や義経も多く書かれているところをみると、どうも彼の好みが大分反映されていそうだ。

宗教に詳しい司馬のこととて空海、最澄、親鸞も多い。

文人としては松尾芭蕉、正岡子規、夏目漱石、福沢諭吉といったところで誰もが納得するが、一方、学者は少ない。

しかし一人だけ例外がある。徳川中期の儒者「荻生徂徠」である。

徂徠は「街道をゆく」では実に八巻に登場してくる。①長州路⑦砂鉄のみち㉔近江散歩㉙秋田県散歩㉝赤坂散歩㊱神田界隈のほか海外二巻がそれだが、司馬はなぜそれほどまで徂徠に関心があるのだろうか。

（二）荻生徂徠の人物像

その前に荻生徂徠とはいかなる人物か。一八世紀始めに中国の古典書を読みぬいて「論語徴」などを書いたというこの学者は名のみいたずらに高いが実態はどうだったのだろうか。まず「日本人名大事典」からその略歴を見てみよう。

荻生徂徠（一六六六―一七二八）

江戸中期の儒者。通称は惣右衛門といい徂徠と号した。館林城主でのち五代目将軍職を継いだ徳川綱吉の侍医荻生方庵の次男として江戸二番町に生まれる。徂徠一四歳のとき父が藩主綱吉の不興を買い江戸払いとなり一家は上総長柄郡二宮庄本納村（千葉県茂原市）に移り住む。父の赦免によって再び江戸に戻るまでこの一一年の歳月は不自由だったが反面、徂徠に貴重で実り豊かな体験をもたらした。すなわち農村の生活を通じたが故に都会の風俗を客観的に対象化する視座を確保し得たのである。著書「政談」にみられる城下町に悪しき風俗に関する鋭い分析と批判は質実純朴な農村で自己形成をはかったればこそ可能だった。

元禄九年、柳沢吉保に召し抱えられ四〇〇石を食む。その後吉保の失脚により徂徠も中央との接触を絶たれたが、まもなく茅場町に私塾を開いた。この塾は自由な学風のもと太宰春台など多くの逸材を輩出し一世を風靡した。

徂徠は実証的な学問の方法として古文辞学を唱えた。晩年は徳川吉宗に認められその諮問に与った。

この記事にみられるように徂徠が若い頃一一年間（一説には一三年間）過ごした茂原市本納の地は現在「荻生徂徠勉学の地」として千葉県指定史跡として保存されている。また徂徠が本納に転居してきた翌年にこの地で亡くなった母の墓碑は茂原市指定史跡となっている。（なお徂徠の墓は東京都港区魚藍坂下の長松寺にあり国指定史跡）

徂徠が江戸に帰った後も兄の春竹はこの地にのこり医業を続け、その子孫（荻生哲也氏）は今でも茂原に現住している。後に徂徠は兄春竹の子を養子として迎えているので徂徠にとって茂原は因縁浅からざる第二の故郷といえる。

功なり名遂げた晩年にも何度も茂原に帰り、雄大な九十九里浜を懐かしみ郷の老人と語り合った思い出を綴った。

徂徠が多感な青春時代を過ごした上総の僻村の地は上

記引用文に見られるとおり彼の人間形成に数々の影響を及ぼしたようだ。田舎育ちの無骨さを身につけ上司に対しても臆せず自説を述べた。また都会育ちを「御城下ニ常ニ住ム高官世録ノ人ハ何ノココロイタリモナイ」と批判している。大声と房総訛りは一生抜けなかったらしい。

江戸時代を通じて単に学問の世界だけにとどまらず、漢字もろくすっぽ読めない民衆の間でも人気が高く講談、落語、やがては浪花節の主人公にまでなっていることは彼の学者には珍しい清濁併せ持つ性格によるものだろう。（有名な落語「徂徠豆腐」はその一例）

そして彼の学派（古学または古文辞学といわれた。）の考え方も彼の茂原時代に培われたとその著「政談」で自ら語っているという。

江戸から遥かに離れた僻地での学問方法は誰の講義も聞かずに、「大学諺解」などの手持ちの文献だけを反復熟読したもので、これが彼にとっては結果として幸いとなった。寒村で友とした農民と木こりと漁師だけの「南総の力」がかえって「天の寵霊」と感じたと後年の徂徠は回想しているそうだ。

（三）司馬遼太郎の徂徠観

司馬は日本の人文科学は荻生徂徠から始まったと考える。

だからもし日本に徂徠が現れなかったならば、日本の学問は中国や朝鮮のそれのように空理空論の学問で終わってしまったであろうといっている。

徳川幕府は一貫して「朱子学」を官学としたが、江戸中期にこの官学を批判したのが徂徠だった。徂徠は最初は朱子学から出発したが、やがて朱子学の道徳的自然論を排斥して、経験的な思考法ともいうべき古文辞学を確立したのである。

（同じように朱子学を批判した京都の伊藤仁斎（一六二七―一七〇五）の説は古義学として区別されているがいずれも学問の方法として古人の言葉そのものに立ち帰るという方向性を持つことになったため、一般に纏めて「古学」と言われているようだ。）

これが今日の人文科学のはしりと司馬はとらえ、その系譜から太宰春台や服部南部などの思想家や学者を輩出した。徂徠は前述のごとく医家の出である。

江戸期は封建制ながらも優れた学者の多くは農家、浪人、商家、医家から出た。

もし中国や朝鮮のように科挙の制度があれば徂徠のような学者は出なかっただろうと司馬はいう。

その後の三浦梅園や本居宣長もこの例に漏れず、さらにその延長線上に彼の好きな山片蟠桃や富永仲基がいると考える。

（山片蟠桃の本業は大阪の富商の番頭で名もそれに由

来する。一種の素朴唯物論を展開したが、司馬はこれを高く評価して現在、大阪市には司馬の提唱で「山片蟠桃賞」が設けられている。富永も同じく大阪の商家の出。）

江戸期を通じてあくまで朱子学が本流だったが、これら傍流の「百家争鳴」がやがて江戸末期には本流を脅かすまでに至る。ここで幕府のとった政策が有名な「寛政異学ノ禁」である。

「異ヲ排シ、道を衛ル」。異とは主として徂徠学派を指し、道とは道学すなわち朱子学である。この政策を進めたのは寛政の改革で有名な松平定信だったが、成功したとはいいがたい。かえってその後の学問、思想の発展を阻害した結果になった。

なお学者によっては徳川幕府は当初から朱子学を官学としたのではなく、開府から二〇〇年も経ったこの「寛政異学ノ禁」をもって「正式」に朱子学を官学と定めたとする説もある。いずれにせよ幕府が正式なお触れを出さざるをえないほど当時の異学（徂徠学など）は勢力を持っていたと考えるべきであろう。

やがて維新を経て明治期の新文化をスムースに導入できたのは幕末の「百家」の「争鳴」があったればこそだと司馬は言っている。

徂徠の流れを汲み、幕末日本における最初の人文科学者は西周だったといわれる。その西は京都で新撰組がチ

ヤンバラをしていたときオランダでコントの実証哲学に傾倒し経済学と法律学を学んでいたが、西自身も「わが国の先人に例をみれば、徂徠の考え方がかろうじて西洋にちかい」と考えていた。

司馬が南部藩の内藤湖南を高く評価するのも湖南の思想が徂徠の影響を受けているためだろう。

もう一人司馬が注目する安藤昌益が徂徠の影響を受けたか司馬は触れていないのでわからないが、昌益も徂徠と同様に当時の商品経済の発展が彼の思想を作り出したことは間違いない。

江戸後期の経学は朱子学者を含めて、積極消極両面で徂徠の影響なしには考えられないという。また徂徠の学問は単にいわゆる経学の革新をもたらしただけでなく、その学風は文学、芸術から兵学、法律、教育、民族学など広範囲な領域に及んでいるのが特徴だともいわれる。

さらに「政談」その他の徂徠の論考は江戸後期の政治思想にまで様々の影響を及ぼしたという。

（四）「街道をゆく」海外編にも登場

徂徠は「街道をゆく」の海外編にも登場する。㉘「耽羅紀行」（昭和六一年）と㉟「オランダ紀行」（平成三年）である。

「耽羅紀行」では徂徠が耽羅（古代の済州島）に出かけたわけではない。

この巻では司馬は朝鮮にはなぜ徂徠のような学者が生まれなかっただろうと考えている。

李氏朝鮮は一四世紀末に興ったが日本と同じように朱子学の国だった。いや日本以上に朱子学全盛で朱子学以外は認めなかった。丁度、旧ソ連邦がマルクスレーニン主義しか認めなかったと同じである。

「李氏朝鮮史は党争と弾圧の歴史でもある」と司馬はいう。そのため朱子学に異を唱える知識人の運命は凄惨だったようだ。これでは徂徠のような学者が朝鮮に生まれるわけがない。

司馬は「朱子学が毒でした。その害は日本は皮膚ぐらいを侵されている程度でしたが、清朝、あるいは李氏朝鮮では、骨髄まで侵されていました。破滅的なばかりに自己中心的な考え方で当然ながら外国は蔑視すべきもの、あるいは異文化などは一切みとめぬ（略）要するに自分の文化以外の世界については思考まで停止しきっているというものでした」（明治という国家）と語っている。

その後（平成三年）に書かれた「春灯雑記」でも「朝鮮においては朱子学が国家そのものを停滞させたといっていい。（略）江戸時代のすばらしさは、朱子学一色でぬりつぶされなかったことである」と述べている。また同書では江戸時代に「異学」（たとえば平戸藩は山鹿学、長岡藩は陽明学、南部藩は折衷学というように）が生まれたのは中央集権制の中国や朝鮮と異なり、二百数十藩の分かれた多様な封建制に由来すると考えている。

要するに日本では形式上は朱子学が官学だったが、キリスト教を除いては他の学問が弾圧されるということは幕末の一時期を除いてはなかったわけである。

また「オランダ紀行」では司馬が吉川幸次郎博士と対談したことについて書いている。話題の中心は徂徠だった。

江戸期においてなぜ徂徠学が成立したかの司馬の問いに対して、吉川の答えは「オランダの影響でしょう」だった。

鎖国時代ではあったが唯一の例外が長崎出島から入ってくる西洋知識（司馬はよく「暗箱のなかの一条の光」と表現する。）で、それが遠く江戸に達した。江戸ばかりではなく更に辺境の地房総まで差し込んできて徂徠や新井白石（一六五七―一七二五彼も房州久留里藩の出身）の学問を生んだというのである。

この吉川説にたいして司馬は必ずしも反対はしていないが、徂徠学の第一の要因は前述のように前期資本主義ともいうべき当時の沸騰した商品（貨幣）経済にあると考えている。室町期に成立した商品と流通の旺盛な経済が江戸期では商人の世界だけでなく諸藩の経済思想にまで入り込んだことが、やがて徂徠のような西洋のそれと偶然類似した人文科学的思考を生む一因となったというのだ。

朱子学のような空理空論ではなく徂徠学は丁度、「商人が商品を秤にかけて計算するように、あるいは薬種商が草根木皮を選別するように」実証的で数量的で時には自然科学的でさえあったと司馬はいう。

（司馬は当時の朝鮮は日本と違って、流通する貨幣さえなかったと発言して在日知識人の批判を浴びたこともあったが）

（五）司馬遼太郎の朱子学観

では徂徠が批判した「朱子学」とはどんな学問なのであろうか。

司馬は「街道をゆく」シリーズばかりでなく、他の随筆、さては講演でも「朱子学とはなにか」について多くを語っている。

たとえば「この国のかたち」では冒頭に「朱子学の作用」、三巻に「宋学」を書いた。宋学とは朱子学を含めて中国の宋代に発生した学問のようだが、ここでは後の明代に生まれた陽明学にまで言及している。

さらに第五巻では四回にわたって「宋学」がやがて日本に入り遂には官学となった経緯を詳細に論じている。

司馬の論調は例により平易でわかりやすいが、随筆の形をとるだけにやや断片的で時には重複の記述も多く、浅学の私にとってはもう少し体系的に語ってくれないかと思わなくもない。

陽明学は「格物到知」（物事を格った後に知に到るの意）をキーワードにした空理空論の朱子学をより実践的闘争的にした「知行合一」をモットーの学問らしいが、日本では中江藤樹や熊沢蕃山などが知られている。またこの教えを基にして大塩平八郎は決起した。

不思議なことに司馬は好んで陽明学信奉者を小説の主人公としている。

「峠」の河井継之助をはじめ「世に棲む日々」の吉田松陰、「翔ぶがごとく」の西郷隆盛や「殉死」の乃木希典などがそうである。

「継之助は陽明学の徒であり、陽明学にあっては事をおこすとき、それが成功するかしないかは第一義ではない。この学問にとって第一義というのは、その行為そのものが美しいかどうかだけであり、それだけを考えつめてゆく」（「峠」）

「実行のなかにのみ学問がある。行動しなければ学問ではないというこの思想は、朱子学とくらべて単に学問思想というよりも多分に宗教性を帯びている。行動教といっていいほどのものであり、これはきわめて松陰の気質に適合した」（「世に棲む日日」）

「西郷は大塩平八郎を尊敬するところが異常なほど篤かった」（「翔ぶが如く」）

宋代の朱子学が徳川幕府の官学となるが、中国の次の

明代に生まれた陽明学が幕藩体制をゆるがすような人材を多く育てて、大塩平八郎の反乱となり、河井継之助の長岡藩自立戦争となり、明治に入って西郷隆盛の西南戦争を引き起こし、明治の末に乃木希典の明治天皇への殉死となった。

一方、徂徠の古文辞学（徂徠学）と本居宣長の国学が別の角度から官学の朱子学を批判し、安藤昌益の自然真営道が幕藩体制の土台を揺るがすユートピア論を展開した。そして高野長英、佐久間象山らが西洋知識の移入を説いて獄につながれたり追放され、吉田松陰の理想と行動主義が維新を実行した人材を育てるに役立った。

同じように幕藩体制を揺るがした徂徠学と陽明学がどこでどのように交錯したのか浅学の私には詳しくは判らない。

ましてや司馬とおなじように徂徠や本居宣長、安藤昌益を評価した政治学者丸山真男との共通点を指摘する評論家もいるが、（中島誠著「司馬遼太郎と丸山真男」）、小説家と政治学者がどう結びつくのか私は戸惑うばかりである。

（それにしても明治政府が宣長、白石、蕃山など江戸時代の学者を贈位したのに徂徠のみ無位にしたのは不当だと丸山が論じたというのは興味深い。）

また私などは徂徠の古学と宣長の国学とはどうしても対立的に考えてしまうが、古学の対象が古の中国の聖人であるのに対して、国学は日本の古代の姿をありのままに把えようとした違いがあるだけでともに朱子学に批判的だったことには変わりがないようだ。

そして徂徠が人間の自然的感情を尊重し、これを画一的な道徳基準から開放しようとした態度が単に国学のみならず江戸後期の文学運動にまで受け継がれたことは特筆すべきこととされている。

司馬によると、中国宗代に朱熹（朱子一一三〇―一二〇〇）によってまとめられた朱子学は一種のイデオロギー学だという。

「宋学は、危機環境のなかでおこった。このため過度に尊王を説き、大義名分論という色めがねで歴史を観、また異民族（夷）を攘うという情熱に高い価値を置いた。要するに学問というより、正義体系（イデオロギー）であった」（この国のかたち）

「正義体系」などという言葉は司馬史観独特のものらしいが、物事を判断するに当たって、あらかじめ一定の枠を決めておきそれに合致しなければすべて悪として切り捨ててしまう。「一定の枠」は「道」と置き換えることも出来るので朱子学は別名「道学」とも呼ばれた。

「物事はこうこうあるべきだ」という観念を先行させた朱子学は歴史認識においても「大義名分」という観念の尺度のみによって正邪を判断したのである。

鎌倉末期に宋から伝えられた朱子学の最初の信奉者は後醍醐天皇だと司馬は考える。天皇自身、中国風の独裁皇帝を志向して、自分こそは正統で他は閏であるとしたのはまさに朱子学の影響によるものだというのである。

徳川時代に入って徳川光圀が「大日本史」によって朱子学を正統なイデオロギー論としたのは彼が庇護し寵愛した明末の朱子学者朱舜水に相違ないともいう。その結果、楠木正成が正、足利尊氏が悪と規定してしまった。

その正成については福沢諭吉が「学問のすすめ」で正成は権助にすぎないと書いた「正成権助論」が有名だが、司馬自身は正成はイデオロギストには違いないけれども、それにしては珍しく柔軟な政治感覚を持っていたとある程度評価している。（講演録「朱子学と楠木正成」、NHK「日本史探訪」等の発言から）

徳川時代の封建的君臣関係は、この朱子学のイデオロギーによって支えられ確立された。「君君たらずとも臣臣たらざるべからず」「忠臣は二君につかえず」「君辱められれば臣死す」の思想である。（幕末に澎湃として起こった尊王攘夷思想もそもそもは宋学から発した。）

江戸末期、頼山陽（一七八〇―一八三二）によって書かれた「日本外史」も朱子学史観（水戸学史観）によって染められていたが、一方では海保青陵のように「君臣も商売である。君は臣の忠誠心と能力を買い、臣はそれらを君に売る」という朱子学に全く反対の一種の重商主義経世論まで現れるようになる。

海保も徂徠学からスタートしている。いずれにしてもこのような建前論だけの朱子学を批判して孔孟の教えを実証的に研究したのが徂徠ということになる。

しかし注意すべきは徂徠といえども朱子学を全面否定したわけではない。

彼は幕府の中枢にいた人物である。綱吉の側近くに仕え晩年には吉宗に更に重用された。そんな彼が官学である朱子学を全面否定できるわけがない。

現に彼の前、山鹿素行は朱子学を批判したため朱子学の熱心な信奉者だった将軍補佐役保科正之の反感を買い、赤穂藩預かりの身になってしまっている。（彼の山鹿流兵学が赤穂藩に根を下ろし後の赤穂浪士討ち入り事件の遠因となるのだが。「もし素行の思想がこの藩になければ赤穂浪士事件はおこっていないであろう。なぜならば藩主の失敗による改易などということはそれ以前にもそれ以降においても例が多かったが、他藩士が赤穂浪士のような行動がおこしていない」（「殉死」）とも書いている。）

紀州で冷や飯を食い続けた八代将軍吉宗が朱子学に批判的な徂徠を重用したのは同じ青年時代「江戸払い」になった徂徠に対する共感めいたものがあったと考えるのは思い過ごしだろうか。

徂徠は吉宗の諮問に応じて幕藩体制の根本的病理を解剖して、江戸の消防組織から通貨対策にいたるまで極めて具体的な政策を提唱しているが、いずれにせよ徂徠は朱子学を一部批判したにすぎない。そのため彼の学派は折衷学派とも呼ばれた。

その端的な例が綱吉時代の有名な赤穂浪士の処分問題。主君の仇を討った四十七士に対して世論は圧倒的にその助命を望んだ。困り果てた幕府は徂徠に意見を求めた。彼の意見は法を犯した者への厳正な処分と一方では武士としての切腹を与えて名誉を永久に讃えるという見事な折衷案だった。

「もし私論を以って公論を害せば、この以後天下の法は立つべからず」と主張した徂徠の論を丸山真男は高く評価して「個人道徳が政治的決定にまで拡張することを断固として否認した」と捉えてしているそうだ。

この徂徠の赤穂浪士処分問題はどの歴史書にも載っているが、不思議なことに司馬は徂徠についてこれほど多くを語りながら、この件には全く触れていない。

赤穂浪士そのものを司馬は全く評価していないためかもしれない。(逆に「忠臣蔵」では卑怯者扱いをされる大野九郎兵衛を財政破綻を繕う財政コンサルタントと評価している。)

ついでにいうと司馬作品に「忠臣蔵」は登場しない。作家にとって最も魅力的なこの事件を一度も題材とすることはなかった。「元禄期や文化文政時代の泰平の情緒を背景にものを書くことは私にはできにくい」(歴史小説を書くこと)となる。

(六) 司馬遼太郎の歴史観―イデオロギーとリアリズム

「イデオロギー」とは司馬の歴史観からはもっとも嫌う思想である。

所謂「司馬史観」では「イデオロギー否定」が最大の特色といってよい。それだからこそ戦前の皇国史観と戦後の唯物史観が共にイデオロギー泥まみれであったがために、これを否定して登場した「司馬史観」に多くの日本人が共鳴したのであろう。

徂徠を評価するのも、この「イデオロギー否定」が根底にある。

また小説家司馬遼太郎は日本史の中でもイデオロギーの横溢した時代は決して小説の題材とはしなかった。

たとえば前述の南北朝時代。自分で書かなかったばかりか、作家はこの時代に手を触れてはならないとさえいっている。(暗に吉川英治の「私本太平記」を批判しているのだが)

水戸史観に左右されたこの時代は司馬によると「およそつまらない時代」で「時代の美意識というものがない」「あるのは利権、利害だけ」ということになる。(「手堀り日本史」)

また司馬が書かなかった(あるいは書けなかった)時代は「ぬえみたいな得体のしれないイデオロギー」が全盛だった昭和初期から終戦までの時代。

この時代を司馬は「鬼胎の時代」と名づけた。(後には「異胎の時代」とも言ったが、いずれも彼の造語である。)

司馬にいわせるとこの時代は「全く日本の歴史ではない」ということになるのだが多くの歴史家は「歴史は連続するもので一時代だけが断絶することはありえない」と批判的であった。

しかし司馬はあくまで昭和時代は突然変異の時代と把えた。帝国憲法の三権分立からはみ出した天皇の統帥権という「鬼胎の時代」である。

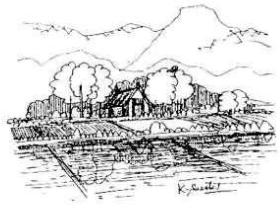
そのため彼はノモンハンに関する膨大な資料を集めたにもかかわらず遂に小説化することはなかった。「もしぼくが昭和史を書くとしたら、発狂して血管が破裂すると思う」とまで言った。

ついでに「司馬史観」のもう一つの特徴は「リアリズム重視」であろう。

(このほかに健全なナショナリズムと官僚批判をその特徴に加える歴史家もいるが)

それゆえ「一所懸命」の関東武士やリアリズム溢れる運慶の彫刻などが出現した鎌倉初期、それに子規や漱石を生み出した明治時代―「明治はリアリズムの時代でした。それも透き通った格調の高い精神でささえられたリアリズムでした。」(明治という国家)―が司馬の最も愛した時代ともいえるが、本題の荻生徂徠とは直接、関係ないので別の機会に譲りたい。

―了―



「卑弥呼の鏡」の焦り

新井宏

私にとってロマンを想わせる言葉。それはアンダルシア、まほろば、そして邪馬台国……。邪馬台国の卑弥呼をヒロインにした横光利一の小説『日輪』は、光ある感覚的な表現と英語直訳調の会話文が妖しく躍り、青春の私を古代にいざなった。

邪馬台国はどこにあったのだろうか。謎はロマンを深め、論争は熱狂的なファンを生む。いまや邪馬台国と題する書物が月二冊のペースで出版され、既に四百冊に達する勢いである。邪馬台国と名付けさえすれば五千冊は売れると云うのが出版界の常識らしい。

だから新聞も邪馬台国の記事を大きく扱う。昨年五月の泉屋博古館の発表の場合もそうであった。多くの新聞が一面で「卑弥呼の鏡、中国鏡と成分一致」と大々的に報じたのである。それは「三角縁神獣鏡が卑弥呼への下賜鏡であった」ということを意味し、もし事実ならば邪馬台国は大和説に決まる。

私はこのニュースを韓国にいて知らなかった。たまたま年末に帰国して、三角縁神獣鏡に関係する私の新発見を論文にしようとしていてやっと気が付いた。

もしそうなら私の論旨と大きく食い違う。そして急いで泉屋博古館の論文「スプリング8を利用した古代青銅鏡の放射光蛍光分析」を入手し一読して驚いた。すくなくとも、金属考古学を多少でも知る者にとっては、とても容認しがたい議論がそこには展開されているではないか。結論から言えば、微量成分のアンチモンが錫原料からもたらされたと言う前提条件そのものが完全に間違っている。だから当然ながら結論も間違っている。

泉屋博古館の報告は、直径四百六十メートルもある巨大放射光施設「スプリング8」を利用して、館所蔵の青銅鏡八十八枚について蛍光X線分析したもので、その結果をアンチモンと錫の比率で整理すると、三角縁神獣鏡は中国の魏鏡に一致し、日本で作られた倭鏡には一致しないという内容であった。いわば三角縁神獣鏡は魏鏡であり、卑弥呼のもらった鏡に違いないというのである。

周知のように三角縁神獣鏡については、いま魏鏡説と国産説が激しく対立している。

魏鏡説は、大正九年に富岡謙蔵が三角縁神獣鏡の銘文「銅出徐州師出洛陽」について、徐州、洛陽、師の文字の組合せは魏代にだけ限られると考証したことに始まる。その当時、銘文を持つ三角縁神獣鏡は無条件に中国鏡であり、問題は卑弥呼の鏡であるか否かだけにあった。しかも後のことにはなるが、卑弥呼が遣使した年（景初三年）の銘を持つ三角縁神獣鏡さえ発見され、魏鏡説は揺るがぬかに見えた。だからそれをベースに、昭和三十六年には京都大学の小林行雄が三角縁神獣鏡の同范鏡分有関係から、日本の古代国家の支配構造について壮大な構想を纏め上げ、日本の古代国家像を確立したのである。

しかし三角縁神獣鏡を魏鏡とするには不可解なことがいくつもあった。例えば中国鏡に較べると異常に大形化していて鏡面が凸型となり実用の鏡としての意味をなさないこと、鈕孔に中子砂が詰まったままのものやバリの手直しのないものがあること、それから中国鏡にはほとんど見られない同型鏡が極めて多いこと、等々であるが、何といってもその最大のものは、日本での出土が五百面にも達しているのに、中国では未だ一面も見つかっていないことであった。

森浩一が中国に一面も出土していないことを根拠に初めて国産説を示唆したのは、もう四十年も前のことである。その後、網干善教が「踏み返し鏡」の存在を実証し、小林説に再考をせまっても、あるいはアマチュア考古学者の奥野正男が三角縁神獣鏡に非中国的な傘松形文様が見られることを指摘し、本格的な国産説を唱えても、学界は無視し続けていた。

そこに登場したのが、昭和五十七年の中国考古学界の重鎮・王仲殊による渡来呉人口本産説である。中国鏡の研究を踏まえた王仲殊の考証、すなわち三角縁神獣鏡は呉鏡の系統を引くものであって、魏鏡の系統を継ぐ要素がほとんど見られないという指摘はさすがに日本の学界も無視できなかった。魏鏡説への疑問が一気に高まり、今度は魏鏡説側が必死になって防衛する側に回った。その結果、京都大学系の若手考古学者、岡村秀典や福永伸哉らが様式論を再編し、三角縁神獣鏡にも魏鏡の要素が見られると反撃に出て、一定の成果を挙げたが、状況は不利であった。

そこに今度の泉屋博古館の発表である。福永伸哉などは「論争のボールはふたたび三角縁神獣鏡国産説の側に

投げかけられたといってよかろう」と喜びを隠さない。

泉屋博古館の発表は、アンチモンは性質の良く似た錫の原料に含まれており、その比率は錫の産地によって異なるとの認識に基づいている。だからアンチモンと錫の比率が異なれば、鏡の製作地も異なり、その結果として三角縁神獣鏡は魏鏡だと云うのである。

ところが、青銅鏡に含まれるアンチモンが錫原料から来るという認識自体が、完全な間違いであった。こんなことは青銅器の考古学を知る者にとっては初歩的な知識である。アンチモンは錫にも含まれるが、それ以上に古代の銅原料にはアンチモンが多量に含まれているのである。それは中国、日本に限らず、ヨーロッパにおいても一般的なことであった。

泉屋博古館は、中国における古代純銅の一分析例を挙げ、アンチモンが含まれていないことの論拠にしているが、反例なら有り余るほどある。第一、錫をほとんど含まぬ漢代の銅銭にもアンチモンが多量に含まれているではないか。むしろアンチモンを含まぬ銅の方が例外なのである。それは古代銅の原料採取と精錬方法に関係することであり、技術的にも当然のことであるが、わずらわしいので先を急ぎたい。

それでもなお、錫とアンチモンの関係に固執する向きもあろう。それに対する反論としては出雲の荒神谷遺跡から出土した銅剣の分析結果を挙げることができる。そこには錫の多い銅剣ほどアンチモンがかえって少ないと云う逆の傾向さえ認められるのである。アンチモンは錫原料から来るものではなかった！。

したがって原料中のアンチモンを論ずるには、錫との比ではなく銅との比を使用しなければならない。そして泉屋博古館の分析結果を銅との関係で再整理して見て納得する。魏鏡も舶載三角縁神獣鏡も仿製三角縁神獣鏡も日本製の倭鏡も、全てアンチモンと銅の比率が同一値を示しているではないか。何のことはない。泉屋博古館の発表はまったく誤解に基づいたものであった。

ただしアンチモンと錫の比に差があるのは事実であり、それをどう解釈するのかとの反論もあるかも知れない。それは錫の組成に差があることを示しているからである。

しかし錫はアンチモンとは異なり、どんな種類の青銅器を作るかによって意識的に組成を変える成分である。鏡として、ステンレスのような白色の輝きを求める場合には錫を多くし、黄金色に輝く鏡を求めるには錫を少なくするのである。三角縁神獣鏡にも錫の多いものと少ないものがあることなどは従来から良く知られていたことで、いまさら新しく解ったことではない。

それにしても泉屋博古館の発表はレベルが低すぎる。

それは金属に不案内だというだけではなく、青銅鏡に関する従来の研究をまったく参照していないのである。

例えば泉屋博古館の論文には「これまで、鏡にかぎらず古代青銅器について、主要成分以外の不純物として存在している微量成分に着目した研究はほとんどなされておらず……」とある。これなどは六十年以上も前の昭和十二年に、京都大学の梅原末治が小松茂、山内淑人に依頼して行った五十五件にもおよぶ古鏡の分析事例について「まったく知らなかった」ことを示している。そこには錫、鉛などの他に、アンチモンをはじめとして、砒素、鉄、ニッケル、亜鉛などの微量成分の分析が明示されているではないか。

そればかりではない。泉屋博古館の発表は平成十年に山崎一雄が行った椿井大塚山古墳出土の三角縁神獣鏡の分析結果についてさえまったく参照していない。それは二十二面にもおよぶ舶載三角縁神獣鏡について、錫、鉛、鉄、ニッケル、砒素、ビスマス、コバルトのほかに、銀やアンチモンについても定量分析を実施したものである。おそらく原理的には蛍光X線分析よりもよほど正確なものである。

しかもこの分析結果を今度の泉屋博古館の結果と比較して見ると、まったく正反対の結論がもたらされる。アンチモンと錫の比で見ると、椿井大塚山の三角縁神獣鏡は、定説に反してほとんど全て泉屋博古館の言う仿製鏡の範疇に入ってしまうのである。

もちろん私は山崎一雄の分析値によって、椿井大塚山の三角縁神獣鏡が国産鏡だと主張しているわけではない。もともと間違った前提条件から出発したのだから、発表者が意図したことと全く逆の結論が出ることもあると云っているだけなのである。

それにしても今回の発表はひど過ぎる。発表者が三角縁神獣鏡についてよほど無知だったのであろうか。いやいやそんなことは決してない。泉屋博古館の館長は、銅鏡研究の第一人者・樋口隆康だからであり、泉屋博古館の論文の共著者にもその名が載っているし、マスメディアへのスポークスマンをつとめたのも樋口隆康である。

樋口隆康は京都大学の考古学研究室で梅原末治のもとで講師をしていたことがある。いわば梅原末治の愛弟子である。その樋口が梅原末治の行なった銅鏡の化学分析結果を知らないとはどういうことなのか。そんなことはあり得ないだろう。忘れていたにしてはひどすぎる。

その上、椿井大塚山の三角縁神獣鏡の分析を行った山崎一雄の資料は、何と樋口隆康が監修した『椿井大塚山古墳発掘調査報告・京都府山城町埋蔵文化財調査報告書第二〇集』に掲載されているのである。椿井大塚山古墳は若き樋口隆康が調査主任として、大量の三角縁神獣鏡を取り上げた記念すべき場所だから当然であろう。だか

ら樋口が山崎の分析資料を知らなかったとはとても云えないのである。いずれにせよ、京都大学派・魏鏡説の総帥として焦りもあったのではなかろうか。

そう云えば樋口隆康は、平成十四年にも問題を起したことがある。彼がイランを訪問した際に、同国南部のファールス地方で仏像を発見したという大ニュースである。仏像の出土地としては最西端になる発見であり、仏教は東伝のみならず、西伝もしていたことを裏付ける貴重な発見だというのである。これにいくつかの大新聞が乗せられ大きく報道した。しかしその仏像はどこで出土したのかさえ確認されていないガンダーラ仏のひとつに過ぎなかった。いわば樋口隆康には前科があった。新聞社は用心してかからなければならなかったのである。

それに、正規の学会誌でもない『泉屋博古館紀要』に論文を載せ、日本文化財科学会で口頭発表を行っただけで、マスメディアを呼び集め、大々的に宣伝する行為がなぜ許されたのか。自然科学分野であれば、どんな大先生でも厳しい査読を経た研究業績しかマスメディアにリリースすることはない。

しかし樋口隆康といえば、京都大学を代表する三角縁神獣鏡の権威である。しかも調査責任者として椿井大塚山古墳で大量の三角縁神獣鏡を取り上げたばかりでなく、黒塚古墳からも大量の三角縁神獣鏡を出土させ、考古学者冥利に尽きる人物である。マスメディアもまさかと思ったに違いない。権威にはすぐに迎合するくせに、貴重な批判やアマチュアの新提案はさけて通る新聞の通例をそこに見る。

今、日本の考古学界の現状について、奥野正男が『汚れた神々の手』で、旧石器遺跡の捏造事件は藤村新一の単独犯行ではなく、文化庁の役人・岡村道雄たちが関与した組織的、共同体的な犯罪行為であったと告発している。公表された事実関係からだけで、その核心にせまった奥野正男は、そのことにより毎日出版文化賞を受賞した。そのことが明日の考古学界の改革に大きく役立つであろうが、多くの考古学者はこれを無視している。

予算や人事権をにぎる行政学者や国立大の教授たちが、権威の衣のもとで自己に好都合な事実を宣伝し、批判的な考証を黙殺する風潮を、私なりに苦々しく思っていた。いや憤っていたこともある。しかし、今は行政主導の発掘や、開発行為にともなう発掘が終焉に向かっている。もう豊富な予算など望めない。今後は、考古学にロマンを求める人達が考古学を支えて行かねばなるまい。

私は想う。研究はロマンに満ちた高尚な遊びだと。人類の長い歴史で、研究というノーブルな行為が職業化したのは、つい最近のことに過ぎない。研究するということは、小説家や画家、作曲家が売れない作品を書き続けるのに似て、最初から報酬を約束された世界ではない。だから職業的な研究者は自戒すべきだ。本来は高尚な遊びなのだから、研究費も自弁すべきものなのに、給与さえ貰っていると。それがアマチュアの研究に遅れをとったりアマチュアから痛烈に批判されるとは何事か。

また悲憤慷慨に陥ってしまったようだ。

ここは同人誌上。思い切って簡略化してのべたが、泉屋博古館の発表の問題点については、学会誌に発表するつもりで、詳細にまとめてある。しかし泉屋博古館の発表があまりにも非論理的なので、勢い厳しくならざるを得なかった。しかもマスメディアを通して発表された内容に対して、正式な学会誌で反論するのも、大人気ないと思い、結局は季刊誌『邪馬台国』に載せることにした。ちょうど今、書店に出回ったところである

そしてそのことが読売の記者の知るところとなり、三月二十五日の夕刊に紹介された。それは魏鏡説に大きな打撃を与えることになるだろう。内容的には、単に泉屋博古館の発表は何の意味も持たなかったというだけのことであるが、人びとはそうは受け取らない。そこに魏鏡説側の焦りを見るに違いない。

(追記)　筆者は四十数年前、日本金属工業というステンレス鋼専業メーカーで新入社員として勤務していた。その時に出会ったのが、先輩で生涯の友となった杉本正勝博士である。その頃、杉本博士は日本で初めて蛍光X線分析を工業用として使うために悪戦苦闘しておられた。たまたま私は物理屋であり、業務とは無関係ながら、勝手に研究の手伝いをして、蛍光X線分析について多くのことを学んだ。その時に思ったことは、蛍光X線分析を金属遺物や文化財に適用したならば多大な成果を挙げることができるだろうという確信であった。できるならば、文化財保護委員会にでも転職して、片っ端から遺物の分析をして見たい。そのような願望は結局実現できなかったが、今では考古学の分野で第二の人生を謳歌している。これも杉本正勝博士のお陰であると日ごろ感謝しているが、残念なことに杉本博士は十年ほど前にお亡くなりになった。ところで、この度のスプリング8を利用した分析も、本質的には蛍光X線分析の一種である。したがって、蛍光X線の利点とか欠点について良く知っている必要がある。その点から見ると、泉屋博の発表は記載が不十分で、なかなか踏み込んだ議論ができない状態にある。巨額な費用を使った研究であるだけに、研究内容のレベルを高める共に、もっとデータの公開にも意を用いてもらいたいと願っている。

還暦からの考古学（二）

玉の話（その1）

中山喬央

まえがき

玉は珠、球とも呼ばれ、美しい宝石類で、多くは彫琢して装飾するものであるとされている。

更に詳しく述べると、「たま」は宝石や美しい石の総称で「ぎょく」は軟玉と硬玉との二種類に分けることができる。美しいもの優れたものに冠する言葉でもあり、玉のように立派なものにするとか、玉のように大切にするという表現でも使うことができる。一方で「たま」は、真珠とか球形のもの、あるいは善玉のような代物という意味にも使われ、「ぎょく」は芸者・娼妓の玉代にも用いられる。

珠は貝の中にできる丸い玉とか真珠を表し、念珠のように玉の形をして丸い粒になっているものとか、美しいものを形容する言葉として使われる。

球は美玉のことで同意語に璆があり、磬（石製の打楽器を作るのに用いる石）、まり、地球のように丸い玉の形をしているものを表現するのに用いられる。

しかし本文では、玉と珠を用い、それは宝石や美しい石の総称で、軟玉と硬玉の二種類に分かれるものとして使用する。

次に謝辞の意味を込めて、小生考古学研究のあらましと、玉の勉強を始めるようになった経緯について説明する。

六十一才で明治大学第二文学部史学地理学科の考古学専攻生となったが、学年の三年次、そろそろ卒論のテーマが気になりだしていた時、小林三郎氏のゼミで、今度の休日に南関東の弥生土器についてのシンポがあるから、時間のある学生は参加するようにとの話を受け、出席した。

その会合で、約二〇〇〇年前の自分が生まれた遠州浜松の土器が、現在住んでいる茅ヶ崎市を含む相模川東岸で大量に出土していることを知った。

その時司会者をしていた伊丹徹氏から出席者全員に対し、それぞれコメントが求められので、咄嗟にこれを卒論のテーマとする旨発表し、石川日出志氏のご指導により「相模川の流域における東海系土器の影響」（弥生時代後期～古墳時代前期）を書き上げることができた（これについては何れ機会を見て詳述したい）。

その後早大大学院の一年次に藤本強氏の指導を受けたが、同氏の卒論に土器をやったのなら、修論は集落だなとの発言にヒントを得て、テーマを「相模川流域、弥生・古墳画期研究」とし、出土土器等により集落毎に住居址と方形周溝墓を、それぞれ七期に区分してその動向を把握すると共に、家形土器・小銅鐸・玉作り工房址等、特殊なものについても採りあげて検討し、最終的に高橋龍三郎氏の指導によるフエインマン氏の不平等の発生から該期の社会構造を論述した。

このうち海老名本郷遺蹟の玉作りについて、修論主審査の田村晃一氏の指導を受けていた際、先輩から玉杖の鑿の未製品が出土しているとの小生の発言に対し、奈良県桜井茶臼山古墳とかメスリ山古墳出土の玉杖の鑿未製品が神奈川県の相模川流域から出土する筈が無いと厳しく糾弾され、直ちに反論しようと思ったが、なにはともあれ、専門家の指導を受けた上での現地・現物調査を早急に行なわなければならないと思い直し実行に移した。

先ず海老名本郷遺蹟の玉作りに玉稿を寄せられている寺村光晴氏に電話し、二〇〇一年十一月六日午後一時過ぎに和洋女子大でお目にかかることが出来、長時間に亘って数々の疑問点につきご指導を頂くことができた。次いで十一月十五日には海老名市教育委員会・押方みはる氏のご好意で、海老名本郷遺蹟の玉杖の鑿未製品と思われる円筒状未製品、及び石釧・車輪石未製品と考えられる亀甲状石、玉杖の杖身とも考えられる長さ六・三㎝径一・三㎝の褐色がかった緑色の太形管玉等、玉未製品四十七点と、各種砥石八点につき計測・計量をし、石質、色彩の調査等も行った。

又富士ゼロックス海老名工場総務担当者のご配慮により十二月四日には工場内管理棟玄関に展示されている海老名本郷遺蹟出土品を見せていただくことが出来、玉の未製品・損傷品四点、原石一点、原石形割品一点、砥石三点、土器五点の計測等を行なうことが出来た。

（話は変わるが、この訪問の際、同遺蹟出土小銅鐸のレプリカ数点の寄贈を受けた。現在手許にある一点を除き何れも関係する学者研究者に贈呈したが、大変喜んでいただいた。この場を借りて御礼申し上げたい。）

これにより一二月八日、修論チェックの為の早大史学大会での三〇分の発表を、どうやら通過することが出来た。

次いで十二月十日には長野県丸子町教育委員会・滝沢敬一氏のご厚意で社軍神遺跡出土の石鏃・亀甲状石・玉未製品九十五点、砥石・土器等七点を、十二月十二日は、加賀市教育委員会・田嶋正和氏のご厚情により加賀玉造遺蹟出土の鍬形石・原石・管玉等未製品二〇二点と鉄工具等を調査した。

これらの動きを見ておられた高橋龍三郎氏から今後管玉の研究をしてみたらどうかとのお話があり、この道に進むことを決意したのである。

このように玉を勉強の中心に置いてから僅か三年程度であり、小生が観察したものは地域的にも年代的にも限られたもので、量も決して多くはない。

しかしそれでもいろいろなことを知る事が出来たのは、まず藤本強・高橋龍三郎両氏のご指導を受けたことに加え、ご多用のなか小生の修論作成のため時間を割いていただいた前述の各氏の協力のお陰があったからである。また寺村光晴氏のご教授を最初に受けることができたのも極めて大きな役割を果たすこととなった。

それ以降も先学、学友から教えられたり、内外の文献からも学んできたが、分らないこと知りたいことは増えるばかりで、解明すべきことはあまりにも多く果てしが無い。

今回の執筆は、現在までに知りえた知識を整理して区切りをつけ、現状の問題点を明確にする為のものとしたいと思っている。小稿の内容を少しでも向上させる為に、先学諸氏のご批判と、それに関連する事実、解釈、文献などのご教示をお願いできれば、これに勝る喜びは無い。

なお表題は、考古学者とし小生が日ごろから尊敬している佐原真氏の「土器の話」からとっており、玉が自分のことについて話をするということを意味したものであって、この表題に内容が少しでも近づくことができたらと思っている。

ストーリーのあらまし

考古学の研究は出土遺物、遺構、遺蹟等を地域別・時期別に細分し、次にそれらが物語っているものを読み取ることが基本となる。

その為に先ず、世界各地における玉の利用状況や交易状況を地域別に説明する。論述は文明の発生順序にメソポタミア、インダス、エジプトと進め、ここで原石・玉作り工房址・遺物出土地を結びつける手がかりとなる使用原石の岩石学的分析を行う。更に文献史料による玉の使用目的等について考察する。次いで中国大陸について触れ、最後は朝鮮半島・日本列島における様々な事態について詳述し、最終的な目標を朝鮮半島・日本列島の学者、研究者が「半島伝来の碧玉製管玉」といっているものの実態に迫ることとする。

メソポタミア文明と玉

メソポタミア文明のあらまし

北部メソポタミアの高原地帯は、野生の大麦や小麦が繁茂していたが、その種を利用した世界最古の農耕が前八五〇〇年頃始まり、更に野生の羊や山羊を囲って飼育する牧畜も始められたので、肥沃な三日月地帯として知られている。

やがて人々は高原地帯から次第にチグリス川又はユーフラテス川の本流・支流に沿って平原地帯、砂漠地帯に下りていく。そして平地での生活により洪水の恐ろしさと灌漑利用による豊かな実りを知るようになる。こうして南メソポタミアの川沿いや沼地の灼熱の太陽光線が降り注ぐ中での豊かな穀物の収穫と共に、刈り取り後の耕地への家畜の放牧により牧畜も盛んになっていく。この前六〇〇〇年～前四〇〇〇年頃までの時期をウバイド期と呼び銅石器時代に属するものとしている。

南メソポタミアの低地は、大河の水を引いてきて、肥沃な泥に水をかけ、柔らかくなったら穴を開けて種を播き、その後は時々水をやりながら、日の光の下で成長を見守るだけでよく、農具は簡単な石器製や土製の鍬と、穂を刈り取る鎌だけで、十分な収穫が約束された。

こうした灌漑農耕の発達による穀物生産高の余剰は、遠隔地からの様々な物品をメソポタミアにもたらすこととなる。

大規模な神殿を建てるための良質な木材も入手できるようになり、農村集落とは別に都市が造られるようになる。最も古いといわれているエリドゥには推定四〇〇〇人が住み、神官、巫女、占い師、神殿を建設する建築家、灌漑などの治水事業に携わる土木技師、遠隔地との交易を営む商人、専門工人としての織物職人・陶器職人・大工・金属細工人などがおり、更に都市間で紛争が生じるようになったことから、城壁が建設されるようになり、軍事面の指導者も出現するようになる。

ウバイド期の終りの段階で、その文化はメソポタミア全土に広がり、南はアラビア（ペルシャ）湾岸から、東はイラン南西部のスーサ地域、北は南トルコのタウルス山地、西は東地中海にまで達していた。

ところが前四〇〇〇年頃、南メソポタミアでは、それまでの彩文土器から、粗雑な赤色或いは黒色の磨研土器に変わって、ウルク期に移る。北では北メソポタミア独自の文化をもつガウラ期が始まる。

前三五〇〇年頃のウルク後期になると、東部エラムのスーサが直轄地となり、遠くイラン高原・アフガニスタン・インダスからラピスラズリ、紅玉髄、閃緑石などの宝石や、金、錫等金属類が、豊富な穀物を見返りとして

スムースに流入してくる。

又西の方では、シリアのユーフラテス川沿いに、ハブバ・カビラなどの都市を建設して、東地中海沿岸・シリア・アナトリア（トルコ）から、レバノン杉などの木材、金、トルコ石、銅などが交易品としてもたらされる。

このようにチグリス・ユーフラテス両大河の下流域シュメールの地は、豊富な農産物を背景とする富力により、インダスから地中海沿岸に至る広大な地方から、物資と共に情報とか技術が集中し、物質面・精神面における支配者階級の高度の要望を満たす為の様々な職種が発生すると共に、その技術水準も急上昇し、人口の集中もあって、世界最古の文明が開花することとなる。

その結果、ウルクを中心として、エリドゥ、ウル、ギルス、ラガシュ、ウンマ、シュルッパグ、ニップール、キシュ、エシュヌンナなどの都市国家が誕生していく。

一方で東セム語族のアッカド人は、南メソポタミアに住むシュメール人と異なり、中メソポタミアに住み、中心地をキシュに置き、南はニップールをシュメールとの境に、西はユーフラテス川中流のマリ、東北部はディヤラ川流域、北部はアッシリアまでを占めていた。ところが前二三三〇年頃サルゴン王が出現して、不安定なメソポタミアの都市国家群を統一してアッカド帝国（前二一一二年まで続く）が建設される。都アガデ（所在地不明）はメソポタミア全土の王都となる。サルゴンの孫ナラム・シンは、さらにアナトリアを討ち、地中海にまで版図を広げるが、後継者に恵まれず、東方のグティ人の攻撃を受け滅亡する。

グティの支配力が増す中で、シュメールにあったラガシュ国ではグデア王など優れた指導者が存在したが、新シュメールの復興（前二一〇〇～前二〇〇四年）を成し遂げたのは、現在知られている最も古い法典であるウル・ナンム法典を制定した、ウル第三王朝ウル・ナンム王である。王の支配範囲は北メソポタミアまで至り、全メソポタミアを手中に治めていたが、やがて衰退に向かう。その原因は、西や北部砂漠地帯の北西セム語族のアムル人が勢力を持ち始めたことと、都市に人口が集中した結果、農村が疲弊し、灌漑と排水の調整がとれなくなって塩化現象が発生し、肝心の穀物の生産高にかげりが生じるようになった為である。

ウル第三王朝の力が弱まった頃、南メソポタミアではイシンとラルサが勢力を拡大していたが、アムル人によって、バビロニア帝国が築かれ、以後第四王朝ハンムラビ王（前一七九二～前一七五〇年）になって繁栄は頂点を極める。彼が制定した法典は、あまりにも有名である。

一方アッシリアは前二〇〇〇年頃からアッシュールを中心として栄えていたが、前一〇〇〇年頃から強大な軍事力で各地を従え、アシュールバニパル王（前六六八～

前六二七年）の時には、エジプトにいたるまでの広大な領土を持ち、アッシリア帝国が誕生する。しかしその統治は王権や軍事力に頼った過酷で残虐なものであった為、カルデア人、メディア人が反旗を翻し、前六一二年に崩壊する。

その後バビロンでカルデア王朝が建てられ、ネブカドネザル二世（前六〇四～前五六二年）の時に繁栄を見せるが、アッシリア帝国同様、軍事力に頼った領土拡張政策をとった為長続きせず、前五三九年に一般大衆は、印欧語族のアケメネス朝ペルシャの支配を喜んで受け入れる。

そして前三三二年に始まったギリシャの一小国出身のアレクサンドロス大王の東征の結果、オリエントはヘレニズムの影響を強く受けることとなり、約三〇〇〇年間続いたメソポタミアの古代文明は衰退する。

玉文化の推移

ここでは関係の深い黄金製品についても説明する。

宝石のうち紅宝石（Ruby）や緑宝石（Emerald）などの遺物は極少量であるが、西方諸民族の間で幅広く愛用されたものとして、青金石（Lapis lazuli ラピスラズリ）がある（以後ラピスラズリと述べる）。

ラピスラズリは紺青色で、主産地はアフガニスタンの東北バダクシアン山脈である。

又紅玉髄（Carneriya）は、インダス川流域のカッチのドーラビーラーや、グジャートのロータルのすぐ近くに産地があった事が知られ、ドーラビーラー（前三〇〇〇年紀に始まり、前一五〇〇年頃まで続いている）では、城塞の内側の一画に、紅玉髄ビーズなどの加工場が設けられており、紅色の地に炭酸ナトリウムを塗布して熱すると、白い跡となって消えない性質を利用して白色の模様を描いた所謂腐植ビーズは、インダス文明独特の産物として広く愛用されていた。

紅玉髄とラピスラズリは共に遠距離交易によりメソポタミアにもたらされ、王族のような一部特権階級が使用したが、ラピスラズリはアフガニスタン産の原石を、削り屑が大量に検出された東イランのシャフリ・ソコタのような中継地に運び、粗削りをした後に、メソポタミアで最終加工をしたものと思われている。

玉類の製品として最初に見られるものは管見するところ、ウルク後期（前三五〇〇～前三一〇〇年頃）テロー（古代ラガシュのギルス）で出土した水晶と石英を、滴やアーモンドの形にカットしたビーズ玉で、当時の社会階層の頂点を占めたエリートの存在を表すものとされている（三・五五頁）。

これに続くのが御守で、耳飾りとか、首飾りに組み入れられて身に付けた護符である。前四〇〇〇年紀末のテ

ローで、ラピスラズリ製の魚の形をしたものが検出されているのを始めとして、前三〇〇〇年紀の前半には、同じくテローで緑色石の蛙、灰色石の亀、貝殻製の翼を広げた鷲と鳥が、エシュヌンナで、ラピスラズリ製の蛙が出土している（三・八〇頁）。

魚や蛙や亀の形をしたものは、水と深淵の神にして知恵の神でもあるエンキと、鷲は天上界と軍神達に結びつくものと考えられていた。

前三〇〇〇年頃都市文明が発達したといわれているウルでは、第一王朝の女王シュブ・アドの華麗な装身具が陵墓から発見されている。黄金製で鶏冠状のヘア・ピン、先端に紅玉髄の小玉を飾りつけた黄金製のブナの葉を綴り、ラピスラズリ製の管玉を貫いた飾り紐、黄金製の柳葉三枚とラピスラズリ及び白色ガラスを象嵌した金花一枚を交互に結びつけたラピスラズリ製管玉のリボン、黄金製の輪を取り付けた紅玉髄製小環とラピスラズリ製管玉を綴り合わせたリボンに加え、女王遺骸の上半身と思われるところから、色彩に応じてつなげた首飾りか、或いは何列かに並べたものに布または革で裏打ちし胸飾りではないかと思われるラピスラズリ、紅玉髄、金、銀等の玉類が出土している。更に黄金の透彫、あるいはそれにラピスラズリ、紅玉髄等を象嵌した指輪とか、ピンが一方的にさしこまれるようになっているものが多い小粒文とか木の葉形の耳飾りも発見されている（四・図版十二・十三、一一四～一一六頁）。

一方金製品として前二六〇〇～前二四〇〇年頃のメソポタミアで、透かしの入った繊細な装飾を持つ、綾杉文様に絡み合った金の撚り糸を金環に溶接している指輪が出土している。ウルでは、何体かの遺骸がこの種の指輪を四個も嵌めて検出されている。

又イヤリングでも金製品が出ている。前二五〇〇年頃、マリのイシュタル神殿から、この時期特有の「籠」の形をしたものが見つかっている（三・八〇頁）。

ラピスラズリは装身具だけに用いられたのではなく、高価な杯、貝殻モザイクの地、目の象嵌、人物像の髭や髪、動物小像の毛など彫刻の細部に使われている。

前二五〇〇年頃のマリのイシュタル神殿と、ニンニ・ザザ神殿で髭の巻き毛の小片が多数採集されている（三・八一頁）。

前二六〇〇～前二四〇〇年頃のテローで様々な形の金、紅玉髄、ラピスラズリの長さ約三五㎝の首飾りと、ハラッパ文明（パキスタン東部、パンジャブ州中部にある前四〇〇〇年～前二〇〇〇年頃栄えたインダス文明の都市遺跡名のハラッパからとっている）特有の細工品である長い管状のビーズ玉で、中央がやや太くなっているものが出土している。

これら紅玉髄製ビーズ玉の特に精巧な加工は、インダス川流域で、モヘンジョ・ダロより下流の対岸に位置するチャンフ・ダロで行われた。職人達はその小塊を熱して紅色を濃くし、メソポタミア方面への輸出品として、切削・穿孔・研磨した。

又同時期の同遺蹟から、ややエンタシス状の白い幾何学的装飾のある腐植ビーズ玉が見つかっている。

一方、金製ビーズ玉製首飾りで、長さ約三三㎝のものが、前二六〇〇～前二五〇〇年頃のメソポタミアで検出されている。

その他、前二五〇〇年頃のマリ・イシュタル神殿から、瀝青の芯に薄く金メッキし、穴をブロンズの小さな管で補強したビーズ玉が発見された。

ウル王墓からも、このような低コストの大きな玉と共に、銀メッキした幾つかの玉が、最も大きくて豪華な王墓から出土した戦車に繋がれていた牛の手綱飾りとして出土している（三・七八～七九頁）。

前二〇〇〇年頃のテローで、首飾りの構成要素が判るアラバスター（alabaster・雪花石膏）製小像の断片が出土している。

それは首の周囲に一連の小さな窪みをつけ、そこに紅玉髄、ラピスラズリ、トルコ石、金メッキ（酸化して緑色となっている）した銅を嵌め込み、正面が三段となっている。互いに色の異なるビーズ玉が中央の大メダルの両側に左右対称にかけられている。

前二〇〇〇年紀初頭のスーサでは、長さ約十九㎝の瑪瑙、紅玉髄、ラピスラズリ、金でできた首飾りが出土している。この首飾りは、中央に大型で白色の模様をつけたインダス特有の腐植ビーズがかかげられている。又金のビーズには軸と平行に畝（うね）模様がはいっているものと、直角にはいっているものがあるが、直角方向のものは、この時代に特有なものと考えられている（三・一四五頁）。

次に同時期のテローで出土した、長さ約十六・五㎝と約十一㎝の首飾りがある。そのうちの一つは腰に貝殻の輪で出来た帯をしていた少女が埋葬された墓から出土したものである。一つは瑪瑙、紅玉髄、水晶、ラピスラズリからなり、今ひとつは紅玉髄と高純度の水晶、ラピスラズリで構成され、それぞれ鑞（かん）で小さなレンズ状の宝石をぶら下げている（三・一四六頁）。

又同時期のメソポタミアでは金で作った、女神ラマを表す一対の護符が出土している。それは信者と高位の神との仲立ちをする下級の神で、両手を挙げて祈祷の仕草をしている。

この時代になると、上質の石を加工した小さな護符は、流行しなくなったようである（三・一四七頁）。

前十三世紀～前十二世紀のマリの墓からは男女の区別無く大量の装身具副葬品が検出される。

一三三号墓出土の長さ約四六㎝の首飾りには、印章彫刻で需要の多かった瑪瑙、トルコ石、石英、オニックスのような硬い石が用いられている。

当時最高の贅沢品は、紅玉髄やラピスラズリのような宝石を用い、ビーズ玉や、凝った細工の金の座金と組み合わせたものであった。尚ビーズ玉のサイズは様々であったが、初めて切り子の偏菱形が出現する（三・一五五頁）。

同じくイヤリングも同時期のマリの墓から出土しているが、銅を多量に含んで壊れにくくなっている赤い金の素材で作られている。環は開いており、薄い金の半球を溶接した、直径が殆ど同じ小球で房が構成されている。

前十三世紀末のマリの墓からの検出数からして、当時愛用されていたもののようである。各耳に二個から三個つけた遺骸も発見されている。

一方軟体動物の貝殻製指輪も見つかっている。それは当時、西はユーフラテス中流域から、東はザグロス山脈に至る地域で尊重されたものである。この時代のマリの墓からも同じような指輪が見つかっている。直径二・五㎝長さ一・四㎝、一組の葉脈を思わせる切込みが爪の中心から出ているものとか、恐らく色付の素材が挿入されていたであろう殻斗を真中に持ち、二つの点刻した円がそれを取り囲み、それを平行線で細い筋をつけた丸い帯で区切ったものがあり、今一つのものは先に述べたものと同じく一組の葉脈を思わせる切り込み線が中央から出ている。

貝殻製指輪の空いた穴にはよく瀝青の黒ずんだ痕跡が残存しているものがある（三・一五六頁）。

カスピ海の西南、アゼルバアイジァーン地方のハッサンで、前一〇〇〇～前五〇〇年頃の、メディア王国時代の長さ八㎝の黄金製葡萄状首飾りが出土している。

西アジア・中央アジア方面は葡萄の原産地であり、これと関係しているものと思われる。

イラン西端クルディスタン地方のジウィエーで、前八世紀に該当する、おびただしい量の金銀の遺物が見つかったが、そのなかに、腕輪の正面中央に輪をはさんだ上下に獅子をそれぞれ二頭対置し、輪の両端にもやや大形の獅子を装飾した黄金製腕飾りが出土している。

イラン高原は獅子の棲息地であり、獅子の石彫りも極めて多い。

同じくジウィエー出土遺物の一つに、右手用の黄金製指輪付甲飾りがある。指輪は薄い黄金板を延ばして作り、中央に細粒文を巡らし、上下周縁には鎖状の金線を蝋付している（四・図版十四、一一六～一一七頁）。

前七一七～前七〇六年のコルサバード（チグリス川上流、ニネベの北にあるアッシリアの都市遺跡）で、城壁にある七つの門の礎石上部や、壁の基部を覆う薄い砂の層から、多くの磨耗痕のある、吊り下げて首飾りとして使用できるよう穿孔した多数のビーズ玉、護符、宝石、貝殻等が発見された。これらは紅玉髄、瑪瑙、ラピスラズリ、その他様々な硬い石で作られており、フランスの

オリエント学者ヴィクトル・プラスは、住民が門を建設する際に宗教的儀式を行って、身に付けた装身具をはずして護符として砂になげこんだものだといっている（三・一七七頁）。

前六二五年～前五三九年のメソポタミアでは、円筒印章では封印することが出来なかった、羊皮紙やパピルスに記されたアルファベット（単音）文字の為のスタンプ印章が復活した。このスタンプ印章は、硬い石や玉髄のような宝石をカットして作られた。出土印章には祭壇形の長方形の台座が描かれ、そこに角のある龍ムシュフシュ、すなわちバビロンの守護神マルドゥクと、その息子で書記の神ナブの随獣が横たわるが、台座には二神の象徴である鍬と短剣が載っている。

又エジプシャンブルーといわれる、青いガラス質の人工素材をカットした、首を後ろに向けた鴨形の鑵（かん）を持つ直径四・五㎝のスタンプ印章も出土している。このスタンプ印章には、マルドゥクとナブの象徴の前で祈る祭司と、その背後に生命の樹を思わせる棗椰子（なつめやし）の木が描かれ、神シンの象徴である三日月が上に刻まれている。

この素材は当時殆ど使用されなくなった、ラピスラズリを模したものである（三・一八二頁）。

アッシリア人に見られた多色装身具はペルシャ期にも見られる。首飾りは金と宝石、例えばラピスラズリ、トルコ石、エメラルド、石英、碧玉、瑪瑙などを組み合わせたものが多かった。これらのビーズ玉は紡錘形か円形をしたものが大半で、アケメネス朝時代の金のビーズ玉は溶接した粒の列をつけた環から構成され、それは中央の列から離れるほど小さくなった。

イランでは、前六世紀～前四世紀に瑪瑙、紅玉髄、石英、金のビーズ玉で作られた首飾りが出土している（三・一八九頁）。

古代エジプトでは死者の傍らに護符を置く習慣があったが、前一〇〇〇年紀から、その着用が一般化した。

護符の形は多種多様であるが、最も一般的なものは、「健全な」あるいは「完全な」という意味の「ウジャト」な目であった。これは回復する充足状態を象徴するもので、この護符を携行した死者は、自分の復活を確信し、黄泉の国で自分を取り戻すというものであった。

この典型的なエジプト風製品が、前六世紀～前四世紀のスーサで出土しており、エジプトがペルシャ領だったという事実を思い出させる。

材質は明るい緑色のファイアンス（石英フリット）である（三・一九二頁）。

前一世紀～後一世紀のバビロン、ヒラーのネクロポリスで、セレウコスのギリシャ勢力に代わったイラン起源の勢力であるパルティア時代の墓から見つかった、女神イシュタル像がある。

これは金属と色石からなるメソポタミア古来の伝統の

複合彫刻に、ギリシャ風リアリズムである豊満な裸体女性を組み合わせて作られている。髪の上にある三日月は、ギリシャ人がアフロディテの名で崇拝した金星と同一視した、女神の星としての性格を表している。

その臍と目を象嵌したルビーは、最近の分析により、ビルマ産の可能性が高まった。これが事実ということになれば、最古の西アジアと東南アジアの交易となる（三一一九九頁）。

むすび

大河のもたらす水と肥沃な泥、及びそれを受け入れることができる広大な平野は、灌漑技術の開発により、太陽の恵みを享受できる穀倉地帯に変わり、その穀物余剰はメソポタミア地方に様々な物資・情報・技術を集中させる原動力となり、人口の増加もあって、世界最古の文明が発生した。

しかしその恩恵を受けることができたのは一部支配者階級のみであり、やがて彼等の限度を超えた欲望の結果が、文明発生の源となった農村人口の減少と田園地帯の荒廃をもたらし、塩害化現象も発生して穀物生産高にかげりが生じるようになる。

その為、外部勢力である中部メソポタミアを中心とするアッシリア帝国が成立する。以後バビロンでカルデア王朝が建てられた時期もあるが、何れも農村地帯を軽視し、軍事力による占領地拡大と搾取の増大という政策により、早急に権力者の願望を満たそうとそうとしている。これは一時的な繁栄はもたらすが、一般大衆の負担は増大し続け永続しない。

その結果が前五三九年にカルデア王朝に代わって、アケメネス朝ペルシャがバビロンに入城した時の大歓迎となり、又そのペルシャも前三三〇年モスル近くのアルベラでアレクサンドロス大王との決戦に敗れ、今度は大王の支配下に入る等、他民族による支配が続くこととなる。

以後メソポタミア文明は姿を消し、それはギリシャ・ローマ社会とオリエントに受継がれることとなる。

そのなかで玉文化の動きを見れば、良質な原石が全く見られないにもかかわらず、豊富な穀物を見返りとしてラピスラズリ、紅玉髄に代表される様々な素材を入手し、金、銀、銅、錫等金属製品の流入もあって、華麗な製品を上層支配者階級に提供する。これは権力者のみが使用できたことは、時期別・地域別の遺物出土状況と、権力者の所在地が一致することからも明らかである。

とはいっても、文明後半の前十三世紀～前十二世紀のマリの墓の副葬品に見られるように、下位支配者階級向けと思われる製品も見られるようになる。

その使用方法は装身具・威信財という、きらびやかさを誇る面と、祭祀・呪術・信仰に用いる面の双方があったようである。

参考文献

一、新村　出『広辞苑』第三版・一九八七年
二、小川環樹他『新字源』改訂版・二〇〇四年
三、松本　健他『メソポタミア文明展』二〇〇〇年
四、原田淑人『古代人の化粧と装身具』一九六三年
五、Denise Schmandt-Besserat
「FEASTING IN THE ANCIENT NEAR EAST」
『Feasts』

以　上

祝出版

“歴史に魅せられて”　話題沸騰！好評発売中

独断・偏見を怖れず歴史の常識に斬り込んだ異能集団が放つ
論考・エッセイ集　史遊会編、彩流社刊　2,800円＋税

Ⅰ. 歴史に人あり　Ⅱ. 歴史に証あり　Ⅲ. 歴史に論あり　Ⅳ. 歴史にドラマあり

お申込みは
有力書店
又は直接下記
出版社へ
彩流社
03-3234-5931

日曜歴史家による
歴史エッセイ20編

相原精次　新井宏　太田精一　鯨津海游　島隆子　瀧澤中　宅見勝弘　千坂精一　中山喬央　鍋屋次郎　三戸岡道夫　隆　恵　他

短歌

行雲流水（九）

石黒修身

二千五年二月のエジプト紀行詠十八首他七首

わが夢のひとつ叶いてサハラにて三つ並べるピラミッド仰ぐ

ギザの三大ピラミッド、クフ王、カフラー王、メンカウラー王が並ぶ

空を割き砂漠に屹(た)立てるピラミッド太古を偲ぶ謎はてしなく

ギザに立つ大ピラミッドその彼方サハラは遥か西の涯まで

夫婦して乗るのかと言う顔付きでサハラの駱駝やれやれと立つ

ギザの大ピラミッドの周辺には、観光客相手に、二人一組で駱駝に乗せる駆者の一群が屯している。ひとつ瘤の故か乗り心地は頗る悪いが、駱駝の背から眺めるピラミッドはやはり圧巻である。駱駝は従順に駆者に操られているが、無表情の顔はやはり哀しい。

駱駝に騎(の)り砂漠の陵を巡邏するポリスの孤影しばし動かず

群がれる観光客を睥睨し何思うらんスフインクスは

怪異なるスフインクスに眞向えば地平のホルスが厳かに顕つ

悠久の歴史の流れ滾々と青きナイルを航く船に居る

遥か来てナイルの岸に佇めば落暉は赤く流れに滲む

黄金のマスクが秘めるいにしえの夭きファラオの非業の最期

ツタンカーメンは前十四世紀エジプト第十八王朝の王で十九才の若さで死す。病死か暗殺かその死は謎に包まれていたが、最近行われたミイラのCTスキャン調査では、殺害の説を裏付ける証拠は見当らなかったと言う（二〇〇五年三月ロイター通信）。調査団長は、これ以上王の墓を乱すべきでないので、調査は打ち切るべきと語ったと言う。
黄金のマスクは、カイロ考古学博物館に展示されている。

神殿の壁に残れるレリーフに太古の美女の面差し儚な

ルクソールのデンデラ神殿にクレオパトラのレリーフが刻まれており、シーザーとの関わりが表現されている。

コーランの声唱微かにたなびきて覚醒幽けきルクソールの朝

知らざりしナイルの歴史に触れしとき旅人われは饒舌となる

浅黒きカイロの男よ汝の眸に宿る翳りにわれは惑えり

遅延して発つ時刻知れぬエジプトの寝台特急「ナイルエクスプレス」

カイロ発三時間位遅れても、何のアナウンスもなく、ひたすらホームで待つのみ。仕舞には「アラーの神のお告げを持つしかないのか」とジョークも出る始末。

ことごとにチップをせがむエジプトの貧しき民に世情を覗たり

値切るほか買う術知らぬ旅人が群がり漁さるカイロのスークで

中東の盟主たりとうエジプトの隠し切れざる貧しさを知る

今さらに資本の論理糺すのか乗っ取りのモラルと手法の是非を

Tシャツをぞろりと被り若き企業人乗っ取りのモラルを饒舌に説く

独裁の陥穽に墜つ遺されし家憲を守りし裸の首領は

「愚か者死すべし」などとう平積みの本を横目に文庫本購う

鎌倉の瑞泉寺への通い路媼の小舗と平山邸と

「立原」の奥つ城建ちての四半世紀瑞泉寺詣う黄梅の咲く

父ぎみの遺せし文を世に出せる骨太の同人逝く冬を寡黙に

まんじ同人紙透寛夫氏

短歌二十首

北よりの使者

曽根竣作

いくたなる災ひの年浄化せよつごもりの夜白きもの舞ふ

黄昏のややに伸びしか午後五時の駅舎の椅子に日差し泳げり

思はざる旧知の君に逢ひし宵裸梢にかかる夕月淡し

昏れなづむ冬の岬のひとときを花散らすごとかもめ翔び交ふ

いちめんに蠟梅香るみ寺なり彼の世この世の区別もあらず

夕虹の仄けく落つる冬田より白の原初か鷺翔び立てり

けふ在るを在るとし思へ旧友の脳血栓に斃れしを聞く

「運命の神は女神」とマキァベェリその気まぐれがわれの宿命(さだめ)か

たまきはる命なりせば大寒の朝の空気を胸ふかく吸ふ

滅びまたひとつの美学、年をまたぎ高坂(かうさか)氏のローマ衰亡史読む

夜の更けを寒の牡丹(ぼうたん)いろ冴えてわれが怠惰のひと口を糾(ただ)す

午を目ざめ祝界に入りし黒揚羽夢のつづきの坂上りゆく

西の空晴れゆくが見ゆイベントの一つ終りて帰る車窓に

円錐にかかれる橋下(けうか)鏤めて車列のライトは炎(ひ)の川をなす

吃水ふかく運河をい航く砂利船の艫に濯ぎ物白くはためく
握手せる君の手の平冷たきに北よりの使者と思う月の夜
公的資金にやうやく息するわが母行骨身削りし杏き日かへす
陽関を出づればひろき砂の波単于の植うる刀きらめきて
花芒たそがれどきに際立ちて山ふところは銀いろに光る
遠つ祖先いかなるひと生遂げつらむ湘々湖南にわれは生き継ぐ

「ろかいゆ」より（十四行詩三題）

松下壽男

草いきれ

俺の背中でせみどもが
つくす命をみせびらかすが
金管楽器となりはてて
時はうつろになりひびく

俺は頭も空になり
腹からのびた喉だけが
胃酸の臭いとまぜこぜに
おまえに言葉を吐きかけた

暑さに中身もとろけだす
夏にすべてが管になり
俺はおまえにそそぐ管

なるほどおまえは太い管
俺の胸で身をゆすり
くだらないなどとしゃれのめす

台風情報

雨が降りはじめて
君は口をつぐんだ
その目は僕を見つめたまま
じっと雨音を聴いている

僕も口をつぐむ
言葉で耳をふさがぬよう
ほほえんで
目と目がうなずく

行き交う言葉にひとつの夏が甦った
曇りはじめた硝子窓に
季節が疲れて積もっている

ねえ君しばらく耳をすまそう
二人を包んで世界は今
雨の中であらゆるものが音をたてる

朝

ゆらぐ炎をゆれめぐる
闇と光のあやなした
文字と白地の曼陀羅に
ひたすら紛れていたのだが

あくびまじりのためいきが
あえぐ明かりを消したとき
しろしらひかる頁から
朝まざまざとあらわれて

今おまえのまえにたつ
俺とおまえのへだたりを
黄色いものが縄れていくが

ほらいちょうと
さしだすおまえのてに俺は
ぎんなんをおしつぶす俺

ハート・トウ・ハート

第一話　サマータイム

松下壽男

♥

一九五一年（昭和二十六年）の初夏、オハイオ州コロンバス郊外の空軍基地は今日も暑かった。

一日の退屈な練習も終わりに近づいてきた。この曲も、もうすでに仕上がっている。

「ツエイイイ！」

と、エルヴィンは小太鼓に連打を入れた。すると面白いように金管が跳ねるのだ。今度は大太鼓のペダルを小刻みに踏みつけた。木管がうねる。楽隊がぐいぐいと乗りだした。彼は指揮者を見た。

（しまった）

中尉は苦虫を噛み潰したような顔をしてこちらをにらんでいる。エルヴィンはおとなしくドラムを叩き続けた。曲が終わった。

「エルヴィン！」

中尉がどなった。

「どうして譜面にないスネアのロールを入れたんだね」

「はい、中尉殿、手が滑ったのであります」

楽隊の黒人仲間は顔を見合わせ白い歯を見せ合った。

「ではバスドラムの三連符は？」

「はい、中尉殿、足が滑ったのであります」

黒人たちは堪らず笑い出した。白人の楽隊員も吹き出して皆が足を踏み鳴らした。

「まあ、よろしい。来週のチャリティーのために体調を調えておくように。では解散。ただし・・・」

指揮者の中尉には、まだ二十歳そこそこのエルヴィンが稀に見る逸材であることは十分にわかっていた。譜面通り百分の一秒のずれもなく正確にリズムを打ち続けることさえできるだろう。コンサートではいつも完璧な腕前を見せてくれるのだ。だからといってここは軍隊なのだ。練習中とて楽譜は命令にも等しい。まして極東では

友軍が朝鮮戦争を戦っている最中なのである。

「エルヴィン、お前は罰としてこの書類を陸軍基地の新聞課まで届けること」

（ああ、またやってしまった。非番の週末は外出許可を取って街のクラブで仲間と徹夜で演奏するのに。譜面なんて煩わしいものにとらわれずに思いっきりジャズがやれるのに。今、もう少しで新しく編み出した打ち方が身に付きそうな時なのに）

もそもそとドラムセットを片づけるエルヴィンに仲間たちはからかいの声を掛けながら去っていった。エルヴィンは忌々しげに茶色い書類袋を睨むのだった。

陸軍基地の入り口にエルヴィン・ジョーンズがジープを乗りつけた時には、すでに九時を回っていた。

「ジョーンズ上等兵、空軍基地よりコンサートに関する記事の原稿を届けにまいりました」

新聞課の受付で三度まで怒鳴ってみても、誰も出てはこなかった。彼は所在なく辺りを見渡した。奥に並んだ小部屋の前に引っ越し荷物が山〻積まれた一角があった。そこの扉には、

『顧問ダニエル・C・インボーデン中佐』

と、走り書きした紙の札が貼られていた。中からモゾモゾと音がする。近寄ってみると荷物の大半は書籍や写真のパネルであった。その一枚に彼の目が止まった。

一面の焼け野原。見渡す限りの瓦礫の中に一体の石像が建っていた。背中に荷物を背負い、手には本を持ち、身をかがめて、しかし二本の足は力強く歩んでいるのだ。それは、薪を背負って読書をする二宮金次郎の像であった。エルヴィンの耳にはその力強い足音がビートとなって聞こえるようだった。背中の焚き木の軋みや本のページのこすれなどの全ての微かな音までもがそれぞれのリズムを奏で大きなうねりを発しているように感じられた。それは絶え間ない吹きっ晒しの風の音に決して負けてはいなかった。

「ヒーズ・クール！（こいつは凛々しいぜ！）ホワイ・イズ・ヒー・ウォーキン？（何でこいつは歩いているんだ？）」

「ビコウズ、ゼアラ・ローズ。（それは、道があるからさ。）ヒーズ・ウォーキン・オン・ザ・ヒューマンロード。（彼は人道を歩んでいる。）チェイシン・トウ・ザ・ユニヴァーサルロード（天道を追い求めながら）」

「チェイシン・トウ・ザ・ユニヴァーサルロード！ダッド、イッツ・クール！（宇宙の神様のおっかけたあ！おっさん、そいつはいかすぜ！）

ドアが開いた。中からパイプをくわえた白髪の初老の男が出てきた。

「いや天道だ。もっともパイプをくわえた発音じゃあ『アール』も『エル』もないだろう。それに『道』でも『神』でも大した違いはなかろうて。わしはインボーデン中佐

だ。今週日本から合衆国に帰って来たばかりだ」
エルヴィンは飛び上がるようにして立ち上がった。(しまった、またやってしまった)
「失礼しました、中佐殿。ジョーンズ上等兵、空軍基地より書類を届けにまいりました」
敬礼をした後、エルヴィンはおずおずと封筒を差し出した。中佐はそれを受け取ると、無造作に荷物の山の上に放り投げた。彼は、はらはらしていた。しかし中佐の目は笑っていた。彼はデトロイトの近郷にいる父親の眼差しを思い出した。
「そうだ丁度いい、若造、一緒に飯を食いに出ないか。その様子じゃあ、お前も腹ぺこだろう」

♥♡

エルヴィンを助手席に乗せた車は、黒光りした軍用車であった。長々とせり出したボンネットの横手にはプレスの旗がなびいていた。基地の中はもちろん、公道でさえ他の車が道を空けるのだ。皮革シートに深々と座ったエルヴィンは、愉快であった。しかも今夜は、きっとうまいものにありつける。
(イッツ・クール!)
ボンネットの真ん中の円い形をしたラジオからは、チャーリー・パーカーの「サマータイム」が流れ始めた。
彼はアドリブのフレーズに合わせて膝を叩きだした。
一方インボーデンは、六年前の暑い夏のことを思い出していた。日本占領連合軍最高令官マッカーサー元帥の息のかかった一団の中でもマスコミの専門家として厚木に降り立ち、占領軍の新聞課長の任に就いたのだった。GHQ本部の一角に掲げたプレスの旗は言論の自由と民主主義の旗印であった。あれから六年、果たして自分の描いた理想は実現したと言えるのだろうか。元帥の突然の解任によって、自分も任を解かれた今は、長いようで短かった年月を省みる毎日であった。
自分の軍人としての仕事はもう終わったのだ。幸い自分の力を買ってくれる新聞社はいくつもある。元帥を大統領候補に擁立する動きもあるなかで、自分にも何らかの声がかかってくるかもしれない。『しばらくは情勢をみながらのんびりと第二の人生の準備をしてはどうかね』前線からも中枢からも遠く離れた基地の顧問という役職は、そんな含みのある人事であった。
それにしても、人の仕事とはなんだろう。どんなに理想に燃えた仕事でも、終わりは突然やってくる。では人の仕事とは、なしとげられたことがらで測るものなのか。それともなしとげられなかった志で測るものなのか。自分が日本でしてきた仕事とは果たしてなんだったのだろう。
車はコロンバスの街が見下ろせる高台のレストランの前に止まった。
ボーイが席へ案内するまでの間、エルヴィンは周囲を見回した。所々に背の高い鉢植えが置かれた広い店内は、時々ダンス・パーティーにも使われるのだろう、壁側に小さなステージがしつらえてあり、ピアノとドラムセットが置かれていた。
(ああ、叩きたい!)
席を埋め尽くす客の中には軍服姿も見られたが、黒人は一人もいなかった。広いガラス窓にテーブルの明かりが映り、その向こうには街の夜景が広がっていた。
腰を下ろすと中佐が若いエルヴィンに質問をした。
「あの写真を見た君の感想は上出来だった。君は日本に行ったことがあるのかね」
「いいえ、ありません、中佐。でも隊の軍曹は、恋人にするならフランス娘だが、嫁にするなら日本の娘が最高だと言っています」
「そう、日本の人民は、優しく、礼儀正しい人々だった。」
「中佐殿は、日本でどんな任務に就いていたんでありますか」
思えばインボーデンは戦時下から日本の世論と関わっていたのであった。
『日本の人民の良心に訴えるのだ。そして軍部暴走の無益で悲惨な戦争を終わらせたいという厭戦世論を作り上げるのだ。しかし革命思想を煽るものであってはならない。あくまでも日本の伝統的な良心に訴えるのだ。』
降伏勧告のビラを製作するにあたっての元帥の指示は明快であった。とはいえ日本人民の良心が何を拠り所にしているのかは難解であった。彼らは潔癖なほどの倫理感をもち、しかも同胞のためには喜んで命までも投げ出す国民である。にもかかわらず明確な宗教をもたないのであった。結局彼らの倫理感は上からの教えではなく伝統的な共同体のなかで培われてきたものだと結論づけるほかはなかった。
「中佐殿、それは、我々黒人もおんなじであります」エルヴィンの小さな目は輝いていた。
「なるほど」
インボーデンは大きくうなずいた。
となると、コミュニティーとはなんと素晴らしい教育機関ではなかろうか。そう考えた時、頭に浮かんだのが村の学校に立つ二宮金次郎像の写真であった。
日本の伝統的な良心は金次郎に象徴されているのかもしれない。臣民金次郎は日本軍閥の世論形成にも使われてきた。そのことからも金次郎の存在が革命思想を煽るものではないことは明らかである。するとそれまで謎めいていた日本軍の世論操作の戦略が、一農民を偶像化する軍閥の策略がはっきりと読めたのだった。よし、これしかない。我々は『日本人民よ、二宮金次郎の精神に還れ』と語りかけるビラを大量に刷って、B29から撒い

たのだった。
「それで、どうなったのでありますか」
「その作戦が当たっていれば、広島と長崎に原子爆弾を落とさずに済んでいたかもしれん」
占領後の調査で分かったことには、驚くほどの識字率の高さであったにもかかわらず、我々のビラは読まれもしなかったのである。
「なぜだと思うかね」
「英語のままで撒いちまった！」
「ハッハッハ、まさか、そこまで、どじではないぞ」
それは、ビラに触れれば手が腐るという、子供だましの近所の噂のせいだったのだ。日本の共同体意識はマスコミをも寄せ付けない強さがあったのだ。情報すらも自給自足できる村々には、マスコミなど存在しなかったのかも知れない。日本の軍部はそれを熟知していた。軍部は物不足に乗じて、世間に流通する情報を極端に減らしていった。それでも日本の国民には、大本営発表と、共同体を駆け巡る噂話で十分だったのである。戦時下には我々の世論戦略は日本軍に歯が立たなかったのである。
「中佐殿、私だったら、ビラなんか使いません。音楽を使います。サウンドなら直接ハートに伝わります」
インボーデンはむっとした。しかしあれ以来様々に頭の中でシミュレーションを繰り返してきた者にとって、それも一つの可能性だったのだ。事実、戦争に終止符を打ったのは天皇自らが国民に降伏を告げる音声であった。だが、うなずくには彼のプライドが許さなかった。ペンは剣よりも強し。しかし音楽はペンよりも強いというのか。
「そうかい、若造、じゃあやってみな。丁度あそこに太鼓も並んでいる。めしの皿も並んだ。さっきオフィスで見た写真、あれが金次郎だ。飯を食ったら金次郎をわしのハートに伝えてみろ」
インボーデンは手帳にメモを書き、ページを千切ると、それをボーイに手渡した。エルヴィンは自分の両手の平でバシバシと頬を叩いてみた。それから大きくうなずくと勢いよく敬礼した。
「イエッサー、イッツ・クール！」（わくわくしてきたぜ、こんなに豪華な飯にありつけ、おまけにお客の前で思う存分太鼓が叩けるなんて！）
彼は、二宮金次郎の像の写真を思い浮かべた。それは頭の中にはっきりと焼き付いていた。聞こえる。足のビートが。焚き木の軋みが、ページのこすれる音が、風の音が。ナイフとフォークを持つ手が自然にリズムを打った。体が揺れ、つま先が弾んだ。
初老の中佐は、そんな若者の姿を匙を持ったまま呆気にとられて見ていたが、やがて頼もしさを感じてきた。黒人の若者のミュージシャンとはこういう生き物だったのか。岩のように大きく鋼のような強じんな肉体と胃袋

を持ちながら、何とも繊細な動作をするものだ。口から出るぶっきらぼうな言葉に嘘はない。こんなやつこそ何かやってくれそうな気がするものだ。
「レディース・アンド・ジェントルメン。只今から特別に、ドラムの即興演奏をお聞かせいたします。演奏するのは、エルヴィン・ジョーンズ上等兵です。曲は『ジャイアント・ステップス・オブ・キンジロー』・・・キンジローて一体だれだい？」
おどけたボーイのアナウンスに店内は大笑いした。インボーデンも苦笑いをしてしまった。
（まあ仕方あるまい。どうだ、若造。お前のドラムでこの雰囲気を変えることができるかい）
エルヴィンはナプキンで口を拭うとそれをテーブルに投げ捨て、拍手の中を平然とステージに向かった。ドラムセットの前に座ると、彼は備え付けのばちやブラシで太鼓やらシンバルやらを一通り軽く叩いて、位置と皮の張り具合を調節した。アナウンスの後一度静かになった店内も、また元のように話し声が満ちてきた。
（無理もない。音楽を聴きに来た客ではなく、ただ飯を食いに来た客なのさ）
インボーデンは成り行きを見守った。
エルヴィンは何食わぬ顔で首を左右に曲げたり手首を振ったりして体をほぐしていた。そしてしばらく天を仰ぐようにして呼吸を整えると、手足を痙攣するように動かしだした。左右に小刻みに揺れるその顔は別人のように険しかった。口からは、『ッエッエッエ』という、唸りとも叫びともつかない声が発せられている。ステージを見ていた者の目は彼の姿に釘付けになった。『シャラップ！』と小声で周囲に沈黙を促す者もいた。まだ曲は一音も発せられてはいなかった。
すると突然怒濤のようなタムが響き渡った。続いてシンバルの、バスドラムの無秩序な響きの集合体が鳴り響いた。
インボーデンには、いやそこにいる軍人ならば何を表現しているかがすぐにわかった。その絶え間ない爆撃は町一つ焼き尽くすまでは終わらないのである。一般の客も皆恐れの表情を見せていた。まずは客全員の度肝を抜いて、一つの感情に染め上げてしまったのだ。最早彼らは意のままに操作される大衆である。これはマスコミの定石だ。（若造、大したやつだぜ、おまえは！）
やがて突然の沈黙がやって来た。しかしそれは無音ではなかった。微かな音が響いていた。寂寥感のある音であった。ワイヤーブラシがシンバルやスネアを擦りだす音の何と侘びしいことだろう。（これは焼け跡の表現だ。さあ序章は整った。いよいよ金次郎のお出ましだ）
インボーデンの耳には凛々しく近づいてくるマーチのリズムが聞こえてくるようであった。
しかしマーチは響かなかった。ハイハットシンバルで

さえ緩急をつけて妙にたどたどしいビートを打ち続けるのであった。それに被さるようにシズルを効かせたサスペンデッドシンバルがパルスのような小刻みな響きを叩きだす。スネアドラムも違ったリズムで鋭いパルスを送り出してくる。バスドラムが計り知れない間合いでズンズンと鳴り響く。エルヴィンは蛸のように伸びた両手両足を神速で振り動かし、『ッエッエッエ』という声を絶え間なく搾り出した。顔を振るたびに玉のような汗が飛び散った。

それは快いという種類のサウンドではなかった。いつまでも割り切れない腑に落ちないリズムが幾重にも重なって、聴く者の耳を、体を、心を揺らすのだった。

インボーデンはその音の塊の前に立ちはだかりながら、手が、足が、体が勝手にサウンドに身を任しているのを認めずにはいられなかった。快いリズムを求めていた頭だけが取り残されていた。彼は、頭でリズムを測るのをやめた。素直にサウンドに身を任せた。様々な音色の多様なリズムの音の重なりは、巨大な生き物の呼吸のようにうねりを生み出していた。そのうねりは少しずつ大きく確かなものになっていった。巨大な生き物が立ち上がり動き出した。足音などという物理的な音ではなかったのである。

エルヴィンは多様なリズムを織りなして音の塊を造形し、命を与えて、立ち上がらせ、うねるように歩ませているのだ。

（まいったぜ、若造。俺の完敗だ。）

しかし何と幸福な敗北であろう。インボーデンは最早魂までもサウンドに任せていた。揺さぶられる魂の奥底から忘れ去られていた様々な記憶が吹き出した来た。それらの記憶は映像と情感を伴っていた。心一杯に懐かしさが広がった。永遠の時間の懐に抱かれているようだった。幸せだった。

エルヴィンは我に還った。

（とうとう打てたのだ。俺のめざした打ち方が。理屈で手足が動きゃあ苦労はいらない。どうやって打てたのかもわからない。しかし俺にはできたのだ。金次郎のせいだろうが、上等なステーキのせいだろうが、そんなことはどうでもいい。大切なことは次もこうして打てるかってことさ。俺は俺の力で次もこうして打てるように生きていかなくちゃいけない。ただそれだけさ）

彼はコーダを決めにかかった。狂ったように激しくドラムセットを打ち鳴らし、皮も破れんばかりにマレットでタムを連打した後は、手足をぴたりととめて、シズルの鳴りやむのを待った。その音が正に消入ろうとする時、つかの間の永遠を愛おしむかのように、ブラッシュがハイハットシンバルを擦ると、やがて本物の沈黙が店内を包んだ。エルヴィンが立ち上がると店中から割れんばかりの拍手が沸き起こった。

初老の中佐も夢中で手を叩いた。浴びるような汗をかいて席に戻ってくるエルヴィンを立ち上がって出迎え、高々と手をあげて黒い大きな手のひらに打ち付けた。

「ユー・アー・クール！」

彼の目にはうっすら涙が浮かんでいた。

「おい、若造、今度はわしのソロをを聴く番だぜ！」

年甲斐もなく思いの丈を吐き出したい気分になっていた。

♥♡♥

世論操作のためには操作しやすい大衆を育てることが鉄則である。焼け跡の東京で我々は真っ先にプレスコードを敷いた。いわば日本のマスコミを占領したのである。その上で日本の言論統制と出版統制を劇的に緩和した。出版界は花盛りとなった。我々は、軍国主義の復活と共産主義の台頭には目を光らせた。軍国的な論調はあっという間に影を潜めた。そして言論界は見事に民主主義の色に染まった。元帥は喜んだ。しかしインボーデンは腑に落ちなかった。人の信念とはこんなに簡単に変われるものだろうか。ある個人の変節ぶりには虫酸が走ったほどである。これはきっと過剰適応に過ぎない。しかし過剰に適応する言論人とは何者たちだ。インボーデンは密かに彼らの生い立ちや経歴を調べさせた。すると彼らは地方出身者であり、優秀な成績で高い学歴を修め、しかも出身地とは最早つながりを断った知識人であった。田舎を棄てた、出自をもたない知識人。彼らも大衆の一員だったのである。大衆が大衆を操作する世論。しかし彼らがが過激な革命思想を導くことはないだろう。『マスコミ各紙の論調を見る限り、革命的な共産主義思想が台頭する恐れはないものと判断できます。』毎朝机上に山と置かれた日本の各紙とそれに添えられた英語の要約や報告書に目を通しながら、インボーデンは徒花を愛でる思いで署名のペンを走らせるのであった。

「そいつぁ、ダディ、いえ、中佐殿」

「おっさんと呼んでも構わんぞ、若造」

「おれたち黒人の世界でも白いふりをするやつはいるものです。白いふりをしているうちに本当に白いつもりになっちまう。でも白くはないと気がついた時にはもう戻ることはできなくなっているのさ。おまけにこの世は灰色人なんてものは許しはしない。結局死ぬまで白いふりをして生きていくしかなくなるのさ」

当時のＧＨＱでは、日本銀行の新札の肖像を誰にするかという話が持ち上がった。インボーデンは元帥に進言した。間もなく二宮金次郎を描いた一円札が発行された。

「そいつぁいい」

「見るかい」

インボーデンは、札入れからエルヴィンの親指にも隠

れそうな小さな札を引きぬいて、彼に持たせた。
「なんだ、じいさんじゃないか」
「大成した後の金次郎だ。人民のために力を尽くした一生であった」
「そりゃあ、まるでリンカーンじゃないかい。」
「そう、日本のリンカーンだ」
乱暴な比喩ではある。しかし決して的は外れてはいない。
「研究して、わしはそう認識するにいたった。わしが本格的に金次郎を研究し始めたのは・・・」
占領後の一年間も半ばを過ぎたころ、インボーデンはある地方紙に目が止まった。そこには金次郎の写真が載っていた。占領後金次郎像を撤去する小学校すらあったなかで、紙面を堂々と飾る金次郎の姿には潔ささえ感じた。
新聞とは、世論形成とはこうでなくてはならない。
そんな思いがして早速記事を訳させてみた。読んでみて、彼は報徳社という結社の存在を知った。教団でもないのにきちんとした道徳をもつ、経済的に自立した、伝統的な村に根差した組織であることが読み取れた。しかも一結社が公共事業や公教育ともいうべき活動に取り組んでいることに驚嘆したのだった。日本にも古くから健康な地方自治が存在していたのだ。彼は日本人民の良心の象徴だったのである。日本の世論はそこにある。ぜひ見に行かなければならない。
「それで、どうだったい。ダディ」
「まあ、一服つけさせてくれないか」
白髪頭の初老の中佐は、軍服の内ポケットから革袋を取り出すと、パイプを抜き出し、刻みを詰め、口にくわえてマッチを点した。それを火皿の上にかざすとしばらくの間は炎をじっと見つめていたが、やがてぽつりぽつりと語り始めた。紫の煙を吐きながら。

♥♡♥♡

一九四六年（昭和二十一年）六月一日。当時まだ少佐だったインボーデンは、地元の新聞社の社長と通訳を伴って富士山の見える地方都市にある『大日本報徳社』を視察した。
切石を積み上げたような二本の門柱の向こうには古風な堂宇がそびえていた。正装をした社の幹部や地元の村長らが、門の前まで出迎えていた。彼らの中には髯を蓄え、古びた着物を丹精に着こなしている者もいた。顔には深くしわが刻まれ、黒々と日焼けして、土と共に生きてきた人生を感じさせた。彼らはそろって深々とお辞儀をした。インボーデンは、すでに日本の儀礼には慣れていた。度々お辞儀を繰り返す所作には煩わしさも感じていた。しかし彼らは目に涙さえ浮かべていたのだった。インボーデンは感激した。自ら握手を求めた。それを両手で包み込んできた彼らの手の平は固かった。頑固に丸太小屋で暮らし続けた自分の祖父の手の平の感触と同じであった。
報徳社の社長自らが、門と堂宇について説明を始めた。
右の門柱はモラルを、左の門柱はエコノミーを表しているという。この理想は二宮尊徳の思想の中に日本の資本主義の誕生以前に生まれていたという。さらに堂宇は日本で最初の公会堂であるということであった。
大きな瓦屋根と白壁と木の柱で建てられてはいるものの、それは見るからに城郭や寺院とは異なった造りをしていた。二階部分には木枠のアーチ窓が並んでいた。間口を広くとった正面玄関の破風の上には、もう一層の城のような屋根がそびえていた。その軒下にはひときわ大きなアーチ窓がせり出していて、朝の光に輝いていた。その出窓の両端には漆喰で形作られたコリント様式のコラムが慎ましく立っていた。西洋のパブリックホールにも負けるものかという建物の自負を感じた。（人民の結社の手で、行政に先駆けて、しかもこのような田舎町に、理想をもって公会堂を建てたというのか）少佐は建物に向かって敬礼をすると身が引き締まる思いで二つの門の間をくぐったのだった。
「元少佐殿、そのホールは、何席あるんです？」
「それがな、元新兵、中に入るとタタミという草のマットが敷き詰めてある。もっとも靴履きのわしらのために敷物が敷いてあったが。中は吹き抜けになっていて、二階はぐるりとギャラリーなのだ。タタミに足を折り畳んで座るので、多い時には千人が集まったという」
「そいつぁすごい。そんなところで演奏してみたいもんだぜ」
「そうだな、若造。おまえもそのステージに一度立ってみるといい」
インボーデンはそのホールの低いステージでスピーチをした時の心持ちを、忘れることができなかった。広い吹き抜けにはアーチ窓から入り込む柔らかい自然光が満ちていた。顔を上げると真正面には繊細な窓枠で飾られたひときわ大きなアーチがあって、そこから自分に向かって豊かな光線が降り注いでいた。光の束の中央に人物像を納めた祭壇のようなものが見えたが、まぶしくて見つめることはできなかった。堂内には心が洗われるような気が漲っていた。
つづいて机を並べて報徳の講話が行われた。
ブンド、スイジョウ、そしてテンドウ。教えられた言葉はどれも一言では英語に訳せない含蓄の深い言葉であった。しかし一円融合の理想はよくわかった。我々もその理想郷の実現をめざして戦ってきたのだ。それは何と険しく遠い道のりであろうか。しかし彼らは手を伸ばせ

ば届くもののように理想を語る。今や国すら破れたというのに。こうして占領軍の将校を前にしてさえ淡々と理想を語る信念とはどこから生まれてくるのか。彼らは我々の理路とは全く違った理路を理想に向かって歩んでいるのか。

昼は大講堂の脇の瀟洒な建物で心尽くしの食事をとった。その建物は皇族の別荘を移築したものであることを、一人の幹部が顔をこわばらせて説明した。インボーデンは天皇制と軍国主義とは必ずしも一致しないという見解を告げた。報徳と軍国主義とが一致するものではないように。そして全ての日本人が軍国主義者ではないように。しかしつい一年前までは彼らは我々と命を懸けて戦っていたのである。そうなったのは軍国主義にノーと言えないことがイエスであると見做されたからだろう。『わしらはイエスとは言わなかったのじゃ！』今朝の出迎えの涙は、その誠が認められた感激だったのかも知れない。

イエスでなくてもノーとは言わない人格は、善意と思いやりの指導者にとっては頼もしくてありがたい、畏怖をもって対すべき美徳を備えた存在であろう。しかし悪意と非情の指導者にとっては、ただの扱いやすい存在に過ぎない。世の中に本質的に悪なるものを認めない精神は、容易に悪なるものに屈してしまわざるを得ないのだろうか。それとも悪なるものをさえ最終的には善に取り込んでしまうのか。それが可能と言えるのか。

午後の時間を『二宮尊徳全集』四万五千ページの閲覧に過ごしながらインボーデンはこれまで自分が考えてもみなかった論理の地平が広がっているのを感じた。

その報徳図書館の重厚なコンクリート造りの二階の窓からは、報徳社に集う若者たちの授業風景が望めた。彼ら男女の真剣な眼差しや活発に意見交換をする農業実習ぶりに、これはただものではないと思った。

今に思えばその旅行はインボーデンの喜びと煩悶の始まりであった。以来報徳思想の研究が、彼のライフワークになってしまったのである。

その後の五年間、彼の任務は順調であった。日本のマスコミの自由主義と民主主義の論調は板についてきた。

日本の国内情勢は混乱を極めたが、軍事裁判や労働運動などの難しい局面の報道や論説でもなんとか中道を保つことができたのだ。すでに大衆は形成された。世論はそこにある。これが新聞課の公式の判断であった。

しかしインボーデン個人はその判断に内心不満であった。日本の共同体には昔から見えない自治がある。声なき世論がある。それが日本人民の良心が生み出した民主的な文化である。それは経済的にも情報の上でも、自給自足の成り立つ自立した村落に形成された高度な文化なのである。それゆえその世論はマスコミとは無縁なだけなのである。戦時下の日本軍部はこの声なき声を巧に味方につけたのだ。それが繰り返されないと誰がいえよう。

このままではいけない。見えない自治に声を与えなければならない。

インボーデンは報徳思想再発見のキャンペーンを展開しようと各紙に働きかけてみた。しかし、

『とてもＧＨＱ新聞課長のお言葉とも思えません。何を今さら軍国主義の亡霊を取り上げる必要があるのでしょうか』

というのが代表的な返答であった。

「そりゃないぜ。おっさん、がっかりしたろう」

「全くだ。ところが、がっかりするひまもなかったさ」

そのころ戦後の国際情勢は予断の許さないものになっていた。我々の理想の表現でもあった日本国憲法も、たった三年でその平和主義を脅かされる事態になった。朝鮮を戦場にして共産主義との戦いが始まった。反共キャンペーンに精力を費やさなければならなくなったのである。

一方各地の報徳社は食料増産をめざして活発に活動を続けていた。自主独立の草の葉のようなその姿は実に清々しいものであった。インボーデンは独自に青年雑誌に『新生日本は尊徳の再認識を必要とする』という記事を寄せた。

二度にわたる農地改革によって、小作農は自作農へと生まれ変わった。日本の経済は特需景気によって復興の兆しが見えてきた。朝鮮戦争勃発後にマッカーサー元帥のとった対ソ強行姿勢は、合衆国の国益に反するものであると見なされはじめた。自由と民主主義の理想が、アメリカの国益に反するとでも言うのか。しかしほどなく日本におけるインボーデンの報徳思想研究は、個人的なもののままで終わりを告げたのである。そのころ二宮金次郎の一円札も急速なインフレによって巷から姿を消し始めていたのであった。

「それで、日本のリンカーンはどうなっちまうんだい。」

「続きは、オフィスに戻って、話そうじゃないか。日本の写真がいっぱいあるぞ」

二人が立ち上がって店を出ようとすると、ボーイも客も拍手で彼らを見送ったのだった。

♥♡♥♡♥

インボーデンの小さなオフィスは、引っ越し荷物でごった返していた。初老の中佐はその中から写真のパネルやアルバムを引きずり出してきて、体を小さくして腰掛けているエルヴィンの前の机の上に積むのだった。

一面の焼け跡と化した東京、はためく星条旗、雄大な富士山、それらの写真の中でも素朴な農村風景にエルヴィンは強く心を惹かれた。

山頂近くまで耕された段々畑や、まだ雪景色が残る畑を黙々と耕す農夫の姿。たわわに稔った稲の束を力を合

わせて干す家族の笑顔や、整然とならんで行われる田植えや茶摘みの風景。そして草のキャップを被り着物のユニフォームを着てはにかみながら 煬注乏な笑みを浮かべている娘らの、黒髪と黒い瞳に彼は魅せられていた。

「そうだ、おまえに珍しいものを飲ましてやろう」

インボーデンは、戸棚から、小さなポットと取っ手のないカップをとり出すと、缶からモスグリーンの針のようなグリーン・ティーをポットに入れ、魔法瓶の湯を注いだ。辺りにふくよかな香りが漂った。

「中佐殿。私は日本に行きたくなりました」

「そうかい。いいところだろう。だがこの農村風景もこの先大きく変わるかも知れん」

インボーデンは、新茶をすすり、つぶやいた。

すでに報徳社の内部でも変化が生まれ始めていたのだった。国の政策であった農産物の供出をごまかし、闇で売りつけて多額の現金収入を得る者も出てきた。ある者は十円札を襖の下張りにして隠し持っているという噂まで立った。農地改革によって生まれた自作農の中には、報徳社を脱退する者も出てきた。そんな彼らは、闇取引の世界にどっぷりと漬かっていくのだろう。映画やマスコミの報道によって伝えられるアメリカの生活や文化は、貧しい彼らに豊かさへの強い欲求を抱かせた。と同時に、長年培われてきた農村の高度な文化や伝統を否定する新たなモデルをもたらした。それを自由とか民主とかいう言葉で語る知識人らであった。あくまでも自助努力によって自立した生活の実現をめざしていくのが貧しくも志豊かな報徳生活である。しかしそれは目の前に欲望の対象を突きつけられたり、社会や国際情勢の変化によって訳もなく豊かさが手に入ったりする情況の中では、よほどの信念がない限り崩れてしまうことだろう。その後には、利益のみを追求した目まぐるしい産業構造の変化と生存競争、そしてマスコミが駆り立てる欲望によって意のままに操作される大衆社会が出現する。物言わぬ日本の良心が沈黙を続けるならば、それは決して遠い将来の出来事ではないだろう。

「俺たち黒人は、昔アフリカから無理やり連れてこられて奴隷にされても、ソウル（魂）は忘れはしなかった。それが親父や俺たちの誇りです。今では白人たちと同じアメリカ人として暮らしてはいるが、楽しい時にも辛い時にも決してソウルは忘れない。日本人にもきっとソウルはあるはずです」

「日本人のソウルか。ヤマトダマシイっていう言葉があるんだが、こいつはかなり危なっかしい。それより・・・」

インボーデンはこれまでの研究に新たな切り口が見えてきた。

『日本人民の魂』

この言葉が要石のようにそこに納まった。

中佐は、整理したばかりの机の引き出しからボール箱

を取り出すと、中から葉書を一枚取り出し、手渡した。それには、二宮金次郎像の写真と十二行の詩句が印刷されていた。

報徳訓（感謝と誠心の教え）

父と母が結ばれたのは　神神の御心があったからです
私の体があるのは　父母が生み育ててくれたからです
子供らが父母に似るのは　二人の愛があったからです
父母が幸せなのは　祖先が学び働いてくれたからです
私が幸せなのは　父母が善行を積んでくれたからです
子孫が幸せになるのは、私が懸命に学び働くからです
心身が健康でいるのは　衣食住の三つがあるからです
衣食住の三つが生み出されるのは　田畠山林からです
田畑山林があるのは　人民が一生懸命に働くからです
今年の衣と食は　昨年中に生み出しておいたからです
来年の衣食は　今年中に苦労して働いておくからです
年々恵みに感謝して報いることを忘れてはなりません

「この金次郎の教えの翻訳は、わしの報徳研究のスピリッツさ。これのソウルがわかるか。若造」

「それはもう、中佐殿。俺の親父もお袋も音楽好きで、毎週黒人教会で礼拝を欠かしたことあ、ありません。五人の子供の三兄弟は、兄貴のハンクも、サドも、この俺も、皆ジャズ・ミュージシャン。その上全員真っ黒と来ています。もちろん親父もお袋も、その親父もお袋も。ご先祖様は奴隷の頃から働き者で、不自由な身でもバケツの底や洗濯板を掻き鳴らして、日々の苦労を癒していたという話です。お陰でアフリカ生まれのソウルが筋金入に鍛えられて、その血を引いた俺たちは皆元気でソウルたっぷりという訳です。それは全く神様やご先祖様、親父やお袋、それにこのアメリカの大地のお陰で、いつだって感謝しています。だけど、中佐、この教えには農夫やきこりは出てきても、俺たちミュージシャンは出てきませんよ」

「その通り、俺たち新聞屋も出ちゃこない。わしも困って研究したさ。それでわかったことは、田畑山林は心の中にもあるということなのさ。金次郎は心田という言葉を盛んに使っておるが、その言葉で人の心や村の文化を表しておったのだ。だから田畑山林というなかに、文化や環境も入ってるってことさ」

「では、中佐、軍隊は」

「若造、お前には全くまいったぜ。出ちゃこない、軍隊は出ちゃこないんだ。だからおまえは早く除隊して、おまえの素晴らしい音楽で、軍隊のいらない平和な世界をつくってくれたまえ」

「イエス・サー」

と、敬礼をしかけて、エルヴィンは、しまったと思っ

た。すでに窓の外は白んでいたのだ。

「中佐殿、自分は直ちに空軍基地に帰還しなければなりません。ご馳走になりました。太鼓も叩けたし、面白い話をたくさん聞かせていただきました。ありがとうございました。失礼いたします」

「任務ご苦労であった。愉快だったぞ」

敬礼を交わすと、エルヴィンは一目散にジープに飛び乗り守衛所前の一旦停止も忘れて、夜明けの国道を走り抜いた。

「ヘイ、ベイビー、アラスカまでお使いだったのかい」

空軍基地の古参の衛兵がからかってきた。

「こんちくしょう、こりゃ当分外出禁止だぜ」

軍楽隊長のミラー中尉殿はまだ就寝中だ。かといって報告もせず兵営に入る訳にはいかない。彼は隊の練習室で時を待つことにした。すると明かりがついている。恐る恐るドアを開けた途端、

「こらっ、エルヴィン。さてはクラブで太鼓を叩いていたんだろう」

「はいっ、いえ、ミラー中尉殿、自分は今まで陸軍基地の新聞課におりましたのです。実は、」

エルヴィンは唾を飲み込んだ。しかしなんて説明したらいいのだろう。すると中尉の顔がほころんだ。ワッハッハ、

「わかっている。さっきインボーデン中佐に電話で叩き起こされたのだ。お前のことを褒めておられたぞ。それに、今後のチャリティーコンサートの後援を新聞各紙に取り計ろうと約束してくださった。よくやった、ゆっくり休んでくれたまえ」

「ヒーズ・クール！（おっさんも、なかなかやるぜ！）」

「まんじ」季刊発行内規

（発行日）　（原稿締切日〔注〕）

春季号……二月一日……十二月三十一日

夏季号……五月一日……三月三十一日

秋季号……八月一日……六月三十日

冬季号……十一月一日……九月三十日

〔注〕円滑な発行を期す為「一週間前編集長宛到着」に努めましょう。

針の穴を通った駱駝（二）

鍋屋次郎

第二章　嵐の一夜

天正十五年（一五八七）六月十八日、この日の朝、秀吉は前年制定したキリシタン布教許可の内容を変更する新たなキリシタン規制を発布した。

その規制は十一条にわたったが、その骨子は「キリシタンを我国体制内の宗教と認め、入信は本人次第とする。但し高禄の給人については許可事項とする」と言うものであった。

この新しい規制を、高山右近に対して第一号として適用しようとしている秀吉ではあったが、まだ内心「これで良し」という確信はなかった。

彼が恐れていることは、島津征伐でよく戦ってくれたキリシタン大名達が、「キリシタン」として結集することであった。それは、日本イエズス会準管区長バテレン・コエリョの政治介入とも取れる発言に起因している。従って、今朝新たに発布したキリシタン規制は、大名に対するものであったが、果たしてそれで良かったかどうか、甘くはなかったか、迷いと不安を拭いきれてはいなかった。

そしてバテレン・コエリョの許し難い発言を思い浮かべていた。

それは、前年の天正十四年（一五八六）三月十六日、秀吉は大阪城内でコエリョを謁見、その後同年五月四日にはイエズス会に対して布教許可状（バテレンの日本居住許可と布教活動の安全保障が書かれていた）を発していた。

このキリシタン布教許可によって強気になったコエリョは、イエズス会巡察師ヴァリニャーノの忠告も聞かず、秀吉に謁見する都度、キリシタンの政治的基盤を強めた

い一心で
「キリシタン大名全員に秀吉の味方をさせる」
とか
「朝鮮渡航の時はイエズス会で船を出す」
等と、秀吉のみならず日本の為政者が最も嫌うキリシタン勢力顕示発言がなされていた。
日本におけるキリシタン布教が、日本の当時の政治・宗教両面から極めて困難で、且つ、反対勢力から放逐されかねない危険もあることを承知している筈のフロイスも、何故かその発言に同調していた。
この時、秀吉は
「バテレンの正体見たり！」
と感じ、その場では何食わぬ顔をしていたが、警戒心は募るばかりであった。
そのことがあって間もなく、キリシタンを徹底的に嫌っている秀吉側近、施薬院全宗の
「キリシタン大名共は、いずれ南蛮の兵器を持ち、南蛮船の応援を得て、侮れない軍事力を持つようになる危険があります。上様、お気をつけ下さい」
と言う讒言もあって、秀吉はキリシタン大名の結束に警戒感を強めていた。加えてその底辺には
「キリシタン大名共はこの秀吉を差しおいて、お互いに親密にしすぎている」
との嫉妬心も見逃せなかった。
しかし、老獪な秀吉は、ことある毎にコエリョを歓待し、利用しようと考えていた。
その日、秀吉に呼び出されていた右近は、未(ヒツジ)の刻少し前、供の者に大小を預け、通された部屋で秀吉を待った。
「上様御成りー」
の声に右近は平伏した。
「右近、そう畏まるな、もそっと近う寄れ」
の秀吉の言葉に、右近は
「上様のご尊顔を拝し、恐悦至極に存じます。この度はお召しにより参上致しました」
「そんなに離れていては話が出来ない。もそっと近う寄れと言うのに」
と、重ねての秀吉の言葉に、右近は膝を滑らせて少しだけ前に進んだ。
「右近、利休めが、そなたが返事をしてくれない、と泣いておったぞ」
一呼吸おいて
「予に対して、永年に亘ってのそちの忠節は頼もしく、他の武将の範とするものである。給してある禄高だけで考えるでない。右近は予の最も信頼する大名よ」
右近は
「は！有り難き身に余るお言葉」
と言ったまま平伏を続けている。

「右近、今朝発布したキリシタン規制は見たか。あれはな、キリシタン信仰をする、しない、はその者の心得次第と言うことにした。但し、予に仕える高禄な者、言葉を換えて言えば、予が杖とも柱とも頼む大名などについては、予が治めるこの日の本の天下静謐(セイヒツ)のために、キリシタン信仰を予の許可事項とすることとしたものだ。この理由は、政(マツリゴト)を行う立場の者としては、自分の信仰を旗幟鮮明にすることが赦されない場合もある。その信仰が日本古来の、一般人民が奉ずる信仰であれば問題はないが」
「右近には今後も予の良き片腕として活躍して欲しい。それ故、右近はキリシタンであることをやめてくれぬか。その上で予に協力してくれぬか」
右近は秀吉の思いもかけない優しい言葉と、命令でなく頼みとしての言葉に、声が出なかった。暫く沈黙が続いた後、秀吉は痺れを切らしたのか
「右近、予の声が聞こえぬか。なぜ返事をしない」
と言いだした。部屋の隅に侍っている三成も、焦れている秀吉を感じて
「右近殿、上様にご返事なさいませ」
と声をかけた。右近は
「上様に申し上げます。この右近は、キリシタンを奉ずる身ではありますが、身命を賭して上様に従って参りました。これから後も従来にもまして忠勤を励むでありしょう。それは、上様が天下を統一遊ばされて、この日の本の人民全てが日々楽しく、それぞれの仕事に励むことが出来る世を作りたいがためでございます。そのように、右近は上様の天下統一と、それによる天下の静謐(セイヒツ)を願っております。上様にお言葉をお返しするわけではございませんが、そのような願いを持ち、上様の下でお仕えすることにおいて、何故キリシタンが許されないのでしょうか」
右近がここまで言うと、今まで胡座をかいていた秀吉は正座に座り直して右近を見つめ
「右近、ならば聞くが、バテレン・コエリョは何を考えているのか。奴はキリシタン大名勢力を結集することによって、この国の中に南蛮の大勢力を作り上げようとしているではないか。この秀吉に対して、朝鮮出兵の暁には、九州のキリシタンを結集して、更に船まで出して協力する、等という思い上がったことを吐(ヌ)かしておる。頼みもしないのに南蛮からやって来て、思い上がりも甚だしい」
茶を一口啜って
「右近、この度の島津征伐において、九州のキリシタン大名共の働きは認める。予は、コエリョのようなバテレンの下にキリシタン大名を置くわけにはいかないのだ。キリシタン共はバテレンの言うままに動いているではな

いか。予の言うことが分からないのか、右近」
この秀吉の言葉に、右近は来る時が来たと感じた。それは昨年三月、大阪城で秀吉がコエリョを謁見したとき、またその後も、コエリョの
「九州諸大名を中心としたキリシタン組織の秀吉に対する協力」
等という、恰もキリシタン勢力が、国内にあっても秀吉麾下ではない別個の政治勢力と受け取られかねない発言があり、右近はその発言がもたらす影響をかねてから懸念していた。今の秀吉の発言によって、全てのバテレンに対して、全てのキリシタンに対して、これから秀吉がどのような態度にでるか、秀吉の性格を知っているだけに全身で恐怖を覚えた。ここはキリシタン組織を守っていかなければならないと覚悟した右近は、平伏したまま
「上様に申し上げます。仰せの通りバテレン・コエリョ様の発した言葉に、上様がそのようにお感じ遊ばされることは、この右近、否定は致しません。上様、先の島津征伐でお分かりの通り、全てのキリシタン大名は上様に忠誠を誓っております。今後、この右近、バテレン・ヴァリニャーノ様と力を合わせて、上様が御懸念遊ばされておられますようなことを、命を賭けて払拭致します。上様に対してのコエリョ様の御無礼をお許し賜わりますようお願い申し上げます」
ここまで言うと、秀吉は声を荒げて
「思い上がるな！右近。そなたに出来るわけがなかろう。予がキリシタンを捨てろと命じていることについてのみ答えよ。汝の力でバテレン共を押さえられると思うのか。コエリョの首に縄をかけて予の前に引き出せるか」
この秀吉の大声に、右近は平伏のまま黙し続け一言も発することが出来ない。三成が右近に返事を早くさせようとして
「右近殿」
と言ったとき
「三成！出しゃばるな。黙っておれ」
と秀吉の声が飛んだ。そして
「右近、黙しておると云うことは、汝はキリシタンを捨てない、と言うことを予に言っているのだな。このままで済まさぬ。返答をいたせ」
「上様に申し上げます。この右近は、キリシタンのままで今まで通り、いや今まで以上に上様にお仕えしとうございます」
「ならぬ。予に仕えるも仕えないも、汝がキリシタンであることを捨てると申してからの話だ。」
秀吉はここで声を和らげ
「なぁ右近、も一度考え直して見よ。そなたがキリシタンを捨てれば悪いようには致さぬ。右近、捨ててくれ」

と右近に頼むように、親が子を諭しているように声をかけた。
右近は涙に咽んでいる。声が出ない。
秀吉も、控えている三成も、右近の言葉を待っている。やがて、右近は声を詰まらせながら
「上様、キリシタン信仰を捨てることは何卒お許し下さい」
と言うのが精一杯で、平伏したまま片手で涙を拭い、泣き声とも呻きとも付かない。声がかすれていた。
「右近、予がこれほど事理を分けて諭しても、汝はキリシタンを捨てぬと言うのか。キリシタンは異国の神であろう。その神のために、大名の地位も、財も、命も何もかも失う覚悟は出来ているのだろうな、右近、仏の顔も三度という諺がある。これが最後の問いかけだ。汝はどうあってもキリシタンを捨てないと言うのだな。返答をいたせ」
目を真っ赤に腫らし、涙が伝う顔を上げて、秀吉の顔を見つめた右近は
「上様・・・・・・・・お許し下さい・・・・。」
この右近の答えに、秀吉はしばし宙を見つめ、大きく息を吸い込んでから、声を荒げて
「三成！右近を直ちに別室に閉じこめよ！。所領は没収、追って沙汰を致す」
と言うと同時に、足音荒く出ていった。
奥の寝室へ戻った秀吉は、いくら考えても右近の考えは理解できなかった。
「異国のキリシタンの神は、大名の地位よりも、名誉よりも、有り余る富よりも重いというのか。命も要らないと云う。この秀吉の命令にも逆らうとは。何故だ。何がそうさせるのか。」
「バテレン共の誑(タブラ)かしか。いや、そうではない。誑かしであればどこかで覚める」
地位と名誉と財が何より大切であり、人の一生はそれを入手することにあると考える秀吉には、考えれば考えるほどというよりも、いくら考えても理解出来ることではなかった。人生の価値観が異なっていた。
九州へ来る途上、周防で見初めた側女「三条の方」に酒を用意させ、飲むほどに目が据わりだした。秀吉は、今、天下で最も恐れられ、尊敬され、天下の全てが、朝廷までもが自分の意向を決してないがしろにしない。その自分の命令を真っ向から拒否した右近に対し、今まで信頼し、これからも頼りにしたいと考えていただけに、怒りというか、屈辱と言うか、押さえきれない憤りを覚え
「おのれ右近め」
と、叫んだがその憤りをぶつけるところがない。

丁度その時、秀吉の斜め前に座って、怯えながらお酌をしている「三条の方」の艶やかさが、秀吉の征服欲をそそった。盃をおいて立ち上がった秀吉は、「三条の方」の右腕を抱えて立たせ、蒲団の上に横倒しにすると、狂ったように着物を剥ぎ取り、恰も暴漢のような仕草でのしかかっていった。

「三条の方」は、周防大内家を頼って都を落ち延びてきた公卿の孫で、大内家の滅亡によって都へ戻ることもかなわず、ひっそりと暮らしていたのを三成がどこからか聞き出し、秀吉に差し出していた。

秀吉の心奥には、彼の出自がそうさせるのか、身分の高いもの、やんごとなき者に対する憧れというか、また反面、そのような者に対する征服欲が潜んでいたのを彼は自覚していなかった。

秀吉は、目が据わるほど酒を浴びていても酔ってはいなかった。激していた感情が治まると、頭のなかはキリシタンの扱いをどのようにするかで一杯であった。

酉(トリ)の刻（午後六時）近くなって、廊下から三成の「上様、お召しによりフェスタ船のドミンゴス船長が参上致しました。謁見されますよう客間に通してあります」の声に、我に返った秀吉は、これからフェスタ船を見に行くことを思いだし、自分の着衣を三条の方に整えさせて客間に向かった。

秀吉は、不器用な座り方で、不器用に平伏しているドミンゴスと、形通り平伏している通訳の日本人修道士を見て

「ドミンゴス、よく参られた。船は博多湾に持ってきているか」

と尋ねた。

通訳を通して聴いたドミンゴスは、不器用な平伏のままポルトガル語で答えた。聴いている秀吉は何も分からない。しかし、何か一生懸命に言い訳をしている様子だけは分かった。やがて通訳から

「博多湾は水深が浅いところがあり、危険でフェスタ船を回航できない」

と聴いて、自分の思うようにならないことから叱りつけるように

「ドミンゴス、言い訳は止めよ。直ちに戻って船を持ってこい。予が内部を点検致す」

と言うなり席を立った。

寝室に向かった秀吉を追って、三成は廊下に跪き

「上様、右近殿を如何なさるかお言葉を・・・」

とそこまで言うと、秀吉は立ったまま

「右近か。十日の内に明石の城を立ち去り、何処へ行くのも勝手にいたせ、但し、キリシタンを捨てる覚悟が出来たならば、いつでも予の所に参れ、と申しつけよ」

よくて切腹、悪くて打ち首を予想していた三成は、これを聞いて、秀吉の右近に対する思いが並々ならないものであることを感じた。

三成から秀吉の意向を聴いた右近は、その場で今秀吉がいる方向を聞き、秀吉の居室に向かって両手をついて深く一礼して立ち去った。

供控所で「殿が閉じこめられた」ことと、密かに囁かれている噂としての「切腹か・打ち首か」を伝え聴いていた供の者は、意外にさっぱりした顔つきで出てきた右近を見て

「殿」

と一声掛けたところ

「心配致すな。後で話す」

と、答える右近を見て、一同ホッとして、揃って陣屋に向かった。

途中、右側の丘の上に誰が建てたか、四阿(アズマヤ)らしいこぢんまりした建物が月明かりの中に見えた。この時間では誰もいないだろうと思った右近は

「あの四阿(アズマヤ)に行って来る。皆の者はここで待て」

と言って、周りの者に馬を預けてさっさと一人で丘を登り始めた。従者たちは一旦はついて行こうとしたが、右近が今までにも時折見せた行動でもあり、顔を見合わせ互いに頷きあってそのまま立ち止まった。

月の光に照らされている辺り一面は、右近が上っていった丘も、どこもかも、神秘的な美しさを漂わせていた。

別室に監禁されたとき「領地没収の上死罪」を覚悟しそのことしか考えていなかったが、予想外に我が一命が助けられたことによって、今まで考えたことが全くない、これからの生き方を考えなければならなかった。

四阿(アズマヤ)に入った右近は、しばし瞑目した。

頭を駆けめぐることは、家臣達をどうするか、家臣達を流浪の身にすることは出来ない。次の城主が決まればそのまま召し抱えて貰うようにお願いはするが、その前に、小西行長をはじめとする各地のキリシタン大名に何人かずつでも召抱えて貰うことを頼まなければならない。このことは、我が身が死罪になったとき、キリシタン諸大名に「遺言」として書き送ることを考えていたものを、生きている自分が直接お願いすることに変わっただけである。

家族は自分と一緒にあてのない放浪の旅をすることとなろう。

明石の城は、自分が行かなくても、家老に一任して、城受取りの役人が来たときに渡すことが出来ればよい。

ただ、城に備蓄してある金銭については、城下商人などへの支払いがあれば残らず支払いを済ませ、余った分は知行・役高に応じて配分させることを家老に指示を出すこととしよう。自分は一切受け取らないこととする・・・・。

ここまで考えてきたとき、右近は我ながら不思議な感じがした。

領地没収、追放、そしてこれから、自分にも家族にも、どんな苦難が待ち構えているか予想すら出来ない我が身でありながら、何かさっぱりしている自分を感じた。

これは何故か・・・・・・・。

右近は静かに頭を垂れ、手を前で軽く組み合わせて祈り始めた。

「天におわします神ゼウス。この僕（しもべ）がついに貴方との約束を守り通しました。この勇気を与えてくださったことを感謝します。この身から、地にあるこの世の宝の一切を捨て去りました。今、心の中に天の宝を与えられ、今までの僕（しもべ）の人生の中でこんなに晴れ晴れしくスッキリした思いを感じたことはありません。これからこの僕（しもべ）の行くべき道をどうかお示し下さい。この身にいかなる困難があろうとも、貴方を仰ぎ見る道筋をひたすら歩み続けることが出来ますように、力を与えてください。また、家臣達一人一人が歩むべき道もお与え下さい。彼らの信仰も挫けないようにお守りください」

祈り終わって、月が照らしている丘や畑や遠くの山を眺めながら、今にも込みあげてくるような嬉しさを感じている不思議さに戸惑っていた。

自分の信仰・キリシタンの道を歩むに当って、もう、秀吉にも誰にも気を遣うことはない。これ以上捨てるものは何一つない我が身である。覆い被さっていた全ての物が取り払われたのだ。

四阿（あずまや）に上って小半時もしたであろうか。彼は丘を下った。

待ちかまえる供の者たちに

「待たせたな。さ、陣屋へ戻ろう」

と笑顔で声を掛け、馬に跨ってまわりを見渡すと、供の人数も馬も増えていた。聞けば、

「殿が閉じこめられた」

ことを聞いて、供の内の一人が陣屋に駆けつけ、それを聞いた陣屋から、五人が馬で駆けてきてここで合流したものであった。

それを知った右近は

「心配するな。陣屋に着いたら皆に話す」

と言い終わって、バテレンがミサのときに祈る「オラショ」の一節を口にしながら、いかにも楽しそうに馬に揺られていた。

右近が陣屋に着いたのは、亥の刻を過ぎていた。陣屋では万一に備え入り口に篝火を炊いて右近の帰りを待っていた。

「殿が閉じこめられた」

と聞かされていた家臣達は、

「高山家取り潰し、城明渡し、家臣は流浪」

を覚悟していたところ、いかにも楽しそうに帰ってきた右近を見て、ホッとしたものの何がなんだかさっぱり分からなかった。一緒に帰ってきた従者達に聞いても、彼らも何も聞かされていないから分からない。

この時、既に島津との戦いは終わって多くの家臣は明石に帰っていたので、陣屋には三十名前後しか残っていなかった。

右近は、陣屋の中庭に篝火を炊いて庭全体を明るく照らし、そこに集合することと、陣屋内にあるだけの酒と、今すぐ食べることの出来る食料を中庭の中央に用意するよう命じた。

一方、秀吉はフェスタ船が博多港に回航されるのを今や遅しと待ちかまえていたが、先程帰った船長ドミンゴスからなんの連絡もない。

三成は秀吉の了解を取って、小舟を出して、平戸に帰らず博多湾やや西の海上に停泊しているフェスタ船に使者を送った。

使者はドミンゴス船長に

「何故博多湾にフェスタ船を回航しないか」

と詰問したが、通訳を通して

「湾内の水深から回航は危険であり、先程上様に説明してある」

の一点張りで動こうとしなかった。加えて彼は酒気を帯びていて使者に対する態度は尊大であった。

これを聞いた秀吉は烈火の如く怒り、しばし絶句の上、寝室に入り酒をあおった。目は宙の一点を見つめて動かない。傍らに侍る「三条の方」は、秀吉の蒼白な顔を盗み見しては、恐怖に震えている。彼女のしなやかな右手は秀吉が握りしめている。それも愛撫するような優しさとはほど遠く、力一杯握りしめていた。「三条の方」がふりほどこうとしても、とても抗える状況ではなかった。

秀吉は、バテレンの日本での最高指導者の一人コエリョが、キリシタン大名達の上に君臨しようとしていること、高山右近が秀吉の命令を拒否して大名の地位・領地よりもキリシタン信仰を選んだこと、そのことが他のキリシタン大名達に与える影響、フェスタ船の装備している火力、船長ドミンゴスの尊大な態度等々から、国内キリシタンが、もしも南蛮バテレンや南蛮船と手を繋ぐこ

とがあったらと考えると、自分の天下統一どころか、それを遮る一大勢力となる恐怖を感じていた。

秀吉は、信長との関係の中で、何度も窮地に陥ったことがあったが、持ち前の才知と行動力で切り抜けてきた。それは、「信長一人」だけが相手であったから出来たことでもあった。しかし、今回のキリシタン問題は、彼の今までの経験と思考になかった問題であった。彼の天下統一の為に支障となる怪物・・・秀吉が欲しいと思うものは欲せず、怖がるものを怖がらない・・・であった。

キリシタン大名と南蛮勢力を一挙に殲滅する力は今の彼にはなかった。と言うよりも、その行動に移るやいなや、東北の伊達、関東の徳川・北条などの勢力が背後から襲ってくることの恐怖を強く感じていたから、キリシタン一挙殲滅の糸口を見いだせないジレンマに陥っていた。

秀吉は、握りしめていた「三条の方」の右腕を離し立ち上がって、違い棚に飾られていたコエリョから献上された極彩色の「ギヤマンの壺」を掴み

「おのれ！バテレンめ！なぜこの日の本へやって来た！」

と喚くやいなやその壺を投げつけた。壺は柱に当って粉々になった。

物音を聞きつけた三成以下の近習が駆けつけると、秀吉は仁王立ちになって

「バテレンども、頼みもしないのに勝手にやってきて、この国を攪乱するのか。お前達はさっさと出てゆけ！」

と喚き、バタッと倒れた。

亥の刻近くになって目覚めた秀吉は、「三条の方」がさし出た水を一口飲んで、三成と祐筆を呼んだ。

二人が揃ったところで、今朝発布したキリシタン令を反古として、明朝、キリシタン禁令を発布するよう命じた。

この主な内容は

一、日本は神国でありキリシタンは邪法である

二、バテレンは二十日以内に全て国外退去のこと

三、キリシタンによる日本の神社仏閣取壊しの禁止

等であり、身分に拘わらず全ての人にキリシタンを禁止した。但し貿易実利は彼自身が掌握するため、貿易のための南蛮船の来航は認め、宗教と経済を政治上分離した。

翌六月十九日、このキリシタン禁制とバテレン追放令が発せられ、博多では即日この旨の高札が掲げられた。

秀吉が三成と祐筆を呼んだ同じ時刻、高山右近の陣屋では、右近は、ここにいる家臣全てを庭先に集め、笑顔で語り出した。

「皆の者、心配したことであろう。右近は此処にいる。こんなに元気だ。安心いたせ」

「今日の上様との話を全て此処で皆に話そう。上様はこの右近にキリシタン信仰を捨てろとお命じになった。何故かというと、天下人としてのお立場から、この日の本の古来からの神仏と相容れないものは不要だ、キリシタン勢力が大きくなるのは好ましくない、と言うお考えからだ。右近はそれに対して、今までキリシタン右近として皆の者と一緒に上様に尽くしてきた。これから戦乱も飢えもない日の本を作るため、また上様の天下統一のため今まで以上に上様にお尽くしします。キリシタン信仰を捨てることは出来ません。お許し下さい。とお答えしたが、お聞き入れしては下さらなかった」

「そこで、この右近、今日を限り城も領地も大名の地位も全て上様にお返しした」

右近がここまで言うと、家臣達は一瞬どよめいたが、直ぐ静まりかえった。全員が右近の次の言葉を待っている。

「皆の者、今までこの右近に忠誠を誓ってよく働いてくれた。此処に礼を言う」

右近は深々と頭を下げて、そして言葉を続けた。

「一番気がかりなのは皆の者のこれからの暮らしだ。このことは、この右近にも些か考えがあるので、明日朝再び此処に集まって貰って話をしよう。今日のところは、この右近が何故大名の地位を捨ててキリシタン信仰を選んだかについて話をしたい。」

此処で右近は一人一人をゆっくりと見渡した。別れを告げるのには忍びない面々である。夜半ではあるが月明かりの中で篝火が家臣達の顔を照らし、知り尽くした家臣一人一人の顔は十分に見分けることが出来る。

「皆の者、この中には右近と同じキリシタンもいればそうでない者もいる。右近はキリシタンであるかないかでは、家臣の差別は一切してこなかった。だから、キリシタンである者も、そうでない者も、これからの右近の話しをよく聞いて貰いたい」

「我々は天地万物をお作りになった神ゼウスの慈愛の下に生かされているのだ。自然の恵みをよく考えて見よ。自分だけの力で生きているのではないことはよく分かるだろう。そこをよく考えよ」

「そして、神ゼウスは、我々がゼウスの御思いに忠実に従って生きて行くことを命じておられる。それは、天下万民が、皆相手のことを理解し合って、助け合って生きて行くことだ。ゼウスの前では皆平等なのだ。この右近は、大名であり領主であったが、それは右近が偉いのではなく、ゼウスが右近に対してその立場でゼウスの御思

いに忠実に生きよ、と言うことを命ぜられていると理解している。だから、右近は家臣のため、領民のために何を為すべきかを考えながらやって来たつもりだ。家臣や領民は大名のためにあるのではない。むしろ大名は、家臣や領民が家族共々楽しく過ごし、そして少しでもよりよい暮らしが出来るように、政(マツリゴト)をしなければならない。そのような意味で、右近は忠実に働いてくれる家臣や領民と苦楽を共にして過ごしてきた」

「しかし、右近も人としての弱さを数え切れないほど持っている。生きている限りその弱さを克服することは出来ない。ゼウスは、ゼウスを信じて、常にその弱さからもたらされる自分の罪・・・・ゼウスの御思いに反してしまった行い・・・の許しを願って日々を過ごせば、罪は許され、死後パライソに招かれると約束しておられる。ゼウスは、御子(ミコ)キリストをこの地上にお遣わしになってお約束された」

「右近はこのような慈愛深いゼウスへの信仰を捨てることは出来ない。パライソで、ゼウスに『忠実な僕(シモベ)よ』と迎えられる日をこの世の人生の終着点として、希望を持って生きて行きたい」

「だから、大名の地位にも財にも何も未練はない。今の右近はそのようなしがらみが取り払われ、今日から一人のキリシタンとして、信仰のみに生きることが出来ることを喜んでいる」

「話が長くなったが、これからのことは明日朝皆に話をしたい。今日まで仕えてくれたことに対して心から礼を言う」

静まりかえっていた中庭は、一瞬の間を置いて一斉に

「殿！」

と叫びだした。その中でも、ひときわ大きな声で叫びだした年寄りがいた。この島津征伐の戦いで、高山軍の武器・弾薬・食糧その他一切の調達責任者を勤めている福崎義之である。

「殿！殿はこれからいかがなされるのか。我々のことはご心配めさるな。殿のことが心配じゃ！」

中庭で一斉に

「殿はいかがなされるのか！」

の叫び声が上がった。誰一人、用意された酒肴に手をつけようとしていない。

右近は笑顔で家臣達の輪の中に入っていった。

夜が明けるにはまだ早く、辺り一面が少し白んできた頃、寂寥山竹林寺の山門を叩く音がした。既に朝番の僧は起きて読経の準備をしていた。何事かと門を開けるとそこには若い女中が立っていた。駆けてきたのか、息使いは荒い。片手を裾に当てて着物の乱れを気にしながら

「もし、お願いがございます。この文を利休様にお渡し下さい」

と言って、折り畳んだままの、文と言うより走り書きして折り畳んだだけの紙を寺僧に渡すと、名も告げず走り去っていった。

利休は、寺僧から文を受け取って目を通すと、しばし瞑目した後、机に向い書状を認め始めた。

利休に渡された文は、墨痕は切れ切れになっていて満足な字にはなっていなかったが、辛うじて用件だけは分かった。右近の所領没収と追放、キリシタン・バテレン国外追放が簡潔に書かれている。

差出人の署名は「妙」としか書かれていない。「妙」とは「三条の方」の本名で、故あって周防大内家を頼って都落ちした「公卿三条殿」の孫に当り、利休は、周防に隠棲していた「妙」の父とは茶人としての交際があった。しかしその父は既に亡く、貧しいながらも母親とひっそりと暮らしていたところを、「鄙にはまれの美貌」の評判から秀吉に見初められたものであった。

秀吉本陣で、秀吉のご機嫌伺いに伺候した利休は秀吉に侍る「妙」と顔を合わせて驚いたが、その場は互いに平静を装った。その後、女中を通して「妙」からの文を受け取ってから文の交換が始まり、全く寄る辺のない「妙」は利休を父のように慕っていた。

利休は、この文を見て、幼いころから利発だった「三条の方」が秀吉の寝息を伺いながら走り書きして、小用に立つ振りをして、密かに小者女中を使いに走らせたであろうことがよく分かった。また、秀吉の逗留している本陣から此処寂寥山竹林寺まで、約二里の、まだ明けやらぬ暗い道を女一人が駆けてきたことを思いながら、これから右近が、また多くのキリシタン・バテレンが、キリシタン大名が、どうなってゆくのかたゞならない不安を感じていた。

朝日が射し始めたころ、利休の認めた書状を持った弟子が、小西行長の陣屋をめがけて寺の山門を飛び出して行った。

（続く）

孔子春秋（三）

三戸岡道夫

第六章　中国の国勢

（一）

さてここで、孔子の生きていた頃（今から二千五百年前）の、中国全体の国の組織と、その中での孔子の祖国である魯の国の位置づけ、並びに周辺諸国の様子などを略記する。

中国の古代文化は、堯、舜、禹の伝説の時代に始ったとされるが、それを継承して発展させたのが、夏、殷、周の、三代の王朝であった。

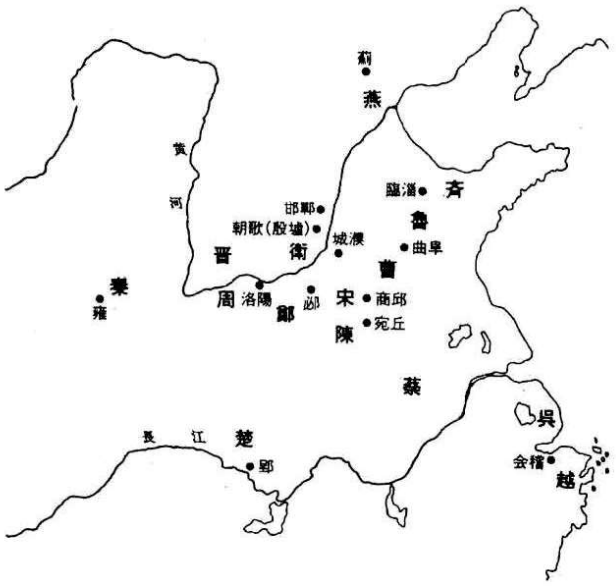
孔子の生きた時代はこの周王朝の時代であり、くわしく言えば周王朝の後期である。

周というのはもともと現在の西安の西の方に興った部族であるが、文王の代に力をつけ、その子の武王の代になると、黄河流域に勢力を張っていた殷族を滅して、周王朝を建てるに至った。それは西暦前一一二二年とされているから、孔子の時代からは六百年も前である。

当時ヨーロッパでは、その七十年ほど前にトロイア戦争が起っている。ギリシヤ軍が巨大な木馬の中に兵士を隠してトロイアの城内に潜入して奇襲によって敵を打ち破った、ホメロスの詩に歌われたトロイア戦争である。

創業の武王は志の半ばにして死去したので、その子の成王が跡を継いだ。そしてその成王を補佐して、周王朝の基礎を固めたのが、武王の弟であり、若い成王にとっては叔父に当る周公旦であった（孔子が終生尊敬し、傾倒したのがこの周公旦であった）。

周公旦は若い成王を助けて、殷族の反乱を平定して、黄河流域の東方にまで版図を拡大するとともに、さまざまな改革を行って、国内の政治を整えた。したがって周王朝の文物制度は、この周公旦によって作られたといわれる。



こうして周王朝は、主として中国の北方の黄河を中心として、全国統一に成功した。そして中国各地を分割し、それぞれの地に一族や建国の功臣を諸侯に封じて、統治させた。そして周王は天子としてその上に君臨して天下を治めるという、支配体制を固めたのであった。

周王朝建国の頃は、全国に千八百ほどの諸侯がいたといわれているが、周王朝はこれらを整理統合して、七十一国にした。そのうち五十三国は周王朝と同じ姓の一族だった。

しかし一族でも領土を受けて建国するときは、姓は周王と同じ「姫」であっても、氏としては「晋」とか「魯」とかの名を名乗った。

孔子の祖国である魯の国も、そのような周王朝の一族の一つだったのである。

しかし周王は天子といっても、後世の中国の皇帝のような強大な支配力を持っていたわけではなく、諸侯の連合体の上に、比較的力の大きい王として、乗っていたにすぎなかった。

したがって諸侯はあまり周王の言うことを聞かず、時がたつにつれて周王は次第に天子としての実質を失い、孔子の頃になると、もう単なる一地方の権力者、いや小国クラスの諸侯の地位へとなり下ってしまったといってもよかった。

それを象徴する出来事が、周王朝十三代目の平王（在位前七七〇～前七二〇年）のときに起った。都をそれまでの鎬（現在の西安のあたり）から、東の方向にある洛陽へ移したのである。それは異民族や外敵の侵入が恐ろしく、それを避けるためであった。

周王の力は、異民族の外圧にも耐えられないほど弱ってしまっていたわけで、この辺から、周王は実質的には

中国全体を統治する天子ではなく、一地方権力にすぎなくなってしまったのである。

この洛陽への遷都を境にして、それ以前を『西周』、それ以後を『東周』という。

そしてこの東周の始まりあたりからを春秋時代と呼ぶのであるが、孔子が生きていたのは春秋時代の中期から後期（前五五一―前四七九）にかけてであった。周王朝の没落にともなって、少数の諸侯が強大になっていく時代の中で、祖国の魯の国も同じように君主の力が弱まり、下克上の内紛で苦しむ日々であった。

（二）

では周と魯とは歴史的にどのような関係にあったのか、その点をくわしく述べてみよう。

魯の国は前述したように、周王朝成立の時代に建てられた、周王朝一族の系列に属する国である。

周王朝の創立者は武王であり、武王の弟の周公旦が、成王（武王の息子）を補佐して周王朝の基礎を固めたことは前述した。

その周公旦が建国の功績を賞せられて、曲阜に封地をもらったのである。そして魯の氏を名乗り、魯公となったのが、魯の国の始まりであった。創立者（武王）の弟が始めた国であるから、周王朝との関係からいえば親密な間柄にあり、格式の高い国といってよかった。

しかし周公旦は、成王の補佐役であり、中央の政庁から離られないので、封地の魯へ行くことができない。そこで周公旦は息子の伯禽を魯に行かせた。そして以後、その子孫が魯の君主の座を受けついでいった。

周公旦の次男は都にとどまって、父の職を継ぎ、天子の補佐役となった。そして他の男子は、凡、蔣、邢、茅、胙、祭といった、小さい諸侯となって散っていった。

周公旦は伯禽が魯の国に行くにあたって、次のように言いきかせた。

「わしは文王の子であり、武王の弟であり、いまの成王にとっては叔父にあたる。したがって諸侯の中では高貴と目される身であるが、そのわたしでさえ、人の訪問を受けたときは、洗髪や食事を中断して会い、礼をおろそかにしないように努めている。しかし、それでもなお至らぬところがありはしないか、またすぐれた人材を逃しはしないかと、気がかりでならないのだ。お前も魯へ行ったら、いかに君主とはいえ、決して驕ったまねをしてはならないぞ」

と『史記』は記述している。しかし『論語』では若干ちがって、次のように語ったとなっている。

「魯へ行っても、親族をおろそかにしてはならない。また重臣たちが『おれたちは無視された』というような不満を持つようなことがあってはならない。昔なじみは、

よほどのことがないかぎり見捨ててはならない。一人の人間に、あれもこれもと過大な期待をかけてはならない」

息子に対する適切なアドバイスというべきで、この二つの記録からみても、おのずから周公旦の政治姿勢が浮かび上ってくる。

このような事情から周の成王は、魯の国に対して、特別に、

「文王（武王の父）を祭ること」

を許したのである。これは異例なことである。普通であれば、諸侯は、天子であった人を祖先として祭ることなど、できなかったからである。

さらにそれだけでなく成王は、

（魯の君主が、周公旦を祭るときは、天子に対して行う礼楽の形式をとってもよい）

ということまで許可したという。

魯の国はこのようにして意識の上では、天子の親戚という感じであり、そのため他の諸国よりも、礼楽の伝統を重んじたのである。孔子の学問に、礼楽が重要な位置をしめているのはこのためである。

このように魯の国の創始者が周公旦であり、かつ周公旦がすぐれた理念を持った政治家であったので、孔子は終生周公旦を敬愛し、周の文化に傾倒し、よく周公旦を夢にまで見た。そしてまた周公旦への憧憬が、孔子の活力の源でもあった。その周公旦への熱い思いを、孔子は、

「周は二代にかんがみて、郁郁乎として文なるかな。われは周に従わん」

と言っている。

周の文化は、夏と殷の二代にわたる伝統を受けついで、生き生きと花開いた、わたしはこの周の文化を継承していきたい――というのである。

もちろん孔子が生きたのは、周公旦よりも六百年も後のことであり、魯の国の君主は、二十四代昭公、二十五代定公、二十六代哀公と、ずっと後世の三代の君主なのであるが、孔子が生涯に目標としたのは、周王朝創立時の周公旦であり、周に流れている文化であったのである。

（三）

こうして孔子の祖国である魯の国は、諸侯の一つといっても、周王朝の分身ともいえる国であった。しかし孔子の時代はその創立期から六百年近くたった、春秋時代であった。その春秋時代の諸侯の様子はどうであったであろうか。

春秋時代になると諸侯の数は大小あわせて百四十余といわれているが、孔子が活躍した春秋の後期に、実際に歴史を動かしていたのは、次の十四の諸侯であった。

その中で強大国であったのは、

東に斉

南に楚
西に晋○
西に秦
の四大国であり、それに新興国の、
南に呉○
南に越○
の二国を加えた、六国が強大国であった（東西南は魯の国から見た方角）。

それより力の劣る中級国としては、

魯○
衛○
鄭○
曹○
蔡○
燕○
宋
陳

の八カ国であった（○印は周と一族）。

孔子の祖国の魯は、この中級国の八カ国の中に位置づけられている。

周王朝もこの頃になるとすっかり勢力は衰えて、中国全土に号令する力はなく、十四の有力諸侯が勝手に覇を争う戦乱の時代になっていた。

この辺の事情を『史記』は次のように記している。

（周王朝は平成のときに衰微し、諸侯の強者が弱者を併呑するようになった。その中から、やがて、斉、楚、晋、秦が強大となり、政治は覇者によって左右された）

孔子の生きた春秋時代というのは、まさに富国強兵、弱肉強食の覇者の時代だったのである（そして孔子は、この覇者の時代の各国の君主に『仁政』を説いて廻ったのであるから、その困難が判ろうというものであるが、それは後日の話である）。

さて、そのような諸国情勢の中で、孔子の祖国の魯の国の地理的状況をのべると、魯の国は、現在の山東省の西南部にあたる地域である。

その東北部には、山東半島にかけて、強大な斉の国が控えていた。

西北部は済水（黄河の下流）で境されて、その向い側に衛の国があった。

さらに西部は曹の国と接し、西南部は泗水という川で区切られて、宋の国に対していた。

さらに問題なのは、衛の国の西部に、強大な晋の国があることだった。東の斉、西の晋と、二つの強大国に挟まれていた魯の国は、同じような状態にある衛の国や、鄭の国と同じように、二つの強大国の圧力を受け、悲哀をかこっていた。

しかし魯の国自体の地勢は、東部から東北部にかけての山脈と、西北部、西南部は川で守られており、また山東半島中央部から流れ出た泗水が南へ曲がりこんでいる内側に、国都（今の曲阜）があったので、全体的に丘陵地帯といってよく、地勢的にはよい土地であった。北緯三十六度より少し南で、日本でいえば東京あたりの緯度に位置した。

しかしこの四大強国も、春秋時代も後半に入ると、覇者の地位が、西の大国『晋』と、南の大国『楚』に独占されて、この両国が代わる代わる天下に号令する、いわゆる「晋楚争覇」といわれる時代に入ったのである。

これによって一番迷惑したのは、その中原に位置する、魯、宋、衛、鄭などの、弱い国であった。

すなわち西から晋が攻めてくれば、晋に頭を下げて、晋と手を結ぶ。すると今度は南の楚が攻めてくる。そこで楚になびけば、また晋に攻められる、といった工合で、いずれの国も苦しい対応に迫られた。

しかしこうした状態が百年もつづくと、互いに国力も消耗し、戦にもあきて、晋、楚の両大国も、次第に国としての活力を失っていった。

そして晋と楚の両国に代わって、台風の眼となって長江以南に興ったのが、新興大国の呉と越であった。

さてこの当時、諸侯はどのような国作りをしていたのであろうか。

諸侯は政権の所在地である国都に、それぞれ住んでいた。

当時は、この国都や、人口の多い主要な場所は、周囲に土の壁を築き、この壁で囲まれた地域が『城』であった。そして同時に「城」が、「街」であった。

そして君主はこの城内に、自分の住む内城を作って住み、またそこに、祖先の魂を安置する廟を作っていた。

城壁の上にはたえず見張りがいて外敵に備えており、国都の人々はこの城壁によって外敵から守られて、生活していたのである。

諸侯はこうした国都に住み、その周辺の農業を支配し、管理していた。当時の産業といえばほとんど農業であるが、農地はこの城壁の外にあった。だからこの城壁の中に住む農民は、昼間は城壁の外の田畑に行って働き、夜は城壁の中へ戻ってくる、という農業生活をしていたわけである。

国都のほかにも、各地には城壁で囲まれた大小の都市が点在していて、多くの人間がそこに住み、諸侯は国都から、その中小の都市や町に、睨みをきかせていたのである。

この国都のスケールは各国によって異るが、たとえば天子である周王の城洛陽は、東西が二千四百メートル、南北が三千六百メートルの、長方形であった。

四大強国の一つである斉の国都の臨淄は、当時天下に

その名を知られた都城であったが、東西、南北、ともにそれぞれ四千メートルの、ほぼ正方形であり、天子の都洛陽を上廻る壮大さであった。

孔子の祖国である魯の国都は、臨淄の四十パーセントぐらいの規模であった。

では周王朝時代の身分制度はどのようなものであったのか。それは次のような見事なピラミッド型に整っていた。

天子（周王）――諸侯――郷――大夫――士――庶民

という階級体制であった。

「士」以上が支配階級であり、「庶民」が農民、商工業者などの、一般の人々ということになる。支配階級の中でも、郷と大夫が、いわゆる貴族階級とか重臣層とかいわれるクラスである。「郷」は大臣、「大夫」は高級官僚、「士」は下級官僚に該当するといえばよいであろうか。

以上が身分制度の基本型である。

しかし時代が移り、春秋時代になって周王朝の統制がきかなくなると、諸侯同士の争いが激しくなり、諸侯たちは周王朝を支えるよりも、自分の国の増強の方に熱心になった。そのため周の天子の影がうすくなり、それに代って、実力ある諸侯が覇者となって天下の政治を取りしきるようになった。

しかし、それが春秋時代の後半になると、諸侯たちの手にあった権力も、次第に有力な重臣（郷や大夫）に奪われて、諸侯たちが背後に退き、各国とも重臣たちが表に出て、政治を動かすようになった。重臣たちの方が現場に近いため、経済力も軍事力も手に入りやすいからだった。

しかし権力の乱れはそれにとどまらず、次には重臣の家臣たちもが権力を握るようになっていった。こうして終りのない下克上の世へ突入し、これまでの身分制度が大きく崩れていくのであった。

そして更に、支配階級の下層に位置づけられている「士」の中からも、政治の表舞台に登場する者も現れてくるのであった。本篇の主人公である孔子も、そのような『士』の一人なのであった。

第七章　昭公亡命

孔子が周の遊学から帰って間もなくのことである。魯の国にクーデター騒ぎが起った。孔子が三十五歳のときである。

この頃魯の国の君主は、第二十四代の昭公であった。

そもそも魯の国は周公旦の息子の伯禽に始まり、君位

が、桓公（第十六代）、荘公（第十七代）と継承され、現在の昭公（第二十四代）に受けつがれていた。しかし現在の昭公は無力で、政治の実権は家老の三桓に奪われてしまっていた。すなわち魯の国においても下克上が起きていたのである。

三桓とは前述したように、三人の家老、すなわち、孟孫氏、叔孫氏、季孫氏のことである。この三人の家老は、いずれも十六代君主桓公の子孫である。すなわち桓公の長男は十七代君主の座を継いだ荘公であるが、彼の三人の弟、すなわち慶父、叔牙、季友の三人が、別家を立てて独立し、それぞれ孟孫氏、叔孫氏、季孫氏と、魯国の権門となったのである。桓公の子孫で、桓家からの別家であるので、この三家を三桓とよぶようになった。

以後、魯の国の歴史は、君主とこの三桓との、バランス・オブ・パワーの下に統治されていた。

しかし時がたつにつれて、次第にそのバランスが崩れていった。桓公から今の昭公までの間は、約百五十年になるのであるが、百五十年という長い間に、三桓が次第に勢力を強め、君主をないがしろにして、政治の第一線に立って支配力を振うようになった。さしずめ日本でいえば、徳川将軍家に対する、尾張、紀州、水戸の、御三家の存在とでもいえばよかろうか。

そのために現在の君主の昭公は、あってなきに等しい状態になってしまっていた。魯の国でも下克上が次第に

エスカレートしていたのである。

そのため君主の昭公は、長い間、権力奪還の機会を狙っていた。

すると、その好機がやってきた。

季孫氏の当主の季平子と、郈氏という貴族の当主の郈昭伯とが、紛争を起したのである。

三桓の中ではこの季孫氏がもっとも勢力が強く、その当主の季平子は宰相の地位にあって国政を牛耳っていたので、昭公はとくにこの季平子を快く思っていなかった。その季平子が、大夫（魯君の高級家臣）の郈昭伯と争いを起したのである。昭公としてはこの機会を逃す手はなかった。

もっとも争いというのは、大した内容のものではなかった。季平子と郈昭伯の屋敷は隣りあっていたので、ある時、その頃貴族の間で流行していた闘鶏をやった。実はそれが問題になったのである。

季平子の方は、自分の鶏に革の鎧をつけさせた。そこで郈昭伯の方もその対抗策として、自分の鶏の蹴爪に鉄をかぶせた。すると季平子は、この強力な対抗策は、

（季平子への反抗だ）

といって腹を立てた。そして季平子は、自分の屋敷と隣の郈昭伯の土地との境界を侵犯してしまった。すなわち闘鶏が屋敷の領地争いにまで発展してしまったのである。

土地を侵された郈昭伯は怒ったが、しかし相手が魯の最高権力者とあっては、相手が悪かった。うっかり手出しが出来ない。

すると時を同じくしてもう一つ、別のトラベルが発生した。

それは臧昭伯という貴族の従弟の臧令が、本家の臧家の宝玉を盗むという事件であった。そして犯人の臧令が、季平子が実力者であるのを見込んで、季平子の屋敷へ救いを求めて逃げこんできたのである。しかし逃げこんだ臧令を臧昭伯は捕えて、連れ去った。

すると臧令をかくまった季平子は非常に怒って、今度はお返しに、臧昭伯の家老を捕えるという挙に出たのである。そこで臧昭伯の方も怒った。

そこで、さきに闘鶏で問題を起した郈昭伯と、この臧昭伯の二人が揃って、季平子の理不尽な行いを、主君の昭公のところへ訴えて出たのである。

(チャンス到来)

と昭公は勇みたった。

魯の国では、君主の下に、その高級な臣下として大夫がいた。その大夫である郈昭伯も、臧昭伯も、二人とも、三桓と同じく君主昭公の直接の臣下なのである。それぞれ所領地を持っており、力も相当ある。

その大夫の中でも、郈昭伯や臧昭伯は、三桓に次ぐ有力大夫だった。二人の先祖をたどれば、魯国の当初の君主である隠公の父親(恵公)の、弟たちであった。すなわち三桓の祖先の叔父にあたるわけで、歴史的にみれば、郈昭伯や臧昭伯の方が、三桓より古い名門なのであった。

そのため郈昭伯や臧昭伯は三桓の横暴な振舞いには、以前から不満を持っていた。その不満が、今回の闘鶏事件と宝玉盗難事件をきっかけに、爆発したといっていい。いわば有力貴族間で争いが起きたのである。

郈昭伯や臧昭伯の勢力に便乗して、三桓の中でも最も力の強い季孫氏をたたくことは、三桓からの権力奪還の機会を狙っていた昭公に絶好の機会が到来したといってよかった。

そこでその年(前五一七年)の九月に、昭公は思いきって軍勢をひきいて、季平子討伐の兵をさしむけ、季平子の屋敷を急襲した。

不意を打たれた季平子は逃げまどい、屋敷内の楼台へ登って、昭公に許しを乞うた。最初は、

「私は都から出て、罪の御通知をお待ちします」

と頭を下げ、その次には、

「私を、私の所領地で幽閉する罪にしてください」

そして最後には、

「私に車を五台お与えくださいまして、国外へ追放してください」

と、小出しに降服の条件を出して、許しを乞うた。しかし昭公は許さなかった。強硬派の郈昭伯は、

「ぜったい殺してやる」

とわめいていた。

しかし昭公が勝っていたのは、そこまでだった。昭公は急いでいたので、昭公のひきいる軍隊の兵士の数が少く、それ以上は季平子を征圧できなかったからである。

ところが三桓の方では三家が協力して、逆襲してきたのである。三桓の一つの叔孫氏は、

(このままでは、次は自分がやられるにきまっている。この辺で季孫氏を助けておいた方がいい)

と判断して、季平子を助けるために軍を繰り出し、昭公の占拠する季平子の屋敷へ攻撃してきた。

そこで昭公は、

(残る三桓の一つの孟孫氏を使って、季平子を討たせよう)

と、使者として郈昭伯を孟孫氏のところへ走らせた。

しかし、その間に叔孫氏の軍が、季孫氏の屋敷へ攻めてきた。が、そこを占拠していた昭公の軍勢は、戦勝気分で気持がゆるみ、油断して鎧を脱いで休息していた。そこへ叔孫氏の軍勢が攻め入ってきたから、ひとたまりもない。昭公の軍はけ散らされてしまった。

一方、昭公からの使者を受けた孟孫氏の方は、使者となった郈昭伯の話を聞きながら、

(はて、どちらに味方すべきか)

と即答を避けた。そして斥候を出し、その報告を待ちながら、のらりくらりと時間かせぎをした。やがて斥候が帰ってきて、

「季孫氏の屋敷へは叔孫氏の軍が応援にきて、昭公の軍を壊滅させ、叔孫氏の勝利の旗が立っています」

と報告した。

それを聞くと孟孫氏の腹は決った。

ただちに使者の郈昭伯を捕えると、南の城門近くの、わざわざ人から見える場所で、斬り殺してしまった。

そして、ただちに昭公軍の討伐へと向かった。

そのため昭公は敗走した。

昭公はせっかくのチャンスにもかかわらず、季孫氏の討伐に失敗し、永年の願望の権力奪還は成功しなかったのである。

昭公は臧昭伯とともに、祖先代々の墓地に逃れて、善後策をはかった。

しかし善後策は成らず、昭公は身の危険を感じて、命からがら、隣国の斉の国へと亡命した。(この結果、これから七年間、魯の国は君主不在という異常事態に陥り、三桓氏の専横がつづくのであった。そして昭公は何度も魯国への復帰を画策したが、三桓に阻まれて実現せず、六年の亡命生活の後、ついに晋の国で死去することになるのである)。

この時の斉の国は、景公の治世三十一年にあたり、晏嬰という宰相が景公を援けていた。

第八章　斉の国にて

（一）

周へ遊学して魯の国へ帰国していた孔子は、魯の国を建国当時の周のような国にしようという希望に燃え、学問にはげんでいた。

しかし国内がこのように乱れて、あまつさえ君主の昭公が国外へ亡命してしまったのでは、孔子の、

（昭公に登用されて、国政に参加する）

などという望みは、むなしく消え去ってしまった。

それのみか、君主が亡命するような不祥事を起こす貴族たちの醜い権力闘争や、それをめぐって右往左往する役人たちの醜態に、孔子はすっかり厭気がさしてしまった。

孔子は三桓の専横に嫌悪を感じ、同時に自分の生れた魯の国にも絶望してしまった。

（魯の国だけが国ではない。他の国でも政治に腕を振う道があるのではないか）

そう思った孔子は、仕官の途を求めて他国へ出ることを決心した。

しかし、行くといっても、魯の国より小さい国へは行こうとは思わなかった。魯の国の周辺で、魯よりも大きい国といえば、東北に斉の国、西北に衛の国、ほぼ西に曹の国、西南に宋の国があった。

その中から孔子は、最強国の斉の国を選んだ。政界への野望を抱く孔子としては、当然の選択だといえよう。

斉の国は、周王朝創業の功臣である大公望呂尚を始祖とし、経済的にも恵まれた大国で、文化的にも進んでいた。

それに以前、斉の国の君主の景公と宰相の晏嬰が魯の国を訪れてきたとき、孔子はこの二人に会ったという因縁もあった。

これまでの魯の国は、いつも斉の国から、国境侵犯や、戦争で、たえず痛めつけられていた。それなのに斉の国を孔子があえて選んだのは、孔子はこの機会に斉の国の文化を学び、見聞をひろめ、出来たら自分の理想の実現するために、斉の国での仕官の道を探そうとしたからだった。

こうして孔子は昭公の後を追うようにして祖国を去り、斉の国へ向った。孔子が三十五歳のときであった。

それは子路などの弟子たちをつれた大勢な旅で、失意からというよりも、むしろ前途に明るい希望を抱いた、一種の運命共同体としての旅であった。

当時の国と国との間の人材移動は、比較的容易に行わ

れていた。

孔子はまず、斉の国で有力な貴族である、家老の高昭子の家臣となった。そして高昭子のルートで、斉の君主の景公に近づき、仕官の途を探ろうとした。

この高昭子は斉の国の実力者の一人であったが、孔子をそのように遇するだけでなく、斉国へ亡命した魯の君主の昭公のなぐさめに出向いたりして、もともと魯の国と親交のあった人物だった。

したがって昭公が斉の国へ亡命できたのも、このような高昭子の支持があったればこそ出来たのであろう。だから孔子だけでなく、その他にも高昭子の庇護を受けた魯の人間は、多くいたのではないかと思われる。

高昭子の家臣となった孔子は、自分の名前を高める方法を考えた。孔子は体力もある大男であったから、武事で名をあげる機会もあった。しかし孔子の希望は武事ではなく、あくまでも学問によって国政に参加することである。孔子にはすでにその教養があった。これまでに勉学してきた詩書礼楽である。

孔子はまず、魯の国で学んだものよりも一段とレベルの高い、斉の国の楽を学ぼうと思った。当時、音楽は礼式には欠かせないものであり、重要な学問の一分野だったからである。

孔子は一つのことに夢中になる性格だった。そして、その道を究めなければ気がすまなかった。だから楽につ

いてもそうだった。

かって魯の国において楽を習ったときのエピソードが、それをよく物語っていた。孔子は魯の国の楽官の師襄に琴を習ったことがあった。そのとき孔子は同じ曲を十日以上も弾きつづけたので、師襄が、

「この曲はもうよく弾けるようになったから、新しい曲を教えましょう」

と言うと、孔子は、

「いえ、メロディーは学んだけれども、まだテクニックが身についていません」

と言って、弾きつづけていた。しばらくしてまた師襄が、

「そろそろ新曲に移ったらどうですか」

と言うと、孔子は、

「まだこの曲の趣きと味わいが、会得できません」

と言って先へ進まなかった。またしばらくして師襄が、

「もう十分会得したでしょう。新曲に移りましょう」

と言うと、まだ孔子は、

「まだこの曲の作者が誰なのか、その人の風貌が思い描けません」

と孔子は答えるのだった。それから更に何日かたつと、孔子は天を仰いで嘆息して、

「この作者の風貌が思い浮かぶようになりました。この曲は、周の文王のほかに誰が作れたでありましょうか」

と言うのだった。すると師襄は立ち上って頭を下げて、
「その通りです。私はこの曲を伝授されたとき、文王が作った曲だと教えられておりました」
と答えた。一つの曲を学ぶにもここまで徹底する、これが孔子の学び方だった。
斉の国においても楽を学ぶために、孔子は斉の太師（音楽長官）から教えを受けた。
斉の国には、古代伝説の聖王である舜を祭る、「韶」という伝統音楽が伝わっていた。韶という音楽は、舜帝の作曲した音楽だと言い伝えられているが、孔子はこの韶を学んだのである。
孔子は韶の音楽を三カ月も学ぶと、すっかり韶に心酔して、
（韶の古楽にすっかり熱中して、この韶を学んでいるときには、好きな肉を食べてもその味さえわからないほどであった）
と、その傾倒ぶりを述懐している。すなわち、孔子は食事もそぞろになるほど韶に心酔し、
「音楽がこれほどすばらしいものだとは思わなかった」
と、古楽のみやび陶に然となり、感嘆した。
孔子は学問においても天才だったように、美や芸術の世界についても天才だった。その美への天才が、斉の古楽によって呼びさまされたのであろう。孔子は、
（韶は美をつくし、善をつくしている。周の武王の音楽は美をつくしているが、まだ善をつくしていない）
と、音楽にすぐれている周の音楽でも、美はあるが、まだ善はない、それなのに斉の音楽の韶は、美と善の両方が揃っていて、周の音楽よりもすぐれていると、絶賛した。
さらに孔子は、
「夏の国の暦を使い、殷の国の車に乗り、周の国の冠をかぶり、斉の国の韶の舞曲を使うのが、国を治めるもとになる」
とまで言っているのである。
このように孔子は斉の太師に古典音楽を習ったことによって、一段と楽の教養を高め、孔子の名前は斉の国でも一躍有名になった。ここまで音楽が理解できれば、礼を担当する典礼官になってもおかしくない実力を、今や孔子は身につけたのである。

（二）

やがて孔子は高昭子の世話によって、斉の君主の景公と面会することができた。
その時、景公が孔子に、
「政治の要諦は何か」
と、政治のあり方について質問した。すると孔子はただちに、
「君は君たれ、臣は臣たれ、父は父たれ、子は子たれ」
と答えた。すなわち、
（君、臣、父、子が、それぞれ自分の本分をつくし、責任を果たすことである）
というのである。
すると景公は、簡にして要を得た孔子の答えに感心して、
「これはよいことを聞かせてくれた。たしかに君主が君主でなく、臣が臣でなく、父が父でなく、子が子でなかったら、どんなに財政が豊かでも、安心して暮していくことができないからなあ」
と、すっかり感心した。
さらに景公は、別の日にもう一度孔子を呼び出して、
「政治とは何か？」
とさらに質問した。
すると孔子は、一回目のときは政治の一般論的な返答をしたのに対し、二回目のこの度は、ずばりと具体的なことを答えた。
「政治は財政を節約することが必要です」
すなわち、財政政策の改革を提言したのである。
斉の国は財政面から見れば、富裕な国であった。領する山東半島は海岸線が長くて、海産物が多くとれた。とくに塩の生産が盛んで、各国に販売しており、塩は重要物資であったので、収益が大きかった。
しかし収益が大きくなれば、豊かさに馴れて贅沢になり、その結果国の出費も大きくなり、財政難に陥っていた。したがって税金も次第に重くなり、人民は困っていた。孔子が財政改革のことを言ったのは、この人民の重税のことを言ったのである。
それは孔子に、かって次のような経験があったからである。
孔子が弟子たちといっしょに、泰山（霊山と崇められている中国一の名山）の麓を通ったときのことである。
泰山の南側は魯の国、北側は斉の国と伝えられているが、そこに建っている墓で、一人の女が声をあげて泣いていた。その墓は、魯の国にも斉の国にも属さない土地、に建っている墓であった。
そこで孔子が、なぜそんなに泣き悲しんでいるのかと、弟子の子路に聞かせたところ、その女は、
「この辺には虎がたくさん出没するので、わたしの舅、夫、息子と、三代にわたって虎に食われて死んでしまいました。それでこうなげき悲しんでいるのです」
と答えた。孔子が、
「そんなに危険な土地ならば、こんな所に住んでいないで、他の場所へ引っ越せばいいではないか」
と言うと、女は、
「いいえ、それは出来ません。なぜならば、この土地は他所よりも税金が安いからです」

と答えた。

繁栄しているとはいえ、斉の国も、魯の国も、またその他の国も、税金が重いので行きたくないというのである。この山麓の土地は、どの国の土地なのか所属不明なので、税金が安いのである。すなわち、

（重税は虎よりも恐ろしい）

ということである。

虎よりも恐ろしい政治をしていて、いい政治であるわけがない。斉の国が繁栄しているといっても、それは人民の重税の上に乗った繁栄なのである。人民は苦しんでいる。人民は喜んではいない。この泰山の麓の女のように、重税に苦しむくらいなら、むしろ虎に食われた方がいいと思っている。

孔子が二回目の景公の質問に、財政政策の改革を提言したのは、このことを言ったのである。

一回目の孔子の答弁もさることながら、二回目の答弁で、景公はすっかり孔子が気に入ってしまった。

そこで景公は、孔子を高い地位に抜擢して、家臣として任官させようとした。

しかし、その孔子の任官に反対した者がいた。宰相の晏嬰である。

『史記』によると、この晏嬰は当時きっての賢人であったと記されている。すなわち晏嬰は、紀元前六世紀に出た、晋の叔向、鄭の子産とともに、名宰相三人といわれた人物であった。

その晏嬰が、景公に対して言った孔子への批判は、次のように手きびしいものであった。

「孔子のような儒者は口先ばかり達者ですから、そのような人物を登用すべきではありません。自分ばかりが正しいと思い、人の意見を聞かない者は、部下にはできません。また葬式や儀礼ばかりを重んずるやり方を、斉の国に採り入れることはできません。それに孔子は諸国に政策を売りこみながら、金品の恵みを受けたり、借りたりしているようですから、そのような者にわが斉の国を治めさせるわけにはまいりません」

晏嬰に言わしむれば、孔子は実際の政治の経験がないのに、「礼」とか、「楽」とか、「仁」とかを強調する学問は、政策としては清純すぎて、現実に合わないというのである。晏嬰のように泥にまみれて政治をし、国を運営している者から見れば、孔子の政策は政治の現実を知らなすぎるし、甘っちょろく、理想論すぎて、独善的にしか見えなかったのである。

政治には理想もさることながら、もっと老獪さが必要だという現実論である。現に魯の国でもそうであったように、斉の国でも下克上の動きや、有力家臣の抗争が熾烈をきわめていて、油断のならない政情にあった。宰相たる立場にある晏嬰としては、当然の考え方だった。

また晏嬰だけでなく、斉の国の大夫たちも、孔子という他国者が入ってくれば、自分たちの地位が不利になることを敏感に感じており、孔子の任官には反対した。露骨に孔子を追放しようとする動きさえ出てきた。

現実に政治を動かしている宰相や大夫たちがそのような考えでは、景公としてもその意見に従わざるを得ず、

「わしも年を取ってしまったので、汝を登用することがもう出来ぬわい」

と年齢のせいにして、孔子の任官を断ってしまった。

こうして孔子の斉の国での任官は実現しなかったのである。

そうなれば、孔子はまた魯の国に戻るしかなかった。

孔子は空しく、魯の国へ帰国した。孔子が三十七歳のときである。

しかし斉の国での任官は実現しなかったものの、斉の国での滞在は、魯の国では学べなかったいろいろな文化に接することが出来て、孔子にとってその意義は大であった。

斉の国は外様大名ではあっても、周王朝とともに歴史は古いのである。その上、魯の国とちがって大国であり、その都である臨淄は当時の中国では屈指の大都市であった。孔子の斉での滞在は、多くの刺戟となり、得たものは大であった。孔子は新鮮な驚きをもって、斉の国の文化を学んで帰ったのであった。

斉の国では希望する任官こそできなかったが、新しい斉の文化の吸収が、孔子に大きなプラスを与えたことはまちがいなかった。

考えてみれば斉の国で君主の景公と会って国政を論じ、そし晏嬰たち実力者が孔子に敵対したということは、孔子にそれだけの実力が備ってきた証拠だといえよう。孔子はあらためて、

（自分の生き方にまちがいはない）

という自信を強く持った。

孔子はそろそろ四十の声を聞く年齢になっていた。斉での挫折と、それと裏腹に得た自信との、二つの複雑な感情の中で、孔子は、

（四十にして惑わず）

と、自らにつぶやいたのである。

（つづく）

茉莉花伝（三）

―東丹国使と来た娘―

森下征二

（十三）

賑やかに弾んだ声が廊下へ聞こえてくる。茉莉花が部屋へ入ると、雅量が悠然として奥の席に納まっていた。彼は盃を片手に肩を傾け、裴璆と小次郎を相手に機嫌良く笑っている。

雅量の隣にはぽつねんと、狩衣姿の異形な若者が坐っていた。彼は時々、肩まで伸ばした黒い髪をさりげなく揺らせ、黙って酒を飲んでいる。白く透き通った顔には薄っすらと頬紅が塗られ、小さな赤い口許にほんのりした色気を湛えている。女のように美しいが、身に着けている衣装と、毅然とした身のこなしは、立派な男であることを示している。

茉莉花が小次郎の横に坐ると、雅量は盃を置いて、待ちかねたように声をかけた。

「やぁ、茉莉花どの、今日は良い話を持ってきましたぞ。忠平公が、やっと貴女に会って下さることになりましたよ」

「忠平公が？　本当ですか！」

これでやっと、自分の出番が来る。茉莉花の顔が目に見えて明るくなった。

「そうです。しかも、それだけではございません。帝が…」

と雅量は、一旦言葉を区切って、茉莉花の顔を見つめた。彼は、茉莉花の嬉しそうな顔を十分に楽しみながら、弾んだ声で更に続ける。

「ええ、何と帝が…ですよ、お忍びで参られることになりました。小次郎へ伝えても良かったのですが、何分にも前例がないことですからね。こうして私が、自分で出向いて参りました。それにね、私もやっぱり、貴女の喜ぶ顔を見たかったのですよ。ははは…」

雅量の笑顔に裴璆が、やはり笑顔で応えながら口を挟

む。

「ははは…、そうですか。いや、あなたのお気持ちは良くわかりますよ。それにしても、この度のことでは、大変なご苦労をおかけ致しましたなあ。そうですよねぇ、茉莉花どの」

「ええ、本当に、何とお礼を申し上げてよろしいのか…。帝にお目にかかれるなんて、何だか夢のようでございます。有り難うございました」

淑やかな仕種の中で、精一杯の礼を述べる茉莉花を見つめながら、雅量が機嫌よく頷いた。

「なんのなんの…。しかし、うまく行って良かったですよ。何しろ、忠平公は石橋を叩いても渡らない方ですからね。なかなか良いお返事が貰えなくて、これでも随分と気を揉みましたぞ…」

茉莉花が雅量の顔をじっと見つめて、眉を可愛くひそめながら恐縮する。

「さようでございますか？　それは、大変でございましたね。本当に、何から何まで、すっかりお世話になりました…。それで、何時、お二方にお目通りできるのでしょうか？」

「明後日の辰の刻に、小一条第で会って頂くことになりました。勿論、裴璆どのや小次郎も一緒です」

「良かった！　遥々と、日本へ渡ってきた甲斐がございましたわ…」

茉莉花が加わって、部屋の中が一段と賑やかになった時、狩衣姿の若い男が盃の手を休めて、誰にともなく呟いた。

「おやおや…、忠平公は優柔不断でとらえどころのない方ですぞ。会わないうちから喜んで、がっかりなさらなければよろしいが」

部屋の中の盛り上がった雰囲気が、水を浴びせられたように冷え込んで行く。ぶしつけな言葉に驚いた茉莉花が、初めて男の顔を見る。しかし、男は別に茉莉花を見返すわけでもない。艶やかな黛の下の目を正面へ向けたまま、再び盃を口へ運んだ。

雅量は顔を微かに歪めながら、茉莉花へ向かって苦々しげにとりなした。

「許されよ、茉莉花どの。この男は、つい先日、都へ戻って来た藤原純友と言う者です。小一条の大臣の身内の一人で、忠平公の使い走りをしています。しかし、都の中では珍しく、異国の知識があるようだ。それで、貴女に興味を持ったのでしょう。どうしても会いたいと、人を通して頼んで来た…」

「……」

「実は、余り気が進まなかったのですけどね。しかし、忠平公までが口添えなさいましたのでな…。渋々連れて来たと言うわけですよ」

なるほど…、忠平公の身内なのか。道理で、遠慮のな

い話し方をする。茉莉花は雅量に向かって、わかりました…と、微笑みかける。それを見て、ほっとした雅量が、茉莉花へ微笑み返しながら付け加えた。

「しかし、この男はやはり、一通りの挨拶も出来ないほどの田舎者でしたな。何れにしても、気になさらないことだ…」

純友と呼ばれた男は、雅量の苦言を何処吹く風と聞き流し、酒を一気に飲み干して盃を置いた。そして、茉莉花の方へ向き直り、神妙に両手をつきながら、いきなり掠れた声で名乗った。

「伊予国の住人で、藤原純友と申します。雅量の殿に、ご無理を申し上げて参上致しました。礼儀を知らない田舎者でございますが、どうかよろしくお見知りおき下さい」

作法どおり礼儀正しく、彼女に向かって丁寧に拝する。聊か芝居がかっているが堂々としており、それなりに見事である。しかし、彼は頭を上げると、直ぐに表情をくずして磊落に笑った。

「ははは…。無理をすれば、挨拶が出来ないこともないのですが、それでは窮屈でたまりません。今日のような内々の集まりでは、一つ勘弁していただきましょう…。それに…ですな、美しい方にお目にかかったからでしょう。せっかく考えてきた口上を、すっかり忘れてしまいました。あっははは…」

純友は気さくに言い放って、けれんみなく笑う。優しい顔に似合わない太い声で、どことなく育ちの良さを感じさせる。

悪い男でもないようだ…と、茉莉花も思わず微笑んだ。雅量が苦笑しながら後を引き取る。

「なるほど、一通りの礼儀は心得ておられるようだ。今を時めく、小一条の大臣のお身内だけのことはありますな。確か、お父上の良範どのが、忠平公の従兄弟にあたる家柄でしたか…？

何れにしても、田舎者と申し上げて失礼した。やはり、我国きっての名族は違いますな」

「名族…？」

純友が雅量の辛辣な言葉に、細い目を光らせながら切り返す。

「たとえそうだとしても、私は紛れもなく田舎者です。いやさ、別に繕う積りはない…」

田舎者だと胸を張る純友に、小次郎が興味深げに目を向ける。それに気がついた純友が、一緒にするな…と、苦笑しながら目をそらす。彼は敢えて茉莉花に向かって、言い訳するように付け加えた。

「しかしですね、茉莉花どの。貴女の国でもそうでしょうが、何処の国でも権力争いは厳しいものです。敗れた者や、権力の中枢から弾かれた者は田舎へ落ちて行くほか仕方がない。私の家も、父が余りにも早く亡くなって

しまったと言うことでしょうな…」

「はて、お幾つの時でしたかな？」

茉莉花に代わって、気のない聞き方をする雅量に、純友が今度は律儀に答えてくる。

「七歳になった時でした。だからですよ…、乳母の縁で伊予の日振島で育ちました」

「それから後は、したい放題にして暮らされたと言うわけですか…？」

雅量の言葉には毒がある。しかし純友は、今や敢えて逆らわない。

「左様…、したい放題やりましたかな？　波を枕に船で暮らし、瀬戸の海は勿論、遠く唐や新羅の海へも出かけたものです。お陰で、異国の事情にも少しは詳しくなりました」

「ほう…」

「しかし、まともに働いて、大勢の郎党を食べさせるのは難しい。時には荒くれどもを使って、際どい悪さもやりました…。多分、そのためでしょう。世間から何時の間にか、伊予の鬼藤太と、仇名で呼ばれるようになったのです。ははは…、悪いことは出来ませんな」

純友は、明るく出自を述べた後、茉莉花を見つめながら、わざとらしく声をひそめて言った。

「茉莉花どの、そうなりますとね、世間の風は冷たいものです。誰一人私を名族などとは思わない。もちろん忠平公も、私を正当に扱うはずがありません…。情けないが、雅量どのが言われる通りだ。伊予掾とは名ばかりで、この度やっと都へ出て、忠平公の使い走りにありついたと言うわけです。でも、文句を言っても、仕方がありませんや。これもやはり、身から出た錆なのでしょうからね…」

ぼやいているのか、楽しんでいるのか…、彼の口調には、もう一つはっきりしない所がある。酒が程よく回ってきたのかもしれない。純友は、ほんのりと赤く染まった顔で、今度は気炎をあげてきた。

「しかしですね、忠平公と言っても、別にたいした男ではございません。彼はただ、運に恵まれただけですよ。これと言った能力も無ければ、そうかと言って、決断力があるわけでもない。不思議なことに、上位の人が皆死んだ。それで、何時の間にか権力を握ることが出来たのです。ですからね、茉莉花どの…。彼にはあまり、大きな期待を抱かない方が良いですよ」

酔いに任せて、忠平を散々こき下ろしながらも、純友の目は酔っていない。考えようによっては、茉莉花の表情を窺っているようでもある。何とも油断が出来ない物言いに、茉莉花は改めて気持を引き締めながら、純友の美しい顔を見つめた。

純友の饒舌を黙って聞いていた小次郎は、頃合を見計らって盃を置き、重い口を開いて初めて二人の間に割り

込んだ。
「純友どのと言うので、一体どんな公達かと思っていたのだが…」
「……」
「そうか…、お主が伊予の鬼藤太か！　お主のことは噂に聞いたぞ。派手な海賊働きの割に抜け目がなく、今まで尻尾を出したことがないそうだな。それにしても、噂の通りだ！　女性のような美しい姿をしている…。しかし、そのお主が、まさか忠平公のお身内だとは知らなかった。世の中は結構面白いものだな」
純友が、初めて正面から小次郎を見た。彼の顔から笑みが消えて、黛の下の細い目が潤みながらも妖しく光る。
「ほう、ご挨拶だな。お主、伊予の鬼藤太を知っていたのか？　しかし、私もお主を知っている。滝口一の剛の者とか…。打ち物取っては、敵う者が無いそうだな」
「……」
「会いたかったぞ、小次郎！　私が雅量どのに無理を言って参上したのも、ここがお主の屋敷だからだ。若いが、さすがに良い面構えをしている。何時か二人で、ゆっくりと盃をかわしたいものだな」
俺は、ごめんだ…と、小次郎は心の中で言った。この男には、どこか無頼の臭いがする。それは良い。しかし、女のような姿が気に食わない。それに…、男にしては余りにも美し過ぎる。女らしくて美しいだけに、どこか胡散臭いのである。立派な男が眉を剃って、黛を引くこともなかろうが…。それに、その長い目尻は何なのだ？小次郎は、気を引き締めて睨み返した。純友の目が輝く。益々妖しく光って、二人の間に不穏な空気が漲った。
最初に動いたのは小次郎である。彼が機先を制して、いきなり起き上がろうと膝を立てた時、純友が逆に軽く息を抜いた。詰まったはずの二人の距離が僅かに離れ、気合をそがれた小次郎が、辛うじて立つことを思い止まる。純友の小さな赤い唇が、してやったり…と微笑んだ。彼は小次郎から目を離し、その場の空気を押さえるように言った。
「しかし…、今日は駄目だ！　今日の私は、お主と飲むよりも、このお方と話をしたい」
純友は膝を立てて坐り直し、茉莉花の方へ身体を向けた。彼は、すっかり小次郎の存在を忘れたように、彼女の顔をじっと見つめる。
しかし、茉莉花も落ち着き払って純友を見つめ返し、まるでたじろぐ様子はない。純友は、満足そうに頷きながら口を開いた。
「美しいお方だ。しかも、あどけない顔をしていらっしゃる。この方が都の闇を支配している、あのおどろおどろしい菅帥（かんのそち）（道真）の孫娘であるとは、とても考えられない」
「……」

純友の無礼な物言いに、茉莉花は表情を硬くして沈黙で応える。純友は委細構わず低く言った。
「ところで茉莉花どの。出来れば、教えていただけないか？　貴女は、渤海国を滅ぼした契丹人が、今度は、日本国を攻めると言っているようだ…。そうですな？」
「はい…」
「契丹人は遊牧の民だ」
「……」
「遊牧民は海を知らない。果たして、彼らが船を操ることが出来るだろうか？」
純友の声が、次第に強くなって茉莉花に迫る。茉莉花は彼を見つめ返して、余裕を持って微笑んだ。
「契丹人は、船を操る必要はありません。渤海人を支配すれば、彼らが船を操ります」
「渤海人が…？」
純友は、思わず唸った。なるほど…、その通りである。俺は今まで、契丹人が遊牧の民であることに拘り過ぎていたようだ。
今度のことで忠平から諮問を受けたとき、俺は契丹入寇の可能性を一笑に付した。遊牧民は海を怖れる。彼らが自ら、海へ乗り出すことはない…と。
しかし、さすがは百戦錬磨の忠平である。直接、茉莉花に当たって調べて来い…と、俺に命じた。渋々ここへ来てみたが、やはり…、調べて見るものだ。茉莉花の言う通り、契丹人が渤海国を支配すれば、渤海人が船を操る。契丹人が攻めて来ないとは言えないのである。要は…、彼らが海への恐怖を拭い去り、日本侵寇を決意するかしないかである。
そして、もしも彼女が言う通り、契丹皇帝が日本国を攻める積りでいるとすれば？　日本国は、渤海人を助けなければならない。俺は忠平に、俺の見込みが間違っていたことを伝えなければならない。彼は果たして、日本国の為に、妥当な施策を打ち出すことが出来るだろうか？
しかし、それは俺の与り知らないことである。俺はただ、契丹侵寇の可能性があることを報告し、頭を下げればそれで済む。
それにしても俺は、都へ来てからおかしくなったのではなかろうか？　茉莉花の言ったことは、当たり前のことである。しかし、俺の頭は、そのごく当たり前のことを考えなかった。この俺が、何時の間にか思い込みに縛られるようになった。都へ来てほんの僅かな間だが、都人に毒されたのではなかろうか？　陸に上がった河童、いや、陸に上がった海賊か？　そう思うと、純友はおかしくなった。しかし、それがわかっただけでも、ここへ来た甲斐があったと言うものだ。彼は、明るく笑いながら言った。
「ははは…。なるほどそうですな。おっしゃる通りで

ございましょう。私としたことが、つまらぬことを申しました…」

「いいえ、私の方こそ失礼致しました。お許しくださいませ」

「とんでもない！　却って痛み入ります。それにしても貴女は、美しいだけではなく、非常に怜悧なお方のようですな。お会いできて幸せでした」

純友が再び、茉莉花の顔をじっと見つめた。彼の細い目から、何時の間にか激しさが消えている。彼は茉莉花の顔を値踏みするように見つめながら、感心したように呟いた。

「それにしても美しい方だ。しかも、それでいて棘がない。たとえ、菅帥の孫娘だとしても、別に怖がることもないようだ。それなのに…、忠平公ともあろう人が、何故、この方を警戒するのだろうか？　会いもしないで警戒するのだから始末が悪い。やはり、小鳥の羽音にも驚く小心者かもしれないな」

故意か過失か…。純友は心の中を披露しながら、尚も執拗に茉莉花を見る。不躾に若い男に見つめられた彼女は、きまり悪そうに視線を外した。

純友も、やっと自分の無礼に気がついて、神妙に頭を下げながら言った。

「これは、大変失礼しました。幾重にもお詫び申し上げます。実は…、今日、ここへ参りましたのは、貴女の口から直接、異国の話を詳しく伺いたかったのでございます。

しかし、いきなりと言うわけには参りませんよな？　いや！　わかります。今日のところは、退散することに致しましょう。どうせ明日、小一条第でお目にかかれるはずですからね」

彼は、茉莉花の意向に構わず一方的にまくし立てると、今度は小次郎へ向かって磊落に言った。

「小次郎、そう言うわけでな…。残念ながら今日は帰る。しかし、同じ忠平公に仕える身だ。これからは、会う機会も多くなろう。仲良くしようぞ。ところで、今日の酒は美味かった…礼を言うぞ。では、また会おう」

純友は盃を置いて居住まいをただし、誰にともなく大仰に拝した後、振り向きもせずに出て行った。何となく帰りを急ぐようであわただしい。しかし、去った後に微かな香が匂って、その場の空気を和らげる。全く心憎い振る舞いである。

暫くして雅量は、如何にも疲れたように、溜息を洩らして言った。

「ところであの男…、一体何をしに来たのだろうか？　どうせ、忠平公の使い走りのことだ。茉莉花どのの様子を、一足先に探りにきたのかもしれないな」

裴璆が雅量に頷き返しながら、盃を置いて怪訝そうに言った。

「そうですな。多分、そう言うことでしょう。それにしても開けっ広げな男だ。我らにそれを隠すでもない」

「それはそうですよ。ここは、日本国の都ですからな。いわば、忠平公の庭先です。忠平公としては、別に隠す必要もないのでしょうよ」

「なるほど、それもそうですな。我らは既に、忠平公の手中にあるわけか…。ところで雅量どの、それはともかく、純友どのが言い残した言葉が気になりませんか？　ほら、忠平公が茉莉花どのを、警戒されているとかいないとか…」

「ええ…」

「忠平公ほどのお方が、何故茉莉花どのを、そんなに警戒なさるのでしょうか？　渤海国の世子の妃であるとは言え、その渤海国も、今は滅びて既にない。茉莉花どのは、何の力も持っていない。たかが、日本国へ助けを求めに来た亡国の姫君ではないか？　純友どのを寄越したことも含め、度が過ぎるような気がしてなりませんな…」

「さようか…。しかし、あなたのように考えるのが自然かもしれませんな。それでは、丁度よい機会です。私の考えていることを申し上げましょうか？」

雅量は、おもむろに座り直して腕を組んだ。彼はこの際、今の都の複雑な事情と茉莉花の特殊な立場を、二人に話しておこうと思ったのである。裴璆も雅量の心の中の微妙な動きを感じ取った。彼もまた、坐りなおして雅量に答えた。

「ええ、ぜひお聞かせください」

「わかりました。それでは申し上げます。忠平公が、何故茉莉花どのを警戒なさるのか？　それはですね…多分、茉莉花どのが、道真どのの孫娘だからでございましょう」

（十四）

「お二人のことですから、多分、お気づきのことだと思いますが…。都では今年も春先から、咳病が流行って人々が苦しんでいます」

雅量は、居住まいを正して裴璆へ言った。裴璆は、茉莉花と顔を見合わせた後で、慎重に言葉を選びながら答えた。

「朱雀大路の犬走りに、多くの骸が転がっているのを見ました。並木の桜が咲き誇っていただけに、非常に無残な印象を受けましたね」

「そうでしたか…。多分、死骸があったのは、朱雀大路だけではないでしょう…。しかし裴璆どの、人々は、何も好き好んで、死骸を道端に放っているわけではございません。彼らはね、片づける気力さえも失っているのですよ」

雅量は軽く唇を噛んだあと、気を取り直したように再び話し始めた。

「延喜の初め頃ですから…、もう、三十年近く前になりますかね。この国では、その頃から、様々な異変が起こるようになったのです」

「天変地異ですかな？」

「ええ…。それも、非常に酷いものです。雨が止まないで、凶作になった年があるかと思うと、次の年には日照りが続きました。またある年には、大地震が起こって、多くの犠牲者が出ましたし、河川が氾濫して、数え切れない程の溺死者を出した年もあります。

四、五年前でしたかな…？　東国では何と、空から灰が降り続き、農作物が壊滅的な打撃を受けました」

「ほう…」

「水害や旱魃などの災害は、それこそ、殆ど毎年ですよ。これでは、都の人々が次第に疲れきって、気力をなくしてきたのも、無理がないではございませんか？

だからですね、今では行き倒れの屍を見ても、進んで片づけようとする者が、誰一人いなくなってしまったのですよ…」

雅量は、大きな溜息をついて、茉莉花の方へ視線を移した。

「ところで、茉莉花どの…」

「はい…」

「都の人々は、この災厄を、貴女の祖父の道真どのの怨霊が起こした…と、信じているのですよ」

「えっ！　お祖父さまの怨霊が？」

驚いた茉莉花が、思わず顔色を変えて雅量を見つめた。

雅量は、厳しい表情で頷くと、畳み掛けるようにして言った。

「延喜の初めの頃と言えば、ちょうど道真どのが、配所の太宰府で、憤死された時にあたります。人々が、そう考えるのは無理がないし、その方が却って、説明もつきやすい…」

「……」

思わず息を飲んだ茉莉花に、雅量が、止めを刺すように付け加える。

「茉莉花どの、都の人々は、すっかり怯え切っているのですよ」

厳しい口調にうろたえた茉莉花は、救いを求めるように、小次郎の顔を見た。小次郎がすかさず、声を荒げて雅量に噛みついた。

「雅量の殿、言葉が過ぎるのではございませんか？　たとえ、それが菅帥の仕業としても、茉莉花どのとは、全く係わりないではございませんか。そのような言い方はございますまい」

小次郎の激しい剣幕に、雅量は思わず我に返って頭を下げた。

「いや、申し訳ない。これは、大変失礼な物言いをしてしまいましたな…」

しかし、雅量は、直ぐに厳しい顔に戻ってつけくわえた。

「でもね、茉莉花どの。貴女が、今の都の事情を理解しようと思われるなら、どんなに辛くても、聞いて頂かなければなりません」

「はい…」

茉莉花は、神妙な顔をして頷いた。それはむしろ望むところである。私も、この国の都の様子を確かめて見たい。私の使命が果たせるかどうか、自分の頭で考えてみたい。

雅量が、話のきっかけを慎重に探りながら、言葉を選んで言った。

「ところで…と。貴女は、道真どのが帝の廃立を企てたために太宰府へ流され、憤死なさったことはご存知ですよね？」

「いいえ、詳しいことは存じません。父はもう、この国を後にしておりました…」

「そうでしたかね。それでは、その辺の経緯からご説明致しましょう」

雅量は、自分で盃に酒を注ぐと、一気に飲み干して言った。

「菅帥、いや、これは貴女のお祖父さまのことですがね…。何故、菅帥と言うのか？　実は、道真どのは、太宰の権帥に左遷されていた時に亡くなられました。それで我国では、道真どのを憚って、菅帥と呼ぶようになったのですよ」

茉莉花があやふやな表情で頷いた。それを見た雅量が、頷きながら茉莉花に言った。

「しかし、ちょっと、お聞き辛い所があるでしょうね？　それでは、今日のところは道真どの…と、お名前でお呼びすることにしましょうか」

傍で聞いていた裴璆が、それが良かろう…と頷いた。

雅量が頷き返して話し始めた。

「今年はもう、道真どのが右大臣になられた時から、そうですな、やはり三十年は経っていますね。まあ、大昔の話だと言っても良いのですが…。先ず、ここから話を始めましょう」

「はい…」

「さて、もともと学者であった道真どのを、政界へ登用されたのは、今、宇多院にお住まいの法皇さまでございました。その時はもう、法皇さまは帝位を退いておられましたが、帝（醍醐天皇）がまだお若かったので、政治の実権を確りと握っておられました。帝は英邁な方ですから、それが非常にご不満の様子でございました。しかし、この時、まだ御年十五歳でございましたから、それはそれで、仕方がなかったと言うことでしょう」

なるほど…と、裴璆が頷く。何処の国でも、幼帝が在位した時には問題が多い。裴璆は、渤海国の歴史を振り返って納得した。

「ですからね…、その頃の政治は、法皇さまの御指図の下で、左大臣の藤原時平公と道真どののお二人が、実質的に仕切っておられたと言うことです。

ええ、そうですね。時平公は、忠平公の兄君にあたります」

雅量は、裴璆の顔を見ながらつけ加えた。

「ところで、法皇さまは長い間、摂関家の専横に苦しまれた経験がございましたので、出来るだけ、時平公の権勢を抑えようとなさいました。朝廷の大事については、いつも密かに道真どのと謀り、帝の擁立という最も重要なことでさえも、時平公をはずして、二人だけでお決めになったのでございます」

裴璆が黙って頷いた。法皇がどんなに道真を寵愛したか、その実態が良くわかるような気がする。雅量が裴璆の理解を確認して話を続ける。

「そして、道真どのも…ですね。法皇さまの信頼に応えるだけの、十分な力を持っておられました。摂関家の力を抑えるために、粛々と、国政の改革を推し進められたのでございます」

「ほう…、それはたいしたものですね。しかし家柄が低い者が、摂関家の力を抑えようとすれば、貴族の反発が非常に強くなったでしょうね？」

裴璆は、渤海国の出来事を思い出しながら言った。実は、渤海国が滅びた原因の一つが、政権争いであったのである。その政権争いも、施政者のちょっとした不用意な思い付きから深刻になった。それが渤海国の内政を乱し、国の滅亡につながったのである。あの時、内政さえ確りしていれば、あんなに簡単に、契丹人に滅ぼされることもなかったなかろうか？　裴璆は当事者であっただけに、そのことを考えると、今でも尚、忸怩たる想いがある。

ところで、幸いにもこの国は島国である。しかし、これからは、島国であっても安心することは出来ない。裴璆の言葉には、言外に、内政を乱した法皇の恣意的な政策への批判が含まれていた。雅量もそれを敏感に感じ取って、我が意を得たと頷きながら言った。

「そうです。時平公のまわりに、そうした貴族たちが大勢集まって来て、法皇さまの政権を転覆させる計画が着々と進められて行きました」

「なるほど…」

「ところで、時平公はその時、やっと三十才を過ぎたばかりのお年でしたが、その頃にはもう、氏の長者にふさわしい立派な貫禄があり、摂関家の権勢を回復する使命感に燃えておられました。

しかも、若さに似合わず、なかなかの策士でございま

した。法皇さまの権力を抑え、道真どのを追落とすためには、帝の力を利用するほか道がないと考えられ、非常に巧妙な手段を使われたのです」

雅量が、一息ついて裴璆を見る。話に引きつけられた裴璆が、思わず膝を乗り出した。雅量が、唇を軽くなめながら続けた。

「時平公は帝に、搦め手から働きかけられました。ご自分の妹で、皇妃の穏子さまを唆し、道真どのが法皇さまと謀って帝を廃し、皇弟の斉世親王を立てようとしていると讒言させたのでございます。ところで斉世親王は、道真どのの娘婿でもございました。帝が一も二もなく信じ込まれて、烈火のごとくお怒りになったのも当然のことかもしれません」

「……」

「それだけではありません。帝は非常に英邁な方でございました。この度のことは、ご自分が法皇さまから権力を取り返す、絶好の機会だと思われた節があります。直ぐに、適切な措置を取られました。時平公と連携して法皇派を抑え、道真どのを太宰権帥に左遷されたのでございます」

「その時にはもう、法皇さまには、帝をお止めする力がなかったのでしょうか？」

茉莉花が、たまりかねて口を挟んだ。雅量が茉莉花を見つめ返しながら頷いた。

「ええ、残念ながらそうなのです。驚いた法皇さまは、慌てて内裏へ駆けつけられましたが、門は固く閉じられて、中へ入ることが出来ませんでした。余りのことに法皇さまは、門前に草座を敷いて坐り込み、抗議されたと聞いております」

「帝も、お父上にあたる法皇さまに、随分酷いことをなさったのですね」

「多分、帝の背後に、時平公が控えておられたのでしょうね。しかし、帝が毅然とした態度を取られたので、法皇さまも、どうすることも出来なかったのです。と言うわけで、法皇さまは、これがきっかけとなって、政治的に失脚なさいました」

「ご油断があった…と、言うことでしょうな？　国政を執る方は、ご自分の子供と雖も信じてはなりません。これは、帝王学の初歩ではありませんか」

裴璆が、ため息混じりに呟いた。雅量はあいまいな微笑を浮かべて言った。

「そうですね…。しかし、もともと、道真どのを登用して、摂関家を抑えようとしたことが、無理だったのかもしれませんな」

「なるほど、それも一理ある…」

「それはともかく、こうして、道真どのは都から千五百里も離れた太宰府へ流されましたが、それは大変悲惨な旅だったようでございます。同行を許されたのは、幼い

二人のお子さまと老僕だけで、太宰府までの道中は、食糧や代え馬も与えられなかったのですからね」

「ほう…」

「しかし、自分で持って行ける食料には限りがございます。道真どのの一行は、飢えに苦しみながら、護送の兵士に追い立てられました。太宰府に辿り着いた道真どのは、足の病にも罹り、まるで乞食のように痩せ細っておられたそうです」

「前の丞相への待遇としては、頷けませんね」

裴璆が、再び口を挟んだ。話が進むにつれて、彼は次第に道真に、同情するようになってきたのである。

雅量も相槌を打ちながら、それでも淡々と、見てきたように話を進める。

「配所の太宰府での生活は、道中よりもずっと悲惨なものでした。茅葺きの小さな家屋は、所々壊れていたうえ、食料も支給されません。飢えを充たすためには、自分で敷地を耕すほかありませんでした」

「酷いものですな…」

「ええ…、酷いものです。それに、馴れない野良仕事は、病の身には、相当こたえたのではないでしょうか？名もない土民からも、よろよろと鍬を握る姿を指差されて、あれが都の宰相さまか…と、嘲られたことがあるようですよ」

「お気の毒に…」

茉莉花が、思わず口を挟んだ。父の大宿祢は、自分の父親の配所における悲惨な生活を、果たして知っていたのだろうか？　茉莉花はふと、父の顔を思い出した。しかし、何れにしろこのことは、父に知らせることは出来ない。

雅量は、悲惨な話を口にしながら、次第に疲れを覚えて来た。しかし、彼は気を取り直して話を続けた。

「道真どのは、耐え難い恥辱と苦痛を受けながら、終にはその日の糧にも困るようになりました。そしてとうとう、都から連れてきた幼い子供を、相次いで餓死させてしまったのです」

子供に、何の罪があるのだろうか？　会ったことがないとはいえ、私の伯父に当たる人だ。茉莉花は密かに唇を噛んだ。

「道真どのはですね…、ぐったりとして、泣く力もなくなった二人の子供を抱きながら、みすみす見殺しにしなければならない悔しさで、気が狂わぬばかりになられたと、聞いております。彼はその時、帝や時平公を始め、自分をこのような目に遭わした者に、固く復讐を誓われたと言うことです。人の親として、それもまた当然のことでしょうね」

茉莉花は、祖父にまつわる悲惨な話を聞きながら、声もなく頷いた。

雅量が辛そうに顔を歪めながら尚も続けた。

「さて、復讐の権化と変わり果てた道真どのは、我が身を地獄へ落とされることを選ばれました。それから、実に七日七夜…。自ら全く食を断ち、天を仰ぎ身を砕き、呪いの言葉を吐きながら、浅ましくも憤死されたそうでございます。

それは、太宰府に流されてから、僅か二年後の延喜三年（西暦九百三年）の春先のことでした」

雅量は、道真が憤死するまでの長い話を語り終えて、ほっと一息をついた。

しかし、彼は休むまもなく、道真が死んだ後から起こるようになった不思議な出来事について、語り始めたのである。

（十五）

「この国では、道真どのが亡くなった時から、不思議でしかも、痛ましい出来事が相次ぐようになりました。天変地異だけではなく、道真どのを陥れた人々が、悲惨な最後を遂げるようになったのです」

雅量が、横目で茉莉花を見ながら息をついた。茉莉花は行儀良く座ったまま、落ち着いて雅量を見つめ返す。

雅量が膝を左右に動かしながら話続けた。

「道真どのが亡くなった時から、丁度五年後の延喜八年（西暦九百八年）十月のことです。先ず、参議の藤原菅根どのが亡くなりました。この方は、法皇さまが道真どのの左遷を阻もうと内裏へ駆けつけられた時に、門を閉めさせた人でございました。彼は何と、三日三晩も高熱に冒されて、文字通り悶死なさったのでございます。

この方の今際の際のご様子は、まことに凄惨なものでした。手で宙をかきむしってもがき苦しみ、褥を蹴飛ばしながら、菅帥だ！　許してくれ…と、苦しそうに叫ばれたと言うことです」

「ほう…、瀕死の床に、怨霊が押しかけて来たのですね？」

裴璆が、雅量の顔を見ながら口を挟んだ。雅量が、頷きながら答える。

「ええ…、彼は間違いなく、道真どのの怨霊を見たのでしょうね。その取り乱しようは、並大抵なものではなかったと聞いております」

「なるほど…」

「そして、翌年の四月のことです。とうとう、あの時平公が倒れられました」

時平の指示を受けて、内裏の門を閉ざした菅根さえも取り殺されてしまったのである。時平が無事で済むはずがない。

茉莉花は魅入られたように、雅量の顔を見た。彼は淡々と話を続けた。

「時平公の病は、まことに不思議なものだったようです

ね。

寝所で休まれていた時平公の両耳から、突然二匹の青い蛇が現われ、交互に首を締めつけたとも、首筋を噛み切って、血を吸い取ったとも言われています。何れにせよ、苦痛にのたうちまわりながら、身罷られたようです。時平公は、その時、まだ三十九才の男盛りでございました」

「三十九才ですか？　これからですよね…」

裴璆が、何かを思い出すように指を折った。多分、若くして亡くなった弟の、今際の時を思い出したのではなかろうか？

「ええ、相手は怨霊ですからね。却って、それがつけ目でしょう。

それから、更に四年後…。時平公とともに、道真どのを追落とした右大臣の源光（みなもとのひかる）どのが、鷹狩の途中で亡くなりました。狩に夢中になって、何時の間にか一騎だけになり、馬もろともに泥沼の中へ落ちたのではないか…と、言われております」

「…と、言われている？」

裴璆が思わず口を挟んだ。彼は雅量の言葉の語尾に、何か不自然なものを感じたのである。雅量が裴璆に向かって、頷きながら答えた。

「ええ、そうなのです。実はね…未だに、この方のご遺骸はもちろん、馬の死骸も見つかっていないのですよ。世間では、道真どののお怒りが、余りにも激しかったために、遺骸を隠されたのではないか…と、噂しているようです」

「しかし、それにしても面妖な…」

裴璆が、小首をかしげながら呟いた。雅量は裴璆を見つめながら、改めて盃を取った。もともと面妖な話をしているのである。こんなことに驚いては、この国に住むことはできない。

彼は、盃で軽く唇を湿らせながら、尚も話を前へ進めた。

「そして、延喜二十三年（西暦九百二十三年）のことです。禍が終に、帝（みかど）の周辺にも及び始めました」

「帝にまでも…で、ございますか？」

茉莉花は、次第に息苦しさを覚えてきた。祖父の怒りは、全く尽きることがなかったようである。私もまた、激しい怨みを契丹人に抱いている。祖父の怨みを、形を変えて引き継いだのだろうか？　雅量が茉莉花を見つめて重々しく頷いた。

「その年の、三月の初めの頃でございました。皇太子の保明親王（やすあきら）が、俄かに身体の不調を訴えられて寝込まれたのでございます」

「ほう…、先ずは皇太子からですか？」

裴璆が、感じ入ったように口を挟んだ。本人よりも息子に祟る…か。怨霊のやり方は、実に堂に入っているではないか。

「ええ、そうです。実は…、奇怪なことに、皇太子の寝所で毎晩、カリッカリッと一晩中、無気味な音がするようになったそうです。多分それが、お身体に障ったのでしょうね」

深夜に音だけが、カリッカリッと…聞こえてくるのか？　茉莉花は、思わず背筋に冷たいものを感じて、顔をしかめた。

「それで…、衛士たちが、不審に思って床板を剥ぐと、何と寝床の真下に深い穴が掘られていて、その中に白髪の老婆がいたのです。しかも、不気味なことに老婆は、折れた梓弓を齧りながら、一心不乱に皇太子を呪っていました。衛士が襟を持って引きずり出そうとした時、老婆は怒り狂って暴れまわり、しわがれた声を張り上げて叫びました」

「……」

「うらは、天神さまのお使いじゃぞ。うらに触るな！　うらに触わると祟りがあるぞ！　うらは…な、天神さまのお言いつけで、帝に怨みを晴らしに来たのじゃ。良いか！　皇子の命は、うらが貰った…と」

ひょっとしたら、老婆は巫女かもしれない…と、裴璆は思った。これは、大いにあり得ることである。渤海国にも、霊能力が強い巫女は沢山いた。それにしても凄まじいものだ。

「衛士が怯んだ一瞬の隙に、老婆は不気味な笑い声を残して、あっというまに消え去ったそうです。それを間近で御覧になった皇太子が、そのまま無事で済むはずがございません。それから後と言うものは、カリッカリッと梓弓を噛み砕く音が、耳から離れることがなかったようでございます。皇太子は浅ましいまでに怯えられ、終に儚くなられたのでございます」

雅量が手を伸ばして盃を取った。今日はこれで、もうどれくらい飲んだだろうか？　しかし、まだ、話さなければならないことが残っている。彼は一息ついて話しを続けた。

「そればかりか、これをきっかけに、怨霊が宮中に我が物顔で姿を現わし、大変な騒ぎになりました。たまりかねた帝（みかど）は、天台座主の増命（ぞうみょう）をお召しになり、百日余りも祈祷させましたが、宮中の異変は、一向に止みませんでした」

「それは、そうでしょうな。坊主に出来ることなんか、高が知れています。彼らの祈祷なんか、効果があるはずがありません…」

裴璆が、今、初めて自分の考えらしきものを口にした。彼はどうも、巫女を信じて僧侶を馬鹿にしている所があるようだ。しかし、雅量は気がつかない。彼は気力を振り絞って話し続けた。

「相次ぐ怨霊の祟りに、ご気丈な帝（みかど）も、どうすることも

出来ませんでした。次第に病に臥されるようになって、とうとう、道真どのに屈服されたのでございます」

「え、屈服された…のですか？」

「ええ、完全に屈服されたと言って良いでしょう…。三十年近く前に出された左遷の詔書を破棄し、道真どのを元の右大臣に戻したうえ、位を一階級進めた正二位を追贈なさったのでございます。

一度出した詔書を破棄することは、極めて異例なことですからね。このことからも、帝が道真どのの怨霊をどんなに怖れておられたか…、良くわかるのではないでしょうか？」

「ええ…」

「しかし、左遷の詔書を破棄してからも、祟りや異変が収まりませんでした。今度は、時平公の血を引く皇太孫の慶頼王が、突然身罷られました。僅か五才で、お亡くなりになったのでございます」

「ほう…」

「それだけではありません。同じ年…、都の中に隕石が落ちて来ました。それに、洪水や火災をはじめ、疫病などは、それからも殆んど毎年のように起こったのです。帝が、益々やつれて行かれたのも、当然と言えば当然でしょうね？」

「そうですね…」

裴璆は、一旦頷きながらも首をかしげた。彼は上目で雅量を見ながら、遠慮がちに口を挟んだ。

「しかし、それは一体何故でしょうか？　道真どのを本官に復し、位も一階進めて差し上げた。それなのに、天変地異が止まないと言うのは？　これは一体、どう考えれば良いのでしょうね？」

「やはり、それは…。まだまだそんなことでは、道真どののお怒りが解けないのだと、考えるほかないでしょうね」

「しかし…、では、一体どうすれば、彼の怒りが解けるのですか？」

「さぁ、それは…」

雅量もさすがに、それから前へ踏み込んでは答えきれない。菅帥は帝の命を狙っている…と、そこまで口に出すことは出来ない。裴璆は、雅量の戸惑った顔を見て、彼の考えていることに気がついた。しかし裴璆は、雅量と全く違ったことを考えていた。彼は慌てて、手を横に振りながら言った。

「いえ！　雅量どの、そうではなくて…。こんな風には、考えられませんか？　洪水や火災、或いは疫病とか凶作は、何時の世にもあることですよね。ですから、起こった災いの全部が全部…、菅帥の仕業であるとは、言い切れないのではなかろうか？　中には本当に、自然に起こったものも、あったのではないか…と」

それは、確かにそうかもしれない。中には雅量も、首

をかしげたものもある。誰かが、それをわざと、菅帥に結び付けて…。しかし、誰が？　何のために？　雅量は、首を激しく左右に振ってその考えを退けた。これ以上、先へ踏み込むことは危険である。彼は、裴璆を見つめながら、顔を引き締めて言った。

「そうかもしれません。しかし、都の人々の殆んどが、天変地異は全て菅帥の仕業であると思っています。ですから、ことの真偽よりも、噂の持つ力の方を重視しなければならないでしょう」

「なるほど」

「しかも、現実に今…。帝は、道真どのの怨霊を、最も怖れておられます。茉莉花どのもあなたも、このことを頭に良く入れて置いてください」

「と、言いますと…？」

「実はね…、帝はつい最近、中宮穏子さまの第二子で、僅か三才の寛明親王を皇太子にお立てになったからなのです。この方は、帝と中宮にとって、いわば最後の切り札です。この方だけは何としても、怨霊の犠牲にすることは出来ません。帝は今、追いつめられておられると言っても良いかもしれません」

「……」

「そして、中宮穏子さま…。この方が、帝よりも遥かに強く、菅帥を怖れていらっしゃることは、容易に想像がつきますよね」

「ええ…」

「その、ご心配ぶりですがね、これは全く異常と言っても良いほどです。中宮は、道真どのの怨霊を怖れて、幼い皇子を男子禁制の弘徽殿へ引取られました。そして、塗籠の部屋の格子を閉ざしたまま、昼も夜も灯をともして、御帳台の中で育てられているのですからね」

「弘徽殿へ…ですか？」

「そうです。しかし、それと言うのも無理はありません。今年も疫病がはやって、大勢の人々が亡くなっています。怨霊が、あれだけ暴れまわっているわけですからね。仕方ないことでしょう…」

長い話を、やっと終えた雅量は、溜息をつきながら言った。

「そう言う訳ですからね、裴璆どの。道真どのの血を引く茉莉花どのが、突然、海の向こうからやってくれば、忠平公でなくても、警戒なさるのが当然でしょう。帝や中宮は、多分、忠平公よりもっと深刻に警戒なさっておられるはずですよ」

「なるほど…」

「何れにしても、茉莉花どのが、微妙な立場にあることは間違いありません。決して、油断をなさらないようにして下さい」

雅量の言葉に頷いた茉莉花は、思わぬ展開に途惑っていた。

法皇が政治的に失脚した今、道真の血筋は、却って邪魔になっていたのである。とんだ見込み違いと言うものだ。

しかし、ここまでくれば仕方ない。叶わないまでも、使命を果たすよう、一生懸命努力するほかないだろう。茉莉花は困難な前途を思いやりながら、唇をぐっと噛み締めた。

（十六）

これは夢だ！　夢に違いない…。私はきっと、夢を見ているのだわ。

茉莉花は、廊下を歩く自分の身体を見つめながら、何度も繰り返して呟いた。寝ていたはずの私を、一体誰が起したのだろうか？

誰かが私を呼んでいる。声は聞こえないが、誰かが確かに呼んでいる。茉莉花の目には、廊下を歩く自分の身体が見えるのである。こんな夜中に、私は一体、何処へ行こうとしているのだろうか？　それにしても私は、自分の身体を何処から見ているのだろうか？

これは夢だ。私は夢を見ているのだ…。茉莉花は再び、口の中で呟いた。

私の身体が、廊下を下りる。裸足のままで庭の中を歩いて行く。目の前に、枯れた池が見えてきた。気がつくと、真っ暗な闇の中で、満開の山桜が妖しいまでに美しく咲いている。風もないのに、花びらだけが、音もなく散っている。

枯れ池の中の岩の上に、誰かが一人で坐っていた。青い炎が岩の後ろで、まるで仏さまの光背のように、怪しく燃え盛っている。男のまわりの空間だけが、次第に明るくなってきた。

あの男は、誰…？　一体、何処の誰かしら？　髪の毛が伸び放題に伸びて、腰の辺りに垂れ下がっている。頭の上には、身分を示す冠がない。長い髭が顔をむさくるしく蔽い尽くし、髭の中から剥き出した大きな黒い二つの目が、私を激しく睨みつける。なぜ…？　どうして彼は、私をにらむのだろうか？　あっ、嫌だ！　汚い！　身体を被っている僅かな襤褸の隙間から、垢にまみれた褌がこれ見よがしに覗いている。これでは、まるで乞食ではないか。

おや…、男は両手に何かを二つ、大事そうに抱えている。あれは一体何だろう？　あの、小さなかたまりはどこかで見たような気がしないでもない。しかし、あれは？　あの、枯れ木のように細いものは何なのだ？　先が、もみじのように広がっている。ああ…そうか！　ひょっとしたら、手と足だ…。もしかしたら、あれは痩せ細った手足かもしれない…。

それならあれは？　あの丸いものは、何なのか？　黒いものが、ほんの僅かこびりついている…。わかった！　頭だ！　小さな、小さな、頭なのだ。

そうだとすると？　間違いない！　あれは、子供だ…。二人の人間の子供なのだ。あんな姿に成り果てているが、間違いなく人間の子供なのだわ…。それにしても二人とも、そのお腹はどうしたの？　膨れている！　膨れている…。はちきれそうに膨らんでいる。まるで、地獄草子に出てくる、餓鬼のお腹にそっくりではないの！

あら、いやだ！　私がいる。男の前で、少し離れて跪いている…。私の身体が何時の間にか、男の前で跪いている。

あっ！　男の分厚い真っ赤な唇が、小刻みに震えてきた。何かをしゃべっているようだ。耳を澄ますと、声が聞こえる！　ぼそぼそとした声が聞こえてくる。あの男の声が聞こえてくる…。

梵土、天竺にまします天帝もご照覧あれ！　我、勅を奉じて丞相となり、帝を援けて国維を定め、百姓の安寧をはかる。

然るに、何ごとぞ！　佞人の讒により官を謫されるとは…。生きて九錫の功を積むも、死して尚、冤罪の辱めを負う。安んぞ能く、この宿忿を償わざらんや。ここに、九泉より甦って怨霊となり、十六万八千の悪鬼を率いて、佞人の肉を食らわむとす。我、国に仇をなすにあらず。我に仇せし者に復せむとするなり。必ずや誓って、讐を為すべし…。

じょうしょう…？　丞相と言ったのですね！　お祖父さまだわ。あれは間違いなく、私のお祖父さまなのだわ…。

おや、どうしたのだろう？　男の前に跪いていた私の身体が立ち上がった。ああ…、お祖父さまの方へ歩いて行く。

声が聞こえる。お祖父さまの声が聞こえてくる。帰れ！　帰れ…。お祖父さまが呼んでいる。私の身体が、お祖父さまのもとに、引き寄せられて行く。

いけない！　行ってはいけない…。茉莉花は本能的に危険を悟った。お祖父さまの所へ、行ってはいけない！　ほら、男の子が泣いている。行けば、あの子のようになる…。お祖父さまが呼んでいる。私の身体を呼んでいる。眉をしかめて…、涙を流して…、ほら！　あんなに苦しそうに顔を歪めて、一生懸命呼んでいる。でも、嫌だ！　私は嫌だ。私は、まだ死にたくはない…。あっ、おじいさまが…、私身体に手を伸ばしてきた！

嫌！　嫌だ、私は嫌だ…。助けて！　お願い、私を助けて！

恐怖に襲われた茉莉花が、全身の力を振り絞って、もがきながら懸命に叫んだ。

しかし、もがいても、もがいても、身体は祖父に引きつけられる。冷や汗がしたたる。恐怖に身体が縮まりながら、祖父のもとに引きつけられる。嫌だ、助けて！　目の前が白くなる。何もかも、色がなくなり消えて行く。落ちる、落ちる、落ちて行く…。

何も見えない暗闇の中を、一体どれくらい落ちて行っただろうか？　遥か下の底の方から、鈍い光が射して来た。茉莉花の瞼に、懐かしい顔が浮かんでくる。彼女は叫んだ。何もかも忘れて、小次郎の名前を懸命に呼んでいた。

助けて！　小次郎さま…、私を助けて！

「どうした、茉莉花どの！　確りするのだ！」

小次郎が茉莉花を抱き上げて激しく揺すった。彼は夜更けに不思議な胸騒ぎを感じて、寝つかれないままに庭へ出た。そして枯れ池の中で、泣きながら悶えている茉莉花を見つけたのである。

小次郎の腕の中で、真っ青な顔をした茉莉花が、虚ろな目を見開いて叫んだ。

「お祖父さま…止めて！　助けて、お願い！」

「お祖父さま…？　お祖父さまが、どうしたのだ！

目を覚ませ、確りするのだ」

小次郎が、茉莉花の身体を力一杯揺すった。月の青い光を浴びた茉莉花の顔に、ほんのりと赤みが注してきた。彼女の虚ろな眼差しに、次第に光が戻ってくる。

「小次郎さま…？」

茉莉花は、消え入るような小さな声で小次郎を確かめると、急にわっと泣き声を上げて、彼の身体にしがみついた。

また、物の怪に取り憑かれたのか？　可哀相に。よほど、こわい目に遭ったにちがいない…。小次郎は、茉莉花の震える身体を確りと抱きしめた。

彼女は、小次郎の腕の中で、泣きじゃくりながら訴える。

「小次郎さま…。私は怖い！　私…今ね、お祖父さまと会ってきたの」

「なに、お祖父さまと？　道真どのと…か？」

やはり、物の怪に取り憑かれたのだ。しかも相手が彼女の祖父だけに勝手が悪い。小次郎は、当惑しながら宙を睨んだ。

「お祖父さまが、私に手を伸ばして…。嫌だ、死にたくない！」

茉莉花は、激しく身体を震わせながら、握りしめた拳で、小次郎の胸を激しく叩いた。

「大丈夫だ。たとえ、相手が道真どのでも俺は負けない。必ず貴女を守ってみせる！」

小次郎は茉莉花に向かって、はっきりと言い切った。小次郎の逞しさが、茉莉花の傷んだ心を次第に癒して行く。それでも茉莉花は、不安そうに小次郎を見上げて言った。

「でも、お祖父さまは…、どうして私を、呼び寄せようとなさるのかしら？」

「わからない…。しかし、俺にはどうしても、良いことのようには思えない」

小次郎が正直に言うと、茉莉花が眉をひそめて甘えるように言った。

「小次郎さまも？　私もそう！　だから怖い、私は怖い…」

頼り切ったように身体を寄せる茉莉花のいじらしさに、小次郎は、思わず胸を詰まらせながら、直ぐに優しく言い切った。

「しかし、安心して下さい。何時、どんな事が起こっても大丈夫！　俺が必ず、助けてあげる…。」

茉莉花は小次郎の胸に、涙で濡れた顔を押しつけながら頷いた。小次郎の懐は、暖かい上に居心地がよい。茉莉花にとって、たった一つの、安心できる場所かもしれない。

好き…。小次郎さま、大好き！

彼女は叫んだ。心の中で思いっきり叫んだ。身体の中から激しい衝動が湧き上がる。しかし、幾ら好きだと叫んでも、激しい気持ちを抑え切れない。身体が火照る…。居ても立ってもいられなくなる…。彼女は身体を小次郎に預けながら、激しい気持ちを抑えかねて、思わず深くため息をついた。

彼女の激しい息遣いが、小次郎の若い身体に火をつける。彼は大きく息を飲んで、魅せられたように茉莉花の顔を覗き込んだ。彼女の小さな唇が、喘ぎながら濡れている。小次郎が、茉莉花の頬をおそるおそる触わった。豊かな胸が大きく喘ぎ、茉莉花の瞳が泣きそうになって微笑んでいる。小次郎の身体の中で、男の血が激しくほとばしる。彼は、微かに溜息をついて、茉莉花の顔を抱き寄せながら、ゆっくりと唇を合わせた。

茉莉花は、それを待っていたかのように、懸命に爪先立ちながら、弓なりになった身体を小次郎に押しつけてくる。

愛おしさで胸が一杯になった小次郎は、茉莉花の細い身体を抱き締めながら囁いた。

「好きだ。とても好きだ。貴女が欲しい！　俺は貴女を誰にも渡したくない」

茉莉花は、やっと訪れてきた幸せに震えながら、小次郎の首へまわした手に力を入れた。

（続く）

小野小町物語（五）

島津隆子

神代の昔から歌の素材として度々登場する、大和の竜田山の麓の紅葉した渓谷を、美しく着飾った業平と小町の二人は逍遥した。

『古今集』の題詞によると、二人の姿と紅葉の眺めは、まるで屏風絵の美観さながらだったという。

それからしばらくは業平と小町の、落着いて歳に似合った交際がつづく。

ところが花山の元慶寺の僧正となった遍昭から、また皮肉な歌が小町の許に送られてきた。

秋の野になまめき立てる女郎花
　あなかしがまし花もひととき

秋もたけなわの野辺に色あでやかに立っている女郎花よ、いろいろにもてはやされてはいるだろうが、花が美しいのも、冬がやってきて枯れてしまう前のひと時であ

十六　挽歌

この頃、小町は齢五十歳の坂にさしかかっていた。だが、容色には年増の妖麗さが増して、いっそうの凄みさえ加えていた。

その晩秋、何かともの憂く閉じこもりがちな小町の許へ在原業平から歌が届いた。

千早ぶる神世もきかず竜田川
　唐紅に水くぐるとは

遠い神代にも聞かないことです。竜田川の水面が唐紅で絞り染にされたというようなことは……

それほど色鮮やかに竜田川の河原を染める紅葉を、観賞しに行きませんか。という誘いである。もちろん無聊をかこっている小町に拒む理由のあるはずがない。

ることよ……

そんな歌を見ても、小町にはもう何の感慨もわかない。象徴的な歌ではあっても、一寸の深さもなく、面白い歌ではあっても対象に少しの愛情も持たない歌だと思う。

あの方はもともとそんな男だったのだ。皮肉というよりは揶揄に近く、聞く人によれば反撥さえ感じるだろう。

小町はこの歌に遍昭の顔を重ねながら、彼とは結局、戯言をもって詠み合った歌合いの仲間の一人に過ぎなかったことを思った。

その後も遍昭から何首かの歌を寄せられたが、一つの返歌もしなかった。小町はやるせない気持だった。遍昭との過去を思えば思うほど、自身が愚かしく思えて憂鬱だった。そして、決定的な別れの刻がくる。遍昭からまた歌が届いたのだ。

名にめでて折れるばかりぞ女郎花
　われおちにきと人に語るな

名誉を尊んでいるようだが、もうすぐまた誰彼の手によって折れるばかりの女郎花よ。かつて私に折られ落ちたとは、決して人に語らないほうがいいと思いますよ。

これがまさか、あの菅原道真からも讃えられたほどの学徳ある人が詠んだ歌か。これが天皇家一族の血を引く高貴な人のものなのかと、小町は一瞬われとわが目を疑った。

軽快洒脱を以って一世を風靡し、機知縦横なあの遍昭の歌の世界が、このようなものであろうかと驚き呆れた。

とりわけ男女の仲の情事は、隠されつづける秘密であってこそ、その人の生涯に、余韻に満ちた豊饒さをもたらすものだ。まして、人々が尊ぶ「僧正さま」ともあろうお方が、昼日中平然と、木の枝に結んだその歌を寺の小坊主に持たせるなど、何としたことだろう。

たとえ小坊主に中味を見られなくても、何て不注意な軽率きわまる行為をする男なのだろう。もうこれで二人の仲は完全に断絶してしまったことを小町は実感する。

たとえ地獄の底に堕ちても、あの時、二人の間に交わされた秘め事は口外しない。その秘密の保持こそが、小町の遍昭に対する唯一無二の信頼の絆であった。現在どのような関係になっていようとも、過去に生きた一つの証ではなかったか。

小町は遍昭との間に築かれていた夢の世界が音もなく崩れてゆく虚脱感におそわれて、わが身が抜け殻になってゆくつらさを噛みしめていた。

だが、気を取り直して落ち着いた小町は詠む。

色みえでうつろふものは世の中の
　人の心の花にぞありける

自分をも含めて、移ろいやすい人の心を嘆きながらのしみじみとした述懐は、けだし遍昭に対する小町の挽歌であった。

十七　業平、みちのくへ

外は雪である。

すっかり家に閉じこもる日の多くなった小町に対して、業平は常に変らず親切であった。

業平も今は髪に白いものが目立つ初老の紳士になっていたが、風貌は相変わらず麗しい。落ち着きを増した性行にあいまって、今やれっきとした右近衛中将に昇進している。

雪を掻き分けるようにして、業平から文使いがあった。

忘れは夢かとぞ思ふおもひきや
　雪ふみわけて君をみむとは

忘れまい忘れまいとしていると、つい夢であろうか、いや、そうではなく現実にあなたはおいでになるのだなどと思っております。この降る雪を踏み分けて、あなたにお逢いできたらと思うばかりです。

子供もなく終生独り身になることへの予感がひしひしと迫り、晩年への伴侶を求める焦慮が実感されるこの頃の小町の胸に、業平からの歌は痛切な現実のひびきを伝えた。

業平の存在は、小町にあたたかなときめきを与える。今度こそ生涯を通す堅実な幸せを得なければ……小町は寄る年波の焦りとともに、業平への傾斜で心が満たされてゆく。

だから、はるかに歳若い小野貞樹からの誘いにも、

いまはとてわが身時雨（しぐれ）にふりぬれば
　言の葉さへにうつろひにけり

と詠んで、身の衰えを嘆く素振りをみせながら、せっかくですけれど色ある言の葉さえ、もう枯れてしまって……と巧みにかわすのであった。

小町から歌をもらった貞樹は、

人を思ふこころ木の葉にあらばこそ
　風のまにまに散りも乱れも

と詠んで、遠く甲斐国の国守になるために去っていった。

こうして、業平との後半生にかけた夢に浸っていると き、思いもかけない不幸が小町を襲う。

かつての、二条后である藤原高子と業平の関係が白日のもとに暴露される事態に陥ったのだ。

そして突如、業平の東国左遷という、いわゆる「芥川事件」が持ち上がるのである。

業平の監視つきの東下（あずまくだ）りに、もちろん小町がついてゆけるはずもない。

ある夜中、業平はひそかにみちのくに流されていった。

その夜遅く、傷心の小町を訪ねてきた人がいる。

安倍清行（あべのきよゆき）である。心の傷を見せまいと、小町は泣きはらした目許に厚く化粧をして、清行の前に立つ。

小町よりずっと年下のこの青年は、年上の小町に愛されたいという甘えのこもる眼差しで小町をみつめる。

花の色はうつりにけりないたずらに
　わが身世にふるながめせしまに

四季折々に咲き乱れた花々も、もうすっかり色褪せてしまったことです。それと同じように、私も何することもなく年を経てしまいました。ぼんやりとものの想いに耽っている間に……

と到底この青年に応じられないことをきっぱりと詠った。身分の低い年下の相手には、依然として虚勢の姿勢を崩さない小町だが、これは清行に向って詠んだというよりも、かつて匂うがごとく咲き誇った、自身の色香への挽歌であり、絶唱である。

業平がみちのくに下ったのは小町が五十五歳の時である。こうして、老いの道へさしかかった歌人の仲間たちも、小町への念いを断ち切り、一人二人とそれぞれの人生に向って、遠く旅立って行った。

すでに新帝文徳天皇も逝去されて清和天皇の御世となり、宮中の人事も一新された。

右大臣藤原良房が太政大臣になるに及んで、聖徳太子以来の天皇家の摂政は、ここに始めて藤原氏という人臣の手に実権が移った。

天智朝における白鳳文化、天武朝の天平文化、桓武朝の平安京遷都など、華々しかった古代天皇制はその幕を閉じようとしていた。

時代の流れの中で、独りとり残されてゆく観のある小町だったが、それでも誘惑の触手をのばす男性は多かった。大伴黒主は例外としても、従四位上近衛中将で書道の名手である藤原敏行。従三位参議という高官で漢文学の大家大江千里（おおえのちさと）などの名士もいた。

だが、淋しく孤独な境涯の中で、消えかかるローソクの火を点し続けるように、小町はかろうじて自尊心の光芒を保った。

これら高官たちに幾人の女性があってもかまわない。自分はこれら高官の女の一人として、殉じようとは思わない、藁草のような女の感情になるのはあまりにも惨め

すぎる、と小町は男たちの誘いに、首を横に振りつづけた。

しかし、小町の情熱にもようやく枯渇がみえはじめる。子もなく、定まった男性もいないわが身を、舵のない舟に置きかえてみたりする。もはや今ひとたびの命の灯を掻き立ててくれる男性に巡り逢うこともないだろう。

このような時、小町の許に一首の和歌が届いた。

名にし負はばいざ言問む都鳥
わが思う人はありやなしやと

人々が言うとおり、お前が本当に都鳥というゆかしい名前をもっているのなら、さあ鳥よ、お前に尋ねよう。私の思い焦がれる愛しい人は、今、無事でいるかどうかを。

その頃、業平の一行は東路も果に近い武蔵国と下総国との境である隅田川まで来てしまっていた。いよいよこの大河を渡れば、それだけ都への距離は遠くなってしまう。

感傷に沈む業平は、無情な渡し守に急き立てられて船中の人となる。初冬の夕暮れの川面を這うように飛ぶ美しい鳥の名は「都鳥」と聞く。都に残してきた愛しい人を髣髴と想い描きながら、業平は切々たる思慕の情を詠んだのである。

遥かな男から届いた歌を目にした小町は、感極まって泣き崩れた。そして、何日も何日も泣きつづけた。

やがて、冬が過ぎ、春が来て、夏が過ぎた。

来る年も来る年も四季がさまざまな色彩を織りなして、流れていった。

その早い刻の流れの中で、小町は六十の坂を越えた。

そして、再び晩秋が巡り来る。

秋風に逢ふたの身こそ悲しけれ
わが身空しくなりぬと思へば

もうとうに盛りの年は去り、生き過ぎたという小町の想いがこもる秀抜な歌である。

十八　文屋康秀と東国へ

小町の晩年に至って、悲しくもユーモラスに登場してくるのが文屋康秀という人物である。

ある日、康秀は三河掾となって三河国（愛知県）に赴任するため、わざわざ挨拶に小町の許を訪ねてきた。

かつて幾たびか袖にしたその康秀から、誘いがあった。

「田舎見物かたがたご一緒に、私の赴任地に参りませんか」

康秀は前年、病身の妻を亡くしていた。小町にとって

康秀は、今、都に残っているわずかな知己の一人である。

わびぬれば身を浮草の根をたへて
誘う水あらばいなむとぞ思ふ

侘しさに耐えかねておりますわが身ゆえ、浮草の根が切れて揺れながら流れゆくように、誘う水があるならばご一緒に参りたいと思います。

頼る人もない老境の、侘しい実感がひとしお滲み出ている小町最後の歌である。

「掾」というのは三等官の従七位という低い身分であるが、康秀は六歌仙の一人に数えられ「古今集」に五首の和歌が採録されている。その歌集の序言に紀貫之は康秀の人物を評して、

「ことば巧みにて、そのさま身におはず（身についている教養がない）言はば商人の衣着たらむが如し（商人のように華美な服装をしているだけである）」

と言っている。

このような男性に心の襞を見せてしまう小町の真情が哀しい。

小町は不覚にもわが身の愚かだった人生に、思わず一滴の涙を落した。決して人前で見せることのなかった涙を……。

この小町の歌と風情に満足の笑みを浮かべた康秀は、真顔になって一歩膝を進めた。

「いくら考えても、少将殿はもう帰ってきませんよ。それに、せっかくの少将殿、いや、僧正遍昭殿の発心を崩すのもお気の毒というものですぞ。それより一刻も早く、ご一緒に三河に下りましょう」

小町は呆れるよりも笑うに笑えぬ心境であった。何を今さら的はずれなことを言っているのだろうと思うと、悲しみのなかに可笑しさが混じり、泣き笑いの表情になった。

小町は六十余歳の顔にいたずらっぽい媚を浮かべて言った。

「あなたさまが遍昭さまの代わりになってくださいますの？」

「私では役不足でしょうが、比べて見て下さい。なかなかどうして負けはしませんよ」

と切り返してきた。小町はその言い方に野卑なものを感じたが、からかい半分に聞く。

「どう比べろとおっしゃるのですか」

「少将殿、いや遍昭殿の発心の固さと、私の恋心の強さをでございますよ」

「まぁ……それは面白そうですこと」

その余情を楽しんで、なお囁きを交わすには、いささか退屈な相手であるが、小町は一寸した悪戯気でそんなやりとりをした。だが、受ける康秀はますます本気にな

った。

「私が遍昭殿の競争相手だなんてこと、真ともに受けてはおりませんよ。……では、支度をしておいて下さい」

康秀の声は上ずっている。このように簡単に小町が手中に落ちる満足感に度を失い、舌の根も渇いているらしい。小町は落ち着いて言う。

「それでは、私はいずれ後から、気ままな道中をして参ります」

「とんでもないことを！　あなたのように美しい女人が、無事に道中のできる筈もない」

「もうこんな年です。このような年増を襲うほど物好きがいるとも思えませぬ」

「いやいや、相変わらずお美しい。それに劣らず世の中も相変わらず物騒で、都ですら夜はうかうか一人歩きはできませぬぞ。まして都の外へ出れば、乞食と夜盗ばかりがうろうろしている世相です」

康秀がおどかすような口調で言う。

「私、そんなこと恐ろしいと思わなくなりました。いかに荒くれ男でも、まさか取って食おうとはいわないでしょう」

これは小町の本心ではない。この場でのせめてもの意地である。そして、小町のからかいに、ますます本気になってゆく康秀が可笑しい。小町はつづける。

「男が女に求めるものは、殿上人でも乞食でも、また夜盗でも、変りないのでしょう。私はむしろ獣のいる荒々しい風に吹かれてみたいとも思っているのです」

強がりを含む小町の投げやりなもの言いを、康秀は慌ててさえぎる。

「何ていうことを言うのですか。道中警護の者を頼もうと思っているのに」

小町の戯言のゲームはまだつづく。

「いいえ、そのようなこと必要ございませぬ。所詮、浮き草のような私の一生ならば、どこで死のうがそれが一つの生き方と申すもの。造り花のような小奇麗な浮き草よりも、思い切りよく泥と飢えにまみれて終わるのも一興かと……」

「とんでもない、とんでもない。そのように思うことこそ、遍昭殿への未練がありありというものです。投げやりに過ぎますぞ、小町殿」

小町は小さく声を立てて笑うと、

「遍昭さまの志す処は高い御仏の道、私の来ましたのはその逆、この世ながらの色恋沙汰の道。未だ尽きない修羅界に、命の最後を全うしようと考えてのことでございます」

「いやはやお話は尽きませぬな。ともかく私はあなたを離しませぬぞ。さぁ、支度をして一緒に行くのです」

最後の命令口調に、小町は康秀の本性をみる思いがした。

そして、貞観十五年（八七三）の秋も終りの頃、旅装を整えた康秀と小町は東国に向けて旅立った。

十九　独り都鳥を求めて

風が出てきていた。

空を見上げると曇ってはいるが、ずっと遠くまで見通しはきく。見渡すかぎり茫々たるすすき野の中で光彩を失った穂が風に吹かれて揺れている。

その場に横たわった小町は、肉体の疲労度から推して、このまま歩行をつづけたら、急激に終局がくるにちがいない、と考えていた。

小町はよろよろとよろめきながら立ち上がると、また牛歩のような足取りで歩きはじめる。だが、数歩も行くと再びすすきの穂の波の中に身を没してしまった。

本格的な疲労を感じて小町の胸に不安がよぎる。これまではしばらく休めば快復する疲れだった。それがもう両脚の感覚が麻痺して動かなくなっている。

仰向けに倒れたままの小町は目を閉じる。虚脱感が全身に広まっている。

……しばらくして、顔に冷たいものを感じ、小町はまぶしそうに目を細くあけて空を見た。一二滴の雨粒が頬に当ったが、雨雲はずっと高い処にあるようだった。

しかし、次第に雨とともに風も強くなってきた。だが、小町はもう引き返そうとは思わなかった。

三人の警護者に守られて、康秀と三河に着いたのは五日前のことであった。三河の官舎はこじんまりとした家だった。康秀は長旅にもかかわらず、京都の時より血色もよく元気で、こまめであった。そして、

「落ち着いたら近くの山の温泉にでもゆきましょう」

などと言った。

その夜、二人で遅い夕食をとっていると、官舎付きの女中が、康秀が小町のために誂えておいてくれた秋の着物を届けにきた。

「気に入るかどうか、まぁ拡げてごらんなさい」

亭主然として言う康秀の言葉に小町が躊躇っていると、

「まぁまぁ、結構なお召し物ですこと。私、拝見させていただきますよ」

と、平盆を畳に置いて包みを解いた。

黒地の袋帯に秋草の縫い取りが美しく鮮やかに浮き立ってくるようだ。

「まぁどうでしょう。この色のよろしいこと」

着物は地紋のある錆茶の紋綸子。梅宝、松、菊、紅葉などの吉祥小紋が染め出してある秋にふさわしい色合いのものであった。他に牡丹色の暈しの長襦袢も添えられている。

部屋の中には豪華な艶かしさが漂う。

小町は自分の年に似合わない派手な模様のそれらを疎ましく思った。

「本当にお幸せでいらっしゃいますこと。女に生まれてこんな立派なべべが着られたら、私なら果報すぎてどうしましょう」

女中はしきりに羨ましがって帰って行った。

食事が終ると康秀は、隣家に挨拶に行くと言って出かけた。

小町は誰もいなくなった部屋で着物を肌につけてみた。帯を締めて両袖を拡げてみると、思ったより着物も帯も自分に似合っているようにみえる。

小町は衝動的に、この着物のままで業平に逢いに行きたいという思いがこみ上げてきて、苦しかった。

康秀は隣家で酒を振舞われたらしく、夜遅く帰ってきた。寝込んだふうを装う小町の顔をしばらく眺めていたが、そのまま小町の傍に横になると、康秀は死んだように寝入ってしまった。

夜明け近く、まだ傍らで心地よさそうに寝息を立てている康秀をよそに、小町は旅装束を整えると官舎を脱出した。

康秀への置き文には、

「いろいろ考えましたが、京に戻ります。ご親切は生涯忘れません」

とだけ書き留めた。

康秀の追っ手は小町とは逆の方向へ馬を飛ばしたが、小町はみちのくへの道を辿っていた。

小町は体が急に冷えてきたことを感じた。ようやく疲労と空腹と寒気が同時に憔悴しきった体を責め始めている。冷たい水分は着物を透して皮膚（はだ）を濡らした。それでも小町は歩かなければならないと思っていた。

「ああ、業平殿に逢いたい、一目逢わなければ……」

と呟きながら。

小町は雨ですっかり頭を垂れたすすきの穂の中から、顔を出すように這い上がってみたが、すぐに足を取られて今度は突っ伏してしまった。

そして、この果てしないすすき野を当てもなくさ迷うことも、このままここに横たわっていることも、死を待つことに変りないと、小町は明確に意識した。

小町はもはや飢えも寒さも感じない。ただ、急がなければ、一刻も早く業平に逢わなければ……という念いが頭の中を占めていた。

せめてあの都鳥とやらが翔んでいるという隅田川まで行きたい、と痛切に思う。

小町は目を上げた。すると、降りしきる雨の中からほのかな灯がみえる。家がみえる。杉木立の林もみえている。暖かな火が燃えて、熱いご飯も煮えているようだ。

懐かしい男たちがにこやかに舞っている。小野貞樹が、

安倍清行がいる。文屋康秀が、僧正遍昭も。在原業平も見事な舞を舞っている。

なぜか、基良（もとなり）親王だけは黙って振り返りながら、静かに遠ざかってゆく。

赤・青・黄・黒い色をした無数の都鳥が乱舞している。

ああ、美しい！

幼い頃みたであろう懐かしい父や母が、ある現実感をともなって、さぁ、おいで、疲れたろうと、手招きをしている。父が色鮮やかな小袖を拡げて待っていてくれる。何て暖かそうな……。

小町の白い頬を後から後から涙が伝わる。雨の滴がそれを洗う。

やがて、小町の意識は朦朧と霞み始め、快い眠気が襲ってきた。そして、その深いうねりの底へ、小町の体も心も静かに落ちていった。

完

社　告（内規）

☆　同人参加へのお誘い

私達はひろく同志の参加を歓迎致します。

「まんじ」は作品発表のための共有の（ひろば）として季刊発行しております。

同人は同人費として月額二、〇〇〇円を拠出し、雑誌発行の経費の一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆　維持会会員へのお誘い

本誌愛読者の内、一部有志の方々が、誌友として維持会員になっていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、数カ月分をまとめて前納して頂いております。

季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の紹介等を行ない、また出版記念会や「まんじ」記念号パーティーへのご案内などを差し上げ交流を行なっております。

＊同人費・維持会費の納入は郵便振替口座への振り込みを左記へお願い申し上げます。

郵便振替口座　〇〇二七〇ー〇ー六四五九二

加入者名　まんじ

遙かなるカメルーン（七）

太田精一

セネガル、モーリタニアは桂木にとって初めてだ。期待と不安の入り交った複雑な思いを胸にダカール行きのジェット機に乗った。一九七五年二月末のことである。途中、ダホメー（現在のベナン）、トーゴ、コートジボワールと立寄り、ダカール空港に到着したのは夕闇迫る頃であった。

入国審査を終えた桂木は、税関前の荷物引取場で機内から運び出されるトランクを待っていた。

荷物は、次々とターンテーブルに乗せられ、乗客の手元に引き取られて行く。ところが桂木のトランクはいつまで待っても出て来ない。そのうちに、すべての荷物が引き取られ、ターンテーブルは、空回りを始めた。

桂木は、しびれを切らして荷物引取場にいるエール・アフリックの職員に尋ねた。

「私の荷物がまだ出て来ないのですが、飛行機の中に残っているんですか」

（三十七）

登の病状は、急速に回復に向かった。カスカディアーデス医師の治療を受けた二週間後には、すっかり良くなり、幼稚園に行くことができるようになった。

登が健康を回復したので桂木は、かねてから計画していたセネガルとモーリタニアの経済貿易動向調査を実施することにした。

ドアラに家族を残しての十二日間の出張調査である。日本人家族のいないドアラに妻と子供を残して、長期間家を空けることは不安であった。だが、ドアラは比較的治安が良く、同じアパートに住むフランス人やカメルーン人も皆親切であったので、思い切って出かけることにした。

摩耶の学校と登の幼稚園の送り迎えは、フランス人の秘書マダム・ベルトランに頼むことにした。

「飛行機は、もうモーリタニアのヌアクショットに向けて飛び立ってしまいましたよ」

職員は、こともなげに言った。

「ええ、飛行機が出てしまった！まだ荷物は飛行機の中にあるものとばかり思っていた。兎に角すぐにどこにあるか探して欲しい」

桂木は、ムッとした表情で職員に言った。職員は、まるで責任を感じていないようだ。会社の不手際を詫びる様子もない。

「この用紙に必要事項を記載してください。トランクは何色でどんな型をしていますか。この用紙の裏にあるトランクのモデルのどれに該当するか印をお願いします。荷物が出て来たら連絡しますから、宿泊するホテル名を書いてください」

表情も変えずに事務的に処理しようとする職員の態度に、桂木は次第に腹が立ち怒りを露にして声を荒げた。

「悪かったという気持はないのか。まるでこちらがミスを犯したような扱いだ。私は着替もなく困っている。迷惑をかけているのは、そちらなんだから、もう少こし誠意を見せて〝申訳けない〟の一言ぐらい言ったらどうか」

「ムッシュー、そう怒らないで欲しい。私があなたの荷物を失したわけではない。だから私には謝る理由などないのだ。トランクが見付からないという乗客はこんなに大勢いるが、怒っているのはあなた一人だけだ」

そう言われて桂木が周りを見回すと十人を超す乗客がトランクが見付からずそれを探させるための手続をしていた。いずれも〝よくあることだ〟と言った諦めの表情で、怒りを露にする乗客はいなかった。

桂木は、憮然とした顔で用紙に必要事項を記載した。

「トランクの所在はいつ分かるんだ。見付かり次第すぐホテルに届けて欲しい」

「いつ見付かるか確かなことは言えませんが、あなたの乗った飛行機は、明日モーリタニアから戻って来るので、明日中には見付かるでしょう。でも、荷物をホテルに届けることはできません。税関の審査はあなた自身で受けてください。大勢の乗客が荷物を受け取っていないわけですから、その一つ一つについて、税関の審査を受け、皆様のお手許に届けるわけには行かないのです。トランクが見付かったらホテルに連絡しますから空港に取りに来てください」

職員の話を聞いた桂木は、唖然として何も議論する気がなくなった。当時のアフリカでは、航空会社は客を〝乗せてやる〟のであって、客はあくまでも〝乗せて頂く〟のだ。

桂木は、二年半前、ガボンのリーブルビルからカメルーンに向かう飛行機に乗った時のことを思い出した。

機内は乗客で溢れ、座席に座れない人もいる。明らかに航空会社の不手際によるオーバーブッキングである。幼児は、両親の膝の上に乗せ、その上にシートベルトをするよう指示があった。それでもまだ座れない人がいる。飛行機はすでにエンジンをかけ動き出す寸前であった。

突然、機内に数人の警官と航空会社の職員が乗り込んで来た。ひとわたり乗客を見渡し、貧しい服装をした人や機内に荷物をいっぱい持込んでいる人たちの座席に近寄り無理矢理にその人たちを降ろしてしまった。航空チケットの座席ナンバーと乗客の座席のナンバーとを照合もせずに余分な人数分だけ間引きし、つじつまを合わせたのだ。

空港からホテルに向かうタクシーの中で、桂木は冷静になって考えてみた。するとエール・アフリックの職員の言い分も何となく分るような気がしてきた。トランクは、彼の責任範囲外のところで、紛失してしまったのだ。何故その責めを彼だけが負わなければならないのか。トランクが紛失したのは、チェックインカウンターの係員が間違ってダカール以外の行先のタグ（行く先を書いた荷札）を付けてしまったのか。ドアラ空港を出発する時、荷物を積み忘れたまま飛行機が離陸してしまったのか。それとも途中立寄った空港で桂木の荷物が下ろされてしまったのか。はたまたダカール空港で下ろし忘れのまま飛び立ってしまったのかのいずれかであろう。

そう考えると謝らなければならないのは、荷物の取り扱いにかかわった職員の誰れかであって彼ではない。彼は、エール・アフリックの職員ではあるが、会社の代表者ではない。一雇員にしかすぎないのだ。下手に謝ってしまったら荷物を失くした責任は自分にあるのだということを認めることになるとでも思ったのであろう。

もし彼が会社への帰属意識が強く愛社精神が旺盛であればまた違った対応となったのかも知れない。それにしても空港まで取りに来いとは、会社としての責任は一体どうなっているのか。桂木は釈然としない気持でホテルに入った。

翌日、ホテルのフロントからトランクが見付かったという連絡があった。桂木は、タクシーを飛ばしてダカール空港までトランクを引取りに行った。

（三十八）

空港と市内を結ぶ幹線道路は道幅も広く、瀟洒な建物も多い。

セネガルは当時人口四百五十万人。一人当りのＧＮＰは二百五十ドル余りで、旧仏領ブラックアフリカの中では比較的開発が進んでいるほうであった。だが、三十年後の今日でも五百ドル程度である。物価の上昇を考慮に入れれば、当時に較べ必らずしも豊かになっていないよ

うだ。

面積は二十万平方キロ。住民の八十パーセントはムスリムである。燐鉱石と落花生が主な輸出品で、日本との貿易は一九七三年実績で輸出入合わせ四千七百億円程度であった。

当時の大統領サンゴール氏は、アフリカでも有数の知識人であった。親仏政策を掲げ、フランスとの良好な関係が続いていた。このフランスとの緊密な関係を象徴するかのようにダカールには、フランス海軍の基地がある。

大統領官邸は、旧フランス総督官邸をそのまま使用しており、市内の各所には、フランス統治時代の名残りを留める建物があちこちに散在していた。

ダカールから十五キロ離れたヴェルデ岬は、アフリカ大陸最西端の岬で要塞がある。ヨーロッパからアフリカ大陸に沿って南下する船は、このヴェルデ岬の先端を回って風光明媚なダカール港に入港する。

カメルーンから来た桂木にとって、北緯十七度のダカールの三月初旬の気候は爽かで、海から吹く風は心地よく感ぜられた。

日曜日、桂木はダカール市の沖合二、五キロメートルに浮かぶゴレ島を訪れた。ゴレ島行きの連絡船は頻繁に出ていて、船内はヨーロッパ人の観光客で賑っていた。

ゴレ島は、かつての奴隷収容所があった所だ。多くの黒人奴隷がここから積み出され、アメリカ大陸に売られて行った。

海上から眺めるゴレ島は、陽光を浴びキラキラと明るく輝いていた。だが、岩壁に下り立った途端、桂木は異様な雰囲気を感じた。岩壁のすぐ近くに生きた人間の倉庫となっていた〝奴隷収容所〟があったのだ。

四方は壁に囲まれ、ところどころに小さな通気孔が付いている。床はじめじめと湿っていた。奴隷たちは、むんむんとする澱んだ空気の暗い部屋で、糞尿まみれになってひしめき合い、不安に駆られながら不運をかこっていたに違いない。商品としての奴隷は、この島に〝収容〟ではなく〝貯蔵〟されていたのだ。

十六世紀末、西アフリカの海岸に黄金を求めて航海を続けたヨーロッパ人は、黄金よりも人間を商品にするほうが利益になることを知った。ポルトガルから西アフリカ沿岸の支配権を奪った蘭、英両国は、十八世紀、新大陸の植民地に必要な労働力をアフリカの黒人に求めた。

特に、北米で大農園が叢生、発達するにつれ、身体強健な黒人奴隷の需要はますます高まった。奴隷制度の廃止される一八八八年までに実に五千から六千万人の奴隷が輸出品として新大陸に運ばれたと言う。だが、その半分は〝貯蔵所〟や奴隷船の中で、疫病や飢えに苦しみながら命を失ったとみられている。

奴隷制度は、古代国家の成立する以前から世界の各地に存在した。古代から近世にかけても、さまざまなタイプの奴隷がヨーロッパ、アジアの各地にいた。そのいずれもが、人間としての人格は認められず、経済的、社会的、法的に主人の所有物として扱われてきた。だが彼等の仕事や待遇は実に様々であった。

古代ローマでは、家庭教師、家事労働者、剣闘士などのほか大農場や鉱山などで働く者もいた。また、イスラームの白人奴隷（マムルーク）のように、高い教育を受けスルタンの親衛隊として活躍する者もいた。

ブラックアフリカにおいても、古くから奴隷はいた。部族間の抗争により敗れた部族は、奴隷とされることが多かった。しかし、その当時の奴隷は、主に家事労働に従事し、それほど非人間的な扱いを受けることはなかった。

それが奴隷商人によって大規模に取引されるようになるにつれ一変する。ヨーロッパ人による奴隷狩が行われただけでなく、アフリカの首長たちも自分たちの部族の戦士を動員して他の部族に戦争をしかけ、奴隷を集め交易場に連行し、ヨーロッパ人に売り渡した。同朋であるはずの黒人もヨーロッパ人の〝奴隷貿易〟に荷担してしまったのである。アフリカの衰退は、列強による植民地獲得競争が盛んになる以前のこの時から始まったのだ。

当時のヨーロッパ人は「アフリカ大陸に住む黒人は、劣等人種であり、選良の民である白人の奉仕のために創られた人間である」ぐらいにしか考えていなかったに違いない。

ゴレ島の〝奴隷貯蔵所〟を見学したヨーロッパ観光客の明るく屈託のない笑い声の響く帰りの船内で桂木は一人寂寥感に襲われ、沈黙していた。

（三十九）

桂木は、月曜日から精力的に各部局を訪問し情報の収集に当った。各部局ともすでに秘書のマダム・ベルトランを通じ事前にアポイントを取り付けておいた。

まず経済計画協力省を訪問し計画局長と面談した。

「貴国の第三次五ヶ年計画の進捗状況についてお話を伺いしたいと思います。また、プロジェクトごとに各国の政府と企業がどのように関わってきたか。企業名も含めてお聞かせ頂けませんでしょうか」

桂木は、個別の企業名までは明らかにしないだろうと思いながら、計画局長に切り込んでみた。

「すでに実施段階に入ったプロジェクトについては、相当程度まで公表しております。公表されたプロジェクトの関係企業については、お知らせしても構いません。しかし現在計画段階にあって関係機関と交渉中のプロジェクトについては、その企業名を明らかにすることはできません。詳細は、フランス人の国家顧問を紹介しますので、その人に聞いてください」

セネガルもコートジボワールと同様フランス人の国家顧問が各省庁の重要な部局に配置されていた。計画局長は、フランス政府派遣の国家顧問に桂木の来意を伝え、資料を持って局長室に来るように命じた。

局長は、フランス人顧問を桂木に紹介すると所用があるからと言って局長室を出た。

彼は、桂木の質問内容を慎重に検討し、公表できるものとできないものとを峻別して適格に対応した。

桂木は、三日間かけ、経済計画協力省、工業発展省の各部局を訪問し、情報収集に当った。だが、多くの場合、結果的にはフランス人顧問と面談することになってしまった。

旧仏領ブラックアフリカの各国は、ギニア共和国（コナクリ）を除けば、一九六〇年の独立である。桂木の訪れた時は独立後わずか十五年しか経っていなかった。

（植民地時代に線引された境界線を引き継いだ人為的国家が数々の部族を抱え、工業化を図りながら近代国家へと脱皮して行くためには、外国人顧問の協力が必要であった。だが、それに頼り過ぎていたことが、旧仏領ブラックアフリカの自助努力を阻喪させる結果となったのではなかろうか）

桂木は、政府機関の他、国際機関、外国企業などの要人との面談を通して、なお一層この思いを強くした。

夕方、桂木は、冷やかしのつもりで工芸品（アルティザンナ）を扱う土産物屋を数軒覗いてみた。

ダカールの街は、観光客も多く土産物屋のずらりと並んだ一角がある。アフリカの各地から集めた土産物を無造作に並べ、大きな声で客を呼び込んでいた。玉石混合ではあるが、カメルーンより品数は豊富だ。芸術的価値の高い品物もときどき混っている。

アフリカの芸術は、宗教的な儀式から発達したものが多い。常に自然と向き合って生活し、アニミズム（精霊、霊魂などの存在を信仰する教義）の宗教観を持つブラックアフリカの人びとは、太陽、月、大地、森などの自然や部族の祖先、家族などに精霊が宿っていると信じている。出生、結婚、死などの人生の通過儀礼には、この精霊が重要な役割を果たし伝統的な祭儀の中でその力を発揮する。その儀式に使用される仮面や彫刻には、人間の怒り、恐怖、愛、憎しみなどを赤裸々に表現したものが多く、数々の芸術作品を生んで来た。

ブラックアフリカの人びとは、病気、死、苦痛などは、生命力の衰えから来るものと考えている。この生命力の衰えを回復させるためには、自然の力を借りることが必要で、宗教的儀式は、その自然の力を呼び戻すために行われるのだ。

その時使う多種多様の仮面には、超自然的な力が宿っていて、その仮面を被って踊ることによって精霊が仮面を通して、人間に超自然的な力を与えて呉れるものと信じている。

アフリカ人の持つ精霊崇拝や生命力の増強は、仮面や人形、胸像などの立体的な木彫を通して、表現されてきた。森の中にある木が精霊を宿しているものと考えられていたからかも知れない。

彼等は、芸術品を創作しようとして彫刻したのではない。神秘的な霊と生命力を具体的に表現しようとする強い意欲が荒削りではあっても結果的に、力感溢れる美を生み出したのである。

桂木は、ダカールの比較的古いものを扱う土産物屋で実際に祭祀用に使っていたと思われる仮面を五つ買った。そのうちの二つは、リベリアとコートジボワールの国境にあるダン族の面である。静かな憂いに沈んだ深みのある表情は、日本の能面に似ていると言われている。桂木は、この二つの面に愛着を感じ、帰国後も自宅の壁に掛け、アフリカで過した往時を偲んでいる。

（四十）

セネガルで五日間滞在した後、桂木はモーリタニアの首都ヌアクショットに向った。

モーリタニアは砂漠の国である。サハラ砂漠の西端に位置し、大西洋に面している。面積は百三万平方キロ、日本の三倍近くある。当時の人口はわずか百二十三万人。八十パーセントがムスリムである。一人当りのGNPは百七十ドルとセネガルよりも低い。

だが、対日貿易は、セネガルより大きく、特に対日輸出額は八百億円と旧仏領ブラックアフリカの中では群を抜いていた。その主な輸出品は蛸である。

モーリタニアは砂漠の国だが、海洋国でもある。大西洋に沿って長い海岸線を有し、蛸の漁場として世界的にも知られている。当時、日本の漁業会社も進出し、この国の沖合で蛸を獲り、日本向けに輸出していた。

桂木は、ホテルにチェックイン後直ちに活動を開始した。三泊四日の滞在予定だが、木曜日午前の到着であったため、実質的に仕事のできる日日（ひにち）は一日半しかない。政府及び経済関係機関を中心に情報収集することにし、まず統計局を訪問した。アポイントを取り付けるべくドアラから何度もトライしたが連絡が取れなかった。

そのため突然の訪問となってしまったが幸い統計局長と面談することができた。

「モーリタニアの経済貿易状況を数量的に把握したいと思ってまいりました。過去五年間の貿易統計、生産統計など各種の経済指標を示す統計を入手できませんでしょうか。公表され市販されている統計は所持していますけれども、三年前のデーターなのであまり役に立ちませ

ん。また、砂漠化の実態を数量的に示す地域別の年間降雨量、耕地面積の推移などの資料がありましたら是非拝見させてください」

局長は、少こし困ったような表情をし、暫く考えた。

「その件については、私よりは別の人が良いでしょう。紹介しますから一緒に来てください」

と言って桂木を別の部屋に案内した。そこには西独から派遣されたアドバイザーがいた。やはりモーリタニアもヨーロッパ人の国家顧問がアドバイザーとして配置されていたのだ。ただ、モーリタニアは、フランスとは一定の距離を置いた政策を展開していたため、ドイツ人、英国人などフランス人以外の人びとも国家顧問として多数派遣されていた。紹介を受けたドイツ人アドバイザーは協力的であった。統計資料はもとより、モーリタニアに関する個人的な見解も桂木に対し率直に語って呉れた。

当時のモーリタニアは、外国人にとって決して暮らし易い国ではなかった。それでも多くのヨーロッパ人が、援助の一環としてアドバイザーを送り込んで来ている。アフリカはやはり〝ヨーロッパの箱庭〟なのだと桂木は実感した。

ヌアクショットの街は緑が少なく日中は灼熱の太陽が照りつける。周りは砂漠に囲まれ、消費生活も華やかさに欠ける。娯楽施設も少ない。そのため友人同志が集まってパーティを開いたり、プールで泳いだりして家族単位の交際が多くなると言う。

「自然を相手の唯一の楽しみといえば、大西洋に沈む太陽を眺めながら魚釣りをすることぐらいだ」とドイツ人のアドバイザーが語った。

夜は、街灯も暗く、ネオンの輝きもない。陽が沈み、闇が周りを包むと人の往来は絶え、街はひっそりと静まり返る。夜のしじまの中で、星だけが輝いていた。

気の利いたレストランもなさそうだったので、桂木は三泊とも夕食はホテルで済ますことにした。軽く済ませようと思った彼はスパゲッティミートソースを注文した。隣りのテーブルには、ビジネスマンらしいフランス人がやはりスパゲッティを注文していた。

やがてテーブルには、ゆでたスパゲッティとミートソースが別々に運ばれて来た。桂木は、スパゲッティにミートソースを少こしかけて食べてみた。何とも言いようのない味だ。そこで塩と胡椒をかけるだけで食べることにした。桂木は、ふと隣のテーブルを見た。くだんのフランス人も彼と同様、何んと塩と胡椒だけをかけてスパゲッティを食べているではないか。

二人は、互いに顔を見合わせ、ニヤリと笑い、人気（ひとけ）のないレストランの中で、ただ黙々と口を動かすだけであった。

ホテルの部屋も殺風景だ。薄暗い電球が天井から部屋を照らし、隅には机とスタンドがひっそりと置いてある。わずかな救いは、バスルームに浴槽が付いていたことだ。

だが、その浴槽の底には、砂が入り込んでざらざらとしている。温たかいお湯を入れ、浴槽に体を沈めると、砂が桂木の太股や尻に当って居心地が悪い。砂は、浴室だけではなく、部屋の隅々まで侵入してきて、どこを触ってもざらざらとした感触が彼の神経をいら立たせた。

トイレは、各部屋毎にはない。廊下の突き当りに共同トイレがあるだけだ。薄暗い廊下を歩いて用を足さなければならない。桂木は、ホテルを変えようと思った。だが、他に適当なホテルはなく選択の余地はなかった。

土曜日の夜、音楽と喧噪が一階のバーから聞こえてきた。普段閉鎖しているバーが、土曜日の夜だけ営業するのだと言う。音楽を鳴らしダンスに興ずる者や大声で会話する者が入り乱れてバーの中は、騒音と熱気に包まれている。桂木は、初め少数のムスリム以外の人たちが騒いでいるのかと思った。だが、それにしては賑やか過ぎる。ムスリムの人たちも一緒になって騒いでいるようだった。

一歩街を出れば、茫漠とした砂丘が続く渇き切った土地である。その中で、慎しやかな生活を営むモーリタニアの人びとの週一度のささやかな楽しみがバーの喧噪となって表われているように桂木には思えた。

ヌアクショットの街は、実に蠅が多い。砂漠のような乾燥した土地には、蠅はいないものだと想像していた桂木には意外であった。カラカラに乾いた空気の中での蠅は、少こしでも湿気のある所を求めて人間や動物にまつわりつく。目、鼻、口、手足など直接外気に触れ、湿気を感ずるところであれば、どこにでも止まる。

モーリタニア人は、男も女も長いローブをまといすっぽりと体を覆い隠すことによって、この蠅が直接膚に触れないようにしている。

桂木は、空港の待合室で蠅の群に悩まされた。顔と頭に蠅が舞い下り、唇、目、耳などに集る。それを追い払う手が少こしでも動きを止めるとまた舞い下りて来てその手にまでまつわりつく。

暫く待合室での蠅との苦闘の後、桂木は機上の人となりダカールに向った。

ダカールの街は、ヌアクショットに較べ明るく、ネオンもところどころ見られた。街の人の騒めきも桂木には心地良い響きに聞こえた。

（つづく）

漢詩

潮騒錄（四十三）

鯨游海

遊比西島桃源郷

平成十六年九月

南涯千萬里
孤島不知名
砂灼月光暖
風乾陽氣盈
一驚耶子重
復慰碧波輕
渺渺誰能極
戲孫仙界瀛

押韻・名盈輕瀛

〈比西島の桃源郷に遊ぶ〉

南涯　千万里
孤島　名も知らず
砂灼けて　月光暖かく
風乾きて　陽気盈つ
ひとたび驚ろく　耶子の重きに
また慰さむ　碧波の軽きに
渺々　誰か能く極めん
孫と戯むる　仙界の瀛

〔注　解〕

この年の秋九月、フィージー島に遊んだ。赤道直下南太平洋に浮かぶ常夏の楽園。九月は北半球では秋だが、ここは正に盛夏。然し何と快適な桃源郷であろうか。

灼熱の太陽は強烈で赤褐色に焼けたが、乾いた微風が心地よく、海はあくまで澄んで美しい。時間はゆっくりと過ぎていく。人々は人なつっこくて親切そのもの。逢う毎に「今日は。おはよござます。今晩は」等流暢な日本語で話しかけてくる。質朴で心情豊かな人々が居た。

☆耶子の実の生れにし島は波静か
　頬つねりつつ孫と戯むる

さてこの漢詩の訓読みを試みに七五調で読んでみよう。

みなみのはてか　せんばんり
しまかげひとつ　なもしらず
すなあつくして　つきぬくく
かぜさわやかに　ようきみつ
われおどろきぬ　おもきやし
なぐさめらるる　かろきなみ
ただべうべうと　きわめなし
まごとたわむる　あおきうみ

前の漢文脈（漢文訓読体）の簡潔、雄渾、力強さは影を潜め、流麗、典雅、優しさが現われてより音楽的となった。各々に特徴はあるものの、より叙情的となった。抑も日本語は凡ゆる言語中、最も単調な声調＝ひびきといわれる。木魚を叩くが如き平板なサウンドである。他方フランス語を始めとする殆んどの言語は強弱のアクセントがあり自ずから音楽的である。中国語には四声平仄があり複雑な母音が変幻し流麗である。日本語の単調を補うにはリズムを強制する必要がある。かくして七五や五七の定型が必然発生したのではなかろうか。ここから和歌や俳句が生まれたと愚考するが如何であろう。

なお七五調は流麗、典雅に五七調は重厚、壮重に響く。

「春高楼の　花の宴　巡る盃　影さして　千代の松が枝
別け出でし　昔の光　今何処」。「小諸なる　古城の畔
雲白く　遊子悲しむ　緑なす　はこべは萌えず……」。

悼林馬蹄子先生

平成十六年十一月

詩禮通儒茶道人
每遭奇問懇嘗唇
滿杯一笑無不答
馬蹄忽忽盍俟春

押韻・人　唇　春

〈林馬蹄子先生を悼む〉

詩礼の通儒　茶道の人
奇問に遭うごとに　懇ろに唇を嘗む
杯満つれば一笑して　答えざること無し
馬蹄そう〳〵　盍んぞ春を俟たざる

〔注　解〕

私の所属する歴史愛好クラブ史遊会の先師、林左馬衛氏が亡くなった。先生のお人柄や私との関係がお判りでない読者諸兄にはこの句のみでは今一つ真意が伝わらないと思う。ついては「史遊会通信」に掲載した私の哀悼文を左に紹介させて戴く。

詩・礼・楽を伝えた人　　鯨　游海

嗚乎、悲しい哉。嗟乎、やんぬる哉。
もう再び先生の謦咳に接し得ぬとは。
七～八年も前の事であろうか。初めて先生にお逢いした時、昭和天皇にそっくりでいらっしゃるとの

印象を受けた。果たして宮内庁書陵部にご勤務なさったと聞き、皇族にご縁のある方かと思っていた。加えて先生の談論風発に忽ち魅了されて了った。

詩を論じ礼を語り楽を説かれる飄々としたお姿に、未だこの国にもこのような文人が居られたのかと驚き嬉しかった。

爾来、史遊会の二次会の酒席ではさり気なく近くに席を占め、先生の片言隻句を聴き洩らすまいと努めた。漢詩を好み漢籍を齧る私にとって、先生が奥野信太郎（慶大教授・中国文学者）の直弟子だと聞いただけで憧憬し、尊崇おく能わざる所であったが、酒席を重ねるにつけ先生の中国古典への造詣の深さに圧倒された。本物の学問をした人の凄さを思い知った。プロの漢学者であられた先生にしてみれば、今どき漢詩もどきを作ると称する私が珍奇で笑止千万であった筈だが、また余程可愛かったに違いない。多分「この男、少しは詩礼楽が判るらしいわい」と。

拙詩集一巻を上梓し贈呈した折には、綿々たる墨筆の雁帛を忝のうし、懇篤なご指導と愛情溢るるご感想を賜わった。ご冗談に違いないが「石川忠久君（二松学舎大学々長・ＮＨＫ漢詩講師）の作る漢詩よりは面白い」と評された事もあった。

先生が体調勝れず休みがちになられた頃、天は「中国古典派」と自称する中込勝則、森下征二の両氏を史遊会に配してくれた。

吉備眞備に私淑した阿藤伯海（旧制一高の漢文教授）は、両人共通の故地である岡山県吉備に墓碑を刻み「吾れ千年遅かりき」と嘆じたという。その阿藤が戦后亡くなった後、この碑を尋ねた門下生の詩人清岡卓行は「日本最後の漢詩人が逝った」と慟哭したという。

通夜での先生のお顔は安らかで微笑んでおられた。清岡卓行に倣って私は先生に誓った。「日本最後の詩礼楽の人が逝った。然しこの灯は中国古典派の三人で守り伝承して参ります」と。

霊前には天皇皇后両陛下からのお供物が供えられていた。嗚乎、惜しい哉。嗟乎、寂しい哉。

詩礼＝儒教の教典の四書五経を代表する詩経と礼記の二書。転じて詩は文学一般、礼は道徳、法規、社会規範等概念を象徴。孔子が息子に庭で諭したのもこの二書で庭訓の語を生んだ程君子必須の教養とされた。楽は音楽。最も高尚な芸術を指すが転じて芸能、趣味、風流にも及ぶ。先生の場合茶道でも有名であられた。通儒＝広く書物や物事に通じている学者。馬蹄は号。盍＝何不に同じ。

☆遂に得し詩礼知る人足ばやに
われを遺して逝きて帰らじ

熱海溫泉納涼花火之宴　　平成十六年八月

夜陰忽發金襴傘
琥珀大輪紅玉華
亂舞閃光雖刹那
娥眉呑息醉天花

押韻・華　花

〈熱海温泉納涼花火の宴〉

夜陰たちまち発く　金襴の傘
琥珀の大輪　紅玉の華
乱舞せる閃光　刹那と雖ど
娥眉息を呑みて　天花に酔う

〔注　解〕

金襴＝金の糸を模様に織り込んだ美しい錦の織物。
琥珀＝黄褐色の宝玉。澄んだ美しい酒を李白は「玉碗盛來琥珀光」と詠んだ（客中行）。紅玉＝ここではルビー。
刹那＝仏教用語で「束の間」。蛾眉＝美しい眉。転じて美人の形容。天花＝仏教用語で天上に咲く花。天から降ってくる花ともいう。尚雪の別名にも使われる。
京都大文字の送り火を始め夜空を彩どる火は、浄土を照らす灯であろうか。仏教との深い縁を感じる火の祭典。

☆湯上りの白磁の肌を朱に染めて
星雨に発く金襴の傘

〈漢詩の流れ33〉北宋の巨星たち⑥　蘇軾（蘇東坡）2

前赤壁賦　　平成十六年九月

……如怨如慕　如泣如訴　餘音嫋嫋　不絶如縷　舞幽壑之潛蛟　泣孤舟之嫠婦
蘇子愀然　正襟危坐　而問客曰　何爲其然也　客曰　月明星稀　烏鵲南飛　此非曹孟德之詩乎　西望夏口　東望武昌　山川相繆　鬱乎蒼蒼　此非孟德之困於周郎者乎　方其破荊州　下江陵　順流而東也　舳艫千里　旌旗蔽空　釃酒臨江　横槊賦詩　固一世之雄也　而今安在哉　況吾與子　漁樵於江渚之上　侶魚鰕而友麋鹿　駕一葉之扁舟　舉匏樽以相屬　寄蜉蝣於天地

（前赤壁の賦）―前回からの続き

……如怨むが如く慕うが如く、泣くが如く訴うるが如し。余音嫋々として、絶えざること縷の如し。幽壑の潜蛟を舞わしめ、孤舟の嫠婦を泣かしむ。蘇子愀然として、襟を正し危坐し客に問うて曰く「何為れぞ其れ然るや」と。客曰く「月明らかに星稀れに烏鵲南に飛ぶ、とは此れ曹孟徳の詩に非ずや。西の方夏口を望み東の方武昌を望めば山川相繆い、鬱乎として蒼々たり。此れ孟徳の周郎に困められし者に非ずや。其の荊州を破り江陵を下り、流に順いて東するに方りてや舳艫千里、旌旗空を蔽う。酒を醼みて江に臨み、槊を横たえて詩を賦す。固に一世の雄なり。而るに今安くに在りや。況んや吾と子と江渚の上に漁樵し、魚鰕を侶とし麋鹿を友とし、一葉の扁舟に駕し、匏樽を挙げて以て相属し、蜉蝣を天地に寄す、渺たる滄海の一粟な

渺滄海之一粟　哀吾生之須臾　羨長江之無窮　挾飛仙以遨遊　抱明月而長終　知不可乎驟得　託遺響於悲風　蘇子曰　客亦知夫水與月乎　逝者如斯　而未嘗往也　盈虚者如彼　而卒莫消長也　蓋將自其變者而觀之　則天地曾不能以一瞬　自其不變者而觀之　則物與我皆無盡也　而又何羨乎　且夫天地之間　物各有主　苟非吾之所有　雖一毫而莫取　惟江上之清風　與山間之明月　耳得之而爲聲　目遇之而成色　取之無禁　用之不竭　是造物者之無盡藏也　而吾與子之所共食　客喜而笑　洗盞更酌

るをや。吾が生の須臾なるを哀しみ、長江の窮まり無きを羨む。飛仙を挟みて以て遨遊し、明月を抱きて長しえに終えんこと、驟かには得べからざるを知り、遺響を悲風に託せり」と。蘇子曰く「客も亦夫の水と月とを知るか。逝く者は斯の如くなれども、未だ嘗つて往かざる也。盈虚する者は彼の如くなれども卒に消長する莫き也。蓋し将た其の変ずる者自りして之を観れば、則ち天地も曽ち以て一瞬なる事能わず。其の変せざる者自りして之を観れば則ち物と我と皆尽くる無き也。而るを又何をか羨まんや。且つ夫れ天地の間、物各々主有り。苟も吾の有する所に非ざれば一毫と雖も取る事莫し。惟江上の清風と山間の明月とは耳之を得て声を為し、目之に遇いて色を成す。之を取れども禁ずる無く之を用うれども竭きず。是造物者の無尽蔵也。而して吾と子との共に食う所なり」と。客喜びて笑い盞を洗いて更に酌む。肴核既に尽き杯盤狼藉たり。相与に舟中に枕藉して東方の既に白むを知らず。

肴核既盡　杯盤狼籍
相與枕藉乎舟中　不知東方之既白（完）

総字数五三六言の詠史賦。赤壁は後漢末（二〇八）魏の曹操が八十万の水軍を率いて、呉の孫権、蜀の劉備の連合軍と戦った古戦場。孫権の武将周瑜が三万の軍で迎え撃ち、火攻めの計を用いて大勝した。

所で、この戦いのあった地は、湖北省嘉魚県にある赤壁で、蘇軾の遊んだ赤壁ではない。彼が遊んだのは黄州城外長江左岸の赤鼻磯であった。違う場所だと承知の上で、人間の運命を考える舞台としてこの地を選び、英傑たちの繰り広げたドラマを想い描いたのである。

賦は楚辞の流れを汲んで生まれた漢代の文学形式で問答形式をとりつつ韻を踏み華麗な言葉を連ねる叙事文学。朗誦される事を意識した、押韻や対句を重視する律賦が唐代まで盛行した。これに対し蘇軾の賦は、より自由で叙情的な文賦と呼ばれる。唐の韓愈・柳宗元に始まり宋の欧陽脩に至って根を張った古文復帰であった。

蘇軾は剛直の人でありまた柔軟な人であった。精神が柔軟だったから政治的には剛直であり得た。欧陽脩や司馬光の旧法党に属し王安石の新法と対立した。左遷の筆禍となった句「讀書萬卷不讀律　到君堯舜知無術」は弟に宛てた詩である。商人出身で才能のみで宰相迄昇った。

撞木（しゅもく）

☆戦後六十年「靴下と女性が強くなった」と言われて久しい。家庭生活では、主役を演じ、学校、地域、芸能、文化活動も女性の積極的な参加と協力によって支えられている。職場での活躍も目立ち始めた。今後ますます女性の職場進出は活発化するであろう。

☆これまでの日本の歴史観では「日本の女性は抑圧と忍従の歴史である」とする見方が一般的であった。しかし必らずしもそうとも言えない。王朝文化華やかなりし頃の平安時代は、ある意味では女性の時代でもあった。本号で完結となった島津隆子氏の「小野小町物語」は、小町を単に嫋やかな美人としてでなく矜持を失わず自分に正直に毅然として生きた女性として描いている。

☆小町がこの矜持を保ち得たのは、その美貌に加え、優れた才能を発揮した歌があったからである。人間は、自分に自信の持てるものがあれば自立の精神が育つ。小町には歌があった。そのため男性に縋って生きる必要がなかった。恋愛においても、数多くの求愛を退け好きな男性とのみ対等の立場で愛し合った。

☆小町没後、清少納言、和泉式部、紫式部など多数の豊かな才能を持った女性が輩出し、十～十一世紀の絢爛たる王朝文化を彩った。当時にあっては、世界でも類を見ない女流文学の華を咲かせたのである。小野小町は、その先駆けとなった。日本は、平安の昔から女性の才能を育んできた国であったのだ。（O・S）

まんじ 第96号

平成17年５月１日発行（非売）

発行人　三戸岡　道　夫（みとおか　みちお）
編集長　太　田　精　一（おおた　せいいち）
事務局長　鍋　屋　次　郎（なべや　じろう）

（事務局）　〒223-0056　横浜市港北区新吉田町2477－３　太田善朗方
TEL・FAX　045（544）5947

（郵便振替口座）　No.00270-0-64592　加入者名　ま　ん　じ

（印刷製本）　大和印刷株式会社
〒332-0031　川口市青木１－12－20
TEL 048（254）3311　FAX 048（254）3313

表紙の絵について
仏が邪心のない童児の表情を借りて人の世に
あまねく光明をもたらしてくれる。

田寺怜葦（たでられい）　画

まんじ

No. 97

2005.8.1

まんじ 第九十七号 目次

平家の女―和歌に託した人生……島津隆子…4
おさななじみ……太田和貞…10
裏切られて（二の二）……千坂精一…19
天城の鬼火（その二）……堀内永代…32
針の穴を通った駱駝（三）……鍋屋次郎…38
孔子春秋（四）……三戸岡道夫…50
茉莉花伝―東丹国使と来た娘―（四）……森下征二…60
三つのコンサート……森実与子…80
許せぬ一言「まだやってんの」……大和禎人…86
短歌　流離の渚……曽根竣作…89
短歌　行雲流水（十）（一）望郷のバラード（二）近詠十五首……石黒修身…92

連詩　「記念写真」より（十四行詩三題）……松下壽男…97
ハート・トウ・ハート　第二話オーバーシーズ……松下壽男…98
九十九里浜で泣いた司馬遼太郎（司馬雑感四）……山田嘉久…113
古い物・遠い夢……忠内正之…125
還暦からの考古学（三）玉の話（その2）……中山喬央…134
虎変する韓国……新井宏…141
花火の町瀏陽をたずねて……吉田忠雄…148
孔孟の教え―最近の日中問題を憂う……伊治哲…155
遙かなるカメルーン（八）……太田精一…167
漢詩潮騒録（四十四）……鯨游海…179
撞木……編集子…183
表紙……田寺怜葦
カット……宮城正彦
カット……鈴木國男
カット……清水トム

平家の女―和歌に託した人生

島津隆子

例えば、西山に紅葉狩りに出かけた清盛の末弟の忠度から、みごとな紅葉の一枝と、それに結んだ歌を贈られたことがある。

きみに思ひ深きみ山のもみぢ葉を
あらしのひまに折りぞしらする

嵐の絶え間に紅葉の枝を折り、季節の移りと、あなたを思っている気持をお知らせします、というのだ。彼女が返歌をする。

おぼつかな折りこそしらね誰に思ひ
深きみ山のもみぢなるらむ

深い山奥の紅葉に託して、深い思いを知らせるとおっしゃるのは、どなたに対してのお心なのでしょうか。おぼつかないことですこと。

この時代、誘いの歌を木の枝に結ぶのは、一つの礼儀であったし、相手の出方を読むのに好都合でもあった。女もこのようにわざと相手をはぐらかすことが常套手段でもあり、恋歌の贈答につきものの大人のお遊びでもあった。

彼女の生涯の恋人となる年下の右少将・平資盛との恋が成ったのはそんな雰囲気の中でのことである。

資盛は清盛の長男で小松内大臣と称された重盛の次男である。重盛は出世が早く、四十歳で内大臣になったが、病を得て出家してしまう。この重盛の長男・維盛（これもり）は光源氏にたとえられるほどの美貌の持主であったが、資盛にしろ、異母弟の清経にしろ、維盛に勝るとも劣らぬ美しい容姿をしていた。

彼女が仕え慕っていた徳子は、天皇より四歳年上であったが、右京大夫も資盛より六歳年上であった。それだけに資盛との恋は、最初から何かともの思いを誘いがちな切ないものであった。

相手は年下の美青年で、しかも全盛を誇る平家一門の嫡流家の貴公子である。加えて、資盛には、右京大夫の家などはるかに及ばない名家から嫁いだ年若い正妻がいた。

恋路には迷いいらじと思いしを
うき契りにもひかれぬるかな

右京大夫には以前から和歌を渡されたり、しきりに言い寄ってくる肖像画の大家、藤原隆信の存在があった。この似顔絵画家の求愛をはじめは躊躇し拒んでいたのだが、彼女がいつか隆信を受け入れるようになったのは、年若い資盛との恋の苦しさから逃れようとしてのことだった。

年齢は資盛とは逆に隆信の方が十五歳も上で五十歳に近かった。一説に彼女は数年前に世を去った父親の面影を隆信の内に求めたともいわれる。

彼女の心は二人の男性の間を微妙にゆれ動いた。しかし、古風なラブ・ハンターである隆信は彼女との間を友人に自慢げに触れ廻っていた。それを耳にした彼女は隆信の軽薄さを嫌悪した。しょせん隆信は彼女が期待したような知的庇護者では在り得なかったのだ。

彼女の愛は急速に醒め、二人の間は短期間で終わりを告げた。

越えぬればくやしかりける逢坂を
なにゆえにか踏みはじしける

治承二年（一一七八）十一月、徳子は一子をもうけた。

安徳天皇の誕生である。ついに天皇の外戚となった平家一門の権勢は絶頂に達したのだ。しかし、絶頂は同時に下降の始まりでもある。

翌三年七月、文字通り平家の大黒柱であった重盛が四十二歳という若さで死んだ。いわば平家絶頂期にふりかかった痛恨の死であった。一門からの人望が厚かった重盛の死は、いうまでもなく父清盛にとっても大きな打撃であった。そして、この頃から清盛の専横が増してゆくのだ。

次いで治承四年（一一八〇）五月、源頼政の挙兵があり、以後、続々と諸国の源氏が蜂起を開始する。

木曽義仲、源義経、源頼朝、源範頼、北条時政、畠山重忠、和田義盛、等など……。

このように世が騒然とする時期、彼女は宮廷を離れた。

結婚を考えて隆信と結ばれたものの、破局を迎えたまま引きつづき徳子のもとに仕えて、資盛と顔を合わせねばならないのが彼女には辛く思えたのだ。

考えあぐねた末、治承二年の秋なかば、彼女は徳子のお産に先立ち、逃れるように宮中を辞した。母親の病気を口実に実家に戻ったのである。

だが、翌年の夏、本当に病気になった母親は世を去ってしまった。重なる傷心の彼女が頼るべき人は兄だけになった。

兄は僧の身である。彼女は京の西善峯寺に住している兄の尊円を訪ね、その寺に身を寄せることになった。

ここは洛中を遠く離れた淋しい山の中である。訪れる人とてめったになかった。

だが、ある日、大きな体躯の一人の青年武将が、この侘しい山寺を尋ねてきた。手には京の土産を携えている。彼女は驚きに目をみはった。そこに佇むのは紛れもない平資盛であった。

その日を境に彼女の心は楽しみに満たされていった。

彼女としては、短期間だったが、隆信と関係をもった間奏曲も入ったので、資盛との仲はもはや思い諦めたつもりでいた。そして、この山深い善峯寺を恋に傷ついた身の隠れ家に選んだのである。

だが、驚くべきか、意外なことに往復数里、馬を飛ばしても丸一日かかる山道を、厭いもせずに、彼女のもとへ通いつづける資盛の姿があった。

はじめのうちは移り気とも見えた年下の貴公子は、これほどの情熱をその内に秘めていてくれたのだ。しかも、多忙を極める政務の間を縫っての訪問である。

この頃の資盛の地位は次第に高くなっていて、養和一年（一一八一）には右近衛権中将という位にいた。さらに一門の中心的存在の一人として、兄の維盛や叔父の知盛、薩摩守忠度らと、源氏追討の指揮官となり、各地に

出陣を重ねる身であった。

次第に凄惨な様相を帯びてゆく戦局の中で、資盛は彼女との逢瀬に唯一、生きている実感と、心の安らぎを見出していたのかもしれない。

資盛の直面する現実は、富士川の合戦、北陸くりから峠の合戦……と敗走を重ねる味方の軍勢の劣勢振りである。加えて、後白河法皇を始めとする宮廷貴族の心が急速度に平家から離れつつある状況下にあった。

そして、資盛たちの境地はさらに悪化の一路を辿る。

動揺する平家一門が追い込まれた末期症状の中で、資盛を含む「小松殿の公達」と呼ばれる重盛一族は、いつか完全に孤立した存在となっていたのだ。

平家一門とはいっても、高階基章女を母とする重盛の一族と、時子を母とする宗盛たち一門の主流派とは別個の系統をなしていた。

寿永二年（一一八三）七月、平家一門は「旭日の将軍」といわれる木曽義仲の猛攻に抗しきれず、ついに都落ちをする。

六波羅に甍を並べて建つ、平家一門の屋敷に火を放ち、西海をめざして落ちていったのである。

この時資盛は義仲の大軍を、京への玄関口宇治で、必死に防いでいる最中であった。

都落ちから壇ノ浦での全滅に至る過程の中で「小松殿の公達」は、しばしば異心を起して反逆するのではないかと噂されていた。そして、実際にも維盛や清経が一門から離脱して孤独な最期を遂げた。これは鉄の団結を誇ったかに見えた一門内での隠微な対立を反映したものである。

だが、資盛は兄や弟と違って脱落者にはならなかった。

この年、資盛は従三位蔵人頭となるのだが、二十三歳の若さで蔵人頭に任命されたのは、わが国官制上空前にして絶後のことである。それだけ資盛の高級官僚としての手腕がずば抜けていたことになる。

現代ならさしずめ政官界の消息にも通じているエキスパートといったところで、宗盛ら主流派にとっても資盛は貴重な存在であった。

平家一門の人々を極端にけ嫌いする後白河法皇さえも資盛だけは例外で、法王の覚えはすこぶるよかった。法王は資盛を平家から切り離し、朝廷保護の者にして、源氏から匿おうと考えたほどである。それも廷臣として十二分なその能力を惜しんだゆえであった。

だから資盛には、清盛の弟である池殿頼盛一族のように、法王の袖にすがって生き残る道も残されていた。だが、資盛はあえて一門と運命を共にして、あらん限りの勇戦奮闘の末、一の谷の戦いで源義経に敗れた。

そして、資盛は一の谷から屋島へと、西海を小船で漂いながら、元暦二年（一一八五）三月二十四日、落日に

彩られた春の壇ノ浦の波間に身を沈めた。

その有様は、

「平中納言教盛、修理大夫経盛兄弟が鎧の上に錨を負って手を取り組んで海に入った。小松の新三位中将と同じく少将有盛といとこの左馬頭行盛も手に手を取り組んで、一所に沈んでいったのである」

なべて世のはかなきことを悲しとは
かかる夢みぬ人やいひけん

このような時、彼女は山崎で独り資盛のことを偲びながら武運を祈りつづけていた。

いづくにていかなることを思ひつつ
こよひの月に袖しぼるらむ

ある日、彼女のもとに一通の文書が届けられた。資盛の死の知らせであった。

彦星のゆき逢いの空を眺めても
待つこともなきわれぞ悲しき

平家一門の都落ちは寿永二年（一一八三）七月二十五日のことであった。

都落ちを前にあの人は別れを告げにきてくれた。星逢いの夜から間もなくの初秋の風が吹く頃だった。それからというものは、儚いものの例に引かれる七夕の、一年に一度の逢う瀬さえ、私には永遠に許されぬ願いとなった。虚しい歳月ばかりが徒に流れてゆく……秋になるたびに星を眺めてはあの人を思い出すのだ。

秋ごとに別れし頃を思ひづる
心のうちを星はみるらん

資盛の死から十年近くを経た四十代の終わりになって、

「さるべき人、さるべき人、去りがたくいひはからふことありて」

資盛は去るべくして去ってしまった人だが、彼女の心はどこにも去り難い。資盛の幻と語ることを意図して、彼女の足は資盛の面影が残る宮中へと向いた。

そして、彼女は再びそこに仕える身となる。今度は後鳥羽上皇付きの女官として。

その部屋、この廊下、あの池……偲ばれるのは昔のことである。資盛と同輩であった宮廷の貴公子たちは、今はそれぞれに栄達し、高官に列している。その姿をまのあたりにすれば、

ああ、あの人も生きていてくれたなら、今頃はきっと、

彼女は返らぬ嘆きを新たにするのだった。

今はただしひて忘るる昔しへを
思ひいでよと澄める月影

彼女が二度目の宮仕えをいつまでつづけていたのか不明だが、後鳥羽上皇が院政を始めて十余年、土御門上皇、さらに順徳天皇の建暦二年（一二一二）頃まで、女官として宮中にいたらしいといわれる。

資盛への尽きぬ思いは思いとして再出発した後の彼女は、一面、若い女官たちの先輩としての役回りを、そつなく務めこなしていた。

何かと口やかましい僧侶である兄の許にいるよりは、やはり宮中での生活の方が彼女の肌に合っていたのだろうか。

やがて後鳥羽上皇によって引き起された承久の乱で、鎌倉方の坂東武者が都に攻め上ってくる。

洛中が一時修羅の巷となったことは、改めて彼女の心に、木曽義仲に追われた平家一門の都落ちと、忘れ得ぬ人である資盛を想い起させた。

数日の間、部屋に閉じこもった彼女は涙にくれた。

承久の乱からさらに十余年を経た天福元年（一二三二）の頃、彼女は世間から完全に身を引いて出家していた。そこへ、時の歌壇の第一人者である藤原定家から、新勅選集への採用の含みをもって、歌集を見せて欲しいと声がかけられた。

この定家の一言が左京大夫という彼女の名を永遠に史上に留めたといえよう。彼女は定家から和歌を褒められ、あわせてこの歌集に載せる場合の作者名を尋ねられたのだ。

実名か、ペンネームか、あるいは最初の宮仕えの時の女官名か、それとも二度目の折のものがいいのかと、定家に問われた彼女は答えた。

言の葉のもし世に散らば忍ばしき
昔の名こそとめまほしけれ

その昔、建礼門院徳子の後宮で名乗っていた名を留めて欲しい、というのである。この彼女の願いは叶えられ、かつて資盛との激しくも悲しい恋を語らった彼女の歌は、「建礼門院右京大夫」の名で、勅選集その他に載った。

また彼女は、自身の宮中生活の初めから筆を起し資盛との恋の追憶を綴り、平家一門の盛衰を抒情的に歌った上下二巻からなる『建礼門院右京大夫集』を遺している。

それはまるで伴侶のように彼女を支えた和歌があればこその、生きた証といえよう。

おさななじみ

太田和貞

（あの土手にあがれば、江戸川が見える。お喜久にも会える）

そう思うだけで心も体も弾んで、勘八は一気に土手を駆け上がった。

西に傾いた冬の陽を浴びて、江戸川は赤く染まりながら悠然と流れていた。

出迎えの幸助は舫った伝馬舟に座っていたが、勘八に気付かずに、すぐには立たなかった。川風の寒さを防ぐためか、幸助は首に手拭いを巻いていた。

そこは河原の渡しだった。下小岩村の飛地が行徳領にあるため、村人は毎朝、伝馬舟で江戸川を渡り、畑を耕して夕方、また伝馬舟で村に帰ってきた。

幕府は江戸川に小岩・市川の関所と金町・松戸の関所を設けて、「入鉄砲に出女」を厳しく取り締まっていた。

しかし、河原の渡しでは村人の江戸川の往来は自由で、その渡しは小岩・市川の関所から二里ばかり下流にあった。勘八一行の成田講も四日前に、この河原の渡しを渡り、成田山に参詣して、はればれとした顔で、再び河原の渡しに帰ってきたところだった。

（幸助！）と勘八は叫ぼうとしたが、幸助の暗い顔に気付いて、出掛けたことばを呑み込んだ。

（まだ傷口が痛むのか？）

幸助に駆け寄るのをためらって勘八はゆっくりと幸助に近付いた。

ことしの成田講の走り使いは、勘八では無かった。幸助が当番だったが、成田山に出発する直前に、左足の傷を化膿させてしまったのだ。

「ほんとに申し訳ねえが、この足じゃ、みんなに迷惑を掛けるだけだあ。ことしの当番を来年のおめえと代わって貰えたらありがてえ」

必死に頼み込む幸助に負けて、「ああ、いいよ」と勘八は言うしか無かった。

「すまねえな。恩にきるだ」

何度も頭を下げる幸助に、「なんということはねえよ。成田講にいくのが一年早くなっただけだ」とそのことばを遮った。

（お喜久が怒るだろうな）

と、ちらっとお喜久の顔が頭に浮かんだ。

お喜久は寺子屋師匠の治郎左衛門のひとり娘だった。ことし十六歳の色白な可愛い娘だった。

お喜久より三つ年上の勘八と幸助はこの寺子屋に三年間、通った。

この寺子屋では、三人は仲がよかったが、お喜久の胸がふくらみ始めると、三人はなんとなく離れていった。ところが、ことしの浅間神社の村祭りで三人が出会った日から、また、もとの仲良しに戻った。

お喜久を中心にして勘八と幸助は張り合っていたが、三人とも言葉や態度には少しも表さなかった。

勘八が誘えばお喜久はどこへでもついてきた。浅間神社の暗闇の中で、思い切って勘八はお喜久の口を吸った。

勘八の首に両手を巻き付けたお喜久の体が海老のように、そった。

「骨がとろけて、立っていられなかった」

別れ際にお喜久はそう言って笑った。

闇に浮かんだお喜久の白い顔とその言葉を思い出して勘八の心は弾んだ。

「お喜久は元気かい？」

勘八は最っ先に聞いた。

「……」

「おれはお喜久は元気かいと聞いているんだ！」

勘八はいらだって大きな声を出した。

幸助はボソボソと何か言った。

「そんな小さな声じゃ聞えねえ。もっと大きな声で言え！」

「お喜久は死んだ。三日前に……」

「悪い冗談はよせ！」

「冗談じゃねえ。浅間神社の池にはまって死んだ。師匠夫婦もきのう首を吊った」

「……」

「成田講の一行が帰ってきたら葬式を出そうと待っていたんだ」

「成田に早飛脚を立ててくれたらよかったのに……」

「三人いっしょの葬式はこの村はじまってのことだから何をどうしたらいいのか、見当も付かなかった。早飛脚と言われてみれば、そうだったなと思うけど誰も気が付かなかった」

寺子屋一家の惨事を聞いた成田講一行は、大急ぎで伝馬舟で江戸川を渡った。

勘八の後ろで伝馬舟をあやっている幸助の気配を感

じながら
（こんなことになるなら成田講にいかねえで、お喜久のそばについていたらよかった）
と後悔したり、（幸助の奴が足を怪我したのが一番いけねえんだ）と幸助を恨んだりした。

北風に揺れている縄のれんをくぐり、戸障子を開けると、居酒屋のざわめきがあった。
「いらッ……」、戸障子を開ける音で一斉に入口を振り返った客と女将は入ってきたのが勘八と分かると、顔の表情も言葉もそこでとまった。一瞬、静まり帰った雰囲気に反発するかのように、「熱いのを二、三本持ってきてくれ！」と勘八は怒鳴った。
成田から帰ってきた勘八はお喜久の足取りを方々で聞いてまわった。
新川の居酒屋で二軒、はしごをしてきたので勘八は相当に酔っていた。どの居酒屋でも勘八は警戒された。
誰もが寺子屋事件にかかわりたくないというのが本音だった。
（このおれを置いて、お喜久が死ぬはずはねえ。お喜久を浅間神社の池にはめやがった奴がいる）
勘八は酔って寝たふりをしながら、まわりの話に耳をそばだてていた。きょうで十日、お喜久を死に追いやった犯人を探して下小岩村、船堀村、新川の居酒屋をまわったが、なんの手掛かりも無かった。
勘八が成田講にいっている留守に、お喜久が死に、さらに娘の死を悲しんだ師匠夫婦が首を吊るという痛ましい事件に、誰もが気の毒にと思いながらも掛かり合いになることを避けていた。
「勘八の奴、なんでおれにカリカリしているんだ」
「そりゃ、おめえ。勘八とお喜久はできていたのよ。お喜久は布団の上で死んだんじゃねえぜ。浅間神社の池にはまって死んだんだ。だから勘八はトコトン犯人を追い詰める気でいるんだ。おれは、勘八は偉えと思っているよ」
「お喜久の仇討ちか……」
「そうよ。でもこの仇討ちは時間が掛かるぜ。どこのどいつだと皆目見当もつかねえから、手の打ちようがねえ。おれも心には掛けているが手掛かりなしだ」
熱燗を二、三本ひっかけたので、勘八は頭がグルグルと回り出した。飯台に顔を伏せて勘八は空鼾をかいた。
勘八が酔って眠ってしまったと思った客は小声で勘八とお喜久の噂話を始めたが次第にその声も大きくなった。

勘八は犯人の手掛かりを求めて、隣村の賭場に入った。
「親分さん、わしはきょうが初めてです。よろしくお願い申し上げます」
「これは、ご丁寧な挨拶、恐れ入ります。はじめての客人は、えてして大勝ちすることが多うござんすよ。勝負は時の運と言いますが、はなから夢中にならんことですな。それに、賽の目にも潮時がありますので、その潮目に早く気付くことです」
親分にそう言われて盆の前に座った勘八だったが、壺振りが両手を胸の前で交差させて賽を壺にほうり込むあざやかなしぐさと壺の中でぶつかりあう賽の音に、勘八は我を忘れていた。
「さあ、張った、張った。丁方、少々張りなすって」
中盆の渋くてよく透る声につられて、勘八は「丁！」と駒札を盆ござの上に置いた。
「勝負！」中盆の声に、壺振りは壺を開けた。四三の半だった。
「あッ、あー」と落胆とも感嘆ともとれるどよめきが湧き起こった。
勘八が張った駒札は、すぐ掻き集められたが、半方に張った勘八の隣の若者には倍近くの駒札が戻ってきた。
（どんな野郎か、面が見てえ）
勘八は、そう思いながらも強情に顔を真正面に向けていた。
「入ります」壺振りの掛け声とともに、二つの賽が壺にほうり込まれて、カラカラと鳴った。
「さあ、張った、張った！　丁か、半か。ふたつにひとつですぜ。腹を決めてどーんといきましょうぜ」
中盆の調子のいい声に押されて、勘八は丁に張った。
壺振りが壺を開けるとき、勘八の体がゾクゾクと震えた。
「五二の半！」勘八は、またも負けた。
「夢中にならんことですな。賽の目の潮目に気を付けることです。潮時を間違えねえように……」
親分のことばが蘇ってきて、百目ろうそくの芯がジィジィと焼ける音が勘八の耳に入ってきた。
勘八は、しばらく賭けずに壺振りの壺の振り方を眺めていた。
（丁、丁、丁。半、半）と賽の目は続くことが多かった。
「さあ、張った！　張った！」
中盆の声にうながされて勘八は、「丁！」と丁目に張った。最後の大駒を盆ござに押し出したとき、勘八は目をつぶっていた。
「二一の丁！」中盆の声に勘八は目を開いて賽の目を初めて見た。三と一の目が出ていた。
ほぼ倍になって戻ってきた駒札を胸に抱いて、壺振りが壺に賽を投げ入れる音を耳を澄ませて聞いた。
「丁！」勘八は自信をもって丁目に張った。
「三三の丁！」勘八の顔にかすかな微笑が浮んだ。

次も丁目に貼って、大駒が八枚になった。そのまま八枚の大駒を丁に張ったとき、勘八の声は震えていた。

「一一の丁！」と中盆の声を聞いたとき（やったあ）と勘八は心の中で叫んでいた。

「のぼせあがっておりますので、ちょっと休ませていただきます」

壺振りと中盆に大駒を一枚ずつほうって、勘八は立ちあがった。

「こりゃ、どうも」壺振りと中盆がちょっと頭を下げた。

「客人！　いい度胸だ。あそこで、また、丁に張るなんざあ、玄人でもできねえ。一一の丁をよく当てなすったあ」

「親分さんにほめられて、身がすくむ思いだのう。なんで丁と言ったのか、おらにも分かんねえけど、気が付いたら丁と言っていただ。おらは初めてで、賭場の仕法（しかた）を知らねえから親分さん、駒札を好きなだけ取って下っせえ」

勘八は十四枚の大駒を親分の前に差し出した。

「こりゃ恐れ入りやす。素人さんに言われて、それじゃと寺銭をいただいちゃ、わしの顔が立ちません。このつぎおいでになったとき、客人の度胸とツキをいただきやす」

親分はそう言ったが、勘八は四枚の大駒を親分の前に置いて、残りを金に代えて貰った。九両近くの金が勘八の財布に残った。

その後、二、三度、賭場に通ったが、最初のようなツキは回ってこなくて、二両、三両とすってしまった。

「ピンゾロの客人」と一目置かれて、勘八はいい気持ちになっていた。

「丁！　半！」と金を賭けながら勘八は、しょっちゅう聞き耳を立てていたが、どこからもお喜久殺しの犯人の手掛かりは何も得られなかった。

いつものように、見張りの三下（さんした）に一分銀を渡して賭場を出た。

「いつもありがとうさんです。ピンゾロの兄い、またどうぞ」

とお世辞を言われてしまった。

（水呑百姓のおれがピンゾロの兄いか？　笑っちゃうね。そのピンゾロの兄いも今夜で終りだ！）

暗闇に白く浮かぶ夜道を歩きながら勘八はそう思った。

（居酒屋も駄目。だからお喜久を襲ったのは、てっきり賭場に通う野郎だと見当をつけたが、これも空振り。さーてと、どこから手を付けたらいいか、皆目見当も付かねえ）

勘八は懐手して財布をギュッと握った。

（ゾロ目が出たおかげで、犯人探しの軍資金はまだ底をついちゃいねえ。野郎！　見ていやがれ、きっと探し出して、その土手っ腹に風穴を開けてやる！）

勘八が勢い込んでそう思ったとき、切り株に足をとられて夜道に倒れてしまった。

「痛てーぇ！」右足をちぢめて、足の甲をさすったとき、「あッ」と思い出した。赤くみみずばれした幸助の首筋を……。

江戸川を渡り、無事に対岸の篠崎河岸に着いた伝馬舟から桟橋に幸助は跳び移った。両膝を桟橋に付け、両手で伝馬舟の船端をしっかりつかんだ。

「ありがとうよ」成田講の一行は口々に礼を言いながら舟から桟橋に移った。その度に舟がグラグラと揺れた。

一番最後になった勘八は何気なく幸助を見下ろした。首に巻いていた手拭いがずり落ちて赤いみみずばれが二本見えた。

「そのみみずばれ、どうしたんだ」と勘八は聞いた。

「いや、なに。庭の植木を手入れしていて小枝を首にひっかけたんだ」

幸助は慌てて、首の手拭いを首に巻き直した。

「お大事に」と言うのも業腹で、勘八は無言で幸助に背を向けた。

（あれがおれへのお喜久の最後の知らせだったんだ）

道端に座わり込みながら勘八はそう思った。

池のほとりで、幸助に口を吸われようとしたとき、お喜久は体をのけぞらして口を吸われまいとして暴れた。幸助に抱きすくめられてお喜久は幸助の首に思い切り爪を立てた。

その跡が赤いみみずばれとなって、手拭いの下に隠れていた。

（あのとき、気付いていりゃ……）

自分の馬鹿さ加減に勘八は腹が立った。

手拭いの下にかくされていた赤いみみずばれに気付いてから勘八は家にとじこもって、三日間考え続けた。

「その首筋のみみずばれはお喜久がつけたものです」といくら主張したとしても何も証拠は無かった。

幸助が言うように

「植木の手入れをしていて、小枝で首筋を傷付けたのだ」と言われてしまえばそのあとの追求はできなかった。

「お喜久が化けて出て、幸助の口からおれがお喜久を殺しました」

と自供させるのがいちばんだが、どうやってお喜久の幽霊を連れてこられるのか、勘八には分からなかった。

道端の木株に足をとられて倒れたとき、手拭いでかく

されていた赤いみみずばれをハッと思い出したのだった。

あの夜、木株に足を取られなければ、お喜久の最後のおれへの知らせも闇に溶け込んで二度と日の目を見なかったはずだった。

最後の土壇場で気付いたのは、本当によかったと勘八は思った。

お喜久の幽霊をこの世に連れてくることだけを考えて勘八は悩み続けた。

おさななじみだからこそ知っている幸助の臆病に、勘八は賭けた。

四日目の夜、勘八は蓑をつけ、右肩に鍬をかつぎ、左手に灯(ひ)をともした墓場提灯（無地の提灯）を持って家を出た。

幸助の家の前で、「幸助！」と大声で叫んだ。戸障子を開いて出てきた幸助は、

「縁起でもねえ。おめえの提灯は、墓場提灯じゃねえか……」

幸助は勘八の提灯を見咎めて、すぐ言った。

「この提灯はお喜久の墓場から貰ってきたんだ。この墓場提灯がこわいのか？」

「いや、そんなことはねえ」

「そんなら、この提灯を持って、いっしょにこい！」

「どこさ、いくだ？」

「くりゃわかる。嫌だとはいわせねえ。おめえは、おれに借りがある。おれがことし成田講に行ったのも、おめえに頼まれたからだ」

「そうだ、申し訳なかったとおれは思っている。どうやって、つぐなったらいいかおれは迷っている」

「道に迷わねえように、先に立って歩け！」

闇夜に出掛けるのを渋っている幸助をせきたてて、勘八は暗闇の中を歩き出した。

提灯の光に、細かい雨粒が白く輝いて浮かんだ。

「くれぇなあ。こんな雨の晩には化け物がでてくるんじゃねえか？」

「おれはお喜久の幽霊に会いてえ。お喜久がこの世で最後の息をしたとき、そばに誰がいたか知りてえ」

「勘八、こわい話は無しにしようぜ。おれは小さいときから臆病だったことを知ってるだろ」

「すまねえ。忘れていたよ。おめえがこわがりだったことをさ……。でも、これからお喜久に会いにいこうと思っているんだ」

「会いにいこうといったって、お喜久は土の中だぜ」

勘八はよろけた振りをして、幸助の左足を踏んだ。

「ご免、ご免。何か白い物がふーっと飛んできたような気がして、おめえの足を踏んでしまった」

「足は大丈夫だ。それよりも、こんな暗い夜道を歩くのは、やめようぜ、おれの家に酒がある。早く帰って酒を呑もうよ」

幸助の声は、うわずっていた。

（幸助の野郎！　とうとう尻尾を出しやがった。左足を化膿したから成田講にいけねえといったのも嘘だったんだ）

墓場提灯と夜の暗闇におびえて、幸助は左足を化膿させたことを口実にしたのをすっかり忘れていた。

「そこを右だ！」

勘八はすごんだ声で幸助に言った。

「右って言ったって、右の道をいけば東善寺の墓場だ」

「だから、さっき、お喜久に会いにいくと言ったろ」

「お喜久を拝むなら、なにもこんな闇夜にくることはねえや」

「闇夜だから、お喜久も会ってくれるんだ」

「会ってくれるって、お喜久は土の中……」

幸助の声は震えていた。

「だからよ。棺桶を堀り起こして、お喜久に会うだ」

「墓を暴いたら、おめえ獄門だぜ」

「獄門だって、いいじゃねえか。お喜久の顔が見え、お喜久が何を言いたかったのか、分かるというもんだ」

「おれは嫌だ！　おれにはできねえ」

「意気地なし！　おめえだってお喜久に惚れていたろ。お喜久がこの世の最後に何を言いたかったのか、おめえ知りたくねえのか？」

「おれは嫌だ！　知りたくもねえ」

「この野郎！　逃げやがったら、ただじゃ置かねえぞ。棺桶はおれが掘るから提灯をしっかりかざしていろ！」

勘八はお喜久の墓標を抜いて、地面にそっと置いた。

墓場提灯を持った幸助の手が震えていた。

「しっかり持て！　提灯の灯が揺れて堀りづれえ」

こんもりした土饅頭(どまんじゅう)に、勘八は力一杯に鍬を打ち込んだ。

「勘弁してくれぇ！　お喜久が化けて出る！」

「おめぇ、いまお喜久が化けてでてくると言ったな。化けてでてくるには、それ相当の恨みが無くちゃならねえ。お喜久の恨みはなんだ！」

「おれはお喜久を殺すつもりは無かった。お喜久が勘八を好いていたことは知っていた。だから、勘八を成田講に追っ放って、その留守にお喜久をものにしようと思ったんだ」

「幸助！　おめえお喜久を殺して置いて、よくもまあ、しゃあしゃあとおれの前に面を出しやがったな」

「おれはお喜久を殺しちゃいねえ。お喜久が暴れたから肩を抱いて静めようとしたらお喜久が池に飛び込んだんだ」

「それをおめえは黙って見ていたのか？」

「いや、助けようと思った。でも体が金縛りになって

体が動けなかった。お喜久が池の真ん中に進むにつれて、水面が腰、胸とあがっていき頭が見えなくなったとき、情けねえが、おれは逃げだしたんだ」

「畜生！　お喜久を見殺しにしやがって、おめえが手を貸してくれたらお喜久は助かったかもしれねえ。それをお喜久が死んだのと、おれは関係はありませんと、口をぬぐって、きょうまできたのは赦せねえ」

「いや、河原の渡しで勘八たちを迎えたとき、ぜんぶ話そうと思ったんだ」

「なにをぬかす。思っただけで言わねえのは、もっと悪い。河原の渡しで、てめえは手拭いで首筋のみみずばれを隠していたじゃないか。おれに何もかも話そうと思った奴が、なんで赤いみみずばれを隠そうとしたんだ。ぜんぶ話そうと思った、綺麗ごとを並べるんじゃねえや。てめえは師匠と娘のお喜久を殺したから、きっと獄門になる。そうしたら、てめえの晒し首に、おれはつばをしっかけてやる」

次第に激昂してきた勘八の顔が墓場提灯の灯に赤黒く浮かびあがった。

幸助の手の震えが大きくなって、墓場提灯を取り落した。提灯がボーッと燃え上がった瞬間、

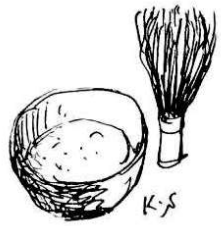
「野郎！　逃げようたって逃がさねえぞ！」

勘八は幸助の腰を蹴飛ばして、倒れた幸助の体に馬乗りになった。

「なんで、殺しやがったんだ！」

勘八は幸助を殴った。

墓場提灯が燃えつきて、あたりが真っ暗になっても勘八は幸助を殴り続けた。



裏切られて（二の二）

千坂精一

四

白井城の長尾一聲齋から、

「長尾景虎殿が、庇護を快諾してくれた」

という待ち侘びた吉報が届いたが、評定は菅野大膳亮や上原兵庫助ら好戦派に押し切られて、ついに、

「東上野の諸将を動員して、北條軍を迎え撃つ」

ことに決してしまった。

勝ち誇った好戦派は、穏健派の者たちに出会うと、

（この腰抜けどもめが）

と言わんばかりに睨め付け、蔑視した。

曽我兵庫介ばば、三田五郎左衛門や妻鹿田新介らとともに執拗に好戦派と渡り合い、最後まで頑強に抵抗しつづけてきたので、不本意ではあったが、しかし、評定の決定はすなわち管領家の決意であるからには家臣として当然のことながら敵わぬまでも一致団結して北條軍との合戦に臨む覚悟を固めなければならないと思った。

だが、同時に憲政と龍若丸をなんとしても平井城から脱出させねばならぬ、と一途に思い詰める妻鹿田新介からの協力要請も為し遂げてやらなければならなかった。

命懸けで主君を護るのは家臣として当然のことであったが、兵庫介は妻鹿田新介の忠誠心に深く感銘した。

（頼られたからには、成功させてやらねばならぬ）

兵庫介は、そう心に誓った。

北條軍を迎え撃つ合戦の準備に入った管領家は、さっそく棟梁憲政の名で東上野の諸将に動員令を発した。

だが、どうしたことか、諸将は反応を示さなかった。

春の合戦で、北條軍の強さを思い知らされた彼らは、勝ち目のない管領家の陣触れに逡巡したのである。

菅野や上原にとっては思いもよらぬことであった。

初めのうちは、火急の陣触れに即応できず遅れているのだろうぐらいに軽く考えていたのだが、再三督促の使者を送っても、彼らは言を左右にして応じなかった。

そこにいたって、初めて真意を覚り、慌てた。

彼らは、東上野諸将の戦力を当てにして北條軍と戦うことを強硬したのである。まったくの誤算であった。

東上野の諸将が与力してくれなければ、あとは管領家麾下の白井城主長尾一聲斎や、箕輪城主長野業正、岩付城（岩槻市太田）主太田資正、忍城（行田市）主成田長泰らだけで防戦するほかはなかったが、岩付城と忍城は寧ろ北條方の河越城や松山城に近かったし、白井城と箕輪城は平井城より遥か後方にあって、いずれも管領家の居城を防衛するには距離的に難があった。

となると、上杉方は結局平井城にいる僅か六百の手勢だけで北條軍を迎え撃つより仕方がなく、到底野戦では衆寡敵せず、勝ち目がなかったから、籠城して麾下諸将の救援を期待するよりほかに手段はなかった。

助勢は得られず、平井城の戦力だけで北條軍と対戦しなければならない、という孤立無援の情況が判然りしてくると、家臣たちは不安になって動揺しはじめた。

そんなある日、家臣たちの動揺に拍車を掛ける衝撃的事件が起こった。管野大膳亮と上原兵庫助が夜陰に乗じて逐電したのである。まさに青天の霹靂であった。

二人の出奔が知れ渡ると、われもわれもと逃亡者が続出し、僅かな兵力がさらに減少していった。

平井城は、もはや北條軍に陥とされる運命にあった。

新介は、そうした事態を歓迎して、密かに北叟笑んだ。

好戦派の目を掠めて憲政と龍若丸を脱出させようと決意してからは、日夜腐心しつづけてきたのだが、いまはもうその秘策を練る必要もなくなったのである。

（もはや気遣いなく城を出られる）

新介は、愁眉をひらいた。

そんなところへ三田五郎左衛門から呼び出しがあった。

先夜、五郎左衛門が刺客の闇討ちに遭った鮎川の辺りを歩いて三田屋敷に行くと、曽我兵庫介もきていた。

「新介。これでわれらの思惑どおり、越後の長尾景虎殿を恃むよりほかに管領家存続のみちはなくなったな」

「はい。北條がいつ動くか一刻も猶予はなりませぬ」

「景虎殿のご意向に表裏がなければよいがのう」

五郎左衛門に視線を向けられた曽我兵庫介が、

「あるいは、景虎殿からの吉報が実は平子殿の謀略で、越後へ足を踏み入れた途端に捕えて首を刎ね手柄にされるやも知れませぬが、たとえそうなったところで、このまま落城を待つよりは一縷の希みがござりまする」

そうきっぱりと言い切った。

新介が、兵庫介のあとを継いで、

「ご老体のご心中お察しいたしまする。それがしにも一

抹の不安がないわけではござりませぬが、しかし、このまま手を拱いて北條軍が攻めてくるのを待つよりは賢明でござりましょう。兵庫介の申すとおり、謀られたかも知れぬと覚悟を決めて越後へ参り、景虎殿が噂に違わぬ義侠のおかたであったならば重畳ではござりませぬか」

「うむ。そうじゃのう。景虎殿を選ぶからには信じねばなるまい。さっそくそのようにお屋形様へ言上いたそう」

「お屋形様には、長尾景虎殿が臣下として身をもってお護り下さると申していることにいたさねばなりませぬ」

「新介。念には及ばぬ。儂じゃとて徒らに馬齢を重ねておるわけではない。気懸かりであれば二人とも儂と一緒に参ろう。そのほうがお屋形様も納得なされよう」

翌日、三田五郎左衛門は二人を伴って憲政に拝謁した。

憲政は、いまやこの上野に管領家を護ろうとする国人たちがいなくなってしまったうえに、北條との合戦を目前にして家中から逃亡者が続出していることですっかり気弱になってしまい、迫りくる危機に恐れ戦いていた。

そんなところへ、老臣三田五郎左衛門が、

「越後の長尾景虎殿がお迎えいたすと申してきました」

という朗報を持ってきたので、すっかり気をよくして、

「予はまだ長尾景虎を見知らぬが、そのほうたちが確かな人物と推薦いたすのならばそういたそう。上杉の家名を護ってくれるというのであれば誰であっても構わぬ」

と、渡りに船とばかりに乗り気になった。

三人は、示し合わせておいたとおり、一抹の不安については噯気にも出さなかった。

憲政の許しが出たので、さっそく老臣たちのあいだで越後行きの人選がおこなわれた。あまり物々しい人数では長尾景虎の真意を疑っているようだし、さりとて、衰えたりとはいえ関東管領家の権威は示さねばというところから、結局老臣たちは全員供奉することにして、あとは剛の者たちを揃えて総勢五十人ということに決まった。

そして、白井城の長尾一聲斎の家臣団が国境の三国峠を越えて稗生城まで警固して行くことになった。

曽我兵庫介も五十人のなかに加えられた。

兵庫介は、選ばれたことに感激し、五郎左衛門と生死をともにすることを喜んだ。もし越後へ入ったところで平子房長の軍勢に襲われる事態になったら、そのときは憲政と五郎左衛門を庇って死力を尽くそうと肝に銘じた。

もし選に漏れれば、囮隊に入って北條軍と戦うことになり、生き残れる公算はなかったから、それを思えば、

謀略に嵌まって斃れたところで結果は同じであった。
兵庫介は、五郎左衛門から越後への供奉に加えられたことを知らされると、新介にそのことを報告した。
新介は、主君憲政の平井城脱出計画に協力してくれた兵庫介が、越後へ同行することになったのを喜んだ。
「妻鹿田殿。越後でもしや不測の事態が起きましたら、兵庫介はお屋形様と三田様をお護りいたしますゆえ、龍若丸様とお方様をお願いいたしまする」
「心得ておるわ。お屋形様とご老体は任せたぞ。おぬしの伎倆をもってすれば、いかに越後の強者どもじゃとてなにほどのことがあろう。もしもそのような事態に立ちいたったならば、たがいに死力を尽くして戦おうぞ」
「畏まりました」
二人は眼と眼を合わせて、大きく頷き合った。
「ほどなくこの平井の里とも別れでござりまするな」
曽我兵庫介が、ふと感傷的になって呟いた。
「平井を捨てて流浪の旅か。兵庫介、われらはともに妻女をもたぬから、こういうときは身軽でよいのう」
「なにを申されまする。兵庫介はお屋形様の側近に過ぎませぬが、妻鹿田様は龍若丸様の傅役という使命があるではござりませぬか。現在は重い責務でご苦労ですが、やがて龍若丸様の世になれば、ご苦労が報われて管領家の重鎮になられる。羨ましいことにござりまする」
新介は確かに将来が約束されていた。龍若丸が山内上杉家の棟梁として関東管領になったとき、新介の人生は花ひらくはずであった。将来がたのしみだった。
(儂の出世は龍若丸様あってのことじゃ。このおかたは掌中の珠、大切にお護りしていかなければならぬ)
新介は、今日までずっとそう思いつづけてきていた。

五

(いよいよ北條氏康が大軍を率いて小田原を出陣する)
忍びの報らせが三田五郎左衛門の許に届いたのは、平井の里に木枯らしが吹き底冷えのする暗い日であった。
五郎左衛門は、すぐ白井城の長尾一聲齋に急使を送った。
三日後、長尾一聲齋率いる軍勢が平井城に到着した。
傍目には、その情況が籠城の準備に見えた。
平井城の異変を敏感に察知した農民たちは、
「また合戦がはじまるぞ」
と逃げ仕度を急いだ。
城内の大広間で長尾一聲齋と三田五郎左衛門が中心になって春日山への経路について綿密な計画が練られた。
氏康に追手をかけられた場合を想定して、晦ますために街道を避けて三国峠まで間道を行くことになった。
計画に同席したのは、新介と兵庫介のほかは二階堂、小野、石堂、野村らの側近たちだけに限られた。

棟梁が合戦をまえにして居城を捨て出奔すると知れれば、残留将兵たちに暴動を起こされる虞があったので、越後への逃避行は隠密裡に運び、表向きは飽くまでも三段構えの防衛陣を布くということにして、平井城や金山城が陥とされたら箕輪城で食い止め、憲政は最後の砦となる白井城に移って指揮を執るということにした。
箕輪城は、平井城と白井城のほぼ中間に位置していて、城主長野業正は長尾一聲齋の女婿であった。
密議が終わったあと妻鹿田新介は、あらためて憲政に、
「お方様と龍若丸様はそれがしがお護りいたしまする」
と誓った。
すると、憲政は、
「奥と龍若は、越後へ伴れて行かぬ」
そう冷やかに言った。
「なんと仰せられまする」
「越後へは伴れて行かぬのじゃ」
新介は、初め耳を疑ったが、確かめて唖然とした。
龍若丸が越後へ行かぬなら、自分も残ることになる。
新介は、憲政の無慈悲な仕打ちに肚を立てた。
「僅か五百の手勢では防ぎませぬゆえ、おふたかたのお命は危のうござりまする。ご一行にお加え下さりませ」
「龍若は病中、奥はか弱いゆえいずれも足手纏いじゃ。愚図愚図いたして北條の軍勢に追い付かれたらなんとする。家名存続のためにはなんとしても無事に越後へ入らねばならぬ。同行は許さぬ。いずこへなりと隠せ」
「なにとぞ、お方様と龍若丸様を越後へお伴れ下さりまするよう、それがしからもお願い申し上げまする」
曽我兵庫介が、新介に荷担した。
「間道を行く急ぎの旅じゃ、ならぬ。罷りならぬ」
「お屋形様――」
「諄いぞ、新介」
そう抑えられても、新介は主君の意に承服できなかった。自分が生き延びるためには、たとえ妻子であろうとも打ち捨てて省みない憲政の非情が赦せなかった。
新介は、執拗に食い下がったが、効果はなかった。
三田五郎左衛門が、新介を制して、
「お屋形様。お方様と龍若丸様は新介が申しますとおり、この界隈では何処へお隠し申し上げてもお命が危のうござりまするゆえ、越後へお伴れ遊ばさぬのであれば白井城へお移しなされましては如何でござりましょう」
と提案した。
「白井は越後へ参る道筋じゃ。それでは同行と同じことじゃ。たってと申さば常陸の佐竹へ参るがよい」
佐竹氏は、六代まえの憲基の弟義憲が養子に入ったことから、上杉とは親戚関係になっていた。
「常陸へ参りまするには、関東道を行かねばなりませぬ」
新介は、憲政の翻意を迫ってなおも食い下がった。

「女子供は怪しまれまい。忍や岩付よりは安全であろう」
「新介。われらが春日山へ到着いたしたならば、長尾景虎様にお方様と龍若丸様をお迎えしていただく」
五郎左衛門が、そう言って宥めた。
「それまで無事におられましょうや」
新介は不貞腐れた。いかに佐竹氏が親戚であろうとも、叛服常無しの世であれば、安泰とは限らなかった。
「無事でなくてなんとする。新介、よいか。おぬしは大切な御曹子を一命にかえてもお護りするのじゃ。何事も由緒ある鎌倉以来の名門上杉の家名を絶やさぬための辛棒じゃ。火急のことゆえ常陸へ参ることで承服いたせ」
五郎左衛門は、そう言って新介の希いを断念させた。
新介は、越後への同行が叶わぬとなれば、常陸へ行くよりほかにはこれといった思案も咄嗟には浮かばず、五郎左衛門の説得に従うよりほか仕方がなかった。
憲政の越後への出立は明日に決まった。
となると、龍若丸母子の出立は、明後日以後になる。
新介は、大広間を退出すると城を出て、木枯らし吹き荒ぶ闇の中を憤懣遣るかたない思いで彷徨い歩いた。
新介は、自身安泰の妨げになる者はたとえ妻女であろうと排除する非情な憲政がなんとしても赦せなかった。
憲政に見放され、知らぬ他国へ落ち延びて行く内室と龍若丸の不安に脅える胸中が思い遣られて、新介は酷い仕打ちを伝えねばならぬことが辛かった。
明後日には内室と龍若丸を平井城から脱出させねばならないが、龍若丸の高熱が下がるかどうか心配だった。
翌日は、降り出した雪がやがて吹雪になって前途多難を暗示したが、夕刻になってどうやら風だけは熄んだ。
憲政の一行は、日が暮れてから城を出た。
大手門前の篝火周辺だけが、仄明かるかった。
内室と妻鹿田新介ら少数の家臣たちが出立を見送った。
憲政が春日山へ行くことを知っているのは新介だけで、あとの者たちは白井城へ行くものと思っていた。
長尾一聲齋の家臣団に前後を護られた五十人の供の中程に、馬に乗った憲政の姿があった。
憲政は、今生の別れになるやも知れぬ妻子を捜そうともせず、虚ろな眼を前方の闇に向けて通り過ぎて行った。
憲政の非情な態度を恨めしく見遣っている新介のまえに、供の一人が立ち止まった。曽我兵庫介であった。
二人は、無言のまま暫く見詰め合った。主家が凋落したため、長い歳月ともに幾多の辛酸を嘗め、屈辱に耐えてきたが、ここで別れたのちはいつまた会えるか判らなかった。二人は眼と眼で語り合い、別離を惜しんだ。
隊列が過ぎ去ると、曽我兵庫介は二、三度大きく頷いて視線を外らし、内室に深々と一礼すると、なにかを吹っ切ろうとするかのように脇目も振らず駆け去った。
やがて、憲政の一行が降り頻る雪の彼方へ消えて行くと、新介は、われに返って内室のほうを視た。
寒さのせいか、あるいはまた迫りくる危機を予感してか、蒼白な顔が燃え盛る篝火に泛び上がっていた。
新介は、そんな内室を不憫に思った。

六

常陸へ行くには、北條軍が武蔵に進行してくるまえに、関東道を通り抜けてしまわなければならなかった。
妻鹿田新介は、憲政の一行が越後へ落ち延びていった翌日に内室と龍若丸を伴れて常陸へ旅立つはずであったが、龍若丸の微熱が下がらないので大事をとって一日延ばしにしているうちに、もう三日が過ぎてしまっていた。
北條軍は、すでに小田原を出陣したに違いなかった。
(常陸へ行くのは危険だ)
そう判断した新介は、同行する弟長三郎と叔父の九里采女正・従弟の九里與左衛門の三人に相談した。
「もはや関東道を行くのは危険だ」
「では、兄者はどうなされるおつもりじゃ」
「さりとて、女子供伴れで険しい間道は無理じゃ」
「関東道や間道のほかに常陸へ行く方法はござるまい」
「だから、常陸へは参れぬということじゃ」
「行かぬのですか」
三人は顔を見合わせた。
「ぬしは、常陸のほかによい思案でもあるのか」
九里采女正が、心細そうに尋ねた。
「さればでござる。こうなったからではござらぬが、いかにお屋形様の仰せとは申せ女子供の足で常陸までの長旅は所詮無理でござる。たとえお屋形様のお言い付けに背こうとも別行動でなら差し支えありますまい。伯父上、やはり白井城の長尾一聲齋殿の許へ参りましょう」
「うむ。儂とても知り人のおらぬ常陸などへ行って窮屈な思いをして暮らすよりは、そのほうが気楽でよいわ」
「そうと決まれば、伯父上とぬしたちはお方様と女どもを伴れて、明朝出立なされよ」
「龍若丸様と兄者はどうなされるのじゃ」
「女伴れでは目立つゆえ、ぬしらは先に発ってもらう」
「別々に白井へ行くのか」
「龍若丸様も一両日のうちにはご本復なされましょう」
「しかし、ぬし一人で龍若丸様をお護りするのは心許なかろう。長三郎か與左衛門を同行させよう」
「ご案じ召さるな。龍若丸様との二人旅ならば、万一途中で北條軍と出会いましても子供伴れの牢人者と見られましょうゆえ、よもや咎め立てはござりますまい」
「左様か。されば新介の申すとおりにいたそうかのう」

「それでは、いそぎ出立のお仕度をなされませ」
九里采女正は、ただちに白井城へ行く準備を急がせた。

七

妻鹿田新介が、本復した龍若丸の供をして平井城を出立したのは、九里采女正たちが内室を案内して白井城へ旅立ってから二日目の朝であった。
小田原を出陣した北條軍は、すでに武蔵に入り、北国道（関東道）を北上してきているに違いなかった。
新介は、途中で北條軍と出会う危険を避けるために、間道を抜けて高崎から北国道へ出る順路を選んだが、龍若丸は雪の凍てつく悪路に難儀して、すこし進んだだけですぐに足を止めてしまった。
（無事に使命を果たした伯父上たちは、いまごろ重荷を下ろして白井城でのんびり寛いでいることであろう）
そう思うと、新介は焦った。
しかし、新介の叱咤激励も効なく、龍若丸は立往生を繰り返し遅々として進まないので、新介はついに高崎へ行くことを諦めて、藤岡へ引き返すことにした。
日はすでに中天を過ぎて、西へ傾きはじめていた。
暫時の休息をとった新介は、龍若丸を窘めて、
「若君は堪え性がござりませぬゆえ、新介は安全な間道を行くことを断念いたしました。これよりは危険を承知で女子も歩ける下仁田道をまいり、本庄から北陸道へ入ることにいたしまするが、万一途中で北條軍に出会えばお命がありませぬゆえ、急ぎ下仁田道を通り抜けてしまわねばなりませぬ。確とお覚悟なされませ」
と諭した。
新介は、寒さと恐怖で蒼褪め戦いている龍若丸の手を引いて藤岡へ戻ると、神流川を渡って武蔵に入った。
里道の下仁田道は薄雪だけで、本庄から北国道を高崎へ向かえば、もはや北條軍と出会う虞はなくなる。
（北條軍より先に本庄を抜けられますよう護り給え）
新介はそう神に祈りながら、足早に歩きつづけた。
華奢な龍若丸は、新介の叱咤に脅えて懸命にあとを蹤いてくるのだが、すぐに歩き疲れて遅れてしまう。
「あと僅かで本庄でござりまする。ご辛棒なされませ」
新介は振り向き、蹌踉としている龍若丸を励ました。
踵を返して歩きはじめたとき、新介は、前方遥か彼方に土煙りのようなものが立ち上っているのを認めた。
（南無三、失敗った。北條軍だ）
新介は、咄嗟にそう判断して狼狽えた。
道の両側は雪を冠った田野がつづいていて、身を隠す起伏も樹木も見当たらなかったが、冬枯れの田畑の隅に荒屋がひとつぽつんとおかれているのが眼に入った。
（あそこしかない）
新介は、龍若丸の腕を摑み荒屋めがけて駆けた。

小屋は使われていないらしく、黴の匂いと湿気が充満していて底冷えがひどかった。そのうえ、板戸の破れ目から容赦なく吹き込む木枯らしでさらに寒気が募った。
新介は、寒さを凌ぐために、龍若丸を積んである古藁の中に押し込めると、自分もその近くに潜り込んだ。すると、ほんの少しだけ寒さが和らいだ。
やがて馬蹄の響きが近付いてきて、板戸の破れ目の僅かな視野の中を騎馬武者の一団が掠めて行った。
やはり北條軍であった。
いつまでもつづく馬蹄の響が、地鳴りのようであった。
一団が通り過ぎて行くと、しばらくしてまた次の一団が通って行く、という情況が果てしなくつづいた。
（これは千や二千ではない。かなりの大軍だ。氏康は上杉の滅亡を目論んでいるに違いない。この大軍に攻められては平井城はおろか箕輪も白井も持ち堪えられぬ）
新介は、そう判断して戦慄した。
戦力の差を見せつけられた新介は、希望を絶たれた。
やがて夕暮れが迫ると、ひときわ冷えが厳しくなった。蜿蜒とつづいた北條軍の隊列は、漸く終わるらしく、悠くり進んできていた。どうやら後詰隊らしかった。
その隊列の横を後方から疾駆してきた馬上の鎧武者が、頻りになにやら怒鳴りながら駆け抜けて行った。
すると、間もなく隊列が停まって馬上の武士たちが一斉に馬から降りた。どうやらここで野営するらしかった。
火か焚かれ、晩飯の烹炊がはじまった。
将兵たちは焚火を囲んで車座になり、暖をとった。
飢えと寒さに耐えて凝と潜んでいる小屋のなかの新介と龍若丸には、眼の前の光景が堪らなく羨ましかった。
新介は、管領家に仕える惨めさを思い知らされた。
かつては関東一円を統治して一世を風靡した上杉氏だったのだが、北條氏の擡頭によって駆逐され、ついに棟梁憲政は居城を捨てて越後へ出奔する破目になり、二百年栄えた由緒ある名門関東管領山内上杉氏の本拠平井城もいまや風前の灯になってしまっていた。
板戸の破れ目から垣間見る限りにおいても、北條軍の勢いは凄まじく、いかに越後の長尾景虎を頼ったところで関東奪回は至難であり、辛うじて越後の片隅で細々と家名を繋ぐだけに留まるであろう、と新介には思われた。
（お屋形様が武将の器量を備えておられたならば、北條ごときにこうまで蹂躙されずにすんだであろうに――）
そう述懐すると、口惜しさで涙が溢れた。
（これで、儂の将来の希望は絶たれてしまった）
新介は、龍若丸の代には重臣たちと肩を並べられる栄達が、泡沫と消えたことが無念で諦め切れなかった。

（お屋形様は、儂の生き甲斐だった栄達の夢を無惨に打ち砕いて、ひとり越後へ遁れて行ってしまわれた）

新介は、憲政の仕打ちを顧みて新たな怒りに燃えた。約束を反古にしたことを、なんとしても赦せなかった。

（たとえ無事に白井へ遁れたところで、氏康に滅ぼされることは眼に見えている。長尾景虎殿の救援が間に合うかどうかは判らぬ。いや、叛服常無しの世であれば他人は当てにならぬ。わが身は己れの才覚で守るしかない）

そう思い立つと、新介は心を鬼にして背信を決意した。

憲政の裏切りに対する報復であった。

当世風にいえば、「きれた」のである。

新介は、藁の中に潜って寒さと恐怖に震えている龍若丸を荒々しく引き摺り出すと、その腕を掴み、破れ戸を蹴倒して闇の戸外へ飛び出していった。

近くで焚火を囲んで談笑していた北條軍の将兵たちは猪が飛び込んできたかと驚いて、一斉に立ち上がった。

新介は、その一団に向かって、

「われは上杉の家臣妻鹿田新介と申す。これに御座すは御曹子龍若丸様でござる。御大将北條氏康殿にお目通りいたしたい。なにとぞ、お取り次ぎをお願い申す」。

と叫んで、仁王立ちした。

八

あたりは漆黒の闇に包まれ森閑としていた。妻鹿田新介が龍若丸と小屋から跳びだしたことで惹き起こした騒擾が鎮まってから、かなりの刻が経っていた。

焚火のまえに坐らされた新介と龍若丸を遠巻きにして、物々しい警備の人数が二重三重に取り囲んでいた。

新介は、与えられた夜食で空腹を満たし、冷え切った躰を焚火で充分に暖をとるとようやくわれに返った。

ときおり、薪の爆ぜる音が静寂を破った。

沈黙した顔が火照るほど、長い刻が過ぎていった。

やがて、馬蹄の響きが近付き、囲みの外で止まった。

すると、その付近の警備の者たちが急いで輪を解いた。

十人ほどの武士がなかに入り焚火のほうへ進んできた。

小柄だが精悍な顔つきの武将が新介と龍若丸の前へ来て立ち止まり、用意された床几に腰を下ろした。

（北條氏康だ）

そう察知すると、新介は思わず躰を固くした。噂に聞いた顔に二箇所の向こう傷が判然りと見て取れた。

「氏康じゃが、そなたは確と上杉の御曹子龍若丸殿か」

躰に似合わぬ大声であった。

「左様にござりまする。お屋形様は越後春日山の長尾景虎殿の許へ向かわれ、御曹子龍若丸様はこの妻鹿田新介がお供をして、白井へ参るところでござりました」

新介が、氏康を見詰めたまま龍若丸に代わって答えた。

そのとき、二人の武士が氏康のかたわらに近付いた。

「どうじゃ。龍若丸殿に相違ないか」

「はっ。龍若丸様と傅役の妻鹿田新介にござりまする」

きき覚えのある声であった。

顔を上げた新介は、思わず、

「あっ」

と叫んで、わが眼を疑った。

平井城を逐電した菅野大膳亮と上原兵庫助であった。

「もうよい。両名とも下がれ」

氏康の大声が響き渡った。

新介と龍若丸は氏康の本陣へ連行され、そこで新介は龍若丸と引き離されて、上杉方の動向を訊問された。

新介は、躊躇うことなく、動向を積極的に詳述した。

新介の神妙な態度は、好感を持たれたようであった。

囚われの身としては一夜を手厚く持て成された新介は、

（菅野や上原でさえも厚遇を受けているようであるから、宿敵上杉の御曹子を差し出した儂の手柄は高く評価され、その恩賞として氏康に重く用いられるに違いない）

と一縷の希望を抱いた。

翌朝、新介と龍若丸は、平井城を目指す北條軍とは別行動で、監視の人数とともに小田原へ護送された。

九

北上した北條軍は、神流川を渡って上野へ侵攻すると、敵影のない田野を駆け抜けて、平井城に迫った。

平井城に残留させられていた上杉の将兵たちは、城門を固く閉ざして頑強に抵抗し、必死に防戦したが、北條軍に外郭を焼き払われてからは所詮衆寡敵せず、僅か一日も持ち堪えられずに敢えなく落城した。

氏康は、副将格の伯父北條三郎長綱に精鋭三千を預けると、平井城の守備を託して小田原へ引き揚げてきた。

戦塵を払って小田原城に落着いた氏康は、さっそく先に到着していた妻鹿田新介と龍若丸を呼び出した。

氏康は、平井城落城の情況を具に話したあとで、

「さて、龍若丸殿」

とあらたまった。

呼ばれて居住まいを正した龍若丸を見据えた氏康は、

「そなたも武将の子ならば、これから申すことは充分納得がゆくであろう。よいか龍若丸殿、よく聴かれよ」

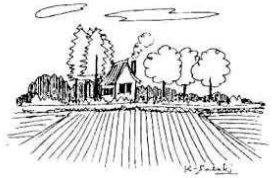
そう前置きしておいてから、

「まだ年端もゆかぬそなたを不憫ではあるが、儂は北條の棟梁として上杉の御曹子を赦すわけには参らぬのじ

と平伏した。
「だが、それは儂の手の者が捕らえたときのことじゃ」
新介は、氏康の言葉を疑った。乱世であれば誰が敵将の子を捕えて差し出しても、大手柄のはずであった。
「そのほうは上杉の家臣、龍若丸殿の傅役であろう」
新介は、恐る恐る顔を上げた。
氏康が険しい顔貌で睨みつけていた。
「妻鹿田新介は不忠不義の人非人じゃ。管領家恩顧の身なれば御曹子を匿い、時節を待って再興を謀るべきであるにも拘らず、己が身を永らえんがために年端もゆかぬ龍若丸殿を犠牲にいたすとは、人の道に背く所業氏康断じて赦せぬ。逆賊は見せしめのため打ち首にいたす」
氏康の語気は鋭かった。
新介は、打ち首と聴いて眼の前が真っ暗になった。
そして、
(そんな理不尽な。忠義の家臣に酷い仕打ちをしたのはお屋形様のほうじゃ。裏切者に報復してなにが悪い)
と心の中で叫びつづけた。
新介は、氏康の面前で高手小手に縛り上げられた。
そして、これ見よがしに小田原の大路を引き廻された。
観念した新介は、引かれ者の小唄で、
「立身出世の夢破れて刑場の露と消えるが、裏切った主君に報復できて満足じゃ。上杉を滅亡させたのは氏康ではない。この儂じゃ。妻鹿田新介じゃ。未練はないわ」
と嘯いた。
新介は一色村の松原(小田原市東町、山王川河口の東付近)へ連行されて斬罪に処せられ、晒し首にされた。
松の木に止まっていた一羽の鴉が、新介の首をみて、
「かぁ」
と一声甲高く啼いた。

越後の春日山へ安着して、長尾景虎に庇護された上杉憲政の許へ、この十三歳の嫡子龍若丸の悲報が届いたのは、雪深い北国に漸く春が訪れはじめた頃であった。

(完)



や。乱世の習いなれば生命を貰い受けねばならぬ」
と冷やかに行った。
龍若丸は、氏康の言葉を聴くと蒼褪めて震え出したが、新介は、氏康の裁きを予測していたので、龍若丸の助命を懇願する気はなく、黙したまま控えていた。
新介は、噯気にも出さなかったが、立身出世の夢を無惨に打ち砕いた憎みても余りある憲政への報復に主家を滅亡させたことで、心中快哉を叫んでいたのである。
氏康は、龍若丸の身柄を笠原越前守に預けて伊豆の修善寺へ護送させると、その日のうちに番侍の神尾治部右衛門に介錯を命じて、龍若丸の首を刎ねさせた。
余談だが、『小田原北條記』に因れば、神尾治部右衛門はその後ほどなくして気が狂れて死んだという。
龍若丸の処刑を報らされた新介は、悔いるどころか、
(これで儂には、近々恩賞の沙汰があるに違いない)
と密かに北叟笑んで、心待ちした。
だから、それから数日後に、氏康から待望の呼び出しがあったとき、新介は内心浮き浮きして出頭した。
氏康は、そんな新介の心底を見透かしたかのように、
「妻鹿田新介とやら、この氏康に上杉の御曹子を差し出したそのほうは、大手柄じゃのう」
と問いかけた。
新介は、思わず、
「はっ」

天城の鬼火（その二）

堀内永代

六

九月二十六日は、天城湯ヶ島温泉全体が秋の行楽シーズンを迎える前の安息日であった。

ところが、その日の夜半、湯ヶ島の温泉場から北へ三キロほど下がった、子宝霊泉で人気がある吉奈温泉T旅館の従業員寮に火災が発生した。

吉奈温泉は、国道四一四号線から一キロほど脇道に入った、鄙びた温泉場である。

この日は日曜日でもあったため、消防団員による夜間巡回も行なわれず、警戒陣も意表を突かれた形であった。『消防団員の夜間巡回のない夜に火事が起こる』という噂が現実となった。

（土地勘があって、消防の内情に詳しい者が犯人ではないか）という修一の推理は果して的中したのか。たまたま、今回の日曜日に限って夜間巡回を休止した。このことを知っているのは消防団員とその家族だけだ。修一は消防団員の顔を一人一人思い出して推理を巡らした。しかし、誰も彼もみんな子供の時からの知り合いばかりで、疑わしい者は思い浮かばない。

修一は消火作業中、警察官の動きをそれとなく注意していた。今回も警察官は、燃えている建物ではなく、火災現場の周りにいる人の動きを鋭い目で見ていた。

やはり犯人は消防団員なのか。今回も火の気のない自転車置き場付近から出火している。火付けの手口など犯人解明の手がかりは皆無であった。

警察は当初から複数の容疑者がいるとみて、夜間の張り込みや現場周辺の聞き込みを続けてきた。特に火災現場付近を徘徊する不審者の絞り込みをやっている中での四回目の事件であった。

吉奈温泉火災が発生して二十分ほど過ぎた十一時頃、天城温泉街唯一のスナック「白百合」の扉を開けて一人の中年男があわただしく駆け込んできた。

中年男は激しい息遣いをして、照明を暗くした室内を窺いながら一番奥のカウンター席に着いた。

スナック白百合のママ伊郷政子は、男の不安げな態度に不審を感じ、おしぼりを手にそっと近寄った。

中年男は、入り口を気にしながら（危なかった……もうちょっとだった）となにやら小声で独り言を呟いていた。

「あら、本谷楼の関戸さんではないの。何かあったの」

「うん……やばかった」

「なにがやばかったの……」

「ママには関係ないことだ、余計なことは聞くな」

中年男は、語気を強めた。

「ごめんなさい……わたし気に障ることといったかしら」

政子は、美しい眉根を寄せて謝った。

「ママ、ウイスキー、ダブルだ……」

「ハイ、ダブルね。関戸さんがウイスキーなんて珍しいわね……」

「……」

関戸由三は、出されたウイスキーをいっきに呷った。

「ママ、頼みがある……今夜は十時頃からここに居たことにしてくれないか、頼むよ」

横柄な由三が、いつになく弱気であった。

「ママ、もう一杯くれ……」

（十時からここに居たことにしてくれとは、関谷さん何を意味するのかしら……今夜の火事に関係あるのかしら）勘のいい政子は、とっさに推理をめぐらした。

そのとき、M旅館の浴衣を着たお客が四、五人入ってきた。人目が気になるのか由三は、

「ママ、さっきのこと頼むぜ……」

と念を押して帰っていった。由三のうしろ姿にはいつもの元気がなかった。

今度の放火事件は、翌日の新聞・テレビのトップニュースで報道された。テレビ局の中では、事情が判らないまま、警察の捜査方法を批判する解説者もいた。

こうなれば、自分で自分を守るしかない。住民たちは、交代で家の周りを見廻るようになった。周辺町村の住民も、何時自分が被害者にならないとも限らないと不安を感じ、行政担当者を交えて真剣に対策を検討し始めた。連続放火の恐怖に、伊豆半島全体がおののいた。

それから一週間後、被害を受けた旅館の従業員が、当日の夜、白っぽい小型車に乗り込む不審な人影を見たという情報を提供した。だが、その内容はあいまいで、中肉中背で、自動車に乗るときの足取りが少し重そうだったということだけであった。

旅館従業員からの情報提供があった翌日、修一や健太

郎ら消防団員は、消防本部の会議室に集まって、お互いにアリバイや所有車について話し合った。

修一、健太郎ら消防団幹部は、怪しい挙動の団員がいるらしいという噂を耳にしていたが、それを口に出す勇気のある者はいなかった。

しかし、修一は消防団員の中に犯人がいるという思いが日々増していった。

警察では、白い自動車を持った中肉中背で、歩き方に特徴のある男に焦点を絞って、消防団員の一人ひとりについて内偵を始めていた。

消防団員の中から犯人が出て欲しくない。その想いは、団員の共通の願いでもあった。

それにしても放火の理由は何か。四つの事件は関連性があるようでもあり、ないようでもある。謎は深まるばかりであった。

七

白雲荘の青山健太郎とフィアンセの大沢登世子は、秋田の両親にも挨拶を済ませ、すっかり結婚についての心の準備はできていた。久し振りで二人は、デートを兼ねて沼津市内のデパートへ披露宴の引き出物選びに出掛けた。

沼津までは、湯ヶ島から伊豆中央道を通って約一時間の距離である。二人はちょっとと華やいだ気分になった

が、車中の話題は連続放火事件のことであった。

「おれはな、犯人は消防団員ではないような気がするんだ。住民はみんな土地勘があるし、中肉中背の人は大勢いる。白っぽい乗用車だって沢山ある。もっと捜査の対象を広げる必要があるように思うんだ」

放火事件の解決が長引けば、自分たちの挙式も遅れる。健太郎は、そのことで少し苛立ちを感じていた。

「でもね、健太郎さん、警察は消火作業をしている消防団員の動きを注意しているというんでしょ。きっと何かを掴んでいるのよ」

登世子は彼女なりに、犯人探しの推理をしていた。

「信用金庫へいっている中原修一君がね、犯人は絶対消防団員だと言うんだ。あいつと、あいつが怪しいとね」

「それは誰なの……」

「うーん……言っていいかな……この話はここ限りだ。他人に絶対もらすな」

「大丈夫よ……わたし、健太郎さんに迷惑がかかるようなことは絶対言わないわ……」

「そうだな、登世子さんは口が堅いからな……」

「そうよ、だってわたし健太郎さんのお嫁さんだもの」

「修一君がいう一人はわさび栽培の仕事をしているNだ。子供の時に右脚を骨折した後遺症で、ちょっと歩き方に特徴があるんだ。アリバイもはっきりしないこともあって、本人も気にしているらしい」

「Nさんね……でもNさん、人目につき易い特徴のある身体で放火なんかするかしら。そんな目で見られてお気の毒ね」

「Nの他にもう一人、K君も怪しまれているんだ。K君は天城のゴルフ場に勤めているが、始めの出火とK君の退社と時間帯が同じ頃で、それにアリバイもはっきりしないようだ。K君はT旅館従業員寮火災の目撃証言にある不審者に体形が似ているんだ。白っぽい乗用車にも乗っているし、いつも火災現場に早く駆けつけている。それにNもK君も二人とも独身でね。そう言えばおれも独身だから怪しまれているのかな……」

「冗談言わないで下さい。健太郎さんには登世子が付いています」

「そうだな、おれには登世子さんという立派なフィアンセがいるからな。NやK君とは違うよな」

「そうよ、Nさんや、Kさんとは大違いだわ」

登世子は、両手を健太郎の左腕に添えて、うっとりと引き締まった健太郎の横顔を見上げた。しかし、楽しいはずの二人の会話はあまり弾まなかった。

今夜も、残業して融資申請書や報告書を書き上げた修一は、疲れた体を鼓舞して担当地域の夜間巡回を終えた。夜間巡回は、二人一組になって行っている。

修一は、一回目と三回目の火事の被害者・Yさんの長男連一と組んで夜間巡回をしている。Yさんは、今まで登世子が借りていた家の大家であった。幸い一回目も三回目も、いずれも早期発見で大事に至らなかった。

巡回から帰宅した修一は、妻の雅子に、

「雅子、今夜も消防団員が巡回しているから放火魔も動きがとれないだろうな」

「そうね、放火魔もあきらめて、火付けをやめてくれればいいのに……」

「犯人は案外身近なところにいて、我々の行動をあざ笑っているのかと思うと腹が立つな……」

「そうかも知れないわね。なかなか犯人は正体を現さないしね。警察では足の悪い人を対象に聞き込みしているという噂があるけど、もう少し発想を転換して、たまたまその時になにか原因があって足取りが重かっただけで、普段は軽快な歩き方の人かも知れないわね」

「雅子、きみ、なかなかいいところに気が付くな」

「だって、いつもあなたは、物事は客観的に見なくては駄目だっておっしゃっているでしょ。長靴や登山靴を履けば、たいていの人は足取りが重くなるものよ」

「うーん、そういうことも考えられるな。新しい靴が足に馴染まなくって、靴擦れが出来たなんてこともあるしな」

「融資の審査は、プラスの条件と、マイナスの条件の総和を比較して判断するんでしょ。犯人について疑わし

い人のプラス、マイナスを一人ひとり比較してみたら、案外、謎解きができるかも知れなくってよ。素人が口出すことではないでしょうが……」

「雅子、きみ、なかなかいい勘しているな」

「いやですわ、褒めたりして、あなたが日頃からいろいろお話を聞かせて下さるから、一寸そんなことを思い付いただけよ」

雅子のいうとおりかも知れない。NとKが怪しいと思っている人が多いが、あの二人ばかりをマークしていると、意外なところに犯人が隠れていたということもある。

吉奈温泉T旅館従業員寮の火災現場付近で、本谷楼の板前・関戸由三を見かけたという噂が流れた。由三は再び警察に事情聴取され、由三の女通いがばれた。

八

一方、修一と組んで夜間巡回を終えた漣一は、修一と別れてからスナック「白百合」にいった。白百合は、湯ヶ島温泉街のコアである天城会館の地階にあった。

白百合は、漣一が鬱積した苛立ちを癒す唯一のオアシスで、湯ヶ島にも都会的なセンスのある憩いの場が欲しいという温泉客の要望に応えるため、湯ヶ島温泉旅館組合の肝煎りでできた店であった。店の広さは二十坪ほどで、カウンター席が一〇、ソファーの席が三つあったが、今日はウィークデーのためか、客は一組で、静かであった。

白百合は、ママ伊郷政子の魅力で予想以上の営業成績をあげていた。

湯ヶ島温泉旅館組合では、都会的なセンスをもった憩いの場が欲しいという話が出たとき、店の経営者の人選に難航した。最終的に候補に残ったのが伊郷政子であった。彼女は、天城観光ホテル社長の一人娘で、地元のN大学を卒業後、デザイナーの夢を抱いて東京の服飾学院に学んだ。

均整のとれた肢体、長めの髪を内側にカールさせ、口を軽く結んで横目で見つめる切れ長の目が、男心を惹きつけた。加えて、知的な容貌とウイットに飛んだ応対、洗練されたイングリッシュは、伊豆を訪れる外国人観光客になくてはならない存在で、天城湯ヶ島温泉の顔でもあった。

白百合の常連客は、いつしか彼女のことを『いずのマドンナ』(伊豆の恋人)と呼んでいた。

マドンナ伊郷政子と、一つ年下の漣一とは、小学校の頃からの遊び友達で、二人は、夏休みの終わりになると、宿題を消化するために毎日政子の家で勉強した仲であった。

漣一は、定位置にしているカウンター席の片隅に腰を下ろし、小さな声でハイボールを注文した。

「ハイ、漣一さんハイボールよ」

漣一は、政子の差し出すグラスを手にしたが、すぐには口をつけなかった。そのとき新しい客が三人入ってきたので、政子は新しい客の方へ移動した。

一人になった漣一は、グラスを口にしながら(ちくしょう、ざぁまーみろ……)とブツブツ呟いていた。

子供の時から親しい友達の少ない漣一にとって、政子はたった一人の気軽に話のできる幼馴染であった。

やがてお客が帰り一息ついた政子は、

「漣一さん、どうしたの。今日は元気がないわね。何か会社で嫌なことがあったの、話してごらん。少しは気が晴れるわ……」

政子は、顔を近づけて優しく漣一を慰めた。

「……うん」

今日の漣一は、いままでにも増して口が重かった。

「漣一さん、小学校の頃の夏休みに、あなたは宿題が終らないと言って、わたしの家で一緒に勉強やったわね。あなたは私に宿題を押し付けて、自分はグーグーお昼寝しちゃってさ、ふたりは姉弟みたいだったから『まぁしようがないか』っていう感じで宿題をやってあげたこともあったわね」

「うん、政子さんには随分世話になったな」

よやく漣一は重い口を開いた。

「漣一さん、会社で嫌なことがあったの……」

「うん、この間、ちょっとしたミスをやってね、課長も、係長も、みんな俺を馬鹿にするんだ」

「日が経てばみんな忘れるわ。それまでの辛抱よ」

漣一は、『いずのマドンナ』こと伊郷政子の慰めの言葉で、落ち込んだ心がいくらか癒された気がした。

「漣一さん、昼間は会社、夜は町内の巡回で大変ね」

そこまで話した政子は、思いつめたような漣一の表情を見て、いやな予感がした。

漣一が帰った後で、政子はフィアンセのSに電話して漣一のことを話した。政子のフィアンセSは、N大学で「人権論」を講義する新進気鋭の少壮学者であった。

Sと政子は大学時代の教師と教え子の関係であったが、政子が上京した時に、Sが有名デザイナーを政子に紹介したことが縁で、二人は急速に接近した。住まいは離れていたが、二人は時々逢い、Sが助教授になったら挙式しようと約束していた。

Sは政子の話を聞いて(漣一にはなにか隠している部分がある。漣一が心を開くのを待つしかないかな)と政子の問に答えていた。

つづく

針の穴を通った駱駝（三）

鍋屋次郎

第三章　信仰

豊臣秀吉の前で、大名の地位も、領地も、惜しむことなく綺麗さっぱり脱ぎ捨てた高山右近は、夜遅く陣屋に戻ってからの、車座になっての家臣達との話は尽きることなく明け方まで続いた。

それは、東の空が白むまで、右近が大名も領地も捨てたキリシタンとしての信仰上の考えを、そしてこれから身分も地位も何もない一人のキリシタンとして生きて行くんだと言う決意を、家臣達に語り聞かせていた。

それを聞いていた家臣達は、右近の身にこれから起こって来るであろう予想もつかない厳しい艱難を考えながら、そのことを全く口にしない右近を不思議そうに見つめていた。

少し微睡（まどろ）んだだけで目覚めた右近は机に向い手紙を書き始めた。明石城内で留守を守っている妻ジュスタ宛てに簡単な事情の説明と、三日後までには家族が集まる先を知らせるから、それまでに最小限の旅支度を整えておくようにとだけ書き、家老宛には、自分が家臣達を引き連れて城に戻ることは、籠城を疑われる危険性があるので 自分は城には戻らない。城にある備金は、城下商人などへの支払いを全て済ませた後は、役高に応じて末端までの家臣に全てを配分するように指示すると共に、城受取りの使者に対しては、礼を尽くして城を明け渡すように依頼した。

また、城内の天主堂にいるバテレン・テトスに対しては昨日来の事情と共に、これから必ず京・大坂を中心に迫害が起こるであろうから、比較的安全と思われる西海方面のバテレンと連絡を取り合って直ちに逃れるよう勧告した。ただ、テトスが城を出る前に、右近の家族をはじめ多くのキリシタン信徒に対して、これからの艱難に耐えるようミサと聖餐（注①）の礼典によって信仰の励ましを行ってくれるように依頼した。

書き終えてから、右近はしばし黙考していたが、再び筆を執り、テトス宛てに書き加えた。それは

「仏僧などによる天主堂破壊と略奪を警戒し、キリシタン禁制とバテレン追放の知らせが明石に届く前に、大切な物は速やかに運び出すように」

と言うものであった。

これの背景は、明石領内の神社仏閣では、右近が高槻で神社仏閣の破壊を行ったことを警戒し、右近が明石城に入る前から多くの寺院が仏像を明石領外の関係寺院に移転させていた。また、右近は着任後、いくつかの寺院を接収しキリシタン天主堂として使わせてもいた。従ってそれらの寺院は、建物・庭園など古来の仏教寺院としての昔日の面影は殆ど失っていた。今回、時の権力により立場は完全に逆転したことから、権力を背景とした復讐を懸念したものである。

右近は終日、キリシタン大名宛の手紙を書き続け、また家臣達は、陣屋引き払いの為に忙しく立ち回っていた。

その日の夕刻、小西行長の使者が右近の陣屋に駆けつけてきた。持参した行長の書状には、秀吉の考えを見抜けなかったことの詫びから始まって、右近とその家族は小西領の小豆島で匿うから、安心して小豆島に渡るようにと勧めていた。そして、既に小豆島の代官にその旨を認（したた）めて使いを出したことと、その代官はキリシタンであること、右近を匿って自分が罰せられるならば、自分も潔く罰せられようと、彼の心情が細やかに書かれていた。

その日の夜更け、人目を避けるように利休がやって来た。

「右近様、この度のこと、何一つお力になれなくて申し訳ない」

と頭を下げる利休の言葉に、右近は

「宗匠殿、ご覧の通り右近は元気でござる。昨夜、上様のもとを去ってからこの陣屋に着くまでに、この右近、なにやら今まで覆い被さっていたものが全て取り払われ、軽やかな、何とも表現できない嬉しさを感ずる自分になっていた。大名の地位も、領地も、家臣も、財も、名誉も、この右近にとってはなんの魅力もない。決して痩せ我慢で言っているのではありません」

ここまで言って反応を確かめるように利休を見つめ

「宗匠殿、この右近は一人のキリシタンとして、デウスの導いている道に沿って真っ直ぐに、誰に遠慮することもなく生きて行く決心をしました。デウスの導いてい

る道こそ、人が生きている間歩み続けなければならない道と信じています。宗匠には、引き続き茶の弟子としてご厚誼を賜わりたい」

「右近様、右近様のどこからそのような強さがでてくるのかこの利休には分かりませんが、ただただ感銘致しました。右近様がお考えの生き方は、この利休が、人間の生き方はかくありたいと考えている侘び・寂びの世界に通じているものを感じます。キリシタンのお考えは利休にはよく分かりませんが、何か頷けるものがございます」

「浮き世に魅力を感ずることなく、侘び・寂びの世界にこころを置いておられる宗匠殿には、この右近の考えを理解して戴けると信じています」

利休は、最も聞きたかった右近のこれからについて、ついに一言も聞くことは出来なかった。右近があまりにも爽やかであっただけに、聞くことがためらわれたし、また聞くべきでないと考え、内心、ただひたすら、右近がキリシタン信仰一筋の平穏な日々を過ごすことが出来ることを念じていた。

翌朝、この陣屋の引き払いに当って、秀吉本陣はじめ、各諸大名陣屋への挨拶訪問などを打ち合せしているところへ、前田利家が突然訪ねてきた。

右近は、利家を居間に案内して、下座に座り

「前田様、狭い部屋で恐縮でございます。陣中でございますのでお許しを賜わりとうございます」

と挨拶すると、利家は

「右近殿、昨日上様よりお聞きしました。上様は貴殿に対してお怒りよりもむしろ強情な奴よな、と仰っておられた。どうだろう、単刀直入に言うが、この利家に上様への取りなしをさせてくれないだろうか。上様は、貴殿をどこか有力大名への与力としての処遇をお考えのご様子じゃ」

と言って笑顔を見せながら右近を見つめた。

右近は、この利家の申し出に対してどのように自分の考えを述べたものか、しばし黙した後

「前田様、貴方様とは信長様の下で、また上様の下でご一緒に何度も戦をさせて戴きました。その都度、前田様の采配はもとよりご家臣へのきめ細かなお心遣いを、上に立つものの手本として学ばせて戴きました。一国の領主たるもの、かくあるべきと感銘致しております」

右近のこの言葉に、利家は茶を啜りながら何も言わず右近を見つめている。

「前田様、この右近、上様に対して、キリシタン信仰を捨てることは出来ませんと申し上げて、領地も、大名の地位も何もかもお返し致しました。その時は命も差し上げる覚悟をしていました。幸い右近の一命は助かりました。だからといって、右近が上様に申し上げたことを

撤回することは出来ません」

利家は右近を見つめて

「右近殿、そこが貴殿の魅力よ。上様も、かくいう利家も、またあまた諸大名達も、貴殿の家臣達はもとより多くの領民も、皆そのような貴殿に惹かれるのだろう。その貴殿の持っている人柄を、上様の天下統一、万民を戦国の世から救済する力に使ってくれないか。上様もそれをお望みだ。領地没収になってしまったので、当面は例えば、この利家の客将とか、又は誰か他の大名の客将として処遇することになろうかと思う」

右近は利家の顔を遠慮がちに見つめて一言も発しない。

秀吉と利家は、お互いが世帯を持つ前から信長の家臣として、また同じ長屋に住み、気心は知り尽くしている。利家の言葉は秀吉の言葉と信じてよいだろう。それだけに返事のしかたが難しい。これを断ったら、これから右近が歩く道は一段と厳しくなるであろうことは十分に予想される。そんなことを考えながら利家を見つめていた。

利家が続けて

「右近殿、客将と言っても、貴殿についてくる家臣は一人残さず連れてくることが出来るだけの待遇は保証しよう。この利家の所領を削っても、そのことは上様に進言しよう」

右近はまだ黙し続けている。この利家の言葉に右近の目は潤んでいた。

「そうそう、右近殿。蒲生氏郷殿がの、貴殿を殺さないでくれ。このまま右近殿を野に放てば、やがては上様も放って置くわけには行かなくなるだろう。右近殿は上様にとっても、この日の本にとっても必要な人材だ。だからこの利家に何とかしろ、と言ってきた」

これを聞いて、右近の厳しい表情が少し和んで潤んだ目で利家を見つめた。

これを見た利家は続けて

「それから小西殿が書面を届けてきた。その内容は、無二の親友である右近殿を当面小西領内でお預かりしたい。上様にその旨を届けるのも逆に上様に挑戦しているようにとられても困るので、この利家に連絡する。折にふれて上様のお耳に入れて戴きたい、と言うものであった。右近殿は果報者よ」

ここで右近は口を開き

「前田様、前田様のお言葉、この右近、どのように感謝を申し上げるべきか言葉が見つかりません。ご心配賜わり有り難うございます。小西殿からは小西領に来るように連絡をいただいています。どうしようかと目下思案中です」

ここまで話したところで部屋の外から声が掛かり、簡単な酒肴が運ばれてきた。利家に酒を勧めて、右近は話

を続けた。

「前田様、この若輩者の思いをお聞き下さい。お聞き苦しい点がありましたらお許しを賜わりとうございます。前田様、この右近はキリシタンの神デウスを心の底から信じております。それは右近の父飛騨守がキリシタンになってからの生き様を見て育ち、また多くのバテレンの生き様もこの目で確かめました。その結果、人はどのように生きなければならないのか、と言う難しい問題に直面致しました。人の生涯は短いものでございます。人それぞれ己の生き方があります。右近は永遠に続くこの世の中で、人は神によって生かされているという謙虚さが最も大切なことの一つであると思いました。そこから、人の短い生涯のあり方は、万民が幸せに生きる為に、自分がどのように関わっていかなければならないかを考え、その考えに基づいて領主として領民・家臣のための政(まつりごと)をして参りました。

これからは、デウス様の教えを世に広く伝えんものと、自らの命を惜しむことなく、万里の波濤をも恐れず自らの利益は一切顧みないで、この日の本までやって来ているバテレン様達のお手伝いをしながら、多くの人達に、私と同じような考えで人生を過ごして戴くように、働きかけて生きたいと心に決めました」

「右近殿はキリシタンの僧になるのか」

「とても私ごときはバテレンにはなれません。許されれば、あちこちの地で、バテレンを呼び、またこの右近もお手伝いしながら、全ての人が助け合いながら喜んで生きて行く世を作っていきたいと願っています。それがキリシタンの神デウスが右近に命じていることと確信します。デウスがこの世にお遣わしになったデウスの御一人子のゼスズ・キリスト様はこのように申されております。それは、『人が他人を助けるときに、見返りを考えるな。見返りを求めない施しこそ人の道で、その人は死後、天上で報われる』と」

ここまで言って利家を見つめて、畳に手をつき

「前田様、右近に対するご厚情の程、御礼の言葉も見つかりません。有り難うございます。右近はただ今申し上げましたような生き方を選びました。右近にはその道を歩むしか他に道はございません。どうか、その道を歩ませてください」

しばし黙していた利家は、口を開き

「右近殿のお覚悟の程は分かった。しかし、上様はキリシタンをご禁制とされた。と言うことは、キリシタンを信じてはいけないと言うことだ。右近殿、そのお定めがある限り今貴殿が話されたことを行うことは出来ないと存ずるが」

「前田様、右近はとうに命を投げ出しております。覚悟は出来ております」

「右近殿、死ぬ気か。そこまで申されるのであれば、

この利家、手を引こう。しかし、困ったときはこの利家を思い出されるがよかろう。今、上様に率直に話が出来るのはこの利家をおいて他になかろう」

「前田様、有り難うございます。前田様のご好意をお受けできないことをお許し下さい」

と言って、右近は平伏のまま暫くの間顔を上げなかった。

やがて利家が口を開いて

「右近殿、いずれ機会を見てこの利家にキリシタンの教えを分かりやすく話してくれないか。貴殿ほどのお人が、命も要らないと申されるほど尊い教えであれば、信ずる信じないは別として話を聞いてみたい」

利家のこの言葉に、右近は初めて満面に笑みを浮かべて

「前田様、有り難うございます。右近、必ずお話しさせて戴きましょう。ご案内の通り、ただ今は陣屋の引払い等で落ち着いた時間が取れませんが、この陣屋を引払った後は、当面は小西殿の領内にお世話になることと思います。その上で改めてご挨拶申し上げます。前田様のそのお一言、右近何よりも楽しみに致しております」

この後二人は、信長・秀吉に従軍した思い出話に時を忘れて興じていた。

一方、秀吉は博多湾外に停泊を続けているフェスタ船に使いを出し、バテレン・コエリョ宛てに

「二十日以内に我国から退去せよと命じたが、季節風が吹かなければ船は出ることが出来ないから支那には帰れないであろう。バテレンは全員直ちに平戸に終結して、季節風の吹くのを待て。その間の滞在費用に事欠くようであればいつでも申し出よ」

と命令を変更した。この変更通知は、「勝手にさっさと帰れ」の追い返す調子からやや軟化して、バテレンに対して好意を示しているように受け取られ、コエリョはこれを秀吉の強気から弱気への変化と受け止め、徹底抗戦を考え始めていた。

京・大坂をはじめ各地からバテレン達が続々と平戸に集まってきた。平戸の天主堂をはじめバテレン達の住むところを、領主松浦家は監視はしているが、秀吉の指示もあり、手出しすることなく遠巻きに眺めている。集まってきている人数だけは把握している。

天主堂内部では大激論が行われていた。イエズス会巡察師ヴァリニャーノは、日本人の資質と日本人修道士の優秀さを高く評価し、また一般庶民の礼節を重んずる国民性などから、日本人をインドやフィリピンなどと比べて、アジアでのキリスト教布教に最も適した民族と考え

て、日本の固有文化の中にキリスト教をじわじわと浸透させていくべきと考えていた。

これに対して、準管区長コエリョは、デウスに逆らう悪魔秀吉と敢然と戦うべきと主張、具体的には、ゴア・マニラ・マカオからポルトガル軍隊を呼び寄せて長崎に上陸させ、国内では西国のキリシタン大名を組織的に蜂起させ、先ず九州を手中に収め、その間に京・大坂でのキリシタン達を立ち上がらせれば、軍事的には必ず勝つと主張して、独断でゴア、マニラ、マカオに派兵要請状を送ってしまった。

激怒した巡察師ヴァリニャーノは、集まっているバテレン全員に対し、戦にすべきでなく、コエリョが考えるように政治介入することなく、どこまでも平和のうちに宣教すべきであると自分の考えを述べ、コエリョに対しては、イエズス会本部より連絡があるまで、一時的に職務停止を命じた。

ヴァリニャーノが京・大坂の状況を把握するために、堺に潜伏させたバテレン・オルガンチーノから手紙が来た。小西行長の関係先豪商「近江屋」に依頼してのいわば飛脚である。そこには、ヴァリニャーノ達が最も知りたいことが次のように書かれていた。

「親愛なるヴァリニャーノ師、キリシタン禁制についての京・大坂の状況をお知らせします。秀吉は、一時的には京・大坂各地の天主堂やセミナリヨ（神学校）等を打壊しましたが、その後は日々平穏に過ぎています。また一般信徒までは弾圧の手は延びていません。恐らく、秀吉は、インド、シナの両貿易を手中に収め巨利を得たいが為に、それの妨げになることを恐れてこれ以上の弾圧はしてこないのでしょう。ジェスト右近殿は、小西領内小豆島に落ち着かれ、近々堺に出向いて来るだろうとの連絡が小西殿から入りました。

それから、フランシスコ会宣教師達は一般庶民に対して宣教を行い、私達イエズス会はどちらかと言えば領主・貴族を対象に宣教を行っています。日本社会の組織と影響力から考えて私達イエズス会のとっている立場が、日本においては正しいと考えます。また教えも我々と異なっています。そこにキリスト教に対しての日本人の混乱が起こっています。このことは、日本人から言わせれば、日本の仏教に幾つかの宗派があるように、キリスト教そのものにも分派があることとなります。混乱を招くことは得策ではありません。従って、師から本部に対して、日本宣教はイエズス会のみが行うという了承を取り付けていただけないでしょうか」

これを読み終わったヴァリニャーノは、対秀吉政策が自分の判断が正しかったことと、もう暫くここ平戸に静かにしていることによって道は開けると確信した。またフランシスコ会を日本から撤退させるべく本部に連絡して、結果、教皇グレゴリウス十三世は、日本宣教をイエズス会に限定した。（注②）

右近は博多の陣屋を引払い、供を申し出た多くの家臣の中から身寄りのない若い家臣佃伝兵のみを連れて小豆島に到着した。代官屋敷に迎え入れられてはいるが、島民をはじめ小西家の家臣達の視線が何かよそよそしい。これでは家族と共に過ごすのには不安を感ずる。

その翌日、右近の妻ジュスタと子息ジョアン十郎太が二名の従者と二名の侍女と共に船着き場に到着し、役人達に案内されて代官屋敷に入った。

秀吉がキリシタンを禁じたことの情報がこの島にも既に入っており、キリシタン大名小西行長に対して、多くの島民は腹の中では疑心暗鬼と言った状態になっていた。特に島一番の船主与兵衛は、もともと熱心な仏教徒でキリシタンが大嫌いであったことから、与兵衛に生活を依存している多くの島民は、今や領主よりも与兵衛に与（くみ）している。

そのような島の状況から、右近達家族は代官屋敷を出て別の屋敷で生活することは危険と判断、そのまま代官屋敷にとどまった。

付き添ってきた従者の話では、明石で、天主堂や逃れて空き家になったキリシタンの家からの略奪は凄まじかったと言う。酷いのは、まだ住んでいるにも拘わらず侵入してきて、キリシタン一家と言うだけで家財や金銭を略奪された。

接収した寺を改装した天主堂などは、旧住職が建物を取り戻しに入ったところへ、ならず者が乗り込んできて金目の物を手当たり次第持ち去っていったという。

明石の城はまだ後任領主は入っていないが、引渡し役人のみが留まっているのみで、市中の警戒までは手が回らない。従って市中はいわば無警察状態となっていて、そのような中で禁じられたキリシタンを擁護するものは一人もいなかった。

高槻以来右近に従ってきていた家臣は全てがキリシタンであり、城下の規律を守るべく行動しようとした。しかし明石で、領主の出世と共に自己の栄達を考えてキリシタンになった新参家臣達は、さっさとキリシタンを見限って略奪暴挙を見て見ぬ振りをし、高槻以来のキリシタン家臣団と険悪の状態となった。しかし、キリシタン家臣団は争いを避け、蔭に回って城下のキリシタンを助けていた。

そのような状態のため主要なキリシタン家族は、お金だけを持って親戚知人を頼って避難したという。

このようなことを聞いた右近は、涙を流しながら被害に遭った人達の救いのために祈った。

て、日本の固有文化の中にキリスト教をじわじわと浸透させていくべきと考えていた。

これに対して、準管区長コエリョは、デウスに逆らう悪魔秀吉と敢然と戦うべきと主張、具体的には、ゴア・マニラ・マカオからポルトガル軍隊を呼び寄せて長崎に上陸させ、国内では西国のキリシタン大名を組織的に蜂起させ、先ず九州を手中に収め、その間に京・大坂でのキリシタン達を立ち上がらせれば、軍事的には必ず勝つと主張して、独断でゴア、マニラ、マカオに派兵要請状を送ってしまった。

激怒した巡察師ヴァリニャーノは、集まっているバテレン全員に対し、戦にすべきでなく、コエリョが考えるように政治介入することなく、どこまでも平和のうちに宣教すべきであると自分の考えを述べ、コエリョに対しては、イエズス会本部より連絡があるまで、一時的に職務停止を命じた。

ヴァリニャーノが京・大坂の状況を把握するために、堺に潜伏させたバテレン・オルガンチーノから手紙が来た。小西行長の関係先豪商「近江屋」に依頼してのいわば飛脚である。そこには、ヴァリニャーノ達が最も知りたいことが次のように書かれていた。

「親愛なるヴァリニャーノ師、キリシタン禁制についての京・大坂の状況をお知らせします。秀吉は、一時的には京・大坂各地の天主堂やセミナリヨ（神学校）等を打壊しましたが、その後は日々平穏に過ぎています。また一般信徒までは弾圧の手は延びていません。恐らく、秀吉は、インド、シナの両貿易を手中に収め巨利を得たいが為に、それの妨げになることを恐れてこれ以上の弾圧はしてこないのでしょう。ジェスト右近殿は、小西領内小豆島に落ち着かれ、近々堺に出向いて来るだろうとの連絡が小西殿から入りました。

それから、フランシスコ会宣教師達は一般庶民に対して宣教を行い、私達イエズス会はどちらかと言えば領主・貴族を対象に宣教を行っています。日本社会の組織と影響力から考えて私達イエズス会のとっている立場が、日本においては正しいと考えます。また教えも我々と異なっています。そこにキリスト教に対しての日本人の混乱が起こっています。このことは、日本人から言わせれば、日本の仏教に幾つかの宗派があるように、キリスト教そのものにも分派があることとなります。混乱を招くことは得策ではありません。従って、師から本部に対して、日本宣教はイエズス会のみが行うという了承を取り付けていただけないでしょうか」

これを読み終わったヴァリニャーノは、対秀吉政策が自分の判断が正しかったことと、もう暫くここ平戸に静かにしていることによって道は開けると確信した。またフランシスコ会を日本から撤退させるべく本部に連絡して、結果、教皇グレゴリウス十三世は、日本宣教をイエズス会に限定した。（注②）

右近は博多の陣屋を引払い、供を申し出た多くの家臣の中から身寄りのない若い家臣佃伝兵のみを連れて小豆島に到着した。代官屋敷に迎え入れられてはいるが、島民をはじめ小西家の家臣達の視線が何かよそよそしい。これでは家族と共に過ごすのには不安を感ずる。

その翌日、右近の妻ジュスタと子息ジョアン十郎太が二名の従者と二名の侍女と共に船着き場に到着し、役人達に案内されて代官屋敷に入った。

秀吉がキリシタンを禁じたことの情報がこの島にも既に入っており、キリシタン大名小西行長に対して、多くの島民は腹の中では疑心暗鬼と言った状態になっていた。特に島一番の船主与兵衛は、もともと熱心な仏教徒でキリシタンが大嫌いであったことから、与兵衛に生活を依存している多くの島民は、今や領主よりも与兵衛に与（くみ）している。

そのような島の状況から、右近達家族は代官屋敷を出て別の屋敷で生活することは危険と判断、そのまま代官屋敷にとどまった。

付き添ってきた従者の話では、明石で、天主堂や逃れて空き家になったキリシタンの家からの略奪は凄まじかったと言う。酷いのは、まだ住んでいるにも拘わらず侵入してきて、キリシタン一家と言うだけで家財や金銭を略奪された。

接収した寺を改装した天主堂などは、旧住職が建物を取り戻しに入ったところへ、ならず者が乗り込んできて金目の物を手当たり次第持ち去っていったという。

明石の城はまだ後任領主は入っていないが、引渡し役人のみが留まっているのみで、市中の警戒までは手が回らない。従って市中はいわば無警察状態となっていて、そのような中で禁じられたキリシタンを擁護するものは一人もいなかった。

高槻以来右近に従ってきていた家臣は全てがキリシタンであり、城下の規律を守るべく行動しようとした。しかし明石で、領主の出世と共に自己の栄達を考えてキリシタンになった新参家臣達は、さっさとキリシタンを見限って略奪暴挙を見て見ぬ振りをし、高槻以来のキリシタン家臣団と険悪の状態となった。しかし、キリシタン家臣団は争いを避け、蔭に回って城下のキリシタンを助けていた。

そのような状態のため主要なキリシタン家族は、お金だけを持って親戚知人を頼って避難したという。

このようなことを聞いた右近は、涙を流しながら被害に遭った人達の救いのために祈った。

右近は、バテレン達が平戸に集結しつつあることは知っていたが、バテレンは全員が平戸に行ってしまったのか、誰かが都やその近くに潜伏しているかどうかは知らなかった。また都や大阪のキリシタン達がどうしているかも大変心配であった。自分のみが安穏として家族と共に小豆島にいることは、自分自身で許せなかった。そこで小西行長の縁の堺に行けば情報は入ると考え、家族のことを代官に頼んで、佃伝兵のみを伴って堺に出掛けた。

堺に入る前に京・大坂の天主堂やセミナリオを見て回ったが、どれも跡形なく打壊されていた。

安心したのは、京・大坂でキリシタン信徒に対する迫害は何ら行われていないことであった。右近はこれを最も心配し恐れていた。しかし、天主堂が破壊され、集まることのできない信徒達は、情報一つ入らないため日々不安に過ごしていた。

右近は、あのキリシタン禁制高札以後は徹底したキリシタン弾圧があると考えていたが、何故か天主堂等の取壊しとバテレンの平戸集結指示のみで、キリシタン信徒に対して何ら禁制のフォローがなされていないことを、安心すると共に不思議に思った。

小西行長縁(ゆかり)の豪商「近江屋」に入ると、驚いた主人が奥座敷に案内し、

「しばしお待ちを」

と言ったきり姿を消してしまった。

小女が持ってきた茶を口にして一刻近く経ったとき、静かに襖が開いた。そこには主人と共になんとバテレン・オルガンチーノと、従者としての日本人イルマンが立っていた。

驚く右近に対して、主人は

「右近様、私は遠慮しますのでごゆっくりお話し下さい。何日ご逗留されても構いません。店の者は口が堅く大丈夫でございます」

と言って出ていった。

「お久しぶりでございます」

と言う右近の言葉に、背の高いオルガンチーノは腰をかがめて、抱きつかんばかりに両手を広げて右近に近づき

「右近様、ご無事で何より。今日、お目にかかれてこんなに嬉しいことはありません。何からお話ししてよいやら。先ずはデウスに感謝の祈りを捧げましょう」

と言って、両手を前にくみ、頭を垂れて祈りだした。

「天地万物を統べ治められている在天の神、今、ここに右近殿と会わせて下さいましたことを感謝します。今、この地では、為政者によりキリシタン信仰が禁じられました。このような試練の中で、私達がどのように活動し、そしてこの国にいる信徒一人一人にどのように救いの手を差し伸べることが出来るか、どうかその道をお示し下さい。今日からこの僕(しもべ)と右近殿をそのために働かせてください。この祈りをゼスズ・キリストの御名によって捧げます。アーメン」

オルガンチーノは右近に対して、バテレン達の動向と畿内在住の信徒達のことについて知る限りを話した。そしてこれから緊急に解決しなければならない問題に移った。

「右近様、今最も金銭的に困っているのは日本人イルマン(修道士)です。天主堂は壊され、ミサをあげるところもなく、信徒との接点もなく、それぞれに有力信徒の家にお世話になっていますが、取締の目を考えれば、いつまでもお世話になることは出来ないでしょう。今までは、金銭面でも右近様が一手にお世話下さっていましたが、残念ながらそのような後ろ盾がいなくなってしまいました。またイエズス会の資金も長崎から持ってくることは出来なくなってしまいました」

ここまでを聞いた右近は

「オルガンチーノ様、この右近が来たからにはご安心下さい。必要な資金は小西殿でも、蒲生殿でもお願いして調達してきます。なお、イルマン殿達に一度集まって戴いて、畿内に住んでいる信徒達を励ますために働いて戴くようお願いしましょう」

「右近様、それを早くしたいのですが危険です。もう少し様子を見てはいかがですか。秀吉様も博多からお帰りになり、京・大坂の役人達は緊張しています」

「分かりました。では私は明日から、摂津高槻の信徒達を見回って参りましょう。三年ぶりに訪ねることとなります。堺に戻ってからオルガンチーノ様の所をお訪ねするのは危険と思いますので、戻り次第ここにご厄介になることとします」

それから暫くの間、秀吉が発したキリシタン禁制がこれからどのように動いてゆくか、また日本宣教の進め方について、コエリョの政治介入の危険性などについて話し合った。(二人とも、この段階では平戸でコエリョがヴァリニャーノから一時的に職務停止されていたことは知らなかった)

高槻城下では、右近の後の城主新庄直頼がキリシタン信仰を禁止はしなかったが、城内での集会を禁じ、城内にあった天主堂の取壊しを行うなどキリシタンとは一歩距離を置いたため、高槻城下でのキリシタンの勢いは急速に低下し、熱心な信徒の家庭で集会が持たれるのが精一杯で、昔日の面影は全くなかった。

右近がただ一人の従者を連れたのみで城下を歩くと、既に右近追放の情報は入っていたと見え、右近を見つけて驚いて土下座したり、また深々と頭を下げて挨拶する町民があるかと思えば、立ったまま旧主を冷ややかに見つめる町民もいた。

右近は城近くまでは行かなかった。町の中を歩いているうちに、家族ぐるみの熱心なキリシタンで、縄や筵を商っている五作の家を思い出し、その家の前に立った。開け放たれた店の土間には縄や筵が所狭しと積んである。店の中から人の気配を察した五作が顔を出した。右近の姿を見て何か叫び声をあげた五作は、一旦奥に戻って、次の瞬間には妻と二人で土間に平伏していた。右近は土間に入っていって

「五作と女房のおとせだな。息災で何より。五作、この右近はもう大名ではない。顔を上げなさい。同じキリシタンなのだ」

五作も、女房おとせも平伏したまま感涙に咽んで言葉がでない。右近が

「おとせ、水を一杯くれぬか」

と言うと、おとせは右近の顔を下から見上げた。ふと見ると涙で頬が濡れている。そのまま立ち上がって奥に行き、茶碗に入れた水を盆に載せて持ってきた。まだ涙を拭っていない。手は震えて盆の上の茶碗がガタガタ音を立てている。

「五作、おとせ、バテレンがいなくなって寂しいだろうが、今しばらく辛抱せよ。必ず春は来る。皆に会ったら、右近が頑張るように申したと伝えてくれ。右近はどんなことがあってもデウス様を信じ続けるとな」

ここまで言うと、平伏していた五作が

「殿様、お言葉を戴きもったいのうございます。ただ、殿様の時代が懐かしゅうございます。イルマン様もお見えにならないのでキリシタンの仲間に会うときがありませんが、今度会ったときは必ず皆に伝えます。殿様、我ら一家はどのようなことがあってもキリシタン信仰を守ります」

ここまで言った五作は、後は声にならない。右近は外からの目を意識して長居は無用と考え、腰をかがめて五作とおとせの手を取り

「天のデウスよ。この五作とおとせを顧みて慰め給え。この祈りをゼスズ・キリストの御名によって捧げる。アーメン」

と短く祈ってから立ち上がった。五作もおとせも最後のアーメンを唱和した。

注① 聖餐式

イエス・キリストは、自分の死を前にして、十二人の弟子達と食事をした（最後の晩餐）。その時、パンを自分の体とし、ぶどう酒を自分の血として弟子達に

与え、永久に自分を忘れない為の罪の許しの契約として行い、これを記念としてイエスの死後も行うことを命じた。

『一同が食事をしているとき、イエスはパンを取り、讃美の祈りを唱えて、それを裂き、弟子達に与えながら言われた。「取って食べなさい。これは私の体である」』

『また、杯を取り、感謝の祈りを唱え、彼らに渡して言われた。「皆この杯から飲みなさい。これは罪が許されるように、多くの人のために流される私の血、契約の血である」』（新共同約聖書、マタイによる福音書二十六章二十六節～二十八節）

これを記念して、カトリック教会もプロテスタント教会もこの儀式を教会の大切な儀式として今でも行っている。

注② 日本への宣教をイエズス会に限定した命令は二十三年後には破棄され、再びフランシスコ会宣教師も来日した。

「まんじ」季刊発行内規

（発行日）　（原稿締切日）〔注〕

春季号……二月一日……十二月三十一日

夏季号……五月一日……三月三十一日

秋季号……八月一日……六月　三十日

冬季号……十一月一日……九月　三十日

〔注〕円滑な発行を期す為「一週間前編集長宛到着」に努めましょう。

孔子春秋（四）

三戸岡道夫

しかし孔子が、斉の国で君主の景公に会って政治について語り、景公から絶大な信頼を受けたということは、魯の国にも伝わっていた。その噂を聞いて孔子の塾の評判はますます高くなり、入門する弟子もふえてきた。

「論語」の中の有名な言葉に、

（学びて時に習う、また楽しからずや）

というのがあるが、ちょうどこの頃の孔子の姿を現わしているように思われる。

（政治への参加が不可能ならば、学問の研究と、教育に専念しよう）

と孔子は決意したのである。

孔子は多士済々の弟子たちに囲まれて、

「礼」とは何か、

「政」とは何か、

「徳」とは何か、

を論じた。

第九章　教育に専念

斉の国における孔子の滞在期間は、二年説、七年説とあって、はっきりしないが、斉の国から魯の国へ戻ってみると、祖国の魯はますます混迷の度を深めていた。

斉の国では、宰相の晏嬰の反対にあって残念ながら仕官の途は開けなかったが、しかし魯の国へ帰ってみても、政治の舞台が孔子に与えられるわけではなかった。

（なんとか政治に参加して、理想とする政治を実現してみたい）

と思うのだが、どうすることも出来なかった。

（いずれその日が自分にも来る）

とは思ってみても、現実の混乱した政治は孔子と関係のないところで動いている。仕官の途はなかなか孔子のところまで、のびてこなかった。

こうして学問の世界での孔子の名声はますます高まっていき、「論語」の中の言葉の、

（人知らずして慍みず、また君子ならずや）

という心境になるのだった。すなわち、

（たとえ人に認められなくても、怨むことはない）

という達観であった。

そしてこの達観が「論語」為政篇にある有名な、

（四十にして惑わず）

という言葉になり、人生四十歳の教えを「不惑」として、後世に長く残すのである。

第十章　陽虎のクーデター

するとそんな頃、孔子が四十二歳のときである。魯の国に突然の異変が起きたのである。

魯の国の君主の昭公はさきに斉の国へ亡命していたが、その亡命先の斉の国で死亡したのである。

亡命してから七年間の歳月が流れており、その七年の間、魯の国では君主不在という異常事態がつづいていたのである。

その君主不在の間、政治の権力を握り専横をきわめていたのは、もちろん季孫氏を中心とする三桓の一族だった。

しかし君主がいないということは、やはり人心が不安である。

そこで魯の国では昭公が死亡したのを機会に、昭公の異母弟である定公が、季孫氏に擁立されて君主に即位した。やっと魯の国の君主不在が解決したわけであった。

しかし定公が君主についたとはいうものの、定公は形だけの君主で、政治の実権は依然として三桓（季孫氏、孟孫氏、叔孫氏）によって独専され、下剋上の風潮が改まる様子はなかった。改まるどころか、ますますエスカレートしていった。

というのは、三桓が権力を握っているという段階はまだよかったのであるが、三桓が世の下剋上の手本になってしまい、三桓にとって逆に都合の悪いことが起きてしまったのである。すなわち別の下剋上を誘発し、下剋上の連鎖反応が起きてしまったのである。

それが三桓の家臣の中から出てしまったところに、三桓の悲劇があった。

三桓の中心的存在で、一番権力を握っていたのは季孫氏であったが、その季孫氏の内部にある異変が起っていたのである。季孫氏の家老の陽虎が次第に権力を握りはじめ、いつのまにか当主の季平子の勢力をしのぐ勢いになっていたのである。

この陽虎は、かって十七歳の孔子が、季孫氏が開いた人材抜擢の宴へ出掛けたとき、

「お前のような小僧っ子を招いたおぼえはない。立ち去れ」

と孔子に門前払いをくらわした、あの陽虎である。孔子にとっては宿敵ともいえるその陽虎が、いまや季孫氏の中で当主をしのぐ権力を握り、ひいては魯の国の政治を左右するまでになっていたのである。すなわち下剋上の本家ともいうべき三桓の中に、その本家を狙う次の下剋上が育っていたのである。

すると、孔子が四十七歳になったときのことである。

季孫氏の当主の季平子が死んで、その子の季桓子が後を継いだ。しかし季桓子は年も若く、父の季平子のような政治力のある男ではなかった。日本の江戸時代でいうならば、殿様が死んで、実力のない若い殿様が、その後をついだようなものである。

それをいいことに、家老の陽虎の専横はますますエスカレートしていった。

そこで当主の季桓子は、この陽虎の専横に対抗するために、仲梁懐という家臣を寵愛するようになった。

当然のように、この仲梁懐と陽虎とは反目し、はげしく対立した。そして陽虎は仲梁懐を追い払おうとし、ついに仲梁懐を捕らえてしまった。

当主の季桓子は烈火のごとく怒った。しかしその季桓子さえも、また陽虎に軟禁されてしまうという始末であった。

その結果はどうなったのか。陽虎と季桓子は結局誓約して和解するのであるが、この事件によってますます陽虎は勢力を伸ばし、季孫氏の中で完全に実権を握ってしまったのである。

こうなると、季孫氏は宰相として魯の国政を動かしているのだが、それはもはや形だけで、実際に国政を動かしているのは陽虎だといっていい。

すなわち、いまや魯の国政は、重臣の季孫氏どころか、陪臣の陽虎によって握られているという、国政の乱れであった。

こうなってくると、野望を持つ陽虎には、お家乗取りの絶好のチャンスだった。

陽虎が、

（今こそ権力を完全にわが手に握って、魯の国を思いのままにする絶好の機会だ。季孫氏だってかって君主の昭公を追い出したりして、下剋上の見本を示したではないか。わしの当主の若い季桓子なんて、ちょろいものだ。わしが季桓子になり代わってお家を乗っ取ったところで、なんで悪いことがあるものか）

と、野望に燃えたのは当然である。まさに下剋上が、三桓の中で連鎖反応を起したのである。

陽虎は季孫氏を乗取る決意をした。

しかし陽虎がそれだけの大事をなすには、有能な部下

が必要である。人材を集める必要があった。

そこで陽虎が目をつけたのが孔子だった。孔子はかって斉の国の景公と政治を語って、景公の信頼を得たというし、また魯に帰ってからは、その塾に弟子も多く集まり、今や魯での、詩、書、礼、楽などの教養の、第一人者である。いわゆる、

（使える人間）

と陽虎の目に映っているのだった。

そこで陽虎はある日、人を通じて、

「一度会って、話がしたい」

と孔子に申し込んできた。かって孔子を門前払いした昔のことなど、すっかり忘れてしまった図々しさだった。そして、

「いまの魯の国は、三桓氏が君主をないがしろにして専横をきわめ、世の中が乱れきっている。わたしは、あなたの教えを受けて、乱れた世を平和な国にしたいのです」

と、言葉巧みに語りかけてきた。

孔子には、これが、

（陽虎へ仕官しろ）

という誘いだということがすぐわかった。

孔子もかねがね国政に参加して、政治にたずさわりたいという思が強かった。これまで精進してきた学問もそのためだったし、またそのための仕官を求めて、斉の国の景公にも会ったのである。ましてや魯は自分の祖国で

ある。その祖国で政治に参加できるとは、願ってもないことである。そういう意味において陽虎からの申し出は、孔子にとって絶好のチャンスといってよかった。

しかし孔子は、この陽虎の申し出を断わってしまったのである。

陽虎は、十七歳の孔子が世に出ようとする出鼻をくじいた、憎き男である。あの時の季孫氏の宴へ出席しようとするのを陽虎に断わられた怨みを、孔子は終世忘れることはできなかった。生涯の宿敵である。そんな男の申出を受け、その風下に立って仕えることなど、孔子には到底できなかった。

加えて政治の理念が、孔子と陽虎とでは、百八十度違っていた。

孔子の政治理念は「礼、楽を中心とした周の政治」を、いまの魯の国に復活することである。

それに対して陽虎の目的は、季孫氏の当主が若くなったのを幸いに、一挙に自分の権力を拡大し、魯の国をその手に握ることである。

陽虎は、

（下剋上で乱れた魯の国を、わたしの手で復興したい）

などと言っているが、孔子にしてみれば、

（陽虎よ、お前こそ国を乱している者ではないか）

と言ってやりたいのだった。

孔子が陽虎の申出を断呼ことわったのは当然であっ

た。

陽虎の申出を断った孔子は、その後、なるべく陽虎に会うのを避けていた。

しかし陽虎の方はあきらめなかった。

ある日陽虎は、高価な豚を孔子のところに届けてきた。

これには孔子も当惑した。当時の礼では、高価な贈り物に対しては、答礼に行くのが習わしだったからである。

考えた末に孔子は、陽虎と顔が合わないように、陽虎の留守を狙ってその邸宅を訪ねた。

ところが運の悪いことに、その帰り途で、ばったり陽虎に会ってしまったのである。

すると陽虎はここぞとばかりに孔子を勧誘した。

「どうですか。いっしょに政治をやりませんか。あなたのように立派な宝（学問）を持ちながら、国の乱れを救おうとしないのは、正しいことでしょうか」

「うむ、そう言われれば、それはいいことではないでしょう」

「あなたは政治に携わりたいと思いながら、何度もその機会を逃しているではありませんか。そんなことでは、とても知のある人間とはいえませんよ」

「うむ、そう言われれば、そうかもしれないな」

陽虎は話を巧みに誘導していった。そして最後に、孔子の胸の中を見抜いたように、ずばりと、断定するように、

「月日はどんどん過ぎてゆき、歳月はあなたをいつまでも待っていません。どうですか、この辺で決断されては。いっしょに政治をやって、魯の国をいい国にしましょう」

と迫ってきた。

孔子はついに陽虎の弁舌の巧さに魅せられたように、

「わかりました。お仕えしましょう」

と答えざるを得なかった。孔子の胸の中にも、一瞬、（この実力者の言うことを聞いて、政治への足がかりを掴んだ方が得かもしれない）

という打算が動いたのかもしれなかった。

こうして孔子は帰り途で陽虎に会ってしまったばかりに、「お仕えしましょう」と言ってしまったのである。

しかし家に帰ってもう一度よく考えてみると、それは間違いであることがわかった。陽虎の弁説にまどわされた、一瞬の心の迷いだったのである。

そこで孔子はあらためて陽虎に、はっきりと断わった。そして陽虎に仕えるようなことはしなかった。

第十一章　公山弗擾のクーデター

陽虎の天下を握らんとする野心はすさまじいものだった。孔子が仕官を断ったぐらいで、止まるものではなかった。

陽虎はますます魯の国の事実上の独裁者として、権力を高めていった。そして、やがてその権力の座の総仕上げの時がやってきた。

定公が即位して八年目、孔子が陽虎の申出を断った三年後、すなわち孔子が五十歳のときである。陽虎は配下の公山弗擾といっしょに、三桓のトップの首をすげ替えるクーデターを起したのである。

トップの首を代えるとは、言いかえれば、三桓を牛耳っている季孫氏の当主に、陽虎がなるということである。季孫氏の当主の季桓子が若いことをいいことに、それを追い払って、自分が当主の座に座ろうという下剋上、いわばクーデターであった。

すると都合のいいことに、時を同じうして、それを促進するような動きが、三桓の中から起きてきたのである。

まず季孫子の家の中である。

季孫氏では季桓子が当主であるのだが、実はかねがね弟の季寤が、兄に代わって当主になりたいと思っていた。そんな野心を抱いていたため、季寤は兄の季桓子から憎まれていた。

するとまた、それと併行して、同族の公鉏極や、家臣の公山弗擾も、当主の季桓子から憎まれており、不満を持っていた。

また三桓の叔孫氏の家でも、当主の庶子である叔孫輒は、父に愛されず、したがって当主になれる可能性がうすく、不満であった。また一族の中の叔孫志も不満組だった。

ある日、これらの不満分子が集って、陽虎にクーデターの相談を持ちかけたのである。

陽虎はただちにこの陰謀に乗った。

陽虎が彼等のクーデターに乗り気だったのは、陽虎が魯の国政の独裁者になろうという野心のほかに、もう一つあった。それは陽虎が三桓の孟孫氏との関係が険悪になっているという事情があったからだった。だからこのクーデターを機に、季孫氏と叔孫氏だけでなく、この孟孫氏もいっしょに叩いてしまおうという、陽虎の狙いが動いていた。

すなわち陽虎にとってこのクーデターは、季孫氏だけの問題だけでなく、一気に三桓の当主を全部変えてしまい、陽虎がその上に立って国政を牛耳ようとするものだった。

とくに陽虎の配下にある公山弗擾がクーデターに加担していることが、陽虎には心強かった。

十月、陽虎たちは戦勝を祈願して、クーデターを起した。

まず季桓子をさそい出して、陽虎の弟の陽越がこれを

殺害することにし、公山弗擾には、季孫氏の根城である費邑を占拠することを命じ、陽虎は孟孫氏を討つことにした。

しかし、三桓の中でも中心的な存在である季孫氏の当主が殺害されるなどということは、季孫氏にとって重大事であるばかりでなく、三桓にとっても一大事だった。そのため三桓側は、季孫氏、叔孫氏、孟孫氏の三家が協力して、陽虎に反撃してきたのである。

三桓も、いざとなって三家が力を合せれば強かった。そのため陽越（陽虎の弟）による、季孫氏の当主季桓子の暗殺は失敗してしまった。

季桓子は矢を射かけられながらも、かろうじて逃走し、孟孫氏の邸へ逃げこむことが出来たのである。そして逆に、季桓子を攻めた陽越は、射殺されてしまった。

そこで陽虎は、魯の君主の定公と、叔孫氏の当主の叔孫武を、脅して味方につけ、孟孫氏と戦ったが、敗れてしまった。

すなわち陽虎たちのクーデターは失敗したのである。陽虎はやむなく、斉の国へと逃亡した。そしてさらに、その後、晋の国へと亡命するのだった。

さて一方、陽虎の命令を受けた公山弗擾の方はどうなったのか。

公山弗擾は陽虎の指示通り、季孫氏の知行地の中心にある費という城邑を占拠することに成功した。公山弗擾は、費邑の代官であったから、やすやすと費邑を奪いとることが出来たわけである。

しかし間もなく公山弗擾は、クーデターの失敗を知った。そして困ったことには、クーデターの張本人である陽虎が、さっさと国外へ逃亡してしまったことである。

公山弗擾は費邑城に孤立してしまった。

しかし今更、後へは引けなかった。公山弗擾は費邑城に立てこもることにした。

費邑城は堅固な城であるし、食糧も豊かにあったから、孤立したとはいえ、独立してやっていけないことはなかった。

しかし相棒とたのむ陽虎は逃げてしまったので、誰か味方になってくれる人物がほしかった。

そこで公山弗擾が目をつけたのが、孔子であった。孔子を味方につけることができれば、千万の味方を得たよりも心強い。そこで孔子に、

「わたしといっしょになって魯の国を治めてほしい」

と、申し入れたのである。

孔子はたんなる巷の学者ではない。その学問を武器として政界に出る意欲が強いことをよく知っている公山弗擾は、そのような言葉で孔子を招いたのである。

しかし、いっしょに魯の国を治めようといっても、上には君主の定公がいるし、その下には三桓がいる。公山弗擾はその三桓の家老である陽虎の、またその下の者である。「国を治める」と恰好をつけて言ってみても、しょせんそれはクーデターによる政権奪取、叛乱軍にすぎない。

そんな公山弗擾に孔子が味方にするはずがない。かって陽虎が孔子を招いたときも、結局孔子は応じなかったのである。

しかし何としたことか、今度は孔子はこの公山弗擾の誘いに応じようとしたのである。

すでに孔子は五十歳になっていた。五十歳になっても、政界へ足をふみ入れる芽が出ないのだった。政界への志を果たさぬまま、自分の人生が終ってしまうのかと思うと、孔子もあせりを感じていたのであろうか。

それにクーデターといっても、陽虎や公山弗擾のクーデターは、君主の定公を討とうというのではない。君主の定公をないがしろにして専横をきわめている、三桓を追放し、その政権を奪取しようというのである。

もともと孔子は、君主をないがしろにする三桓の専横をにがにがしく思っていた。だから三桓から政権を奪取するのは、孔子の望むところでもあった。

そんな思惑が胸の中にあってか、孔子は、

（少しの危険をおかしても、この公山弗擾のチャンスを掴んだ方がいい）

と考えたのである。

驚いたのは高弟の子路であった。子路はなんとしてでも孔子を止めなくてはならないと思い、憤然として、

「あんな公山弗擾に味方するなどとは、とんでもないことです。なぜ、叛乱軍などに加担されるのですか」

と食ってかかった。そして、

「公山弗擾が拠っている費邑城は、いかに堅固な城とはいえ、魯の国の一隅を占めるにすぎません。そんな狭い領域から、どうして魯の国全体を動かすことが出来ましょうか。また公山弗擾に勢力があるといっても、しょせん叛乱軍にすぎません。季孫氏をはじめとする三桓の力がいくら衰えたといっても、そうやすやすと公山弗擾の軍門に下るとは思えません。現に公山弗擾をそそのかした陽虎は、国外へ逃げてしまったではありませんか。甘言につられて、その中へ入っていくのは、火中の栗を拾うようなものです。賛成できません」

と、世の中の動きにくわしい現実派であり、実務派の子路は大反対した。

すると孔子は、

「わたしを見込んで招くからには、きっと何かの考えがあってのことにちがいない。わたしに政治を任せてくれるというのだから、ぜひやってみたいのだよ。わたしはこの乱れた魯の国を、かっての周の国のような、立派な国にしてみたいのだ。かって周の国が行った理想の政治を、この魯の国に再現してみたいのだ。わたしにはそ

の自信がある」

そう答えた。孔子はすでに五十歳になっていた。学問を修め、執政家としての実力も蓄えている。自信もついてきた。もはや雌伏の時は過ぎた。そう考える孔子が、こうした心境になったとしてもおかしくはなかった。すなわち五十歳の孔子は、あせっていたといっていい。

そこでさらに子路は言葉鋭くつめ寄った。

「それではお聞きしますが、先生はいつか『自分から進んで悪を働く者に手を貸してはならない』と教えてくださったではありませんか。公山弗擾は叛乱を起こした人間です。そんな悪事をなす人間に、先生が手を貸すとは納得がいきません」

それに対して、またもや孔子は、

「たしかにそう教えたことはある。だが世に『本当に鉄が固ければ砥石にかけても涜くはならない。本当に白ければ、いくら染めても黒くはならない』というではないか。わたしの政治への理念は、正しく、堅固である。たとえ悪の中に入っても、崩れることはない。わたしは見捨てられた苦瓜ではない。いつまでも見捨てられたままで、見苦しくぶら下ってなどいたくないのだ。せっかくの機会を無駄にしたくないのだよ」

そう答えた。学問はしたものの、実際の政治に携わることができず、中途半端な状態でいる自分を、

（ちょうど蔓にぶら下って、見苦しく醜態をさらしている苦瓜のようだ）

と、自己嫌悪に陥っていた孔子の姿がここに見える。

しかし政治とは、孔子の考えているような理想郷ではなく、現実の政治は政争に明け暮れる修羅場である。孔子の政治は、

（王の道を説き、その徳によって世を治めるのを理想）

とする、いわゆる王道である。しかし現実の政治は、各地で実力を蓄えた政治家が反乱を起して権力を奪いあい、力のある者が実権を握り、覇を競い合う、覇道であった。

だが、政治の力学や世の修羅場にうとい孔子には、自分の志す王道が、誰に仕えたら実現するのか、よくわからなかったのではなかろうか。

その辺の事情にくわしいのは子路である。子路は自分が正しいと思ったことは、たとえ師の孔子であっても猛然と立ちむかっていく剛の者である。子路は孔子への説得をあきらめずに続けた。

子路は単純な男であるが、もともとは武闘派の人間なので、戦いのこつは心得ていた。勝つ方に乗るのが、軍事の定石である。戦争については、孔子よりもうわ手である。孔子のような理想と、机上の演習だけでは、戦争に勝つことはできない。

ついに孔子も、その子路の判断を認めざるをえなかった。孔子もついに、

（やはり子路の言うことが正しいのだ）

と目ざめた。

そして公山弗擾の申出を敢然と断わった。

こうして魯の国にも、他の国と同じように下剋上の動きが盛んになると、孔子をめぐる動きにも、このようにあわただしいものが起きてくるのだった。そして、すでに五十歳という年齢になり、早く世に出て活躍したいと思っている孔子の気持は、はげしく揺れ動くのであった。

しかしその迷いの中から、孔子は、

（理想的な政治を実現するのに、下剋上の波に乗って主君に叛き、権力を握って実現する覇道をもってしてはならない。あくまでも王道によって実現するものでなくてはならない）

と、天命を悟るのだった。これが後年の孔子の、

（五十にして天命を知る）

という言葉になるのである。

（つづく）

茉莉花伝（四）

―東丹国使と来た娘―

森下征二

（十七）

中宮の部屋へ一歩入った帝は、思わず軽い立ち眩みを覚えた。外はまだ陽が高いのに、部屋の格子がすっかり下りて、小さな灯かりしかともっていなかったからである。

部屋の隅にひっそりと、何かを憚るように御調台が置かれている。中には、広袖の衾をかけた幼い少年が横たわっていた。少年は皇太子の寛明親王で、御年八才になる。今はやりの咳病にかかり、御母、中宮穏子の手厚い看病を受けていた。

中宮は七年前に、菅帥の祟りで、長子の保明親王を失った苦い経験がある。しかし、その四ヶ月後に、まるで生まれ変わりのように誕生したのが、この寛明親王である。

長子を産んで二十年の間、全く身ごもる気配がなかった穏子にとっては、思いがけなく授かった子供である。それこそ真綿でくるむように、育ててきたのも無理はない。

しかし、皮肉なもので、中宮が幼い皇太子を溺愛すればするほど、彼女の心は菅帥の怨霊を怯えるようになった。そして終に中宮は、皇太子を怨霊から守るために思い切った手を打った。皇太子を男子禁制の弘徽殿へ引き取り、塗籠の部屋の格子を昼間も下ろして、育てることにしたのである。

ところがそれでも、皇太子の病は一向に回復しない。ここ数日、芳しくない状態が続き、中宮は休む間がなく疲れきっていた。帝が部屋へ入って来ても、振り向く気配も見せなかったのである。

「東宮の様子は如何であるか？」

ご機嫌が悪いな…と、帝は声をひそめて中宮に尋ねた。中宮は、初めて気がついたように顔を上げ、それでも帝を見つめてにっこりと微笑んだ。

中宮が微笑むと、何とも言えない芳香が微かに漂ってくる。

彼女は帝と同い年で今年四十六才を迎えたが、すっかり白髪になった帝と比べると、親子と見えるほどの違いがある。黒い髪を長く伸ばした美しい顔は、ふっくらとして透き通り、まるで三十路前の娘のようだ。僅かに腫れた看病疲れの目も、どことなく色気があって、男心を微妙に誘う。

穏子が入内して、もう三十一年になる。彼女は時平や忠平の妹で、前の妃の為子が亡くなると、慌ただしく嫁いで来たいきさつがあった。

その時、彼女はまだ十五才になったばかりだったが、既に魔性の美しさを備えていた。甘酸っぱい芳香が白い肌から微かに漂い、男心を惹きつける不思議な力があったのである。帝の妃でなかったら、一人の男で満足出来る女ではない。

その頃、穏子の母のまわりに、黒い噂が持ち上がったことがある。娘を入内させるため、為子を呪詛させた…と、言うのである。事実とすれば一大事だが、すっかり穏子に夢中になっていた帝は、その噂を気にもかけなかった。それどころか、彼女に益々のめりこんで行ったのである。

考えてみれば、それは実に不思議なことであった。何しろこの帝は、色好みとして有名なお方である。后妃も多く、五人の女御と十九人の更衣がいた。手のついた女性となると、それこそ数えきれないほどである。それがどうして、これほどまでに、穏子に溺れてしまったのだろうか？

それは、やはり…、彼女の不思議な魅力に尽きるのかもしれない。

帝が穏子を抱き寄せると、彼女の香りが帝を包む。甘酸っぱい香りが帝の官能を呼び覚まし、夜毎の房事に疲れきった身体を容赦なく翻弄する。しかも、不思議なことに、行為の後で空しさがない。穏子は帝にとって、精気と快楽を合わせて生み出す、坩堝のような女性だったのである。

しかし、それでも帝は、女人遍歴を止めることができなかった。もともと色好みであったうえ、政治に全く興味を失っていたからである。

何しろ、何をやっても菅帥に邪魔される。帝が怨霊の恐怖から逃れるためにも、若い女性の身体が必要だった。しかし、その後が空しかった。他の女と交わっても、行為の後に、決まって味気ない気持ちになるのである。それは結局、穏子によって与えられた快楽の、副作用だったのかもしれない。

帝は今も、東宮の様態を気遣いながら、中宮の成熟した美しさを秘かに楽しんでいた。しかし中宮は、帝のおもねるような顔を見ても、かたくなに神妙な態度を崩さ

なかった。
　彼女は、東宮へ視線を向けたまま、漸く帝の問いかけに答えた。
「そうですね…。咳が酷いうえに、お熱が少しも下がりません。その上、何も召し上がらないのです」
「うむ…」
「女房たちの憎いこと！　菅帥の祟りだと、あちこちで言いふらしているようでございますわ」
　中宮の顔が悔しそうに歪んだ。帝は慰めるように、穏やかな声で言った。
「そうか、仕方のない者どもだな…。しかし菅帥は、既に本官に復した上、位も一階進め参らせた。怨念などが残るはずがないではないか」
　中宮は帝の言葉をわざと聞き流し、思い切ったように言った。
「今朝方、尊意が私の所に参りました」
「尊意が？」
　帝が微かに顔をしかめた。尊意と言うのは、天台座主の高僧で、仏教界を牛耳る大物である。彼は霊験あらたかな修法で、怨霊を鎮めることが出来るとされていた。中宮の信頼が殊に厚く、弘徽殿への参上も許されていたのである。
「はい。何でも、東丹国とやらの国使が来て、左大臣に面会を求めているとか…」
「うむ…」
　尊意も余計なことをするものだ。中宮を巻き込むこともなかろうに…。帝の瞳が僅かに曇った。中宮が帝の顔を窺いながら畳み掛けた。
「渤海国が、滅びたような素振りを見せ、中宮の顔を正面から見た。
「そのようだ。あの国は、契丹人と言うおどろおどろしい民によって、僅か一月足らずで滅ぼされたと聞いている。こうなっては、愈々世も末だな…」
　ため息を洩らした帝を見て、中宮の瞳がきらりと光った。彼女は帝を正面から、まともに見つめ返して切り込んだ。
「その契丹人が今度は、我が国を攻めようとしているとか…、本当ですか？」
「む…」
　帝は思わずうめきながら皇后を見つめた。尊意は、そんなことまで洩らしたのか？　帝の顔色が変わっている。皇后は構わず話を進めた。
「東丹国使は、菅帥の孫娘を連れて来たそうですね。尊意は、その孫娘が契丹人の来寇を知らせにきたと言っております」
　そこまで知っているなら、これ以上隠すことは難しい。帝は露骨に不機嫌な表情をして口を尖らせた。

「そうだ…、良くご存知だな」
　中宮がすかさず眉を寄せた。そして、怨むような顔をして帝を見つめる。微かにうろたえた帝が、ばつが悪そうな顔をして後を続けた。
「いや、そう…、それなら私も左大臣から聞いている。忠平は明日、東丹国使を小一条第へ呼びつけたそうだぞ。私にも、忍びで出座してくれ…と言って来た」
「それで…、その孫娘も呼んだのですね？」
　中宮が確りした口調で、茉莉花のことに話を戻す。帝が再びため息をついた。
「そうだ…。彼女は、ただの渤海人の娘ではない。渤海国の世子の妃だと言うことだ。世子の妃が自ら来たのだからな。当然、忠平も呼ぶだろう」
　帝は中宮に説明しながら、彼女が自分と同じくらい知っていることに気がついた。彼女は多分、忠平からすっかり話を聞いているのだ。もしかしたら、彼に何か頼まれているのかもしれない。中宮の心に不審を抱いた帝は、厳しい口調に戻して言った。
「そなた、この娘の身分は、勿論知っていたのだろうな？」
「はい…」
　中宮が悪びれず答える。そして彼女は、更に帝を正面から見つめて踏み込んできた。
「それで、お上は如何なされますか？」
　帝は微かに首をかしげて腕を組んだ。彼は微笑みながらゆっくりと言った。
「さて、如何したものか。異国の人に対面すべからず…と、先帝から与えられた戒めもある。私が自ら、東丹国使に会うのが良いのだろうか？」
　先帝の戒めとは、宇多天皇が譲位された時、醍醐天皇に遺された、異国人との会見についての訓戒である。先帝は異国の商人と親しく接触し、自ら外交上の裁断を下したことがあったが、結果は必ずしも芳しいものではなかった。
　寛平の頃、遣唐使の派遣を決定したかと思うと、直ぐにそれを取り止めたのが良い例である。
　そこで、彼は譲位に当たり、その反省を踏まえて「外蕃の人、召し見るべき者は、簾中にてこれを見よ」と訓戒を遺した。
　天皇自ら異国人と会見し、外交上の裁断を下すべきではない。天皇自ら応対すれば逃げ場がなくなる。外交実務は然るべき者に任せ、天皇が直接責任を負ってはならない…と、言ったのである。
　中宮が微かに眉をしかめた。帝は、先帝の遺戒を盾にして、何もしないで済まそうと言うのだろうか？　考え込んだ帝に向かって、中宮が励ますように力を込めて言った。
「先帝のお言葉はともかく、これを放っておくことは出

来ますまい？」

彼女の身体から迫るように、甘い匂いが漂ってくる。しかし、今度はそれが逆に作用した。帝は、中宮が忠平の指示で、自分を追いつめていると邪推したからである。帝は青い筋を額に浮かべながら、甲高い声を張り上げて叫んだ。

「しかし、これは、先ずは大臣の仕事だぞ！　忠平が十分に調査して、しかる後に、私の判断を求めるのが筋ではないか？　え、そうだろう？」

「……」

「あの男は、何時もそうだ！　一人では、何も出来ない無能な奴だ！　面倒な事が起こると、何時も私を引っ張り出す…。それで良いのか、え？　あれで、良く大臣が務まるものだ！」

「……」

「それにしても口惜しい…。時平が生きていればのう、さっさと一人で始末するのに…」

帝の目が血走っている。中宮は冷静に帝の顔を見つめた。帝を少し、追いつめ過ぎたのかもしれない。中宮は、今度は宥めるように低く返した。

「でも、ことは国の存亡に係わるものではございませんか？　お上のご叡断を仰がなければなりません。兄はそれで、お出ましをお願いしたのでございましょう」

「うむ…」

一理はある…と、帝は大きくため息をついた。帝の顔を見つめながら、中宮が穏やかな声で問いかける。

「それでもお上は、小一条第へ参られないのでございましょうか？」

「そうさな…」

帝は再び表情を強張らせ腕を組んで考え込む。大きなため息をついた中宮が呟くように言った。

「尊意は私に、かようなことも申しました」

「尊意が…？」

帝の目が警戒するように光った。しかし、中宮は構わず先へ話を進める。

「尊意は、この度の咳病を、菅帥がその孫娘を使って、引き起こしたものだと申しております。東宮の病は、菅帥の孫娘を退治しなければ回復しないと…」

「む…」

帝が思わずうめいた。中宮が力を振り絞って、更に切り込んできた。

「お上は…、勿論ご存知ですわね？」

帝が露骨に顔をしかめた。そして、助けを求めるように中宮の顔を見つめる。中宮は蒼白になりながら、懸命に帝を見つめ返して言った。

「これは、私にとって一大事でございます。私は何とかして東宮をお救いしたい！」

帝は黙って視線を外した。皇后が執拗に声を励まして

帝に迫る。

「私には、契丹人が攻めて来ようと、どうでも良いことなのです。私の大切なものは、東宮のお身体だけでございます。」

「うむ…」

「お分かりくださいませ。私は中宮である前に、東宮のたった一人の母親なのでございます…」

懸命に見つめてくる中宮に向かって、帝は大きく頷いた。忠平の指示の下で動いていると邪推したのは、どうも間違っていたようだ。帝は、声を和らげて中宮に言った。

「良くわかった。それで…？」

「尊意は私に、このように申しました。呪詛された者は、自分で怨霊に立ち向かわなければ、呪いを解くことができない…と。」

中宮の瞳がさりげなく光った。穏子の身体が再び、ふんわりと匂って来る。

「東丹国使に会うことはともかく、東宮を助けるために、小一条第へお越しいただくわけには、行かないでしょうか？」

中宮が帝の顔を正面から見つめる。甘酸っぱい香りが帝の身体を包み込む。私はこの香りから逃れることは出来ない。彼は諦めたように深いため息をついた。

（十八）

「わかった、尊意の言うことが真実なら、私は確かに、小一条第へ行かなくてはなるまい…」

帝は、懸命に見つめてくる皇后に優しく頷きながら、慎重に答えた。

「しかし…。そなたのように、尊意を一途に信頼して良いのだろうか？」

帝はこの期になって、一体何を言いたいのだろうか？中宮が微かに眉をしかめた。帝が中宮の顔色を見て、苦笑しながら言った。

「私はあの男が申すままに、菅帥を本官に復してみた。しかし、禍は一向に止まないではないか。私にはどうしても、尊意が菅帥を鎮める力を持っていると思えないのだ。良いか、菅帥の霊力は、そんな生易しいものではないのだぞ…」

帝は中宮に噛んで含めるように言った後、ゆっくりと瞼を閉じて考え込んだ。

あれは、夢を見ていたのだろうか…と、帝は二十年前のことを思い出していた。

その時帝は、時平の臨終に立会っていたのである。延暦寺の高僧である浄蔵（じょうぞう）が、病魔退散の祈祷を始めると、待ち構えていたように異変が起こった。

時平の両方の耳から一匹ずつ、二匹の青い蛇が這い出

して、真っ赤な目を爛々と光らせながら、口々に罵ったのである。

「わしは、帝釈天の許しを賜って、怨敵時平を縊り殺しているところだぞ。その方…、何の理をもって、わしを降伏させようとするのか！　去ね…、去ね！　疾く去ね！」と。

二匹の蛇はもちろん、菅帥の化身である。帝は、燃えるように煌きながら、そのくせ冷たく光る蛇の眼を、忘れることが出来なかった。禍々しく光る赤い目は、今度はお前の番だ…と、威嚇していたのである。

もちろん、蛇は人の言葉を喋ることは出来ない。しかし、怨霊は間違いなく、話すことが出来るはずだ。あれは、決して夢ではない！

中宮も、丁度その時、保明親王が病に臥せっていた時のことを思い出していた。

あの時、床下の穴から引きずり出された老婆は、帝に怨みを晴らすのじゃ…と、中宮を指差して叫んだのである。まるで、忘れることは許さんぞ…と、言わぬばかりに。

口から剥き出した黄色い歯が、カリッカリッと梓弓を齧る。中宮は、あの不気味な音を、今でも鮮明に覚えていた。菅帥の凄まじい力を、侮ることが出来るはずがない。

中宮は思わず身体を震わせて胸を抱いた。あの汚く黄ばんだ鋭い歯を、二度と思い出したくない。しかし、何をおいても東宮を守らなければならない。彼女は気を取り直して、思いきったように話を進めた。

「おっしゃるとおり、菅帥の力は並のものではございません。しかし、たとえ尊意に菅帥を鎮める力がないとしても、このまま放っておくわけには、行かないのではございませんか？　放っておけば益々悪くなるだけです。東宮は何時までたっても、回復しないのではございませんか？」

帝は中宮を見つめて低く呻いた。私は確かに、決断しなければならない。それが人の親の務めだろう。しかし、だからと言って、おいそれと決断できるものでもない。帝は歯を食いしばって言った。

「その通りだ。しかし…、尊意は私に、あの娘を退治せよと申しておる」

「……」

「そなたは私に、人を殺せと言うのか？」

中宮が思わず目を伏せた。しかし、直ぐに顔を上げて、如何にも心外だと言うように、首を大きく横へ振った。

「そうは申しておりません。尊意が言うには、お上はただお出ましになって、事の次第を見届けるだけでも良いそうです」

帝は、中宮のまわりをゆっくりと歩きながら、心の中

でののしった。

（嘘だ！　奴は私が、娘の首を切らなければ効験がないと吐かしおった。二枚舌を使う痴れ者め…。奴の背後に、忠平が控えているに違いない）

しかし帝は、辛うじて感情を押さえ込んで、穏やかに言った。

「そこまでやれば、私が殺すことと変わらない。祟りがあれば、まず私に下ることになる…」

「そうでしょうか？　何れにしても、その娘を退治しなければ、東宮の命はございますまい。でも…、お上の気持ちが進まないのでしたら、私には、別の考えがございます」

「何だって…？」

帝がいぶかしげに中宮を見た。

「……」

皇后は黙って、唇を噛んでうつむいた。白い肌から血の気がすっかりなくなって、身体が僅かに震えている。帝が急き込むように言った。

「そなた、一体何をしようというのだ？」

中宮の口元に、微かな笑みが浮かんできた。彼女は落ち着いた声で囁くように答えた。

「菅帥が怨んでいる者が、お上の外にまだ、一人残っております」

「はて？　そのような者がいただろうか」

「はい、お上の御前に…」

「……」

「お忘れですか？　菅帥がお上の廃立を企んでいると讒言したのは、私でございます。菅帥は、お上よりもむしろ、私を呪っているはずでございます」

「うっ！」

「宜しゅうございます。私が明日、小一条第へ乗り込みましょう！　敵わないまでも、私がその娘と刺し違えます。東宮の命には代えられません」

「馬鹿な！」

帝が、厳しい声で遮った。

「いいえ…」

中宮が、涙でにじんだ目を向けた。

「これは何も、東宮のためではございません。私はもう、菅帥を怖れて暮らす生活に、耐えられなくなったのでございます」

「……」

「だってそうでしょう！　何処へ隠れても、菅帥は私たちを見逃してくれない…」

中宮の感情が次第に昂る。彼女は大粒の涙を浮かべて、激しく泣きじゃくりながら叫んだ。

「もう、嫌だ！　私はほとほと、疲れてしまいました。それなのに…、このうえ、菅帥の孫娘まで怖れるのですか？」

「……」
「嫌です！　私は嫌です…。そんな暮らしを続けても、仕方がないではございませんか！」
「止せ！　もう止めなさい、穏子…」
「いいえ、止めません！　私はもう、死んでも良いのでございます…」
冷静で、物に動じたことのない中宮が、まるで宮中の女房たちのように、はしたなく興奮しきっている。いたたまれなくなった帝は、慌てて中宮の傍に坐り、泣きじゃくる彼女を抱き寄せた。
「もう良い！　わかった。良くわかった…。だから、もう止めてくれ」
帝は中宮を確りと抱きしめて、優しく髪を撫でながら囁いた。
「私が不甲斐ないばかりに、そなたに辛い思いをさせてしまった…。情けない！　本当に情けない。私も本当にたまらなくなってくる…」
「……」
「しかし、私はそなたを、小一条第へ遣るわけには行かない。これは、誰の仕事でもない…。まさしく、私の仕事なのだ！」
帝は涙を袂で拭いながら、それでも力強く言い切った。そして、尚も彼女を愛撫しながら、自嘲するように呟いた。
「聞くところによると都では、下々の者たちが菅帥を、天神と呼んでいるそうだ…」
「……」
「天神…。良いか、天神だぞ！　何ともはや、仰々しい呼び名だ。しかも、憎いではないか！　彼らは、天神が天皇を…、そう！　この私を、呪詛出来ると信じているのだ…。無知な輩の言うことだが、聞き捨て出来ることではない！」
帝は、身体の中から湧き上がって来る怒りに唇を激しく震わせた。次第に激高してきた帝は、更に声を荒げて叫ぶ。
「天神とは何事ぞ！　菅帥など、数ある家人の一人ではないか！　死んで神になったとは言え、私から位を授かる身に変わりはない…」
「……」
「そんな彼が、現人神である天皇を…、この私を、凌ぐことが出来るはずがない！　え…、そうだな？」
「はい…」
「考えてみれば、私は菅帥を怖れ過ぎていたような気がする。疫病なんか、大昔から何度もはやっている。洪水にしても、日照りにしても、菅帥が生まれる前から、幾らもあった話ではないか。それなのに、近頃では全てを菅帥に結びつけて考える。どこか、おかしいとは思わぬか？」

「ええ…」
「何か起これば、尊意は直ぐに菅帥の仕業にする。忠平が廟議でそれを、そのまま取り上げる。疑えばきりがないが、私を脅かそうとする作為が、感じられないでもない」
「……」
「良かろう。私は明日、私のために小一条第へ行く。小一条第へ行って、この手で必ず、菅帥の孫娘を退治して見せる」
中宮は、帝の決意を聞きながら何故か顔を曇らせた。帝の威勢が良い言葉が、却って彼女を不安にさせる。あの娘は、何と言っても菅帥の孫娘ではないか…。彼女の力を侮ることは出来ない。如何に、東宮のためだと言っても、帝をこのまま小一条第へ行かせて良いのだろうか？
今まで信頼してきた尊意の言葉に、初めて疑問が湧いてきた。彼女はとまどいながら、帝の胸に取りすがって小さな声で呟いた。
「ありがとうございます…。でも陛下、兄や尊意が言うように、お上自ら、菅帥の孫娘を退治する必要が、本当にあるのでございましょうか？　そうだとすれば、余りにも恐れ多いことですもの。今更おかしなことですが、私は、彼らが言うことが、本当だと思えなくなりましたわ…」
帝は中宮の言葉を聞きながら、忠平の貧弱な顔を思い出した。彼の小さな、狡すっからい目が見えてくるような気がする。彼はおそらく何処かで、私がどうするかじっと見つめているだろう。
もう、後には引けない。帝は心を決めて中宮を確り抱き寄せた。
「本当かどうか…は別として、私はとにかく立派にやって見せる！　これは、そなたや東宮のためではない。私が、日本国の天皇として、やらなければならないことなのだ」
帝は、はっきりと言い切った。身体の中に、新しい力が湧き出してきた。
負けるものか…。私はこの国の現人神だ。菅帥の孫娘にひれふすわけには行かない。昂揚した気分に逆らうように、再び忠平の顔が浮かんでくる。帝は、中宮を確りと抱しめながら思わず顔をしかめた。
私はひょっとしたら、菅帥の孫娘ではなく、忠平と闘おうとしているのではなかろうか？　帝は中宮の耳の口をつけて、唇を震わせながら囁いた。
「尊意はともかく、私は忠平を信用していない…」
中宮の身体が微かに震えた。或いは彼女に、これ以上のことを話してはならないのかもしれない。しかし、帝はどうしても止めることができなかった。彼は敢えて、中宮をいたぶるように言った。

（十九）

戌の刻が半ば過ぎて、小一条第の中はすっかり闇に包まれていた。黒い雲が夜空を走り月の光を隠している。風が強い。鬱蒼とした庭の松の枝が、不気味な音を騒がしく立てている。闇の中の奥深く、微かに灯りが洩れているのが忠平の寝所である。

この時刻だと、何時もは奥にいるはずの忠平が、珍しく縁側に出て坐っていた。彼は悠然と脇息に寄りかかって胡坐をかき、庭先に畏まった狩衣姿の男を見下ろしている。

何処で鳴いているのか、梟の声が聞こえてくる。それに合わせるように、忠平が物憂い口調で声をかけた。

「掴んできたか？」

聞き流せば、答えが返ることを期待していないように見える。しかし、彼の小さな眼は鋭く光り、髪を長く伸ばした美しい男をじっと見すえていた。

「はい」

男が軽く頭を下げた。

「どんな娘だ？」

「美しく、そのうえ利巧な方でございます。しかもまだ、あどけなさが残っているように見えました」

「二十歳を過ぎた娘が…か？」

忠平が、皮肉な笑みをたたえて聞く。男が律儀に頭を下げた。

「おおよそのことだが、忠平の魂胆は察しがつく。菅帥の祟りを出来るだけ私へ向けさせて、私の恐怖を募らせる。そして、あわよくば私を退位させ、自分が関白になる積りなのだ」

「……」

「しかし、そうは行かない！私は、この国の天皇だ。あいつの思い通りになって堪るものか！　関白は何れ、時平の子に授ける。そうだ、そなたにもはっきりと言っておこう…、私は何れ、保忠を関白にする積りでいる。良いな？」

「はい…」

「だから、その為にも、私は自分がやるべきことを、確りとやらなければならない。私が菅帥の孫娘を退治できる力を持っていることを、彼らに見せつけなければならないのだ」

帝は、きっぱりと言い切ると、何かに急かされたようにいきなり中宮の身体を抱き起こした。何時もと違って、強引で有無を言わさないやり方である。中宮は、帝の乱暴な動きに驚きながら、それでも優しく身体を預けた。やがて、待っていたかのように、彼女の身体から艶かしい匂いが漂い始め、部屋の中を蔽ってきた。

帝は、中宮の香りにうっとりとしながら、彼女をかかえて褥へ急いだ。

「御意…」

「うむ…。それで、契丹は？」

「問いただしたわけではございませんが、おそらく…」

「来るか…？」

「はい…。あの方は、人を誑かすような人には見えませんでした」

「ふん！」

忠平が鼻先でせせら笑った。彼は皮肉な調子で更に続ける。

「契丹人は確か、遊牧の民だったな？」

「はい」

「船を操れないのではなかったのか？」

忠平の細い目が光った。何時もは貧弱に見える顔が、今は恐ろしいほど厳しくなっている。しかし、男は泰然としていて、怯んだ様子は少しも見せない。顔をまともに見つめ返し、ゆっくりと頭を下げた。

「申し訳ございません。私が間違っておりました」

忠平が口もとを軽く緩める。男がなまじ、言い訳しないのが気に入ったようだ。しかし、それでも尚、厳しい口調で付け加える。

「間違ったと言って済むことではなかろうが…」

「はい…」

男が再び頭を下げた。忠平が軽く胸をそらして、やっと顔を和らげた。

「まあ良い、鬼藤太…。わしは、甄萱の人物を正確に見抜いたお前の眼力を買っておる。おまえを小次郎の邸に遣わしたのは、そのためだぞ」

「はい」

「情報の真偽を確かめるにはのう…、あれこれと調べるより、持ってきた人物を見抜く方が、遥かに大事なことなのだ」

「御意…」

「おまえはその目で、あの娘を確りと見てきたのだ。わしはおまえを信用しよう。おそらく、契丹は来る…。そうだな？」

「はっ」

忠平の壷を得た扱い方に、純友は三度頭を下げて唇を噛んだ。

ところで今、忠平が口にした甄萱とは何者か？　彼は、朝鮮半島の西南部を治めている、百済の国の王である。

朝鮮半島でも、今、やはり麻のように乱れていた。三百年近く続いた新羅の統一が崩れて、その衰退した新羅と、新興の高麗と百済の三国が鼎立する後三国と呼ばれる時代の只中にあった。このうち百済は、古代、日本と関係が深かった百済と区別するために、後世の史家から後百済と呼ばれている。

去年の正月、貪羅島（済州島）へ交易に向かった新羅の船が遭難し、対馬に漂着したことがあった。島司の坂上経国は、船に乗り込んでいた新羅の商人に食料や水を与え、船が出港した全州へ送り返した。しかも、島司は異例の措置をとった。忠平の指示で都から来ていた、検非違使の秦滋景と通訳の長岑望通をつけて、彼らを送って行かせたのである。

その時、全州を支配していたのが、百済王の甄萱であった。

彼はその頃、三国の中で最も勢いがあり、得意の絶頂にあった。新羅の王都慶州を襲って王妃を捕らえ、景哀王を殺して壊滅的な打撃を与えたうえに、救援に駆けつけた高麗王の王建を大破して、まさに朝鮮半島を統一しようとする勢いにあったのである。

滋景と望通が全州に着くと、思いがけないことが起こった。その百済王の甄萱が自ら二人を引見して、慇懃にもてなしたのである。それだけではない。彼は機嫌よく杯を重ねながら、かねてから日本国へ朝貢したいと思っていたので、これを機会に国使を送る…と、伝えたのである。

実は、これより七年前のことである。彼は新羅郡公の資格で我国へ朝貢することを望み体よく断られた経緯があった。しかし今は、中原王朝の後唐から百済王に冊封されて、外交資格は十分に備わっていた。

一度決めると甄萱の行動にはためらいがなかった。彼は直ぐに滋景を日本国へ送り返して、朝廷へ取り次ぐことを依頼した後、四ヵ月後の五月には、朝貢使張彦澄を対馬へ遣わし、慇懃に国交を求めたのである。

我が国はその時、一度は百済の朝貢を受け入れることに傾いた。

帰国した滋景の報告を受けた朝廷が、百済の勢いを買ったのである。しかし、それは、直ぐに忠平によって覆された。彼は滋景の帰国後も、何故か全州に留められていた通訳の望通から、次のような報告を受けていたからである。

望通の書状は言う。百済は中国江南の呉越国と親しく、交易によって富を蓄えてきた商業国である。その百済が、我が国と国交を結んで貿易を始めれば、日本と江南を仲介する三国間貿易によって、莫大な富を手に入れることができる。おそらく、甄萱の狙いが交易にあることは間違いない。

しかし…と、望通は更に続ける。甄萱の風貌はあくまでも卑しい。老いて益々猛々しく信義がない。そのうえ好色で冷酷である。彼は捕らえた新羅の王妃を、王の目の前で犯したうえ、情け容赦もなく弄り殺しにしたと聞いている。

甄萱には、王者の徳もなければ風格もない。その上、施政者に最も大切な、大局を見る眼がないようである。

何故なら…、彼はせっかく慶州を攻略しながら、美女や財物を略奪することに忙しく、新羅を併合する有効な措置をとらなかったではないか。

その甄萱が、国を保つことは難しい。彼は間違いなく国を失うに違いない…と。

忠平の措置は早かった。この報告を受けると直ぐ、彼は大宰府へ指示を出し、百済王の要求を拒否して、使節を送り返したのである。

ところで、長岑望通と名乗って全州へ乗り込んだ通訳とは何者か？　実は彼こそ、瀬戸内海賊として、朝鮮半島から中国へかけて暴れまわっていた藤原純友だったのである。

それから半年余り過ぎた今年の正月、東丹国使の来航を受けて、その対策に追われていた忠平の許に、重要な情報が飛び込んできた。百済王の甄萱が、朝鮮半島中部の要地、古昌郡の瓶山の麓で、高麗王の王建によって致命的な大敗を喫したと言うのである。

朝鮮半島は今、甄萱ではなく王建によって、新しく統一されようとしている。

純友の人を見る目の確かさが、見事に実証されたのである。

（二十）

「ところで、甄萱と言えば…」

忠平は純友から眼を逸らして、宙を見つめながら言った。

「瓶山で大敗した後、立ち直る兆しはあるのか？」

「立ち直る…？」

純友の瞳が闇の中で光った。全州の宮殿で受けた、あの不快な気持を思い出したのである。あの時甄萱は、玉座の上から脂ぎった眼で、自分の身体をしきりに嘗め回していた…。

「おそらく無理でしょう」

純友が吐き捨てるように言った。

「ふむ。人柄か…？」

忠平は彼の顔を興味深げに見つめながら、人柄を見てそう思うのか…と、改めて念を押してきたのである。甄萱の陰湿で粗暴な性格は、今まで十分に説明したはずだ。純友は忠平を見つめ返してはっきりと頷いた。

「そうか。力と才知があるのにのう…」

忠平が微かにため息をついて呟く。純友は忠平の顔を注意深く見守った。忠平は一体、何を言いたいのだろうか？　ふと、もしかしたら…と、恐ろしい疑いが頭に浮かぶ。しかし、彼はそ知らぬ顔をして、忠平の言葉を引き取った。

「力と才知があっても、民はそれに従うわけではございますまい」

「うむ、それはそうだ…」

忠平が簡単に引き下がった。しかし更に、浴びせるように畳み掛ける。
「そうすると、王建だな…？　これは一体、どういう男だ？」
「会ったことはありませんが…」
王建は、純友にとっても興味がある男である。彼は、慎重に言葉を選んで答えた。
「噂では…、大人の風格があると言うことです」
「噂…？　おまえらしくもない」
忠平が一言で切り捨てた。純友はむっとしながら辛うじて抑え、静かな口調で付け加えた。
「彼は甄萱と違って、人を使うことが出来るようでございます。だからでしょうか？」
「うん？」
「渤海人が大挙して、彼の下へ集まっております」
「滅びた後で…か？」
「いえ、滅びる前から…。おそらく彼らは、渤海国より高麗の将来を高く買ったのでございましょう。だから…なのです」
「だから…？」
また三段論法か…と、忠平が注文をつける。純友が涼しい顔をして続ける。
「はい。だから…、彼は、甄萱を破ることができたのです。高麗は、渤海人を受け入れて益々強くなりました。おそらく、これからは百済からも、彼の下に優秀な人材が集まるでしょう。死に体の新羅なんか、これはもう、言わずもがな…でございます」
「ふむ、やはり韓は、高麗に統一されると言うことか…」
「はい」
「だから…なのか？」
今度は、忠平が同じ言葉を投げ返してきた。純友が思わず忠平の顔を見つめ返した。忠平の細い目が光る。彼は別に、戯れているわけでもなさそうだ。
忠平は少し間をおいて、純友の顔を楽しそうに見ながら後を続けた。
「だから、契丹が我が国を攻めるとき…、韓の国を通ることができないのだな？」
さすがである。忠平は、朝鮮半島の情勢を踏まえながら、契丹来寇の真偽を検討していたのである。純友は改めて忠平の顔を仰いだ。忠平は闇の中を見つめながら呟いた。
「わしは、かねがね不思議に思っていた…」
「はい」
純友が思わず合の手を打つ。忠平の小さな目がぎょろりと光った。
「契丹が我が国を攻めるなら、何故、韓の国を通らないのか…とな。韓を通り、対馬、壱岐と島伝いで来なければ、馬を運ぶことは難しい。彼らが遊牧の民なら、何としてでも陸地を通ろうとするはずだぞ。わしが契丹皇帝なら、そうする…」
「……」
「しかし、韓の国の北にこもる王建の力が、それほど強ければ話は別だ。我が国を攻略することが目的なら、その前に大きな犠牲を払うことはない。契丹は、王建の力を正当に評価していると言うことか。そうだな？」
「はい…」
純友心の中で低く唸った。近親であるが故の反発を抜きにして、恐ろしい男だ…と改めて思う。廟堂の中で貴人に囲まれ、美女と戯れ、私財を蓄えることに忙しい男にしては、非常に確りした洞察力を身に着けている。忠平が尚も、純友を見つめながら淡々と続ける。
「そうすると…だ。契丹が我が国を攻めるためには、あの娘が言うように、北の大海を一気に横断して来なければならないことになる」
「はい」
その通りだ。忠平が、これほど論理的な男であるとは、今まで思いもしなかった。純友はじっと奥歯を噛みしめながら、忠平の顔を見上げた。忠平の顔が穏やかに微笑んだ。
「と、言うことは…」
忠平の細い目が光り、再び表情が厳しくなった。純友が思わず頭を下げる。忠平が、断を下すようにはっきりと言った。
「あの娘の情報は正しい…」
「はい」
「お前の人を見る眼が、今度もまた確かだったと言うことだ」
「恐れ入ります」
「たいしたものだな…、鬼藤太」
忠平が、声をたてずに短く笑った。冷たいものが背筋を走る。俺はやっぱり、この男に敵わないのか？　彼は再び唇をかんでうつむいた。忠平はそ知らぬふりをしながら更に続ける。
「しかし、それにしても、契丹は何故我が国を狙うのだろうか？　北の海を、船に馬を乗せて連れて来るのは楽ではなかろう。のう、そう思わぬか…？」
まだ、それが残っている…。純友は思わず背筋を伸ばした。俺はまだ、左大臣と互角に渡り合えるかもしれない。純友はやっと落ち着きを取り戻して、忠平を見つめ返した。
「おそらく…」
「うん…？」
忠平の反応が早い。純友の説明を待っているのだ。しかし、どのように切り出せば、最も効果があるだろうか？　純友は、わざと呼吸をはずした。
「どうした？　早く申せ！」

苛立った忠平が、小さな声で催促する。純友は、ずばり切り出すことにした。一旦決めてしまうと、不思議に腹が据わってくる。彼は不確かな調子で…、しかし、確信を持って切り込んだ。

「黄金ではないか…と」

「黄金…だと？」

「はい、陸奥の国の黄金でございます」

天平年間に陸奥の国の小田郡で、我が国の金が初めて発見された時から、まだ二百年も経っていない。忠平が露骨に眉をひそめた。

「我が国の黄金など…。たいした量はないではないか？」

「そうでしょうか？」

「そうだ！」

忠平が、純友を頭から押さえつけるように断言する。

「しかし…」

純友が余裕を持って反論する。

「異国では、誰もそう思ってはおりません。何しろ我が国は、金無垢の大仏を作ったほど、黄金が豊富に採れる国ですからね」

忠平が思わず苦笑して純友を見下ろした。

「何だと？　東大寺の大仏か…。あれは、銅の上に金を塗っただけではないか」

「では、ございますが…」

純友も遠慮がちに微笑みながら、忠平を真っ直ぐ見上げる。

「しかし、異国ではもっぱら、純無垢の金の大仏であると思われています。何しろ、今、我が国と盛んに交易している呉越国の商人たちが、たった一度の航海で、莫大な黄金を持ち帰ってくるのですからね。漢人の彼らが言うことは、大きな説得力があります」

「……」

「呉越国の商人の前に、我が国との貿易を独占していた新羅にしても同様です。彼らは嘗て、僅かな対価で大量の黄金を手に入れました。それが嘗て、新羅を支えておりました」

「……」

「契丹は、呉越国と交流があります。新羅の国とも僅かながら、互いに行き来しているように聞いております。彼らが中国や新羅から、我が国が黄金に溢れた国だと言う情報を得ていたとしても、少しも不思議ではございません」

「ふん！　迷惑な話だ」

「はい、迷惑な話でございます。しかし、東大寺の大仏を鍍金する黄金一万両余りを、全て国内でまかなったうえ、毎年数千両の黄金が、陸奥から朝廷へ貢納されております。しかも、それだけではございません。都には、国庫に納まったもののほかに、秘かに私蔵されている莫大な黄金があるとか…」

「何だと！」

忠平が大声で叫んだ。純友が慌てて、両手を振りながら付け加える。

「いえ、これは噂…、単なる噂でございます。しかし、異国の人が黄金や白銀を求めて熱心なこと、我が国で考える程度を遥かに超えております」

「うむ…」

「従って、縷々考えますと、契丹が我が国に目をつけた原因が黄金であることは、おそらく間違いございますまい」

「なるほど、一理はある…」

忠平が短く言って一歩引いた。純友は忠平を正面から見つめながら更に切り込む。

「それから、もう一つ…」

「何だ？」

「対馬の銀です」

「対馬の銀だと？　ははは…」

一瞬ゆがんだ忠平の顔が大きく破れた。彼が初めて声を出して笑った。しかし、直ぐに顔を引き締め、鋭い目つきで純友を睨んだ。

「言いおったな、鬼藤太！　おまえの話は、その程度か？」

「は…？」

「対馬の銀はとっくに底を尽いているわ！　あれはな…、貞観の頃だから六十年も過ぎている。大雨の後に坑内に水がたまってのう…、汲み出すだけでも大変になった。それで仕方なく、大宰府に援助させ、細々と銀を掘っているところだ。契丹が、対馬を狙ったところで仕方あるまい」

「左様でございますな…」

純友が忠平の厳しい目つきにも怯まず、昂然と胸を張った。彼は臆することなく、背筋を伸ばして反論する。

「されど…、貞観以来、対馬からは相変わらず、二千両を超える銀が朝廷へ貢納されているのは、何故でしょうか？」

「……」

「また…」

と、彼は更に身を乗り出して言う。

「寛平のとき、新羅の海賊が大挙して対馬に押し寄せ、坑道へ押し入ったのは何故でしょうか？　そればかりではありませんぞ！」

「何だ…と？」

「甄萱もまた、対馬を狙っていた節があります。彼が二度にわたって我国への朝貢を望んだのは尋常ではありません」

「む…」

純友が昂然と胸を張った。

「何れにしても、契丹の狙いは、我が国の黄金や銀でご

ざいます。これは間違いございません」
純友は、はっきりと言い切って殊勝に頭を下げた。言いたいことは言い尽くした。貴人に向って、深追いは禁物である。
忠平の口もとが緩んだ。彼は細い眼を光らせながら、諦めたように言った。
「さすがは海賊だのう。黄金や銀の話になると、良く知っておるわ…」
「ご冗談を…」
純友が改めて平伏する。忠平苦々しそうに口をゆがめた。
「いや、冗談ではない。わしは感心しているのだ。良くもこれだけ調べたものだ」
「恐れ入ります」
「まあ、良い！　これで契丹人の動機もわかった。そして、何よりも考えなければならないのは、現実にあの娘が来ていると言うことだ。契丹は確かに、我が国を侵略しようとしているのだろう。そこで…」
「……」
「彼らの準備がどれくらい進んでいるかと、言うことになる」
「はい…」
「わかるか…？」
忠平が純友をじっと見つめる。純友は慌てて手を振った。
「いえ！　それは、私には…」
「ははは…、これは愉快だ。おまえにもわからぬことがあったのか？」
「御意…」
忠平が再び声を出して笑っている。しかし、その目は少しも笑っていない。彼は純友に、好い気になるなと言っているのだろう。純友が思わず視線をそらしたとき、忠平が低い声で短く叫んだ。
「良い！」
「はっ！」
「それは、明日…、娘に確認すれば済むことだ」
忠平の声が再び穏やかになっている。純友は、ほっと息を大きく吸い込んだ。松の梢を打つ風の音が、急に大きくなって来たような気がする。夜も大分更けてきた。忠平が、独り言のように口を開いた。
「娘といえば…」
「はい…」
「小次郎は、傍にちゃんと付いておるか？」
「はい、傍を離れず守護しているようでございます」
「それで良い」
「は？」
「あの男がついておれば、世子の妃も心強かろう。何しろ、彼は我が国で一番の豪の者だからな。あの男も変なところで役に立った…」
純友が、訝しげな顔をして忠平の顔を見つめた。忠平は明日、茉莉花と小次郎をどうしようと言うのだろうか？　だが、俺の口から聞くことは出来ない。彼は何となく、不吉なものを感じて考え込んだ。
しかし、忠平は純友の思惑に構わず、直ぐに話題を変えて言った。
「ところで、高麗の王建だが…」
「……」
「新羅の国を乗っ取ることが出来るようだな」
「は…？」
「いや！　なに、力があっても、革命によって王位につくことは難しい」
「はい」
「甄萱がな、良い例ではないか」
「……」
「中国では、唐の天下を梁が奪った。しかし、その梁は既に滅んで、また唐と言う名の国に変わった。そして今度は、渤海が滅びた。韓の国では、新羅が今にも滅びようとしている。どこの国も歩調を合わせて、乱れに乱れていると言うことかな…？」
「……」
「王建が新羅の国を奪えるかどうか？　隣国の大臣としては…だな、わしも関心を持たないではいられない…と、言うことだよ」
黙って聞いていた純友は、やっと忠平の意図が理解できた。
そうか…。やっぱりそうか。忠平は朝廷に、鼎の軽重を問おうとしているのだ。彼は日本の国で、易姓革命を行おうと言うのか？　純友は背筋に、冷たいものが流れるのを感じた。忠平がさっき、甄萱には力と才知があるのに…と、言い淀んでいたことを、純友は今更ながら思い出した。
「百済の後は東丹国か。左大臣も楽ではないな…」
忠平が穏やかに言い捨てて、すっと立ち上がった。彼は純友に声をかけることもなく、部屋の中へゆっくりと入って行く。純友は気丈に頭を上げて忠平の後姿を睨んだ。忠平は何故、俺にこんな大事を洩らしたのだろうか？　彼は忠平の姿が消えた闇の中を睨みながら、腕を組んでじっと考え込んでいた。

（続く）

三つのコンサート

森　実与子

今年のゴールデン・ウィークは、初日と最終日にコンサートに出かけた。

はじめは、初台にあるオペラシティでのクラシックのコンサート——アンナ・ネトレプコというロシア人ソプラノ歌手のリサイタルに行った。

同行したのは、オペラファンの老紳士だった。この御仁は、自宅に大型スピーカーと昔ながらのアンティークステレオを完備し、何十年かけて買い揃えたレコード盤で、オペラのアリアを聞いて悦に入るというほどのオペラファン。

「めぼしいオペラのアリアなら、たいていは揃っていますよ」という耳の肥えたオペラフリークなのだ。私もオペラが好きなので、前々から何かコンサートへ行こうと約束していて、今回実現したのだった。

もっとも私はまだ年季の浅い、オペラ初心者である。思い立った時に、インターネットでヴェルディやプッチーニ、モーツァルトなど、有名なオペラ公演の比較的安いチケットを探し、聴きにいくといった程度だ。外国の有名劇場の引越し公演は、驚くほど値段が高い。たとえば、イタリアのフェニーチェ劇場の来日公演などは、一年近く前からチケットを売り出すが、値段の安い順に切符が売れていくものだから、公演間際になると三、四万円の高いチケットしか残っていない。計画性のない私には、数ヶ月前から前売り券を求めるなんてことはできないし、目ン玉が飛び出るほど高いチケットを買うほどの身分でもない。それで、出演者もお値段も手軽なオペラ公演を探しては、一人でフラッと聴きに行く。単純なストーリー展開と、歌手たちの美しい歌声を聴いているうちに満たされた気分になっていくので、最近の私の、ストレス解消の一つとなっている。

さて、このアンナ・ネトレプコという女性歌手に食指が動かされたのは、「現代のシンデレラ」「サイボーグ美女が歌う二十一世紀」……というキャッチフレーズに惹かれたからだった。しかも、まだ先の話だが、来年秋のメトロポリタン劇場の日本公演で『ドン・ジョヴァンニ』に出演する、世界的に売れっ子の若手歌手というふれこみなのだ。

祝日の午後、彼女がどんな歌声なのか興味津々で、会場に向かった。コンサートホールは、最新の音響効果を考えて天然木で作られた、落ち着いた空間である。舞台の左右をボックス席が囲んでいるため、私たちの三階席でも意外と舞台に近く、彼女の姿形がよく見えた。彼女の歌とピアノのみのシンプルなリサイタルであり、ピアノの横で、キラキラと光るピンクのカクテルドレスに長い黒髪をなびかせて歌うアンナの姿は、まだ三十代のはじめなのに、まさにプリマ・ドンナとしての貫禄十分だった。声量ある歌声、とりわけ高音の伸びが美しく、会場一杯に響き渡る。

「いい声だねえ」

と老紳士。一体、体のどこから声が出てくるのだろうか。もはや肉体が楽器と化してしまったような、高音の響きなのである。ピアノの鍵盤を押すように、体の一部分を押すと、その箇所ごとにさまざまな音域の声が出てくるような感じなのだ。彼女が〝サイボーグ美女〟といわれる所以だろう。

アンナは十年ほど前にロシアのマリンスキー劇場の『フィガロの結婚』でデビューを飾った後、ミラノのスカラ座、ウィーンの国立劇場、ニューヨークのメトロポリタン劇場など、世界一流のオペラハウスから声がかかり、『椿姫』のヴィオレッタ、『ラ・ボエーム』のムゼッタ、『ドン・ジョヴァンニ』のドンナ・アンナ役……など、ソプラノ歌手の名だたる役をつとめ、トントン拍子に成功の階段を上ってきた。そして、順調に世界的なプリマ・ドンナの王道を歩んでいるという。もちろん、その間の切磋琢磨は人並み以上だったに違いないが、運も才能のうちである。しかも、声だけでなく、彫りの深い顔立ちといい、大柄だが凹凸のある抜群のスタイル。美の女神が彼女に微笑んだとしかいいようのない、優れた声と容姿のアンナに、多くの人が熱狂しないはずがない。当然ながら男性ファンも多いようで、実際、観客席には若い男性客が目についた。

この日の曲目は、ロシア人らしく、リヒャルト・シュトラウスやラフマニコフ中心で、私にはあまりなじみ深いものではなかった。それがちょっと残念だった。だがアンコールで、プッチーニの『ボ・エーム』『ジャンニ・スキッキ』、ドニゼッティの『ランメルモールのルチア』といった、イタリア・オペラの有名なアリアを披露してくれたので、うれしくなってしまった。やはりピアノ曲とオペラのアリアでは、華やかさが違うのだ。

「やっぱり、プッチーニの甘美なメロディはすばらし

いね。彼女は最後に、私はイタリア・オペラも歌えるのよっていうところを見せたんだね」と老紳士はいう。
「本当は、アンコールのイタリア・オペラをもっと聴きたかったのに……。何だか、おあずけをくらった気分です」
私がいうと、
「それには、ピアノの伴奏だけでは寂しいし、大掛かりな仕掛けが必要となると、切符の値段も上がるでしょう。こんなもんだよ」
さすが、場慣れしている人の感想だ。
「彼女は、美人なのに茶目っ気があっていいね。今後の成長株だ」
アンコールに応え、ピアニストと連れ立って手を大きくふりながら舞台の袖を行き来するアンナの姿は、愛嬌があった。老紳士も顔をほころばせ、満足した様子である。
私は音楽を聴くのが好きだが、特にクラシックファンでもないし、ジャンルにこだわらない。広く浅くというか、その時々の気分に合った音楽が好きな音楽だといえる。オペラ以外では、ここ何年か南米系の音楽にはまっている。ピアソラのアルゼンチン・タンゴ、キューバン・サルサ、ボサノヴァ系等々だ。原稿を書く時、私はいつもラジオかCD、カセットなどでBGMを流しているため、自ずと、仕事の邪魔にならない軽やかな音楽が好ましくなるのかもしれない。
今一番のお気に入りが、ブラジル人歌手カエターノ・ヴェローゾである。一昨年見たスペイン映画『トーク・トゥ・ハー』がきっかけだった。映画もすばらしかったが、映画のなかの劇中プライベートライヴというか、夜のプールサイドで、カエターノが本人として出演して歌った『ククレククレ・パロマ』(日本語でいえばクックックック・ハトよ)が、忘れられなくなってしまったのだ。登場人物の心情にマッチしたこの悲恋の歌を、彼がギター片手に、甘く、優しい声で歌うシーンはたまらないほど切なくて、私は胸をキューンとしめつけられた。この曲はカエターノの自作ではないが、五〇年代のラテンの名曲らしい。これを機にすっかりカエターノに魅せられた私は、CDを買い求め、ひたすら彼の声を聴いている。詩的で哲学的な歌詞とメロディの創作はもちろんのこと、映画制作や本の執筆なども手がける才能豊かなカエターノは、「ブラジルの知性」といわれるブラジルの国民的歌手だという。だが私にとって、彼はまさしく癒しの人なのである。
さて、連休最終日は、ボサノヴァとジャズをミックスさせた新鋭のシンガーソングライター、キアラ・シベッロを聴きに行った。彼女は三〇歳のイタリア人女性で、アメリカに渡って音楽の勉強をしているうちに、いろいろなジャンルの音楽や人との出会いを経て、昨年デビュ

ーを飾ったのだという。またもや私は、未知の女性に引き寄せられたのだ。
こちらの会場はオペラシティとは一八〇度違う、横浜赤レンガ倉庫のなかのジャズクラブである。赤レンガ界隈は若者や家族連れでにぎわっているが、年配の男性の姿もちらほらあったりして、このお店の年代層はちょっと高い。
「昼間からお酒を飲むなんて、贅沢ね……」
ちょうど母の日なので、そのお祝いと称して、母と一緒に夕方のひと時、お酒と食事と音楽を堪能しに出かけたのだ。
キアラはジーパンに白いジャケットというまったくラフなスタイルで、ピアノ、ベース、ギター、ドラムの四人の男性を従えて登場した。歌声の印象は、まず太い声というか、深みのある声からはパワーが感じられ、快い。
「けっこう太ってるわね」
写真よりも太目の姿に、思わず声に出してしまうほどボリュームのある体だが、それがかえってカッコいいし、その太股のパンチ力はお見事としかいいようがなく、音楽に合わせて体を軽く動かしながら歌う姿は、何ともいえずチャーミング。そして、鼻の高さと顎のラインが際立った横顔が、すごくきれいなのだ。
「でも私は航海したいの　海がどこに私を連れて行ってくれるか知らないままに　音のしない　私の波の中を夜もブルー昼もブルーなのは　取り囲む光景　私にとって未知のそれ　戻ることのできない旅路　一日ごとに一曲の歌　私にあるのはそれだけ」
リズミカルな曲だけでなく、静かなピアノの弾き語りもあり、ちょっと哀しげな歌詞とメロディを、彼女の透明感のある暖かい声が包み込む。洗練されたニューヨークのジャズのサウンドと、ノスタルジックなボサノヴァが、大人っぽいサウンドを生み出しているのだ。しかも合間の語りは、「日本ダイスキ!ジャパニーズ・フード・イズ・グレート」など、親しみやすいイタリア人気質が全開だ。
さわやかでパワーのあるステージに、私もパワーをもらえたかなという高揚感に、心が踊った。舞台を下りて帰って行くキアラが、ちょうど私の横を通り過ぎたので咄嗟に手を出すと、「サンキュー」といいながら握手をしてくれた。
ゴールデン・ウィークの間、偶然にも二日とも外人女性のステージを見たが、まったく毛色の違うコンサートだった。一方が伝統的な歌姫なら、一方は型にとらわれない自由人といったところか。どちらの魅力も捨てがたい。正統派美人と気さくな美人。もしも自分がなれるものだったら、どっちになりたいだろうか?　男性なら、どちらを好きになるだろうか?　欲張りな私は、両方に

なりたい。欲張りな男は、両方欲しくて、二人の間を行ったり来たりするのではないか。それぞれに個性が光り、持ち味の異なる二人の女を見られたことは、とても楽しい体験だった。共通するのは〝たくましさと美しさを兼ね備えた女性〟ということだろう。そして二人のグラマラスな肉体と迫力から、我々日本人とは、ＤＮＡがまったく違うのだと痛感せずにはいられなかった。

そんなことを母にいうと、

「そうよね。来る時の電車のなかの広告も〝どうやって痩せるか〟とか〝かわいらしさ、上品さ〟なんて言葉しか並んでいなかったものね」

「ほんと、同じ女でもまったく異質ね。……でも握手もしたし、少しは元気をもらえたかも」

「どんな手だった？　大きかったでしょう」

「少し汗ばんでいたかな」

そんな軽口を叩きながら外にでると、眼前に海の景色が広がっていた。夕闇のなか、ライトアップされたベイ・ブリッジと横浜港が人工的な光にキラキラと輝き、美しい。海風はちょっと冷たかったが、心地よい音楽に触れた後、連休最後の夜にふさわしいロマンティックな風景を目にした私は、ささやかな幸福感に浸っていた。

ところで後日談だが、なんと〝愛しのカエターノ様〟が、五月の末に来日したのだ。来日を知り、本物に会えるなんて夢のようと、ワクワクしながらコンサート当日を迎えた。

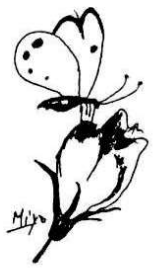
白いＴシャツにグレーのセーター、黒いパンツという普段着のような服装のカエターノは、大半の曲を、ギターを弾きながら座って歌った。ポップス調、レゲエ調あり、バラード、アカペラなど、幅広いレパートリーだ。ギターを持たない時は、座ったまま両手を宙に広げながら、足を踏み鳴らして気持ちを高めていくようなしぐさをしたり、時々、おどけて舞台上を走ってみせたり、観客に呼びかけるように舞台のはじで歌ってみたり、その独特のパフォーマンスから、彼の気負いのない自然体の良さが光った。

さすがブラジルのヒーローとあって、観客席にはブラジル人グループのファンも多く、途中しばしば、彼らの歓声や嬌声が飛び交った。英語とポルトガル語の歌が半々だが、やはり母国語のオリジナル曲、そして彼の弾き語りが、じいんと心にしみわたる。歌詞の意味はわからなくても、情感が伝わってくるのだ。

カエターノはもう六三歳であり、髪の毛も半ばグレーの痩せた渋いおじさまだが、その甘く柔らかな声はまったく年齢を感じさせず、声に艶とハリがあるというか、色気があるのだ。しかも、さすがベテラン。波のうねりのような声の強弱や高い裏返った声の出し方などから、完成度の高い技巧の持ち主だと、私は感じた。力を抜いた伸びやかな歌いっぷりは、キャリアの蓄積の上に成り立った余裕、円熟ゆえの計算された自然体なのかもしれない。さらに、ギター、チェロ、ベースなど六人のバンドの音楽性も各々のレベルが高く、とりわけ、カエターノの一〇年来の相棒だというマエストロのチェロの音色が、美しかった。これぞ、本物の大人の音楽の醍醐味である。

しかし、これだけ豊潤な世界に到達するまでには、多くの熟成期間を要したようだ。彼も若い時はとんがっていたのだろう。六〇年代の後半、若者たちの革新的な芸術グループ、トロカピリズム運動の先頭に立ち、軍事政権下のブラジルに対する反抗的な歌詞から政治犯として監獄にぶちこまれ、さらに、ロンドンで二年の亡命生活を余儀なくされたという。その後、愛する祖国に帰って音楽活動を再開し、つねに新たな試みに挑戦しながら、年輪を重ねるほどに余計なものを削ぎ落とし、斬新で洗練されていながら、優美で郷愁あふれる……といった、言葉では言い尽くせない独自の世界を築き上げたのである。

ともあれ、最初に心酔したあのハトの名曲も生で聴くことができたし、熟した男の魅力に私はすっかり魂を射抜かれ、メロメロだった。最後は総立ちになるほどで、アンコールの拍手はいつまでも鳴り止まない。そしてアンコールの最後の曲で「一緒に歌って……歌って」と、カエターノが拙い日本語で呼びかけたのだ。歌声と同様、その言葉も限りなく甘美であり、耳元で囁かれたような気分に。私は思わず「なんて可愛いの！」と心の中で叫び、とろけてしまいそうだった。最後の最後、コンサートが終了して舞台を去っていく時、かなり多くのファンが舞台に駆け寄っていった。それを遠目で見ていた私も、席がもっと前の方だったら走っていきたかった。会場の国際フォーラムは広すぎて、顔の表情が見られなかったのが心残りだが、まさに至福の二時間であった。余韻さめやらずにカエターノ熱に浮かされている私は、まだ当分の間、彼がＢＧＭである。



許せぬ一言（ひとこと）

「まだやってんの」

大和禎人（おおわよしと）

東京外国語大学の学長を勤めた原卓也くんが幽界に去った。昭和五年（一九三〇）生まれの君は七十四歳であった。

ロシア文学者白光亭・原久一郎氏の御曹子として、君はつとに英才として属目されていたようだ。父君は早稲田出で宇野浩二氏などと同期であった由、訳業上はとくにトルストーイの作品紹介に貢献、大正、昭和の初期にかけ米川正夫氏と双璧をなすロシア文学者であった。

わが「まんじ」の源流をなす文芸同人誌「作家群」は原氏がその息、まだ学生だった卓也君のために発起し、ある出版社を語らい創刊号を出す運びに至ったものだ。米川氏の周辺にも当時同様の機運があり対抗する意味あいもあってのことだった。昭和二十七年の創刊である。同人として参加したものは東京外語の学生らに加えて堀義久、九鬼純正など。この二人については、

「父の古い弟子たちです」

という説明が私にあった。なんとなくいやな感じだった。九鬼氏は知らず、堀さんは全く露語に関係のない人だった。あとあと本人から聞くところによれば北陸金沢出身の原氏とは同郷の由、堀さんの志望から門を叩き間違えたのではと思ったりしたことだ。

私の場合は同人雑誌とはそれまで全く無縁のところ原氏の女婿が同僚にいて、誘われての参加だった。

練馬区椎名町の原氏宅に事務所が置かれた。近隣に住む作家新田潤、二科会の画家栢森義氏などが顧問として名を連ねていた。ともあれスポンサーつきの華々しいスタートだった。

書店で雑誌を見ていち早く参加してきた人に三戸岡道夫さんがあり、後に第三回日本放送文学賞を受賞した湯郷将和の吉岡昭碩さんがいる。二人とも学生だった。三戸岡さんはいち早く第二号に作品を飾っている。

ところが第二号からは同人費による自前の発行にかわる経営の四苦八苦が始まる。原卓也くんは創刊号に訳詩二編を載せただけでいちはやく遠ざかっていた。それでも五号までは発行人原卓也を守り、六号から堀さんに変えている。堀さんは年長であり、すでにそれなりの年季を積んでいる先輩だった。朝日新聞が昭和39年募集した一〇〇〇万円懸賞小説の当選は三浦綾子さんの「氷点」であったが、堀さんも応募した一人で、すでに長編をこなすだけの実力の持ち主であった。その作品は後日単行本化され、原久一郎御大出席のもとに出版記念会が催されるということがあった。

ところで、編集担当の私の勤務先へ創刊号の経費の請求を受けるという珍事があったことを漏らすわけにはいかないだろう、それは明らかに原氏の、それも卓哉くんの差し金であるに相違なく、抗議の電話を入れると、

「よく言っておきます」

という言葉を返されたことを書き留めておこう。

「作家群」は第十号まで続いた。途切れて十一号に相当する復刊号が三十九年、オリンピックの年に出され柴田富佐子さんの佳編「浅草育ち」が掲載されたが、以後の継続がなく休刊久しきにわたり、五十六年三月の、「まんじ」創刊により返り咲き、八十一号に至るまで表紙の下部に旧のタイトル「作家群」の文字を配する体裁を維持していたが、いまはそれも廃された。それで良いと思っている。

第九号に掲載の山本儀一作品「古風な胸像の下で」が昭和30年度、第33回芥川候補に取り上げられた。この作品の下読みをしている私はふるえを覚えるほどの感動を与えられている。候補に上ったこの事実は良い作品は必ず顕（あら）われる証左であった。同人誌として充実、脂がようやくのった頃合いでもあった。

同賞のこの回の受賞者は「白い人」で遠藤周作氏であった。候補作品のメンバーは小沼丹、川上宗薫、澤野久雄といった錚々たる顔ぶれであった。賞を逸したが、山本作品は同時期東洋経済新報社が総合誌「総合」を創刊した際、同作品が採用され、荒正人、河上徹太郎、山室静氏らによりふたたび脚光を浴びた。この経験から言えば同人雑誌の命運は創刊から第十号あたりまでで評価を決するもののように思われる。

文芸志向は麻疹（はしか）に似て、若者が罹りやすい病気のようである。そしていつか大方が忘れ去るようでもある。

文章を綴る労作に耐え、錬磨の不屈を求められ、古い言葉かも知れないが、彫心鏤骨（ちょうしんるこつ）の覚悟なしには筆力の達意と縦横の技量は望み得ない。

たまたま山本さんの場合にふれて芥川賞のことにおよんだが、この賞もその後今日すでに一三〇余回におよんで受賞者、あるいは賞を競った候補の数多（あまた）、泡沫のごとく消え去った数のいかに多いことか。挫折、死屍累々（ししるいるい）のありさまである。

「作家群」十号、そして復刊号にいたる間、同人とし

て名を連ねた数、消え去った数、ともに数多であった。

今「作家群」の源流から「まんじ」に残留するものはわずか三戸岡道夫、太田和貞（紺野秀治）、および私の三名にすぎない。

茨の道を避けた原卓哉くんは父上の思惑にもかかわらず66年母校教授に迎えられ、89年学長に就任した。

露語科出身の会があり、久しく同人だった柴田富佐子さん夫妻、ご主人は原氏と同期、また「作家群」同人で筆名真山和夫の桜井秀勲さん（光文社に入社し、週刊誌「微笑」の編集長を勤めた）など、たまたまその会にあたり、原氏はすでに退任の身、喉頭癌何度かの術後で痩せ細った姿で同窓に伍した写真を柴田さんから受け取ったが、「まだやってんの」という放言を伝えられた。ご本人としては何気ない一言かも知れないが遺憾だった。

山本儀一さんは平成十六年十一月、名和涼八という筆名で四冊目の本を出版した。

「漂民重蔵覚書」

そのあとがきにこうある。

（これが最後の本となるだろう。わたしにはもう時間がないのである。……妻の三周忌までにとあわただしく書き上げたものである）

装丁も見事、美しい本である。同氏は八十九歳である。

堀義秀さんは堀よしひさとしていまや九十二歳、平成十四年七月、久しく無音のところ、突如次のような一本を寄せられた。

「現つの夢」

―老いと友情の手紙―

AさんとB氏、熟年の男女が交換する手紙一一三通という、変わった構想で全編が仕上げられている。変わらぬ達者振りであった。

そしてメモ用紙が挿入されていて、

（このほど息子の世話で作品が本になりました、お目通しいただければ幸せに存じます）

とあった。上梓のいきさつとして父子の美しい情が伝えられ、老来なお不屈な同氏の魂が察せられる内容であった。

いま氏は東村山市秋津に本の発行者である、堀渡氏の宅に同居されるものと本の奥付から判断し、今回の礼状とは別に暮れにも賀状を差し上げたのだが、返信はなかった。高齢ゆえに本の発行後、幾許もなく逝去されたのでは、と思われる。

「父の古い弟子です」と呼ばれた堀義久さんは素志を貫かれて冥界へ去られたようである。

「まだやってんの」

という軽率、かつ侮蔑の一言にかかわらず、わが同志二人の健在をここに記し、幾山河、苦験の彼岸、文士と呼ばれるものの不屈をここに明らかにしておこう。

（H一七・六・二〇）

短歌二十首

流離の渚

曽根竣作

素枯れたる葦直立しこの凛き輪廻の風を受けて相打つ

朝払ひし数尺の間に蜘蛛の囲の勁きがふたたび我に絡まる

斑なる女郎ぐもひとつ美しけれ規矩に巣づくり丹念なれば

さそり座の首星煌めき人の世の係恋あはく胸処に墜ちる

秋空をうつして揺るる潦ひそやかにしてこの身歪めり

関はりし乗馬の友らまた集ふ銀座三笠会館六階の部屋

脾肉の嘆かこつことなく初老たちそれでも話題は遠乗りの日々

気忙しく人ら行く交ふ銀座街用なきわれも群衆（ぐんじゅ）の一人

たたなはる雲茜してハイウェイ人為果てなく空へ真向ふ

人が歴史を、歴史が人を作るのか永久（とは）のテーマに秋思尽くせず

紅葉を抱きてふかき峡の径（さつを）猟夫の足跡枯れ生（ふ）につづく

蕭条と秋吹きわたる天空を帰雁の列の乱れもあらず

羽搏きもけんめいなりき逆風の山巓かすめ雁かへりゆく

九天のいっ気に晴れて秋潮の寄するなぎさに海星たゆたふ

干涸びし海星の胴のうす蒼く流離の思ひ遂げしすがたか

ひたすらに波に漂ふ浮標（ブイ）ひとつ暗夜に白く孤りなるべし

ぬば玉の明鳥の声けたたましとの曇る空切り裂くごとく

桟橋にＧＩブルース聞き流し倉皇としてわが戦後ありき

ＧＩのジープ掠めし横浜（ハマ）の径いま高階のビル影をおく

敗戦後のカオス巧みに活写せり水上勉の「飢餓海峡」はや

短歌

行雲流水(十)

石黒修身

ルーマニアは戦中ドイツの支配下にあり、ルーマニア兵もドイツ軍の徴用のもと、戦線に参加していたのだろう。

ドキュメントドラマの主題は、ラーゲリにおける、日本人軍医渡辺俊男と、ルーマニア人の学徒兵アナトリエ・アールヒップとの、極限下での友情と勇気、そして半世紀にわたり抱き続けた互いへの想いであった。

そのドラマは、ドキュメンタリーなタッチで進められた。

友情と約束

渡辺とアールヒップは、収容所での理不尽な管理と抑圧の中で、いくつかの偶然に恵まれ、互いに母国や、将来の夢、そして婚約者のこと等を語り合い友情を築き上げてゆくが、やがて、アールヒップが奥地送りとなり、

㈠望郷のバラード

ドキュメンタリー

平成十七年五月七日、日曜日の夜、ＮＨＫのドキュメンタリードラマを視た。それは、終戦直後にソ連軍に連行され、シベリアのラーゲリに収容された、日本人捕虜達の極限の生活と、その中に生れたある特異な人間関係を描いたものであった。

ラーゲリは、シベリアのウルム山脈の西、カザンの南で、ヴオルガ河の中（下）流にも近いユラブカという地にあった。

立地条件の故か、ラーゲリには、約一万人の日本人の他に、約三千人のドイツ人の捕虜が収容されていた。その中に僅かな人数のルーマニア人か居たという。

別離の時が来る。

共に再会を誓い合うが、死を覚悟したアールヒップは、婚約者への指環を渡辺に託する。

その後、曲折を経て、奇蹟的にも二人は、夫々の祖国に還ることが出来た。

帰国後二人は、共に社会的にも、家庭的にも意義のある人生を送り乍らも、当時の友情と約束を、片時も忘れることは無かった。

一九九〇年のある日、渡辺のもとにアールヒップからの一通の郵便が届くが、それは事情があって、二人の再会には繋がらなかった。

更に十年を経て、渡辺は手を尽してアールヒップの所在を探しあて、ブガレストで病床にあったアールヒップと劇的な再会を果した。

さらなる再会を約して帰国した二カ月後、アールヒップの訃報が渡辺のもとに届いた。

彼等の次なる再会は、相次いで他界したオルガ夫人と共に眠る墓石との対面となった。

それは、数奇とも云える熱く哀しい友情の結末であった。

―この辺の事情は、渡辺がその著書「凍土の約束」に詳しく記している。―

バラーダ

ドキュメンタリーの中では、収容所で、ドイツ兵捕虜が（アールヒップが所有していた）ルーマニアのポルムベスクの曲「バラーダ」を夜ごと弾き、渡辺ら捕虜はその切々たる哀調に遠く故国を偲んだとなっている。

然し、渡辺の自伝的著書「凍土の約束」では、単にヴアイオリンの曲で聴いたことになっている。

渡辺は、一九九三年日本で初演された天満敦子による「望郷のバラード」は、「ヴォルガの舟歌」とともに、私たちにとっての鎮魂歌である、と述べている。

この事から、渡辺は帰国後時日を経て、天馬の演奏によりこの曲に接したものと推察される。ＮＨＫのドキュメンタリーはこのあたりを若干脚色したものであろう。

脚色とフィクション―事実との間合

ポルムベスク作曲の「バラーダ・BARADA」は、彼は二十九才の若さで短い生涯を閉じるが、当時の反体制活動で捕われ、獄中で故郷の恋人を偲んで、この哀切きわまれない名曲を生んだものとされている。

それは、「望郷のバラード」として、秘曲とも称され、ルーマニアの国外に出なかったのではなかろうか。

この曲が、天満により演奏されるに到った経緯は、日本の外交官岡田真樹が、ブガレストとウィーンを公務で往き来する間に、かねてからその弾く曲に心を動かされ

ていたルーマニアからの亡命ヴァイオリニスト、イオン・ベレシュから、「この曲を理解するヴァイオリニストが居たら日本に紹介を」と一冊の譜面を託された。

それが、曲折を経て天馬の演奏するところとなった。これが渡辺の「凍土の約束」の記述である。

天満がモデルと称される、高樹のぶ子の小説「百年の預言」には、このあたりが主人公走馬充子のウィーン、ブガレストと日本に跨る天才ヴァイオリニストとしての奔放な生きざまの中に巧みな創作として描かれている。

また、天満は自著「わが心の歌・望郷のバラード」の中で、外交官岡田から入手し、日本で初演するまでの経緯を、岡田が一九九三年十二月八日の日経新聞の文化欄に寄せた「祖国逃れた演奏家の伝言」を引用し事実関係を明らかにしている。

感動そして感傷

筆者は、シベリア抑留の世代には遠く、また音楽についてはむしろ疎い方であるが、冒頭のドキュメンタリーを視て言い知れぬ感動を覚えた。

そして、天満のヴァイオリン曲のCDを聴き、次いでタイミング良く五月に発刊された渡辺俊男の「凍土の約束」と天満の自伝とも云える既刊「わが心の歌・望郷のバラード」を、そして天満をヒロインにしたと言われる高樹のぶ子の小説「百年の預言」等を覚めやらぬ感動の裡に読みあげた。

シベリア抑留記録のたぐいは数多くあるのだろうが、偶々出会った一篇のドラマにつきかかる感動を訴えるのは些か単純過ぎるかも知れない。

然し、ドラマの筋書きから得る感動に、天満の奏でるヴァイオリン曲がオーバーラップして、言い知れぬ心の揺動を感じたのである。

それは、筆者の妻の父が、妻の幼時期に当時在勤した満州から応召し、シベリア抑留の末還らぬ人となったこと、そしてそれが妻の癒えざる哀しみとなっていることを知っていたからなのだろうか。

演奏会

六月七日、紀尾井ホールで天満のヴァイオリンリサイタル（無伴奏）を聴いた。

天満は、最後に「望郷のバラード」を弾き、終演の挨拶で、来臨されていた美智子皇后への謝辞と併せ、愛器「ストラド」と「望郷のバラード」との出会いにつき語った。

次いでゆかりの人として、古川清（天満のルーマニア初公演を設けた、当時のルーマニア大使）と岡田真樹（バラーダの楽譜の演奏を天満に託した外交官）が在席する旨を伝えた。

エピローグ

天満の演奏を、そして「望郷のバラード」の旋律を聴き乍ら、二カ月余りの短時日に自身を虜にした一連の感動と魂の昂揚が徐々に平静になり、終りのない楽章として、その余韻は永く心に残るであろうことを知覚した。

文中敬称略

以下にこの間の感懐を託した短歌六首を載せる。

ラーゲリの奇しき友情知りしのち
　涙して聴く「望郷のバラード」

異なれる祖国もちたるラーゲリの
　友生涯を友情に生く

望郷の曲を弾く人聴く人も
　共に虜囚ぞラーゲリは悲愴

わが妻は幼な児にして北辺に
　果てし父の面差し朧ろ

懐かしき父も彼の地に果てしとて
　ドキュメント視る妻の涙は

秘曲とう「望郷」を弾く天満敦子
　その眞摯なる風姿清しく

㈡近詠十五首

携帯のメールで短歌を交すという
　若きらが居て言葉空飛ぶ

新学期登校の児らのざわめきに
　漸く醒める吾が春眠は

吾と妻を迎えんとして犬を曳き
　駆け寄りし男孫は転びて泣けり

妻に添い不作法なりし茶会あと
　一盞の酒につくろぎにけり

春暖の日影茶屋にて偲びたり
　革新の女の愛憎杳か

花街の由緒留める茶屋出でて
　団子を食めり桜賞でつつ

隅田川岸辺の桜いま盛り
　かすむビル群遠景に置き

松島を巡る船には餌を欲りて
　群れる鴎が変速し飛ぶ

今さらに賞でる謂なし松島は
　やはり松島あゝ松島や

瑞厳寺紅白の梅通り抜け
　芭蕉ゆかりの伽藍に詣ず

桜散り欅の若葉繁る頃
　やゝ控え目に花水木咲く

春なれば無沙汰詫びつゝ訪いゆかな
　湘々湖南に不随の旧友を

ライラック咲き遅れたる札幌は
　「ヨサコイソーラン」賑わいの兆

神います白きヌプリの雪ゆるみ
　ニセコの里にさみどり萌ゆる

ニセコなる有島農場跡訪えば
　崇き精神の武雄が顕てり

連詩「記念写真」より（十四行詩三題）

松下壽男

しさくのかなしみ　夜景

あなたのはなした言葉をみつけ
私は思わず立ち止まる
誰とは知らないざわめきに
昨夜の会話がよみがえる

あたりまえの陽だまりの
ありきたりの人群れが
けさは私を驚かす
やがて私の妻となる人

日常の意味するもののの
かなしみをつきとめようと
陰影を

静かに見つめだす
おのれを愛する
おのれがいる

公園

「温かな手は」
ふいに衿をととのえるひと
その衿のやがて
ひらかれるために

こめられた
いくつもの悲しみは
そのたびに
温もりに姿をかえて

「船よ」
目をひらいても
吐息が

灯りをにじませていく
星空の
窓の曇り

私はいままで
秋を知らない
まばゆい光を
見つめたことを知らない

噴水のむこうに
鳩を追う少女
木漏れ陽の下に身をおきながら
私は人と寄り添うことを知らない

おだやかなまなざしで
その瞳の遠く
とらえるものもなにかは

「なつかしいわ」
その人はつかのま
美しく笑う

ハート・トウ・ハート

第二話　オーバーシーズ

松下壽男

♥

「おれたちにとって、自由とは、認められるってことだったのさ、トミー」

エルヴィンは、ベンチの背もたれに身を投げ出してのけ反ると、思いっきり両手を突き上げて背伸びをした。透き通るような青空を飛び交っている、鳩の群れが眩しかった。

「ああ、そうともさ、エルヴィン。ぼくたちは、このストックホルムで認められている。そして今日のレコーディングで、世界中に認められるのさ。アメリカとやらいう国にもね」

トミー・フラナガンは、人さし指でメガネの縁を押し上げると、鉛筆を持ち直して、五線紙に音符の続きを書き連ねた。

二人の目の前には、運河を隔てて淡褐色の国会議事堂がそびえていた。鳩の群れは、その、天辺にラッパを伏せたような尖塔の向こうへと飛び去っていった。

運河沿いの、色とりどりの花壇に縁取られた歩道や、石造りのアーチ橋には、短い夏の日差しを求めるようにして、人々が散策を楽しんでいる。彼らの頬や二の腕は雪のように白く、金色の髪の毛は限りなく淡い。そして向こうまで透けて見えるような青く澄んだ瞳を持つ人々であった。そんな、ガラス細工のような人々の心は、しかし温かかった。彼らは、黒人のエルヴィンらの姿を見つけると、笑顔で手を振ってくるのだ。言葉は全く分からないが、その微笑みには十分に敬意が感じられた。少なくともニューヨークの白人達の冷ややかな、気難しい笑顔ではなかった。寛容で誠実で、手を振ればその心に届くような気分にさせるのだった。

エルヴィンたちが飛行機を乗り継いでストックホルムに着いた翌朝、バンド仲間のボビー・ジャスパーが現

地の新聞を広げて、誇らしげにこう叫んだ。

「おい、みんな、ぼくたちのことをアーティストと呼んでるぜ！」

「ただのバンドメンやミュージシャンじゃないってわけか」

「えらく出世しちまったもんだぜ！」

眠気の漂うホテルのロビーが一度に沸き返った。

その中でも一番嬉しかったのは、当のボビーだったことだろう。

ベルギー生まれの彼は、ヨーロッパのジャズ界の頂点に立ったことのある若者だった。しかし本場で力を試してみようと単身ニューヨークに渡った彼なのであった。

「ねえ、ボビー、前から知りたかったんだが、君はソウル（米語で黒人魂）がほしいというけれど、ソウルってヨーロッパ人にわかるもなのかい。」

エルヴィンは、初めて登るヨーロッパのステージの袖で恐る恐る尋ねたのだった。

「もちろんさ、わかるとも。ジャズは音楽だもの。初めて聞くような音楽にさえ、言うに言われない懐かしさを感じたことが、君にもあるだろう。」

「そうか、わかったよボビー。でも、ソウルは音楽だけじゃあない、音楽にできないようなソウルがいっぱいあるのさ」

「そうだね、エルヴィン。でも、それはどの国の音楽でも同じだろう。だからこう考えることができるんじゃないかな。どの国にも、だれにもソウルがあって、ソウルの数だけ音楽もあるって」

「じゃあヨーロッパのソウルがベートーベンで、アメリカのソウルがジャズっていうわけかい」

「そうさ、エルヴィン。そうとらえることだってできるのさ」

「ボビー、ヨーロッパ人って、なんて素敵な考えの持ち主なんだ。アメリカの白人共は、口ではジャズはアメリカを代表する音楽だと言いながら、心ではジャズは酒場やダンスホールの音楽で、クラシックとは所詮住む所がちがうと考えているんだ。ソウルと言ったって、所詮奴隷根性だと」

「そうだろうな、エルヴィン。アメリカ人は、白人も黒人も、まだまだ人を人以下の存在として差別する奴隷制度の記憶を引きずっている。でもヨーロッパ人は、もう一五〇〇年も昔にそれを忘れてしまっているからな。ヨーロッパから見れば、アメリカは子供のようなものなのさ」

幕が上がると、エルヴィンはその聴衆の数に驚いた。この地では、ジャズとは、大ホールで満員の聴衆を前にして演奏するものだったのだ。そして会場も割れんばかりの拍手に、海を越えて演奏ができる喜びを感じた。彼は、背後からボビーに目をやった。スポットライトの下

の横顔は、目を潤ませ、喜びを噛みしめているようだった。

「そしてわがJ・Jファイブのソウル、ボビー・ジャスパー！」

リーダーのJ・Jジョンソンのメンバー紹介に続いてエルヴィンはひときわ高くドラムを連打したのだった。

「私は、あなたがたの演奏を聴いて、感動しました。ぜひ、サインをください。」

たどたどしい英語で、話しかけてきたのは、ブロンドの髪をポニーテールに結い、若草色の袖無しのワンピースを着た女学生だった。そばかすの微かにしみた頬がまっ赤に染まった。エルヴィンは、ブレザーの内ポケットから万年筆をとり出すと、彼女の差し出したノートの表紙にでかでかとサインを書いた。トミーは、その隅に、譜面を書いていた鉛筆でそっけなく付け加えたが、それが彼一流の照れ隠しだとエルヴィンにはわかっていた。

「なあ、トミー、今、何を考えている？」

「見た通り、今日のレコーディングの曲目さ。エルヴィン、君は？」

「ボビー・ジャスパーのことさ。アメリカ音楽友好使節団の中にボビーがいるってことは、それは大したことじゃないかって」

「いつも人のことばかり考える、君こそ大した奴だと思うよ」

と、眼鏡の奥で、トミー・フラナガンの目が笑った。

♥♡

ヨーロッパの古典的な音楽教育のおかげで複数の楽器を自在に持ち替えることのできるボビーは、ニューヨークの予算の限られたレコーディングには重宝がられた。しかしヨーロッパ時代に比べて微々たる報酬を受け取る度に、

（海の向こうの白人なんかに、ソウルがわかってたまるかい。所詮お前は便利屋さ）

という声が聞えるような気がした。

（そうさ、ぼくはヨーロッパの白人さ。だからこそソウルを学ぶのさ。持っている限りの知識と理論と技術を総動員して）

後でわかったことだが、その報酬は、黒人のジャズメンに比べて決して少ない額ではなかったのだった。

幸い、彼のベルギー銀行の口座にはヨーロッパ時代の蓄えが残っていた。彼は、他のミュージシャンのようにボクサーやタクシードライバーのアルバイトをせずに、音楽に専念することができたのである。

彼の、仲間に対して分け隔てをしない、そして何より演奏に対する真摯な打ち込み方は、ニューヨークのジャズ界にも少しずつ受け入れられていった。

その頃、バンドメンを探していた男がいた。チャーリー・パーカーのようなめくるめくビバップを演奏しようと考えるトロンボニストのJ・Jジョンソンだった。ソウルフルだが鈍重な音色をもつトロンボーンという古風な楽器が、彼の驚異的なテクニックによってモダンジャズのフロントラインに燦然と甦った。

しかしジョンソンの求めていたものは、サウンドだった。

トロンボーンの重々しい響きが軽やかなリズムに乗ってうねるように進んでいく。しかしそれだけでは物足りなかった。その上にさらに蝶のように舞う音や艶やかに歌う音色がどうしてもほしかったのだ。そんなジョンソンの耳に、ボビーのフルートやテナーサックスの、アクを晒したような澄んだ音色が住み着いた。

五十二番街の深夜のクラブで偶然出会った二人は、ステージのジャムセッションに加わった。ジョンソンはボビーとのハーモニーを自らの耳と客席の反応で確かめながら、アドリブの応報を心ゆくまで楽しんだ。二人の楽器からは、これまでアメリカの東にも西海岸にもない、ホットでしかも典雅に響くサウンドを聞き取ることができたのだった。

（そろそろ御仕舞にしようぜ）

ジョンソンが、その大きな瞳で目配せをすると、フルートに持ち替えたボビーは、ラストコーラスのユニゾンをジョンソンのトロンボーンにぴったりと呼吸を合わせて演奏し切った。

すでにジャズ仲間しか残っていないまばらな客席から、拍手が沸き起こった。

「ヨオ、いい音出してるじゃないか」

「お前たちなら、金を払っても惜しかないぞ」

「さあ降りよう、一杯おごるぜ」

ボビーをカウンターへ誘うと、ジョンソンはさっそくバンドの話を切り出した。

「ベースは、ウィルバー・リトルに声を掛けている。まだ、ピアノもドラムスも決まっちゃいないが、リズムセクションは、奴のヘビーなビートでぐいぐい押しまくるのさ。そしておれのトロンボーンが足元からハートを突き上げる。そのハートをめがけて、ボビー、君のテナーがやさしく歌い上げ、フルートで天まで舞い上げようという寸法さ。何もアーシーな土の臭いばかりがソウルじゃないさ。優雅な乗りこそおれたちのソウルじゃないか」

ボビーは深くうなずくと、ジョンソンと固く握手を交わしたのだった。

そのクラブの隅のテーブルにニューヨークに出て来て未だ日が浅い、二人の若者が座っていた。彼らもまたジャムセッションをめあてにやって来たのだが、リズムセクションはたいていクラブの専属が占めていて、なか

なか演奏の機会に恵まれなかった。とはいえ、ニューヨークのジャズメンに少しずつ顔を知られるようになっていた。

除隊したエルヴィンは、故郷に近いデトロイトに住み着いた。昼間は自動車関連の工場で働き、夜はクラブを根城に太鼓の修行に励んだ。お決まりの拍子を離れて自在に繰り出される彼の複合リズムは、まずデトロイトの聴衆の度肝を抜いた。そして尽くし切れない魅力で大方のミュージシャンを虜にした。しかし、彼の演奏に合わせられる者は少なかった。相手の力量に合わせて演奏する日々に物足りなさを感じ始めたエルヴィンだった。

そんなデトロイトでも、思いっきり複合リズムを繰り出すことができる相手が、ピアニストのトミー・フラナガンだった。

「……トミーは、バド・パウエルに夢中さ。もう、バドと同じことはやってのける。でも、兄さん、おれは、トミーに兄さんと同じ持ち味を感じているんだ。トミーのフレーズには、ちょっと切なくなるような、優しさがあるんだよ。それがさりげなく顔を出すんだ。おれがそれを誘うようにして、リズムを変えると、答えるようにきらきらと輝くフレーズが流れ出てくる。そのスリルがたまらないのさ……」

エルヴィンは、ベニー・グッドマン楽団のピアニストとして安定した地位を得ていた長兄のハンクにこんな手紙を書き綴っていた。

「……兄さん、おれもトミーもデトロイトにはうんざりしているんだ。ニューヨークで力を試してみたいんだ。二番目のサド兄さんもニューヨークに出て、ミュージシャン仲間と繋がりができたと言ってきているし、何より今はニューヨークが熱いってみんなが言っているんだ……」

若者の探求心を何者も止めることはできなかった。二人は、時を隔てずしてニューヨークに旅立ったのだった。

デトロイトから出て来た二人のキャッツの噂は、ジョンソンの耳にも入っていた。兄のサドを通して、唯一無二のモダン・トロンボニストがリズムセクションを探していると知ったエルヴィンは、数日前のジャムセッションで耳にしたサウンドを思い出した。

（おれの太鼓なら、もっと演奏を駆り立てることができるだろうし、トミーのピアノならもっと豊かに歌うことができるだろう）

電話をしたのはエルヴィンだったか、それともジョンソンの方だったのかもしれないが、ある午後、貸切りのスタジオで五人が初めて顔を合わせた。それは若いキャッツのためのオーディションだった。強力なビートを繰り出すウィルバーのベースを聴いて、拍子の刻みはこいつに任せられると悟ったエルヴィンは、次々にポリリズムを繰り出した。ジョンソンは一瞬息を呑んだが、やがて心が浮き浮きと弾んできた。

（よおし、おもしろいじゃないか）

彼はエルヴィンの大きなうねりをつかむとそれに乗るようにして次々にアドリブを繰り出した。トミーには、その心の高まりがよくわかった。彼もまたアドリブの道を切り開くようにして次々とリズミカルなコードを送り出した。初めて出会う彼らのやり取りを傍らで聴きながら、ボビーは、どこかバロック音楽の対位法のようだと感じた。不思議な懐かしさを感じたのである。彼もまた待ち切れずにフルートで演奏に加わっていった。それはジャズ・クインテット、J・Jファイブの誕生の瞬間であった。

厚みがあってしかも優雅で、何より乗りのよい若々しいサウンドを持ったJ・Jファイブは、多くの聴衆を魅了していった。

そんな彼らのところにも国務省のアメリカ音楽使節のプロジェクトに乗った演奏旅行の誘いがあったのだった。

アメリカの文化を世界に伝え、世界平和に貢献しようという能書きは実はどうでもよかったのだ。とにかく世界を旅してみたい。兵役を終えてまだ血気盛んな若者の集まりであるJ・Jファイブは、即座にその話に乗ったのだ。一九五七年の夏、彼らの八週間にわたる楽旅は、ヴェルダンディというスウェーデンのプロダクションの企画に乗って、ニューヨークから大西洋上空へと飛び立った。

初めて海を渡る感激でエルヴィンには気遣うことさえできなかったが、大西洋を越えバルト海を越えて、ストックホルムへ向かう機内で、ボビー・ジャスパーの思いは、きっとだれより複雑だったことだろう。

長い楽旅のわずかな中休みを利用して、今は故国ベルギーの家族の元に帰っているボビー。再会したら、心から語り合おうとエルヴィンは思った。

♥♡♥

ベンチに座る二人の前に、鴿色のオープンカーが止まった。

「ヘイ、待たせたな」

それは、真っ黒なサングラスをかけたウィルバー・リトルだった。しかし二人を驚かせたのは、ハンドルを握っている、白い手袋をはめた、純白のツーピースの女性の方だった。サングラスを外した彼女は、うっとりするほど青い瞳を二人に向けると、にっこりと微笑んだ。かしげた小首の赤いスカーフが艶めかしかった。エルヴィンはたまらず口笛を鳴らした。トミーはそれを咎めるようにエルヴィンの脇をつつくと、また楽譜に目を落とし

た。

ツアーでは、さすがにピアノとドラムセットは持ち運ぶことができない。会場に備え付けられた楽器で済ませることになる。楽器に合わせて演奏することも彼らに要求されるテクニックの一つであった。

すると一番大きな荷物を運ぶのがベーシストということになる。移動の度に荷物運びの足を確保することもベースマンの甲斐性なのだ。とはいえ、旅先で美しい金髪娘のオープンカーを足に使える男はざらにはいない。そういう男の得意の手招きに応じて、二人は後部座席に飛び乗った。

ヨーロッパには、クールな連中がいるものだ。ツアーの演奏を聴いて、さっそくJ・Jファイブのリズムセクションに目をつけたのだ。

「あなたがたのバンドの素晴らしさの一つは、リズムセクションにあります。リズムセクションのあなたたちの演奏を、ピアノトリオとして録音し、私共のレーベルで売り出したいのですが」

コンサートの後で楽屋を訪ねてきた、細いネクタイを締め上げたクールカットの青年の口から、思いもかけないレコーディングを持ちかけられて、トミー・フラナガンはいつになく興奮してしまった。実現すれば彼の初めてのリーダーアルバムになるのだ。

「オフの日なら、構わんさ」

側にいた、ジョンソンも認めてくれた。いくらかの報酬が入るのだから、エルヴィンもウィルバーも異存はなかった。それどころか、未だに数少ない録音の機会を、海をいくつも越えてやってきたこの旅先で与えられるなんて。

(おれたちゃ、全くついてるぜ!)

もっとも、ボス抜きのセッションならば、レコード会社間の契約権に支障はないし、ギャラも随分安く済む。マイナーレーベル、即ち零細企業の「メトロノーム」の側でも、それなりのしたたかな計算があってのことだった。

娘の運転は手慣れたもので、速くてしかもしなやかだった。郊外の白樺の林の中に丸太小屋が建っていて、それが目的のスタジオだった。約束の時間は大幅に過ぎていたが、待っていた二人の青年はにこやかに迎えてくれた。スタジオとブースの中には、ミュージシャンの目で見る限り、ニューヨークにも劣らない立派な機材が並んでいた。しかもそれらは、もう十分に暖まっていた。

青年らと娘は、何やら親しげに言葉を交わしていた。どうやらこの国のジャズ・ファンはみなお互いに顔見知りらしい。

エルヴィンはさっそくドラムセットをいじくり始めた。トミーもさっきからピアノを可愛がっている。ウィルバーはといえば、ベースよりも娘に関心があるらし

い。

「さあ、これが今日の曲目だよ」

トミー・フラナガンが、楽譜をピアノの上に広げた。

「リラクシンに、ウィロー。なんだい、ほかは題名もないじゃないか」

「そうさ、ぼくのオリジナルだよ。これまで書きためてきた曲さ。今、さっきまでね」

トミーは、簡単にそれぞれの曲のメロディラインを弾き始めた。二人は、ハミングをしたり、拍子を打ったりしてテンポをつかんだ。

「いかす曲ばかりじゃないか」

「世界を旅している気分になるぜ」

ビ・バップにブルース、ラテンのリズムもあれば、北欧風のスローバラードもあったが、ほとんどが初めて聴く曲だった。

「題名は、後でみんなでつけようぜ。さあ、リラクシンから始めよう」

何ともあっけないリハーサルに、ブースに入っていた青年たちの方が慌てだした。

そそくさと、マイクの最終点検を済ませると、再びブースに引き揚げ、スタジオのスピーカーから指示が出された。

『リラクシン・アット・カマリロ』、テイク・ワン」

トミーのピアノが短いイントロを弾き出すと、すかさずエルヴィンの太鼓が絡んだ。テーマに入る頃にはウィルバーのベースがぐいぐいとアップテンポのリズムを刻んでいた。

(今日のウィルバーは最高だ。ベースの響きに粘りがある。これは全くあの娘のおかげだぜ)

エルヴィンは、両手両足を蛸のように動かしながら、ッエッヘッヘッと笑い出した。三人は、まるで風が吹き抜けるように一曲目を演奏し切った。

ガラス越しに、しきりに拍手を送る二人の青年と娘の姿が見えた。

「ブラボー、サンキュー。再生します」

スタジオのモニタースピーカーから流れる再生音を聞きながら三人は噴き出した。

「エルヴィン、お前は、いつから歌い手になったんだい」

「演奏に唸り声が被っています。テイク・ツーいきますか?」

「いや、けっこう。このまま、このまま」

「乗ってくると、歌い出すのがこいつのくせさ。それがまたへたくそなのさ」

「ソウルフルと言ってくれよ」

三人は笑い合った。スピーカーからも笑い声が漏れ聞こえてきた。緊張がほぐれた。

二曲目は、スローバラードである。初めて聞くその旋

律からは、楽旅の途中に車窓から眺めた、北欧の夏の穏やかな風景が浮かんできた。ピアノのしなやかなメロディに寄り添いながら、エルヴィンは、白樺の林と青く澄んだ湖水の景色が少しずつ北欧女性の顔立ちに姿を変えていくのを感じた。ブースに目をやると、赤いスカーフの娘は両手で頬杖をついて、うっとりとトミーの方を眺めている。小首がゆっくりとかしいでいく。

（トミー、お前は罪な男だぜ。あんな可愛い子を、もの思いにふけらすなんて）

エルヴィンは、突然二倍の速さでスネアドラムを響かせ始めた。トミーは少し慌てたようだが、ダブルタイムにピタリと乗って、しかも流れるようなメロディーラインを崩すことなく演奏を続けた。一段と熱と力がこもってきた。娘は、はっとして我に還ると、その目は、今度は、鍵盤の上を神業のように動き回るトミーの十本の指に釘付けになった。

最後の一コーラスを、再びしっとりと歌い上げると、トミーの指は鍵盤の上で静かに止まった。エルヴィンはワイヤーブラシでシンバルを微かに揺らし、トミーの腕が上がる瞬間を見届けた。スタジオに静寂が広がった。トミーが口を開いた。

「クール。ところでウィルバー、あの娘の名前はなんていうんだい」

「生まれ故郷の土地の名と同じとかで、ダラーナと言うんだ」

スピーカーが響いた。

「ベリーグッド。この曲の題名はなんですか？」

「ダラーナ」

トミーはにこっと笑って答えた。他の二人が、口笛を吹いた。ブースで拍手が起こり、ダラーナの透き通る頬が紅く染まった。

三曲目は、ラテンのカリプソのリズムに乗った、軽快な曲である。エルヴィンはスネアを、タムを、シンバルをこれでもかと、力強く打ち鳴らした。トミーは、太鼓に絡んで陽気な音符をちりばめていたが、やがて腰の据わったメロディーラインをぐいぐいと力強く弾き鳴らした。

（今日のトミーも一味違うぞ）

エルヴィンはわくわくしてきて、うなり声が一層口から漏れるのだった。

「ベリーグッド。題名は？」

トミーは、天井を見上げて得意のちょびヒゲをなでていたが、

「エクリプソ」

「えっ、綴りは？」

「適当に」

他の二人は、噴き出してしまった。

次は、カンサス風の、ちょっとおどけたビー・バップだった。エルヴィンは緩急をつけてドラムを打った。三連符や連打を織り交ぜて複合リズムを繰り出した。その上をトミーのピアノが伸び伸びと駆け抜ける。力強いソロをかけ合いながら、短いテーマを何度もくり返して曲は渦巻くように高みに上り、やがて全てを静めるようにして短いベースラインが曲を締め括った。

「久しぶりに叩ききったぜ」

「じゃあ、この曲の題名は『ビーツ・アップ』で行こう」

五曲目の二分余りのブルースに、ソウル・ブラザーズという題名を提案したのはエルヴィンだった。

「いや、『スコール・ブラザーズ』さ」

ウィルバーが混ぜっ返すと、三人は大笑いをした。

ストックホルムのジャズクラブのメンバーが開いてくれた心尽くしの歓迎パーティーで、彼らは、大杯になみなみと注いだ酒を回し飲みする、スコールという友情の乾杯の儀式に出くわした。酒の呑めない内気なトミーは、断わることもできなくて、とうとう酔い倒れてしまったのだ。その出来事以来、ジャズクラブとJ・Jファイブは深い友情で結ばれたのだが、トミーはスコールと聞くといつの間にか姿をくらますのだった。

「次の曲は、ウィルバー、君のために書いたのさ。まずベースソロから始めて、三人がそれぞれ思い思いにポリリズムを繰り出すのさ。それが長い長いイントロなんだ。そして、四小節交換をして、テーマを弾いて、ウィルバー、また君のエンディングで終わるのさ」

初めて、打合せらしい打ち合わせをしたかと思うと、彼らは、さっそく録音に取りかかった。

粘っこいウォーキングベースに、ポツリポツリとピアノが絡み始める。それら二つの音を撫でるようにして今度はエルビンのブラッシュがくすんだ音を響かせ始める。音色が重なったかと思うと次にはベースが、あるいはドラムスが、ちがったリズムを奏でていく。この曲では一貫性を保っているのはむしろトミーのピアノだった。全体を束ねるためにもピアノの音色は力強く弾まなくてはならない。演奏は未曾有の緊張感を孕み始めた。これまでは意識しなかった音と音の間に漂う引力や斥力が手に取るように見えてきたのだ。このただならぬ展開に三人は興奮を覚えた。形通りの四小節交換を迎えて、彼らはむしろほっとした。そしてやっと落ち着いたテーマを奏でながら、その長いイントロが、エルヴィンには、新しい時代のジャズの激動の兆しのように感じられたのだった。

「今のは？」

と、スピーカーが尋ねてきた。ブースでは、その演奏を評価しかねているのだろう。リハーサルか、あるいは途中で切り上げた演奏かもしれないと。

「ウィルバー、君が名付けてやってくれ」

トミーに促されて、ウィルバーがこう答えた。
「リトル・ロック」
「諒解」
七曲目も、北欧の香りのする曲調だったが、ダラーナとは打って変わって急速調だった。赤ら顔で毛むくじゃらの男共の祭りの夜の踊りのように、ひたすら駆け抜ける一曲だった。エルヴィンが最速のリズムを叩き出すと、ウィルバーが、これでもかと小刻みに弦をはじき続ける。それに乗って伝説のドラゴンのように翔け巡るトミーの即興演奏は、まるでバド・パウエルを見るようだった。
(トミー、諦めていた夢が叶った気がするぜ。)
絶好調のバドに合わせてみたいというのがエルヴィンの夢であったが、麻薬のせいでぼろぼろになった近ごろのバドには、もはやかっての面影はなく、再起の夢も断たれていたのだ。
「こりゃあ、バイキングの祭りじゃないか」
ウィルバーの指摘に、トミーは、ほくそ笑んだ。
「バイキングとくりゃ、例の親父しかないだろう」
それは、彼らの楽旅のプロモーターであるヴェルダンディのことであった。大柄で不器用なその男は、実に精力的に動き回り、旅の先々で出くわすあらゆる障害に対して、一度は必ず大声で怒鳴り散らすのだった。言葉のわからない彼らにとって、それは実に楽しいショウであった。頭に角のついた兜を着けていないことが残念に思えてくるほどなのであった。とはいえ気さくなその男は、彼らの希望を叶えようとなにかと力を尽くしてくれるので、誠に頼れる存在だった。彼らは感謝を込めて、その曲を「ヴェルダンディ」と名付けた。
「最後は『ウィロー・ウィープス・フォー・ミー』か。トミー、お前は柳と一緒に思いっきり泣くつもりだろう。せいぜいつきあうぜ」
「エルヴィン、おれの見せ場もつくってくれよ」
そんなやり取りがあって、ゆっくりと曲が始まった。トミーはこの古いスタンダードを、情感たっぷりに一通り通り歌い上げると、感極まったというように高々と変奏し始めた。その気分の高まりに合わせてエルヴィンの太鼓がテンポを自在に操りながらぴったりとピアノに寄り添っていく。その情感を受け継いで、それまでオフビートを刻んでいたウィルバーのベースまでも、ソロで男泣きに泣くのであった。そして締めくくりのトミーのピアノに込められた大地の匂いは、まさに彼らのソウルだった。アメリカ黒人のジャズであった。
「始まりは遅かったけれど、録り直しも少なかったので、スタジオの使用時間が余っています。それに、アルバムには、もう一曲納めることができそうですが、録りますか」
メトロノーム・レーベルのオーナー兼プロデューサーで、今日は録音技師の下働きをしている青年が、ブースから出てきて、トミーにこう伝えた。
「トミー、おれは、ぜひ入れたい曲があるんだ」
エルヴィンは、メロディーを口ずさんだ。
「それは、エリントン楽団の『チェルシー・ブリッジ』だね」
トミーがピアノをつま弾いた。
「いい曲だ。それで行ってみよう」
と、ウィルバーがうなずいた。
青年がブースに戻ると間もなくスピーカーから指示が流れた。
「チェルシー・ブリッジ、テイク・ワン」
それは、運河を眺めていたエルヴィンの心にずっと響いていた旋律だった。以前からそのメロディーには、未だ見たこともない、ヨーロッパの伝統とふところの深さを感じて、妙に懐かしくなるのだった。そのヨーロッパとは、今思えばボビー・ジャスパーの人柄を通して感じ取っていたものかもしれない。そしてそれは今確かにそこで演奏しているヨーロッパそのものの印象でもあった。エルヴィンは、ボビーのことを考えた。
(おれたちが、ここでこうして、ジャズのレコードを作ろうというのも、君らが、ヨーロッパのソウルを耕して、ジャズを根づかせておいてくれたおかげさ。そうだろう、ボビー。おれは君のためにこの曲のドラムを叩くのさ)
「ベリー・グッド、この曲はどこに挟みますか」
「同じスローバラードだから、二曲めのダラーナと入れ替えよう。そしてダラーナは、『ウィロー・ウィープス・フォー・ミー(柳よ泣いておくれ)』の前へ。」
「諒解。お疲れさま」
やがて青年たちは、カーテンを開き、二重になった窓を開け放ち始めた。スタジオに立ちこめていた熱気は爽やかな風に冷やされていった。ダラーナがコーラの瓶を一人ひとりに手渡した。
「素晴らしいレコーディングでした。感動というより、率直に言ってショックです。私たちからみると難度Cを超えた演奏の、オーバーシーズの連続でした。本当にありがとう」
自らもベースを弾くという、若いオーナーに、トミーはこう答えた。
「そう、オーバーシーズさ。海をいくつも越えてこの国にやってきた甲斐があったよ。こんな素晴らしい録音の機会に恵まれるとはね。お礼を言うのはこちらの方さ」
「ところで、アルバムのタイトルは?」
「もちろん、『オーバーシーズ』で決まり、だろう?」
三人のアーティストとベースを乗せたオープンカーは、ダラーナの運転で、いつまでも暮れることのない薄

暮の道を、市街に向かって走っていた。カーラジオから、偶然にも、J・Jファイブのライブ録音が流れだした。

（そうさ、おれたちは認められている）

三人は、口に出しはしなかったが、快い疲れと満足感に浸っていた。

やがてストックホルムの中心部に入った車は、定宿の石造りのホテルの前に止まった。エルヴィンとトミーが車を降りた。

「すまないが、こいつを部屋に運んでおいてくれないか。おれたち二人に、ベースは邪魔なのさ」

ウィルバーは、ダラーナの肩に手を回して片目をつぶった。彼女は、潤みを含んだ青い瞳をトミーに向けると、少しだけ首をかしげた。エルヴィンは、トミーの返事を待った。

「オーケー、ウィルバー」

エルヴィンが、人の背丈ほどもある大きな黒いケースを後部座席から引きずり出すと、鴇色の車は軽やかな排気音を残して薄暮の中に消えていった。

「いいのかい、トミー。彼女はお前のピアノにめろめろだったぜ。お前もまんざらでもないんだろう」

「いいんだよ、エルヴィン。今日のレコーディングの成功は、全くウィルバーと君のおかげさ。本当にありがとう。今夜は、疲れたから、部屋で寝るさ。君はどうする」

「トミー、おれも付き合うぜ」

♥♡♥♡

海を越えて、演奏旅行をしているのは彼らばかりではなかった。ひょっとすると今ごろニューヨークのジャズクラブのステージは閑散としているかもしれない。

第二次世界大戦後、世界各地に駐留したアメリカ軍の兵士の多くは黒人だった。彼らの中にはジャズメンがいたし、兵士を慰問するために多くのミュージシャンが海を渡った。ジャズはアメリカ軍と共に世界に広がった。そしてジャズは国々の若者のソウルを耕していったのだった。アメリカの音楽ジャズは、世界の音楽になりつつあった。

平和な時代になって、駐留軍を引き上げることになると、慰問団を送り込んでいた興業屋が音を上げ始めた。彼らは、シンジケートの力を借りて政府に圧力をかけた。それは軍事産業から平和産業へと構造改革を迫られていた当時の経済界の動きと軌を一にしたものであった。

すでに軍事的にも経済的にも西側諸国の覇者となったアメリカは、次は文化の主導権を握ろうと考えていた。それは東側諸国の覇者であるソ連への牽制としても有効であった。

しかしソ連には、ドストエフスキーが、トルストイが、ムソルグスキーが、チャイコフスキーが、ボリショイバレエ団が、レニングラード交響楽団が存在した。科学と技術では負けはしないアメリカも、文化ではソ連に太刀打ちができなかった。それは若い国の宿命であった。しかしイギリスやフランス、ましてやドイツに譲ることはできなかった。ソ連と対抗するためには、アメリカはあらゆる面で西側の覇者でなくてはならなかったのである。

そんな立場に立たされていたアメリカ国務省にとって、シンジケートの圧力は魚心に水心であった。彼らは、アメリカ文化の象徴であるジャズを世界に広めるために音楽友好使節団のキャンペーンを立ち上げた。国内を回るのと同じ気軽さで海外演奏旅行ができるようにミュージシャンらにあらゆる便宜を図ったのだ。表向きは各々の興業屋の独自の営業行為であったが、背後では様々な公私の組織が蠢いていた。ツアー先に北欧や東欧諸国の小都市が頻繁に選ばれたのも、実は訳ありだろう。そこは正に東西の文化衝突の最前線であったのだ。

ジャズメンの海外旅行に関しては、国務省には一つの大きな悩みがあった。それは彼らとは切っても切れない麻薬の問題であった。いうまでもなく麻薬は世界共通の敵である。だから、もしアメリカのジャズメンが海外で麻薬不法所持で逮捕されることがあれば、文化国家アメリカの威信は一遍で崩れ去る。しかし麻薬の匂いのしない一流ジャズメンがいったい何人いるというのか。それが基地の外に出ることのない治外法権に守られた慰問団の頃には表面化してこなかった大きな問題であった。

「で、エルヴィン、国務省はどうやってその問題を解決したと思うかね」

三つ揃えをきちんと着こなした、ムーチと呼ばれる小柄なその男は、眉を上げてエルヴィンに答えを促した。エルヴィンは、その目に、獲物を狙う蛇のような薄気味悪さを感じた。

「当然、厳しく検査をするんだろうよ」

「いやいや、君はまだまだ青いぜ。ノーマン・グランツは、JATPの大軍を率いてヨーロッパツアーの真っ最中だが、奴らは麻薬なしではいられないジャンキーの集団さ。なのに堂々とツアーを組んでいる。どうしてだと思う。実は、ここだけの話だが、国務省は世界的な麻薬シンジケートと手を組んだのさ。ツアーの先々で確実に麻薬が手に入れば、ミュージシャンは麻薬を持ち歩く必要はない。出入国の検査で引っ掛かる心配もないって訳さ。売人がブツを渡すのは、行く先々のトイレの中とくりや、ばれようがないだろう。おかげで大御所も喜んでいたよ。海外ツアーに出れば、ブツにこと欠くことはない。まさにこの世の天国だってさ。ヘッヘッ」

「まさか、全部口から出まかせだろう」

「こうして、シンジケートの人間が腹を割って話してるんだぜ。この体制をつくるまでにはヨーロッパでも苦労したそうだ。シチリアでは、仏がいくつも海に浮いたって言うぜ。お前さんも、じきに身をもってわかることさ。ヘッヘッ」

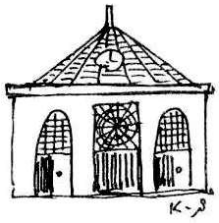
ムーチは、ホテルのロビーの椅子から杖を頼りに立ち上がると、足を引きずりながら去っていった。それを見送りながら、エルヴィンは背筋が凍りつく思いがした。

ニューヨークでは、ムーチの噂はよく耳にした。

あの聡明で偉大なチャーリー・パーカーに取りついて、稼ぎを全部吸い取り、廃人同様にしたのもムーチだったという。パーカーが二年前に死んでからは、有望な新人を見つけ出しては、一流のジャンキーのミュージシャンに仕立て上げているという。だから新人の間ではムーチに声を掛けられることがステイタスにさえなっていたのだ。

そんなムーチにストックホルムで声を掛けられるなんて思ってもみなかったのである。彼の話もあながち口から出任せとは言えないかもしれない。

「……ハンク兄さん。今日、ムーチがおれにすり寄ってきたんだぜ。薄気味悪い男だけど今まで知らなかったいろんな情報が手に入ったよ。ジャズの世界は思ってたよりずっと奥が深そうだ。ヨーロッパに来てそれがわかるなんて、面白いと思わないかい、兄さん。大丈夫、おれは麻薬はやらないよ。……」



（司馬雑感　四）

九十九里浜で泣いた司馬遼太郎

山田嘉久

（一）膨大な作品群

国民的作家といわれた司馬遼太郎は生涯七十二年の間に膨大な作品を書いたが、その集大成というべき「司馬遼太郎全集」（文芸春秋版）は実に全巻で六十八巻を数える。長編だけで単行本百七十五冊に相当するという。

おそらく個人全集としてはわが国出版史上、最長最大の規模であろう。

その全集も前後三期に分けて刊行されている。第一期三十二巻は昭和四十六年から四十九年にかけてである。

昭和三十五年に「梟の城」で直木賞を得て忍者作家、伝奇作家としてスタート（このことはかならずしも彼の意に沿ったものではなかったが）した司馬だが、昭和四十年前後には出世作「竜馬がゆく」を始め同時に一〇本近い連載物を抱える当代随一の売れっ子振りを示す。当時の高度成長期の世相と司馬の作風がうまくフィットした結果だった。

しかし四十年台にはいると「殉死」「故郷忘じがたく候」などの問題作を発表して単なる流行作家ではなく世の知識層にまで注目される歴史小説作家に成長していく。その頂点が代表作「坂の上の雲」だろうが、この長編小説の完結が昭和四十八年。丁度、「全集」第一期の刊行期に当たる。

したがって第一期分は司馬の最も脂の乗り切った時期だが、「全集」が計画された頃は彼はまだ四十歳半ば。「私はまだ全集を出すほどの大作家ではない」とその刊行に躊躇したようだが、それから約一〇年後の第二期十八巻刊行時（昭和五十八年―五十九年）には既にそれまでに「翔ぶがごとく」「空海の風景」「菜の花の沖」など次々と話題作をものにした司馬は大作家どころか、いつの間にか戦前の吉川英治と並んで戦後の国民的作家と称されるほどになっていた。

そして第三期十八巻は彼の死後の平成十二年に完結されるのだが、彼は昭和六十二年に「韃靼疾風録」を最後に実質、小説家の筆を折っているので、この三期分には小説は二編しかなく殆どが「街道をゆく」などの紀行文、「この国のかたち」などの随筆、評論で占めている。

したがって「平成時代の司馬遼太郎」は小説家というより文明評論家としての色合いが濃い。

（二）「関東」を書かなかった司馬遼太郎

このように膨大な作品を遺した司馬だが、意外なことに彼の作品中から「関東」（特に私の故郷千葉県）に係わる事件や人物を引き出そうとすると、これが簡単なようで簡単ではない。

理由は簡単で司馬遼太郎という作家が「大阪で生まれ大阪で生活し、そして大阪で死んでいった」生粋の関西人だからである。

人間は生まれ故郷や生活の場所がどうしても思考の中心になるようで、あの大作家にしてもこの傾向から免れることはできなかったようである。

このようなことを指摘する評論家は殆どいないが、私は一愛読者として実感として常に持っている。「歴史の後進地」生まれの僻みとでもいえようか。

実例を一、二取り上げよう。

大阪に十八世紀始めに活躍した山片蟠桃という思想家がいる。といっても大阪人を除いてはあまり知られていない人物ではなかろうか。私も司馬作品によって始めて知ったが、司馬はこの人物に大層ご執心で、あと一〇年司馬が存命ならば多分、蟠桃を主人公した小説を書いたであろうと思われるほどの熱の入れようであった。

そのため司馬の発案で現在、大阪市には「山片蟠桃賞」という賞が設けられD・キーンなどが受賞している。（当初は「井原西鶴賞」設立が有力であったがこれには司馬が反対したという経緯がある。）

この蟠桃の経歴が変わっていて、本業は大阪枡屋という米穀商（実態は金貸し業）の番頭（ペンネームもこれに由来する）。「夢の代」なる著書で一種の無神論を展開、やんわりと当時の封建制を批判した。隠居後はその財政手腕を買われて仙台藩の財政再建を手助けもした。

私はこの経歴を知ったとき、すぐに彼と似たような経歴の郷土の偉人―伊能忠敬を連想した。忠敬も下総佐原の商家の旦那で隠居後にあの大事業を成し遂げた。忠敬も蟠桃もほぼ同じ時代の人物だが、知名度からいえば忠敬の方が数等上だろう。

しかしあれだけ蟠桃には熱心な司馬だが、忠敬についてはあまり書いていない。長編「菜の花の沖」で主人公高田屋嘉平衛と東蝦夷での出会いに登場するほか、「街道をゆく（北海道の諸道）」の中で間宮林蔵との関連でわずかに触れているに過ぎない。

忠敬については井上ひさし著「四千万歩の男」があるが私は司馬にこそ忠敬について書いてほしかった。忠敬と同様に「街道をゆく」で全国を歩いた司馬が書いたらすばらしい作品が生まれただろうと思うからである。

また千葉県の代表的な歴史上の人物といえば日蓮だろうが、彼については司馬は全くといっていいくらいに書いていない。佐渡島は日蓮が流罪されたゆかりの地だが「街道をゆく」（佐渡のみち）では同じ佐渡に配流された順徳天皇や世阿弥については語りながら日蓮については全く触れていなのはどうしてであろうか。

鎌倉も日蓮にとっては縁が深く、安房から鎌倉に来た日蓮が道行く人に法華経の教えを説いたという「日蓮上人辻説法跡」や、「立正安国論」を唱えて幕府に捕えられた日蓮が滝の口刑場に連行される途中、松ノ木に自分の袈裟を掛けたという「日蓮袈裟掛の松跡」などの史跡が残っているが、その鎌倉を書いた「三浦半島記」ではこれらのことは一切書かれていない。

座談などで日蓮に話が及ぶと「私は日蓮のことは殆ど知らない」と逃げてしまっているほどである。（「東と西」ライシャワーとの対談で）

人一倍、宗教に関心を持ち若い頃、京都で宗教と大学担当の新聞記者だっただけに並みの宗教学者では到底太刀打ちできない造詣の深さを持っていた司馬にしては不思議でさえある。

余談だが西本願寺には若い頃の司馬が仕事の合間に横になって読書をしていたという長椅子がある。多分、後年の名著「空海の風景」の構想もここから生まれたのではなかろうか。その著では空海や最澄を存分に語っているし、その他の著作でも道元、一遍、法然や親鸞、蓮如などについては詳細に書いているが日蓮については例外のようである。

（司馬が特定な宗教に帰依していたということはなさそうで司馬自身も常に宗教については中立を貫いていた。その証拠に彼の死後、墓所を何処にしようか遺族は迷ったようだが結局、彼の祖父が播州地方で熱心な門徒宗であったことから彼の墓は京都の大谷廟堂にある。）

前記ライシャワーとの対談でも「私は、関東に対して劣等感がありましてね。どうも関西というのは低くて関東は高い、と思う」とも発言しているのはどうも私には逆説的に聞こえるのだ。

戦国初期の房総半島は小田原北条氏と安房里見氏との縄張り争いの戦場となったが、司馬の長編「箱根の坂」はその小田原北条氏の祖早雲を主人公としている。しかしこの小説はほとんどが早雲の若い頃―伊勢新九郎の物語であり、肝心の（箱根の坂）を超えて小田原に居を構えた早雲については驚くほど少ししか書いていない。ましてや房総を含めた関東一円の覇者となった早雲については全く触れていないのだ。

「早雲がようやく箱根の坂を越えてあずまに入ったときには、書いている作者自身まで足腰の痛みをおぼえた。」（「あとがき」より）

で終わってしまっている。

（尤も「功なり名を遂げた」戦国武将の晩年には全く興味を示さないのが司馬作品の魅力だが。たとえば「新史太閤記」では秀吉が全国制覇の前、大阪城で家康を謁見する場面で終わっている。また家康の一生を描いた評伝的小説「覇王の家」も同じ（小牧長久手の戦い）までで、その晩年は軽く触れるのみである。）

「関西に厚く関東に薄い」司馬の傾向は彼の後半生のライフワーク「街道をゆく」に特に顕著である。

昭和四十六年から彼の亡くなる平成八年まで実に四半世紀にわたって書かれたこのシリーズは四十三巻、歩いた街道の数は海外を含めて七十二街道に及ぶが、その過半数は関西以西の西日本が占めている。

関東にいたっては東京三篇、神奈川二編のみで他の県（千葉、埼玉、茨城、群馬、栃木）は全く登場しない。いわば「街道をゆく」シリーズの「空白の地区」となっている。

「空白の地域」は関東地区を除けば静岡県があるくらいで全国でも珍しい。

辺境の地沖縄や北海道にまで足を延ばしているのにも関わらずである。また東北は関東と違って司馬にとっては関心があるらしく「北のまほろば」をはじめ東北六県はくまなく歩いている。

なぜ「関東」を司馬は書かなかったのだろうか。

関八州では幕府直轄地が多く（上総、上野に至っては平安時代から皇室直轄地だった）そのため有力な藩が存在せず、独自の「藩文化」が育たなかったことが司馬の興味を惹かなかったことに由来するのではなかろうか。

徳川幕藩体制というのは、たとえば帝政ロシアのような専制体制ではなかった。将軍家は全国諸大名の同意の上での単なる「盟主」に過ぎなかったために、幕藩体制下でも各藩は「半独立国」としての意味合いが濃かった。そのため各藩独自の「藩風」を築き上げていた。加賀、伊達、薩摩、長州などの大藩は申すに及ばず司馬の最も愛した宇和島藩のような小藩でも独自の文化の高さを持っていた。それが関八州では全く持ち合わせていなかったからであろう。

（三）「房総の海」

そのため我が故郷千葉県（上総、下総、安房）も「街道をゆく」には全く登場しない。ただ彼が亡くなる前年に書かれた「三浦半島記」のなかに「房総の海」なる一章があるがこれが、唯一千葉県について書かれた文章であろう。

しかしこれとて司馬が直接千葉県を訪ねて書かれたものではない。東京湾を挟んだ三浦半島の地からの発信である。

このころ司馬は横浜のホテルに泊まって毎日、「勤め人のように」三浦半島に日参していたらしい。そして鎌倉の鶴岡八幡宮では源頼朝や西行法師のことを思っていた。

司馬は真の日本歴史は源頼朝の鎌倉幕府から始まったと考えている。

したがってたとえばそれ以前の「源氏物語」の時代などは（庶民の顔が全く見えないので）「あれは外国だとおもっているところが自分にはある。」（八人との対話）となる。

「三浦半島記」でも「鎌倉幕府がもし作られなければ、その後の日本史は、二流の歴史だったろう。」と書いている。また「（頼朝が出ずに）公家政治が続いていたら、十九世紀に入って植民地になっていたかもしれない」とまで話している。（「鎌倉武士と一所懸命」永井路子との対談）

「一所懸命」という言葉が今も残っているように、自分の耕した土地は「懸命」すなわち命を懸けて守るという、丁度西部劇に出てくるカウボーイのような関東武士（坂東武者）の出現した頼朝の時代を司馬は好んだことになる。

司馬はよく次のようなことを書いたり言ったりしていた。日本人の多くはキリスト教徒のような一神教徒でないので日本人共通のバックボーンを見つけることは困難だが、強いて求めるとすると関東武士から始まった「名こそ惜しけれ」の精神ではないか。誰かが見ていようがいまいが、そんなことをしたら恥になる「名こそ惜しけれ」という倫理観に裏打ちされたリアリズムの精神が、その後の日本人の形成に大きな役割を果たしたというのだ。いわゆる「恥を知る文化」が武士に限らず農民、商人に至るまで日本人共通のバックボーンではないかと。

そんな頼朝の時代を書こうとするとどうしても頼朝にとって因縁の深い房総の地を外すことはできなくなる。それがこの本の一章「房総の海」である。

頼朝の挙兵を支えた関東武士団が伊豆半島と三浦半島と房総半島の三つの半島の勢力によって成り立っていることに注目している司馬だが、それでいて房総半島には一歩も足を印していないのだ。

平治の乱（一一五九）での敗北後、平家によって伊豆に流された源頼朝は治承四年（一一八〇）、伊豆で平家打倒の挙兵をするが、相模国石橋山の戦いに敗れて、安房国竜島（現千葉県鋸南町）に上陸する。

このとき真っ先に馳せ参じたのがこの地の豪族安西氏であった。いまでもこの地に安西姓が多いが、安西とは安房西を縮めた苗字であると司馬は記している。

反対に東方（現長狭郡）の豪族長狭氏は反抗したため頼朝は一時、太平洋上の仁右衛門島（現鴨川市）に避難した。

その後、頼朝は房総半島を北上、下総国府（現市川市）に達したときに房総第二の豪族千葉介常胤が三百騎を率いて参陣した。

頼朝はその父義朝が部下のだまし討ちにあって殺されたこともあって、生来極めて猜疑心の強い将だったようだが、この常胤にたいしては例外であったらしく生涯、実父のごとく接したという。部下には常に「常胤を見習え」が口癖だった。

「相模国鎌倉にいでしめたまうべし」（吾妻鏡）と常胤は頼朝にいち早く鎌倉入りを薦めたし、またその後鎌倉から京入りを急ぐ頼朝を押しとどめ木曽義仲の二の舞になるのを防いだのも常胤だった。

鎌倉幕府成立の第一の功労者は千葉常胤といっていい。

この功により千葉氏は房総の地ばかりでなく遠く九州や東北の地にその領地を拡げた。（幕末の剣豪千葉周作が常胤の子孫であることは前作「周作と一堂」で記したとおり。また例えば郡上八幡城初代城主東常縁は千葉一族の出である。「源頼朝に旗揚げをすすめた人物に東胤頼というものがいて、頼朝は成功してのちもその功をわすれず、重く賞した」と司馬も「郡上、白川街道」で書いている。）

常胤と全く逆の立場に立たされたのが房総第一の豪族上総介広常であった。

常胤と広常はまた従兄弟の関係にある。両者の家系を遡れば遠く桓武天皇―即ち桓武平家の名門であり、有名な平将門もこの一族から出た。

上総介広常は千葉介常胤に遅れること二日、二万騎の大軍をもって頼朝のもとに参じた。てっきり頼朝は狂喜してくれるだろうとの広常の思惑ははずれ、初印象はあまりよくなかった。

後に頼朝を迎えるに広常は下馬せずに超然と馬上にあった非礼などもあって、遂には頼朝によって暗殺されてしまった。この辺の事情は長編小説「義経」にも詳しい。

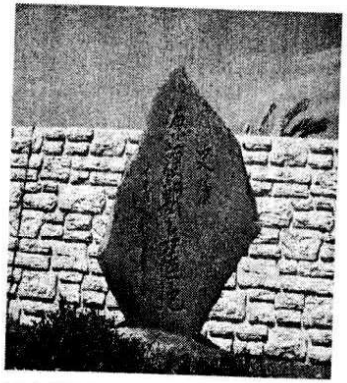
（なお、本件とは関係ないが、司馬は義経を日本において最初に誕生したスターだと捉えている。それゆえ「義経はそれだけの人物であって、それ以上の人物ではなかった」との評価になる。

確かに戦術家としては数百年に一人出るか出ないかの稀有の天才でこの点ではアレキサンダー大王やナポレオンに匹敵するが、惜しむらくは彼等に備えていた政治性を全く持ち合わせない政治オンチだった。そのため関東武士団の積年の思いを一身に担って日本歴史を大きく動かした頼朝を最後まで理解できず、またその能力もなかったというのが司馬の義経観である。

このような自分の史観に忠実に描いた「義経」は結果として「判官ひいき」の多くの日本人を失望させることになったと司馬自身が語っている（手掘り日本史）のは興味深い。）

（四）司馬の歩かなかった「頼朝のみち」

司馬が書いた「房総の海」は「吾妻鏡」や「源平闘諍録」（平家物語諸本のうち関東武士団―特に千葉氏の記述が多い）によるものと思われるが、もし司馬が実際に房総の地に足を運んでいたならばこれらの史実のほか房総一帯に広がる「頼朝伝説」をどう感じただろうか。



源頼朝上陸の地（千葉県史跡）
（現安房郡鋸南町）

それほどこの地には頼朝にまつわる伝説、伝承が多い。

たしかに徹底したリアリストだった司馬からみれば伝説の類は取るに足らぬものかもしれないが、一方伝説には史実にはないロマンが感じられる。そんな思いで陽春の一日、司馬の歩かなかった「頼朝のみち」を伝説を含めて探ってみた。

まず頼朝が始めて房州に上陸した（鋸南町竜島）からスタートした。

吾妻鏡では「扁舟に棹さし安房の国平北郡猟島に着かしめ給う」とある。今、この海岸には「源頼朝上陸の地」の碑が建っている（県史跡）。好天気だったので東京湾を挟んで遥か向こうに頼朝挙兵の舞台となった三浦半島から伊豆半島を望むことが出来た。

ついで関東三大不動の一つ大山不動へ。急な石段を息切らして登るが、此処は安房に上陸した頼朝がいち早く援軍参陣を祈願したところ。上陸当初、数十騎に過ぎなかった頼朝勢が一ヶ月余後の鎌倉入りの時には実に六万騎に達したというから霊験あらたかだったのだろう。

部下も少なく領国もなかった流人頼朝にとって頼るのは神仏のみだったのだろうか、房総至る所で頼朝は戦勝祈願をしている。

安房の東海岸にある天津神明神社もそうだし、上総の飯富神社（袖ヶ浦町）、姉ヶ崎神社、下総の葛飾八幡（市

川市）など。いずれも天下平定後、必ず報恩しているのも頼朝らしい。天津神明神社ではその後、彼が伊勢より神霊を勧請したので「房総伊勢の宮」となり、葛飾八幡では千葉常胤に命じて修復を行っている。また姉ヶ崎神社では頼朝ゆかりの鏑馬の神事が今でも続いている。

安房浪切不動の奥にある「駒穴」は完全な伝説だろう。名馬「太夫黒」が発見されたという洞窟の名だがよほどの物好きでないとこんな所は訪れないかもしれない。全く整備されていない凸凹の小道でしかも真っ暗なトンネルを二つ越えたところにそれらしい洞窟がある。この馬は義経の名馬として知られ、のち屋島の合戦で義経の身代わりとなって戦死した佐藤継信の菩提を弔うために寺に寄進され、現在屋島にはこの太夫黒の墓が実在しているという。また一方では頼朝の所有していた名馬「擦墨」の別名だという説もあることから見ると伝説の域をでない。

しかし近くには字名として「名馬」あるいは「名馬橋」という橋名が残っている。

安房の東海岸、太平洋上に浮かぶ小島、仁右衛門島を久しぶりに訪れた。

この島を訪れるのは実に五十数年ぶり。終戦数年後、大学に入学した折、たまたま当時の三十六代島主が同じ大学のOBであることから自宅を開放して新入生歓迎会を開いてくれた。その自宅は江戸中期（一七〇四年）に建て直したものと聞いていたが、南天の床縁や桑の天井は今も変わらなかった。

この島は前述の通り頼朝が暫く関東平氏軍から身を隠した島として知られる。このとき頼朝を匿った平野一族は後に頼朝からこの島一帯の漁業権を与えられ、今に至るまで代々平野仁右衛門がこの島を守っている。房総半島から指呼の間にあるこの島に渡るには一三五〇円が必要。渡し舟のみならずたとえ独力で泳いで渡っても必要というのは如何にも個人所有の島らしい。

問題の「頼朝の隠れ穴」には正一位稲荷大明神が祀られていた。

鴨川市内にある「一戦場公園」―頼朝が安房に上陸した頃、安房は安西、東条、丸、神余、長狭の五豪族によって支配されていたが唯一、頼朝に反乱したのが長狭氏であった。その長狭氏が頼朝と戦って敗れた場所。いまでは市民の憩いの公園となっている。

次いで同じ鴨川市内の「頼朝公旗掛松」を見る。頼朝が安房から上総に兵を進めるため、東条広場（現鴨川市広場）の松崎に至り、傍らの松に源氏の白旗を掲げて前記上総介広常を待ったところから、この名があるといわれている。この松はその後、天保の早魃で枯れたので松のあった場所に石碑を建てた。石碑の側面に「頼朝公旗掛松」、裏面に「文久二年秋九月これを建てる」と刻まれている。

安房から上総に入った頼朝は立野の長右衛門宅に数日、滞在して上総国府の情勢の把握や軍勢の増強を図った。そして長右衛門宅を発つとき、同家の竹林から竹を切らせて旗竿の取替えを命じたことから、後年長右衛門に「切替」の姓を与えたと伝えられている。同家には今でも滞在中の頼朝が使用したといわれる茶釜がある。

下総の千葉市内にも頼朝伝説が多い。

たとえば「幕張」（現千葉市）の地名は北上する頼朝が陣幕を張って休んだことに由来するともいわれているし、さらに「馬加（まくわり）」の地名はそのときに不足する馬をくわえたからとも伝えられている。

同じ千葉市内にある「君待橋」は千葉一族が頼朝を迎えた橋、（このとき頼朝がこの橋の名を尋ねると六男東胤頼が「見えかくれ八重の潮路を待つ橋や渡りもあえず帰る舟人」と読んだという。その碑がある。）また現在、千葉城址の近くの「お茶ノ水」は常胤が頼朝にお茶を点ててもてなした故事による。（厳密には当時はまだお茶は存在しないので清浄な水だったであろうが、それが後にお茶に変じたのであろう。）

旧千葉海岸にある「白幡（旗）神社」も鴨川の「旗掛松」と同様、源氏の白旗を掲げて源氏再興を祈願したことにその名がある。

更に「九十九里」の由来も頼朝がたまたま九十九里浜にさしかかった際、六町を一里に数えて浜に矢をさし、飯岡まで着いたとき九十九本目で浜が尽きたという伝説から生まれた。そのため九十九里には各地にその証として「矢指神社」が点在している。

下総鷺沼（現習志野市）―吾妻鏡に「鷺沼の旅館に屯す」とある。このとき石橋山の戦いの時、分散した家臣らが頼朝が鷺沼の旅館にいることを知り馳せ参じてきたというくだりである。

このように房総の各地には頼朝にまつわる伝説が夥しく多い。

しかし「房総の海」では司馬は「頼朝は、房総半島を、船で北上したかのようである。そのほうが、陸路をゆくより安全だったかと思える」と書いている。

もしこれが史実であるとすると安房はともかく上総、下総各地に残る「頼朝伝説」は殆ど根拠を失うことになるが、しかしやはり房総半島の西海岸を陸路北上したというのが通説のようである。

勘ぐれば司馬は房総の「頼朝伝説」に関わりたくなかったばかりにこう書いたのかもしれない。事実、「吾妻鏡」には上総のどこを通過したのか一片の記載もない。

したがって千葉に住む常胤が下総国府（市川）で頼朝に始めて会うのは不自然だから上総国府（市原）の誤りではないかとの推察もある。それなら千葉市内の「君待橋」や「白旗神社」の伝説も成り立つ。

しかし「吾妻鏡」によると頼朝は九月十三日に安房を出発したわずか四日後にはすでに下総国府に到着している。この数日間に西上総（内房総）から東上総（外房総）まで転戦したとは考えにくいので「九十九里の由来」はその後の奥州遠征のときの故事であろう。（なお頼朝から謀反の疑いを掛けられた義経が銚子から奥州に向かって船出をするとき愛犬犬若をこの地に残す。その犬若が義経を慕って何日も泣き続けたという伝説から犬吠埼、犬若海岸の地名が生じたという。）

（五）九十九里浜

前述のとおり「房総の海」の記述にあたっても司馬は房総の地を全く踏んでいないので、長い間、私は司馬は一度も千葉県は訪れることはなかったと思っていた。

しかし戦争末期に一度だけ九十九里浜に来ているのだ。それを知ったのは彼が亡くなってから特集された「司馬遼太郎の世界」（文芸春秋）のなかに載った彼の随筆からだった。（最近、「司馬遼太郎が考えたこと」No.10にも掲載されている。）

この随筆「私の関東地図」の初出は昭和五十五年、「別冊文芸春秋」らしいがその時は私は読んでいない。

司馬は昭和十六年に大阪外語蒙古語部に入学したが、二年後の九月には幹部候補生として加古川の戦車十九連隊に入営させられた。翌十九年には満州四平の陸軍戦車学校に入校して九か月で卒業、見習士官として牡丹江省石頭の戦車第一連隊に赴任した。

終戦の年の春先、彼の属する戦車隊は本土決戦に備えて急遽、本土帰還を命ぜられるが、この随筆「私の関東地図」は副題「わが戦車連隊の帰還」が示すように本土帰還から終戦までの記録である。

釜山から船で新潟に上陸、関東平野を横切って箕輪（群馬県）に駐屯、さらに佐野（栃木県）で終戦を迎えるわけだが、このとき大阪生まれの大阪育ちの司馬は始めて関東平野を見たという。日本にもこんな大きい平野があったのかと感心している。

そして終戦間際、九十九里浜に出張するのだが短い文章なので引用する。

「何の用事だったのか、このころ九十九里浜にも行った。この長い汀には人影ひとつなく、海には波ばかりがあった。私はひとりでそこにいたのだが、ためしに服をぬいて泳いでみたとき、不意にこの国で生きている自分たちがかなしくなって、波に揺れもどされつつ、思いきり泣いてしまった。何度泣いてもそのつど波が顔を洗ってくれるために頓着なしに泣くことができたし、気はずかしさもなかった。」

なぜ陸軍少尉福田定一（司馬の本名）は九十九里浜で

泣いたのだろうか。

これ以上のことはこの随筆には書いてないが、司馬にとって生涯忘れることが出来ないあのショッキングな出来事は九十九里行きの直前にあったのではなかろうかと私は推察する。

直前のある日、東京の大本営から若い参謀（少佐）が佐野に出張してきた。敵の本土上陸に備えての打ち合わせだったはずである。

打ち合わせが終わったときに福田少尉はある疑問をこの若い参謀に質した。

我々戦車隊が敵の上陸地九十九里浜に向かって南下するとき、多分東京方面からの避難民が大八車などを引いて北上してくるだろう。道は一本道、そのときは「我々はどうすればよろしいのでありますか」と。

エリート参謀はちょっと戸惑ったようだったが、やがて押し殺したような小さな声で答えた。「かまわず轢っ殺してゆけ。」

司馬は愕然とする。日本の軍隊は日本国民を守るために存在したのではないか。いつからこんな日本になってしまったのかと。

このころ司馬は戦争で命を落とすことは陸軍軍人として惜しくはないが、なんのために落とすのか悩んでいた。この頃の司馬の愛読書は満州まで持って行った親鸞の「歎異抄」だったらしいが、この本を読んでも解決されなかった。しかし休日のある日、外出した佐野の町で道端で無心に遊ぶ子供たちを見て、この子供たちの将来のためなら、と踏ん切りがついた直後だけにショックは殊更大きかった。

このショックの大きさで「この国で生きている自分たちがかなしくなって」「思いきり泣いてしまった」のではなかろうか。

このとき福田少尉は二十二歳。

戦後、司馬遼太郎として数々の名作を残したが、「（日本が降伏したとき）大正や明治の人々はこんなおろかだったろうか。あるいはそれ以前の人々は、という疑問がわたしをとらえ、しかもこの自問にひとことも答えられませんでした。昭和四十年前後から、この二十二歳の私自身に手紙を書きはじめました。私の作品はそのことに尽きます。」と記している。

（「二十二歳の自分への手紙」「司馬遼太郎が考えたこと」No.15から）

日本を敗戦まで追い込んでしまった昭和に比べて、それ以前の日本―明治の時代あるいはその前の明治維新、もっと前の戦国時代の日本はもう少しマシな日本ではなかったのかとの思いが数々の歴史小説を書かしたというのである。

同じようなことは晩年、多くの座談会でも語っている

し、たしか平成五年文化勲章受賞後の感想でも述べられている。

しかし興味深いのは前述の「轢っ殺してゆけ」発言に対して司馬が「軍隊は住民を守るためにある」と考えたのはその後誤りであることに気がついたと書いていることである。（沖縄、先島への道）

「住民のほとんどが家をうしない、約十五万人の県民が死んだ」沖縄戦に触れつつ「本土において、本土決戦用の兵力をひきい、心ゆくまで本格的に決戦すべきである」との本土決戦を主張した終戦時の陸軍大臣阿南惟幾の言葉を引用した司馬は「軍隊というものは本来、つまり本質としても機能としても、自国の住民を守るものではないということである。軍隊は軍隊そのものを守る。（略）軍隊が守ろうとするのは抽象的な国家もしくはイリスト教のためといったより崇高なものであって、具体的な国民ではない」と書いているのである。

「私の関東地図」は「その後、箕輪にも佐野にも、あるいは九十九里浜というところにも行っていない」と関東人にはなんとも切ない文章で終わっている。

司馬が「街道を行く」でもこの地方を歩かなかったのは、冒頭に記したようにこの地方が独自古来の文化を持たないことへの関心の薄さ以外に、司馬自身の戦時中のこの地方への悪印象が大きいのかも知れないとも思った。

彼の命日二月十二日に毎年開かれる「菜の花忌」では生前、彼が好きだった菜の花によって会場一杯が飾られる。

菜の花といえば千葉県の県花である。

毎年「菜の花忌」に出席するたびに、菜の花の咲き乱れる御成街道（徳川家康が鷹狩りのため佐倉城主土井利勝に命じて作らせた下総船橋から上総東金までの街道）などをどうして歩いてくれなかったのだろうと悔やまずにはいられない。

（了）

（追記）司馬は晩年の一九九二年に再度、千葉に來県して講演している。演題は「草原からのメッセージ」。モンゴル交流協会の主催によるものだが、この頃、代表的紀行文「草原の記」を書き上げた時期に当たる。

古い物・遠い夢

第十一章　茶道具三昧

（三）茶杓「鎮信公」作　補遺

—茶人大名松浦家こぼれ話—

忠内正之

先に「鎮信公」作、茶杓について述べたがその際、書き残した平戸大名松浦氏について、補足してみたい。

△　松浦家の歴史

九州の西北端、西海国立公園の中心「平戸」は北に玄海の白波をのぞみ、南に九十九島の絶景を擁する景勝の地であるばかりでなく、嘗ては西の都と謳われた西欧文化初導入の窓口であり、松浦党史八百年を物語る幾多史実が秘められた史都である。

特筆すべき点は、八百年にも及ぶ長期間を持ちこたえた松浦党の努力と忍従の軌跡であろう。

松浦家の始祖は第五十二代嵯峨天皇の第十八皇子「融（とおる）」で、八三二年源姓を賜い、朝廷に仕え、累進して左大臣の顕職につき皇太子の教育係を兼ねた。山荘「棲霞観」を嵯峨に設け、居を六条の北、鴨川の西に営んで河原院と称したので世に河原の左大臣といった。

——陸奥（みちのく）のしのぶもちずり誰ゆえに　みだれそめにし我ならなくに——という小倉百人一首の和歌は公の詠じたものである。

なお、紫式部が著した「源氏物語」の主人公「光源氏」は融をモデルにしているという。

第二代昇（のぼる）も大納言となり朝廷に重用されたが、第三代仕（つかまつ）から武将となって各地に武名を轟かせた。中でも第五代綱（つな）（渡辺）は渡辺に居て「渡辺の綱」と称し、源頼光の四天王の一人として有名である。（鬼退治で知られて

いる)。正暦年間源頼光に随って西下し、唐津西南方「岸嶽」付近に叛賊を平げた。これが松浦家の祖が肥前の国に関係を持つに至った始めである。

第六代授は京に帰り、その子七代泰は滝口太夫と称し後三条院に仕えた。

第八代久(松浦)は若年ながら一〇六九年(延久元年)御厨検校として肥前国松浦の今福に下り、次いで検非違使を命ぜられ上・下松浦郡、彼杵郡の一部及び壱岐を治めることとなり、地名に因んで初めて松浦姓を名乗り、梶谷城を築いて梶葉の紋を用いるようになった。

かくて松浦の地に武士団松浦源氏が発生するのであるが、それよりさき七年前に、「前九年の役」に勇威を馳せて降った「安部宗任」が処刑を免がれて肥前松浦の地に外敵から守るべく軍団を連れて着任していたのであった。

処刑を赦す条件が三箇条あった。それに応じなければ即刻死罪となるところであった。

「ひとつ。朝廷に忠義を尽くすこと。

ひとつ。新たに朝廷が松浦の地に送る者を、主君と仰ぐこと。

ひとつ、無位無冠であること」

宗任は関白「藤原頼通」の条件を「源義家」から聞いて頭を垂れた。自らは逆賊で、捕らえられて殺されることは固より、覚悟していた。だから敵将の「源義家」とは武士としての心が通い合っていた。「義家」に厚く礼を述べると「宗任」は生き残った家臣の中から二百人を選んで西へ向って出発したのであった。都を通過する時に宗任は、それまでの安倍の姓を安部に変える。

かくして陸奥の「安部宗任」とその家臣は、肥前松浦に根を下ろして周囲に睨みを利かせる。無位無冠ではあっても前九年の役を闘った武士たちは迫力と気合が違った。そして松浦党の礎となったのであった。

第十代披の時、平家に味方して壇ノ浦に、三百艘をもって出兵する。この事は松浦八百年の歴史の中での大失敗であるが、源頼朝が幕府を鎌倉に開いたとき、第十代披兄弟等は臨期に鎌倉へ伺候して所領の承認を求め、おのおの本領安堵の判物を貰った。想うに南辺地迄に覇力を及ぼす余裕は鎌倉に無かったのであろう。

なお、建久二年(一一九二年)僧「栄西」初めて平戸で禅機を行い、茶の実を植えたとある。

第十一代持は一二二五年頃平戸に移り館山に城を築き、ここに初めて平戸松浦の基礎を固めた。

第十四代答の時代、沿岸の松浦党は元の来寇をその領内にうけ、各地に奮戦してこれを撃退し、殊に小舟に乗って夜間の奇襲を敢行するなど海戦に強い特性を生かし勇名を馳せた。なお弘安役の恩賞不平につき、地頭二十四人を代表して一統の志佐、山代、有田の三氏鎌倉に訴うも成果なし。

第十五第定は王政復古を企図された「後醍醐天皇」の詔を奉じて善戦、建武中興に貢献した。のち官軍利なく、天皇が叡山に難をさけられたときにも警護の重任を全うし終始南朝に忠勤を励んだ。

南北両朝が対立する間は日和見をし漸く足利の政権固まるに至り、足利に忠誠を誓うことになった。

第二十五代隆信の世までに領土を保全、拡大することに成功し逐次戦国大名に位置づけられていった。

又一六世紀中頃から隆信は明の海賊「王直」を利用して海外の利益を収めたのをはじめとして平戸はポルトガル、スペインとの貿易も開け西欧文化導入の最初の窓口となり此の間キリスト教の伝播もあった。領主は他に先んじて鉄砲、火砲の用法、製法を学びとり、領内の装備を優秀にし、秀吉の島津征討、朝鮮出陣には三千の兵を率いて参加し武功を立てた。

次いで徳川幕府となり近世大名として幕藩体制の中に加わることが出来た。

徳川の初期、豊臣の寵臣であった松浦氏はその嫉視をうけることもあったが、オランダ、イギリスの貿易を独占し、島原の乱後、貿易が長崎に移されるまで名実共に「西の都」として繁栄を続けた。この間における第二十六代鎮信(法印)、第二十八代隆信(宗陽)の苦心と手腕は大きかった。

その後、貿易の利を失ったが(長崎に移される)歴代の藩主たちは専ら内政に意を用い、民生を豊にした。又文教を盛んにして山鹿流の学統を伝え、武道を励まして士風をおこしたので藩風大いに上り幕府から善治良政九州第一と激賞されるまでに至った。殊に第二十九代鎮信(天祥)、第三十代棟(雄香)、第三十四代清(静山)の治績は顕著であった。

幕末、平戸近海には黒船が出没して騒々しい世の中となると、領内沿岸の防備を固めて、調練を盛んにして西辺の守りを全うした。又国内に勤王佐幕の論沸騰対立したときは、大義名分を明らかにして、明治維新の大業達成に貢献した。これには静山公が、明治天皇の外曽祖父であったことが、大きな幸運としてプラスとなった。

こうして廃藩に至るまで松浦氏三十七代は転封等のことなく平戸松浦八百年の伝統を守り得たのは希有のことであり、主従の信頼関係も厚かったのである。

△　四度の危機

約千年に近い松浦一族の歴史には大きな危機が四回あった。

まず松浦第十代披の時である。文治元年（一一八五）に、栄耀栄華の限りを尽くした平氏が壇ノ浦で源氏に滅ぼされたが、負けた平氏に加担してしまった。三百艘の戦力で出陣したのに、負けて平戸に帰り着いた時は七十四艘にまで減っていた。

平家の滅亡を見届けただけで、「なんと無駄な戦をしてしまったことか」という大きな悔いが残った。どうして深い考えも調べもせずに、自らは平家に味方してしまったのか？、犠牲はあまりに大きかった。領主たるもの、責任を深く反省させられたのである。

幸いなことに源氏の追手はかからない。鎌倉幕府の地から松浦への地はあまりに遠くて、追求は厳しく行われなかったのだ。

その後内政に力を入れて実力を整えて、慎重に七年の歳月を掛けた上、鎌倉に出かけて、頼朝から正式に所領安堵の朱印を受けた。

二度目の危機は、元の大軍が押し寄せて来た文永の役（一二七四）と弘安の役（一二八一）である。この時が危機の中でも最大のものだったが力戦した松浦一統は台風にも助けられて社稷を守り抜いた。

なお、第十五代定（肥州）は新田義貞に従って、足利尊氏と戦い、第十六代勝（国司）は一転して尊氏に味方すると延元三年尊氏から恩賞まで受けている。

生き残るためには正義も忠義も夢も感傷も棚上げして、先づは、領土、家臣、領民を守るため腐心したのである。

三度目は十六世紀のキリスト教伝来である。第二十五代隆信（道可）の時代である。

「人は全て神の子である」と説いたキリスト教に感動して、信徒になった大名も九州に多かったのだが松浦隆信は違った。自分は信徒にならずに、重臣の「籠手田定経」を入信させるに留めた。将軍も天皇も農民と同じ神の子だという教義に対して、いずれ幕府が必ず禁止することになると読んだのである。

徳川政権下となって豊臣恩顧の大名とされていた松浦藩は辛くて苦しい時代を過した。

寛永十六年（一六三九）には、「松浦藩はひそかにキリスト教を信奉している」と、幕府に讒言した「浮橋主人」事件が起こる。幕府はキリシタンに神経質になっていたのだから松浦藩にとってこの事件は、致命傷になりかねない徳川時代で最大の危機だった。外様大名を改易するに充分な事由となった。

この危機を江戸詰めの家臣、「熊沢大膳」が勇気と機転で救った。これには松浦藩と旧知の間柄であった、「松平伊豆守信綱」と大徳寺一五六世「江月宗玩」の陰での大きな協力があった。第二十九代鎮信（天祥）は強運であった。

江月との関係もあってか「鎮信（天祥）」は後年（一六七〇）片桐石州に茶道を学び、やがて鎮信流の祖となるのである。徳川に順応し、茶道を通じて平和を尊ぶ姿勢を見せたかったのであろう。（前号にて紹介した茶杓の作者である）。

四度目の危機は幕末である。嘉永六年（一八五三）浦賀にペリー提督の黒船がやって来る。三百年の太平の夢は破れて、日本中が騒然となって、幕府は浮き足立ったのだが、第三十六代曜（諦乗）、第三十七代詮（心月）は世界の情勢を探り、外圧に耐えかねて徳川幕府が崩壊することを予期していた。

幕府の無力さを知った薩摩と長州が同盟を結んで、明治天皇を担いで一気に明治維新を成功させた。

「松浦詮」は慎重に情勢を睨んで、なかなか旗色を明らかにしなかったのだが、遂に藩長側についたのは、詮が明治天皇の又従兄弟という近い縁があったからでもある。

明治維新はなって詮は伯爵になる。（本来なら子爵が妥当）貴族院議員になった松浦伯爵は明治四年平戸を去って東京に移り活発な政治活動に入った。

第三十八代厚（鷺洲）、第三十九代陞（如月）は伯爵を継いだ。その後敗戦により爵位は失ったが、現在第四十一代の章（宏月）は神奈川県下で健在であり鎮信流茶道の家元をしている。（私が所有する鎮信公作茶杓の箱書きをお願いした方）

現在も記念祭、茶会等で平戸へは毎年、度々訪問される様である。

領主は居なくとも平戸の海は千年に近い歴史を彩って碧く平和な佇まいを見せている。

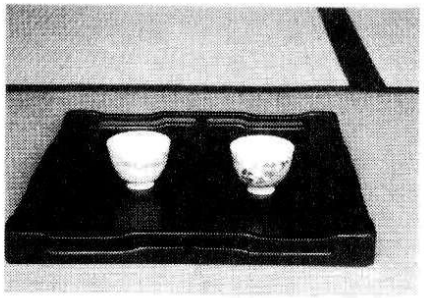
△　平戸三川内焼

朝鮮の役に出陣した第二十六代鎮信（法印）は諸大名と同様に一五九八年（慶長三）帰還するに当って陶工を含む韓国人男女百余名を連れ帰り、中野村で陶器を作らせた。これを中野焼という。一族の「弥次兵衛正名」（如猿）は研究を重ね、遂に白磁器に藍染付を完成した。三代「弥次兵衛」は傑出し、より白い磁器を完成して幕府に献じて絶賛をうけ各藩からも注文殺到し、禁裏御用となるに至った。藩主は禄百石を与え好遇した。後「如猿大明神」として祀られた。

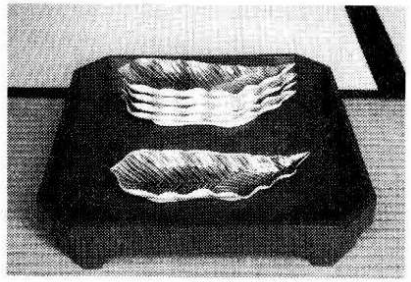
第二十九代鎮信（天祥）、第三十三代誠信（安靖）は、

殖産を奨励し三川内で集中製産しお留焼として保護した。藩侯の献上品又は贈物として活用された。天保年間、長崎の貿易品ともなったが、外国人に好評であった。

左の写真の焼物は平戸焼である。上は汲出碗の離れである。幕末の作と思われ高台内に「平戸三川内焼」の朱書がある。完成度の高い品の良い色絵の出来である。下は向付の五客である。同じく幕末の作で（古い箱に天保の年号の記入があった）、藍染付の良い上りで裏は平戸特有の白磁が美しい。木の葉型の造形も精巧である。両方共、旧「旗本」で下田奉行も勤めた戸田家に伝来したものである



三川内焼汲出茶碗



同上　染付木の葉型向付

△　松浦家と茶道

第二十九代鎮信（天祥）は内政に秀れ名君の誉れが高かったが、又詩歌に長じ、茶道をたしなみ茶道鎮信流を創始した。

「文武は武家の二道にして茶道は文武両道の内の風流なり、さるによって柔弱を嫌い強く美しさをよしとす。心の修行はこの外あらじ、昨日の非を知り今日は悟るべきなり」と言い又「武道を風流の中に寓し、心胆を茶儀の間に養うべし」と称し主として武門の間に広まる、いわゆる武家の茶として有名となった。

爾来、歴代藩主はこの精神を継承し斯道の発展につとめた。

第三十七代詮（心月）は更にこれを盛んにした。詮は華族、知名士等と「和敬会」を創立し、明治維新後の日本茶道の復興につとめた。

次代厚（鷺洲）、陸（如月）、素（祥月）は夫々家元として鎮信流の普及に心がけた。現当主章は「宏月」と号し家元として興隆につとめている。

之はあくまでも私の独断であるが、鎮信公が茶道への傾倒を深めた大きな目的の一つは時の権力者徳川幕府への阿りにあったとも思われる。後に将軍家の御茶道となった小堀遠州にも師事した。徳川幕府と親交を図って外様大名のハンディを補ったのではないだろうか？

遠州公との交流の事蹟はあまり残っていないが、嘗って私は、宗甫（遠州のこと）から茶杓を鎮信公が貰い受けて自作の追筒したものに接したことがある。筒のサインは私が所有する茶杓と同じ円恵でトメ印も刃型で同様のものであった。幕府の懐刀の一人とも言われた、遠州公とも近い関係にあったのである。

△　茶杓「夜討」の由来

元禄十五年十二月、播州赤穂の浪士四十七名が夜に乗じて亡君の仇吉良上野介の邸に討入りした時、鎮信（天祥）の次男昌（分家の一万石の当主）は本所の隣家「藤邸にあり、寒梅の雪を鑑賞しつつ茶杓を削っていたが突如あたりに響く山家流の陣太鼓をきき、使いを走らせて之をたしかめ、その討入であることを知って莞爾として茶杓を削って、明方までに完成し「夜討」と銘した。この逸話は有名である。なお「討入」りという表現は後世の謂であって、当時は「夜討」と言ったらしい。この茶杓は現代どうなったのか？　所在は不明である。

松浦家は尚武の気風があり、鎮信が山鹿素行に師事もしていたので、浪士の義挙に賛同したものと思われる。

△　松浦家心月庵茶会

「高橋箒庵」著「東都茶会記」を繙いて調べると次の様に記されている。「高橋箒庵」（一八六一―一九三七）は本名義雄と言い、水戸藩士の家に生れ、慶応大学に学び、福沢諭吉に直接教えを受けた。三井系の会社の重役、社長をつとめ実業家として大成した。茶の湯を好んで当時の数寄者、松浦詮、三井八郎右衛門、益田兄弟等と茶会を催すなどして、茶の湯の衰退を押し止め、再び隆盛に向わせる力となった。

東都茶会記その他発刊書も多くあり、明治、大正、昭和初期の茶道発展の一大プロデュウサーであったと言って過言ではない存在であった。

その「東都茶会記」には、松浦鎮信公作の茶杓は三度登場している。

○松浦伯心月庵茶会　大正元年十一月

出席者は箒庵他、万里小路伯、石黒男爵、馬越恭平、青地幾次郎の五名

茶杓は鎮信公作「汲みて見よ塩ならすとも唐竹の此一節は須磨の浦人」の歌銘ある煤竹。

○心月庵主の茶会　大正三年十一月

出席者は箒庵、竹内寒翠、金沢蒼夫、大久保北隠の五名

茶杓は鎮信公作。「鎮信公の茶杓は御家物とて流石に

一段立優れたる出来と見受けられる」。と箒庵は評している。

○心月庵口切　大正六年十一月

茶会は十一月十四日、五両日向柳原本邸心月庵で催された。

出席者は三井華精、安田松翁、青地湛梅、箒庵の四名。当日も濃茶席は鎮信公作茶杓で箒庵は「此茶席に無くて叶はぬ一品なり」と評している。

以上箒庵著「東都茶会記」によれば当時の代表的な茶会に三度使われたと記録がある。私が所有している茶杓がその中の一つであったと思いたいが、夢であろう。

△　松浦家美術品の行方

東都茶会記の著者、「箒庵」によれば松浦家はかなりの美術品を所有することで有名であった。明治、大正の頃住いは向柳原に立派な邸宅を構えていた。本所と駒込に別邸があり、本領平戸を含め美術品、資料、什器、等が分散保存されていた。第一次大戦後の不況と恐慌、第二次大戦の戦災と、その後の華族制廃止により多分に洩れず資産は失われた。平戸にある松浦資料館に残った物が寄贈され展示されている。歴史的な物はあっても残念乍ら特優美術品は少ない。戦災で消失したり、敗戦の困窮の中で処分された様である。

駒込の別宅は倉庫三棟と共に焼け残った様で、既述の宮内庁御用達をつとめる、日本橋「E美術店主」（先々代）は松浦家に出入を許され、かなりの美術品の整理に立合った。聞く処では倉庫のうち二棟は什器、美術品、茶道具類が格納され、あと一棟には文書類があったという。

エピソードとして、楽代々の茶碗が揃って納められた箱があり、うち二個が欠落していたので驚ろいて探すと、何と無造作に部屋の灰皿として使われていた。早速箱に納めて拂下げを受けたと言う。考えれば武家茶人として楽茶碗などは軽視されていたのであろうか？また大名の末裔は、おおらかで世俗に疎かったのであろうか？第三十九代陞（如月）元伯爵の時代のことと思われる。

松浦家は「国持大名家の「道具持ち」九大家中の一家」と称された。賣立て等は殆ど行われず比較的長く持ち堪えた方であったが、「伊部関寺の茶入」など名品は直接譲渡された様だ。ひとり松浦家に限らないが、名家の名品の行方へは判然としない。美術館等で大切に保管され後世に伝えてもらいたいものである。

△　松永耳庵の消息

松永耳庵（一八七五―一九七一）安左エ門は、高名な数寄茶人である。電力の鬼と呼ばれた後世の大事業家は、鈍翁、三渓とならぶ近代「三大茶人」のひとりでもあった。獰猛なまでの胆力で競りおとした名宝の数々は世間を震撼させた。名品は「東博」「福岡市美術館」に寄贈され、主要な名品は今も眼福に預かることが出来る。

福岡市にある「東洋陶磁美術館」は、福岡女子短大附属のこぢんまりした存在で、特美品は少ないが、バランスのとれた展示がある。

茶人でもある溝口オーナは教育的見地からも陶器の鑑賞、就中九州地区の古窯の収集に心を砕かれ、茶会の開催にも熱心である。

平成十三年十一月に開かれた茶会では、松永耳庵筆の掛物が添えられた、松浦鎮信公作の茶杓が使用された。茶会の直後同美術館を訪れた私は茶会の道具を拝見することが出来た。

茶杓　松浦鎮信公作　共筒

歌銘　「したかぜ」

ともとなるものなりながら　わびしきは

さとの北なる　ひしのしたかぜ

添文　松永耳庵筆

我が殿様の茶杓拝しつ　　二十三年七月廿一日

独り客　風呂を　　雨青くけふる午後

貰うて

蕎麦たべて　耳庵

松永耳庵は壱岐の出身である。九州に愛着をもつ翁であるから、元寇の役の頃から故郷の安寧を守ってくれた旧領主に畏敬の念をもっていたに違いない。茶杓は歌名もあって品格のある堂々たる出来映えであった。年譜によれば翁は昭和二十三年四月に、戦前に収集した美術品を「東博」に寄贈しており、六月に小田原「黄梅庵」が移築完成を見ている。知人宅に世話になってホッとひと息の時詠んだものであろうか？

同じ茶会に使用された道具の展示品の中に「松浦心月公」極めの古高取の「文琳茶入」があったので、松浦家に近いところから、セットで流出したものであろう。

なお、北九州地区では現在鎮信流茶道は、かなり盛んと聞く。

「後記」　補遺が心ならずも長くなりました。冗漫の点ご寛恕願います。

終

還暦からの考古学（三）

玉の話（その2）

中山喬央

インダス文明と玉

インダス川

インダス川はチベット西部のヒマラヤ山脈中に水源地を持つ、全長二千九百キロ、流域面積九十六万平方キロの大河です。

カシミール地方では北西に流れ、ギルギット付近で南西に向きを変え、パキスタン国内を通って、カラチの南東でアラビア海に注いでいます。

河口の東側にはカッチ湿原が広がっています。

インダス文明発生以前の状況

インダス川の下流域西岸、モヘンジョ・ダロ遺蹟付近から西北に、アフガニスタンのカンダハールへ向かう街道筋にボーラーン峠があります。その北クエッタの周辺は、バルーチスターン丘陵の麓となりますが、そこにあるメヘルガルで、今から九千年位前の栽培種であるコムギ・オオムギ、家畜化されたヒツジ・ヤギ・ウシが発見されました。

メヘルガルでは六千五百年前頃になりますと、土器とか土偶（土で作った人形）が見られるようになりますが、同じ頃に農耕文化もバルーチスターン丘陵地帯の南北に広がります。

このメヘルガルでは九千年前位の貝製？ネックレス、七千～六千五百年前位の、貴石（宝石のことですが、大正時代は純宝石と比べて少し透明でなく、やや多くみられる鉱石で水晶・瑪瑙などとされ、昭和時代には、みがいて装飾品として使う鉱石のことを意味し、何れも半宝石とされてきました。ここでは玉類や装飾品などの素材を対象にしたものとして用います。）・貝製？頭飾り、貴石・凍石（緻密な塊状の滑石）製ネックレス、貝製ネックレス、貝製ベルト等が出土しています。このうち貝類は、アラビア海岸から運ばれてきたものです。

バルーチスタン丘陵の諸遺蹟から見つかっているアクセサリー（装身具）は、殆どが埋葬人骨に伴って発見される副葬品です。

又先にお話いたしましたが、六千五百年前頃から作り始められた土偶は、初めは女性で、作物や家畜の豊かな恵みを祈ったものだと考えられています。そして五千三百年前位になりますと、上半身を覆うような胸飾りが特徴となります。このことからも、アクセサリーが当時から盛んに使われていたことがわかります。

そしてインダス文明の興隆期が近づいてきますと、遠くから運ばれてくる貝や貴石を使って、専門の工人が作ったと思われる高価なネックレスやアンクレット（足首飾り）と一緒に、安価な土製のビーズも作られるようになります。これは墓ばかりでなく、集落内からも多く見つかっています。これによってアクセサリーは身分の高い人とかお金持ちの人達だけではなく、一般の人々が日常的に使うようになったことが考えられます。

インダス文明

インダス文明は、四千六百年前頃から、三千八百年前頃までの約八百年間、インダス川流域を中心に展開した文化です。

インダス文明もメソポタミア文明と同じように都市遺跡が見つかっていますが、独立しあい拮抗（力がほぼ同じで、お互いに屈しないこと）したメソポタミアの都市国家と違って、インダスの場合は、モヘンジョ・ダロとかハラッパーを頂点として、各都市がそれぞれの役割を担って、東西壱千六百キロ・南北壱千四百キロに及ぶ広大な地域でインダス文明を形成していたと考えられる点が大きく異なります。

インダス文明の各都市（モヘンジョ・ダロ、ハラッパー、カーリーバンガン、バナーワリー、ロータル、スールコータダー、ドーラビーラー等）は、城塞・市街地を区分するという基本的なコンセプト（概念）が同じで、文字や印章（木・牙・角・水晶・石・金などに文字とか文様を彫刻し、それを押して証明とするもの。昔は封印に粘土を使い、そこに印章を押して封泥「文書や器物を封緘するための泥塊」としました）、装身具、土器、石器等も同じ型式で、度量衡（長さ・容積・重さを測る、物差・升・はかり）迄統一されていました。

人々は河川とか湿原を利用して舟でお互いが行き来し、物資の運搬とか情報の伝達等を盛んに行っていましたから、都市は河川の流域、河口部付近、湿原に面した所、海岸などにできました。

都市には貴金属細工や土器つくりの専門職人がいて、

印章、装身具、金属器や土器・土偶など様々な製品が作られました。一方で各都市は原材料の供給地とか、製品の販売先と密接に結びついていました。

モヘンジョ・ダロは、北方ロフリー丘陵にフリント(火打石)の産地があり、石刃(ブレイドともいう縦長剥片のナイフのような形をしている石器)を作っていましたし、カッチ湿原のドーラビーラーや、アフマダーバードの西南で海岸に近いロータルのすぐ近くには、紅玉髄の産地がありました。

メソポタミアの文献によりますと「メルッハ」すなわち「インダス」からもたらされた品々として、紅玉髄・金・銀・銅・黒檀・象牙などがあげられていますが、これらの品々は何れもインダスの都市で装身具や細工物に加工して価値を高めたものだと考えられています。そしてインダスの各都市の生活が豊かで安定していたことが発掘の結果からもわかってきていて、交易による利益が大きかった為だとされています。

インダス文明の時代、金製品の発見例は非常に少なく、これらを身に着ける事ができた人は特別な人達に限られていたと考えられ、またお墓からも殆ど出てきませんから鋳つぶして再利用されたのだと考えられています。

その中で、金を多用し当時の最高技術水準で作られた、ネックレスやペンダント(首から胸に下げる装身具)等が、モヘンジョ・ダロ、ハラッパー、ロータル、ドーラビーラーやカラチ付近のアッラーフディーノ遺蹟から見つかっています。

次に玉類を中心に、様々な遺物の出土状況を遺蹟別に説明します。

モヘンジョ・ダロでは、次のようなアクセサリーが多数発見されて当時インダス文明の中心地であったことがわかります。

まず首飾りですが、何れも両端を金製の半球形の飾りで留めてありますが、金製の小玉を六条の金線に貫いて帯状にする為、八箇所でとめてあるもの、金とファイアンス(うわぐすりを塗った陶器。釉陶。珪酸分が九〇%以上で、クォーツガラスと成分は同じですが、焼成の温度が低い為、珪酸の粒子が残った焼物)の玉類で構成されたもの、碧玉・紅玉髄などの棗玉(横断面が六角形になっている切子玉の、角を削って丸くしたもの。棗の実に形が似ているのでこの名前が付けられました)や丸玉をつなげたもの、金製平玉(丸玉を平にしたもの)、瑪瑙、トルコ石(銅・アルミニュウム・燐などを含む、青色または青緑色の鉱物)製の玉などがまじりあったものなどがあります。その他、金製の装身具付属品、腕輪なども見つかっています。

さらにモヘンジョ・ダロからは様々な象嵌(金属・陶

器などの表面に模様を刻んではめ込むこと)用の貝製品が出土しており、これらはアラビア海沿岸から運ばれていた貝を用いているので高価な貴重品であったと思われます。その一方でテラコッタ(赤土の素焼)製の腕輪も出土しており、これらは安価なもので一般庶民が愛用したものと思われます。

腕輪に金製・銅製・貝製・ファイアンス製と共にテラコッタ製のものがあることは、それを着けることがインダス文明では、護符(お守り札)としての役目があったことと思い合わせると、様々な階層の人達がその経済力に応じて利用していたことが偲ばれます。

そしてモヘンジョ・ダロでは世界で一番古いサイコロとかチェス盤といった玩具類も見つかっています。

サイコロはテラコッタ製、石(黒色)製、石灰岩製等があり、目の数は、対面が七になるものと、そうでないものがあります。

チェス盤はレンガに線刻したものですが、駒は凍石、ファイアンスなどで丁寧に作られています。渦巻き状のテラコッタ製、玉ころがしゲーム盤も見つかっています。

一方ハラッパーでは、百九十六a号墓から、凍石製ネックレス、碧玉製ビーズ、金とトルコ石製ビーズ、金とオニックス(縞瑪瑙)製ビーズが一緒に発見されました。この中で、金製ビーズはインダス文明の墓から出土した唯一の金製品です。

その他、紅玉髄製、凍石製、ファイアンス製ビーズ、蛇紋岩製分銅形ペンダント、貝製のリング(指輪)と腕輪、ファイアンス製のイヤリング・刻み目のある腕輪・アクセサリーなどが見つかっています。そしてここでもテラコッタ製の腕輪が出土しています。

カーリーバンガンでは、瘤牛(肩に肉の瘤がある牛)、犬のような動物、鳥、羽を広げた鳥の土偶が出土し、素材つくりのなかに身近な動物達への当時の人達のやさしさが感じられます。又玩具類と思われる、彩色が施され黒い模様が描かれ、子供の手に合わせた小さなつまみがつけられているテラコッタ製ガラガラとゲームの駒、さらに幼児あるいは幼獣に乳を飲ませる道具であったと思われるテラコッタ製水差しも出土しています。

バナーワリーでは壺に納めた紅玉髄、瑪瑙を含む貴石類及びチャート(角岩。光沢があって緻密な石英でできている)と、貴石製のものを真似して作り、一般の人がアクセサリーとして身に付けたテラコッタ製のネックレスが出土しています。

スールコータダーでは、チャート製の石刃の他、骨製の工具が出土しています。チャート製石刃は生活必需品といえる利器(よく切れる刃物)ですが、これらは原産地であるカラチ北方のシンド地方ロフリー丘陵から運ばれてきて、集落で加工製作されたものです。またテラ

たどった文字）があることが知られていますが、既知の文字と並べて書いた記録が見つかっていないので、解読された結果が一致せず、未だに不明の状態です。

インダス文明の衰退と滅亡

では何故インダス文明が衰退し滅亡したのでしょうか。これには現在次のようなことが考えられています。

先ずインダス文明を支えた主要河川の一つであるガッガル・ハークラー河が、地殻変動で干上がってしまったので、その河畔の都市であるカーリーバンガンやバナーワリーは存続できなくなってしまったということと、インダス文明の人達が大きく依存していたメソポタミア地方との交易が、四〇〇〇年前頃になると、そこでの政治的混乱、塩害化現象の発生等により途絶えてしまい、大きな経済的収入が無くなってしまったということです。

しかし最も大きな直接的原因は、北（中央アジア）と西（ペルシア）からのアーリヤ人の侵入と考えられます。以下これについて説明し、文を閉じたいと思います。

コーカサス山脈の北方地帯にいた原始アーリヤ人（インド・ヨーロッパ語族）は、人口の増加、旱魃などの事情により、草原を出て他の地方へ移住を開始します。西方へ向かった人達は、現在のトルコ、ギリシャの他ヨーロッパ各国に入りますが、東方へ向かった人達は、アーリヤ系イラン人、インド人となります。

コッタ製のビーズも出土しています。

ドーラビーラーはカッチ湿原にあった都市ですから出土品には貝製品が多く見られます。出土した法螺貝は、聖螺と考えられ、それは、儀礼的な道具で、後のヒンドゥー教でも吹き鳴らしたり、水や油・乳などを流す灌頂（「かんじょう」ともいいます。インドで国王即位の時、頭頂に四大海の水を注いだ儀式の事を言い、仏教では頭に水を注ぐ事をいいます）の際に使用されています。

アクセサリーとしては碗形貝製品の他、日用品である動物の骨で作った刺突具や針、度量衡として銅・チャート・石灰岩でつくった六面体の分銅が出土しています。

そしてここからも様々な玩具類が見つかっています。カーリーバンガン出土のものと同じような子供用のテラコッタ製ガラガラとか、オハジキとゲームの駒、球形をしている高価な瑪瑙製石球、安価なテラコッタ製投弾などです。

このようにインダス文明の出土品からは、武器が殆ど見られず、多数の土偶や彫像のなかにも戦士や武士の像は見当たらず、子供が使ったと思われる玩具類まで出土するところから、平和でメソポタミアとの交易による豊かな収入もあって、繁栄していたことが偲ばれます。

インダス文明には三百九十六の象形文字（物の形をかたどった文字）があることが知られていますが、既知の文字と並べて書いた記録が見つかっていないので、解読された結果が一致せず、未だに不明の状態です。

インダス文明の衰退と滅亡

では何故インダス文明が衰退し滅亡したのでしょうか。これには現在次のようなことが考えられています。

先ずインダス文明を支えた主要河川の一つであるガッガル・ハークラー河が、地殻変動で干上がってしまったので、その河畔の都市であるカーリーバンガンやバナーワリーは存続できなくなってしまったということと、インダス文明の人達が大きく依存していたメソポタミア地方との交易が、四〇〇〇年前頃になると、そこでの政治的混乱、塩害化現象の発生等により途絶えてしまい、大きな経済的収入が無くなってしまったということです。

しかし最も大きな直接的原因は、北（中央アジア）と西（ペルシア）からのアーリヤ人の侵入と考えられます。以下これについて説明し、文を閉じたいと思います。

コーカサス山脈の北方地帯にいた原始アーリヤ人（インド・ヨーロッパ語族）は、人口の増加、旱魃などの事情により、草原を出て他の地方へ移住を開始します。西方へ向かった人達は、現在のトルコ、ギリシャの他ヨーロッパ各国に入りますが、東方へ向かった人達は、アーリヤ系イラン人、インド人となります。

彼等は真鍮（銅と亜鉛の合金）・銅・鉄の製造技術を持ち、自由に馬を乗りこなして戦車を使うことができましたから、もともと戦争に慣れておらず経済力にもかげりがでていたインダス文明の各都市を破壊し、先住民をインド社会最下層のダーサとしてしまいます。

これは四千年前から、二千五百年前位の間にかけて、西北インドに侵入したインド・アーリヤ人が、ガンジス河流域に移住するまでのうちに作り上げたとされる、インド最古の宗教文献でバラモン教の根本聖典でもある『リグ・ヴェーダ』の神話インドラ賛歌の中の一節「かれはダーサ族を低きものとして征服し消失させた。賭博者が賭けた品物を得るように、かれは勝利者として敵の所有物を獲得した。―人々よ。かれこそインドラなのである」及び、カースト（インドのアーリヤ人が維持していた極端に閉鎖的な身分制度）からも明らかです。

まとめ

インダス文明は、メソポタミア文明と比べると平和で、一般庶民でも子供でも、その経済力に応じて生活を楽しんでいたことが安価なテラコッタ製の出土遺物、特に子供用玩具類から感じることができます。

しかしその繁栄は、メソポタミア地方との交易に頼る割合が高く、メソポタミアとの交易が途絶えると大きな打撃を受けることとなります。

そしてその経済力が弱くなった時、これは防衛力の充実と維持にも大きく影響しますが、優れた武器を持ち戦闘能力に勝った集団の攻撃を受けたので、自分達の文明を守ることができなくなってしまったのです。

参考文献

阿部慈園『比較宗教思想論1インド』北樹出版、一九九五年。
近藤英夫「インダス文明」『インダス文明展』NHKプロモーション、二〇〇〇年。
寺村光晴「考古学上における貴石の出現―硬玉・琥珀の場合―」『新世紀の考古学』纂修堂、二〇〇三年。
中村　元『古代インド』講談社学術文庫、二〇〇四年。
原田淑人『古代人の化粧と装身具』東京創元新社、一九六三年。
堀　晄他『古代ペルシャ展』岐阜市歴史博物館、二〇〇二年。
サイードゥル・ラハマーン「インダス文明」『インダス文明展』、二〇〇〇年。
R．S．ビシュト「インダス文明研究」『インダス文明展』、二〇〇〇年。

あとがき

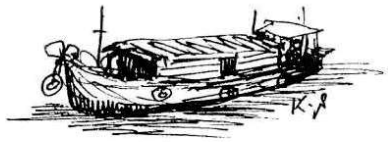
当誌のタイトルとなっている「まんじ」について、中村　元氏は次の通り述べておられますので紹介します。

「まんじ卍」は後代のインドでは幸福のしるし（スヴァスティカー）として、ヒンドゥー教、ジャイナ教、仏教を通じて用いられるが、すでにインダス文明時代の人々がつかっていた。この卍が仏教を通じて日本にも伝わってきたので、今日でも日本のお寺には卍が見られるし、中世から近世にかけての武家の用具にも卍が記されている。

この卍は現代インド人の生活一般にも普及しているが

それは卍ではなくてナチス・ドイツの標幟（旗印）であった逆卍である。

皮肉なことに、卍の起源は、ユダヤ人の属するセム族のうちにあったといわれている。



虎変する韓国

新井　宏

私はずっと「君子豹変」の後には「小人虎変」と続くのだと思っていた。「君子豹変、大人虎変」と知ってからも、君子は「豹変」できなければならない、すなわちトップたる者は、昨日までのことに囚われず、突如、逆向きに走れないといけないなどと力説してきた。

そのように「君子豹変」を誤用していると、「虎変」とは心狭く逆上してしまうイメージになる。本来の意味、すなわち「虎が秋になり見事な紋様に変身する様」とは大分異なり、虎としては迷惑至極なことであったろう。

虎変する韓国。優雅な変身なのか逆上にすぎないのか。

いま韓国にいると現代史に遊んでいるのを実感する。過去の歴史に遊ぶのとは異なり、とにかく岡目八目でハラハラしながら事態の進展を見守れる面白さがある。中国、北朝鮮との関係がどうなるのか、いや韓国自身がどうなって行くのか。それが日本にどんな影響をもたらすのか。そして、その結末をはたして私は見ることができるだろうか。

かって、ベルリンの壁が崩壊した時に思った。生ある内にその結末を見ることができるだろうかと。勝負はあっと言う間であった。生きている内に天皇陵を掘って欲しいとの願いはいまだ叶えられていないが、ベルリンの壁の崩壊につづくソ連の崩壊まで、あらかた見てしまった。だから今度の歴史ゲームの結末も見れるだろう。

韓国では、日本で祖父母と孫の世代間で起きた変化が親子の間で起こり、その急変貌ぶりはオーバーランさえ起している。例えば、教育ブームの過熱は、世界一の大学進学率となり、高校の卒業者数よりも大学定員が多い

状況を生みだした。出産率も一・一七人まで下がり日本の一・二九人を一気に追い越した。晩婚化も激しく進み、結婚が年三十二万組なのに離婚が十三万五千組もある。自殺率も日本に肉薄している。それは必然的に先進国と後進国の奇妙な同居をもたらしている。

政治の変化も激しい。一九九二年にはじまった文民政権も三期目の盧武鉉大統領になると、労働運動や反軍事政権運動で育ったアマ集団の政権と化し、左傾化しはじめる。攻める側の論理を政権内に持ち込むのであるから、政治は混乱し安定とはほど遠い。理念を掲げ成長より配分に重点を置く施策は「先進国になる前に先進国病にかかってしまう」と言われる始末である。マスコミや野党のハンナラ党は、こんな状態では経済が持たないと大合唱をしているが、盧大統領は強気な見通しを述べつづけている。

しかし、最近の状況は深刻で、日本の成長率さえ下回っている。まだ日本の所得水準の半分にもとどかぬ韓国では、日本より高い成長率が必要である。それは、新卒労働力吸収ばかりでなく、日本の三倍にも達する農業人口比の是正や、中小企業の生産性向上による余剰労働力吸収に、最低でも五パーセントの成長が必要だからである。それが二・七パーセントにとどまったのであるから悲惨である。

その上、「権限はあるが責任のない」大統領スタッフに海千山千が群がり、鉄道公社のサハリン油田開発や道路公社の行淡島開発などで相次いで疑獄を引き起こしている。持ち味だった清潔さなどすっ飛んでしまい、青瓦台(大統領スタッフ)と政府と与党のウリ党の間に責任のなすりあいが起こっている。

そもそも盧大統領は、汚職体質のハンナラ党や大企業に対して、清潔さを売り物にして大統領選を戦ってきた。しかし後になって見ると、盧大統領側にもかなり汚れた面があったことが浮かんでくる。例えば当初、ハンナラ党総裁の李会昌の方がはるかに優勢であったが、子息達の兵役忌避疑惑に苦しめられ、わずか四十万票の差で惜敗した。しかしこれが後に仕組まれた疑惑であったことが判る。また国会議員選挙でも、清潔を売り物にする盧大統領派にむしろ選挙違反が多い結果がでた。

高卒で弁護士出身の盧大統領は、金大中前大統領の圧倒的な地盤・全羅道の支持と都市部を中心とする革新派の支持をあわせて当選を果たすが、当選するや周囲を革新派でかため、全羅道の支持グループを切り捨てる。いわば裏切りである。これに怒って、全羅道派がハンナラ党と共に起したのが一年半前の大統領弾劾事件である。

しかし、これが野党側にとって裏目にでた。弱い大統領いじめとみなされたこともあるが、弾劾決議に韓国の国民は怒ったのである。なぜ怒ったか。国会乱闘場面が

海外に報道され、恥ずかしい思いをしたからである。辱められたり、馬鹿にされると韓国の人たちは「虎変」する。それが国会議員選挙で盧大統領側に圧勝をもたらし、ついで弾劾無効も勝ち取ってしまう。盧大統領は強運だ。彼の経歴を見ると、なぜか悪手を打って危機に見舞われると、神風が吹いて逆に得点をかせいでいる。

盧大統領は政権発足と同時に青瓦台(大統領府)に「コードの合う」アマ集団を集める。その結果、特権的な労組による労働争議が頻発するようになり、社会経済が混乱に陥り、アマ政権はスタート直後から右往左往し始める。いわば韓国の先進国部分を主導した政経癒着の経済に反対して生まれた盧政権の政治は、韓国の後進国部分を代表するひずんだ構図となったのである。

これでは経済がうまく行くはずがない。そうでなくとも工場が中国に流出し、雇用が減少しているのに、頻発する争議や反米的な情緒が外資導入を阻害し、投資の停滞を招く。働く場の創出が最優先課題と言いながら、規制がむしろ強化され、国内の設備投資は遅々として進まない。また規制強化はそこに利権を生み、側近の汚職を誘発することになり、人気が急落し始める。だから人気回復のため、国民向けの受けの良い話をせざるを得なくなっていたのである。

日本なら人気が落ちれば首相の首をすげ替えればよい。しかし韓国の大統領は三権を超越した専制君主的な存在である。李朝以来、永年親しんできた君主制の伝統のもとでは、大統領は天皇にも似て文化や社会面でさえも第一人者の役割をはたさなければならない。大統領が道徳を語れば、それを奉って報道する国柄であるから、何とか人気を回復してもらわねば困る。

かくして出てきたのが、三月一日の対日強硬発言である。三月一日は日韓併合下の一九一九年に起きた大規模な独立運動の記念日にあたる。そこで盧大統領は、それまでの公約であった「在任中は歴史問題を外交問題として提起しない」という立場から「豹変」する。折から島根県の「竹島の日」制定問題が韓国内を渦巻いていた。毎朝、放送開始に先立って国歌とともに独島(竹島)を大写しにする国である。その常識からすれば、「日本はけしからん」と大合唱になっていた。

人気向上という面からは、対日批判は絶対に受ける。韓国の後進国部分が共鳴し、先進国部分の不満のはけ口になるからである。これに便乗しない手はない。

事実、この強硬姿勢によって下がっていた大統領支持率が十パーセント以上も跳ね上がった。これが国内向けの人気取りであったことは、外交当局にまったく事前打ち合わせもなく、大統領とそのスタッフだけで作文されたことから見ても明らかであろう。当然、外交担当部門

から異議が噴出するが、なにしろ絶対君主制の国である。外交当局は辻褄合わせに奔走せざるを得なかった。

一方、相手方の日本も困惑し、強硬意見も飛び出す。その中で、小泉首相も意見を求められ、強硬意見に同調するかわりに、「国内向けの発言でしょう」とやってしまった。ずばりその通りなのだが、外交的には強硬反論の方がましだったかも知れない。

最も痛いところを突かれた盧大統領は「虎変」する。そして三月二十三日には「国民への文」で宣戦布告にも等しい口調で「断固として是正を要求する」とこぶしを振り上げてしまった。

断固として対処しても、日本政府が竹島を放棄するはずもなく、検定を取り消すはずもない。外交とは国益を代表して妥協を図り実利をとる場である。下交渉もなくトップが強硬発言をすれば、交渉者の手足を完全にしばってしまう。守りを固めるべきゴールキーパーが攻撃の前線に出たようなもので、ゴールはがら空きになってしまった。

さすがに韓国国内からも厳しい批判が生じる。日韓関係が冷え込めば、日本も困るが韓国はその比ではない。日本にとって韓国への輸出は全体の五パーセントにすぎないが、韓国にとって日本からの輸入は二十パーセントにも達している。これが韓国の先進国部分の本音だ。

韓国の経済は、日本に追いつくにはまだ大分距離があるのに、低賃金の中国からは激しくおい上げられている。良いとこ取りのできる大企業だけは日本の水準にあるが、それを支える中小企業が全く弱い。無国籍的な大企業が業績を伸ばせば伸ばすほど、設備や部品の面で日本からの輸入が増える構造にあり、現に対日貿易は二百億ドルもの大幅赤字である。そのため中小企業の育成が急務だと叫んではいるが実効はあがらず「中小企業の事務職員の多くが大企業の現業員になりたがっている」ほどである。それは韓国の中小企業が労賃の安さで成立した経過があり、低賃金の中国に脅かされ体力消耗し、生産性向上に遅れをとり、技術面でさえ中国に遅れはじめたからである。大企業だけでは働く場が限られ国が持たない。

経済運営に対する不満は頂点に達した。それに対して、経済はうまく行っているというのが一貫した政府の説明であった。しかし実態はいかんともしがたい。そしてそんな状況の中で強硬声明を出し、外交的には何の見返りもないボールを投げてしまったのだから、さすがに批判が渦巻きこんどはその対処に追われる。しかし盧大統領はここでも強運であった。中国で吹き荒れた対日批判で救われる。だが、盧大統領の暴走はまだ続く。

韓国人はほめられるのが大好きだ。ある韓国のジャーナリストは言っていた。韓国人が「いつも自分が偉いと

自慢ばかり言っているのは、本当は自分に自信がないからなんだ、よその国があまり偉いと言ってくれないから、自分で云ってしまおうとむきになる」と。いわば劣等感の裏返しではあるが、強大国に囲まれ、民族意識にでも訴えなければ、国のアイデンティをまもれなかった状況があったから無理もない。

このような国柄であるから、民族意識に訴えた強硬姿勢は絶好な人気取りになる。そしてその行き着くところは、自己満足的な強国意識の高揚である。さすがに、米国、日本、中国、ロシアの強国に囲まれて、自らを強国に位置づけることはできないが、それでも経済力では世界の十位にあり、中強国といえないこともない。そこにでできたのが「北東アジア均衡者論」である。

「北東アジア均衡者論」とはひとことで言えば、強大国の間に立って、北東アジアの葛藤調整は韓国が行おうという、韓国人好みの構想である。しかし現環境の中でそれを唱えれば、必然的に米国との関係は悪化し、親中国、親北朝鮮の色彩を強めることになる。事実、韓国は中国との軍事協力を進め、韓国駐在の米軍の他地域出動に制限を加え、駐韓米軍への防衛分担金を一方的に削減する等の行動にでている。そのため米国内には韓国は既に同盟国ではなく、軍事上の敵にまわったとの極論さえ出始めている。

しかし盧大統領はどこか楽観している風があった。状況によって説明を使い分けながら、大統領にまで登った経歴を持ち、説得力には絶対の自信があるからである。しかし大衆相手の説得術が、厳しい国際関係の中で通じるはずがない。いくら弁明しても、相手方が納得するわけもないのに、十分に理解を得たかのように国民の前では振舞う。

国民に受けの良い発言を繰り返せば、そのあとで不必要な譲歩をせざるを得なくなるのがの外交の常である。イラク派兵問題がそうであった。さんざん抵抗して、米国との関係が悪化すると、こんどはそれを補うかのように大部隊派兵を決めざるを得なくなった。早く反応した日本が限定小規模にもかかわらず高く評価されたのに、英国に継ぐ大規模の派兵にもかかわらず無視されているのが韓国だ。国民向けの発言が、国際的な利害調整に役立つことなどあるはずがない。

そんな状況の中で飛び出したのが谷内次官の発言である。「日米は情報を共有しているが、米国が韓国を信じていないため、日本が入手する北朝鮮情報を韓国と共有するのが難しい」と非公式に直言したのである。盧大統領はまたもや痛いところを突かれ「虎変」する。そもそも非公式の場で、出された発言について公式に抗議することなど常軌を逸している。それはひとえに、最もいたいところを突かれたことに対する感情的な反発であ

よりも親和的であり、中国が北朝鮮により強い姿勢を取ろうとしても、韓国より強い姿勢をとるわけには行かないと嘆いているほどである。そこには万一の戦争となれば、通常兵器だけでもソウルは壊滅的な打撃を受けるから、北を挑発するわけには行かないとの切実な本能があるだろう。しかしそこに見え隠れするのは、北朝鮮との統一を果たして核を入手しようとする潜在意識である。それが実現すれば「北東アジア均衡者論」も現実味を帯びてくる。

貿易パートナーとして米国よりも中国が大きくなっている。これからは米国よりも中国だとの錯覚もある。その中で、民族意識を刺激すれば、韓国はますます親中国、親北朝鮮になる。これを北朝鮮が見逃すわけがない。北朝鮮は体制をかけ、生命の安全をかけ、米国から何とか譲歩を引き出そうとしている。揺さぶりをかける相手は韓国である。だから韓国の若者との交流では選りすぐった美女を繰り出し、六カ国協議への復帰についても、中国を経由せず、金正日から韓国へ直接伝える大サービスである。アマ集団の政権は北朝鮮に翻弄されている。

自尊心の高い韓国としては、日本に替わって先進国の立場で中国に近づきたいのが願望である。しかしそれがうまく行くほど韓国は先進国化していないし、大国でもない。第一、米国や日本と言う巨大な市場があって、中

った。

いま盧大統領は「北東アジア均衡者論」の弁解にやっきとなっている。それは一時的には受けたが、このところ韓国内でもさんざんだからである。結局、六月十日の米韓首脳会談では、同盟堅持を自ら言い出すしかなかった。その上、日本とうまくやれと釘をさされ、成果の望めない日韓首脳会談に臨まざるを得なくなった。

ところで、この「均衡者論」には、歴史に学んでいないとの厳しい指摘があった。似た状況で似た行動をとった事例が、二十世紀の初めにポーランドで起こっていたからである。その頃、ポーランドは国民に人気の高い自主路線を走り、ロシアとドイツの「均衡者」を務めると言っていたが、結局はロシアとドイツによって分割されてしまった。その経験に学んだポーランドはいま何をしているか。イラク派兵では真っ先に米国について行っている。それが歴史に学ぶということだ。

似た事例は同じ頃の李朝末にもあった。清国の支配を逃れる過程で、ロシアについたり、日本についたり、あるいは米国に頼ろうとしたりして、国論が分裂、消耗を繰り返し、結局は日本の植民地となってしまった。

さて「北東アジア均衡者論」の行方である。いくら弁解しても、それは必然的に親中国、しいては親北朝鮮への道である。韓国の北朝鮮に対する姿勢は、いまや中国

国は安価な労働力を売りまくり、成長することができているのである。中国が米国や日本を切ることなど想像もできない。その中で韓国が中国に近づいても、巨大な中国が韓国の小さな市場に満足するはずがない。中国の補助的な経済圏に組み込まれるのがオチである。

韓国の人たちは歴史を無視している。韓国が清国の属国であった事実を。中国が台湾を自分の領土だと主張しているのは、かつて清国の領土だったからであり、共産党政権がチベットを併合したのもチベットが清国の属領だったからである。しかも、チベット弾圧で実績を上げた胡錦濤がいまの中国の国家主席である。「北東アジア均衡者論」が如何に歴史に学んでないか判るであろう。

状況から見て、韓国では盧大統領の路線が次期の大統領に引継がれる可能性はない。オポチュニストの本質が露呈し始めたからである。現に四月末の国会議員補欠選挙では、反日強硬声明で盛り上げたにもかかわらず、完敗してしまった。また六月二十日に行われた日韓首脳会談でも、肝心の竹島問題を話題にすることさえできず、失望が広がっている。ひとり相撲をとって転んでしまったわけだ。

次期大統領はおそらく盧武鉉大統領の弾劾失効期間に大統領代行をつとめた高建元国務総理がでてくるであろう。彼は代行時代、調整役に徹し与党からも野党か

らも一定の信頼を得たが、大統領復権と同時に政界を引退してしまった。盧大統領の意向を受けてのことだったが、韓国には彼のような調整型の政治家が貴重だ。いずれ与党からも野党からもラブコールがかかるにちがいない。

しかし高建が三年後に出てきても、手遅れかもしれない。韓国はいま中国と日本と言う大樹にはさまれ、ひょろひょろでも良いから何とか頭を出して行かないと立ち枯れてしまう状況にある。立ち枯れは、中国に飲み込まれる道だ。時間的な猶予はない。

「虎変」する韓国。それが真の意味での「見事な変身」となるためには、中国と共鳴する韓国の後進国部分を切り捨て、田舎者から脱皮して行かねばなるまい。経済面での先進国化は進んだが、政治面で後進国性を払拭するのは容易ではない。日本が竹島問題を国際司法裁判所に提訴しようとしていることさえ知らされていない韓国の国民。既に実効支配している独島(竹島)については「知らん振り」するのが得策なのに、自ら騒ぎ日本に提訴の口実を与える愚を冒している。これは全て、韓国の後進国部分のなせる業である。はたして韓国は政治的にも優雅な変身を遂げることができるであろうか。韓国という現代史のゲームの現場にいると全くエキサイティングである。

花火の町瀏陽をたずねて

吉田忠雄

私の勤務する足利工業大学は平成十八年四月から通称「花火大学院」を開設することを決めた。私は、その学生募集のために中国湖南省にある瀏陽を訪れることになった。瀏陽は花火の町として知られていた。私は何回か中国を訪れており、いくつかの場所を訪れている。

しかし、瀏陽ははじめてである。助教授の丁大玉さんと図書館に行き、世界地図を借りて瀏陽を探した。中国南東部の地図に湖南省はあった。省都は長沙である。長沙の東約六十キロメートルのところの山間に瀏陽があることがわかった。

丁さんは、十年前に南京理工大学から法政大学工学部の私の研究室に留学してきた人である。丁さんは、その二年後に日本工機（株）という火薬製造会社に入り火薬類の研究をしていた。丁さんは「花火大学院」の要員として本年四月から助教授として採用された。

蘇州にいる毛偉さんに瀏陽の花火会社のことを調べてもらった。すぐに毛さんはインターネットで調べ、その結果をEメールで送ってきた。そして、偉さんのお父さんの毛鳳忠さんが、いくつかの花火会社と折衝して、私たちの訪問の手配をしてくれた。

毛鳳忠さんは私が一九八〇年に初めて訪中したときに通訳をしてくれた。それ以来の友人である。毛鳳忠さんは私の著書の何冊かを中国語に翻訳してくれた。一九八五年には私は西安の毛さん宅を訪問し、奥さん、娘の英さん、息子の偉さんと会っている。二人は当時小学生であった。

日本からは私と丁さんが瀏陽に行くことになった。現地について調べてもらった毛さんにもついてきてもらうことにした。結局お父さんの鳳忠さんが同行してくれることになった。ベテランの日本語通訳である。

訪問期間は五月一日から五日までである。毛鳳忠さんの勤め先も連休があり都合がよかった。四月一八日に大

津で花火の国際シンポジウムがあり、私も出席した。そこで瀏陽にある中国国立煙火検査所の譚愛喜さんに会い、そこも訪問することにした。

毛鳳忠さんからFAXが届き、「瀏陽の慶典烟花という会社がシンポジウムの花火大会に花火を送ったが、渡航ビザが下りなくて行けない。何とか打ち揚げてもらえないか」と言ってきた。大会の世話役の国友繁明さんに連絡したところ後から無事打ち上げたと回答があった。

シンポジウム会場に商品展示があり、新芸術烟花という瀏陽の会社が出品していた。ところが人がいないので近くの人に聞いたところ、ビザが下りないので来られなかったとのことであった。パンフレットと名刺があったので貰って、Eメールで連絡した。名刺にあった陳佳さんからただちに返信があり、来訪を歓迎するとのことであった。さらに毛偉さんの電話番号とEメールアドレスを伝えて連絡をとってもらった。

後でわかったことであるが、これらの二つの会社は、毛さんが訪問先として選んでくれた会社であった。

結局、瀏陽では四つの花火製造会社と一つの花火検査所を訪問することになった。折から、中国では大規模な半日デモがあ、回りの人は心配したが、私は中国人と友好的に付き合ってきたので、心配しなかった。

五月一日十五時に丁大玉助教授と共に成田を立ち、上海で毛鳳忠さんと合流して、二十二時に長沙空港に着いた。上海空港は国際空港（浦東）と国内空港（虹橋）が分かれており、車で一時間の距離があり不便である。

長沙空港には、メールのやり取りをした新芸術烟花の陳佳さんが車で出迎えてくれた。約一時間で瀏陽の神農山荘ホテルに着いた。このホテルは瀏陽では最高級ホテルだそうである。

疲れていたが、私より若い毛さん（六十歳）、丁さん（四十七歳）、陳さん（二十七歳）の誘いで、ホテルの食堂で夜食をとった。わんたんめんと餃子とビールである。わんたんめんも餃子も美味かった。

夜中の一時ころ、食堂を出たところの段差で、足を踏み外し、ふくらはぎの筋を痛めた。痛いので、はじめどうなることかと心配した。丁さんがホテルのフロントから塗り薬を貰ってきてくれた。

翌朝九時に陳さんがホテルまで迎えに来て、新芸術烟花に社長の張紹年氏を尋ねた。張社長は四十歳前後である。花火関係に二十五年も身をおいたベテランである。昔日本の清水武夫先生の本「花火」の中国語訳で花火の勉強をしたそうである。

張社長の息子は高校生だそうである。張社長自身は高校卒であるが、これからの人には、科学・技術の教育をしたほうがよいと前向きである。張社長とは四方山話をした。陳さんもいろいろな話題を提供してくれた。

瀏陽市は人口百三十万人、花火工場が七百から八百あり、世界の花火の六十%を生産している。日本への輸出は多くはないが、最近日本の福山煙火と国際火工と取引があった。

懇談後、建設中の花火工場を見学した。二年前から建設をはじめ、二年後に完成予定だそうである。一部は既に稼働している。広大な丘陵地帯の工場敷地に、トタン屋根の回廊が延々と張り巡らされている。この見学は工場の一角に立って工場中心部を遠望するにとどまった。

中国では、湖南省、江西省、広西省および広東省が花火の主要な生産地であった。しかし、広東省では花火工場の事故が多発し、大勢の人がなくなったので、中国政府は広東省での花火の生産を禁止した。工場を広大な丘陵地帯に移し、安全な生産体制をとることが中国政府の政策である。

昼は瀏陽の裏山の谷間にある西湖楼という有名なレストランで湖南料理をご馳走になった。湖南料理は辛いのが特徴である。内陸であるので、海の魚や生野菜は食べない。スープが美味い。最後に大きな川魚の姿煮が出てくる。これもかなり辛い。

午後は、瀏陽にある花火の専門学校の校長先生である欧陽衛国先生と新芸術烟花の事務所で懇談した。先生は以前張社長と同じ会社で働いていた。後に花火関係の学校を作った。六五歳である。

欧陽先生は、昔日本の芳賀火工で花火製造技術を学んだ。毛さんの通訳で話が進められたが、正確なことはわからなかった。今後文通によって、瀏陽における花火教育の実態を知りたいと思っている。

欧陽先生と懇談後、国立煙火輸出入検査所に譚愛喜部長を訪ねることになった。譚部長は連休で長沙の自宅に帰っていたが、わざわざ出てきて会ってくれた。同氏は、四月十八日に大津市で開かれた第八回国際花火シンポジュウムに出席して研究を発表した。私はこのとき譚部長と会って中国行きの計画を話してあった。

この検査所の実験施設を見学した。きれいな部屋に多くの近代的検査器機が設置されていた。一大輸出産業である花火の安全に対する中国政府の意気込みが感じられた。

私は、今までに何冊かの爆発安全と環境保全の本を書き、それらは毛鳳忠さんによって中国語に翻訳、出版されていたので、それらを譚部長に送ることを約した。

夕食は、陳さんが欧陽先生を含めてわれわれをご馳走してくれた。欧陽先生は酒がお好きなようである。私には白酒を進めてくれた。「白酒のアルコール分はどれくらいですか」と聞くと「四〇%程度です」と言われたので飲むのをやめてビールにした。昔中国に来たときは、若かったのでアルコール分が六十%近い茅台酒も飲んだが、今は飲めない。

欧陽先生は、ポケットビンに入った褐色の酒をコップに注いで楽しそうに飲んでいた。「何という酒ですか」と聞くと、「薬草酒で、三五%以上あります」という答えが返ってきた。

五月三日九時、赤色半そでシャツの人が高級車で迎えにきた。実はこの人は張斌さんといい、金正烟花集団社長（三六歳）であった。聞いたところでは、金生烟花集団は一九七六年に叶金生氏が創設した会社で、五人の子供たちが要所を固めている。張斌氏は金生氏の娘婿で、貿易を担当している。金生烟花集団は、八箇所に工場を持ち、千五百人の従業員を擁する大企業である。

生産された花火の九割が輸出で、日本との取引は殆どない。

張副社長によれば、花火生産は古来からの方法を用いており、現状では、花火博士は必要ないとのことであった。

現在の中国花火業界の課題は原料コストと安全であると言う。特に色花火の原料と過塩素酸カリウムの値段が高いことが問題である。後で陳佳さんから現在中国では花火原料の価額が高騰しているという話を聞いた。

金生烟花集団の工場は残念ながら休み中という理由で見学できなかった。金生烟花集団本社は瀏陽市の中心部にある。そのはす向かいのレストランで張副社長から昼飯をご馳走になった。

午後は二時から長利出口烟花公司の工場を訪問した。曾副工場長をはじめとする工場幹部が応対してくれた。この会社は固定客に花火を供給し、特に新しい顧客を開拓はしていないということであった。

工場の一部を見学させてもらった。吹出し花火の製造の最終工程では、女子従業員が器用に紙を花火筒に貼っていた。花火の星の製造工程では、どろどろに溶いた星の原料をパイプに詰め、これを押しだして円筒形の星の形にしていた。そして、湿った星は外で簀（すのこ）の上に並べて天日乾燥していた。

最近読んだ花火の本によれば、このような星は主としてローマンキャンドル（乱玉）用の星として用いられる。穏やかな感じの工場であった。恐らく、この工場は中国の従来型の花火工場で、見学した他の二つの新しい工場と異なると思われた。玩具花火の工場であればこのような工場でよいのではないかと思った。

帰路に瀏陽吉秀烟花工場に寄った。残念ながら社長が居らず、会えなかった。この工場は日本の花火会社との合弁会社であるが、日本人は来ておらず、中国人だけで運営されているとのことであった。

その日は、毛さん、丁さんと私の三人で、瀏陽の町で夕食をとることにした。

昔は中国の人は一人で外国人と歩くことは禁止され

ていた。ある時期からこれが解禁され、毛さんと二人で北京の町を歩いたことがあった。北京の下町のあまりきれいでない食堂で昼飯を食べた。それを思い出したからである。

なかなか食堂が見つからず、毛さんが町の若者に聞いて探した。似たような間口の食堂が並んでいる一角があり、その中の一軒を選んで入った。

毛さんと丁さんが選んでおかずを注文した。ご飯は竹筒に入って居る。これはこの食堂の名物であるらしい。

瀏陽のご飯は少し固い。五月二十日ころの朝日新聞で湖南省で古代米が発見されたという記事を見た。古代米は少し固かったのかとふと思った。おかずは相変わらず辛い。私だけビールを飲んだ。他の二人は酒が飲めないのだからしかたがない。

帰り道、町はまだ宵のうちで、歩道上では子供たちがローラースケートで遊んでいた。大人たちは初夏の季節の夕方を楽しんでいるようであった。瀏陽河の橋の上を通ると、川下で花火があがっていた。花火の町瀏陽では夜中まで花火があがっている。音がホテルからも聞こえる。

五月四日九時に、慶典烟花の車が迎えにきた。男の運転手と女性の案内役である。後で知ったことだが男の運転手は社長の甥で三十歳、女性は社長秘書で劉さんという二十二歳である。

慶典烟花の社長何継榮氏（四十六才）と面談。同社は一九九四年創立、現在従業員二百人である。1．3Gから1．4Sの国連分類の花火を輸出している。そのうち日本への輸出は十%で、福山煙火、球屋北原煙火、国友銃砲火薬、赤城煙火と付き合っている。これらの会社とは八年来の付き合いだそうである。

花火の輸出は主に商社を通じて行われている。日本八社、中国八社である。国友、北原とは直接取引きしている。慶典烟花の年間生産額は一千万元である。

何社長のプロフィルを伺うことができた。祖父は瀏陽で土地持ちであったが、革命で土地は没収される。継榮氏は中国革命軍に入隊、共産党に入党、中越戦争に従軍して大腿部を負傷し、除隊した。

その後花火工場の管理者となり、花火産業の民営化に伴い、慶典烟花の社長となり今日に至る。弟が技術者として援け、兄の息子二人が社員として働いている。娘（二十歳）は九月からオーストラリアに留学し、国際貿易を学ぶ予定である。

慶典烟花は、二年前から郊外の丘陵地に新工場を建設中である。二年後に完成予定で、一部は既に稼働している。

懇談後、新工場を見学した。一時間近く未舗装の道を揺られて工場に着いた。近く新道路ができ、十分で行けるようになるそうである。新工場には近代的なきれいな事務所が既に完成していた。工場への通路もきれいな中国風の塀がついて整備されていた。

工場は広い丘陵の中腹をめぐって造られ、トタン屋根の回廊で結ばれている。危険工室、中間倉庫、危険工室の順に、それぞれの間に土堤を挿んで、回廊に沿って建てられている。各工室定員一名と停滞薬量が危険度に応じて定められている。

各危険工室には、天井から水を入れたビニル袋がぶら下がっている。火災が発生したときの緊急消火のための安全装置である。

花火玉の皮貼り工室を見学した。短冊型の紙を花火玉に貼っていく。日本と同じ方法である。恐らく日本から学んだものであろう。隣が天日乾燥場（日乾場）で、さらにそのとなりに花火玉の一時置き場が造られていた。

昼は、何社長の招待で会食し、観光の希望を聞かれた。特になかったが、推奨場所はないかと聞いた。あるお寺を奨めてくれた。

約一時間半をかけて車でいったのは霜石禅寺というお寺であった。

途中三十分くらいは高速道路と瀏陽市に属する街中を走った。瀏陽市の面積は大きく、六十キロ離れた長沙市と境を接している。

この高速道路は低い丘陵地帯の間を走っているが、片側の丘の中腹には例の花火工場のトタン屋根の回廊がめぐっているのが散見される。毛さんが「吉田先生。また花火工場がありますよ」という。

途中の街中には花火会社の看板が多く見うけられる。さすが八百の花火工場を擁する瀏陽市である。

それから山道に入り、約一時間がたがた道を登った。谷川をせき止めたダムを過ぎ、さらに深い谷川べりを登ると平らな盆地に出た。さらにしばらく進むと左前方に幾重にも堂宇の重なった極彩色の大伽藍があらわれた。

下のお堂から順々に拝観した。一番上のお堂には大きな寝釈迦さまが安置されていた。

伽藍の中を下ってくる途中のお堂の前で建物寄付者名簿板を見ていた誰かが「社長と同じ名前の人がいる」と言った。たしかに寄付者名簿の筆頭に「何継榮」とある。帰って夕食のときに何社長にこのことを聞くと、「私はお寺に限らず、いくつかの寄付をしています」ということであった。共産党員でもお寺に寄付をするもんだと私は感心した。

このお寺は町から離れた山の中にある。昔の信心深い人々が建材を背負って山に入り、この伽藍を造ったことを想像して、信仰の強さを感じた。

帰りの途中で、すごい集中豪雨に遭った。さすが大陸の雨だと思った。ホテルに帰ると先ほど経験した大雨がうそのように雨の降った形跡がなかった。局地的な豪雨

であったようだ。

ホテルで一休みした後に、何社長招待の夕食会に望んだ。私たち三人と何社長、二人の甥、秘書の劉さんの計七人の会食であった。和やかな楽しい瀏陽最後の夜を過ごした。

五月五日朝六時に慶典烟花の陳さんが迎えに来てくれた。高速道路の手前で車の渋滞に遭遇した。交通事故で高速道路の入口が閉鎖されていた。陳さんは車の隙間を縫って高速道路入口まで行き、Uターンして戻り、別の道を選んだ。

このとき、数十台のコンテナートラックが止まっているのを目にした。これは毎朝瀏陽から運び出される花火をつんだトラックである。

私たちは無事長沙空港に着き、陳さんと別れて機上の人となった。上海空港で毛さんと別れ、丁さんと私は成田空港に返ってきた。

丁さんは東武伊勢崎線で足利に帰る。最終便に間に合うかどうか心配されたが、どうにか最終電車に乗ることができた。私と丁さんは越谷駅で別れ、それぞれの帰途についた。

報告書を書くために、瀏陽で撮影した二本のフィルムを探したところ、一本を紛失していることがわかった。後の祭りである。

社　告（内規）

☆　同人参加へのお誘い

私達はひろく同志の参加を歓迎致します。

「まんじ」は作品発表のための共有の（ひろば）として季刊発行しております。

同人は同人費として月額二、〇〇〇円を拠出し、雑誌発行の経費の一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆　維持会会員へのお誘い

本誌愛読者の内、一部有志の方々が、誌友として維持会員になっていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、数カ月分をまとめて前納して頂いております。

季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の紹介等を行ない、また出版記念会や「まんじ」記念号パーティーへのご案内などを差し上げ交流を行なっております。

＊同人費・維持会費の納入は郵便振替口座への振り込みを左記へお願い申し上げます。

郵便振替口座　〇〇二七〇―〇―六四五九二

加入者名　まんじ

孔孟の教え

――最近の日中問題を憂う

伊治哲

一、まえがき

「子曰、学而時習之、不亦悦乎」

「子曰、有朋自遠方来、不亦楽乎」

――太平洋戦争中、中学の教室からは朗々と論語の一節を唱える声が聞こえてきたものだ。戦争のドグマに冒されて英語を排斥する動きがあった戦時下でさえ、「漢文」はわれわれ中学生の必須科目であった。

論語・孟子を始めとする中国の古典、四書・五経から、われわれは「仁、義、礼、智、信」という人間として守るべき〝道〟を教えられた。今をさる二千五百年も昔の中国、戦国春秋時代の思想家「孔孟の教え」に、われわれは自らの身を正すことを学んだ。そして、中国という国の底知れぬ奥の深い哲理に驚嘆し畏敬した。

外寇内乱の永い歴史を経て、いま中国は共産党独裁政権のもと、世界有数の強固な統一国家としての地位を固めつつある。軍事力はもとより、経済力においても、近い将来、米国に並ぶ超大国にのしあがることは衆目の一致するところである。

中国の経済規模は、名目で日本の三分の一（二〇〇三年名目GDPは、日本・四兆三二六四億ドル、中国・一兆四〇九九億ドル）で、イタリア（一兆四六五九億ドル――ともに国際通貨基金調べ）と肩を並べている。しかしいま問題になっているように、中国の通貨・元はドルに対して過小評価されており、日本の通貨・円は過大評価されていることを考慮すれば、中国の実質的な経済規模は既に日本の二倍に達しているという試算がある。（世界銀行の試算では、内外価格差調整後の購買力平価によると、〇三年の名目GDPは、中国が六兆四千億ド

ル、日本は三兆五千億ドルで、既に一九九五年に日本を抜いて米国に次ぐ世界第二位に浮上していたとされる）

また、日中間の貿易総額は、〇四年遂に日米間のそれを凌ぐまでに急激な増加をみた（対米・二〇兆四千億円、香港を含む対中国・二二兆二千億円で日本の貿易全体に占める割合は二〇・一％――貿易統計速報）。文字どおり世界の工場としての地位を不動のものとしつつある。

今後世界の経済は益々米・中二国の動きに大きく左右されるといっても過言ではない。

これほど強大な潜在力をもつにいたった大国・中国でありながら、現在の中国に、大国としての風格、いや二千数百年前の深遠な哲理が見出せないのは何故であろうか。最近の異常ともいえる反日行動は何を物語っているのであろうか。

二、昨年の七月～八月

昨年夏、北京で行われたサッカー・ワールドカップ決勝戦での激しい侮日行為が、いまでも強烈に印象に残っている。その折筆者が綴った一文をそのまま次に引用する。

――「オリンピックとアジア・サッカー」――

（〇四．８．２９．記）

百八年ぶりにギリシャにもどってきた二〇〇四年アテネ・オリンピックは、発祥の地にふさわしく感動の渦を沸き立たせ、文字どおり世界の祭典であった。日本勢の活躍も目覚しく、〝スポーツニッポン〟の再生を思わせるものがあった。特に勝利のあとの若い選手の第一声が「声援のおかげです」と、箸り昂ぶらず謙虚で控えめであったことが一層感激の度を高めた。

国際競技は参加する国や地域の選手と観客が、勝ち負けを競いながら、互いに相手の心と技と力を称えあい、国や民族の壁を超えて友情を確かめ合う、自由と平和の場であることを改めて実感させた。

ところが、このオリンピックの直前、七月から八月初めにかけて主催国・中国で行われたサッカーのアジア・カップで、われわれ日本人にとって到底許し難い不祥事が起こった。

日本代表は中国・重慶での予選を勝ち抜いて、八月七日北京での中国との決勝戦に臨み、みごと三―一で勝利を収めた。

その予選、決勝戦を通じ至るところで、中国人観衆が感情むき出しのブーイングを浴びせかけたばかりでなく、日本人サポーターを威嚇したりモノを投げつけ、罵声をあびせ指を立てて挑発する行為に出たのだ。さらに、試合前の国歌斉唱では「君が代」に非難の声や口笛などを浴びせ、試合後は会場を取り囲んで日本人サポーターを事実上閉じ込めるなど、不穏な空気さえ漂わせた。それだけではない。決勝戦終了後、会場を離れようとした日本公使の乗った車を攻撃して損傷を与える暴挙に出た。日本選手を乗せたバスも中国人が取り囲んで立ち往生させたり、「日の丸」を踏みつけて焼き払うなど狼藉の限りを働いた。

日本政府は既に予選の段階から数度にわたって善処方を申し入れ、決勝戦後も外相が駐日中国大使に対し、「残念な行動が見られた」と強い不快感を表明した。これに対し中国側は予選の時点で「良い決勝戦になるよう、主催国としてしかるべき措置をとる。ご安心いただきたい」と確約していた。中国共産党機関紙「人民日報」も「ホスト役を立派に果たし、中国国民の〝風格〟を世界に見せる機会にする」と論評記事を掲載していた。然るになんぞや、結果はかくの如しである。

しかも、中国外務省の報道局長は「一部のファンの行き過ぎた行動には賛成しない」としながらも、その一方で「日本の一部メディアが問題を誇張し、これを政治と結びつけたことに遺憾の意を表明する」と、まるで日本側に非のあるような発言さえしている。中国大使も「一部のサポーターのことは本当に不愉快だ。中国政府として目にしたくないような行為だった」と釈明したが、一部の自国民のとった行為は中国の責任ではないとばかり、他人ごとのような言い方であった。いずれにしても、中国政府として公式且つ明確な謝罪は一切聞かれなかった。なぜ正々堂々と非は非として認め、謝るべきは謝らないのか。大国をもって自認する国としては、誠に不誠実であるといわざるをえない。このような態度は、表向きの発言とは裏腹に、明らかにわが方に対する侮辱、敵視以外のなにものでもない。

ひるがえってわが方の日本政府こそ、なぜ正々堂々と公式の釈明、謝罪を要求しないのか。されるがまま、いわれるがままに放置しておいてよいというのか。戦後六十年、一貫してわが方から謝罪外交を繰り返してきたのだから、肝心なときに「言うべきは言う」態度を堅持しなければ、日本国民のいわれなき自信喪失と、世界の嘲りを招かないとはいえないだろう。

領土拡張と世界の覇権を目指した帝国主義の時代は、今や過去の遺物である。そのような潮流のなかで、グローバル化が進めば進むほど、国と国、民族と民族との間の「信義」こそが唯一の国際秩序を保つ規範であるといえよう。最低守られるべき国際間の「信義」さえも守ることのできない国は、もとより世界をリードする国たりえないことはいうまでもない。

オリンピックにしても、万博にしても、何年かに一度世界の経済や文化の先端が一堂に会する地は、全世界、

全人類から「信義」をもって尊敬される風格ある国でなければならない。

一八九六年、ギリシャ・アテネで最初の近代オリンピックを創始した、フランスの教育学者ピエール・ド・クーベルタン男爵はこう言っている。

「オリンピックにおいて大切なことは、勝つことではなく、参加することである。その目的は征服することではなく、闘うことである」と。

三、そして今年四月～五月

あの時から一年も経たないというのに、中国はまたまた更に過激な反日行動を惹き起こした。この四月、民衆による激しい反日デモと破壊行為が中国主要都市を席巻した。四月九日北京で蜂起した大衆デモが、上海、天津、杭州など主要都市で二週間にわたって同時多発的に飛び火したのだ。

デモは学生、労働者を主体に多くの市民たちを巻き込んで数千数万人の規模に膨れ上がり、「愛国無罪」を免罪符として激しい反日抗日を呼号しつつ、遂には暴徒と化していった。日本大使館、総領事館、公邸など公的機関のみならず、商業・飲食店など民間施設にまで投石するなどの破壊行為を繰り返した。

直ちに日本政府は、過激行動の取り締まり、警備強化にあわせ謝罪と賠償を要求したが、胡錦涛主席をはじめ、温家宝首相、李肇星外相の中国政府首脳は、最後まで一貫して「非は日本の誤った歴史認識にある。中国側に責任はない」とする拒否の姿勢を崩さなかった。

北京や上海においても市当局は「無許可・違法デモは禁止する」「当局は外国人の安全を守る能力をもつ」と公言しながら、直後のデモ、破壊行為に対して警官隊が制止の行動に出た形跡は見られなかった。

新聞報道によれば、警官隊は日本大使館や公邸などを封鎖して乱入は阻止するものの、破壊行為は黙認したまま。丁重な言葉で制止放送を繰り返すだけで、強く制止行動に出ることはなかった。そればかりか、「同志たち、お疲れさま」などと、デモ隊と一緒になって国歌を合唱し、帰途につく参加者にはバスまで用意した、というのである。二十日前後になって漸く大衆行動は沈静化したものの、現在まだ余燼がくすぶり続けていると伝えられる。

こんな暴虐が許されてよいというのだろうか。誰が見ても明らかに外交ルール違反、ウィーン条約違反行為である。

四月十七日の日中外相会談で、町村外相が「我々はデモが悪いと言っているのではない。破壊行為はいかなる状況、背景があっても、国際ルールの上から認められることではない」として、誠実且つ迅速な対応を求めた。

これに対する李外相の答えは次の通りである。

「中国政府は法律に基いて物事を運ぶ。いかなる過激な行為も認めない。法律に基き在外公館、日本人、企業の安全を確保していきたい」「中国政府は一度も日本国民に対して申し訳ないことをしたことはない。今重要な問題は日本政府が台湾、人権、歴史問題など中国人民の感情を傷つけていることだ」

さらに、これら両国政府間のやりとりについての中国内各紙の報道を付け加えよう。当初四月九日、中国外務省の喬次官は日本の阿南大使の抗議に対して「心からお見舞いと遺憾の意を表明する」と答えたが、この発言は中国国内では全く公表されず、それ以後「遺憾」の表現は一切使っていない。また、四月十七日の外相会談について、「町村は日本が中国を侵略した歴史について、改めて深刻な反省とお詫びを表明」と報じ、町村外相が謝罪と賠償を求め、李外相が応じなかったことも一切報道していない。

逆に「在日中国公館や中国人の安全を確保するため、日本政府が有効な措置をとるよう強く求めた」と報じている。たしかに十五日以降、在日中国大使館、総領事館等に脅迫電話や手紙などの嫌がらせがあった。これらの行動は、中国での反日行動に対する一部特定勢力の心ない仕業と思われ、厳に慎まなければならないことはいうまでもない。しかし中国が「一連の行為は犯罪だ。日本政府が取り締まるべき」「中国公館、関連施設の正常な活動を妨げ、中国国民の生命・安全に脅威をもたらしている。日本側の釈明・謝罪、犯罪者の処罰・賠償、類似行為の再発防止を要求する」と述べるに至っては、いかに外交戦術とはいえ、ここまで論理の摩り替え、破廉恥な言動が通用するのかと、怒りを通り越して唖然とせざるをえない。〃よくも言えるよ〃とそっくりそのままお返ししたいくらいだ。

四月二十三日ジャカルタで開催されたアジア・アフリカ会議を機に日中首脳会談が実現、小泉首相・胡主席両首脳はそれぞれの立場、見解を表明し、日中友好継続で一応の決着をみた。しかし胡主席は今回の反日デモ・破壊行為について一言も謝罪せず、逆に日本が正しく歴史を認識し、反省を行動に表すことを強く求めた。一方小泉首相は反日活動に対する適切な対応を求めるにとどまった。〃にこやか小泉〃に対するに〃こわもて胡錦涛〃ともいえる両首脳の表情に、主客顛倒の日中の構図が見てとれた。

その前二十日に至って漸く、中国共産党・政府が反日デモ抑制に転じた。並行して中国政府傘下企業や上海など地方当局が、日本大使館や日本企業の被害の補償、原状回復に動き始めた。中国政府レベルでは依然として一切の謝罪・賠償は拒否しているが、今回の一連の騒動が及ぼす経済面での悪影響を懸念しての動きとみられる。

ならば何故政府として堂々と真正面から謝罪・補償に応じることを表明しないのか。表向きは居丈高な姿勢を貫き、内々にはこそこそと裏面工作に動くという、中国の姑息な常套手段が透けて見えてくる。

五月に入ってからは、中国側のデモ封じ込めもあり状況は一応沈静化している。謝罪と賠償は依然拒否しているものの、デモ被害に対しては中国政府から〝見舞金〟の支払を打診してきていると報じられている。また歴史問題についても、わが方からの共同研究の提案が俎上に上る可能性もみえてきた。

そのやさき、愛知万博に出席した呉儀・中国副首相は、中国側の申し出でによって五月二十三日に予定されていた小泉首相との会談を直前になって突如キャンセルし、予定を早めて急遽帰国してしまった。国際マナーに反し非礼な行動といわざるをえない。当初緊急の公務のためとしていたが、二十四日になって「靖国参拝に他の国が干渉すべきではない」とした小泉首相の発言（五月十六日衆院予算委員会）への反発とする見解を公式に認めた。

ようやく修復ムードが醸成されるかにみえた直近の日中関係が、またもやもとの木阿弥に戻るのではないかと懸念される。戦後六十年経った今、そろそろ彼我ともに小人（しょうじん）じみた詰り合いにケジメをつけて、〝災いを転じて福となす〟機としなくてはならないと思うのだが。

四、筆者はこう考える

ここまでは四月九日以降現在に至るまでの新聞、テレビで報道されてきた事実を、できるだけ忠実に再現したつもりである。日本側の報道であるので、その論調に多少の日本寄りの傾向がないとはいえないと思うが、中国ほどの虚偽、虚飾や隠蔽はよもやあるまい。事実に即した客観的、公平な報道であると信じている。

以下、直近二度にわたる日中間の騒動について、筆者なりの見解を述べたい。

事件の背景に多くの事象が挙げられているが、大きく総括すると、日中戦争から太平洋戦争終結までの歴史に対する認識の問題である。特に最近改定が加えられてきた「歴史教科書」と、小泉首相の「靖国神社参拝」が、著しく中国を刺激していることがある。

(1)まず「史実」について考えたい。一九三一年関東軍の暴走から始まった満州事変、それに続く三七年の日中戦争勃発から四五年の太平洋戦争終結までの十四年間、今から七十年以上も前の戦争の実態や全体像を、自ら実体験し、今なお正確且つ鮮明な記憶として保持している人が、この世にいったいどれだけいるだろうか。戦争首謀者とされた人は既に亡く、生き残りの兵士たちもかなりの高齢で、戦争体験の記憶ももはや忘却の彼方にあるといっても間違いではあるまい。人口の殆どは戦争を知らない世代で占められているのだ。

小泉首相、胡主席等、今政治の要路にある人も例外ではない。すべて戦後派で占められている。彼らは歴史をひもといたり、言い伝えを耳で聞いたりしているに過ぎず、二次、三次の情報だけに依拠しているに過ぎない。史実に忠実なものもあるかもしれないが、特に戦争史のように利害が相反する場合は、多くの場合誇張され、歪曲され、脚色されることが多いのも事実である。確かに真実はただ一つだけかもしれない。しかし六十年後の人たちは、あたかも巨象の鼻を撫でるが如くに、ぐるぐる回りをしながら、自分に利するところだけを削り取って自分史を創り上げようとしている。今生きる人たちは、彼我ともにその虚構の上で歴史を評価し批判しているのだ。「本当のところはどうであったのか？」という問いに正確に答えられる人は誰もいないのだ。

(2)次に「戦争の本質」についてである。現在のように国際秩序が曲がりなりにも確保され、世界の平和が一応保たれている時代からみれば、戦争は非常の世界、異次元の世界といってよい。戦争は軍事力と軍事力との対決の場である。勝つか負けるか、殺すか殺されるか、道は二つに一つ、その中間などありえない。正否、善悪、美醜を超越しているのが戦争である。

したがって結末は、戦争の勝者が正であり善であり美を獲得する。日本は敗戦の結果、敗者として否・悪・醜の罪過を一身に担った。後々極東軍事裁判を指して「これは勝者の論理だった」と批評しても、すべては〝後の祭り〟というほかはない。

日本は、戦後六年経った一九五一年に至って連合国との間で講和条約が調印され、翌五二年に発効したことによって、ようやく戦争の罪過が清算され、独立国家としての地位を回復した。もっとも日中間で国交が回復し戦争状態が終了したのは、それより二十年後の一九七二年になってからのことであった。（日韓平和条約は一九六五年）

但し、戦争の罪過が清算されたといっても、戦争中に犯した人道上の責任は全く別の問題であることはいうまでもない。戦争中といえども、軍事力以外の非戦闘員、一般民間人に対する虐待、虐殺などの行為は、国際法上から、また人道上からもちろん許されるべきことではない。勝者も敗者もこの罪から逃れることはできないのだ。

中国が〝誰もが認める公正で客観的な事実を立証して〟、この国際法上、人道上の罪を追求し非難し謝罪を求めるならば、日本は潔く非を認めて幾重にも頭を下げ、賠償の責めも負わなければならない。その意味で経済の側面からいえば、超大国にのし上がってきた中国

に、一九七九年以来現在に至るまで、累計三兆円を超える政府開発援助（ＯＤＡ）を供与し続けてきた経緯は正当に評価されて然るべきだ。ところが、中国国民はこの事実を全く知らされていないし、したがって一片の感謝の意も届いてはいない。このＯＤＡの七割を占める円借款供与は徐々に削減のうえ、北京五輪開催の二〇〇八年度にも新規供与を停止する見通しであるが、それを機に日中間の争点に最終的な決着をつけなければならないと思う。

多少横道にそれる。戦争責任に関連して度々引き合いに出されるのが、ドイツの戦後処理についてである。ドイツは欧州でのナチスの残虐行為を全面的に認め、六十年経った今でもことある毎に反省と謝罪の行動を繰り返している。それに比べて日本は中途半端な謝罪しかしてこなかった、という指摘である。

筆者には抵抗がある。ナチスの犯罪はそもそもある特定の他民族を根こそぎ地球上から抹殺するという国家方針から出たものであって、旧日本の戦争意図とは全く次元を異にするものであった。ナチスの場合は究極の人種差別から出発した戦争であり、旧日本の場合は国家保全と資源確保という国家存立上切羽詰まった危機感から出た戦争であった。さらに遠因を探れば、十九世紀以来の欧米帝国主義による植民地支配と人種差別に対する挑戦であったとする論もある。

そのドイツは「ナチスの罪」を認め、今でも徹底したナチス残党狩りの手を緩めていないが、ドイツ国家としては戦争犯罪は講和によって完全に清算されたものとして、堂々と軍事力を保持し発言力を強めている。ドイツはこのように自らの戦争責任に向き合ったのである。実に明快である。

さらに敢えて付言するならば、太平洋戦争の末期、東京を始めとする大都市へのアメリカ空軍による無差別じゅうたん爆撃、広島、長崎への原子爆弾投下を、アメリカをはじめとする当時の連合国はなんといって説明するのか。四十万人を超える非戦闘員、一般市民が抵抗する術もなく、ただ生け贄のように殺されていったのだ。一九四五年の東京大空襲に例をとろう。三十二万発、一七〇〇トン近い焼夷弾を投下し、死者十万、負傷者十二万人を殺傷した当時の米空軍爆撃機の乗組員は「日本人を人間とは思っていなかった」と回想している。そして「この戦争を早く終らせるためには多少の犠牲はやむをえなかった」と、むしろ誇らしげに語っている。（今年三月のＮＨＫ・ＴＶ）

また、たまたまこの原稿を書きながら読んだ新聞の一隅に、管弦楽団指揮者、大植英次氏の一文に目がとまった。――米ミネソタ管弦楽団音楽監督に就任してすぐ、被爆四十周年に初演した曲、糀場富美子の『広島レクイエム』を指揮したところ、中国人記者が『日本は加害国

なのに、被害者意識を強調するのか』と問題を提起した。『世界の戦争犠牲者を悼む象徴の曲』とだけ言い、あとは聴衆の判断に委ねたところ、騒ぎは収まった――というのである。筆者は歴史認識のこれほどの違いに、驚きを通りこして恐怖さえ感じた。

⑶第三に「歴史教科書」問題である。前述のとおり「戦争」も「歴史」も、あくまで相対論であって、絶対ではありえない。二つの目でみれば、二つの戦争観があり、二つの歴史観がある。後々の時代にいかに牽強付会しようと、唯一絶対の〝正義の戦争〟などどこにもありはしない。

歴史教科者についても同然である。今問題になっている「新しい歴史教科書」にはまえがきで次のように断っている。「人によって、民族によって、時代によって、考え方や感じ方はそれぞれ全く異なっている。国の数だけ歴史があっても少しも不思議ではない。歴史を固定的に、動かないもののように考えるのはやめよう。善悪を当てはめ、現在の道徳で裁く裁判の場にすることもやめよう……」と。

中国に愛国教育があり愛国心があるのは当然である。同時に日本にも愛国教育があり愛国心があって当然のはずである。ところが残念ながら戦後日本では、「愛国」を口にするだけで、昔「非国民」と言われたほどの異分子の語感で受けとめられ、いわば禁句、死語に等しい単語になってしまった。そもそも「国」という概念を避けてきたからである。サッカーやオリンピックの場だけの「ニッポン」になり果ててしまったのだ。戦後教育の大きなブラックホールである。

余談だが、最近中国で「来るべき中日戦争に備えよ」という識者の言葉がインターネット上に掲載されていると聞く。日本にそんなことを考える人がいるだろうか。上記のこの「国」の現状からしても想像することさえできない。

これもついでだが、「新しい歴史教科書」の現物そのものを読みもしないで、批評したり攻撃したりしているケースが大半のようだ。評論の読み齧り、聞きかじりだけで評価するにしては、あまりにも問題が大きすぎる。彼我ともにせめて現物を読んだうえで評価してほしい。

このように本来歴史そのものが、甲論乙駁が避けられない相対論なのだから、「新しい歴史教科書」においても、大きく見方の分かれるところについては敢えて両論を併記するよう手直しすべきであろう。後々の世代が、過去の歴史の動きを辿って真実を探るとともに、未来指向への糧とするためである。

それにしても、「歴史教科書」問題に関する限り、中国（韓国も含めて）の一方的な非難、攻撃は明らかに内政干渉であるといわざるをえない。繰り返すが、中国に中国の歴史教科書があるのと同様に、日本にも日本の歴

史教科書がある。もし他国の歴史教育にどうしても口を挟まざるをえない理由があるのであれば、まず自国の歴史教科書や歴史教育の実態を明らかにするのがスジであろう。独立国家としての主権は一方的独善的なものではなく、相互に認め合い並立するものでなければ成り立たないし、一方的な内政干渉は他国に対する主権侵害以外のなにものでもないからである。因みに四月二十三日日中両首脳が会談したアジア・アフリカ会議（バンドン会議）は、いみじくも「内政不干渉、人種・国家の平等」など平和十原則を掲げた会議であったはずである。

(4)最後に小泉首相の「靖国神社参拝」問題について触れる。結論からいう。

首相は参拝を慎むべきである。

靖国神社は一宗教法人である。国教でないことはいうまでもない。「人間死ねば誰もが神仏になるという日本独自の宗教観から、国事に殉じた人々や戦没者の霊に感謝の誠を捧げ、永久の平和を誓うことになんのはばかりがあろうか」といかに釈明しても、これは世界に通用する共通語にはなりえない。公私をとわず、少なくとも日本を代表する立場にある以上、どの国からも理解され信頼される行動をとることが、首相としての資格要件である。どんなに邪念のない正しい信念でも、ひとりよがりの自己満足は国益を害するだけである。どうしても参拝したいというのであれば、自宅からでも公邸からでも独り遥かに祈りを捧げることはできる。神仏はこの世のどこにでもおわしますのだから。

さらに中国（韓国も）が特に問題視するのは、太平洋戦争のA級戦犯が合祀されていることにある。一九七八年合祀されたのだが、何ゆえ合祀されたかは国民の殆どが知悉していない。筆者も不幸にしてその経緯を詳らかにしない。恐らく宗教法人靖国神社の独自の意思として祀ったものと思われる。

因みに一九七二年九月二十九日、日本側の田中首相、中国側の周恩来首相との間で調印された、日中共同声明についてふれる。その前文で「過去において日本国が戦争を通じて中国国民に重大な損害を与えたことについての責任を痛感し深く反省する」と表明した。本文には「両国の不正常な状態（戦争状態）は、共同声明発表をもって終了する」とし、「中国は日本に対する戦争賠償の請求権を放棄する」などの内容が盛り込まれた。これは「この戦争は、A級戦犯などによって引き起されたものであって、日本国民はむしろ被害者である」とする周首相の考えによったものだといわれている。中国が今もってA級戦犯の合祀にこだわり続けるのは故なしとしないのである。

戦争の正否、善悪はいかに相対論であるとはいえ、戦争の発端を開き無辜の国民を戦火の犠牲に駆り立てたこれら重要戦犯の罪は重且つ大である。対外的な責任もさることながら、心ならずも戦火に倒れた多くの兵士や国民に対してまず大罪を謝すべきであって、加害者が被害者と同列に合祀されるというのはいかにも道理がとおらない。海外からの批判をまつまでもなく、速やかに分祀されるべきである。

以上、今回の中国の反日デモと破壊行為の背景にある歴史認識と靖国参拝について、ながながと筆者の見解を述べてきたが、日中間に横たわる争点はこれだけではない。対中円借款（ODA）打ち切りの問題、東シナ海の排他的経済水域でのガス田開発問題、尖閣諸島領有権問題、さらには日本の国連安保理常任理事国入り問題等、歴史に絡む複雑な諸課題が交錯しているが、ここではこれ以上の詳細な言及は避けることにしたい。

一点だけ、国連安保理常任理事国立候補について付言しておきたい。筆者はかねてから、わが国が全世界から尊敬と権威をもって迎えられる〝風格ある小国〟であることを願い、「日本小国論」を主唱している。したがって敢えて常任理事国にこだわる必要はないと考えている。但し、現在の国連負担金は米国に次いで超大国並みの割合で拠出している。（因みに、米・二二・〇%、日・一九・五%、独・八・七%、英・六・一%、仏・六・〇%、中・二・一%、露・一・一%などとなっている）明らかに不均衡で、相応の是正を働きかけるべきであると考える。

また、今回の騒動について、中国内の非民主、腐敗、貧富の格差に対する大衆の不満の鬱積を愛国という名で外に向かわせ、天安門事件のようにホコ先が政府に向かうことを回避しようという意図があるとする観測もある。しかしこのような推測が当らずとも遠からずとしても、彼の国の内部問題である。日本の立場からあれこれ論評すべきことではない。

言えることは、中国が「社会主義市場経済」という経済面だけの資本と市場の自由を取り入れながら、共産党一党独裁のもとで民主、自由、人権という自由主義の最も基底となるべき思想を拒否している現在の矛盾を、これからいかに解きほぐしていくかということである。現に中国人民は自らの意思を政治に反映する機会をもっていないからだ。時代も環境も異なるが、今を去る百年前（一八九九～一九〇一年）、当時の清朝の支援を受けて「扶清滅洋」「外人排斥」を叫び、民衆が一斉蜂起した「義和団事件」が日本を含む欧米八カ国に鎮圧され、結果的に「辛亥革命」を経て清朝滅亡の緒となったことを思い起すのである。

五、むすび

日本、中国ともに、どのような体制上の違いがあって

も、政略や駆け引きを乗りこえて、互いに是とすべきは是とし、非とすべきは非とする、忍耐と寛容の精神をもたなければならない。過去の歴史を踏まえて未来への足がかりを掴むということは、真実そういうことなのだと思う。相互発展のためには互いに「小異を捨てて大同につく」という大人（たいじん）の心をもつことが肝要であり、そこでの基本は正しく孔孟のいう「仁、義、礼、智、信」の教えであろう。

共産主義思想は儒教と相容れないとされるが、「孔孟の教え」は主義主張以前の人倫を説いている。虚偽、虚飾、欺瞞は思想の如何にかかわらず「人の道」に悖る行為である。日本もさることながら、中国自身も自らの歴史を再認識するとともに、遠い祖先に偉大な哲人をもつことをむしろ誇りとすべきなのではあるまいか。

西欧では民族間の永い確執の歴史を克服して、政治、経済、社会のあらゆる面で大同結束する動きが加速している。それに対しひとり東北アジアのみが未だに過去の轍から脱却できず、反目と中傷のなかに足掻いている。二十一世紀はアジアの時代といわれているにもかかわらず、である。

世界のなかで最も古く、しかも人間の本然に根ざした精神文化をもつアジアの国々が、今改めて自らの先人が説く「孔孟の教え」に耳を傾けるべきではなかろうか。

論語にいう。

「己に欲せざるところを、人に施すなかれ」

「徳あれば孤ならず、必ず隣あり」

（２００５．６．７・記）

遙かなるカメルーン（八）

太田精一

（四十一）

セネガル、モーリタニア出張を終えてドアラ空港に着いた桂木は、無事の帰着を知らせるため自宅に電話した。いくらダイヤルを回しても話し中の状態だ。桂木は、十二日間の出張期間中に家族に何かあったのではないかと心配になり、慌てて空港からタクシーを飛ばし家に戻った。

「電話が通じないので何かあったのかと心配した。変ったことはなかったか」

「子供たちも元気ですし、特に変ったことはありません。ただ、二、三日前から電話が故障したみたいで、かからなくなってしまいました。マダム・ベルトランに頼んで電話局に修理を申し入れてありますけれどまだ直っていません。あなたからも電話局に催促してください」

妻の由美は、真剣な眼差しで訴えた。危険と隣り合わせの生活の中で、緊急連絡の手段としての電話は、なくてはならないものである。

「学校で子供たちが病気や怪我をした時や急に日本からの来客を家にお招きすることになった場合、電話がなければどうしようもありませんわ」

翌日、桂木は早速電話局を訪れ局長と面談した。

「二、三日前から電話がかからなくなって大変困っています。一日も早く直して頂きたいのですが何とかなりませんか」

「実は、三日前に予測しない大雨が降ったため、電話交換機が水浸しになって、関係する電話機につながらなくなってしまったのです。復帰に努めていますので、もう暫くお待ちください」

桂木は、局長の釈明を聞いて待つことにした。

それから一週間が経った。だが、一向に直る様子はな

い。彼は、しびれを切らして再び電話局を訪れた。
「あれからもう一週間になりますが、まだ電話は通じません。一体どうなっているのですか」
「部品がないため、すぐ修復できないのですよ。もう暫くお待ちください」
「いつ頃その部品は調達できる見込みですか。その壊れた交換機を通さないと駄目なのですか。別の地区にある交換機につなぐことはできないのですか」
「いつ頃部品が到着するか確約できませんけれど、もう暫くで入手できると思います。別の地区の交換機を使うこともできないわけではないのですが、やはり時間はかかります。現場を見て頂ければ、実情を理解して貰えると思いますので、現場までご案内いたしましょう」
局長は、浸水の被害状況を理解させるには、現場を見せるのが一番だと思ったのか、桂木をその場所に案内し状況を説明した。
「分かりました。しかし、大雨によって電話がたびたび不通になるようでは困りますね。ビジネスにも大きな影響を及ぼし企業にとっても極めて重大な問題です。こんな状態であれば、貴国へ進出しようとする企業も二の足を踏むことになりかねません。日本では、大地震や大火災でもあれば別ですが、十日以上も電話が通じないで放置されていることは考えられません。何んとか努力して一日も早い復旧をお願いします」
桂木は、日本を引き合いに出したことを後悔した。
局長は、悔しそうな目差しを桂木に向け、怒りを押さえるようにして桂木に言った。
「ここはアフリカです。日本のようなわけには参りません。部品も少なく、技術者も欠如しています。しかし、最善を尽くし、最優先で工事しますからもう少こし待ってください」
二日後、桂木の事務所に局長から電話が入った。
「お宅の電話は今日通ずるようになった筈ですから自宅に電話してみてください」
桂木は、早速自宅に電話をかけてみた。由美の元気な声が受話器を通して聞こえてきた。

(四十二)

三月も半ばを過ぎ、桂木は多忙を極めた。日本からの来客の接遇に加え、調査レポートや各種の報告書の作成に追われ、夜遅くまで仕事をしなければならなかった。
(そうだ。アンドルーズ・暁子さんに少こし仕事を手伝って頂くことにしよう)
桂木は、アンドルーズ夫人の協力をお願いすることにした。
半年以上前のことである。

「ムッシュー桂木、日本人の女性から電話です」
秘書のマダム・ベルトランが桂木に受話器を取るように言った。
「えっ、日本人の女性」
桂木は半信半疑で受話器を取った。妻以外に日本人の女性がこのドアラにいるなどとは想像もつかなかったからである。妻の声ならば、マダム・ベルトランも知っているので間違える筈はない。
「もしもし、ジェトロのドアラ事務所ですか」
確かな日本語だ。
「はい、ドアラ事務所の桂木ですが、今どちらからおかけですか」
「実は隣のホテル・アクアパラスからかけています。ブエア(西カメルーンの首都)に住んでいるのですが、ドアラに出て来て日本人がいると聞いたものですから電話してみたのです。もしよろしかったら五、六分以内にそちらに伺いますので、お会いできればと思います。ご都合いかがでしょうか」
「どうぞ、どうぞお待ちしております」
暫くして彼女の姿が事務所に現われた。四十才前後の聡明な感じの女性で、きれいな日本語を話し、言葉の端から高い教養が滲み出ている。
彼女は、西カメルーンのブエアに夫のアンドルーズ氏と共に滞在していた。
ブエアは、西カメルーン(旧英領)の行政の中心地である。ドアラから約七十キロ離れた西アフリカの最高峰カメルーン山の山麓にある。標高千メートル。カメルーンがドイツ領であった頃、一九〇一年から一九〇九年の八年間だけ首都となった。気候は、ドアラに比べ涼しく快適である。だが霧が多い。第一次大戦後、ドイツ領から英領となったため、英語が公用語となり住民は英語を話している。
アンドルーズ氏は、英国政府から西カメルーンの行政府に派遣された地域開発の専門家である。
夫人の暁子さんは、日本の大学を卒業後、フルブライトの留学生として米国のコロンビア大学に学んだ。その後渡英しケンブリッジ大学に留学中、アンドルーズ氏と知り合い結婚した。結婚後、国連の仕事で赴任した夫と共にタイで数年間生活。帰英後、英国政府から地域開発のために派遣された夫と共にブエアに来たと言う。
暁子さんには、夫の他に一男二女の子供と日本から来た母親がいた。
「ぜひ一度ブエアにもお出掛けください。ドアラのように暑くありません。夜には、ストーブを焚くこともあります。カメルーン山の麓にあってときどき霧が町を覆って雲海の中にいるような幻想的な感じがします。山を下るとヴィクトリアの町があってそのすぐ先で海水浴が楽しめます。大西洋に面していて波は荒いですが、比

較的遠浅ですので砂浜で子供を遊ばせるにはとても良い所です。七十才を過ぎた母がいまして、私以外の日本人と日本語で話したいと申しておりますので、どうぞいらしてください。お待ちしております」

「わかりました。お言葉に甘えてお邪魔させて頂きます。私どもは、妻と子供二人の四人家族ですが、ぜひともご主人やご家族ともども私の家にもいらしてください。日本から届いた食料品も少々ありますので、日本の家庭料理を召し上って頂けるのではないかと思います」

（四十三）

一ヶ月後桂木は、家族を連れてブエアのアンドルーズ家を訪問した。庭には芝生が植えられ、バラの花とブーゲンビリアが咲いていた。緑豊かな広い敷地の中に瀟洒な平屋建の家が建っている。

アンドルーズ家の三人の子供たちが摩耶と登の手を取り自分たちの部屋に連れて行った。桂木夫妻は、暖炉のあるリビングに案内された。だが、日中で気温も高かったので火は焚かれていない。暁子さんの母親を交え、両家族の談笑が続いた。

アンドルーズ夫妻も子供たちも彼女のことを「おばあちゃん」と呼んでいる。

家族の会話は英語である。そのためおばあちゃんには、分からないこともあるようだ。だが、アンドルーズ氏の屈託のない明るい性格が家族を温かく包み込んでいる。「おばあちゃん」もその中に溶け込んで居心地が良さそうであった。

「暁子さんのお母さんは、毎日このブエアでどんなことをして過ごしていらっしゃいますか。日本に帰りたいとお思いになりませんか」

由美が聞いた。

「主人は、もう亡くなってしまっていますし、子供は娘の暁子だけで、ほかに頼る人もおりません。どこで死んでもいいと思って日本を出て来ました。やはり娘や孫に囲まれて暮らすのが一番の幸せです。日がな孫たちの世話をしながら、周りの景色を見たり、本を読んで暮らしています」

夕暮れ近くになり、桂木の家族は、ブエアを後にしドアラに帰った。ドアラは、すでに闇に包まれていた。

桂木夫妻の訪問後アンドルーズ夫妻も時折桂木の自宅に立寄るようになった。

由美は、限られた食材を上手に使ってアンドルーズ夫妻をもてなした。天ぷら、焼鳥といったものが、メインとなったが、にんじん、玉ねぎ、きゅうり、オクラ、じゃがいも、ほうれんそうなどの野菜類は豊富であったことから調味料さえあれば、ある程度の日本料理を用意することができた。

アンドルーズ氏は、伝統的な英国の料理にこだわることはなかった。食についてはインターナショナルで、日本料理も好んで食べた。

暁子夫人は、英語はもとよりフランス語も堪能であった。桂木は、フランス語の資料の整理、抄訳、及び簡単な調査をお願いすることにした。彼女の協力によって、桂木は、年度末の繁忙期を乗り切ることができたのである。

四月も半ば過ぎ、桂木は、昼食のため自宅に帰る途中黒山のような人だかりを見て思わず車を止めた。

フランス人の女とカメルーン人の男とが何やら口論している。女の車に傷をつけた、つけないの諍いらしい。

そのうちに激昂したフランス人の女がいきなりカメルーンの男に殴りかかった。殴られたカメルーン人は、本気で怒って女の肩を突いた。女は、彼の力に押され、横向きに倒れかけた時にバランスを崩し、バックミラーの角で額を打ち血を流した。彼女はその血を拭おうともしないで、男に向かって突進し彼の足を蹴った。彼は、彼女の腕を取り、拳を振り上げて顔面を殴りつけようとした。

まともに当ったらひとたまりもない。

見ていた群衆は、彼女の身に危険を感じた。数人の男が彼を後から抱きかかえ、腕を取った。

桂木も四、五人のカメルーン人と共に二人の中に割って入った。彼女は、仲介に入った男たちの手を振りほどき、なおも殴りかかろうとした。が、桂木たちに押えつけられて身動きができなくなったため、ようやく静まった。彼女は流れる血を拭い、興奮さめやらぬ顔で罵声を浴びせ、車に乗ってその場を立去った。

もしも、カメルーン人の男の拳がまともに彼女の顔面をとらえていれば恐らく重傷を負っていたに違いない。

筋骨たくましいカメルーン人の男とまともに殴り合える筈もない。

桂木は、彼女の気の強さにただあきれるばかりであった。

フランス人の彼女には、植民地支配時代の優越感と侮蔑意識が心の底に残っていて、口答えするカメルーン人が生意気な生徒のように思えたのかも知れない。

（四十四）

三年目のヴァカンスシーズンがやってきた。

六月に入りドアラ在住の外国人は、めっきり少なくなった。

ジェトロでも七四年からようやく不健康地に勤務する駐在員に限って、三週間連続して健康地で休養することが許されるようになった。ただし、最寄の健康地に限

られている。西アフリカの場合その対象地はスペインであった。

桂木は、スペインの航空会社イベリア航空ドアラ営業所を訪ねた。ドアラからマドリードまでの最短コースは、赤道ギニア共和国のマラボ経由便である。航空賃は、最短コースしか支給されない。桂木の家族は、このコースでマドリードに行くことを決めた。

「マラボ経由でマドリードに行く場合、赤道ギニア共和国のビザを取らなければならないと聞いたことがありますが本当ですか」

桂木は、チケット購入の際にイベリア航空の職員にビザが必要かどうかを確かめた。

「いえ、ビザは必要ありません。通常トランジットの場合、そこに滞在するわけではないのでビザはいらないのです。当社の都合で、マラボからのお客さんを乗せるために立寄るわけで、目的地はあくまでもマドリードですから」

イベリア航空の職員は自信ありげに語った。桂木も、これまでの経験から、トランジットでビザが必要だったことはなかったのでその説明を信用し家族全員の航空チケットを購入した。

一九七五年六月五日早朝、桂木の家族は出国手続を終え、マドリード行きの飛行機を待った。すると、

「予定したジェット機が飛ばなくなったので、この小型セスナ機に乗ってマラボまで行って頂きたい。マドリード行きのジェット機がマラボで待っていますから」

イベリア航空のドアラ営業所長が空港まで来て、そのセスナ機に乗るように桂木を説得した。

乗客は、桂木の家族四人を含め七人だけである。

桂木は、パイロットの横、その後の座席に由美、摩耶、登の三人が座った。三人のスペイン人の乗客は、桂木たち家族の後の席である。

前夜の雨に滑走路が濡れている。雨雲が低くたれ込め視界は悪い。

降りしきる雨の中をセスナ機は離陸した。エンジン音の振動が機体に伝わって来る。雲海の中を突いて進む飛行機のガラス窓を激しい雨が容赦なく叩きつける。五百メートルほど上昇して平行飛行に入った。時折、強風が吹き荒れ、機体は木の葉のように揺れる。眼下には白波の立つ大西洋が暗く広がっていた。

一時間足らずで、マラボに着いた。飛行場には薄日が差していた。野原に滑走路が一本あるだけだ。その脇に管制塔と兵舎のような建物がぽつんと一つ建っている。

セスナ機を降りその建物の中に入ると入国審査の窓口と税関が申し訳程度に置かれていた。

マドリード行きのジェット機は、すでに到着していて

エンジンをかけ離陸の準備をしている。桂木たちの荷物はそのジェット機に移し替えられていた。

入国審査カウンターの前で搭乗案内を待っていた桂木は、入国審査官からいきなり声を掛けられた。

「セニョール桂木、エンセーニェメ、パッサ・ポルテ」(パッサ、ポルテ)

始め彼は何のことか分からなかった。赤道ギニア共和国は、かつてスペインの植民地であったため公用語はスペイン語なのだ。

入国審査官が何度もパッサ・ポルテを繰り返すうちに桂木は、パスポートのことだと判断した。

「パスポートのことか」

桂木は、フランス語で聞いてみた。

「ウィ」

入国審査官はフランス語が話せた。

桂木は、パスポートを取り出し入国審査官に差し出した。

彼は、そのパスポートをパラパラとめくってみて、すぐ机の引出しに仕舞い込んだ。

「パスポートを返して欲しい。パスポートがなければこれからスペインにも行くことができない。私のパスポートをどうしようというんだ」

「あなたのパスポートには、わが国への入国許可がない。ビザはどうしたのか。ビザなしにわが国に入国することはできない。不法入国者としてあなたを取扱う」

審査官の素っ気ない態度に取り付く島もない。

「貴国に入国するつもりで来たのではない。ドアラ・マドリード間の直行便がなかったので、トランジットのために空港に立寄っているだけだ。もうすでに荷物はマドリード行きの飛行機に積み込まれている。このままその飛行機に乗ってここを立ち去るからパスポートを返して欲しい。トランジットのためだけでビザが必要だという国は他にはない」

桂木は必死でパスポートの返却を求めた。

「他の国ではいざ知らずわが国ではビザが必要なのだ」

空港の外には、小銃を持った兵隊が多数いてものものしい警戒振りであった。

(四十五)

入国審査官との押し問答が続いているうちに桂木たちの荷物は、機体から下ろされてしまった。彼は、怒りを露わにして大声で怒鳴った。

すると空港にいたイベリア航空のマラボ駐在員が駆けつけて来た。

「ムッシュー桂木、そんなに怒らないほうがいいですよ。ここで喧嘩しないでください。場合によっては、刑務所に入れられることにもなりかねませんから。相手は

不法入国で罰金を払うよう要求しています。それを払ってひとまずドアラに帰ってください」

「罰金を払う理由が分からない。赤道ギニア共和国では、トランジットでもビザが必要の場合があると聞いたので貴社のドアラ営業所に確かめたところ、必要ないとのことだった。だから安心して来たのだ」

桂木は、イベリア航空のマドリード駐在員に矛先を転じて何とかするように強く迫った。

「当社のドアラ営業所長がそう言ったかも知れませんが現実にビザなしでは、マドリード行きの飛行機への搭乗は許可されません。強く抗議すれば逮捕すると言っているわけですからここはひとまず罰金を払ってドアラに帰ったほうが得策だと思います。ドアラの所長も空港まで出向き前後策を講じているようなので、是非そうしてください。支払った罰金については、イベリア航空として善処します」

マラボ駐在員の真剣な表情を見て、桂木もこれ以上入国審査官と交渉しても無駄だと判断した。赤道ギニア共和国には、日本の大使館も領事館もない。

服役しても救出される見込みは薄い。彼は、やむなく罰金を支払うことにした。

「いくら払えばよいのか」

「家族を含めて八万CFAフラン（約十万円）外貨で支払って頂きたい」

入国審査官は、引き出しから取り出したパスポートをちらつかせながら答えた。

「私は、この支払いはイベリア航空に請求するための立替払いだと考えているので領収書を書いて欲しい」

「分った。支払証明書を発行するので心配はない」

入国審査官は、政府の公印のある正規の罰金支払証明書を発行した。

子供たちは、冷房もない空港の入国審査官の机の前で二時間余りも待たされ、喉の乾きをしきりに訴えていた。

だが、飲物を売る売店もなかった。

「幸いにしてドアラ行きの飛行機が三十分後に出ますのでそれに乗ってドアラに戻ってください。そこで所長が待っていますから所長と相談してください」

イベリア航空のマラボ駐在員は、そう桂木に告げ、荷物をその航空機に積み込んだ。

桂木たちは、結局不法入国の廉でドアラに強制送還されることになってしまったのだ。

ドアラ行きの航空機は、来た時と違って六十人乗り程度のプロペラ機であった。機内には乗客が二十人ほどいた。

（四十六）

セスナ機で一時間かかったドアラ・マラボ間を中型プロペラ機は三十分余りで飛んだ。桂木の家族は、再びドアラ空港に舞い戻ることになったのだ。

雨はすっかり止んで、大西洋が青く光って見えた。同じ大西洋でも天気によってずいぶん異なった色に見える。

空港内の搭乗口で、イベリア航空のドアラ営業所長が待機していた。

「大変ご迷惑をおかけしました。このチケットでとりあえずアテネまで行ってください。アテネでホテルを用意しますので、そのホテルに一泊して、翌日のイベリア航空のマドリード行きにお乗りください。その間の航空賃はもとより宿泊代も当方で負担します」

所長はそう言ってザイールのキンシャサからドアラに着いたばかりのアテネ行のザイール航空に搭乗するよう勧めた。

桂木は、カメルーン政府からビジネスマンに与えられる出入国自由の特別ビザを取得していたためカメルーンへの出入国はパスポートを呈示するだけでよかった。だが、妻の由美と子供たちの出入国ビザ取得には、一週間以上の時間を要する。一旦入国してしまえば、折角取得した出入国ビザも使用済となり、改ためて取得しなければならない。そのためにスペインへの出発は、一週間以上遅れることになる。

桂木たちは、搭乗待合室で次の飛行機を待つしかなかった。しかし、マドリード行きはイベリア航空のマラボ経由しかない。そこでイベリア航空のドアラ営業所長は当日ヨーロッパに向かう他の航空会社の飛行便の空席を探した。その結果ザイール航空に空席が見付かったというわけである。

このザイール航空に乗らなければ、長椅子が十数脚置いてあるだけの侘しい搭乗待合室で一夜を明かすことになってしまう。

（とりあえずアテネに行こう。アテネに行ったらなんとかなるだろう。この際アテネに一泊し街を見学するのも悪くない）

桂木は、渡されたチケットを見て決断した。

「それではザイール航空の飛行機に乗ることにしましょう。貴社に対しては言いたいことはいっぱいありますが、いずれドアラに帰ってからにします」

桂木たちの搭乗した飛行機は、ドアラからアテネまでノンストップ。フライト時間は五時間半のDC型のジェット機であった。

乗客は少なく空席が目立った。

機内食を食べて一時間後、摩耶と登が喉の渇きを訴えたので飲物を持って来るようステュワーデスに頼んだ。

「コーラとジュースを持って来て呉れませんか」

「今は、それぞれのお客様の席に飲物を運ぶことはで

きません。私たちの休憩の時間です。もし必要であれば、自分で運んでください」

ステュワーデスとパーサーが談笑しながら桂木にそう言った。

桂木は、やむを得ず席を立って、ジュースとコーラをトレイに載せて家族のもとに運んだ。

良質なサービスを期待するほうが無理であることは分かっていた。だが、先進国の航空会社とのサービスの差を感じ、桂木は苦笑を禁じ得なかった。

夕闇迫る頃、飛行機はアテネ空港に着陸した。空港には、イベリア航空の女性職員が出迎えに来ていた。彼女は用意した車で、桂木の家族をホテルに案内した。

チェックイン後、ホテルの部屋に入るとすぐ桂木は、フロントにその日のマドリードのホテルのキャンセルをテレックスで、通知するよう依頼した。

長い大変な一日であった。

夕食後浴槽の中でくつろぎながら、桂木はその日の出来事を思い出しほっと息をついた。

翌日昼頃、昨夜のイベリア航空の女性職員がホテルに現われた。彼女は、乗用車で桂木たち家族を空港まで送り、ローマ経由マドリード行の飛行機に乗せた。

マドリード空港に着いた桂木は、入国審査を終え、通関ゲートの前で、荷物が出て来るのをじっと待っていた。

一時間待っても荷物は出て来ない。

(また荷物が紛失したのか。よほどついていないな)

そう思いながら桂木は、イベリア航空係員に問い質した。

「荷物が出て来ません。どうなっているのですか調べてみてください」

「もうお客様の乗った飛行機の荷物はすべて下しました。飛行機の中には何も残っていません」

マドリードまでたどり着いたら今度は荷物の紛失である。桂木は、〝休暇など取るな〟という天の啓示ではないかとさえ思った。

「どうして私の荷物だけがないのですか。アテネ空港では、確かにチェックイン・カウンターに預けました。途中のローマで荷物が下ろされてしまったのではないでしょうか」

「さあ、確かなことは分かりませんが、すぐ捜査し見つかり次第ホテルにお届けします」

ダカールでのエール・アフリックの対応とは、ずいぶん違っていた。しかし、桂木は不快感を隠すことはできなかった。前日来の手違いで散々引っ張り回された苦い思いがまだ残っている矢先の出来事だ。

(マラボでのトランジットするだけでマドリードに来る筈がアテネに一泊。あげくの果てに荷物までなくなるとは。)

彼は、家族を見た。家族は思いのほか元気だった。

ホテルに到着、チェックインカードに名前を記載し終えるとフロントの係員が桂木に尋ねた。

「昨夜は、予約を頂いておりましたが、セニョール桂木はホテルにご到着になっておりません。何故ご宿泊にならなかったのか分かりませんが、昨夜分の宿泊費を頂きます」

「イベリア航空の手違いで宿泊できないことをテレックスで連絡するようアテネのホテルに頼んでおいたのですが連絡は入っておりませんか」

「いえ、何の連絡も頂いておりません」

フロントの係員は、テレックスの受信記録を再度確認した。

アテネのホテルからの記録はない。桂木は、やむなく前日分の宿泊代を払うことを承諾した。

(四十七)

翌日、桂木はイベリア航空本社を訪れた。

長い間待たされた後、やっと窓口の職員と話をすることができた。

桂木は、赤道ギニア共和国のマラボでの出来事から、アテネ経由でマドリード入りをしなければならなかった経緯を説明し、その間にかかった費用の一切を弁済するよう要求した。

だが、窓口の職員には決裁権はない。交渉は進展せず時間を空費するばかりであった。

「あなたと話をしていても一向に解決の方法は見つからない。社長と直接話をしたい。社長を出して貰いたい」

桂木は、これまで鬱積していた不満が一挙に爆発し声を荒げて怒りを露わにした。すると窓口の職員は、その剣幕に驚いたのか、上司に相談、桂木を二階の応接間に案内し、営業部長に引き合わせた。

「ムッシュー桂木そんなに怒らないでください。まあコーヒーでもどうですか」

営業部長は、フランス語で穏やかに言った。桂木の説明をじっくり聞こうとする営業部長の誠実な態度に接しているうちに彼の高ぶった感情は次第に鎮まった。

桂木は、窓口で話したことを繰り返した。そして改めてイベリア航空に対して弁済を求めた。

「今回の旅行については、貴社から多大な不利益を被り精神的な苦痛、時間的な損失を考慮すれば相当程度の賠償を要求したいところです。が、私としては一刻も早い解決を望んでいますので、通常の旅費以外に払った直接的な経費についてだけ弁済を請求するに留めます」

「あなたのお怒りはよく分かりました。あなたがカメルーンにお帰りになってからフランス語、英語、もしく

はスペイン語で書いた文書にすべての証憑書類を添えてドアラ営業所へご請求ください。当社としてはできるだけあなたの意向に沿うようにします」

「私は日本人です。フランス語、英語、スペイン語などは外国語で書類作成までに時間がかかりますし、私のこの憤りを適格に表現することはできません。したがいまして日本語で書類を作成させて頂きます。貴社のようなスペインを代表する航空会社であれば、日本語の堪能なスタッフもおられるでしょうから私の日本語の書類を貴社のほうで翻訳してください」

「分かりました。ではそれで結構です。当社が大変ご迷惑をおかけしたことを改めて、お詫びします」

営業部長の謝罪を聞き桂木の憤懣やるかたない気持ちはやっと納まった。

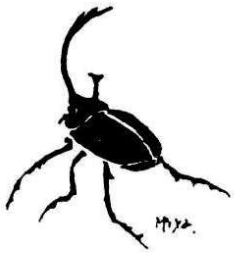
荷物は、マドリード到着二日後にホテルに届いた。その後桂木の家族は、二週間以上かけてスペインの各都市を巡り休暇を楽しんだ。

出発時の相次ぐ不愉快な出来事によって桂木はこの休暇の先行きを心配した。だが、それも杞憂に終った。

ドアラに帰着後、赤道ギニア共和国への不法入国に対する罰金、キャンセル連絡漏れによるマドリードのホテル代などの費用のすべてが桂木の弁済請求通り支払われた。

桂木は、問題のあった時の対応の仕方に先進国と発展途上国の航空会社とではずいぶん違いがあることを身をもって感じたのである。

（つづく）



漢詩

潮騒錄（四十四）

鯨游海

津波　平成十七年正月

無辜百萬拉奔浪
絶壁襲來天竺洋
人怖龍狂碎頭暴
不知神怒世蠻行

押韻・浪洋行

〈津波〉

無辜百万　奔浪に拉われたる
絶壁襲い来たる　天竺の洋
人は怖る龍狂い　頭を砕きて暴れしかと
知らず　神が世の蛮行に怒れるを

〔注　解〕

無辜＝罪のない人。辜は重罪。拉＝引っ張る。さらう。押しつぶす。絶壁＝切り立った崖。龍＝古来海や河水の守護神といわれる。龍神。碎頭＝共工という治水に卓越した神が顓頊という神と帝位を争って敗れ悲嘆して頭を不周山にぶつけて自殺した。この時、頭が砕け天柱と地軸が折れ大地が東に傾むいた。この為中国の河川は東流するようになったという（淮南子）。神＝天神。

蛮行＝アフガンやイラン、イラク戦争。9・11を始めとする国際テロ。拉致や続発する凶悪犯罪。地球環境の汚染、温暖化現象。南北、貧富、宗教等対立紛争。文明の衝突など現下人類の存在を脅かしている人為の諸悪を指す。

なお短歌の下句は源実朝の「時により過ぐれば民のなげきなり八大竜王雨やめたまへ」の下句を借りた。

☆生き来たりなお生き征かむ人間なれば
天竺竜王津波退きたまへ

足球世界選手權（一）對高句麗戰
平成十七年二月

高麗白虎百獸王
邀撃蒼狼牙爪光
流影疾驅飜鬣抗
飛球亂舞逆頭防
左旋右轉怒濤寄
合從連衡捲土翔
月下千金誰一蹴
神洲全土忽如狂

押韻・王光防翔狂

〈足球世界選手權（一）対高句麗戰〉

高麗の白虎は　百獣の王
邀撃す蒼き狼の　牙爪光る
流影疾駆して　鬣を翻がえして抗い
飛球乱舞して　頭を逆しまにして防ぐ
左旋右転　怒涛の寄せ
合従連衡　土を捲きて翔ける
月下千金　誰が一蹴ぞ
神洲全土　たちまち狂える如し

〔注　解〕

高麗＝高句麗＝北朝鮮。白虎＝北朝鮮のユニフォームは白一色で白虎を聯想した。
邀撃＝迎えうつこと。蒼狼＝蒼き狼。日本チームのニックネームでユニフォームも蒼一色。ここでは北朝鮮の白虎に対照して蒼き狼を対峙させた。
牙爪＝牙と爪。
頷聯（律詩の三、四句）、頸聯（律詩の五、六句）は夫々対句となっている。律詩（八行句）の大原則。
対句とは文章の語格、意味、位置が相対し、左右の二句（聯）が対照的に並列することによって感情や意味が相乗的に増幅する効果があり同時に漢詩独特の構成美、安定感、重厚さ等を形成する。杜甫が最も得意とした詩型である。鬣＝馬の首の毛。
合従連衡＝合従は縦に、連衡は横に連合する外交策をいう。中国戦国時代に展開された虚々実々の駆け引きは有名。前者を説いたのは蘇秦、後者は張儀。一時は成功するかにみえたがやがて秦に全て呑み込まれて了った。
捲土＝土煙を捲き上げる程の激しい勢。杜牧「勝敗兵家事不期　包羞忍恥是男兒　江東子弟多才俊　捲土重來未可知」。全は全の正字。なお足球は蹴球の現代中国語。
このアジア第二次予選の初戦。一対一で拮抗し終了間際に交替で登場した大黒将志選手起死回生のひと蹴りで辛勝、日本中が沸き返った。短歌の無碍とは邪魔がない事。

☆よろよろとゴールにまろぶ無碍の球
静寂はじけ悲鳴みちみつ

足球世界選手權（二）對婆巴璉戰
平成十七年三月

蒼狼困憊赤豺驕
欲陷不能憂色漂
悲願通天奇蹟起
迷球躑躅向門消

押韻・驕　漂　消

〈足球世界選手權（二）対婆巴璉戰〉

蒼狼困憊して　赤豺驕る
陥さんと欲して能わず　憂色漂よう
悲願天に通じしか　奇蹟起こり
迷球躑躅して　門に向いて消ゆ

〔注　解〕

婆巴璉＝バハレーン。赤豺＝バハレーンは赤いユニフォームで赤毛のやまいぬを想起させた。
困憊＝苦しみ疲れる。
悲願＝仏教用語で成就への悲愴なる決心。
躑躅＝行きつ戻りつする。立往生する。たちすくむ。
この試合、日本はホームゲーム乍ら苦戦し攻めあぐんだが、最後は何と敵の自殺点（オウンゴール）によって辛うじて勝った。奇福を呼んだのは勝利への執念か。

☆天つ風珠の通い路吹き閉じよ
ゴールの歓喜しばし止めむ

壽三戸岡道夫先生之喜壽
乙酉孟夏

昔聞紅顔負炭薪
今知赤手救君民
後生勿歎不能謁
髣髴眼前歌舞人

押韻・薪民人

〈三戸岡道夫先生の七寿を寿ぐ〉

昔聞けり　紅顔にて炭薪を負いしが
今知んぬ　赤手もて君民を済いたるを
後生嘆くなかれ　謁ゆるあたわざるも
髣髴たるかな　眼前の歌舞の人は

〔注　解〕

赤手＝素手。腕一本。裸一貫で。後生＝後から生まれて来た若い人達。論語「後生可畏」。髣髴＝①良く似た。②ほのかな。③ぼんやりした。ここでは①。
起承句で二宮尊徳を暗喩。今や「負薪読書像」は日本人共通の古典となった。謁＝目上の人にお目にかかる。謁見、拝謁。転句は「若者よ、二宮金次郎の謦咳に接し得ないのを嘆く事はないよ。何故なら……」結句「そっくり似た人が今眼前で歌い踊っておられるではないか」

☆舞え歌え桜吹雪の七寿の宴
今宵酔う人みな徳あつし

〈漢詩の流れ34〉北宋の巨星たち⑦　黄庭堅。字は魯直。

蘇軾より九年遅れて一〇四五年江西の分寧県に生まれた。号を山谷道人と称した為、黄山谷と呼ばれた。

北宋の主知的な傾向を濃厚に反映した詩人である。自然を詠んだ詩でも極めて理知的であり、屈折し鬱屈し、言辞を一直線に噴出させた唐詩とは大きく異なる。父は地方官僚で庭堅が十三歳の時亡くなり生活は窮迫したが彼の文才を愛した母方の伯父の李常に庇護され勉学に励み、二十二歳で進士に及第した。この後県尉等を経二十七歳で北京の国子監（国立大学）教授となる。蘇軾がこの頃の彼の詩を見て激賞、以来蘇軾との師弟の交わりが生まれたが、蘇軾の旧法党に属していた為官僚としては一時礼部尚書（局長）に迄上ったが政変と共に蘇軾同様浮沈をくり返し、終に配所の宜州（広西壮族自治区）で六十一歳の生涯を閉じた。世に蘇黄と賛賞された。

政治的には対立する王安石を生涯畏敬した点も蘇軾と同じである。理の中に情を盛り込む事の出来た希有の天才詩人であった。「江西詩派」の開祖とも仰がれる。

病起荊江亭即事（病より起く、荊江亭即事）

翰墨場中老伏波　翰墨場中の老伏波
菩提坊裏病維摩　菩提坊裏の病維摩
近人積水無鷗鷺　人に近き積水に鷗鷺なく
時有歸牛浮鼻過　時に帰牛有り鼻を浮かべて過ぐ

文壇に於ける老いたる伏波将軍の如き、また仏寺の中に病める維摩居士を以って任じている私。この人家に近い水たまりには鴎も鷺も姿を見せず、時々夕方になって家に帰る牛が鼻づらを浮かべて渡って行くだけだ。

老伏波とは東漢の馬援。戦功によって伏波将軍に封ぜられたが老いて旺んな名将軍を指す。維摩詰は釈迦の弟子で弁説に長じ病気見舞に来た迦葉以下の仏弟子を説破したという。これに自分を準えた。

寄黄幾復（黄幾復に寄す）

我居北海君南海　我れは北海に居り君は南海
寄雁傳書謝不能　雁に寄せて書を伝えんも能わずと謝す
桃李春風一杯酒　桃李の春風一杯の酒
江湖夜雨十年燈　江湖の夜雨十年の灯
持家但有四立壁　家を持すに但有り四立の壁
治病不藪三折肱　病を治すに藪めず三たび肱を折れるを
想得讀書頭已白　想い得たり書を読んで頭すでに白く
隔溪猿哭瘴溪藤　溪を隔てて猿は哭せん瘴溪の藤に

四立壁とは四面に壁が立っているだけの家具等が一物もない極貧のさま。

三折肱とは「三たび肱を折って始めて良医となるを知る」何度も失敗を重ね経験を積んで始めて名医になれるという「左伝」の諺。

撞木

☆プロ野球の人気が低迷している。テレビの視聴率も低下した。各局が奪い合っていた巨人戦の放映も対戦相手によっては敬遠されがちであると言う。人気低迷の原因はいろいろ挙げられるが、その一つに巨人軍の弱体化がある。伝統と人気に胡坐をかいていたツケが回ってきたのだ。金と名声を餌にすでに盛りの過ぎている他球団の主砲を巨費を投じてかき集めた。その結果、かつての日本海軍のように大艦巨砲主義に陥り機動力を失った。

☆動きの鈍い主砲ばかりを揃えたのでは、機動力が発揮できない。選手にそれぞれの役割を自覚させその力を発揮させることが大切である。このことはスポーツの世界だけではない。優秀な指導者とそれぞれの分野で専門的知識と技能を持った士気の高い構成員のいる集団がいつの時代でも勝者なのだ。明確なヴィジョンを持って若い構成員を養成したり導入したりする必要がある。伝統に胡坐をかいている集団に未来はない。

☆本誌九六、九七号と二回にわたって掲載された千坂氏の「裏切られて」は、名門関東管領上杉家の瓦解を描いた秀作である。内部の確執と当主の非情さが裏切を招いた。上杉家の名跡は長尾景虎（後の上杉謙信）に引き継がれ、幕末まで大名家として残った。だが、実質的には、戦国時代を生き残ることはできなかった。

☆プロ野球の世界でも、名門巨人が人気と伝統に胡坐をかいていればやがては管領家上杉氏の轍を踏むことになる。巨人という名跡だけを残し実質的に他球団に身売りするような事態にならないよう願うばかりである。（O・S）

まんじ　第97号

平成17年8月1日発行（非売）

発行人　三戸岡　道夫（みとおか　みちお）
編集長　太田　精一（おおた　せいいち）
事務局長　鍋屋　次郎（なべや　じろう）

（事務局）　〒223-0056　横浜市港北区新吉田町2477－3　太田善朗方
TEL・FAX　045（544）5947

（郵便振替口座）　No.00270-0-64592　加入者名　まんじ

（印刷製本）　大和印刷株式会社
〒332-0031　川口市青木1－12－20
TEL 048（254）3311　FAX 048（254）3313

表紙の絵について
仏が邪心のない童児の表情を借りて人の世にあまねく光明をもたらしてくれる。

田寺怜葦　画

まんじ

No. 98

2005.11.1

まんじ 第九十八号 目次

是非に及ばぬ……千坂精一…4
暗殺の叙事詩 一 ―源実朝―……島津隆子…19
八蔵橋……太田和貞…33
うどんげの花（その一）……三戸岡道夫…46
馬琳英（マー・リンイン）……森下征二…53
天城の鬼火（その三）……堀内永代…67
針の穴を通った駱駝（四）……鍋屋次郎…73
ある脱走……大和禎人…85
短歌二十首 砂時計……曽根竣作…88
短歌 行雲流水（十一）……石黒修身…91
連詩「記念写真」より（十四行詩三題）……松下壽男…95
ハート・トウ・ハート第三話チェイシン・ザ・トレーン……松下壽男…96
リビング・ウィル……新井宏…114
花火の歴史を楽しむ……吉田忠雄…119
古い物・遠い夢 第十二章 茶会の顚末……忠内正之…123
「三浦半島記」を歩く（司馬雑感五）……山田嘉久…130
ベンチャーの先駆者逝く―故小倉昌男氏の足跡を辿る……伊治哲…139
文化勲章に輝く赤堀四郎博士の一生……松下魏三…147
還暦からの考古学（四）玉の話（その3）……中山喬央…150
遙かなるカメルーン（九）……太田精一…156
漢詩 潮騒緑（四十五）……鯨游海…167
撞木……編集子…171
表紙……田寺怜葦
カット……宮城正彦
鈴木國男
清水トム

是非に及ばぬ

千坂精一

一

関八州に甲斐と伊豆を加えた十箇国が、室町幕府の出先機関鎌倉府の統治範囲であった。

「関八州」

とひと言でいうが、行政府のある相模鎌倉から上野・下野・常陸などは遥かに遠く、眼が届かない。

そこで、武装集団を仕立てて定期的に巡回することで、勢威を誇示し、睨みを利かせてきた。

開府から六十年余りを経て、足利体制が確立した現在はその必要がなくなったのだが、慣習は残っていた。

だから、昨今では武装集団を率いての緊張感はなく、平服姿で僅かの供を伴れての物見遊山であった。

見廻りは公方ではなく、政務を掌る関東管領だった。

いま、新緑の山径を津久井側から三増峠を越えてきたのがその集団で、馬上の武将が関東管領上杉氏憲である。

上杉氏一族は、鎌倉に三家あるので、それぞれ屋敷の字で称ばれていた。

氏憲の屋敷は犬懸が谷にあることから、犬懸入道と号していて、氏憲より法名の禅秀で親しまれている。

他の二家は、山内と扇谷にあった。

禅秀は、家祖が丹波から移住したこの関東の地に王道楽土を夢見ていたので、巡視の旅は愉しみであった。

さらに、鎌倉に居坐っていては叶わぬが、出向いて上野の岩松満純、下野の那須資之、下總の千葉兼胤の許に立ち寄れば、それぞれ嫁がせた娘に会える欣びもあった。

そのうえ、婿たちの呼び掛けで与党の国人たちが駆け付けてきて、周辺地域の様子を詳細に報告してくれるので、居乍らにして情勢を把握することが出来るし、酒宴の席では互いに胸襟を開いて結束を確認し合えるから、領袖にとってこれほど頼もしく、好都合なことはない。

このたびは、上野と甲斐を視察することにしたので、岩松満純の金山城に逗留した。

いつものように澁川左馬助や舞木太郎たちから地域の現状を聴いたあとの酒宴で、さきごろ、公方足利持氏が家祖を祀る下野鑁阿寺に詣でた帰途に、突然ここに立ち寄ったときのことが話題になった。

岩松ら上野の国人たちは、前触れもない公方の勝手な行動と、滞在中の驕慢な態度に業を煮やしたという。

身勝手で強引な持氏は、どこでも忌み嫌われていた。

「あのように無分別な公方では、先が思い遣られるわ」

岩松満純が、苦り切った顔でそう吐き散らすと、それを契機にして国人たちの不満がいっきに噴出した。

「関東の将軍だと思い上がっている公方の傲慢無礼は、いずれ幕府を蔑ろにして騒動を起こすに違いない」

澁川左馬助が、そんな不安を漏らすと、舞木太郎が、

「ならば、われらが先んじて、幕府に公方の不穏な行状を訴え出れば、巻き込まれずにすむであろう」

そう提案した。

「それはよい思案じゃ。管領様いかがでござりましょう」

不意に澁川からそう働きかけられた禅秀は、懇親の酒宴が思わぬ方向に発展したことに当惑して、

「早まって公方批判ととられては、かえって逆臣の汚名を着せられてしまう。儂も公方の我が儘勝手な振る舞いには手を焼くこともあるによって、足利将軍家の名に恥じぬよう厳しく躾ねばならぬと思っておる」

そう取り繕ったが、公方に対する国人たちの不信感が殊のほか根深いことをあらためて知らされた。

岩松満純は、禅秀を困惑させたことを悔いて、

「舅殿も、あの公方ではご苦労なされまするな」

同情することで雰囲気を和らげ、話題の区切りにした。

禅秀は、このまま逗留をつづけていると、国人たちの持氏排斥の気運が益々昂まり、ついには退っ引きならぬ事態に立ち至るやも知れぬ、と危惧されたので、このあと舅の甲斐守護武田信満を訪ねることになっているのを好い事に、予定を早めて金山城を出立した。

熊谷から荒川沿いに遡って秩父を横断し、栃本から雁坂峠を越え、笛吹川沿いに下って石和へ辿り着いた。

武田信満は、禅秀の知らせ文より早い到着に愕ろいたが、事情を知ると久しぶりの婿の来訪に相好を崩した。

その夜、禅秀は信満と酒を酌み交わしながら、上野の国人たちの様子を話して聴かせた。

「うむ。うむ」

信満は頷いていたが、禅秀の話が終わると盃をおいて、

「婿殿は、正義感のお強いおかたじゃから、そのような過激な者たちの口説きに乗ってはなりませぬぞ」

そういつになく厳しい口調で釘を刺した。

「ご懸念はご無用。わが上杉家は将軍家の外戚ゆえ、足利家とは一味同心と心得ておりまするし、鎌倉は墳墓の地なれば確と守らねばなりませぬ。ご案じ召されるな」

若者を諭すような信満の忠告に、禅秀は嗤って応えた。

室町幕府初代将軍足利尊氏の生母は、家祖上杉重房の孫娘清子であった。

将軍を補佐して政務を掌る幕府の管領は、同族の斯波、細川、畠山の三家が交代でつとめているが、鎌倉府の関東管領のほうは、関東在住の同族岩松、桃井、澁川の三家ではなく、外戚の上杉氏が独占していて、三家のうちの山内と犬懸の両家が交代でつとめていた。

禅秀の父犬懸朝宗のあとは山内憲定、そして禅秀にまわり、つぎは憲定の子憲基がつとめることになっている。

信満は、その憲基のことにも触れた。

「山内殿が公方様に追従して気に入られ、恰も管領になったような振る舞いが多いと伝聞いたしておりますが、婿殿も煩わしいことでご心労が絶えませぬな」

憲基が、まだ二十四歳の若輩で関東管領就任を焦り、持氏に取り入っていることは、禅秀も承知していた。

信満は、そのことが余程気懸かりであるらしく、禅秀が石和館を出立するときにも諄く念を押した。

「公方様が、山内殿の煽てに乗って有頂天になり、専横に過ぎれば、国人たちも黙ってはおらず蹶起するやも知れませぬ。婿殿、山内殿にはくれぐれも気を付けられよ」

禅秀は、相模川沿いに平塚方面へ下りながら、舅武田信満の心配顔を思い泛べて、馬上で微笑を漏らした。

（憲基などはなにほどのこともないが、持氏には困ったものじゃ。厳しく躾けて帝王学を叩き込めば、それで棟梁に育つというものではない。器量を備えておらねば国人たちは忠誠を誓わず、臣従も潔しとしないであろう）

そこが難点であった。

このたびの巡視は、ずっと好天に恵まれて快適だったが、遥か鎌倉のあたりは雨雲に被われていた。

二

翌朝、禅秀の帰館を待ち侘びていた常陸の小田持家が、一族の越幡六郎を伴って窮状を訴えにきたのを宥めて帰したあとで、禅秀は、

「ちっ」

と舌打ちした。

（小童めが、またちょっかいを出しおって）

越幡六郎の訴えを聴いて、内心穏やかではなかった。

禅秀が、

（小童）

と罵倒するのは、関東公方足利持氏のことである。

持氏は、父満兼が六年まえに三十二歳で早死にしたため、僅か十二歳で四代関東公方になった。

世襲というのは、たとえその地位に相応しい器量を備えていなくとも、構わず後を継げるのだから始末が悪い。

持氏がそうであった。

この十八歳の青二才は、未熟を威嚇と傲慢で包み隠し、自己顕示欲が強く、追従を好み、諫言を嫌った。

政務は管領が総轄しているから公方は飾り物とはいえ、東国武士団の棟梁であるからにはこれでは困る。

禅秀は、持氏を予てから苦々しく思っていたし、国人たちも持氏の品性に不満を漏らす者が多かった。

武田信満が懸念したように、支配者の人格が高邁でないと、その国はいつかならず分裂し、やがて滅びる。

暗君の鎌倉府が権威を保つためには、持氏の不始末を禅秀が庇い、波風立たぬように計らわねばならなかった。

だから、越幡六郎同伴で駈け付けてきた小田持家から、

「実は、管領様のお留守のあいだに、この越幡六郎が御所へ呼び出されて、理由もなく一方的に隣領を侵したという廉で、公方様に領地を没収されてしまいました」

と泣きつかれたとき、禅秀は、

「他領を侵したと――」

そう鸚鵡返しに問いながら、嫌な予感がした。

「それがしには、身に覚えのないことでござりまする」

六郎自身が、判然りとそう答えた。

「身に覚えのないことであれば、申し開きが出来よう」

「重ねて釈明いたしましたが、なんとしてもお聴き入れ下さりませぬ。それがしが近頃郎党どもを動かしましたのは、狩りのときだけでござりまするから、あるいはそのおりのことを申されておられるのでござりましょう」

「そのおりに、訝しい行動をいたさなんだか」

禅秀は、重ねて問うた。

「あのおりには殊のほか獲物が多く、あるいは領境を騒がせたやも知れませぬが、六郎は己れの領分を心得ぬほど迂闊者ではござりませぬ。それを他領侵犯と決め付けられましては、なんとしても口惜しゅうござりまする」

「獲物を追い廻して迂闊に隣領に踏み入るは間々あることにて、咎めるまでもなきことを、こたびに限って侵犯の罪になさるとは、なんとしても解せませぬ」

持家が、憤懣遣るかたない口調で言葉を添えた。

越幡六郎は、常陸国茨城郡小幡の地を領有していた。

所領を失えば、収穫の利益を享受することは出来ない。

それゆえに、国人たちは己れの所領を命懸けで守っ

た。

一つ所、つまり〈土地〉に命を懸けることから、〈一所懸命〉という慣用語が生まれたほどである。

「公方様の悪い虫が起きたのであろう。よい、よい。儂が明日にでも出仕して、よしなに執り成して進ぜよう」

禅秀の口調は自信に満ちていた。

だが、つづいて越幡六郎から、

「それが、政所評定での裁決である、と申されました」

そう告げられて、禅秀はさっと顔色を変えた。

「なに、政所評定じゃと。誰がそのようなことを申した」

思わず、居丈高な詰問調になった。

「はい。山内のお屋形様でござります」

「憲基殿がか」

「さようでござります」

「憲基殿が如何ように申そうとも、関東管領はこの儂じゃ。儂の留守に裁決など出来る道理はない。かならず儂が取り下げてみせるゆえ、安堵いたしておるがよい」

禅秀は、自信を持ってそう応えた。

「有難きお言葉、なにとぞお願い申し上げまする」

「六郎。よかったのう。管領様が直々にお引き受け下されたのじゃから、もはや案ずることはないぞ」

小田持家が、禅秀の機嫌をとるようにそう口を添えた。

「おかげをもちまして、安堵いたしました」

「ご帰館早々に推参いたし、ご無礼仕りました」

小田持家と越幡六郎は、禅秀の扱いに満足して帰った。

禅秀は、二人の前で処分撤回を約束したものの、留守中に政所評定が開かれたことについて不審を抱いた。

(不問に付しても差し支えなきことを、なにゆえ儂の留守にわざわざ政所評定まで開いて裁決したのか)

しかも、越幡六郎を問い質さず一方的に処断している。

(これでは片翳屓の誇りは免れぬ。なぜそうまでして)

納得のいかぬことで、禅秀ははたと思い当たった。

越幡六郎の隣領の領主は、山内上杉の与党であった。

禅秀は、

(憲基が謀って、公方を唆したな)

そう見抜いた。

禅秀の推察は当たっていた。

越幡六郎の所領没収事件は、憲基の陰謀だったのだ。

上総守護の犬懸上杉と、伊豆、上野守護の山内上杉とは、同族でありながら互いに競い合って仲が悪かった。

この時代の同族は、連帯より競争意識が強かった。

上杉氏の祖は、藤原北家支流勧修寺系で、式乾門院蔵人藤原重房が丹波国何鹿郡上杉荘（京都府綾部市）を賜ったときに地名をとって名告ったのがはじまりである。

建長四年（一二五二）三月、式乾門院猶子の後嵯峨天皇第一皇子宗尊親王が鎌倉幕府に迎えられ、皇族初の将軍（六代）として関東へ下向するとき、重房は親王の補佐を命ぜられたので、一族は東国へ移ることになった。

その重房の孫の清子が、下野の豪族足利貞氏に嫁して尊氏、直義兄弟を産んだことから、尊氏が征夷大将軍になって室町幕府を開くと、将軍家の外戚として大いに羽振りを利かせるようになったのである。

上杉氏は、宅間、犬懸、山内、扇谷の四家に分かれたが、宅間家は間もなく尊氏、直義兄弟の対立事件に巻き込まれて没落したが、他の三家は繁栄していった。

なかでも、山内家と犬懸家の勢力が拮抗していた。

前に触れた両家が交代で関東管領をつとめるにいった経緯は、こうである。

家祖重房の孫憲房が、尊氏将軍の命で越後を攻め、南朝方の新田義宗（義貞の子）らを掃蕩した功により、上野、伊豆守護の嫡男憲顕が越後守護にも任ぜられた。

ところが、その憲顕が関東管領に任ぜられたことから、越後守護を信濃守護の甥犬懸朝房に譲った。

これで、宗家の山内家が関東管領、上野、伊豆守護、分家の犬懸家が信濃、越後守護になった。

だが、これが両家紛争の因になった。

憲顕の子憲方は、祖父が平定した越後の守護を父が犬懸家に渡したのが惜しくなり、従弟の犬懸朝宗に、

「関東管領を山内と犬懸で交互につとめる」

ことを交換条件にして、越後守護を取り戻した。

以後、関東管領は両家の約束どおり、山内憲孝、犬懸朝宗、山内憲定、そして禅秀とつづいてきた。

つぎは、山内憲基なのだが、憲基は、ここで禅秀を失脚させて、関東管領を山内家の独占に戻そうと企んだ。

そこで憲基は陰謀を企て、禅秀の留守を狙って持氏に、

「越幡六郎が隣領を侵犯したとの訴えがありました。即刻六郎を罰して所領を没収なされませ」

と唆した。

「国人たちの悶着は管領が調停いたせばよい」

持氏が渋ると、憲基は、

「訴えを直ちに裁決いたさねば、公方様のご威光にかかわりまする」

そう責付いた。

「禅秀にも存念があろう」

「管領は公方様の臣下でござりまする。なにを恐れることがござりましょうや」

憲基は、手を替えて持氏の自尊心を刺激した。

持氏は、憲基の煽てに乗せられて虚勢を張ると、

「予は禅秀ごときを恐れてはおらぬ。越幡六郎に確と隣領侵犯の罪あらば、有無を言わさず所領を没収せよ」

居丈高な態度でそう断を下した。

憲基は、莞爾と微笑み、

「それでこそ東国武士の御棟梁、正邪の糾弾まことにお見事であらせられる。念のため政所評定の裁決をいたしておけば、いかに管領とても否やは申せますまい」
（そんなことはない。たとえ政所評定の裁決であろうとも、禅秀はかならず異議を申し立ててくるに違いない）
憲基は内心そう思って網を張り、理非曲直を糺さずにはおかぬ正義漢の禅秀が、主君持氏に楯突くのを待った。
諫言を嫌う持氏との決定的対立を謀ったのである。
越幡六郎を出汁に使って、憲基が犬懸家の滅亡を画策していようとは、知る由もない禅秀は、
（一喝すれば、持氏はすぐに処分を撤回するであろう）
そう高を括っていたので、泣きついてきた小田持家と越幡六郎に、いとも簡単に取り下げを約束したのである。
憲基が連んでいることについては、なにかと目障りな存在の禅秀に一矢を報いて、鼻を明かしてやろうぐらいの心算で、持氏を抱き込んだのに相違ないから、
「政道の歪みは乱の因になる」
と威せば、両人とも二の句が告げぬだろう、と考えた。
持氏が、憲基に嵌められていることを知らぬ禅秀は、このときはまだ事態を甘く見ていた。

三

翌日、鎌倉御所へ出仕した禅秀は、持氏に謁して巡視報告をしたあと、さっそく越幡六郎の一件を持ち出した。
「ときに、上様はこのたび越幡六郎の所領をお召し上げになられたとのことでござりまするが――」
持氏の傍に控えている憲基の顔が、一瞬強張ったのを禅秀は見逃さなかった。
が、素知らぬ振りをして、
「もとより、当人に侵犯の意志があったわけではなく、郎党たちも軍仕度にあらずして狩装束であり、断じて隣領へ踏み入ってはおらぬということでござりますれば、なにとぞご寛宥下さいますようお願い申し上げまする」
そう丁重に処分の撤回を申し出た。
「誰がそのようなことを申しておるのだ」
「越幡六郎当人より直々に申し開きがござりました」
「偽りじゃ。罪人の申し開きなど当てにはならぬ」
「小田持家もそのように申しておりまする」
「持家は一族ゆえ、六郎を庇っておるのじゃ。越幡六郎が隣領を侵犯したことは間違いない。確かな証人もおる」
「それは、いったい誰でござりまする」
「誰でもよい」
「そうは参りませぬ。国人たちが命懸けで守っておりまする領地の紛争は、公平な裁決をいたさねばなりませぬ」
「証人の供述は、真実を申し述べておる」

禅秀は、頑なな持氏に手を焼いた。
刻の経つのも忘れて、あれこれ宥め賺してみたが、我が儘育ちのこの貴公子は自己主張が強く、言い出したら最後どう説得しても金輪際自説を枉げなかった。
（このままでは埒があかぬ。威して困らせてやろう）
禅秀は、そう肚を決めた。
「上様は、政所評定の裁決と仰せられたそうでござりまするが、この関東の仕置は管領であるそれがしの任でござりまする。政所評定は管領の名においてひらき、管領が裁決するものでござりますれば、それがしの留守にひらけるわけがござりませぬ」
「禅秀は管領じゃが、予は公方じゃ。関東の棟梁はこの持氏じゃ。主君が家人たちの紛争を裁いてなにが悪い」
「それでは秩序は保てませぬ」
「予は秩序を守っておる」
「なんと仰せられます」
「関東の棟梁はこの持氏じゃと申しておるのじゃ」
「なればこそ、人の上に立つ者は讒言に惑わされることなく、ことの理非を糺して公平であらねばなりませぬ」
「越幡六郎に隣領侵犯の意志があったことは間違いない」
「それは、山内殿の讒言でござりましょう」
禅秀の睨みに憲基は狼狽えて視線を外らしたが、すぐに思い直して持氏を屹度見据えた。
その睨みが、持氏には、
（一歩も退かずに、公方様のご威光をお示しなされよ）
と激励されているように映ったのか、
「予の眼に狂いはないわ」
そう居丈高に言い放った。
「どうあっても、越幡六郎をお赦し下さりませぬか」
「諄いぞ禅秀。赦さぬと申したら赦さぬのじゃ」
禅秀はなおも執拗に食い下がったが、持氏のほうも我意を通し、ああ言えばこう言うの繰り返しであった。
追い詰められた持氏は、開き直ると虚勢を張り、
「禅秀、予の裁決に異を唱えるは逆臣じゃぞ」
と極め付けた。
禅秀は、悪餓鬼を懲らしめ、諭すつもりで鷹揚に構えていたのだが、この暴言を浴びせられてかっとなった。
「鎌倉府と公方様の安泰のためにお仕えしている管領を、逆臣と仰せられましたな」
「そうじゃ。罪人を庇って予を誹謗するは逆臣じゃ」
禅秀は逆上し、堪えていたものがいっきに噴出した。
「左様でござりまするか。上様がどうしても不当な処分を撤回なさらぬのであれば是非もござりませぬ」
「ならば、承服いたすか」
「いたしませぬ。道にはずれた政治を糺しもせず、唯々諾々と従って管領職にあっても無益でござりまするゆえ、それがしは進退を考えさせていただきまする。越幡

六郎のことは、もはやこれ以上お願いいたしますまい」
そう威し文句を投げつけ、にやりと嘲笑った憲基の勝ち誇った顔を睨みつけて席を蹴った。
列座の者たちが、
「管領様、落ち着き召され。お留まり下され」
と口々に宥めたが、激怒した禅秀は耳を貸さなかった。
そのまま屋敷へ戻った禅秀は、忿懣を酒で紛らした。盃を重ねながら、訝る妻の萩乃に胸中の蟠りを吐き出してしまうと、それですこしずつ怒りが鎮まっていった。
そして、平静を取り戻すと、悪餓鬼相手に年甲斐もなく立腹したことが悔まれてきた。
だが、そうかといって赦す心算は毛頭なかった。赦しては越幡六郎を救うことが出来なくなってしまう。
あれだけ威したのだから、このまましばらく持氏の出方を静観しようと思ってもみたが、それでは朗報を待っている小田持家や越幡六郎の信頼を喪ってしまう。
禅秀は、持氏の鼻を明かし六郎の処分を撤回させる手段はないものかと、思案を巡らしたすえに、御所での捨て台詞どおり関東管領職辞任の大芝居をうつことにした。
「進退を考える」
は威しではないのだ、と見せかければ、あの傲慢な持氏もやむなく和解措置を講じてくるだろうと思った。
そう肚を決めると、禅秀は持氏の狼狽する様子を思い描いて北叟笑みながら、さっそく、
『関東管領職辞任届』
を認めた。
禅秀が筆を擱いたところへ、ちょうど萩乃から事情を聴いた執事の秋山丹波が心配そうに顔を出した。
「よいところへ参った。明朝これを御所へ届けてくれ」
そう命じて、届け文を渡した。
受け取った丹波は、表書きを見て愕ろき、
「お屋形様、ご短慮な――」
そう言って、身を乗り出した。
「案ずるな。威しじゃ、威しじゃよ」
禅秀は、心配顔の丹波を手で制して、哄笑した。

四

鎌倉府へ『辞任届』を突きつけてからすでに数日が過ぎたが、持氏からはなんの沙汰もなかった。
そのあいだにも、成り行きを心配した小田持家と越幡六郎が足繁く訪ねてきたが、禅秀はそのたびに、
「かならず撤回させてみせるゆえ、安心して待て」
そう慰めて帰した。
持氏は、屹度困惑しているに違いなかった。
我意を通した手前もあって、越幡六郎の処分撤回も出

来ず、また、たとえ自分の非を認めたところで、管領の膝下に屈することは自尊心が許さぬであろうから、そのうちには然るべき者を仲立ちにして宥めにくるだろう。
そう禅秀は心待ちにしていた。
ところが、禅秀の思惑は外れた。
持氏は、禅秀の『辞任届』をあっさり受理すると、すかさず山内憲基に関東管領職を与えてしまったのである。
持氏は、叔父のような禅秀は煙たかったが、二十四歳の憲基なら馭し易く、希ってもないことだったのだ。
そのことを逸早く注進してきたのは、小田持家だった。
禅秀は、脳天を強打された思いで、血の気が退いた。
だが、いまさら悔いても仕方がなかった。
関東管領職は、犬懸上杉が辞任すれば山内上杉に廻ることは慣例と知りながら、まさか持氏が一言の慰留もせずに憲基を任命してしまうとは、考え及ばなかった。
なんとも迂闊であった。
(越幡六郎の所領を没収して紛争を起こさせたのは、儂を関東管領から引き摺り降ろす憲基の策略だったのか)
禅秀もさすがそこまでは見抜けなかった。
しばし唖然としたあとで禅秀は、策に嵌まった口惜しさも手伝って、謀った憲基の卑劣な遣り口に激怒した。
禅秀の関東管領職辞任の噂をききつけて、武田信満、岩松満純、那須資之、千葉兼胤らの親族たちが前後して禅秀の許に駆け付けてきた。
そして、憲方、憲秋、憲春らの子供たちも加わり、善後策が協議された。
罷免同様の手口にいきり立った婿たちは、口を揃えて、
「抗議しても叶わぬものなら、いっそ与党の国人たちを集めて、力ずくで管領職を奪い返しましょうぞ」
と性急に武力行使を迫った。
「檄を飛ばせば、傲慢な公方に反感を抱く国人たちは多いゆえ、圧倒的勢力となるに違いありませぬ。山内に肩入れする公方をもともに斃す世直しの好機と心得ます る」
岩松満純が、公方も葬ってしまおうと気焔を上げた。
確かに関東の国人たちは、それぞれ一廉の領国経営者に育っていたので、持氏の横暴な治政に批判的であった。
棟梁に器量がなくては国人たちの統率は出来ない。古来名君といわれる人たちはみな信望が篤く、能吏を側近に据えてその頭脳を最大限利用し、領国の安泰を図った。
器量もないのに公方であることを笠に着て、威信を保とうとする持氏などの遠く及ばぬところであった。
婿たちの熱気に子供たちも連られて同調したが、ひと

り武田信満だけは年嵩だけあって冷静で思慮深かった。
「山内殿が公方様を抱き込めば、遺恨による私闘ではなく謀叛となり、幕府の逆鱗に触れるは必定でござる。鎌倉府の公方を斃すには、幕府の指示か納得する大義名分がなくてはならぬ。はやまってはわれら一族の破滅じゃ」
「舅殿のご意見ごもっとも、儂は憲基を許せぬだけのことで、家祖代々仕置きの関東を乱す気は毛頭ない」
「しかし父上、このままではいかにも無念でござる」
憲方が膝を進めた。
「われらにも意地がござる」
憲春が兄に追従した。
禅秀とても思いはおなじであった。蹶起せぬまでも拱手傍観したままでは腹の虫が治まらなかった。
「どうであろう。与党たちを集めて雌雄を決するにやむなしと威せば、公方も憲基も怯んで折れるであろう」
「そのあたりまでになさるがよろしゅうござろう」
信満もそう同意した。
「無念ではござりまするが、舅殿とご長老のご指示どおりにいたしましょう。さっそく布令をお出し下され。機先を制して公方と憲基の鼻を明かしてやりとうござる」
岩松満純が急き立てた。
「よいかご一同。これはあくまでも威嚇で決して仕掛けてはならぬぞ。よいな。こころして全軍を抑えるのだぞ」
禅秀は、そう諄く念を押した。
それから半刻余りの後、禅秀屋敷は騒然となった。
与党の国人たちへの使者が選ばれ、早馬が仕立てられて、屈強な若武者たちが次々に慌ただしく出ていった。
そんな禅秀屋敷の動向を窺っていた持氏と憲基は、
(すわ合戦)
と看て取り、
(遅れてはならじ)
と、これまたすぐさま与党集めに取り掛かった。

五

その年の夏――。
禅秀、持氏、憲基からそれぞれ布令文を受けた国人たちは、合戦の準備を調えて続々と鎌倉に集まってきた。
ある一群は浄明寺村犬懸が谷の禅秀屋敷に入り、他の一群はおなじ浄明寺村御所の内の公方屋敷へ向かい、またある一群は大町佐介が谷の憲基屋敷に入った。
鎌倉は静寂を破られて、一触即発の危機を迎えた。
禅秀は前に述べたように、傲慢不遜な持氏と憲基に対して、管領を退いても勢威はかわらぬことを誇示するためだけに与党の国人たちを集結させたのであるから、初めから実力行使に出る心算はなかったが、憲基のほうは、この機会に持氏と連合して、宗家を脅かす犬懸家の勢力を一挙に叩き潰し、禅秀を葬ってしまおうと考えた。

だが、如何んせん、持氏軍と併せてみても、禅秀の許に集結した国人たちの数には遠く及ばなかった。
憲基は、立ち後れを率直に認めた。
(この数では、戦いを挑んでも勝ち目はない)
そう判断した憲基は、持氏に他日を期すことを勧めた。
武将の器でなく、実戦の経験もない持氏は、公方の威光だけで勝てると信じて同意せず、憲基の懸命な説得にもただ屈辱に打ち震えて口惜しがるだけであったが、ついに渋々憲基の献言どおり禅秀に和解を求めた。
禅秀の与党たちは、持氏からの申し入れを承服せず、「この好機を逃さず、暴君持氏と、それを援ける憲基を、完膚なきまでに叩き潰してしまおうではござらぬか」
そう禅秀に詰め寄ったが、禅秀は初心を曲げず、「初めにも申したとおり、このまま成り行きにまかせて公方と憲基を斃したのでは、私情怨恨の謗りは免れぬ。そうなれば、幕府に逆賊の汚名を着せられて成敗されてしまう。悪餓鬼の公方と俄管領の憲基を屈伏させたことで所期の目的は達せられた。今後は公方も憲基も前非を悔いて所行を改めるであろう。ご一同も溜飲を下げたのじゃからもうこのへんでよしといたそうではないか」
そう国人たちを諭して、持氏の申し入れを受諾した。
持氏は、和解が成立すると、憲基に促されて与党たちを帰国させたので、鎌倉は辛うじて戦火を免れた。
禅秀は、持氏がほどなく自分を管領に復帰させ、再び鎌倉府に迎え入れるであろうと、使者の到来を待った。
ここで話はかわる。
鎌倉騒擾――。
の報らせが京に届くと、将軍義持打倒の機会を虎視眈々と窺っていた弟の大納言義嗣が俄かに色めき立った。
義持、義嗣兄弟は三代将軍義満の庶子で、義持の生母は側室藤原慶子、義嗣の生母は愛妾春日局であった。
義持は、生後間もなく死産のあとついに子を授からなかった正室日野業子の許で、嫡子扱いされて育てられた。
それから八年後に、義嗣は生まれた。
義満は、義持以外の七人の子はみな門跡に入れたから、義嗣も当然出家のはずであったが、義満の寵愛を一身にあつめている生母春日局の懇願で梶井門跡入室は取り止めになり、義満の手許で育てられることになった。
こんな話がある。
応永十五年(一四〇八)三月八日、義満は北山第に後小松天皇の行幸を仰いだ。
義満は、このあと五月に流行病で急逝してしまうから

この日は将軍義満としての最後の盛儀であった。
義満は、義持を市中の警備に就かせて法服に身を固めると、まだ元服前の義嗣を従えて四足門に出迎えた。
そして、当日の祝宴においても、義持でなく義嗣のほうを陪席させ、廷臣最高位の関白よりも上席に坐らせて、諸卿列座の前で自分の次に天盃を賜らせたという。
従一位大納言右近衛大将の兄を差し置いて、従五位下の義嗣に与えられたこの厚遇は、義満が密かに、
(後継者は義嗣)
と考えている心の現われであったかも知れない。
こうして、父義満の溺愛の許で育った義嗣が、
(ひょっとすると、次の将軍は自分なのかも知れない)
そう思い込んだのも無理はなかった。
事実、巷間でも、
(四代将軍は義持様ではなく、義嗣様だろう)
と頻りに取沙汰されていた。
ところが、義満が急逝すると、管領斯波義教の父で室町幕府きっての実力者斯波義将は、予想を裏切って義持を四代将軍に推し、その座に就かせてしまった。
義嗣は、斯波義将の義持推挙に憤懣遣るかたなかった。
(自分が将軍になるに違いない)
と思い込み、脚光を一身に浴びて得意の絶頂にあった義嗣は、突然奈落の底へ突き落とされた思いであった。
義嗣は、斯波義将に疎外されたことから新将軍義持を深く恨み、それが昂じて打倒を企てるようになった。
義嗣は、一刻も早く野望を果たそうとして焦り、少数の反幕勢力に積極的に近付いて、後醍醐天皇の側近北畠親房の曽孫で南朝方の中心人物であった伊勢国司北畠満雅を煽動してことを構えようとしたが、失敗した。
当時の幕府は、開府七十年の安定期にあり、いかに義満に溺愛された義嗣と雖もつけ入る隙はなかった。
ことが成らず、悶々とした日々を送っていた義嗣は、
——鎌倉で公方と管領が対立した。
噂を耳にすると、
(時節到来)
この好機に便乗して野望を果たそう、と北叟笑んだ。
東国通の側近僧侶の提案は、禅秀を煽るよりも、義嗣と同じ境遇にあって悶々としている又従兄の足利満隆を唆して、禅秀を抱き込ませたほうが得策とのことだったので、禅僧を密使に仕立てて鎌倉へ送り、満隆に、
——同盟謀叛。
を煽動した。
義嗣の計画は、
(将軍と関東公方を弑して、義嗣と満隆がとって替わる)
というものであった。
新御堂満隆は、持氏の叔父と同時に舅でもあった。

こういう立場の人は、陰の実力者になるはずなのであるが、満隆は、どういうわけか持氏の就任当時から、
(公方の座を狙って謀叛を企てている)
という噂を立てられて、鎌倉府から疎外されていた。
ときの関東管領上杉憲定の謀略だったという。
身に覚えのないことであっても、潔白を証明する手段がない満隆は、憤懣遣るかたない思いで持氏の弟持仲を養子に迎えて二心なきことを示すと、勝長壽院(大御堂)の境内に北條政子が夭折した愛娘大姫を悼んで建立したという新御堂に隠棲して、蟄居生活を送っていた。
だから、義嗣の誘いに応じようにも手勢がなかった。
満隆は、義嗣の『密書』をなんども読み返しながら、
(積年の恨みを晴らす好機到来というのに、無念じや)
歯噛みつづけているうちに、はたと禅秀に思い至った。
(禅秀とても、儂とおなじ思いでいるであろう)
その怨念を煽れば、禅秀も与するかも知れない。
(よし。大納言様の密書を披瀝して、試してみよう)
満隆は、恰好の着想に北叟笑むと、使いを出して、
(急ぎの用向きが出来いたしたゆえ、お出で願いたい)
旨を伝えさせた。
その頃禅秀は、持氏と和解したものの、関東管領職の復帰と越幡六郎の処分撤回がいっこうになされないので、
(約束が違う)
と、狡猾な持氏に腹を立てていた。
与党の国人たちも禅秀に決断を迫り、岩松満純などは、
「お起ちにならねば、われらがお恨みを晴らしまする」
といきり立った。
(さて、どうしたものか)
禅秀は悩み、心は揺れに揺れた。
(手を汚さねば、元の鞘には収まらぬか)
思いがそこに至ったところへ、実行を嗾けるように、
(こんどの政変は、憲基が関東管領職を独占する謀略)
だったという注進が入った。
そこまで読めなかった禅秀は、悪辣な憲基に激昂した。
もはや、憲基を赦せなかった。
また、横暴な持氏に憤慨する国人たちの声も日増しに高まっていて、鎌倉府は根底から揺らぎはじめていた。
禅秀が正義であったことは、先頃の対立のときに支持する国人たちの多かったことが、それを証明していた。
だから、
(持氏と憲基を斃すことは世直しになる)
ことは間違いなかったが、そうかといって、衝動に駆られての挙兵には踏み切れぬものがあった。
それは、先頃の対立のときにも考えたことであるが、

（私怨と看做されれば逆賊の汚名を着せられてしまう）
危惧の繰り返しであった。
罷免された直後だけに、幕府の誤解を恐れた。
（公方は懲らしめるだけに留めておいて、憲基を斃し、公方に非は憲基にあることを証言させる）
それなら幕府も黙認するのではなかろうか。
熟慮の末に到達した結論であった。

（後半次号）

暗殺の叙事詩 一
—源 実朝—

島津隆子

一 杳い偲い

箱根路をわが越えくれば伊豆の海や
　沖の小島に波の寄るみゆ

箱根の山路を越えてくると、眼下に相模灘の海が開け、その茫漠たる大海のただ中に、遥か沖の小島が浮かんでいて、白々とした波が寄せているのが眺められることよ

当時、鎌倉幕府の守護神として箱根権現が尊ばれていた。将軍実朝が参拝の帰り、箱根の山から下りてくるときに詠まれたものである。

大洋のただ中に浮かぶ小島、そこに寄せる白い波の泡立ち。そして、その遥かな先にある自身の命の叙景。そこには、風の前の塵のように儚く消えてゆこうとする自らの運命を、遠い海鳴りの中にきいている独りの歌人の姿があるばかりだ。

実朝は遥かな地平線のかなたにある自身の生命をどのように見ていたのだろうか。

実朝の目には武士の棟梁としての二大勢力である平氏と源氏への杳い偲いがあった。桓武天皇から発した平氏は初め関東を根拠にし、清和天皇から出た源氏は摂津・河内など関西を拠点とした。しかし、奥州地方の戦乱「前九年の役」や「後三年の役」を経て、源氏はしだいに東国にその基盤が移り、平氏はその逆となっていった。

一方の雄であった平氏は長門（山口県）壇ノ浦に滅び去ったのだが、一族郎党ことごとく滅亡していったとは

いえ、彼ら平氏は一致団結し、誰一人として欠けることなくその最期の日まで戦い抜いたのである。

平家一門が興り滅びてゆく過程は、見る目に鮮やかなぐらい一直線であった。親子・兄弟が反目し、殺し合うようなことはなかった。

だが、どうだろう。翻ってみる源氏興亡の跡は血で血を洗い、骨肉相食む、悲惨な歴史ではないか。

それも常に天皇とか、自分の目の前にある北条氏などの有力者を後ろ盾として起こる、同族間の悲しむべきドラマではなかったか。

その中にあって実朝の目には父頼朝、祖父義朝、叔父義経の姿が髣髴として去来するのである。

兄の崇徳上皇と弟の後白河天皇とが反目して戦った、いわゆる「保元の乱」では、父の為義は上皇側に、子の義朝は天皇側について戦った。

そして、敗れた上皇側の為義を、子の義朝は処刑したのである。もちろん義朝は最後まで躊躇いつづけたが、勅命には逆らえなかった。

仏法にいう最も恐ろしい罪である五逆罪をあえて犯したのだ。子は父を斬り、幼い兄弟までもことごとく斬った。為朝は死に臨み、

「あわれ親の子を思ふやうに子は親をおもはざりけるよ……」

と嘆きつつも、親・兄弟を殺し、無限地獄に堕ちるであろうわが子義朝のために、

「助けさせ給え……」

と祈りながら死んで逝った。

その義朝も今度は「平治の乱」で敗れ、平家一門の清盛によって殺される。因果は応報となって返ってきたのだ。この悲劇の人、義朝の子が、頼朝・範頼・義経の兄弟たちであった。

幼い兄弟たちは池禅尼の嘆願によって清盛の許しを得、一命は取り留めたものの、剃髪して頼朝は伊豆に、義経は大和にと別れ別れに流されたのである。

実朝はそのときの父頼朝の心情を想像する。

人生は一つの偶然性であり、奇跡なのだ。その偶然性の中では、いざとなれば親・兄弟も信じるに足らぬもの、と思ったであろうと。そして、源氏の正統として当然殺されるはずの自分が、こうして生きているという奇跡を信じたかったにちがいない。

父頼朝の胸奥には人生で生きるということは、生き残ることという、確固不動の信念が焔のように燃え上がっていたことだろう。

実朝は同時に、あの悲劇的な最期を遂げた叔父義経のことをも思った。

弟の義経が兄頼朝と別れて以来、はじめて対面したのは、源平の合戦もたけなわな「富士川の戦」直後の、治承四年（一一八〇）十二月のことであった。

兄弟は往時を語り手を取り合って懐旧の涙を流した。

八幡太郎義家以来の軍略家として平氏を西海に敗走させ、従兄弟の驍将義仲を滅ぼし、最後にはたった一日の戦で、平家一門ことごとくを壇ノ浦に葬った義経の姿には、まさに神業に近いものがある。

ところが、この武勲赫々として輝き、鎌倉に凱旋しようとする義経を待ち受けていたのは、兄頼朝の勘気であった。あの富士川の陣中で手を取り合って感涙にむせんだのは偽りだったというのだろうか。

義経は平家一門の宗盛父子を捕えていた。それを護送して鎌倉に入りたかったのだ。ところが、北条時政が途中に待っていて、宗盛父子だけを連れ去り、義経が鎌倉に一歩だに入ることを禁じたのである。

こうまで自分が憎しみを受けていようとは……。

義経は驚きかつ悲しんだが、鎌倉の手前、腰越の万福寺に退いて謹慎し、異心なきことを書いたいわゆる腰越状を頼朝に提出して、愁訴するのである。

文面は切々として人の胸を打つ。

……御勘気を蒙るの間、空しく紅涙に沈む。（略）此時に当って永久恩顔を拝し奉らず骨肉同胞の誼既空しさに似たり。宿運の極まる所か。将又先世の業因に感ずる所か。悲しいかな。（略）誰人が愚意の悲嘆を申被かん。何の輩か哀憐を垂れんや……

紅涙しぼる思いで認めた弟の愁訴の文も、兄の怒りを増しこそすれ、決して和らげはしなかった。

義経は空しく京へと帰って行く。その上、頼朝は義経の所領二十四箇所ことごとくを没収してしまった。

それから義経の流浪がはじまる。ある時は山伏の姿に身をやつして逃げ廻り、奥州平泉までも逃れるが、文治五年（一一八九）四月三十日、衣川で弁慶以下の郎党と共に自刃して果てた。時に三十一歳であった。

義経の首は黒漆の櫃に入れられ美酒に浸して鎌倉に入った。驕る平家を打ち滅ぼした一代の勇将義経の首を迎えた観衆は、その余りの無残さに、

……皆雙涙を拭ひ、両袂を湿す

と『吾妻鏡』は記している。

実朝は、わが源氏の血筋には、どこか異様な血が流れていることを実感しないわけにはいかなかった。父頼朝の死後、この異様さにいよいよ拍車がかかってゆくのだ。

そして、陰謀と暗殺の血腥い事変が起きはじめる。

叔父義経の悲劇的な死の後、頼朝に異心なきを誓う範頼をも伊豆修善寺において暗殺してしまう。義経と共に一方の総大将として平家を滅ぼし、九州の残党を平定した弟をである。

実朝は目のくらむような気持で、余りにも悲惨な数々の修羅場を脳裏に描いていた。

実朝が六歳の正治元年（一一九九）一月、父頼朝が五十三歳で死んだ。母政子はそれを契機に出家して尼になったが、その政治手腕は父である北条時政をはるかに凌いで、尼将軍と呼ばれるほどであった。

長男頼家が第二代将軍となるに及んで、待っていたかのように権謀術策による粛清の第一歩が開始される。その手並みはまさに絵に描いたように見事という他はない。

鳥瞰図的に暗殺の叙景を列記してみよう。

二　頼家、二代将軍に

何といっても頼朝の死は、鎌倉幕府にとって一大転換の時であった。

正治元年（一一九九）三月十四日、鶴岡八幡宮の桜が無心にさらさらと散っている。花びらの一つが、近くの北条政子邸の池に落ちた。その邸宅の一室では、政子はじめ北条時政、義時父子、それに参謀格の大江広元が何ごとか密議をこらしていた。

「大御所頼朝殿亡き後、このままではいかん。何とかせねばならんのう……」

と時政が口火を切る。

「何とかせねばとは、いかがな意味でございましょうか」

と広元が応じた。

「このままでは御所殿（二代将軍頼家）に対する御家人の反感はつのるばかり、という意味でござろう」

と義時が時政に相槌を打つように言う。

「あのご気性では、わが子ながら愛想がつきまする。それに側近の比企能員（ひきよしかず）が御所殿に〝あなたは天下人なのだから思うようにおやりなされ〟と煽り立てるものだから、御家人衆はおろか、われらの言葉さえ無視することがございます。われらはともかく、御家人衆の気持が鎌倉を離れれば、喜ぶのは京の院殿（後鳥羽上皇）や天狗殿（公家第一の源通親）といった、朝廷の実力者たちじゃ。大事に至らぬうちにこれは何とかしなければなりませぬな」

政子が時政や義時の言葉を、さらに詳しく解説して一気に語った。これは、明らかに北条一族の首領（ドン）たちが、自分に言っているのだと広元は解釈した。

未亡人となった政子は髪を下ろし〝尼御台〟と呼ばれていたが、女傑として頭角を発揮し始めていた。

「何かよい策はないものかのう」

時政がちらりと広元の方を窺がうようにして言った。

それは幕府内での智恵袋ともいうべき自分に意見を促したのだと広元は読んだ。だが、ここで早急な意見を

出していいものかどうか、広元は迷った。

四人の間に、しばらく沈黙の時が流れる。

池の方でピシャ！　と鯉の跳ねる音がした。四人の顔がいっせいに池の方に向く。水面に漂っていた二、三枚の桜の花びらが、漣に揺れている。

「時節が来れば、桜の花も散るものよな」

と時政が独り言のように呟く。その言葉で広元の心が決った。大勢には逆らえないという諦観ともいえた。

「一筋縄ではゆかない御家人たちの中で、訴訟に関する事柄が最も難しく、重要でございます。これがすらすらと行われている間は、決して御家人に不平不満はなく、幕府は安泰でございます。この訴訟に対する御所殿の決済を禁じられてはいかがでしょうか」

「ほう……」

時政は満面に喜色を浮かべながらも、空惚けたように頷いた。

政子は広元の顔を見ながら、感に堪えぬように言った。

「なるほど、広元殿、さすがは亡き大御所殿の信任厚き、公文所別当よの」

ちなみに公文所別当というのは、幕府が発する一切の公文書を掌り、行政、司法上の事務を統制する所の長官である。現在でいえば法務大臣、総理府長官、内閣官房長官を兼ねたような役職といえよう。

「……で、具体的には、どのようなことかな？」

と義時がこれまた癖のある表情で尋ねる。

「結論から申し上げますれば、すべての政事（まつりごと）は元老・宿将による合議制とする、ということにございます」

と広元がぴしゃりと言った。

「なるほど……」

政子はもう一度大きく頷いてみせた。時政も義時も微笑を洩らした。

大江広元の意見採用に決定した瞬間である。

この時の決定が、やがて将軍家を圧迫するのだが、時政は公文所を吸収した、幕府最高の中枢機関の長官、つまり政所の別当になり、義時は軍事・警察の最高機関で御家人を統率する長官、つまり侍所の別当となった。

ここで源氏将軍は有名無実と化して、北条家による執権政治が確立するのだ。

母政子からこのことを伝えられた将軍頼家は唇を噛み、何も言わなかった。いや、いえなかったのだ。合議制にするという案は、大江広元の献策であり、各別当職に就いたのは時政、義政である。母の政子は依然として何の役職も持たない尼であり、一介の未亡人に過ぎないのだ。表面上はいかにも三人の男たちに押し切られた形である。

（そんなにもおれが信頼できぬというのか。おれは父

頼朝の名を辱めまいと、立派な御家人たちと、力いっぱいやっているつもりだ。何が気に入らぬというのか……）

頼家は無念の涙をのんだ。何とか言ってやりたかった。だが、

「この広元の意見には主な宿老たちは皆賛成している。女の私一人ではどうなるものでもない。それに、これは決してそなたの地位や権力を奪おうとするものでないとも言っておる。若いそなたを皆で盛り立て、鎌倉の政権をより強固なものにしていこうというのじゃ」

と政子に説得されると、頼家はただ一言、

「よろしいように」

と言わざるを得なかった。

頼家は一応政子にそう返事をしたものの、大江広元と並ぶ知恵者比企能員（ひきよしかず）に相談した。

能員は頼家の正室の父親であり、側近No.1の切れ者である。だが、能員はここで高級官僚特有の自己保身の姿勢を固めた。

「ここは一応、広元殿の提案に賛成なさることです。私がいるかぎり、決して悪いようにはさせませぬ」

と言うのだ。

（ここで一人だけ反対するわけにはゆかない。反対することは幕府内で孤立し、やがて粛清されるかもしれないのだ。ならば、合議制のメンバーに加わって自分の意見を言った方が得策だ。それに頼家はこのわしが頼りなのだから、わしの意見を一番よく聞くはずじゃ。それは合議制のメンバーの中で、わしが最有力者となり得ることではないか。ロボットはロボットでも将軍であることに変りはないわい。その将軍をバックに抱いて、己の考えを実現させればよいというわけじゃ）

能員はそう計算した。

元治元年（一一九九）四月半ば、鎌倉幕府は十三人の元老・宿将による新体制でスタートした。

そのメンバーは北条時政、義時、大江広元、比企能員、和田義盛、三浦義澄、三善康信、中原親能、安達盛長、梶原景時、八田知家、藤原行政、足立遠元という顔ぶれである。

これは大江広元ら頼朝の側近官僚だった文官派（元老）と、平家討伐で御家人を指揮した、北条時政らの武人派（宿将）とが、巧みにバランスのとれた編成である。人数構成上からみても〝妥協〟の産物であることがわかる。現代までつづく内閣の組閣に似通ったものだ。

しかし、頼家にとれば、何とも息の詰まりそうな、面白味のない顔ぶれではないか。

（ああ、やっぱりそうか。おれには何もやるな、やらなくてよいというのだな。よし！　おれは何もやらんぞ）

頼家の心の中に激情が湧く。そして、御家人のぐうたら息子たちを〝近習〟として集め、〝遊び〟それも徹底した遊びに狂いはじめた。

建仁元年（一二〇一）五月、頼家の叔父阿野全成（あのぜんじょう）が謀反の嫌疑ありとの理由で捕えられ、殺される。

同年九月、頼家が病弱なことを理由に、その跡継ぎの問題が起きた。頼家の妻が娘であることから外戚として力ある比企能員が、頼家の長男一幡（いちまん）を推した。それをよいことに政子と時政は謀り、次男の千幡（実朝の幼名）を支持して能員の挑戦を誘ったのだ。そして、能員はおろか頼家の妻若狭局（わかさのつぼね）、一幡をも殺してしまうのである。

三　仁田家滅亡

時政の次なる謀略は、御家人の中でもとくに〝人気〟のある有力武将にむかって目標がしぼられた。

そうすることが、自身や子供たちをふくめ、北条一族のイメージを高めると同時に、その存在が確固として目立つことになる。

いつの時代でも上に立つ者の絶対的条件は〝人気〟という一点にかかっている。いかに力量があり、地位があっても、人気のない者はやがて失墜する。

当時、鎌倉武士の間で、最も人気のあった者は仁田忠常であった。仁田家は代々伊豆の豪族で、故頼朝の最初の挙兵からつき従い、頼朝から深く信任されていた。

この頼朝色を一掃することが、時政の狙いなのだ。

さて、勇敢で明るい性格の忠常は〝鎌倉殿の名物男〟の異名を持つほど御家人たちの間で人気があり、誰からも愛されていた。

曽我兄弟の仇討ちで有名な富士の裾野の巻狩りで、巨大な暴れ猪の背に飛び乗り、これを仕留めた主人公といった方が、わかりやすいだろう。豪放で、無類に明るく、しかも情の厚い人物だったので、彼にまつわる噂話はいつしか伝説化していた。

建仁三年（一二〇三）九月初め、忠常は時政からの呼び出しを受けた。忠常は、何の用心もなく単身で、名越の時政邸に赴いた。

だが、忠常はそのまま、いつになっても帰らなかった。安否を気遣う忠常の弟は武装した一族郎党を率いて、時政邸に出向いた。すると、待ち構えていた時政方から、

「仁田一族の謀反なり」

という声が上がり、矢を一斉射撃してきたのだ。そして、仁田一族郎党は一人残らず殺されてしまった。

翌日、政所において、

「仁田忠常は頼家殿に言い含められ、わしを亡き者にせんと殺害を企てたので、止む無くこれを討ち取った。そして、この事実を穏便のうちに図ろうとしたが、仁田一族が攻めてきたため、これも止む無く全滅させたまでござる」

と時政自身が事変の経過を発表した。大江広元が、

「忠常殿はそうであったとしても、仁田一族が攻めてきたという証拠はどこにありましょうや。ただ、主君の安否を気遣って押し寄せたまで、と考えられまするが……」

と問い質した。ところが、

「武装していたことが何よりの証拠じゃ」

と時政は言ってのけた。これには誰も異論を挟めなかった。ただ、合議メンバーの中の三浦義村（みうらよしむら）だけが、すっくと立ち上がって、荒々しく退出していったことが、唯一、無言の抗議でもあった。

しかし、この時の義村の態度が、やがて一族の滅亡につながろうとは、義村自身も気づかなかった。

ついに時政は合議制メンバーの中の最有力者となったのである。言いかえれば鎌倉幕府の実権をその掌中に握ったのだ。

そして、今度は頼家を無理矢理剃髪させた上、伊豆の修善寺に幽閉してしまった。

四　実朝、三代将軍に

建仁三年九月十日、十三歳になった実朝は、三代将軍として、名越の時政邸に迎えられた。

時政が執権という名目で幕政を執り行うためであった。

これは大江広元の提案による合議制が事実上崩壊したことであり、広元は引退に追いやられた。

これより後、時政が名乗った「執権」という言葉は、鎌倉幕府の代名詞ともなり、事実上の最高権力者の「職名」になった。

ちなみに執権という言葉の本来の意味は「政権を握る」ということである。

京都の朝廷において「院庁の別当」を執権と称したこともあった。それで博識の大江広元が、幕府の政所別当を院の庁に準じて「執権」と冗談半分に言ったことがあった。それを記憶していた時政が自ら実権を握ったときに名乗ったものという。

もっとも、公式な「官命」として執権が固定するのは、十年後の義時の代になってからである。

とにかく、かねてからの願い通り、時政は最高権力者の座に就いた。

三代将軍になった実朝は、まだ少年の初々しさを残していたが、さすがにその感受性は鋭かった。

（この私が三代将軍といっても、兄頼家殿はまだ伊豆修善寺に幽閉されておいでだ。無念この上ないことであろう。ましてご気性の激しい兄上のこと……）

実朝はそう思って吐息をつく。

その時、すうーっと背筋に寒気が走るのを覚えた。そして、頼家の顔だけが、暗く長い廊下を通り、風のように音も無く、幽鬼迫る形相で実朝の部屋に入ってくる幻影を感じたのだ。

「兄上！」

実朝は思わず顔を床に伏せてしまった。そして、嗚咽した。

（何という、何という無残なことを……）

それは頼家の身の上ばかりを思ってのことではなかった。いや、むしろ兄のことなどどうでもよかった。実朝は自身の境涯こそ〝無残〟と感じたのだ。

（文学を好み、政事には余り興味が持てない温和な性格の自分。時政殿にとってはこの実朝こそが、将軍にうってつけなのであろう。残酷、余りにも残酷だ……）

春の甘美さは秋の荘重に変り、もみじが美しく紅葉する季節になった。

「三代様はまだまだお若い。祖父であるこのわしがしっかりとお守りせねばのぅ」

と時政は浮き浮きとした様子で口癖のように言う。

名越の邸宅を改築し、新しい部屋を造った。そこに実朝を寝起きさせていたので、時政邸はいつしか「将軍の館」と呼ばれるようになった。

しかし、実朝は用心深く時政の動きを見つめていた。

十月二日、「亡き先代様（頼朝）の御遺志であった」と時政は、頼朝の養子である平賀朝雅を京都守護職に任命して出発させた。朝雅の妻は、時政とお牧の方（後妻）の間に生まれた娘である。いわば朝雅は時政の女婿なのだ。

（その女婿を幕府の〝京都の代表〟に任命して、時政は一体何をしようとするのか？）

実朝はいぶかしく感じた。だが、いかに聡明といえども少年の実朝には、時政の底知れぬ権謀術策は読めるはずもなかった。

元久元年（一二〇四）七月、二代将軍頼家が暗殺される。二十三歳のはかない最期であった。実朝の脳裏にはいろいろな想いが錯綜した。

（兄頼家殿の亡き後、次に殺されるのは誰なのか、それは当然自分ではなかろうか、そうに決っている。それはあたかも自然界の法則のように自分に巡ってくる運命だろう。自分が三代将軍になった時、兄頼家殿はまだ生きておられた。しかも、それから一年も経たないうち

に兄は殺されたのだ。次は、いよいよ自分の番ではないのか）

五　畠山父子の死

元久二年（一二〇五）六月二十二日、由比ケ浜で一つの事件が起った。

京都探題、つまり朝廷の動向を見張る鎌倉方の役所に行っていた名家の畠山重保が、任期を終えて帰る途中、由比ケ浜で暗殺されたのである。

重保の死体は穏便のうちに隠されたが、京都守護職平賀朝雅の放った刺客の仕業であろうと噂された。

重保は在京中、宴の席で朝雅と争ったことがある。その折の言動に対し、

「重保殿には朝廷と組んでの謀反の疑いがござる」

と時政に報告されていたというのだ。

だが、事実は時政の直接命令による暗殺行為であった。

しかし、時政にすれば重保など本当はどうでもよかった。そのバックにいる人物にこそ真の目的があったのだ。それはかなり手のこんだ謀略劇といえる。

まず、はじめに時政は、うろたえた風情で御家人の筆頭格、侍所の別当和田義盛に相談をもちかけた。

「畠山重忠（重保の父）に謀反の疑いがあるとの噂が」

と時政は言った。

（何ゆえに？）と義盛は問いかけようとしたが、口をつぐんでしまった。重保在京中からの一連の事件経過をみれば、時政の言葉も事実と思われたからだ。

それに義盛自身にも野心がないわけではない。

（第一、「執権」時政から、秘密の相談を持ちかけられたことは、いたく自尊心を満足させるものがある。第二に御家人を統率する立場にある自分にとって、この事件はより己の権威を高めるチャンスではあるまいか。だが、畠山重忠といえば幕府内の重鎮であり、重要人物である。下手をすれば、御家人の間が真二つに分裂し、大乱をも起しかねない。事は細心の注意を必要とする）

義盛はそう判断すると、

「ともかく用心のため、鎌倉を固めておきましょう」

と言った。時政は老獪な顔に会心の笑みを刻んだ。義盛のその一言で十分であった。

鎌倉の各方面からの出入り口には、武装した兵氏が配置され、ただならぬ雰囲気が街中に溢れた。そして、人々の間に諜者を放って、

「畠山殿の反乱がある」

「謀反がある」

「畠山殿が攻め上ってくる」

と口コミで広めさせた。流言は急速に飛び交い、鎌倉

中が上を下への騒ぎになった。こうして警視総監でもある義盛の手に負えない事態になったのだ。

時政に相談を持ちかけられたとはいえ、事態を紛糾させた張本人は義盛であることに変りなかった。

時政は、頃はよし、とばかり、息子の義時、時房に向かって命じる。

「ただならぬ重大事局に直面いたした。義盛殿の方針では、鎌倉に兵火が及びかねない。この際、その方たちは武蔵国に打って出て、重忠を迎え撃て！」

「父上、重忠殿はまことに謀反をいたすのか。いかなる証拠があってのことでございまするか」

時房は父に食い下がった。しかし、長男義時は早くも甲冑に身を固め、

「父上、わかり申した。ご安心下され、必ず重忠を討ち取ってまいりましょうぞ」

と有無を言わさずに時房を急き立てると、兵一千余騎を率いて武蔵国に出陣していった。

実朝はそんな一連の様子を冷ややかに傍観していた。

その頃、畠山重忠はわずか百騎に満たない供を連れただけで、武蔵の居城から鎌倉に向っていた。

一族の中の従兄弟、稲毛重成からの早馬で、

「鎌倉殿に乱が勃発、急ぎ参集されたし」

という連絡を受けたのである。

「それは一大事！」

とばかり、取るものも取りあえず、武蔵の領地から出てきたのだ。

稲毛重成を利用して、重忠を誘い出した時政会心の陰謀である。重忠はまさか鎌倉の騒動が自分たち一族に関しての事、などとは露知らなかった。息子重保が暗殺されたという噂は聞いても、それがどんな引き金になっているのか、真相は知る由もなかった。

重忠には、息子はまだどこかに生きていると思えてならなかったのだ。

重忠一行が武蔵国・二俣川（ふたまたがわ）あたりにさしかかった時、前方の丘に武装した軍勢の姿が見え隠れしていた。

「あれは何者ぞ……」

重忠は騎馬を止めて、斥候を出した。やがて、血相を変えて飛び帰ってきた斥候が言うには、

「鎌倉勢にございます。戦闘隊形で、その数およそ一千余騎」

「そんなバカな！」

「いや、確かに鎌倉勢でござる。義時殿が指揮しておられる」

「何と、義時殿だと？　よし、わしが出ようぞ」

重忠は単身栗毛の駒を前に進めた。

「そこに待ち伏せたるは何者ぞ。われは武蔵国、畠山

重忠なり……」
と名乗りかけたその時、軍勢の中から義時が姿を現して大音声で叫んだ。
「重忠！　謀叛の企て、すべて明白なり。鎌倉将軍家・実朝殿の命により、ただ今、討伐せん！」
重忠は絶句した。
「以後の問答無用なり！」
義時の声に、ワーッと喊声を上げ、鎌倉勢が一気に討って出た。
「おのれ北条！」
ここに至って始めて怒りを満面に浮かべた重忠が、全軍に反撃を命じる。だが、何といっても十対一。これではいかに勇敢な畠山勢でも、勝負になるはずがない。一時間ばかりの交戦で、畠山勢は全滅してしまった。
源平の合戦で坂東武者の名華と謳われた歴戦の名将畠山重忠は、二俣川を逃れ、ただ一騎で戦いつづけたが、鶴ヶ峰付近で流れ矢に当って落命した。四十一歳の生涯であった。

畠山重忠の最期は鎌倉の御家人たちの同情を呼び、さらに幕府内に複雑怪奇な波紋を広げたのである。
畠山勢と戦った兵士たちの間では、
「重忠殿ははじめ戦う意志などなかった。その証拠に軽装で百騎に満たない小勢でござった。まして謀叛などとは……」
という噂が次第に大きくなっていった。そして、重忠の最期の模様が明らかになるにつれ、御家人たちの間に、
「これこそ誰かの陰謀ではないか。真相を究明せよ」
の声が彷彿として起こった。
一番困ったのは北条義時である。何しろ、畠山討伐に直接手を染めた張本人なのだ。
政所において質疑が開始された。現代の国会での質疑応答のようなものである。だが、御家人たちの鋭い質問を巧みにかわした義時は、最後に平然と言ってのけた。
「重忠殿謀叛の噂は、誰かが重忠殿を陥れようとして、故意に流したものでござろう。重忠殿に従っていた者は軽装の百騎足らず……何で謀叛などできましょうや。そんな人数で、どうして鎌倉を攻められましょうや。鎌倉の守りを固めたこと自体、笑止千万でござる。誰が守りを固めたのか、誰が重忠殿を罠にかけたのか、この際、讒言者を徹底的に洗い、事の真相を究明すべきでござろう」
義時は自分へ向けられた矛先を巧みにかわして、他に転嫁してしまった。

六　和田義盛　窮地へ

義時の発言を聞いて、色を失ったのは和田義盛であった。
（鎌倉の街中に武装の兵士を立たせたのは自分である。だが、それまでのことよ。武蔵国に討って出たのは義時、時房の兄弟ではないか……。だが、そのことを弁明すれば話は堂々巡りになってしまう。そして、自分が決定的に不利になってゆく……）
「では、誰が武装した兵士を街に出したのか？」
一人の御家人の質問に、皆の視線がいっせいに義盛に注がれた。軍事・警察の最高指揮官である侍所の別当にしか、その権限はないのだから当然である。
義盛は迷った。自分であると名乗り出るのは簡単だが、
「兵士に武装させた根拠はどこにあったのか。何ゆえでござる？」
と問いつめられれば、どうしても時政との密談を話さないわけにはゆかない。しかし、その密談の内容も、漠然として曖昧なものであった。時政は単に、
「……謀叛の疑いがある、との噂だが……」
と言ったまでだった。
（そしてこのおれは、一応警戒のため、兵士に武装させたまでだ）
義盛は皆の注視を浴びて沈黙したままだ。しかし心中、
（このまま沈黙をつづけることは、御家人の間に自分に対する嫌疑を深めることになりはしまいか）
と考えた。そして、義盛は、時政殿の御内室お牧の方と、その女婿で京にいる平賀朝雅が企んだもの、という感触を持っていた。だが、絶対表面には出せないでいる。それは実朝の妻お清の方にまで類が及ぶことであったからだ。将軍家までも巻き込む、一大陰謀事件にまで発展する危険もある。
義盛はなんといっても頼朝以来の重臣であった。正統源氏の将軍を守ることを第一の使命としている武人である。その意味では重忠亡き後、実朝の信頼できるただ一人の忠臣ともいえた。
……次第にざわめきが大きくなってゆく御家人たちの声を聞きながら、混乱する頭の中で、義盛は明確なただ一つの事実をつかんだように思った。それは、
（時政こそが陰謀の中心人物にちがいない。謀られたか！）
義盛は心中そう叫ぶと、きっと時政を睨んだ。
その時、義時が再び口火を切った。
「何ゆえに重忠殿は、鎌倉へ急がれたのか。重忠殿を急がせた者は誰なのか。その者こそ陰謀の張本人ではあるまいか」

御家人衆の有力者、三浦義村が重忠の居城の者を連れてきた。そして言った。

「この者の話によれば、畠山一族の稲毛重成殿が、鎌倉方に謀叛ありと密告したというではないか」

とその場で脅えたように小さくなっている稲毛重成を指差しながら詰問した。

「汚ねえ野郎だ！」

と罵声が飛ぶ。

「よろしかろう、これは侍所別当の和田義盛殿に調査を任せようぞ。本日はこれにて終了といたす」

という義時の一方的発言でこの場の幕はおりた。

和田義盛と三浦義村は時政に阿(おもね)て、一族の主君である畠山重忠をおびき出した稲毛重成を、一言の弁解も許さぬ、問答無用の形式で殺してしまった。そして、これは畠山家の私闘であると発表した。

稲毛重成一人の犠牲において、この事件の真相は闇から闇へと葬られてしまったのである。

いつの世にも変らないのは、汚職などのたびに抹殺されてゆく小官僚の哀れさである。

しかし、この事件をきっかけに、時政の政権も翳りをみせはじめていた。

畠山重忠、重保父子に〝謀叛〟の罪を着せて、強引に謀殺してしまったことは、何といっても時政の大きなミスであった。畠山重忠といえば、鎌倉武士の典型として絶大な人気があった。武蔵国随一の大豪族であり、しかも侠気に富んだ男っぽい性格で、武勇絶倫「あれこそ坂東武者よ」と謳われた。

(これ以上のことは、もはや時政の力量ではできまい)

そう読んだのは息子義時である。

(父の仕事はこれまで……父の時代は終ったも同然)

心中、こう喝破する北条義時であった。

八蔵橋

太田和貞

あと十年はもつであろうと思われていた境川橋(さかいがわばし)が浮浪者たちの焚き火の不始末で、嘉永四年十二月二十日の深夜に焼け落ちてしまった。

東小松川村と西小松川村の名主や村人たちが駆け付けたときには、真黒に焼けただれた橋杭から白い煙が立ちのぼっていた。

ふたつの村の村境を流れていた境川は農家から遠く離れていたので、発見が遅れたためだった。

名主たちは相談し合って、橋の再建の歎願書を代官所に提出することにした。

「歎願書を提出しても、お咎(とが)めを受けるだけですよ」

東小松川村の名主孫左衛門は、代官所からの援助を受けて御普請(ごふしん)で橋の再建をはかることは、あきらめていた。

「御年貢のきびしい当今、すこしでも代官所からの支援を仰ぐのは村人のためです。そのためには、わしは何回でも頭を下げますし、何通でも歎願書を書きます」

西小松川村の名主次郎左衛門の強い意見に押されて、孫左衛門も同意せざるを得なかった。

境川は村の若者なら一気に跳び越せる川幅だったが、房総の諸大名が参勤交代で通行する元佐倉道(もとさくらみち)にある橋であったから橋の幅が広くつくられていた。

小岩・市川の渡しで江戸川を渡り、江戸に向かう元佐倉道にある橋なので、焼け落ちたとなると早急に再建しなければならなかった。

(村の小川に架かっている橋ならば再建せずに、多少の不便は我慢するのに……)

と孫左衛門は考え、次郎左衛門は、

(参勤交代で諸大名の行列が通過する道だから代官所も御普請を認めざるを得ないだろう)

と、境川橋の重要性に期待をかけていた。

翌日の朝一番に、ふたりは歎願書を持って代官所に出

頭した。
半刻ほど待たされて、庭に案内された。
代官竹垣三右衛門が部屋から廊下に出てきた。
「へ、へーッ」とふたりは平伏した。
「参勤交代の往来に使用する元佐倉道の境川橋が昨夜焼失したとあるが、真か？」
次郎左衛門は昨夜の失火の状況を説明し、
「御普請をお願い申し上げます」
と言った途端に、「黙れ」と一喝されてしまった。
「御普請により完成をみた橋を焼失させて置きながら、更にその再建に御普請を願い出るとは、誠に言語道断。国を挙げて黒船防備に力を尽しているこの非常時をなんと心得ておるか？　春の参勤交代までに両村の自普請（村の負担による工事）にて橋の再建を急度（必ず）申し付ける」
これだけ言うと代官は部屋に入ってしまった。
「へ、へー」と平伏したまま、ふたりはしばらく頭を上げられなかった。

「孫左衛門さんのおっしゃる通りでしたな。わしは参勤交代があるので代官所も再建費は負担していただけるものと思っておりました。きょうのお代官様のお言葉は意外でした」
「そうですよ。お代官様もしんから怒っている訳ではありません。橋の再建の負担を出したくないから、あんなに居丈高に言っているだけです。黒船来航以来、御金蔵が空になるのを心配しているからでしょう」
「橋を架え替えるのにどの位かかるでしょうかねぇ」
「参勤交代用の橋ですから通常の三倍はかかるでしょうね」
「その負担は村高でお願いできますか？」
「それでなくとも、金がどんどん出ていくときですから村高でなければ村人は承知しないでしょう」
「材木の買い付け、人足の割り当て、検査役人への接待などと、これから物入りが多くなりますねぇ」
「それよりもまず、橋が自普請でやらねばならぬことを村人に納得させるのが頭痛の種ですな」
「おっしゃる通りです。これからも力を合わせていきましょう。それにしても、浮浪者たちが橋の上で焚き火をするとは、わしらには考えられませんでしたな」
「浮浪者たちの不注意がわしらにこんなに心配をかけ、さらに負担を掛けるとは、本当に八つ裂きにしても、飽き足りない位です」
「ごもっともです。橋が完成したときには橋守を置かないといけませんかな」
「橋守を置く……。金が掛かりますが、お代官様からお叱りを受けるよりは、いいかも知れません」
次郎左衛門は三か月前から食客になっている相撲取

のことを思い出したが、まさか前頭三枚目まで上がった関取に橋守は頼めないと思った。
お代官様のきびしいお叱りがよほどこたえたのか、ふたりはいつになく饒舌であった。

境川橋再建の負担は東小松川村の二三八九石、西小松川村の二〇二八石の村高で分担することになったが、
「浮浪者たちの焚き火の不始末をなんでわしらが背負わなきゃならんのだ！」
村人たちの不満を押えるために名主たちは苦労した。
そのため、普請につきものの役人への接待費は、その会合では言い出せなくて、
「止むを得ない。わしらで負担しましょう」
ということになった。
しかし、境川橋再建自普請の目論見帳を代官所に提出すると、毎日のように役人たちは昼前に検分に来て名主屋敷に立ち寄った。
昼食を馳走し、夕方には土産物を持たせてお帰りを願った。その度に、名主たちは次のような請取証を書いて役人に手渡した。

請取証之事

境川橋再建自普請御検分のため橋本卯三郎様御来村種々御懇切なる御指示を戴き誠に有難き仕合に存じ奉り候　尽時にかかり申し候ニ付　拙宅にて処ありあわせの前栽（野菜）をもって昼食を差し上げ　馳走がましき儀これ無く候　その昼食代として銭百四拾八文を受領致し申し候　これに依り請取証を差上申し候
嘉永五年壱月十四日

葛飾郡下之割東小松川村
名主　孫左衛門

橋本卯三郎様

孫左衛門はこの請取証を書く度におかしかった。孫左衛門がこの文書を黙って手渡し、橋本卯三郎も黙って受け取るだけで金銭のやりとりは無かった。
代官所から一日の日当と飯料とが支給されていたが、橋本卯三郎はこのことについては口をつぐんでいた。
つまり、橋本卯三郎は代官所と孫左衛門からの銭を懐中にするばかりでなく、帰りにはお土産物までつくので、殆ど毎日普請場に顔を出した。
「農民から決して接待を受けてはならぬ」
というお上の厳命も、一枚の請取証がみごとに裏をかいていた。
「今度の普請は業腹な話だのう。不始末をしでかした浮浪者はとんずらしやがって割を食うのはおれたちだ」

「本当にそうだよなあ。でも浮浪者がどこのどいつだと分かんねぇから仕方があんめぇ……」

「仕方あんめぇでは、すまされねぇ。春の田起しや畑の耕し返しが始まる時季に、ろくでもねぇ普請に狩り出されて、その上ただ働きじゃ働く気にもなんねぇ」

「いやあ、ただ働きじゃあんめぇ。村普請じゃ手当ても出ねぇが、今度のは村普請とはちょっと違うから、ただちゅうことはあんめぇよ」

「手当てが出るのか？」

「そうよ。おれの考えではお名主さまが自腹を切りなさるじゃろうと思っておるだ」

「それは本当か？」

「本当か嘘か、お名主さまの心次第さ」

大声で話しながら普請現場に集ってきた村人たちは、焼けただれた橋のたもとで焚き火にあたっている相撲取の八蔵に気が付いた。

頭一つ分、大きな図体の八蔵は上半身は裸で腰に浴衣を巻いていた。八蔵は野良着姿のふたりの男たちと話をしていた。

その男たちが名主と気付いて、村人はピタッと話をやめて名主たちの顔をまじまじと見た。

約三十人の村人を前にして次郎左衛門が話し出した。

「春の野良仕事が始まるときに、この普請に狩り出されて、さぞかし不満であろう。本来ならば日当は出せんのだが、それではやる気もおこらんだろうと思って、わしらが相談して一日につき米五合を出すことにした」

村人たちにざわめきがおこって、「ありがたいことです」と頭を下げた。

「その代りといってはなんだが、春の参勤交代が始まる前に、この境川橋を完成させたい。このように橋を焼失させてしまったことで、わしらはお代官様からきついお叱りをいただいた。もし参勤交代までに、この橋が完成しないときにはわしらは腹を切らねばならぬ。自腹を切るのは、わしらの米蔵から米を出せばすむことだが、腹を切るとなると、いくら飯を喰っても腹から出てしまう恐れがあって、はなはだ困る」

次郎左衛門の冗談を冗談ととらずに村人は真面目に、名主の顔を見ていた。

「そこでだ。是非とも参勤交代に間に合わせて貰いたい。普請の仔細については、昨日組頭を呼んで話して置いたので、組頭の指示に従うように……。橋の材木はこのように用意した。これが焼かれると一大事なので、八蔵に頼んで寝ずの番をして貰っている。くれぐれも怪我のないようによろしく頼む」

ここで、ふたりの名主は村人に深く頭を下げた。村人もあわてて頭を下げた。

「それでは、組頭に集って貰おう」

集ってきた六人の組頭に、作業の分担を言わせて仕事

を確認させた。

次郎左衛門は家から運んできた古い太鼓を「ドン、ドン」と叩いて、「作業始め！」と大声で怒鳴った。

「まずこの境川の水を抜こう。橋を真中にして、五間と五間の箇所に土俵を投げ入れて川を塞ぎ止め、みなで水を掻き出せば小半刻もかかるまい」

孫左衛門は川縁から境川に入った。ズブズブと足が川泥に沈んで水が孫左衛門の腰のあたりまで浸した。

「水はまだ冷たいわ。春にはなっていないぞと冬が言っているようだ」

孫左衛門は川縁に立っている村人に笑い掛けた。

ふたりの名主が冷たい境川の中に入ったので、村人たちの目の色が変わった。それまではなんとなくノロノロしていた動作がキビキビと動くようになり、現場全体に緊張感がみなぎった。

川縁から手渡された土俵を次郎左衛門たちは受け取り水中に沈めた。川底に土俵を二列に並べて足で踏み固めて、水面から一俵分の高さに土俵を積みあげた。

じゅうぶんに踏み固めたあと、「念のため青竹で補強して置こう」との孫左衛門の言葉に、村人たちは青竹を土俵に突き刺し、掛け矢で打ち込んで固定した。

「これくらい頑丈ならどんな大水がきたってビクともしねぇ」

村人たちは満足そうに笑い合った。その笑顔を見て、

次郎左衛門は、

（この普請は参勤交代までに完成する）

と確信した。

「こっちはいいぞおう！　そっちはどうだあ？」

次郎左衛門は孫左衛門に聞いた。

「大丈夫だあ」

孫左衛門の声がすぐに返ってきた。

「川の水で体が冷えたであろう。焚き火にあたってくれ」

次郎左衛門のいたわりにも、「いや大丈夫です。おれたちも水を掻い出します」と水の掻い出し組に入っていった。

二人一組になって桶に通した縄を両手で持って、腰で調子をとりながら桶の口を水面にぶっけて、水を汲み、そのま桶を空中に放り上げると桶の水は遠心力で川の脇のたんぼに放り出された。その反動で反転した桶が水面にぶっかって水を汲んだ。

例年、水不足のとき小川から二人一組になって桶で水を汲み上げていたので、村人たちは慣れていた。

「ザブン、バシャ」という単調な音の連続で焚き火に当っていた八蔵はコックリ、コックリと舟を漕ぎ始めた。

昨夜、一睡もしないで材木の寝ずの番をしていたので、その疲れが出てきたのだった。

「八蔵、八蔵……」
肩を叩かれて八蔵はハッと顔を上げた。
「疲れたであろう。屋敷に戻って休むがよい。おきくに言ってあるから朝飯を遠慮せずに食べなさい」
次郎左衛門のやさしい言葉に、八蔵はうなずいた。
八蔵は元前頭三枚目の梅乃若だった。
三月程前に、親方に破門されて次郎左衛門の食客になった。最初は次郎左衛門は「関取」と呼んでいたが、「八蔵と呼んでください」という梅乃若のたっての願いで「八蔵」と呼ぶようになった。
「ザブン、バシャ」と頭の中で調子をとりながら八蔵はフラフラと歩いていた。眠くもあるし、腹もすいていた。
「ザブン、バシャ」と何かに気をまぎらわせなければ名主屋敷まで歩けそうになかった。
「梅乃若関！」
四股名を呼ばれたような気がして、八蔵は立ち止まった。空腹で体がフラフラしていた。
「梅乃若関！　お久し振りです」
目の前の男に挨拶されて、八蔵はやっと頭がハッキリした。
「おう。梅島か？」
言った途端に八蔵は眉間に皺をつくった。
八蔵の目の前の若い男は八蔵の付け人だった。梅乃若の梅の字をやって梅島と名乗らせていた。
八蔵の表情のかげりを素早く読みとって、
「あのときは助けていただきまして、ありがとうさんでした」
と腰を低くして何度も八蔵に礼を言った。
着古した浴衣を尻端折りしている格好は、どうみても懐があったかいとは言えなかった。
梅乃若の破門は梅島が梅乃若の部屋に入ってきたときから始まった。
秋場所も無事に終わり、九勝一敗と勝ち越したので梅乃若は部屋でゆったりとくつろいでいた。
そこへ入ってきたのが梅島だった。梅乃若の前で畏った梅島は俯いたまま何も言わなかった。
そのうち両肩を震わせ始めて、涙がポタポタと膝に落ちた。
「梅！　どうした。黙っていちゃ、何も分からねぇ。訳を言ってみねぇ」
梅島の涙に、梅乃若は慌てて言った。
「はい。これ以上ご迷惑をお掛けできませんので、きよう限りでお暇をいただきます」
「暇をくれ！　こりゃ大事だ。わしでよければ一肌脱ごうじゃないか」
「へい。ありがとうさんです。そう言っていただいただけで土俵をおりる決心がつきました」
梅島はなかなか訳を言わなかった。なだめすかして、やっと訳を聞いたところ、いかさまばくちにひっかかって十両の借金をつくってしまったと言うのだった。
それを支払わなければ右手の人差し指を切り落されるので、江戸から逃げたいと言った。
「なんだ。そう言うことか……。わしに任せろ！　いかさまばくちで負けたのなら、その十両も払う必要はない。わしが方をつけてやるから案内しろ！」
梅乃若も若かった。いかさまばくちという言葉に異常に反応した。それに前頭三枚目という自負が闘争心に火を付けた。
その頃の梅乃若は気力も体力も充実していた。相撲も負ける気がしなかった。九勝一敗の一敗も大関に惜敗しただけだった。
いずれ大関になるだろうと世間では期待していた。
そのおれが出向けば、なんとかなるという箸りもあった。
「いま、なんと言いなすった。いかさまと言いなさったね。前頭三枚目の関取がわざわざおいでいただいたので、十両もチャラにしようかと思っていたが、いかさまと言われちゃ、おれの顔が立たねぇ。いかさまと言ったのを謝って貰いましょうか……。もし謝らなきゃこの家から生きちゃ出られませんぜ」
「今度は脅しかい。そんな脅しにビクつく梅乃若じゃねぇや。いかさまだから、いかさまと言ったまでよ。そっちこそ悪るうございましたと頭を下げろ！」
「それじゃ仕方がありません。覚悟していただきましょうか……」
貸元の声はあくまで静かだった。
「野郎共、やっちまえ！」
すばやく立ち上がった貸元は大声で怒鳴った。
「おう！」と掛け声とともに、手下が部屋に乱入してきた。
「おもしれえ。この喧嘩買った。相撲取がどんなに強ぇか、みせてやる！」
梅乃若はパッと裸になった。腰にまわしを付けていた。
ドシン、ドシンと四股を踏む度に家が揺れた。
まわし姿の梅乃若に圧倒されて、手下共は一瞬たじろいだ。
四股を踏み終えた梅乃若は、「オリャッ」とわめいて貸元が背にしていた床柱に鉄砲を二、三十発ぶちかました。壁が崩れ落ちた。梅乃若の全身から汗がしたたり落ちた。
「この部屋じゃせめぇ。表に出ろ！」
と貸元に怒鳴った。
梅島といっしょに家を出るとき、ふと思い付いてまわ

しをつけてきたのだ。
十両の借金がチャラになったとき、まわし姿で相撲甚句の一節でも唄って花を添えようと思っていた。それが売り言葉に、買い言葉で思わぬ展開になり、そのまわしが役に立ってしまった。
「貸元！　おれがこわいのか？　青い顔をして手下共の後ろについていねぇで、前に出て勝負しろ！　相撲は一対一でやるもんだ。おめぇのように後ろにひっこんでいられちゃやりにくくて仕様がねぇ。さっきの啖呵はどうしたんだい！」
梅乃若はさかんに貸元を挑発した。その挑発に乗せて一対一の勝負に持ち込めば、絶対に負けないと思った。手下のひとりが懐に呑んでいたドスを抜いた。
「なんでぇ。やくざの喧嘩じゃたったひとりを大勢で取り囲んで、おまけにドスまで使おうとゆうのかい。それならおれにも考えがある。相撲じゃ身にまわしをつけるだけでなんにも持っちゃならねぇことになっているが、きょうは特別だ！　丸太を持たして貰うぜ」
梅乃若は障子を蹴倒して庭に飛びおりた。庭の隅に転がっていた丸太を拾い上げて両手で高く持ち上げ、頭上で振り回わし始めた。
丸太はブンブンと唸りながら回転した。梅乃若が幕下だった頃、大関相撲のあとの弓取りをやらされていたので物を回わすのは得意だった。思わぬところで弓取りの稽古が役に立ったが、手下たちは梅乃若の勢いに圧倒されて一歩退いた。
「この丸太に当ったら命は保証しねぇぞ。その覚悟で掛ってこい！」
梅乃若は丸太を斜めに構え直した。
「待った！　その喧嘩待った！」
カルサン姿の男が庭に飛び込んできた。
「どんな事情か分からないが、この喧嘩をわしに任せてくれないか？」
「こりゃあ、お名主さま」
カルサン姿の男は西小松川村名主の次郎左衛門だった。梅乃若を贔屓にしてくれていろいろと世話になっていた。
梅乃若は丸太を地面に置いて蹲踞した。
「梅乃若はわしに任せると言っておる。貸元はどうする」
「旦那に出張ってこられちゃ、わっしも嫌だとは言えません。ちょっとした言葉のいきちがいで、こんなことになりまして面目次第もございません」
「わしの顔を立ててくれるのかい」
「へい」
「それでは夕方の六ツ刻（午後六時）に三河屋で手打ち式をするから集っておくれ。貸元は代貸と二人。梅乃若の方は誰にする？」

「はい。この騒ぎの張本人の梅島を連れていきます」
「そうかい、貸元もいいですね」
「へい。分かりやした」
こうして手打ち式は行なわれたが肝心の梅島はとうとう姿を見せなかった。
その夜、遅く部屋に戻った梅乃若は親方に呼ばれて破門を言い渡された。
「破門の訳はおめえがいちばん知っているはずだ」
親方に冷たく言われて梅乃若は返す言葉も無かった。
「梅島はどうなりました？」
そう聞くのがやっとだった。
「ああ、あの野郎か、賭場に出入りしていたから破門にした」
親方の返事はそっけなかった。
（こんなに早く、やくざとの喧嘩がばれたのは、梅島が親方にたれ込みやがったんだ）
と思ったが、梅島も破門と聞けば、そうではないらしかった。
（貸元の奴、おれに笑顔を見せて置きながらかげでこんな卑怯なまねをしくさって）
鷹揚に盃を口に運んでいた貸元の顔が目に浮かんできた。
親方は梅乃若の顔を見るのも嫌らしく、早く部屋から出ていけと手を振った。
梅乃若は一礼をしてから黙って部屋を出た。後ろ手で襖を閉めたとき涙がボロボロとこぼれた。
（これでおれの相撲人生も終った）
と思った。
前頭三枚目の花形力士のおれがまさか破門されるとは、夢に思っていなかった。
（手打ちの酒をおれがいい気持ちで呑んでいる間に、あの貸元はおれを讒訴する使いを親方の家に走らせていたのだ。きたねぇ真似をしやがって、だからおれはばくち打ちは嫌いなんだ）
と梅乃若は思い付く悪態を口にしながら町をトボトボと歩いた。ありとあらゆる悪態を言い尽くして立ち止まったとき、ふと次郎左衛門の顔が浮かんだ。
（そうだ。お名主さまに頼んでとりなして貰おう）
梅乃若は安堵の表情を浮べた。
梅乃若の頼みを聞いた次郎左衛門は、
「ああ、いいよ。あした一番で頼みにいってくる」
と気楽に引き受けてくれた。
翌朝早く屋敷を出た次郎左衛門は夕方遅く帰ってきた。眉間に深い縦皺をつくっていた。
「一旦、破門と言ったものをそう簡単に赦せるものではないらしい。ときが経てば赦して貰えるだろうが、時間が掛かるようだ。親方の怒りがおさまるまで、うちで遊んでいたらいい。うちは何年いたって一向に構わぬか

ら……」
「何年……」
「いや、たとえばの話だ」
こうして梅乃若が名主屋敷の食客になったのは三か月程前だった。

頭がハッキリするにつれて、梅島との嫌な思い出が蘇ってきて梅乃若は思わず半歩後ろに下がった。
「関取、うまい話があるんです。一口乗せてあげようと思いまして、こうしてお待ちしておりました」
梅島は半歩、梅乃若に近付いてこう言った。
「おめぇのうまい話には乗れんな。この間のことでおれは破門になった」
「ですからそのお詫びと言っちゃなんですが、関取はなんにもしねぇでも五両という大金が懐に転がり込んでくるという寸法ですぜ。関取はただ目をつぶっていてくれさえすればいいんです」
「目をつぶるだけか……」
「そうです。関取は橋の材木の寝ずの番をしていますね。高鼾をかいて眠っていてくださりゃ、わっしらでうまくやります」
「野郎！　おれは痩せても枯れても前頭三枚目の梅乃若だぞ！　泥棒の片棒なんか担げるか！」
「泥棒とは人聞きが悪い！　関取は眠っているだけで結構です。わっしらが万事うまくやります」
「やかましい！　耳が汚れるわ。二度と言うな。言ったらおめぇの首をねじ切るぞ！」
「そんなに威勢のいいことを言っていいんですかい。ご自分の姿を見て御覧なさい。薄汚れた浴衣を着て冷飯草履をはいた格好はどう見ても前頭三枚目には見えませんぜ。だからおれは五両の金をやろうと言ってるんだ」
梅乃若は無言で梅島の胸を両手で突いた。
「アッハッハ。昔のするどい突きがだいぶ鈍りましたね。突きが鈍り、体力も無くなってあとは梅乃若の爺さんになるだけだ」
梅島は憎まれ口を叩いた。
「てめぇの潮垂れた姿を見て、おれは気持ちがすっきりしたぜ。親方に告げ口をしたのは誰だと思う。このおれさまだ。まさか、おれまで破門されるとは思わなかったが、てめぇが破門されておれは溜飲が下がったぜ。何故だか分かるかい。おれはこまい（小さい）から、いくら稽古をしても負けてばかりいた。それなのに、あんまり稽古もしねぇてめえが勝ち星をあげてくるので、おれは、てめえが面憎かった。いつか蹴落してやろうと狙っていたんだ。おれが嘘泣きして、お暇をいただきますと言ったら、てめえはノコノコと賭場までついてきやがった。おれは嬉しくて体がゾクゾクしたぜ。おれは、てめえみたいなあまちゃんじゃねえ。相撲じゃ負けるが、世間の裏側まで知っているから、てめぇなんかに負けはしねぇ」
「親方にちくったのはてめぇか？」
「そうよ。このおれよ。おれの仕掛けた罠にまんまとはまりやがって、ざまあみろ！」
「二度とおれの前につらを出すな。出しやがったら殺すぞ！」
「なにを言いやがる。今度会ったら用心するのはてめえの方だ。寝首を掻かれねぇようにするんだな」
梅島は捨て台詞を残して駆けていった。
（奴はきっとくる。きやがったら半殺しにしてやる）
梅乃若はそう思って昼間は名主屋敷で昼寝をして夜の寝ずの番に備えた。
梅乃若は付け人に裏切られ、その上、告げ口までされて破門されたのがどうにも口悔しかった。
「いずれ大関だね」
贔屓筋の誰もがそう言って激励してくれた。梅乃若自身も大関に昇進する日が近いのを実感していた。
秋場所も九勝一敗と好成績を挙げた。その一敗も大関に惜敗しただけだった。
大関の地位が摑めると思った瞬間、梅島にその夢を壊されてしまった。
ばくち打ちの貸元の家に案内したのは梅島だった。ばくち打ちとの喧嘩の現場にいたのも梅島だった。
しかし、喧嘩の手打ち式に梅島は姿を見せなかった。このことが梅乃若の心にずーっとひっかかっていた。告げ口したのが梅島と分かり憎しみが倍増した。
寝ずの番をしながら梅乃若は何十回となく、梅島を殺していた。両手で梅島の首を絞め上げ、両の目が飛び出したりした。
頭上高く差し上げ、地面に叩き付けて梅島の体を足で踏み潰したりした。ありとあらゆる手段で梅島を殺しても、次の瞬間にパッと梅島が生き返るので梅乃若はイライラしていた。
五日目の夜、小雨が降っていた。
梅乃若は近くの番小屋に雨を避けた。梅島に狙いをつけてから梅乃若は焚き火をやめた。焚き火の明るい炎が梅島に梅乃若を襲わせる気持ちをなくさせるのを恐れたからだった。
闇夜に馴れた目には焚き火の明るさは無用だった。
（今夜は来る！）
梅乃若は確信めいたものを感じていた。
梅乃若は蓆をかぶった。その下で一間程の樫の棒を抱いて寝ていた。腰にはまわしを締めていた。
梅乃若は大きく息を吸って、大きく息を吐いた。
体に掛けてある蓆が上下に動いて熟睡しているように見えるはずだと計算していた。

夜の四ツ刻（午後十時）に、ヒタヒタと足音が近付いてきた。
梅乃若の枕許でピタッと足音が止まった。そのまま立ち止まって梅乃若の寝息をうかがった。
「なにが寝ずの番だ。眠っているとは大した度胸だ」
梅島の声がして手振りで何か指図しているようだ。
体に掛けていた蓆がソーッとめくられた。
梅乃若はガバッと起きて、蓆をめくった奴の足を樫の棒で払った。
「痛てて、て……」
男は片足でピョン、ピョンと跳ねた。
「野郎！　くたばれ！」
梅島が腰に溜めていた匕首ごと梅乃若に突進してきた。危く身をかわしたが、梅島は梅乃若とすれ違ったとき、匕首を右に払った。梅乃若の右腕に痛みが走った。
「なにをぼんやり突っ立ってんだ。みんなで掛かれば、こんなデブなんかちっとも怖くはねえ」
梅島の怒声に、男たちは懐に呑んでいた匕首を一斉に抜いた。匕首が白く光った。
（梅島を入れて五人か……）
梅乃若は樫の棒を斜めに構えて、腰を落した。
身構えながら足を横に運んで境川を背にした。
（お大名が渡る橋を血で汚しちゃならねぇ）
そんな思いが梅乃若に働いた。男たちに気付かれないように境川に添って動いた。
「野郎！」男のひとりがわめいて突進してきた。
「おう！」
梅乃若は一歩前に進んで樫の棒で男の胸を突いた。
「ウワーッ」と男はぶざまに倒れて気絶してしまった。
「あと、四人！」
梅乃若は勝ち誇ったように、梅島に向って吠えた。
男たちはギョッとして後ろにさがった。
「梅島！　てめぇも相撲取なら素手でぶっかってこい。匕首なんか捨てちまえ！」
梅乃若は悲しかった。梅島が匕首をひらめかして梅乃若に突っ掛ってきた姿が無性に淋しかった。
蹲踞して両手を左右に大きく広げて相手に見せるのは、手には武器を持っておりませんという相撲道の塵手水だった。
相撲界に入ってから耳に胼胝ができるくらいに叩き込まれて、梅島も忘れるはずはなかった。
「よし！　梅島、てめぇも、だちの前じゃ匕首を捨てられねぇだろう。へっぴり腰のだちをおれが追っぱらってやる」
梅島に向けていた樫の棒を男たちに向けた。
「ウォーッ」と吠えて、一三歩前に進んで威嚇した。
おじけついていた男たちは、「ウァーッ」と叫ぶと一目散に闇の中に逃げ込んだ。

「梅島！　土俵を思い出せ！　てめぇも塩をつかんだときのあの思い、足の裏に伝わる土俵の砂の一粒、一粒。相手のまわしに指が掛ったときの緊張感。胸をあわせたときの相手の呼吸のひとつひとつが記憶に残っているはずだ。匕首を捨てろ！　おれはてめえが匕首を持った姿は見たくねぇ」
梅乃若はしぼり出すような声で言った。梅島はしばらく黙って立っていたが、やがて匕首を境川に捨てた。
「それでこそ梅島だ。その腐った性根を叩き直してやる！」
梅乃若も樫の棒を捨て、「さぁ、こい」と身構えた。
梅島が物凄い形相で梅乃若にぶっかってきた。ズルズルと梅乃若は押されたが、左に体をかわして梅島を転がした。
「まだ、まだ！」
梅乃若は怒鳴った。梅島は起きあがるなり、体を丸めてぶっかってきたが、ひごろの不摂生がたたって肩で息をし始めた。
「昔の梅島はどこへいった！　これくらいでへたばるような梅島じゃなかろう」
梅乃若はそう怒鳴って、梅島を境川に放り投げた。すさまじい水飛沫をあげて水に沈んだ梅島はしばらく水面にあがってこなかった。
梅乃若は心配になって境川をのぞき込んだ。
無数の泡とともに梅島の顔が水面に浮かんできた。
梅島が左手を水面に出した。
梅乃若は右手でその左手を握って、岸に押し上げようにした。梅島も岸に足を掛けて一気に跳び上がった。
梅島の右手に匕首が光っていた。
「野郎！　くたばれ！」
梅島の怒号とともに匕首が梅乃若の腹に深く突き刺さった。
「あッ！　この野郎！」
梅乃若は梅島の顔を見た。梅島はにたりと笑った。
「馬鹿野郎！」
梅乃若は両手で梅島の首を力一杯に絞めあげた。
いろいろと問題も起こったが、境川橋は参勤交代前にやっと完成した。梅乃若の死を悼んだ次郎左衛門は境川橋を八蔵橋と改名した。
参勤交代の長い行列が通った元佐倉道は千葉街道と名前もかわり、トラックなどの往来が烈しく、昔の面影は少しも残っていない。
八蔵橋の下を流れている境川は、境川親水公園となり、江戸川区民の憩いの場となり、子供たちの喚声が絶えない。
しかし、八蔵橋の名前の由来を知っている者は誰もいない。

うどんげの花（その一）

三戸岡道夫

一　クールビズ

今年の夏は暑いからといって、まるで気が狂ったように、クールビズとかいったノー・ネクタイ運動が起った。それも驚くことに、服装の権威の象徴ともいうべき国会議員から起ったのである。

江戸を唄った小唄に「辰己」という曲がある。

〽辰巳やよいとこ素足が歩く
　羽織りやお江戸の誇りもの
　八幡鐘が鳴るわいな

辰巳とは深川のこと。江戸城から辰巳（東南）の方角にあるから、辰巳といった。だから辰巳芸者とは深川芸者のことである。

江戸時代、一流中の一流といわれた辰巳芸者は、その粋を誇るために、冬でも足袋をはかずに素足で歩いた。逆に夏は羽織を着たので、羽織芸者ともいわれた。

辰巳芸者は一流芸者の粋を誇るために、意識的に暑さ寒さに挑戦したのである。

クールビズに狂奔する平成の国会議員は、辰巳芸者の誇りに及ばなかったことになる。西行法師の「かたじけなさに涙こぼるる」ならぬ、「情なさに涙こぼるる」である。

会社でも業績が芳しくなくなると、無能経営者のよくやることが、服装の自由化である。しかし服装の自由化などで、経営改革が進んだ例などない。

今の国会もこれに似ている。首都の移転などを問題にするよりも、いっそ国会議事堂を深川に移してみたらどうであろうか。

（平成十七年）

二　人間としてやるべきこと

最近はテレビを見ても新聞を読んでも、嫌なニュースばかりなのに、先日、ちょっとさわやかなテレビニュースがあった。

それは「振りこめサギ」にあって銀行口座に入った金が、まだ少し残っていたのを、被害者が「返してくれ」と請求しても、銀行は返してくれない。それなのにS銀行だけは、その返却に応じたというニュースであった。

サギにあったのだから、その金が銀行の口座に残っていたら、被害者に返すのは銀行として当然のことだと私は思っていた。ところが銀行口座にいったん入金されると、口座名義人の了解なしに被害者へ金を返すことは出来ないと、法律で決まっているからだという。

だが考えてみると、そんな法律は振りこめサギなどがない時代に作られた法律である。それを時代が変わっても、法律だ、法律だと守っているのがおかしいのである。国会なり、法務省なり、裁判所なりは、緊急に問題を提起して、法律を改正し、緊急の対応をすべきではあるまいか。

そもそも法律とは何なのか。

よく問題が起きても「取り締まる法律がない」といって、何もしないことがよくある。だが、それと反対に、ある法律があるために、その法律で決まっていること以外は何も出来ないといって、問題が起きているのに放置されていることもよくある。

しかし世の中には、法律があってもなくても、人間としてやらねばならぬことが、あるはずである。それを敢然とやったS銀行の正義感（人間として当り前のこと）に、拍手を送りたい。

（平成十七年）

三　杉の花粉症

春遠からじ、などと言っているうちに、はや早春。杉の花粉が飛びはじめた。

テレビの天気予報では「杉の花粉に要注意」と、まるで杉の花粉大津波来襲のようにさわぎたてて、人心を恐怖の底にたたきこむが、医学的な観点から眺めてみると、花粉症といっても、本当の杉の花粉によるものは二、三割程度で、あとは自動車の排気ガスとか、いろいろな大気汚染が原因のようである。

しかしそうだと言うと、日本経済に重要な自動車産業や、また現代生活に不可欠の自動車輸送への影響が大きいので、すべて物言わぬ杉の花粉のせいにしてしまっているらしいのである。

さらに杉の木に気の毒なのは、杉の花粉が増えたのは、戦後、杉の植林が奨励されたが、最近は杉山の手入れをしないので、杉の木が生い茂り、花粉が溢れ飛ぶのだと、杉の木のせいにされてしまっていることである。

しかし失敗したのは杉の植林政策ではなく、材木政策である。戦後、値段の安い外材が入ってきたので、建材

に日本の杉の木を使わなくなった。そのため日本産の杉の木が売れず、その結果、手入れの行き届かない杉の木が生い茂り、花粉が溢れるほど杉の木から飛び散るようになったのである。

杉の花粉症を恐れ、杉の植林失敗を糾弾するのなら、たとえ安くても外材を使わずに、高い日本の杉材を使う法律でも作るしかないのではあるまいか。物事を解決するには、それくらいの覚悟と、コストを負担すべきなのである。ただ、世の中の事象を非難していればいいというものではない。

物を言わない杉の木に、すべて責任転嫁してしまって、杉の木さん、ごめんなさい。

（平成十七年）

四　企業と道徳

人間に道徳が必要だと同じように、企業にも道徳が必要だ、と痛感した本を最近数冊読んだが、その中の最たるものは、

「巨大企業が民主主義を滅ぼす」

という本である。著者はノリー・ナ・ハーツという、ケンブリッジ大学の教授である。

その要旨は、二十世紀後半から世界中に手をひろげた巨大企業、多国籍企業がふえてきているが、その力はグローバリズムの名のもとにますます勢力を拡大している。そしてその巨大な力は、次第に地球上で国家をも圧しはじめているといっていい。

その巨大企業と国家との力を比べてみると、弱小国の場合には巨大企業の力の方が強い場合が多く、また強大国といえども、巨大企業が自国以外に手足を伸ばすのを、いまや押さえることが不可能になってきている。

国家は少くとも建前上は、国民の人権や生活を守るという理念を持っているが、しかし企業にはそれがない。利益のみしか追求しない企業が、国家を超えて、人類を支配していいのか。それを市場主義の名のもとに無制限に許せば、民主主義だけでなく、人類が、世界が滅びるであろう。それを解決するのには、

（巨大企業の経営者、オーナーが、道徳を持つ以外にない）

と、企業倫理を強調したのが本書である。

「企業と道徳の一致」これこそが、二十一世紀の課題ではあるまいか。

（平成十六年）

五　成果主義

年功序列や終身雇用制という日本型経営はもう古い、これからは成果主義の時代だと、形ばかりの成果主義を導入して、うまくいっていない企業が多い。

そもそも成果主義などというものは、経営技術の一部分にすぎないものである。それを経営の基本に据えれば、うまくいかないのは当然である。

成果主義で起っている問題点を二、三、ひろってみると、まず社員は自分の成果のことばかりを考えて、会社のことは考えなくなってしまうということである。A社はこれまで優良な企業として有名であった。これまで社員の頭につねにあったのは、常に、ライバル会社B社に負けまいという意識であった。しかし成果主義が導入されてからは、社員の頭は同期に入社した同僚との給与格差のことばかりで一杯で、会社のことなどまったく頭にないという。こんな会社が、うまくいく筈がない。

また成果主義になると、先輩も後輩も同じ成果で評価される。すなわちライバルである。だから先輩は後輩に仕事を教えない。後輩が成長するのは、自分の存在をおびやかすからである。したがって会社の中で人材が育たず、人材不足になり、やがて会社は衰亡していく。

さらに、いい事は発表するが、悪いことは隠してしまうようになる。悪い情報は上層部へ行かないようになってしまう。成果のみによって評価されるから、当然のことである。すると監視ばかりが強くなり、刑務所のような企業になり果てる。

こんな企業は衰弱するばかりで、成長する筈がない。成果主義の迷信から、はやく脱却すべきではあるまいか。

（平成十六年）

六　孔子の生涯

最近は世の中の道徳の乱れから、論語への関心が高まっているが、孔子はいったいどんな一生を送ったのか、これがあまり知られていないのである。どうしたわけか孔子には、その生涯をくわしく書いた伝記がないのである。

そこで書店を廻って、孔子、論語と名のつく本を片っぱしから、十五、六冊ほど買ってきた。そして、その中から、論語の教えではない、孔子の生涯にあたる部分を読み集めてみると、

（これが孔子の一生だ）

ともいうべきものを、やっと掴むことができた。

それを要約してみると、下層階級に生れ育った孔子は、幼い頃から勉学にはげみ、その学問の力によって世の中に出ていこうとした。しかし、それは非常に困難をきわめた。そこで成人すると孔子は塾を開いて、弟子を集め、教育する。

そうしているうちに、やっとその学問の力が認められて、五十三歳にして魯の国の大臣クラスのポストにつくことができ、政治の大改革をやった。しかしそれも三、四年しか続かず、政敵に敗れて、孔子は政界を追われてしまう。

魯の国に失望した孔子は、仕官を求めて諸国を遍歴した。しかし孔子が仕えてもよいと思うような、仁政を行う君主には出会うことができず、晩年は魯の国へ帰り、弟子の教育に専念したのである。

こう見てくると、論語だけから推測する聖人君子の姿ではなく、政治への野心に燃えた、結構生ぐさい人生だったのである。しかしその野心の中味が権力志向でなく、「仁政の実現」だったところに、世界の四大聖人の一人に数えられるゆえんがあるわけである。

（平成十六年）

七　企業は誰のために

長野県にあるT食品会社の社長は、

「企業の真の目的は、社員の幸せをはかりながら、様々な分野で社会に貢献することであり、企業の成長も利益追求も、そのための手段にすぎない」

という高い経営理念を持って会社を経営し、四十六年間連続して売上高を増加させ、また高い収益をあげている。

最近の経済界は、利益、利益と、利益をあげることばかりが叫ばれ、会社経営の目的はまるで利益をあげることと自体のように思われている時代に、

（会社の目的は利益ではない。利益は社員を幸福にするための手段にすぎない）

と言い切っているところが凄いのである。

また、最近の市場主義万能論者が、利益の株主至上主義をとなえているのに対し、「利益は社員の幸せのためにある」と言い切っているところも、また凄いのである。

そのためT社長は、企業の成長は急成長よりも低成長、スローな成長の方がいいと考えている。急成長には必ず無理が生じ、無理がやがて社員の幸福を破壊するからである。

だからT食品会社では、売上目標とか利益目標といった、数字目標をかかげていない。数字目標をあげなくても、毎期、前期を上廻る売上高と利益をあげているのである。

最近の、数字、数字で追いまわす市場資本主義、グローバーリズムの中で、驚きべき経営姿勢であるが、これに成功している。

社員の人間性を無視した市場万能の経営も、そろそろ終焉を迎えるのではあるまいか。

（平成十六年）

八　理由ある反抗

もと検事、いまは福祉関係の仕事をしている人から、非行少年少女の話を聞いて、昔のジェームス・ディーンの映画「理由なき反抗」を思い出した。

まず、非行のはじまりは、髪の色の変化からだという。茶髪だけでなく、赤、銀、青。男であると髪にソリが入り、タバコを吸い、ズボンを下げて、尻を半分出して歩く。これを半ケツといい、これにはちょっとした技巧が必要で、したがって粋なスタイルなのである。女は爪を伸ばし、髪は赤、紫、黄と、色とりどり。そしてバイクに乗りまくり、深夜騒音をまき散らして走る。しかし、これは、

「おれはこんな騒音が立てられるんだよ」

「爪や髪の色、気持ちが悪いだろう」

と、世間にアピールしているのである。

だから学校の先生や、警察官や、親が、

「お前たち、そんなことをして、どれだけ人に迷惑かけているのか、わかっているのか」

と言っても駄目なのである。

彼等は人に迷惑をかける目的でやっているからである。アピールによって、自分を認めてほしいのである。その反抗には理由があるのである。「理由なき反抗」ではない、「理由ある反抗」なのである。

では、彼等を厚生させるにはどうするのか。彼等を老人ホームなどへ連れていって、ボランティア活動をさせるのである。すると爺さんや婆さんたちが、「ありがとう」と言ってくれる。彼等はこれまで、世間から、ありがとうと言われたことがない。しかし老人ホームで「ありがとう」と言われることによって、人々から認められ、これによって彼等は再起のきっかけを掴むということであった。

（平成十六年）

九　さわやかテレビ

テレビがだいぶ古くなってきたので、近くの電気屋が来て新しいテレビを買えという。

「最近のテレビは鮮明に見えますよ」

「でも、あまり見たい番組がないねえ。くだらない番組がいくら鮮明に見えても仕方がないよ」

しかし、くだる番組がまったく、なくもないのである。私が好きなのはＮＨＫの「小さな旅」と「ふだん着の温泉」である。

「小さな旅」はずいぶん長く、もう二、三十年以上も続いているのではなかろうか。当初は「関東甲信越小さな旅」といって、関東甲信越の山村や漁村を中心に訪ねるルポルタージュ番組であるが、評判がいいので、最近ではその範囲を全国に拡げている。

時間は二十五分ばかりの放映なので、ルポはあまり大上段に振りかぶらずに、その村の一組か二組の家族に焦点を当てて、温かい眼で家族の生活を追い、美しい自然の中のしみじみとした人情が、画面から流れ出てくる。

「ふだん着の温泉」は吉幾三の歌声とともに画面が出てくるが、これも人気のある有名温泉ではなく、山村のあっちこっちにひっそりと散在する、その地域の人びとが、共同浴場のように使っている小さな温泉で、十分間という短い放映時間だが、さわやかな人情味が溢れ出てくる作品である。

しかしこのさわやかテレビの放映時刻が、日曜日の午前五時四十分（ふだん着の温泉）、午前八時（小さな旅）と、ゴールデンタイムから外れているのは残念である。

（平成十五年）

十　無私の精神

先日、ちょっとした講演会で「リーダーシップ」について話してくれと頼まれた。

一般にリーダーシップの条件というと、決まったように出てくるのが、先見性、決断力、実行力、統率力、情報力といった項目である。それで一応そんな項目について話したのであるが、どうも何かが欠けているような気がしてならなかった。それは何なのか、と考えてみた。

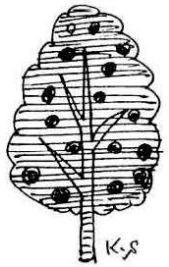
リーダーシップのお手本のような人物は織田信長である。たしかに織田信長は、先見性、決断力、実行力、統率力、情報力、いずれも抜群であった。しかし、本能寺の変で急死し、天下を取れなかった。人生の目的を達するとが出来なかったのである。それはなぜか、信長には一つ大きなものが、欠けていたからではないかと思われるのである。

それは何なのか。いろいろ考えた末に、それは「無私の精神」だということがわかってきた。

心の中の「無私」は、外には「仁の精神」として現れる。「仁」と「無私の精神」のないリーダーシップには、人々は心服しない。人を心服させるものがないリーダーシップは、しょせん成功しないのである。

そうした観点から歴史を検証してみると、真にリーダーシップを発揮した人、たとえば上杉鷹山、保科正之、西郷隆盛、二宮尊徳など、その人間性の根底にあるものは、すがすがしいばかりの無私の精神である。そして、これは現代の政治家にもっとも欠けているものではなかろうか。

（平成十四年）



馬琳英（マー・リンイン）

森下征二

（一）

九月になっても、シルクロードを照りつけている陽射しはさすがに強い。トルファン博物館へ案内された私たちは、ひんやりした館内に入って、初めてほっと一息ついた。

気がつくと、一行の先頭は早くも二階へ向かっている。長いバスの旅に疲れ切った私は、やっとの思いで行列の後ろにつくことができた。足が鉛のように重い。これからまた、階段を上るのだろうか？　思わずため息をついて通路を見ると、扉の陰でひっそりと絵筆を揮う若い女性の姿が目についた。

白い地味なブラウスを着た彼女は、粗末な椅子に腰を掛け、一心不乱に絵筆を揮っている。何の変哲もない会議用の机の上には、和紙に似た紙に描かれた沢山の絵がむぞうさに置かれている。彫りの深い顔つきを見ると、ウイグル人の娘かもしれない。真っ直ぐに伸ばした黒い髪が白いブラウスに良く似合い、見れば見るほど清楚な感じがする女性である。

ひょっとしたら、この博物館で働く学芸員の一人かもしれない。美しい娘だな…と思いながら、私はそれとなく彼女の仕事ぶりを見つめて、ゆっくりと足を運んだ。

すると、実に思いがけないことが起こった。彼女がいきなり私の方へ顔を向けて、にっこりと微笑んだのである。笑顔で一杯になった美しい顔が、私の方へまともに向いている。

年甲斐もなくうろたえた私の耳に、おおっ、愛嬌が良いな…と、誰かの弾んだ声が聞こえてくる。私は慌てて眼をそらし、一行の後を急いで追いかけた。

ところが、それからがいけない。二階へ上って、部屋の中の展示物を見ても、今一つ身が入らない。何故か、あの、絵を描いている女性が、気になって仕方がないのである。

彼女はどうして、博物館の中で絵を書いているのだろうか？　一体、どんな絵を描いているのだろうか？　何故、私を見て微笑んだのだろうか…と、次から次へと疑問が浮かんでくる。次第に好奇心を抑えきれなくなった私が、再び階下へ下りることに決めたのは、或いは当然のことかもしれない。

ところが、入り口の傍に下りてみると、彼女の前には、既に一人の先客がいた。私たちの旅行団の一人である八束氏である。

八束さんは、六十代の半ばを過ぎた温厚な紳士である。文学も語れば、音楽にも詳しい多才な人でもある。髪はまだふさふさとして黒く、彫りの深い立派な風貌をしておられる。夜毎の会食の席では、紹興酒を飲みながら、洗練された会話を操って、それとなく座を盛り上げておられた。相当な苦労人でもあるのだろう。

その八束さんが、私よりも一足先に彼女の前に来ている。私は八束さんの後ろで、少し離れて見ていることにした。私の位置は彼から丁度死角になり、八束さんからは見えにくい。どうやら彼は、彼女から絵を買おうとしておられるようだ。

そうか、彼女はここで、自分の描いた絵を売っているのだ。私はやっと、彼女の笑顔の理由を知った。あれは多分、営業笑いの類だろう。

ところで私は、もともと、こうした交渉ごとが苦手である。中国で欲しいものは沢山ある。しかし、買えば損をするのがわかりきっているし、そうかと言って損をするのも嫌である。私はこの旅行で、買い物を出来るだけ控えるようにしていた。

八束さんは果して、どのような買い物をするのだろうか？

何度か真剣な応酬があった後、八束さんは絵の中から一枚を選び取り、代わりに千円札を一枚出して彼女に渡した。意外なことに、強引なやり方である。抗議の声が微かにあがった。私は思わず眼をそらし、慌ててその場を立ち去った。

しかし、二階へ上がって見ても全く気分が乗ってこない。この博物館は、公開されている展示物が少なく、そうかと言って、私の気を引くものも特にない。それに…、たとえあったとしても、熱心に見ようとする気持が全く無くなっていたのである。

八束さんは、首尾よく絵を買うことが出来ただろうか？　それとも、まだ商談の最中だろうか？　暫くして私は、再び階下へ足を向けることにした。

下りてみると、彼女の机の前には誰もいない。八束さんの商談は、既に終わったようである。

何となくほっとした私は、思い切って彼女の机に近づいた。そして、彼女と目を合わさないようにしながら、机の上の絵を覗き込む。墨絵に色をつけたようなものだろうか？　絵に疎い私には、どういう種類の絵なのか良くわからない。

絵の向こうから、彼女がにっこりと微笑みかけてきた。あの、こぼれるような明るい笑顔である。そこにはもう、八束さんと渡り合っていた時の、硬くて真剣な表情はない。

彼女が私に何か言った。しかし、聞き取れない…。私には、彼女の言葉が早すぎるのだ。私は仕方なくおずおずと言った。

「請説慢一点儿（もう少し、ゆっくり言ってくれませんか？）」

私は「慢」に、必要以上に力を入れて言った。その言い方がおかしかったのかもしれない。彼女が実に面白そうに笑った。そして、スローモーションカメラを見るように、大きく口を動かしてゆっくりと言った。

「咱們是朋友（私たちは友達ね）」

今度は何とか聞き取れた。しかし、我々はたった今、会ったばかりではないか。彼女は何故、私を友達だと言うのだろうか？

合理的な理由がたった一つ考えられる。彼女は私に絵を売りつけようとしているのだ。それで、私と友好関係を築こうとしたのだろう。

彼女の魂胆が分かると、私も何だか面白くない気分になってきた。しかし考えてみると、それは当然な商行為ではないか？　気を取り直した私は彼女を指さし、最も気になっていたことを聞くことにした。

「ウイグル…？」

私は不確かな調子で話しかけた。彼女がウイグル人なのかどうか、確かめて見たかったのである。幸いなことに、これは何とか通じたようである。

「是（そうよ）」

彼女が笑って頷いた。そうか、やっぱりウイグル人か…。

ところで、私は今、ウイグル系の娘を主人公とした小説を書いている。ウイグル人の若い娘には格別な関心があった。それが、若いウイグルの美人にやっと会うことが出来たのである。満足した私は、彼女の美しい顔をじっと見つめて言った。

「我們是日本人（僕たちは日本人だ）」

彼女が頷く。そして顔を斜に傾けながら、穏やかに繰り返す。

「咱們是朋友（私たち友達よ）」

「対！（そうだね）」

私は、こんな言い方もあったな…と、思い出しながら答えた。ところが、この後がいけない。彼女はいきなり自分の絵を取り出して、ぺらぺらとしゃべりだしたのである。私が何不自由もなく、中国語をしゃべれるものだと勘違いしたのだろう。

彼女としては、ゆっくりしゃべっている積りかもしれない。ところが、私は…と言えば、語彙が余りにも貧弱である。中国語を三年間も習っていながら、全くと言って良いほど聞き取れない。私は、あいまいな微笑を浮かべたまま、彼女の顔をじっと見つめた。

私の顔を見つめ返しながら、彼女が露骨に首を傾げる。私の会話の能力が、思ったよりも低いことに気がついたのである。彼女の眼に、あからさまな失望の色が浮かんだ。そうなるとおかしなもので、私は何となくいたたまれない気持になってきた。しかし、そうかと言って、どうすることも出来ない。暫くして、彼女は賢明な手段をとった。我々の会話を、身振りと筆談に切り替えることにしたのである。

彼女は先ず、机の上に並べてあった絵の中から、「ラクダに乗った娘の絵」を選び出した後、手にした絵画集をおもむろに開いて、その中の一枚の絵を私に向かって指差した。

そこにはまさしく、今、彼女が選び出した「ラクダに乗った娘の絵」が掲載されていた。彼女は私に、自分がちゃんとした画集に登載される腕前の持ち主なのだと、言いたかったのだろう。

何と言う画集だろうか？　気になった私は、彼女の手から絵画集を受け取った。

「全国中国書家名家精品展画集」とある。なるほど…と、私は大きく頷いた。これなら私も、日本にある中国人向けの書店で、見たことがあるような気がする。彼女が相当な腕前の持主であることは、ほぼ間違いないだろう。

私の顔色が穏やかになったのを見て、彼女がにっこりと笑った。そして、私の前の机の上に、自分が書いたラクダの絵を改めて広げて見せる。よく見てくれ…と、言いたいのだろう。

私は仕方なく画集を置いて、絵を拝見することにした。しかし、恥ずかしいことに、私には絵の素養が全くない。私の関心は、専ら絵の右端にある銘の方へ向けられた。私はおもむろに懐から老眼鏡を取り出して、その達筆な字を読んでみた。

それは、「乙酉年九月作　於吐魯番　馬琳英」と読み取れた。

馬琳英（ばりんえい）…か。しかし、中国語で読むなら、馬琳英（マーリンイン）と発音しなければなるまい。ところで、馬氏は古来、胡族の家系である。他にはこれほど、ウイグル人にふさわしい姓はない。

それにしても、これはどうだ？　ラクダに乗った娘の顔は、全く彼女にそっくりである。私は、娘の顔と彼女を指差し、良く似ている…と、身振りで示した。三年間の語学のキャリアが情けない。そんなことしか出来ない私に、次第に腹が立ってくる。

しかし、馬琳英（マーリンイン）は私の気持ちに少しも構わず、にっこり笑って頷いた。脈があると踏んだのだろうか？　自ら椅子を運んで来て、私に坐れと身振りで示す。どうしても商談に持ち込みたいらしい。

しかし、私には、最初から絵を買う気持が全くなかった。それでも、しぶしぶ坐りこんだのは、彼女の清楚な美しさに惹かれたからである。

そんな私を見つめながら、馬琳英はメモ用紙を取り出して、先ず二百元（約二千八百円）と書いて来た。如何に交渉が苦手だとは言え、中国へ来て言い値で買う馬鹿はいない。私は買う気がない…と言う意志をこめて、太貴了（タイグイラ）（高いよ）と言って見る。

彼女が、それなら幾らで買うのかメモに書け…と持ちかけてくる。危ない、危ない…。その手に乗らぬと、私は頑なに首を振る。諦めた彼女が、別の絵を取り出して、これなら百五十元（約二千百円）でも良い…と書いてきた。

私は馬琳英と交渉しながら、損にならないことだけを気に掛けた。そのくせ、作品の価値もわかっていないのである。一体、どれくらいの金額で買えば損をしないか、そのこともわからない。後から考えると、買い物を楽しむ余裕もなければゆとりもない。全く情けない話だったと思う。

こうして、けちな強迫観念に駆られていた私は、損をしないためには、とにかく交渉を決裂させなければならない…と思った。それには、思い切って値切ることである。彼女の絵は、トルファン名物の乾葡萄や雑貨と違って、卑しくも芸術品である。彼女が半値で売るはずがない。

そこで私は、馬琳英が最も力を入れているラクダの絵を選び出し、百元（イーバイ）と言ってみた。これなら彼女は断るだろう。

ところが、私の思惑は見事に外れた。ＯＫ…と、馬琳英はいとも簡単に承諾したのである。そして、彼女はにこやかに微笑みながら、私の顔を指さして言った。

「咱們是朋友（ザンメンシーパンイウ）（私たちは友達よ）、ＯＫ…」

「……」

当てが外れた私は、呆然として馬琳英の顔を見た。まだ、値切り足らなかったのだろうか？　彼女にまんまと引っかかったのだろうか？　そう言えば、彼女の笑顔に強かさを感じる。さもしい疑念が、私の心に霧のように広がって行く。私は、たかが千四百円の買い物であることを、すっかり忘れていたのである。

しかし、ここまで来れば仕方がない…と、私は思った。私は、彼女の真意を理解できないまま、百元札を取り出した。私の意思に反して、商談は成立してしまったのである。

こうして、代金を支払った後、慣れない交渉にすっかり疲れきった私は、少し離れた椅子に坐って、馬琳英（マーリンイン）の絵を開いてみた。

ラクダに乗った彼女の姿は美しい。絵がさっぱりわからない私でも、良い絵である…としみじみと思う。絵は気に入ればそれで良い。そう言って、自分を慰めてみる。しかし、何となく釈然としない。

さて、それからどれくらいの間、そうやって絵を眺めていただろうか？　私の首筋にふわーっと、生暖かい息がかかった。後から私を覗き込んで来たのは、馬琳英である。彼女は私の手から絵を取り上げると、如何にも愛しそうに絵を見つめた後、いきなり、ぺらぺらと速射砲のようにしゃべり始めた。

しかし、私にわかるはずがない。それは彼女も知っているはずではないか？　懸命に聞き耳を立てた私に理解できた言葉は、我們是朋友（ウォメンシーパンイウ）…と言う、例のフレーズだけである。友達だから、安く譲ってやったのだ…と、言いたいのだろうか？　私の首筋にふわーっと、生暖かい息がかかった。後から私を覗き込んで来たのは、馬琳英である。彼女は私の手から絵を取り上げると、如何にも愛しそうに絵を見つめた後、いきなり、ぺらぺらと速射砲のようにしゃべり始めた。

しかし、私にわかるはずがない。それは彼女も知っているはずではないか？　懸命に聞き耳を立てた私に理解できた言葉は、我們是朋友（ウォメンシーパンイウ）…と言う、例のフレーズだけである。友達だから、安く譲ってやったのだ…と、言いたいのだろうか？　それとも、友達の絵だから、大事にしてくれと言いたいのだろうか？

しかし、私はその時、彼女の表現が変わっていたことに気がつかなかった。

馬琳英はそれまで、日本語の「我々」を「咱們（ザンメン）」と言ってきた。しかし彼女は、ここで「我們（ウォメン）」と言っているのである。

中国語では、「咱們（ザンメン）」と「我們（ウォメン）」を殆んど同じ意味に使っている。しかし厳密には、ちゃんと使い分けるのである。

「咱們（ザンメン）」は一般的に、聞き手を含めた「我々」の意味で、今度の場合、具体的には馬琳英と私を指す。これに対して、彼女が私に「我們（ウォメン）」と言った場合には聞き手を含まない。その場合の「我々」と言うのは、馬琳英と誰か…を指す。聞き手である私を含まないのである。

しかし、迂闊なことに、私はその時それに気がつかなかった。彼女は、訳のわからない交渉に疲れきっている私に絵を返すと、今度は用意していた名刺を私に押し付けてしゃべりだした。わかってもわからなくても良いから、言うだけ言っておこうと思ったのかもしれない。

良く見ると彼女の名刺には、大きな飾り文字で三つの肩書きが麗々しく書かれている。

中国少数民族美術促進会会員
中国美協新疆分会会員
中国新疆〇〇大学初等教育学院
美術専業副教授　馬琳英

私は、馬琳英をじっと見つめた。こんな所で観光客と商売しながら、何が副教授なものか…。依然として釈然としない私は、心の中でののしった。

しかし、どうやら彼女の意図は別の所にあるらしい。

馬琳英は、しきりに名刺のメール・アドレスを指さして懸命に私に話しかけてくる。聞き取れるのは、言葉の後ろにつく「たー」と言う語尾だけである。聞き辛いこと甚だしい。これは彼女の訛りかもしれない。

しかし、これほどアドレスを指されては、見ないわけには行かない。私は彼女の指先を追って、メール・アドレスを覗き込んだ。

「malinying＊＊＊」

なるほど…。メールは、やはりアルファベットと数字か。私は変なことに感心しながら、彼女の言いたいことは察しがついた。日本へ帰ったら、メールをくれと言ったのだろう。

私は彼女に、怪訝な表情を隠さないまま尋ねてみた。

「メール…？」

「是、我們是朋友…」

私はこの時も、彼女が「我們」と使ったことに気がつかなかった。彼女は何故、こうまで執拗に、私を友達だと強調するのだろうか…と、思ったのである。

私は、馬琳英の言うことが不思議で仕方なかった。しかし、私の語学力では、彼女に直接、疑問をぶつけることも出来ない。私はこの時ほど、会話能力の不足を情けなく思ったことはなかった。

「我想学習漢語更加…」

私は思わずため息をつきながら呟いた。もっと中国語を勉強したい…と、切実に思ったからである。文法的に合っていたかどうかわからないが、それは何とか彼女に通じたようである。しかし、その時の彼女の顔が見ものだった。彼女は、実にあやふやな顔をしたのである。それは、自分が一生懸命しゃべったことが少しも伝わっていない…と、改めてわかったからに違いない。

しかし、彼女はそれでもにっこり笑った。仕方がない…と言うような顔をして、とてつもなく明るい顔で笑ったのである。そして、自分の机へ戻りながら、陽気な調子で捨て台詞を残した。

「是、我也想学習日語（そうね、私も日本語を勉強したいわ）…」

彼女は多分、あなたの中国語の上達なんか、待っていられないわ…と、言いたかったのだろうか？

私は、彼女の絵を手にしたまま、すらりとした後姿を茫然として眺めた。背が高い彼女が、夕陽を浴びて颯爽と歩く姿は見事なまでに美しい。私の眼には、優雅にさえも見えたのである。

（二）

その日の夜、私たちはトルファン賓館で会食することになった。ビールや紹興酒を飲みながら、シシカバブなどの名物料理に舌鼓を打つ。酒が程よく回った頃、珍しい料理が各テーブルに一つずつ載せられた。

「ラクダの足の裏の肉です」

まだ年端も行かない小姐の、たどたどしい日本語の説明を受けて、私たちの間から一斉に、大きな歓声が上がる。

皿の真ん中に、ぽつんと盛られた丸い肉の塊は、見たところ何の変哲もない代物である。中華料理の高級食材に、熊の掌があることは知っていた。しかし、ラクダの足の掌とは…。さすが、シルクロードであると感心する。

しかし、そうは言うものの、なかなか箸を出す気になれない。果たして、食べたものか…と、互いに顔を見合わせるばかりである。

ところで、私は若い頃、一端のゲテモノ食いであった。それが年を取ると、次第に食べられなくなった経緯がある。しかし、ここは中華の国である。食出でて食わざるは勇なきなり…と、思い切って食べてみる。

薄い肉の下は、透明なゼラチン状である。噛みしめると、こりこりとした歯ざわりがあり、何とも言えず美味である。

「美味しいですよ。日本では食べられませんからね。皆さん、是非味わってください」

私の言葉に、固唾を呑んで見ていた人たちが争って箸を出す。

「あら！　美味しいわ」

「そうね、殆んどゼラチンでしょう？」

「うん、そうだね。ところで熊掌も、こんな味がするのだろうか？」

ラクダの掌のお陰で、少し疲れ気味であった私たちの間で、話が一気に盛り上がる。

覚えているかい？　今朝、暗いうちにトルファン駅で仰いだ星空の素晴らしさを…。空から降ってくるような星空を見たのは、さあて、何年ぶりかなぁ？

そういえば、オリオン座って、非常に沢山の星から出来ているのね。三ツ星の周りに、あんなに沢山の星が隠れていたとは知らなかったわ。

交河故城も良かったね。あの広さ…。まさに、累々たる廃墟だね。スケールの大きさに驚いたよ。

カレーズには、ちょっとがっかりしたわ。考えていたよりは浅かったもの…

等々、弾んだ会話が引きも切らない。

私も相槌を打ちながら、ふと、微妙な違和感を覚えた。隣の席が不思議に静かなままなのである。何時もは座を盛り上げてくれる八束さんが、一向に弾んでこないのである。

それだけではない。彼は食も進まないようである。ラクダの足の掌にも、箸をつけた様子がない。私は彼にビールを勧めながら声を掛けた。

「八束さんは、何処が印象に残りましたか？」
八束さんは、私の声に驚いたような顔をした。彼は何か、物思いに耽っていたようである。しかし、それでも私の方へコップを向けて静かに答えた。
「いや、何もかも珍しかったですよ。でも…」
「ええ…」
「疲れましたね。寝台車で、良く眠れなかったものですから」
「なるほど、あいにくでしたね…。ところで、ラクダの足は召し上がりましたか？」
「いえ…」
彼は苦笑しながら答えた。
「私は、ああいうものは、ちょっと…」
「そうですか…」
私は一旦聞き流しながら、ふと、博物館での彼の行動を思い出した。彼は果たして、ラクダの絵を買ったのだろうか？　買ったとすれば、いくらで買ったのだろうか？
私はさりげない口調で切り出した。
「ラクダと言えば…、博物館で絵を買っていらっしゃいましたね？」
私の質問に、八束さんは思わず目を瞠った。邪気のない、綺麗に澄んだ大きな瞳である。
「見ていたのですか…？」
私は黙って頷いた。
「そうですか…、気がつきませんでしたよ。実はね…、それで今も、嫌になっていた所です」
「ほう…？」
「あの絵を値切ってしまったのです。しかし、あれは値切ってはいけなかった」
八束さんの声が妙に沈んでいる。私は驚いて彼の顔を見た。八束さんは、苦虫を噛み潰したような顔をして続けた。
「彼女はね、最初二百元と言ったのです」
全く同じ言い値である。私はゆっくりと頷いた。
「しかし…ね、値切ったのですよ。日本円の千円に…」
「ええ…」
「彼女は私に、怒った顔をしました」
「そうですか…」
「しかし、それでも彼女は金が欲しい。この国では、芸術家は恵まれていません。大変なのですよ。それで、結局…、私は押し切りました」
「……」
「だって、そうでしょう！　ここは中国ですよ。値切らないで買うことはない」
「そうですね…」
「私はね、知っているのですよ。この国で、値のつけ方が如何にでたらめであるか…。二日前、敦煌のホテル

でのことです。私はね、印材の玉を買いました。ええ、日本で買えば、一本、数万円はするでしょう」
「……」
「こう見えてもね、私は印材に詳しいのですよ。先ず、間違いありません。それをね…交渉の結果、三本一万円にすると言ったのです」
「ほう…？」
「私はそれを更に、三本三千円に値切りました」
「三分の一ですか？」
私は驚いて聞いた。彼はビールを飲み干して、重々しく頷いた。
「そうです。結局そこの売り子はね、上司の指示を仰いだようです。でも、その結果…」
「ええ…」
「三千円で話がまとまりました。何故か？　私が、その日の最初の客だったからですよ。何しろ、口開けの客なのだ。彼らは、縁起を担いで大事にするのですな。だから、日本で買えば五万円以上するものが、そんな値段で買えたのですよ」
「良かったですね…」
私の祝福に、八束さんはあいまいな笑みを洩らした。そして、深いため息をつきながら、私の顔を見て小さな声ではっきりと否定した。
「いや、良くはないのです」
「え？」
「だからですね、私は、あの絵も値切ったのです。あの絵は、日本へ持ち帰ってちゃんと表装すれば、おそらく数万円はするはずです」
「数万円…？」
私は驚いて叫んだ。それでは、私が買った絵も数万円することになる。
「ええ、五万円は下らないと思います…」
「へえ…」
私は唸った。私も無意識であったとは言え、上手な買い物をしたというわけか…。私はじっと、八束さんの顔を見つめた。
「しかし、そんなことをしてはならなかった。この国で、値切ることに馴れすぎて、値切ってはならないものまで、値切ってしまったのですよ」
「え？」
「だって、そうでしょう？　私だって絵を描くのですよ。絵には、特別の思い入れがありますし、描く人の苦労もわかっている積りでした。日本では、若い人のお役にも少しは立っているつもりです。それが…」
「ええ…」
「印材と同じような感覚で、迂闊にも値切ってしまいました。この国の習慣に毒されて、自分が大切にしてきたものを台無しにしたのですよ」

八束さんが私の顔をじっと見つめた。私は思わず顔を逸らし、手にしたビールを一気に空けた。そして、新しいビールの瓶を取り寄せると、彼のコップに並々と注いだ。八束さんが不味そうに飲み乾しながら、私に向かって再び言った。

「実はね…、私はその後、再び彼女の所へ戻ったのです」

「えっ、そうですか！」

「私は、彼女にお金を渡しに行ったのです。でもね、私にもプライドがあります。値切った金を返す…とは、言えなかった。だから私は…、チップだと言ったのです。そうです。私は、彼女にチップだと言って、百元渡してきたのですよ」

「なるほど…」

良い話である。私は思わず、心が洗われる様な気がした。

「しかし彼女は、そんなに嬉しそうな顔はしませんでした。それどころか、怪訝そうな顔をして、私をじっと見つめていましたよ」

「そうですか」

「でもね、多分喜んでくれたはずです。後で私に、名刺をくれましたからね…。彼女の心の中まではわかりませんが、私は、彼女が喜んでくれた…。そう思うことにしたのですよ」

「そうですか、多分おっしゃる通りでしょう。彼女は勿論、喜んだはずですよ。それにしても、後でチップをあげたのは良かったですね。いやあ…、今日は、本当に良い話を聞かせていただきました」

「いえ、私の方こそ…。よく、聞いていただきました。実は、さっきから、気になって仕方がなかったのですからね…。お陰さまで、何だか、胸の痞えが取れたような気がします」

八束さんが、素晴らしい笑顔を洩らしていた。実は私も、八束さんの話しを聞いて、やはり胸が晴れたのである。

私はその時、それでわかった…と、心の中で叫んでいた。何故、馬琳英（マーリンイン）が私との間で、百元の取引に応じたのか？　そして、何故私に名刺を呉れたのか、やっとわかったのである。

おそらく馬琳英は、八束さんがわざわざ引き返した理由を、充分に理解していたのではなかろうか？

今まで、彼女の絵を買った外国人は、星の数ほどいただろう。そして、彼らの殆んどが、値切って買ったに違いない。しかし、値切った後で考え直し、お金を返した外国人がいただろうか？　おそらく、一人もいなかったはずである。

新進の画家である馬琳英は、嬉しかったに違いない。自分の絵を正当に評価してくれた八束さんの気持が、何よりも嬉しかったはずである。それに、あの八束さんの風貌である。馬琳英は、彼が芸術家であることも、見抜いていたのではなかろうか？　だから彼女は、同じ芸術家としての八束さんに敬意を表し、名刺を渡したに違いない。そして、出来れば、彼と近づきになりたい…と、思ったのではなかろうか？

しかし、彼女にもプライドがあった。八束さんに対して、感謝の言葉を直接伝えることが出来なかった。まして、名刺を渡した意味を告げることなんか、出来るはずがないのである。そこで彼女は、八束さんの旅行仲間に目をつけた。それとなく伝言を託せる機会を掴もうと、狙っていたに違いない。

馬琳英（マーリンイン）の目論見は実に上手く行った。その後直ぐに、彼女の絵に興味を示した者が、目の前に現れたからである。そう…。それが私である。馬琳英が私との取引で、一向に売値に拘らなかったことも、こう考えれば理解できる。何のことはない。私は八束さんへのメッセンジャーに選ばれたのだ。

このように考えて来ると、彼女が私に名刺を渡して、メールをくれ…と、しつこく迫ってきた理由も理解できる。あれは、私のメールを欲しかったのではない。彼女は多分、私がメッセンジャーの役割を果たすことを期待していたのだ。

八束さんが私から話を聞けば、彼女が自分の絵を買った客のメールを、欲しがっていることを知ることが出来る。そうすればどうなるか？　彼にその気がありさえすれば、メールを送って来るに違いない…。彼女が、そう考えたとしてもおかしくない。

私の目の前に広がっていた黒い霧が、次第に晴れてくる。

あの時、彼女が私に、「咱們是朋友（ザンメンシーパンイウ）（私たちは友達よ）」と言ったのは、それは、私と彼女のことである。しかし、彼女が「我們是朋友（ウォメンシーパンイウ）」と言った時の友達は、八束さんのことだろう。彼女はあの時、「咱們（ザンメン）」と「我們（ウォメン）」を明確に使い分けていたのである。

そう言えば、馬琳英は、頻りに「他（タ）」と言っていた。私はそれを、彼女の訛りだろうと思っていたが、あれは訛りでもなんでもない。彼女は、「他（タ）」と言っていたのである。「他（タ）」は、中国語の「彼」と言う代名詞である。八束さんの苗字を知らない彼女は、彼を「他（タ）」と呼ぶ外なかったのだ。

しかし、私は全く気がつかなかった。それを全部、私に向けて言われたものだと思い込み、挙句の果てに下衆の勘繰りをした。彼女の甘い言葉に乗せられて、高い買い物をさせられたのではなかろうか…と、頭から疑っていたのである。

やっと、真相に辿り着いた私は、ほろ苦い気持ちを懸命に抑え込んだ。こうなれば私は、罪滅ぼしをするため

にも、馬琳英から託された役目を実直に果さなければならない。私は自分の気持ちを、懸命に抑えながら口を開いた。

「実はですね、私も彼女から、ええ、馬琳英からラクダの絵を買いました。彼女から名刺も貰いましたよ」

「ほう、そうでしたか…」

八束さんが、実に意外そうな顔をした。私は、構わず話を進めた。

「名刺にね。彼女のメール・アドレスが書いてあるのはご存知でしょう？　彼女はね、日本人のメールを歓迎しているようですよ。ええ、これは間違いありません」

私は、八束さんの顔をじっと見つめた。果たして、馬琳英の思惑通りになるだろうか？　八束さんが、じっと遠くを見つめた。そして彼は一言、ぼそりとこぼすように言った。

「そうですか…。では、私も彼女にメールを打ってみようかな」

「ええ…」

「ひょっとしたら彼女は、あの時の、チップを出した馬鹿な男を、思い出してくれるかもしれませんね…」

八束さんの瞳が微かに輝く。馬琳英の気持が伝わったのかもしれない。私は思わず嬉しくなって大きく頷いた。

「ええ、それが良いですね…。きっと、思い出してくれるでしょう。是非、出してあげて下さい」

「ええ、そうしましょう」

八束さんが確りした声で答えた。そして、片目をつむって卓の下から老酒（らおちゅう）の瓶を取り出して言った。

「ありがとう。あなたの話を聞いて、急に元気が出てきましたよ。ところで、まだ料理が残っています。さあ、一緒に飲みましょう。」

私も勿論、飲むことに異存はない。私はふと、馬琳英の顔を思い出した。

たとえ、どんな思惑があったにせよ、馬琳英は私にも「咱們是朋友（ザンメンシーパンイオウ）（私たちは友達よ）」と言ってくれたのである。あれは間違いなく、私に向かって商売抜きで言ったのだ。彼女は多分、私を一目見た時から、誠実な男だと見抜いていたに違いない。

私だって、八束さんに負けてはいられない。私も敢えて、そう思うことにした。博物館に入った時出会った馬琳英の、笑顔で一杯になった顔が鮮やかに目に浮かんでくる。

私はコップに並々と酒を注いで、八束さんと乾杯を交わした。

―完―

天城の鬼火（その三）

堀内永代

九

いずのマドンナ伊郷政子が、フィアンセのSに連一のことを相談してから半月経った十月二〇日の薄暮、突然、火災を知らせるサイレンが山間の温泉町に鳴り響いた。場所は国道一三六号線から少し山間に入った下船原の自動車部品工場で、出火の第一報が付近の住民から一一九番にあった。遂に五件目の火災が発生した。それもこんなに早い時間帯に。住民はさらなる恐怖に震えあがったが、幸い誤報であった。

この事件はマグネシウム鋳造工場の溶解炉釜替え作業中の出来事であった。マグネシウムは高熱で溶解され、溶湯（ようとう）が外気に触れると表面が瞬間的に燃焼する性質を持っている。その事情を知らない住民が火災と誤認したものだった。

誤報と判明して、消防・警察は勿論、住民も安堵の胸を撫で下ろしたが、本物の火災がその日の夜半に発生し、再び火災を知らせるサイレンが町中に鳴り響いた。

火災は、町の「へそ」の部分にあたる青羽根地区の国道一三六号線沿いの製材工場の裏手の狭い町道に沿った物置小屋で、夜間は通行人もなく、火の気もないところだった。

火災の第一報は、出火の直後に匿名で一一九番にあったが、この匿名通報とは別に、出火直後にたまたま近くを通り合わせた住民が、不審な人物を目撃していた。不審な人物は、白っぽいセダンに乗って南に走りさったことが判明した。不審者は、中肉中背で、外灯に浮かび上がった顔は、人気タレントの「U君」に似ていたという証言だった。

この目撃証言は、警察の極秘情報として目撃者と関係者に箝口令が敷かれ、捜査当局以外にはどこにも知らされなかった。警察ではこの不審者を隠語で「U君」と呼

び合い、ある人物の行動確認を強化した。
その後の調べで、匿名の第一報は、火災現場から数百メートル離れた「出口交差点」近くの公衆電話からであることが確認され、捜査員の間に一つの疑問が生じた。
火災現場と出口交差点の公衆電話との中間に交番がある。交番はいつでも誰でも入室できるように無施錠である。そのことは住民なら誰でも知っている。それなのになぜ通報者は交番を素通りして、火災現場から遠く離れた公衆電話から通報したのか。通報者は人に顔を見られたくなかったのか。それはなぜか、その者は犯人なのか。犯人ならばなぜわざわざ通報したのか。捜査員はこの謎を解明し、犯人逮捕につなげたいと聞き込みに全力を上げた。
「U君」に似た不審者の情報は、いつしか住民の間に知られていった。
この目撃情報とは別に、学習塾帰りの男子高校生が青白い不気味な火を遠くから見たという噂が立った。遠くから見た高校生の目には、青い小さな火の玉がもつれ合うように地面を這っていたという。住民は放火魔の怨念が「鬼火」になったと怯えた。
消防団員の中原修一は、これらの目撃情報を分析しているうちにあることに気付いた。毎日一緒に夜間巡回している漣一の顔が、噂の「U君」に似ている。それに体

形も中肉中背で目撃証言と同じだ。かれの通勤車両は白のセダンだ。時々職場で使う油が沁みた安全靴を履いて重そうに歩いている。
疑問点が次々と出てくる。やはり消防団員の噂どおり漣一が犯人か。色白で気の弱そうなあの漣一が、伊豆半島の住民を震え上がらせている放火魔か。自分の意見も満足に言えないあいつが、そんな大それた悪事ができるのか。
漣一の家は修一の家から遠くない。歳は二つ下で、高校は違ったが子供の時からよく遊んだ仲間だ。
(そうだ、思い切って漣一に聞いてみよう、それも一人で聞くよりは二人で聞く方が間違いない)
そう思った修一は、勤務先の信用金庫から帰宅すると、すぐに友人の青山健太郎に電話した。次の土曜日、夜間巡回終了後、修一は話したいことがあるからと言って漣一を自宅に誘った。健太郎もすぐにやってきた。
修一は何から話をすればよいのか迷った。その場に重苦しい雰囲気が漂った。修一も健太郎も昨日から問い質すことを考えていたが、いざ漣一を前にすると、二人ともなかなか切り出せなかった。
「漣一君、会社の仕事は忙しいか」
修一の質問に漣一はおどおどした口調で、
「うん、おれにはよく解からないが、親会社が生産調整とかで会社の受注量が減って困っているらしい」

漣一の勤務先は、湯ヶ島から十五キロほど北へ下がった大仁町にあった。好景気のときにはかなりの利益を上げたようだったが、最近は従業員も少なくなり、会社の経営も楽ではないようだ。バブル景気が終わってどこも似たようなものだなと思いながら修一は漣一の話を聞いていた。
「そうか、最近は不景気になったからな。それでは漣一君も大変だな。でも残業は今までみたいにあるんだろ」
「いや、この頃は残業も少なくなって、月に二、三回になってしまった」
「ふーん、それはちょっと変だな。きみはいつも帰りが遅いっていうが、残業がなくて何してるんだ」
「……」
「青山、きみどう思う」
「そうだな、中原の言うとおりおかしいな」
「……」
漣一は、両こぶしを固く握り締め、小刻みに震えだした。修一は、
「漣一君、なにか隠しているんじゃあないのか」
修一は語気を強めて追及した。
「……いや、別に、隠していることなんかない。パチンコをやって遅くなるんだ」
「へェー、漣一君がパチンコやるなんて驚きだ」
修一と健太郎は異口同音に叫んだ。漣一は子供の頃からおとなしく、近所の腕白小僧と遊んでいても、いつもオドオドしており、ゲームなどにはあまり加わらなかった。
修一と健太郎は、これはなにか裏があると感じた。修一は鎌をかけてみた。
「おれは、きみの会社の人に聞いてみたんだ。きみはパチンコなんかやらないそうだ」
「……」
漣一の顔は青ざめてきた。今度は健太郎が語気を強め、
「漣一、今度の青羽根の火事で不審者の目撃証言があったようだ。その話をきみも聞いているか」
「うん……」
漣一はわずかに頷いた。すかさず修一は、
「漣一、今度の火事では、警察は不審者を絞り込んで、その行動確認を徹底的にやっているという噂だ。不審者はタレントの『U君』に似た男だそうだ。お前、心当たりはないか、どうだ」
「ウゥウ……」
漣一の額から汗が滲み出てきた。目を閉じた漣一の顔は痙攣し、喉元はヒクッ、ヒクッと大きく動いた。
(漣一は黒だ。間違いなく犯人だ。もうすぐ白状する)
修一と健太郎はそう確信した。

「ウゥウ、ウッ……」
漣一の身体は大きく喘いだ。
「漣一、本当のことを言え、言えば楽になる。どうだ」
修一は畳み込んで追及した。
漣一の息遣いは一段と大きくなった。その時、漣一は空になった湯呑みに手を伸ばして冷えた番茶を舐めた。
「どうだ、漣一、お前がやったのか」
健太郎はテーブルを叩いて詰め寄った。
「ウゥ……」
漣一は、テーブルを掻き毟って、大声をあげて泣き伏した。
「……」
「……」
「おれじゃぁない。おれはやってない……」
修一も健太郎も、一瞬唖然とした。
「ウゥウ、ウゥウ……」
食いしばった漣一の口から嗚咽が漏れている。
「なぜだ、お前でないという証拠があるのか」
修一はきびしく追及した。
「なぜおれを犯人扱いするんだ。おれの家は被害者だ。自分の家に放火する奴がいると思うか。おれの家は二度も火を付けられた。おれは犯人じゃあない」
「なに、自分の家に火を付ける奴はいないって……」
「ウーン……そうか」
修一も健太郎も、一瞬納得したような気になった。
「みんなおれを馬鹿にしやぁがって……おれは帰る」
漣一は重い足取りで帰っていった。
(漣一は絶対黒だ)
と思っていた二人は、がっくりと肩を落とした。
(でも、漣一が犯人でなくてよかった)
二人は安堵したが、なにか割り切れないような気持ちもあった。漣一は落ちる寸前だったと思った。もうひと押しで自白したはずだ。口を空け、喉仏が大きく引きつった時は、
(落ちた)
と思った。だが、湯呑み茶碗の底に残った番茶を舐めたことによって、漣一はかろうじて踏み止まった。そして
(俺の家は被害者だ)
と抗弁した。あの言葉は突然出た言葉か、それともあらかじめ考えていた言葉か。
「青山……当分婚礼はお預けかな」
「仕方がないよ。こんなに放火が続いては結婚式なんてやっていられないよ……しかし待てよ、始めからすぐに消し止められることが判っていれば自分の家でも火を付けるかも知れない。犯罪者の心理はおれには理解できないが……やはり漣一は怪しいな」
健太郎は冷たくなった番茶を一口すすって独り言の

ようにそう呟くと、挨拶もそこそこに帰っていった。一人になった修一は、
「やっぱり警察に任せるしかないか」
そういって時計を見た。時計の針は夜中の十二時を廻っていた。

十

五回目の火災があってから半月たった十一月五日金曜日の夜十時過ぎ、修一や健太郎の家から数百メートル離れたところから出火した。出火場所は、猫越川に沿った一戸建ての民家であった。家の周りには生垣があり、庭には樹木も植えられており、道路からは屋敷の中が見えにくかった。
消防団の夜間巡回が終わった直後だったので、修一も漣一もすぐ消火に駆け付けた。消防車も出動して、川の水を汲み上げて放水した。十月下旬から好天が続き、空気も乾燥していたので、予想外に火の周りが速かった。
修一と漣一は一緒になって消火に当った。修一が民家の裏側に廻ろうとした時、
「修一さん、そっちにはガスボンベがあるから気をつけろ」
漣一が大声で叫んだ。
「なに、ガスボンベがあるのか。そうか……」
修一は、漣一の気配りに感謝した。
火災は川沿いという立地が幸いして、民家一軒を半焼しただけで鎮火した。庭の樹木が防火壁の役目も果たして類焼することもなく鎮火した。ガスボンベも燃焼しなかった。
残火の始末も終わって帰宅した修一は、今夜の火災を推理してみた。夜間巡回が終わったのが九時半だ。それから三〇分後に出火している。アリバイ作りの虚をつく時間帯だ。漣一は、家の裏側へ廻ろうとした時に、(ガスボンベがあるから気をつけろ)と注意してくれた。その親切は有り難いが、どうしてそこにガスボンベがあることを知っていたか。そこにガスボンベがあることを知っているのは、その家の住人と業者しかない筈だ。これは火付けの現場を下見した犯人しか知りえない「秘密の暴露」だ。そう思った修一は、すぐ健太郎に電話してそのことを話した。
(これは消防団員が処理する問題ではない)
そう判断して、大仁警察署の捜査本部に伝えようとした、が修一の心は乱れた。幼馴染の漣一を警察に売るようなことになる。あの消火の最中に漣一は、裏に行こうとした修一の身を心配して注意してくれたのだ。漣一にも一片の良心が残っていたのだ。そう思った修一は、電話機のダイヤルを廻すのをためらった。
しかし、消防団員には、情報を警察に提供して連続放火事件を防止する責務がある。修一はそう自分に言い聞

かせてダイヤルに指をかけた。

警察はその夜のうちに、火災現場の証拠保存のために立ち入り禁止の処置を取った。

翌日早朝より、現場検証が始まった。ガスボンベ置き場の周辺から、幾つかの足跡が取れた。その中の一つから微量な油の反応が出た。直ちに鑑識に廻された結果、油は工場で使われる切削油の一種であることが判明した。それと同時にその足跡は、Bメーカーの安全靴であることも判明し、決定的な証拠を掴んだ警察は色めき立った。

警察の動きは速かった。その日の内に、安全靴の販売店から重要参考人を絞り込んだ。それは予想したとおり漣一であった。夕方には漣一に対する逮捕状が出て、大仁警察署に身柄を拘束された。しかし、漣一は警察の厳しい取調べに対しても絶対に口を割らなかった。消防団員だ、ガスボンベの近くに行く可能性も否定できない。警察も攻めあぐねていた時、有力な物証が見付かり、その物証を突き付けられて漣一は遂に自白した。

五回目の火災現場、青羽根の製材場の火災現場に、普段見かけない半生木の檜の小枝の燃えカスが落ちていた。それを警察は押収していた。一方、証拠品として押収した白いセダンの乗用車のトランクにも檜の枯れ枝が残っていた。どこにでもある檜の枝を火付けのときに使ったのだ。檜は別名「火の木」といわれ、生木でも風の力で枝と枝とが擦れて燃えだすことがある。かつて住民は、この火を「鬼火」と呼んで怖れた。

漣一は、勤務先で上司にたびたび叱られ、その憂さを晴らすために火付けを繰り返していたのだ。最初は、人の迷惑を考えたのか自分の家の借家に放火した。それが次第にエスカレートして無差別に放火を繰り返すようになった。火付けに使った檜の小枝は、自宅の屋敷にある檜の落ち葉であった。それを拾い集めてビニール袋に入れて乗用車のトランクに隠し持っていた。それが最後の決め手となった。警察の地道な捜査の勝利だ。

半年以上にわたって伊豆半島の住民を震撼させた連続放火事件もようやく終息した。

健太郎・登世子も華燭の典を挙げ、修一も披露宴に出席した。その後修一の融資業務も多忙となった。

いずのマドンナ・伊郷政子の結婚もそう遠いことではない。平和な伊豆湯ヶ島温泉郷に再び温かな湯煙りが立ちこめた。

おわり

針の穴を通った駱駝（四）

鍋屋次郎

天正十五年（一五八七）六月十九日に秀吉によって発せられたキリシタン禁教令は、高山右近を領地没収、在日バテレンには国外追放命令、そして京・大坂等に建築されていたキリシタン天主堂の取壊し、と禁教令発令直後は凄まじい勢いで処分が行われたが、その後はキリシタン大名や信徒に対しての追加的禁令処分はなく、日が経つに従って「キリシタン弾圧」の動きは静かになっていったと言うよりも、何もなされなかった。

ところが、秋になってその静けさを破るかのように、秀吉は、小豆島に高山右近を匿った小西行長を大阪城に呼びつけた。小西行長は、秀吉に対して堂々と

「キリシタン大名の秀吉に対する忠節は、右近をみれば分かるではないか。キリシタンを信ずることは既存の神社仏閣と相反することになるけれども、自分達キリシタン大名はどこまでも秀吉に忠節を誓うものである。我々を信じて欲しい」

と、時間をかけて主張した。最初は厳しい表情であった秀吉は次第に穏やかになり、詰問は何もなく、やがて右近の最近の動静などを尋ね、行長の答えに頷いていた。

自分に対する叱責と、右近を行長領内から追放せよ、と命ぜられるのではないかと不安を感じていた行長は、この秀吉の態度に安心すると共に、秀吉の右近への愛惜の情が並々ならないものであること感じた。

小豆島島民の、高山右近とその家族・従者に対しての視線は冷たく、秀吉によるキリシタン禁令もあって、右近は島民との会話一つすることが出来ず、無聊な日々を過ごしていた。

そのような状況から、右近は妻子を島に残したまま、月の半分は京・大阪に出て、潜伏しているイルマンを訪ねて経済的な支援をしながら、イルマンから一般信徒情

報を聞いて、その様子を堺に潜むオルガンチーノに報告していた。

天正十五年（一五八七）師走昼過ぎ、右近が近江屋の裏木戸から入って、いつも泊まっている離れ座敷に入ろうとすると、近江屋主人が姿を見せ、一通の書状を右近に渡した。利休からの書状である。開けてみると、極めて鄭重な文面で、且つ、いかにも茶人らしく墨痕鮮やかに

「堺に来ていて、一度も拙宅にお立ち寄りのないのは、冷たいではないか。常日頃は聚楽第にいることが多いが今は堺に来ている。愚妻りきと娘お吟共々お待ちしている」

の内容が書かれている。右近は、自分が近江屋を宿として堺に来ていることは、誰にも知られていないと思っていたが、当時の堺では、他国の侵入者から堺を守るための自衛秘密組織を持っている堺の旦那衆には、情報は手に取るように分かっていた。

利休の妻りきも、末娘お吟も洗礼を受けたキリシタンであることを思い出した。嫁いだはずのお吟が、何故利休のところにいるのか。右近が最初に会ったのは確か十年くらい前、利休の茶席に招かれたときお吟夫妻がお手伝いにやってきていて挨拶を受けた。その時のお吟の美しさは今でも覚えている。

翌々日、右近は利休屋敷を訪ねた。早速書院に通され

「右近様、ようこそお越し下さいました。ここでは誰にも気兼ねは要りません。堺奉行も、私達のことは見て見ない振りをしています。オルガンチーノ様が近江屋さんの関係で堺におられることも、旦那衆は皆知っています。奉行も知っています」

利休がここまで言ったとき、襖が静かに開いて

「右近様お久しぶりでございます」

と、利休の妻りきと末娘お吟の二人が挨拶した。

利休は続けて

「右近様、この堺ではご安心下さい。この堺を敵に回した天下人は誰もいません。比叡山を焼き討ちしたあの信長様でさへ軍資金二万貫の要求ですみました。そして全ての情報は正確に入ってきます。必要な情報はお教えしましょう」

そして

「右近様、先ず茶を進ぜよう。いかがですか。りきとお吟もご一緒させて宜しいでしょうか」

と言って、りきとお吟に目配せした。

利休の、今日は全てを忘れてくつろがせたいと言う思いやりを感じた右近は、微笑みながら

「博多以来の茶席です。喜んで戴きましょう」

と言って、りきとお吟を見た。お吟の表情には静かな笑みがこぼれていた。

利休の、流れるような、そして静かな中に厳かさを漂わせる点前の一時（ひととき）が終わり、和やかな夕食も終わって、りきとお吟は、キリシタンの教えについて右近に対して次々と質問し出した。利休が

「右近様はお疲れでいらっしゃるから」

と言っても全く取り合わず、その間、お吟の嬉々とした表情に、利休はホットしていた。と言うのも、嫁ぎ先から不縁で戻ってきてから今日までの間、二年間、このような嬉しそうな表情を見たことはなかった。ましてキリシタン教理の話しなど、いくら望んでも出来る状況ではなかった。りきもお吟も、長い間の渇きを一度に潤すように右近との会話に夢中になっていた。

夜も更けてから、広い庭園の一隅に建てられている離れに案内された。従者の佃伝兵は既に次の間に控えていた。

右近は乞われるままに利休邸に二泊した。大名を捨てた日以来、右近の緊張しきった心をはじめて潤わした二泊であった。中でもお吟の、キリシタンの教えに関する鋭い質問が何よりも楽しかった。秀吉の禁教令以来、バテレンやイルマンと接触しても、信仰に関する話をする余裕も時間も全くなかったので、この二日間は、右近の心も満たされた。

バテレンからラテン語を習い、永年かかって何とか読めるようになっていたが、お吟の質問はラテン語のニュアンスを丁寧に解釈しなければならないような、専門的な、意味深いものが多かった。特にキリスト教基本教理の一つである「罪の許し」に関しては右近も説明に窮した。

就寝前に、このように楽しくキリシタン信仰について話し合う時と場所を与えてくださったことに、デウスに感謝の祈りを捧げて床についた。

暮れも押し迫ってから小豆島に戻ったが、対外的には何もすることがなく、朝夕の祈りを家族と共に捧げ、後の時間はバーデレから貰ったラテン語の聖書を紐解く、信仰に明け暮れた静かな日々を過ごしていた。

右近は、秀吉の発したキリシタン禁令が、これから厳しくなるのか、このまま忘れられたように平穏な日々が続くのかを見極めるため、正月も過ぎて梅が咲く頃、京・大坂・堺と回った結果、現在はキリシタン大名にも一般信徒に対しても弾圧の動きが全くないことから、目立たない各地域毎の家庭的集会であれば大丈夫との判

断を下し、バテレンを平戸から京・大坂及び従来の担当地域に密かに戻すことをオルガンチーノと協議して、平戸にいるヴァリニャーノ宛てその旨の文書を送った。

バテレン、イルマンやキリシタン信徒にとって平和な日々が戻りつつあった天正十六年（一五八八）五月、秀吉の前ではっきりとキリシタンを表明した小西行長が現在の六万石から肥後南半分、天草諸島を含む二十四万石の大名となった。本人もどうしてこのような栄達となったのか不思議でならなかった。

秀吉は、キリシタン大名を潰すことは止めたのか。それならば右近は国持ち大名への復活はできないのか。小西行長なりに情報を集める努力をしてみたが、秀吉の真意は分からなかった。

右近も小西行長について肥後へ移った。

肥後入国後の行長は、新しい領主として行政組織の確立・租税収入の確認その他多忙を極め、行長自身は当面キリシタン布教に手が回らなかった。

肥後での右近は相変わらず家族と共に日々キリシタン信仰を守りつつ、聖書を学んでいた。しかし、多忙を極める行長の家臣達の「右近一家を見る目」を気にせざるを得なかった。

新しい領国経営について一段落したとき、行長は右近に

「天草島の一部、二万石を右近殿に差し上げたい。石高は少ないが、自分の家臣達との比較上ご了承を戴きたい。ついては右近殿の家臣を呼び寄せては如何」

と、行長なりの好意を示した。

しかし、右近は、生殺与奪の全権を握る秀吉と小西行長との力のバランスを考えた時、あまりにも差がありすぎることから、行長が右近をそのように処遇することの結果、行長に迷惑がかかるのを恐れた。そして、出来るだけ早く肥後を立ち去ることを考えて、行長に対し

「誠に有り難いご好意であり、心から感謝する。しかし、自分にはキリシタン禁制下の京・大坂のバテレンやキリシタン信徒のことが気に掛かるので、しばし自由の身でいたい。勝手な願いをご了承賜わりたい」

と婉曲に辞退した。

そのような時、前田利家の使者が小西行長の栄達祝いに肥後へやって来た。その時、利家からの右近宛書状が届いた。そこには

「上様から貴殿を客将として迎えることの内諾を得た。ついては出来るだけ早い時期に前田家伏見屋敷までお越し願いたい。その折り、キリシタンのことについて教えて欲しい」

と書かれている。

その背景は、小西行長の国替えに伴って、右近も肥後へ移ったとの情報を利家が聞いたとき、利家は秀吉を訪ね、四方山話のあと

「上様、ところで上様には、今でも高山右近のことをお怒りになっておられますか」

と話を持ち出した。秀吉は

「右近は強情な奴よな。全部捨てよった。行長を頼って肥後へ向かったそうな。よく考えてみると、奴をそのままキリシタンの多い九州に置いとくわけには行かない。奴の器量は捨てて置くのは勿体ないし。と言って、キリシタン信仰を捨てることは、この儂の命令にも耳を傾けぬ。どうしたものか、のう利家」

と言いだした。

利家は暫く考える振りをして

「上様からいずれかの大名に右近を客将として迎えるようにご命令をなさることは如何でしょうか。そして上様の天下統一のためお役に立てることが出きればと思いますが」

と言い出すと

「それは儂も考えた。あの右近の器量だ。ましてキリシタンを絶対に捨てぬと言う。右近を召し抱えることの出来る大名は先ずいない」

秀吉のこの言葉の後、しばし沈黙が続いたが、利家は

「上様、ではこの利家が右近を預りましょう。これから上様は先ず小田原の北条、その次には、場合によっては仙台の伊達とも一戦を覚悟しなければなりません。その時に右近には利家の客将として戦列に加わって貰いましょう。お許し頂けますでしょうか」

と切り出した。

秀吉はしばし利家の顔を見つめ

「利家、本音は別にあると違うか。でも、まあいいだろう。よしなに任す」

と言って、後は、利家が若い頃同朋を切って、信長から追放になった経緯など、お互いの青年時代の思い出話が続いた。

前田利家から書状を受け取った数日後、右近は京へ向かった。従者は佃伝兵一人のみ。小西行長には前田利家からの書状のことは伏せたまま、オルガンチーノとの打ち合せを主目的とした上洛であると言ってある。

肥後からは馬と船を使った。

馬上の右近の脳裏には、いつの間にかお吟の美しい姿が浮かんでいる。特に、今年の春、利休邸の桜の木の下でお吟が点前をしてくれた時の美しさが忘れられなかった。それは、全てを信じ、全てを委ねるときの、表情は言うに及ばず全ての動作が、女の至福そのものを表現

していると言っても過言ではない美しさであった。

前田家伏見屋敷に向かった右近が、堺の近江屋に旅装を解いて、単身利休屋敷に来ていた。

書院で利休と、秀吉のキリシタン対応について意見交換をしたが、利休は聚楽第での情報を基に

「秀吉の海外交易も順調なことから、今ここでキリシタンを弾圧して交易に響くようなことはしないだろう。目立たないように活動する限り、大丈夫だろう」

との考えを示した。

利休一家と和やかな夕食を終えた右近が離れ家に戻ると、りきとお吟がやって来て、しばし歓談の後、お吟の求めに応じて右近はキリシタン教理の易しい解説を行った。

終わってから、お吟は従者の佃がいないことに気づき

「右近様、佃様はいらっしゃらないのですか。お休みのご用意を控えの間にさせて戴きますが」

と右近に聞いた。右近が

「佃はいろいろと雑用があって近江屋に残っている。今夜は来ない」

と答えると、お吟は嬉しそうに頷いた。

りきが母屋に戻った後、お吟は暫くとりとめもない話をしていたが、急に居住まいを正し右近を見つめ

「右近様、これからも京・大坂へお出ましになられることも多いと思いますが、これからは近江屋さんではなく、ここをお使い下さい。母も承知しております。お吟にお身の周りのお世話をさせてください」

と言い出して右近をじっと見つめている。

「お吟様、お心遣い有り難う。お父上のお考えもお聞きしてから考えさせて戴きましょう」

右近は床に入ってから目を閉じると、慎ましさの中に喜びを秘めたお吟の姿が浮かんでくる。お吟の先程の一言も耳に残っている。明日、利家に会うと、恐らく一家で加賀へ行くことになろう。右近は暗闇の中で蒲団の上に跪き祈った。

「天のデウス様、誘惑に駆られるこの僕(しもべ)の弱い心を強めてください。思いが乱れる罪をお許し下さい。お吟様も信仰一筋に生きて行くことが出来ますようお守り下さい。明日は前田様にお目にかかりますが、どうかこの僕(しもべ)の歩む道筋が、貴方のお導きによって開けて行くことが出来ますように。この祈りをゼスズ・キリストの御名を通して御前に捧げます。アーメン」

翌日、右近は伏見の前田屋敷を訪ねた。

一通りの挨拶の後、利家は人払いをして

「右近殿、さ、この利家にキリシタンの教えを話してくだされ。貴殿が命よりも大切と考えておられるキリシタンの教えを、この利家是非聴いてみたい」

早々と切り出した。

右近は先ず最初に「利家の客将」の話が出るとばかり思っていた。しかし、考えてみると、右近のキリシタン信仰に関することを聞き出しておくことは、右近を加賀へ招いてからどのように処遇すべきかの大きな判断材料になることであった。

咄嗟にそのように判断した右近は

「前田様、有り難うございます。この右近、今日のこの日が来ることをお待ちしておりました。キリシタンの神デウスにも、このような時間を持たせて戴くよう祈り続けていました」

ここまで言って一呼吸おいて

「では、お話しさせて戴きます」

と、利家に一礼してから話し始めた。

「キリシタンの神デウスは、私達が目にする天地万物の全てをお造りになられ、そしてそれが造られてから、現在も、またこれからも永遠に万物を統べ治められる方です」

利家は右近を見つめて聞いている。右近は続けて

「神デウスは、人が守らなければならない十ヶ条の戒めを、大きな石版に書いて大昔の人に渡してくれました。その戒めを簡単に言いますと、神はデウス一人だけであること。人は親を敬わなければならないこと。嘘をついたり他人のものを欲しがってはならないこと。姦淫してはならないこと。盗んではならないこと。それと七日に一度は働きを休み神デウスの日としてデウスを敬うこと等々です」

右近がここまで言うと、利家は

「右近殿、その十ヶ条は、最初に言われた神はただ一人と言うことと、最後に言われた七日に一度の休みとを除けば、至極当たり前のことではないか。何故八百万の神ではいけないのか」

と意見を挟んだ。右近は

「十ヶ条の戒めの殆どは、お説の通り至極当然のことばかりです。ただ、神はお一人と言うことは、天地万物をお一人で造られて、お一人で統べ治められているからです。一番の問題は、前田様が仰る至極当然な教えを、人々はいとも簡単に破ります」

と言ってから

「それを破ることは、神デウスに罪を犯すこととなります。そしてその罪が許されない限り人は地獄に堕ちます。天国……これをパライソと言いますが、罪を犯した人はその罪を許されない限りパライソに行くことは出来ません」

利家は
「右近殿、妻以外に女を持ってはいけない、他人の物を欲しがってはいけない……それでは余程の善人でない限り、皆地獄だ。そんな恐ろしい教えなのか、キリシタンとは。皆恐ろしくはないのか。それでどうしてあんなに嬉々として信仰しているのか。どうすれば自分の犯した罪は許されるのか」
と、体を乗り出して、矢継ぎ早に質問を並べだした。
「前田様、デウスは恐ろしい方ではありません。人間、皆罪を犯しています。しかしデウスの御一人子ゼスズ・キリスト様が、時代を超越して全ての人間の・・・この右近の罪も含めて・・・全ての罪を背負って十字架にかかられました。ですからデウスを信じて、常に悔い改めて日々を過ごせば、その人の罪は許されて、死後パライソに行けるのです」
ここまで右近が言うと、利家は首を傾げて
「右近殿、難しいな。よく分からない」
と言いだした。
「前田様、ゼスズ・キリスト様の十字架と罪の許しの問題は説明が大変長くなりますので、それは少しそのままにして、先へ進ませてください。デウスはゼスズ・キリストを通して、私達の生き方をこのようにしなさいと命令しております。そしてデウスへの信仰の下にこの命令を守って生きることは、罪を犯さないことにも通じます」
右近は一寸間を置き、続けて
「その命令によって、どう生きなければならないかと言いますと、人は誰でも相手のことをよく考えて、相手が喜ぶことをしなさい。自分がして欲しいことをしてあげなさい。そうすれば、争いがない世の中になる。そして、自分が他人のために何か良いことをしたならば、それは直ぐ忘れなさい、と教えています。恩に着せてはいけないのです」
利家は、なるほどと言った面持ちで頷いている。右近は続けて
「そして、もしも自分に対して悪いことをした人がいたら許してあげなさい。何回でも許してあげなさい。そうすれば、いつかはその人は心から悪いことをしたと思うようになって悔い改める、と教えています」
この時、利家は
「右近殿、そのような話ならよく分かる。一つ質問するが、右近殿は何故食事の前に祈るのか。朝でも夕方でも一日一回祈ればいいのではないか」
と言いだした。右近はにっこり笑って
「前田様、私達はデウスに生かされているのです。自分の力で生きているのではありません。食べ物一つにしてもデウスから与えられているのです。ですから毎回感謝の祈りをします。デウスは私達人間を守ってくれているのです。生かしてくれているのです。自然界を見渡してください。私達に必要な物は全て与えられています。だから全てに亘って常にデウスに感謝の祈りを捧げるのです。それから、こうして欲しい、と言うことも祈ります。昨夜も、今日前田様と親しくキリシタンの話が出来ますようにお守り下さい、と祈って出てきました」
利家は
「では祈ればなんでも聞いてくれるのか」
と言って右近を見つめた。右近は
「デウスはなんでも聞いてくれるわけではありません。デウスが、今こうあるべきだ、と思えば聞いてくださいますが、そうでなければ私達が祈ることの全ては聞いてくれません。しかし、私達人間が思いも及ばないところで聞いてくださいます。今日、右近がこのように前田様とお話しが出来ているのも、この右近、何年も前から早く実現して欲しいと祈り続けていました。デウスは、今日という最も素晴らしい日を定めて右近の祈りを聞き届けてくれたのです。このような日に前田様にお話しできるとは右近すら考えも及ばないことでした。これがデウスのなさることです」
ここで、利家は
「右近殿、キリシタンのことが分かったとは言わない。がしかし、常に己に謙虚で他人のことを考えながら、つつましく生きている人達であることは、少しは理解できたような気がする。聞くが、例えば右近殿の地位とか、財とか、名誉とか、そういうものの価値というか、右近殿は欲しくないのか。そのようなものがあれば、贅沢三昧なんでも出来るではないか。キリシタンの人達には、そういったものは全く価値がないのか」
「はい、前田様。デウスははっきりと申しております。人は神と富の両方に仕えることは出来ないと。これは、富に執着すれば、必ず人を傷つけ、神ゼウスをないがしろにすることとなるでしょう。私達キリシタンは、人はこのように生きるんだ、と言うゼウスのご命令通り生きるよう努力して、やがてパライソに迎えられることを、人生の最高の幸せと信じております。また、そのように生きるべきと考えています。そしてその生き方を多くの人に勧めています。従って富と信仰とどちらを取るかと聞かれれば、躊躇なく信仰を取ります」
右近がここまで言うと、利家は姿勢を正して
「右近殿、ご立派なキリシタン信仰であることは理解できた」と言って茶を一口啜り
「ところで、この利家の客将として加賀へ来ていただけないか。加賀での右近殿のキリシタン信仰はそのまま続けて結構。上様にはこの利家が責任を持つ。来て戴いて暫くしたらキリシタン寺も建てよう。今聞いたキリシタンの教えであれば、加賀の領民達にも話してくだされ。領民にも為になるお話しだ」

話の成り行きに驚く右近を見つめ、利家は続けて
「そして、今まで右近殿に仕えていたご家来衆も一緒に来て戴きたい。ついては加賀が雪になる前、この秋にも来て戴きたい。そこで、どの程度の数のご家来衆が一緒に来るのか、その辺の見当も教えて戴きたい。それから右近殿の所領は、ご家来衆がどれだけ来ても賄えるだけのものは差し上げたい」
と、本論を切り出した。
右近はその場に平伏して
「前田様、どのようにお礼を申し上げて良いのか分かりません。有り難うございます。お言葉を有り難くお受けさせて戴きます。右近についてくる家臣達のことは、今は高槻やあちこちに分散していますので、今年秋までにご連絡させて戴きたいと思います。家臣達の住いなどは土地さへ拝借できれば当方で考えたいと思います」
と礼を述べた。続けて
「帰りまして、大変世話をお掛けしている肥後の小西殿にも、前田様のご好意をお話しして理解を求めたいと思います」
「右近殿、これで決まりだ。よしなに頼む」
言い終わって、手を叩いて近習を呼び酒肴を運ばせた。

その頃大阪城内では、淀君の我儘に三成など秀吉側近は手を焼いていた。秀吉が淀君の言うままに命令を発してくる。道理も何も全くない。三成などは、秀吉が淀君以外の女性に夢中になって、淀君との時間が少なくなってくれることを願っていた。そのためには、淀君以上の女性を捜して、秀吉に宛う他はない。
三成は立場上、そのようなことを仮初めにも口にすることは出来ないが、兼ねて親しい茶道宗匠松庵に
「上様に差し出す見目麗しい女性は居ないものか。上様も淀殿だけではご満足でない節がある」
と相談を持ちかけていた。

一方、茶道の世界では、秀吉は言うに及ばず諸大名に信頼が厚く、茶道会に君臨する利休に対しての嫉妬が渦巻いていた。折りあらば足を掬いたい、何とか利休を失脚させたい、そして自らが茶道頭として君臨したい、と狙っている者も一人や二人ではなかった。
松庵は三成の相談に対して、利休の娘で、後家として戻っている「お吟」を考えた。お吟の美貌は知れ渡っている。松庵は自宅の狭い茶室で一人考えていた。
「そうだ、この手がある。お吟は確かキリシタンだ。キリシタンであれば、秀吉の側室や夜伽を命ぜられても、命を賭けて断るであろう。そうすれば利休の立場がなく、秀吉の前から失脚するであろう」

松庵は早速大阪城内に三成を訪ねた。
「石田様、過日のご相談賜わりましたこと、格好の女性を見つけました」
三成は目を輝かし
「それはどこの息女か」
と、速く言えとばかりに松庵を急き立てた。
「はい、利休宗匠の末娘、お吟殿でございます。嫁先不縁で今は宗匠のところに戻っていますが、それはそれはお美しい方で、加えて大変利発な方でございます。必ずや上様のお気に召すものと思います。身どもがこのように推挙させて戴きますのは、上様はことのほか利休宗匠をお気に召しておられますので、このご縁が成れば、上様と利休宗匠のご縁も幾久しいものとなることと、そのお慶びを実現したいと思っております」
「年は幾つか」
「はい、三十五、六かと存じますが」
「年増だな、松庵、大丈夫か」
「石田様、ご自身の目でご確認下さいませ」
三成は、うーんと唸ったまま、年齢を気にしている。
松庵はここぞとばかりに
「石田様、百聞は一見に如かず、と言うではありませんか。石田様がお気に召すことを、この松庵が保証致しましょう」
相変わらず三成は宙の一点を見つめたままであったがやがて
「見に行ってくるとしよう」
と呟いた。
三成はお吟を見たことはなかった。しかし、どのような用向きを作って堺の利休屋敷を訪問するかを考えた。そして、訪問してもお吟がいなければ目的を達することは出来ない。
それから三日後、秀吉から、「大名を集めての大茶会開催」の相談を受けた利休が奥から下がってくるところを、三成は
「利休宗匠殿、少しばかりお願いの義があるが、宜しかったら身どもの控えの間にお越し戴けないか」
と声をかけ、三成の控えの間に案内した。
「利休宗匠殿、実は無心がありまして。いや、お代は仰せの通りお支払いしますが、宗匠の作られた茶杓を一つ、この三成に分けていただけないかと思いまして、お願いするしだいです」
これを聞いた利休は、
「石田様、これはこれは勿体ないお言葉。この利休、恐縮致します。たまたま作り上げたものがございますので、後日お持ち致しましょう」
「いや、宗匠殿、勝手ながら、宗匠のお屋敷で、宗匠おも凌ぐ腕前と評判の高いお吟殿の点前で茶を喫しながら、茶杓のお話もお聞きして、我が家の家宝と致した

をするお吟の白くふくよかな手許をじっと見つめていた。

この美しさをどのように秀吉に伝えたものか考えていた。秀吉に話すのにはタイミングが必要である。また、誰を通して話すかも重要なポイントとなる。

暫くは三成の胸の内のみにしまっておくこととした。

利休には、何故三成が急に茶杓を欲しいと云いだしたのか、どうしてお吟の点前を要求したのか、全く理解できなかった。ただ、秀吉との間を可能な限り円滑に保つためには、三成との太いパイプは必要であった。

その日、三成は利休の作った茶杓に、謝礼として五十両を渡した。茶杓の銘は「秋寂」と墨痕鮮やかに書かれていた。

お吟を目の当たりにした三成は目を見張った。容姿と言い、立ち居振る舞いと言い文句のつけようがない。淀殿と比べても決して劣らない。年齢差は全く感じさせない。その驚きをお吟や利休に気づかれないように、点前

「まんじ」季刊発行内規

（発行日）　（原稿締切日）〔注〕

春季号……二月一日……十二月三十一日
夏季号……五月一日……三月三十一日
秋季号……八月一日……六月　三十日
冬季号……十一月一日……九月　三十日

〔注〕円滑な発行を期す為「一週間前編集長宛到着」に努めましょう。

ある脱走（エスケープ）

大和禎人

これはMくんの話である。脱走を今日流にエスケープとルビをふるなら他愛もないが、話は戦前だから、穏やかではないのである。日本語の険しさが想像される。

「労務手帳」というものに縛られた若者Mがその呪縛を逃れて脱走したのである。

昭和十七年暮、大戦の真っただ中、そろそろ戦況不利の兆しを見たころ、早くも十二月に繰上げ卒業という措置が実施されているのだ。産業戦士を一刻も早く送り出そうとする趣旨の特別措置であった。

商業学校を工業学校に転換させるという強制措置まで行われた時代だった。

「Y、キミはボルネオだ、いいな」

「U、キミは北支の××、八幡製鉄の系列だ」

そしてMは、

「キミは中外の給費生として同社の北海道、八雲だ」

卒業をひかえて、某日の伝達であった。否応なしの申し渡しである。

九大出の採鉱科長O教諭に添えて副科長で温厚円満なT教諭の立ち会いであった。二人は奏任待遇の幹部である。「労務手帳」が受け入れ企業に配布されていて、その需要を満たすための、占領地を含む人間配給だった。クラス担任のわたしはただ茫然、傍観する光景だった。

染織、建築、機械、採鉱、応用科学の五専科に教師、実習教師その他を加えて一〇〇余の職員を擁する福岡県立のマンモス工業学校で、わたしは普通科の平教師であったから、右のいきさつでは埒外におかれたのである。

Mくんは炭鉱夫の父親が落盤事故で失職の不運に会って、退学を申し出た事情を救われて給費生の道がひらけた。O科長の同窓が中外鉱業の重役で道がひらけたものだ。伊豆の土肥に金山をもつ会社だった。Mは夏休みにその土肥で実習の経験もしていた。だが、いざとなると中外の持ち山は北海道渡島の八雲にもあって、配置さ

れたのだ。マンガンを主として産出する鉱山なのだった。

Mは汽車通学生で香椎線の粕屋郡宇美町から通っていた。北海道への赴任は翌昭和十八年の早春で、はるばる南国の九州からの旅路をたどっている。

関門はすでに海底トンネルが開通していたが、青函は連絡船をたよっていた時代である。魚雷攻撃を恐れた彼は船底の客室を避ける配慮をして函館に渡っている。函館本線の八雲に着いたのはすでに日没の時間であった。

会社指定の宿に入り、翌朝は炬燵を備えた橇馬車に乗って白皚々の雪道を任地へ向かった。母子馬二頭が曳くのが珍しく、熊除けの鈴をならしながら雪道を行く珍らしさ、炬燵に手をかざしながら行く風情が彼をいくらか慰めてくれた。

現場は日照に乏しい濃霧の谷間にあった。先任の技師は秋田高専の出身で。Mを迎えて二人が現場責任を負う人員配置であった。

「なんときみは南国九州というから、おれは心配だった、とにかく慣れるまでは大変だな、ん、鉱夫は一〇〇人ほどだ、半島の徴用が大部分だから、大変なんだ、いまのところ無事だが、いつなにが起こらんとも限らん」

北海の鉱山でのタコ部屋の無残は話に聞いていたが、現実は陰湿で、徴用鉱夫の視線は卑屈にゆがんでいた。白眼でたえずこちらを窺う視線に、Mは次第に耐え切れないものを感じていった。加えて北海の自然の厳しさ、とくに鉱山のある谷間は日照に乏しいことが憂鬱を次第に濃くしていった。

「先輩には申し訳ないけれども、ぼくはとてもモチそうもない」

「わかる、ここまでの辛抱は大変だったな、北国生まれの俺だってこの鉱山の立地条件は最悪だと思う」

高専出学歴のこの人は辛抱すれば、現地重役の可能性だってあるはずだ。会社の持鉱山としては僻地に過ぎ、幹部重役は年に一回程度、至近の鉛川温泉での遊山気晴らしをあてに、お義理の監査訪問をするのがオチ、企業の採算上も重きをおかない鉱山なのだ。

「わたしもこの先永くは勤めないよ、きみもわたしに気兼ねはいらんよ、鉱山を下りるなら、早い決心をするんだな」

『労務手帳』に縛られていますから、それがまずいんですよ」

「そんなことを言っていたら、駄目だ、この戦争がいつまで続く、そんな手帳なんぞ庶務課の金庫の中、追手を出してまできみを捕らえるほどの法的制裁があるとは思えんな、下りるなら早いほうがいい」

Mの鉱山脱出はそれから間もなく決行された。

「気をつけて行けよ、会社の方はわたしがなんとか、弁明しておく、たまには手紙で近況を知らせろよ」

「先輩、お元気で」

「うむ、先行きのことはお互にわからんが、戦争のケリがつく前にこの鉱山は廃鉱がオチかも知れん、採算の現状も芳しいものでないし、マンガンでは戦力のプラスにはならんからな」

「常務取締の藤田さん庶務課長の佐古田さん、このお二人には給費生としてお世話になっています、お会いになることもないと思いますが、ご恩を無にする不都合を一番気にしていたとお伝え下さい」

「気にすんなよ、何もかも滅茶、めっちゃの時代に追いつめられた今日に、恩義もへチマモなかとよ」

この人はMと過ごした何か月かに覚えた九州弁で後輩を諭した。

Mくはん東上の途中を東京のわたしの家に立ち寄り、泊まっている。わたしはすでに出向して千葉県立の学校へ転じた身であった。

「おや、なにかの休暇かね」

Mは口を緘して真相を語らずに九州へ去って行った。数日後手紙に託し苦悶の真相がはじめて伝えられた。

戦争終結までそれから約二年ほど、「労務手帳」の呪縛を断ち切って生きたMくんの苦難は大変なものであったはずだ。手帳なしの就労はもぐり、幸い地元は筑豊炭鉱地帯だったから、いずれかの炭鉱に一介の鉱夫として身を沈めたはずに思われる。

終戦で世情は一変した。

「卒業証書は日本名でなく韓国名で願います」

と早速、厳しく申し出た生徒があった。

学校は荒れた。転じて都立の学校にいたが、無頼の生徒の懲罰問題で職員会議が深更に及ぶ日もあった。義務教育校に労組の花盛りが到来、日教組の幹部の肩風を切る姿が見られた。商業から工業へ転換させられた学校は再転換で教師、生徒を工業校へ移籍させる暮改まで行われた。二・一ジェネストはマ元帥命令で中止、ワンマン首相の「不逞の輩」発言、レッドパージと続く騒然の中、占領政策の重点として六・三制教育も強行された。

そんな慌ただしさの某日、Mくんから電話があった。炭労の用件で高田馬場にきている。会いたいという申し入れで、わたしは会いに行った。彼は労組三菱勝田の闘将に格づけされていた。その後も三菱系の電設畑に勤め、談合の名手として重用され、ず太く生きて定年を迎えたようだ。戦後の今日となると、「労務手帳」の発行権者はいずれの役所だったか、もはや一切不明である。

（H一七・九・二〇）

短歌二十首

砂時計

曽根竣作

桜桃の盗っ人ありと末の世を告げてふかしも夏の真闇は

稜線をくきやかに立て八月の夜更けしづもる皂莢(さいかち)の森

かにかくに季(とき)うつりゆき回顧するすべもあらなくえごの花咲く

かはせみの鋭き落下のたまゆらに濁り水より魚掠(いをさら)はるる

ほうほうと青葉木菟鳴く森近く転生のみち遠く絶たれつ

雨はれしタベ昂然と熱(いき)り立つあら草ありて夏野さわがし

望蜀のひとみも失せて豊饒の世の一隅を飲食(おんじき)に就く

羽化終へしばかりの濡れ羽つや光り黒き揚羽が海峡めざす

何となく薄暮のいたりとめどなく砂時計の砂落つるアンニュイ

丈高きすすきいちめん夕映えてわが焚く炎身(ほむら)の裡めぐる

グランドに陽は片翳り敗者らを送るジャージー泥(ひぢ)にいぶせし

上海に父と遊びし日の杳(とほ)く魯迅の阿Qわれに親しも

正装の亡父(ちち)のチョッキの金くさり思へば明治の象徴たりき

雁来紅(かまつか)の燃えて秋天鵙のこゑ世はこともなく明日へ移らふ

ひるがへる飛燕の胴の蒼白くおばしまにはや夏の客人

波止見ゆる小窓の席の独り居に足裏より来る異邦のこころ

海風に紅ざわざわと夾竹桃かの日喪失の念ひをかへす

敗走のわれのそびらに蹤きくるる貌なきかほは兵士らのもの

昨夜の雨たっぷりふふみ鮮烈につばきの首径に散りぼふ

したたかなる批判に洒脱を鏤めし前衛の旗手塚本邦雄逝く

短歌

行雲流水 (十一)

石黒修身

二千五年六月バルト海のクルーズ船にて北欧の主要都市に寄る。紀行詠十五首他五首

北辺の白夜の国に憧れて今バルト航く船に乗りたり

バルト海航く巨船のデッキにてアンソロジーを読みてまどろむ

白夜とて朝陽夕陽は朧なりバルトの夜は薄明のうち

北欧の白夜は哀し漆黒の闇を恋する夜もあるらん

水際にひつそりと座す人魚姫鰭持つ足の裸身哀しも

デンマーク・コペンハーゲンのランゲリニエ海岸に、アンデルセンの童話に由来する人魚姫の像がある。

サンクトの沖には艦隊夢の跡バルチックの基地は既に廃りて

今年は日本海海戦の百周年に当る。ロシアのサンクトペテルブルグ港の沖合には往時のバルチック艦隊の基地の跡が残っていた。

大国に抗し独立果せしは民族自決の歌声という

エストニアのタリンにて。バルト三国のひとつエストニア人は歌を好む民族という。一九八八年九月、国中から人口の三分の一に当る三十万人が、タリンの「歌の原」に集い、独立への思いを歌った。「歌いながらの革命」と言われ、バルト三国の独立運動の契機になった。

シベリウス英雄と称うこの国に「フインランデイア」遍く響く

フインランド。シベリウスの交響詩「フインランド頌歌」の意で、祖国への愛国心を表現した作品。第二の国歌とも呼ばれ、人々に愛されている。

ムーミンを生みし国なり森深く湖清くして民温和なり

フインランド。女性作家トーヴェ・ヤンソンの作品群「ムーミン」は河馬ではなく、「トロール」という動物で、森の奥にひっそりと暮らす北欧の自然に相応しい生き物という。妖怪とか妖精とかの解釈は当らないそうである。

「連帯」の砦となりしグダンスク「ワレサ」の叫び聞ゆるごとし

ポーランド北部の港都、ワレサの主導した連帯の発祥の地である。

オスローの美しき街巡りたり「ペール・ギユント」と名づくバスにて

「ペールギユント」の戯曲はイブセン、管弦楽曲はグリーク、共にノールウエ人。バスの車体に書かれたＰｅｅｒ・Ｇｙｈｔの文字は旅人には印象的で、旅情をそそる。

突然の「君が代」の音に驚きぬ自衛艦停るオスロー港で

自衛艦「夕霧」他一隻が偶々停泊しており、朝「君が代」のメロデイを流していた。

大国の争いの間に揺ぎきし北欧の国今平らげり

カジノでの稼ぎをバーで振舞いし老紳士居て旅は道連れ

船中に欧米の人賑わいて吾れ孤独なるマイノリテイに

他五首

体内にペースメーカー入れし男（ひと）「携帯」を避け席移るとう

故郷の旧友（とも）に逢うとて妻発ちし肖の厨に手を拱ねおり

はらからの回忌巡り来長月は台風去りて彼岸花咲く

七十路過ぎ飲食（おんじき）とみに細りしが一瓢の飲を愛しみおり

西行もまた兼好も範ならず残生いまだ捨て難くして

連詩「記念写真」より（十四行詩三題）

松下壽男

アルバム

せわしなく頁をめくる
私はそれをおしとどめる
「たいした写真じゃないから」と
きけばいっそう見たくなる

たくさん並んだ顔の中から
私の知らないその頃の
おまえを一人探し出す
それがなにより楽しみなのだ

合唱団に見つけたおまえ
まんまろに口をあけ
見つめる瞳のかなたには

「きれいじゃないか」
私がその手をおしとどめても
せわしなく頁をめくる今宵のおまえ

記念写真

父となる人の酒をのみ
兄となる人の酒をのみ
古い大きな家の座敷の
明るい障子に囲まれた

まだるこい光の中を
そしらぬ顔のおまえの方へと
私一人がけんめいに
ふらつく足で泳いでいたのだ

盛りを過ぎた菊の咲く庭に出て
赤い顔と白い顔の
にこやかに笑う人たちのために

まぬけそうに肩を抱き
一枚の写真に写る
しきたりどおり今日の記念に

海

幸せをはじめて口にする人
その言葉のために
はじめて幸せに
ひたるかのよう

幼げに朗らかに
いつになくはっきりと
海が見たいといいだして
私がとまどうその人

この闇の向こうに
おまえの望んだ
海が広がる

手にささやかな星を光らせて
おまえはもう
深く息づく海

ハート・トウ・ハート

第三話　チェイシン・ザ・トレーン

松下壽男

♥

曇りガラスの覆いを被った電球の光に、ぼんやりと照らされた薄汚れた壁のほかには、なにもない部屋であった。全身の気怠さの中から、不安の予感がわき上がってくる時刻であった。それはむしろ内蔵の感覚であった。吐き気にも似たその気味の悪さは、やがて体腔をくるりと反転されたクラゲのように外界のあらゆる刺激に晒されて、ついには底なしの不安に駆り立てられるのだ。すると頭は、体ごと不安を切り捨てるかのように、幻覚を見始める。夜が明けて深い眠りから目覚めた後に、ぼんやりとした眼差しが痣や患者服の鉤裂きを認めることを通して、壁を叩いたり、床をのたうったりした自分のことに初めて気付くのであった。

エルヴィンは、鉄パイプでできた粗末なベッドの上で、震え始めた黒い大きな体をすっぽりと毛布で覆って、不安に耐えようとしていた。律義にも、白人の若い担当医に言われた通り、この麻薬病棟の患者になるまでの経緯を、くり返しくり返し思い出すのであった。

（おれは、ジャズバンドJ・Jファイブの一員だった。アメリカ音楽使節の一行として、海をいくつも越えたヨーロッパの人々から熱狂的な喝采を浴び、生まれて初めて認められた思いがした。その時、おれは真の自由を感じていた……）

その自由の真っ只中にいた彼に、麻薬密売人のムーチが擦り寄ってきたのだった。旅先のヨーロッパで、彼は、アメリカの暗黒街道の案内人にも認められてしまったのだ。しかし彼は自由であった。まだ決して麻薬には手を出そうとはしなかった。

思えば、エルヴィンは、異国の地で一度に二つの文化に遭遇したのだ。一つは、普遍的にしてしかも個性を尊重する懐の深いヨーロッパの文化であり、もう一つは、ムーチを通して知った、アメリカという国家に影のように付纏う闇の文化である。

異文化の衝撃は、皮肉にも、自国アメリカに戻ってきてから押し寄せてきた。

ヨーロッパで、自らの生き方を自由だと悟った彼は、帰国したアメリカで自由ではなかった。しかも以前より不自由に感じるのであった。それは彼のソウル（黒人魂）が異文化体験を通して変貌し始めていたからなのかもしれない。ならば変貌しつつある彼のソウルが、彼自身をも含めた身の回りのアメリカ文化と衝突を始めた時の漠然とした感じが、その不自由感だったという訳なのであろう。今ならばそう説明できることが、その時は、わけもわからず、ただ歯車が噛み合わなくなったエンジンのように、ドラムの響きまでもが空回りするのであった。

そんな夜に限って、ムーチが彼の背中に声を掛けてくるのだった。

「エルヴィン、いつまでたっても時差ボケかね」

「ムーチ、あんたに気どられるようじゃあ、おれは、もうお仕舞さ」

「お前さんの、ソウルとやらは一体どうなっちまったんだい」

「そいつぁ、こっちが聞きたいくらいさ。おれは、いつだってソウルに任せて最高にやってきたんだ。おまけにヨーロッパでも拍手喝采だった。そうだろうムーチ。なのにどうして、アメリカに帰ってきた途端、妙にしっくり行かないんだ。昔の仲間とジャムセッションをしていても、近ごろは、バンドの連中とやっていても……。一体ソウルブラザーはどこへいっちまったんだい」

「エルヴィン、お前さんが人の所為にするのももっともさ。お前の太鼓は前にも増してソウルフルで、スリリングさ。他の連中が一瞬凍りつくくらいにね。だからお前が遠慮するから悪いのさ」

「それができれば苦労はないさ、ムーチ。今はもう正直わからなくなっているんだ、おれのソウルというものが。いつだっておれ流だったソウルが、今はバンド全体の乗りを求めているんだよ、前にも増して」

「全く世話の焼ける小僧だぜ。だからお前のソウルを全開にして、ソウルとはこういうものだと連中にわからせてやればいいのさ」

「だけど、おれのソウルは、今だってもう全開さ」

ムーチはその言葉を聞き逃さなかった。金縁の眼鏡の奥が怪しく光った。

「エルヴィン。ソウルって、お前さんのどこにあるんだい」

エルヴィンは、とっさに掌で胸を叩いた。

「違うね。ここさ」

ムーチは、爪先が茶色に変色した人さし指で、几帳面

に櫛目の入った白髪頭を指さした。
「中枢神経ってやつは、努力しても半分も働いちゃいないのさ。そいつぁ、医者も証明している。早い話、お前のソウルの半分は、まだ居眠りをしているっていう訳さ。そんなソウルの寝室をこじ開ける方法があるんだぜ」
「本当かい、ムーチ」
ムーチの、皺だらけの顔が冷たくほくそ笑んだ。そして学者のような口調で話を続けた。かつてはドクター・ムーチと呼ばれていたという噂も、あながち嘘ではないかも知れない。
「中枢神経の、一つ一つの細胞のつながりを飛躍的に活発にする薬があるのさ。それまで眠っていた神経が一気に目を覚ます。浮かびそうで浮かばなかったアイデアや、動かせそうで動かなかった手足の動きが自分のものになるんだぜ。お前さんの頭からソウルが自由にほとばしり出てくるっていう訳さ。あのチャーリー・パーカーみたいにね」
「ムーチ、その手には乗らないよ。おれにヤクを売りつけようという魂胆だろう」
「エルヴィン、わしは、お前の相談に乗っているだけさ。おれは、お前にヤクを渡す。それを使うか使わないかはお前が決めることなのさ」
「そんなことを言ったって、パーカーは、廃人同様になって死んじまったじゃないか」
「確かにやつは死んださ。でもそれはヤクのせいじゃない。それに、やつの神がかったプレイも決してヤクのせいじゃないのさ。ヤクは、ただ、やつのソウルを解放しただけさ。そして身を持ち崩す道を選んだのもやつの自由さ。結局やつは、昔からいる破滅型の天才の一人だったという、それだけのことなのさ」
ムーチは、周囲を見回すと、小さな紙包みをエルヴィンの引き締まった尻のポケットにねじこんだ。その日のエルヴィンには、それを突き返す気力はなかった。こうして、文化の居心地の悪い裂け目に、闇の文化が忍び込んできたのであった。
麻薬の効果は劇的だった。彼の手足は、堰を切ったように、新しいリズムのアイデアを叩き出していた。しかもポリリズムを繰り出す両手両足の動きは、たとえ永遠に続けたとしても疲れが来るとは思われなかった。彼ののドラムは、バンドの仲間たちに、もう、一瞬たりともためらうゆとりを与えなかった。うねりは、背後から次々と津波のように押し寄せるのであった。他のメンバーは、乗るか、さもなければ溺れる他に道はなかった。
エルヴィンは愉快であった。夜通しジャムセッションを続けて朝を迎えても気分は爽快だった。ネオンサインが気怠く光る明け方のクラブの前では、気に入った娘をドアから押し込むようにしてタクシーに乗り込む彼の

姿が見られた。
ある日突然、ムーチが姿を見せなくなった。エルヴィンは苛立ち始めた。苛立ちが焦りとなって、彼の方からムーチを探し始めた。やがて、言い表しようのない不安感が襲ってきた。波のように襲ってくるその不安は、だんだん強く深くなっていった。彼はアパートの部屋の隅っこで毛布を被ってうずくまるほかはなかった。J・Jファイブの公演など、もうどうでもよくなっていた。仕事をすっぽかすまいとする義務感も責任感もすでに麻痺していたのであった。
彼が不安に耐えきれず腹の底から唸りを上げているその時に、何食わぬ顔でムーチが姿を現した。ムーチはまるで主人のように振る舞い、その上エルヴィンに法外な値で麻薬を売りつけてきた。
エルヴィンのソウルは、今まさに、もう一つのルーツに目覚めようとしていた。それは今まで潜在意識が必死になって目覚めることを拒んできたルーツであった。彼が無造作に畳んで投げつけた札の束と引き換えに、ちっぽけな白い紙の包みを手に入れた時には、彼のソウルとは、もはや奴隷根性に過ぎなかった。それがムーチの奴隷なのか、麻薬の奴隷なのか、金の奴隷なのか、白人の奴隷なのか、ソウルの奴隷なのか、ジャズの奴隷なのか自分でも、もうわけがわからなかった。一度奴隷根性に落ちぶれた者にとっては、もはや何の奴隷かは問題ではなかった。

♥♡

「まるで彼は、ジャズ・マシーンさ」
ジョン・コルトレーンは、弟子のようにして可愛がってきたピアニストのマッコイ・タイナーに熱っぽく語るのだった。
「音階楽器が、コードの決まりごとを崩して、自由なモードを手に入れる前から、エルヴィンのドラムスは、拍子の決まりごとを崩して、ずっと自由なポリリズムを叩いていたのさ。しかもこのごろのエルヴィンは、最初から最後までポリリズムさ。彼の手足の動きを見たかい。狂ったように叩き散らしているくせにタイム感覚には少しの狂いもない。マッコイ、お前も彼とやったことがあったろう」
「忘れはしないよ、ジョン。ワン・ツー・スリー・フォーと拍子を勘定している限り乗り切ることができない彼の太鼓が、これでもかと思いきって弾けてみると、こっちのリズムの中にビシッ、ビシッと決まってくるんだ。まるで、種類の違うモーターが一緒に回って作り上げる唸りのような感じがしたよ」
「そうさ、彼は、パーツ一つ一つの力をぎりぎりまで引き出して、最高の仕事を続けることのできるマシーン

さ。そのうえメンバーのどのパートにも絡み合って最後まで唸りを上げ続けるのさ。彼なら私のバンドの最高のエンジンになる。そう思うだろう、マッコイ」

コルトレーンは、同い年のトランペッターのマイルス・デイビスの元で、遅咲きの才能を開花させた。続いてピアニストのセロニアス・モンクの元で独自のスタイルを確立すると、再びマイルスの元でモード奏法を学んで我がものにしていた。最初の一音を聞いただけで彼だと分かる存在感のあるテナー・サックスのサウンドと、空間と時間の狭間に小刻みな音色を敷き詰めていくような圧倒的に冗舌な演奏。それは、シーツ・オブ・サウンドと形容され、すでに多くの亜流を生んでいたのであった。

しかし彼は、そこに留まってはいなかった。留まっていることができなかったのだ。命を絞り出すかのような音色で時間と空間を埋め尽くしてさえ、彼の心には満たされぬものがあった。彼の心が時間も空間も超越した生命を求めていたからかもしれない。インド古来の弦楽器、シタールの奏者ラヴィ・シャンカールの音楽と出会って、コルトレーンはそのことを強く意識するようになった。彼はラヴィに傾倒し、彼の口からは、ソウルに代わって、スピリチュアルという言葉が頻繁に発せられるようになっていた。しかしその言葉は周囲の者を困惑させた。言葉はまだ音楽になってはいなかったのである。

そのことを一番感じていたのは彼自身であろう。だからこそ彼は、日夜、自分の音楽を追究し続けていた。彼にとって演奏とは自分自身の表現を探し求める旅であった。それは聴衆にスリリングな瞬間を味わわせもするが、退屈な歩みに付き合わせることにもなりかねなかった。それゆえ彼には、失速することなく乗り続けることのできるうねりの連続が必要だったのである。

思えば、コルトレーンにとってエルヴィン・ジョーンズの存在はあこがれであった。

マイルスに見込まれたとはいえ、コルトレーンは、お世辞にも上手いとは言えないテナー吹きだった。

「マイルスは、自分のテクニックを際立たせるためにあいつを入れたんだろうよ」

コルトレーンの耳に入ってくる皮肉ですら、自分を雇い続けてくれるマイルスに絶対の尊敬と感謝の念を抱いていた彼には、よい励ましであった。

(いつまでも引き立て役でいては、ボスのマイルスに申し訳がない)

そんな思いで精進を積んでいた頃、やはり同年代のエルヴィン・ジョーンズは、すでにニューポート・ジャズ・フェスティバルで独自のスタイルを発揮して脚光を浴びていたのであった。

エルヴィンがニューヨークに出てきてJ・Jファイブの一員になった頃には、コルトレーンもやっと自分のス

タイルを築き始めていた。そして縦横無尽に突っ走るエルヴィンのドラミングが、明るい色に塗られた小型のスポーツカーのように感じられるようになってきた。

(今のおれなら、乗りこなせるさ)

ヨーロッパから帰った後のエルヴィンに対する賛否両論の噂は、当然コルトレーンの耳にも入ってきた。ある者は無節操で支離滅裂だと言い、ある者は一段とスケールが大きくなり凄みを増したと言う。

(これは、自分の耳で確かめてみなければならない)

コルトレーンは、クラブ、ビレッジ・バンガードの扉を開いた。圧倒的なシンバルの音が耳を突いた。強烈なドラムの響きが足元を揺さぶった。しかもそのエネルギーは弱まることなく室内に充満していくのであった。

彼は最早スポーツカーではなかった。果てしないハイウェイを疾走するトレーラーであった。怒濤のようなドラムソロが終わると、今度はその余韻の全てを呑み込んで、鷹揚で艶やかなテナー・サックスが鳴り響いた。

コルトレーンは目の前に立っているソニー・ロリンズを巨人のように感じた。そしてロリンズをそこまで奮い立たせているものがエルヴィンのドラミングにあることは明らかであった。

しかしコルトレーンはエルヴィンの唸り声の凄みや、時折見せる空ろなまなこに、チャーリー・パーカーやバド・パウエルと同じ印を見て取った。その凄絶な印象は天才の証しであり、悪魔に魂を売った奴隷の証しのようにコルトレーンには思えたのだった。

コルトレーンは、麻薬に蝕まれた自らの過去を、もはや、気軽に振り返ることのできる境涯になっていた。それは、麻薬依存症から立ち直り、その後も一切薬物を寄せ付けない生活を続けることで、独自の音楽スタイルを確立してきたという自信があるからであった。それは愛する妻と畏怖するボスのお陰でもあった。

(今の私は、やっとロリンズを大きいとは感じなくなった。すでに私は新しい道を歩み始めている。しかし歩み続けていくためには、エルヴィンの力が必要だ。そして今の私なら、彼の道を照らすこともできるだろう、かつてマイルスが私にしてくれたように……)

コルトレーンが瞑想にふけっている間、マッコイはピアノをつま弾いていた。それは、コルトレーンが愛妻に捧げたバラードだった。旋律は、開け放たれた窓のレースを微かに揺する初秋の涼風に乗って、ニューヨーク郊外のコロニアル風の一軒家に、安らぎを醸し出していた。

「あなたたち、やっとおしまいになったわね」

スタジオの厚い扉を開けて、漆黒の肌に水色のワンピースを着た、小柄な女性が姿を現した。コルトレーンの妻のナイーマだった。

「テラスで、冷えたビールと、豆とモツのソウルフー

ドがお待ちかねよ。それにジョン、あなたには真っ白なミルクとサラダ。」

微笑んだ彼女は夫と軽く抱擁を交わすと、静かにドアを閉めて立ち去って行った。

♥♡♥

「エルヴィン、とても正気の沙汰とは思えんぞ。酒もたばこもやらない、ソウルフードも食わない、乳と菜っ葉で生きているようなインドかぶれが、本物のソウルなど持っているもんか！」

「そんなこと、白人のあんたに言われたかないぜ、ムーチ。それに、白人のボビー・ジャスパーだってちゃんとソウルを持っているけど、彼の生まれはヨーロッパだぜ」

「そのヨーロッパから帰ってきてぼやぼやしていたお前が、ソウルを取り戻せたのは誰のおかげだと思っているんだ」

「そうじゃない、おれはヨーロッパでソウルの大きさを掴みかけて帰ってきたんだ。それにヨーロッパでおれに擦り寄ってきたのはあんたの方じゃないか。おれはあんたの世話になんかなっちゃいない。あんたがおれの稼ぎをせびっているんじゃないか。この寄生虫野郎！」

「言ってくれるじゃないか、エルヴィン。お前がどうしてもコルトレーンと組むというのなら、こっちにも考えがある。あとで泣いて土下座をすることになっても知らないぜ。この恩知らずめ！」

ムーチは、杖を振り立てるようにして足早に立ち去っていった。エルヴィンの臓腑が不安を訴えてきた。地の底に引きずり込まれるような恐怖に耐えながら、彼の頭はコルトレーンの自宅で予定されているオーディションまでの日数と、残りの麻薬の袋の数を数えるのだった。

案の定、ムーチは姿を見せなかった。エルヴィンは麻薬を小出しにして使った。慢性的な禁断症状の中で、彼にはコルトレーンの一言が救いであった。

「私には、君が、エルヴィン・ジョーンズが必要なのさ」

一九六〇年秋、住宅街の、色付き始めた街路樹の下を歩くエルヴィンの足取りは、まだ昼下がりだというのに朦朧としていた。

コルトレーンのスタジオのドラムスはフルセットではなかったが、シンバルの輝きを見ただけで、エルヴィンは吐き気が込み上げてくるのであった。

アップライト・ピアノの前にはマッコイ・タイナーが陣取っていた。ピアノとドラムの間にスティーブ・デイビスが立っていて、ベースの弦を張ったり緩めたりしていた。コルトレーンは、ピアノの肩に腕を懸けて、楽譜

を覗き込み、マッコイと打ち合わせをしていた。何かの儀式の始まりのような厳かな空気が漂っていた。

エルヴィンは、ジーンズの尻に差してきた二本のスティックを引き抜くとパイプ椅子に座り、叩き始めた。

ゆったりとした足取りで、コルトレーンが三人の前に立った。首から鎖で繋がれたサックスが、使い込まれたくすんだ光を放った。

『インプレッションズ』をやってみよう。君は『マイルストーン』を、ダブルタイムで叩き続けてくれればいいんだよ、エルヴィン。ワントゥスリフォ！」

エルヴィンがハイハットのペダルを踏み出すと同時に全てが全速力で動きだした。トリオの繰り出すリズムを全身に受けて、コルトレーンは、広く厚い背中を前後にあおりながら、前へ前へとメロディーラインを押し出していった。そこに聴衆はいなかったが、彼に力を抜く様子は見られなかった。

人がコルトレーンを「トレーン」と約めて呼ぶ時、それは機関車を意味していた。後ろから押しているつもりだったエルヴィンは、前へ進むトレーンにに引っ張られそうな思いがした。エルヴィンは一層複雑なリズムを打ち続けた。

トレーンも鋭く反応した。トーンを変えた小刻みな音を繰り出しては、形作ったフレーズを幾度となく変奏していった。それは納得いくまで何度でも粘土を崩しては捏ね直す、彫刻家の仕事のようでもあった。

マッコイ・タイナーはむしろゆったりと和音を響かせていた。ピアノを銅鑼のように轟かすことのできる男はほかにはいない。しかも微妙な音色の変化を信号にして、機関車に進路を示しているかのようであった。

そしてベースは、線路の継ぎ目の音のように、激しく正確にビートを刻み続けるのであった。

（おれは列車のエンジンなんだ。コルトレーンがバルブを開けばおれはパワー全開さ。コルトレーンがブレーキを引いてもおれはパワーを落としはしない。おれがコルトレーンを煽るのさ。トレーンの行き先はマッコイの任せればいいことだ）

エルヴィンは自ずから役割を悟っていた。

前のめりなって、体を揺すりながら、まるで命をしぼり出すかのように、渾身の力を込めてサックスを吹き鳴らすコルトレーンの後ろ姿は、唯一認められた黒人の文化を、ジャズの歴史を一身に背負って、一歩一歩道を拓きながら歩んでいる者のようにも思えた。その道は、果てしない神の道へとつながっているのかもしれないと思わせるものが確かにあった。

エルヴィンは、心に失いかけていたソウルが漲ってくるのを感じた。それと同時に彼の体に残っていた麻薬が、全身の毛穴から汗と一緒に吹き出ていくような気がした。

（おれは自由になるんだ、そうさ、もう目の前に自由が広がっているじゃないか）

マッコイのピアノは演奏をラストコーラスに導こうとしていた。エルヴィンは最後の力を振り絞った。汗の玉が、雨のようにシンバルに弾けた。音の洪水のただ中で、コルトレーンは、身をのけ反らすようにしてマウスピースを口から放した。全ての音が止まった後に高らかな笑いが響いた。エルヴィンも大声で笑った。

「おお、ロード。主の御子はソウルに満ち、聖霊はソウルの申し子でした。私はその全てに感謝します。エーメン」

コルトレーンは、何やら祈りの言葉を捧げたあと、エルヴィンに語りかけた。

「私の望んでいるサウンドが見えてきたよ。やっぱり君でなくてはならなかったんだ」

二人は手を握り、肩を叩きあった。

「ところでエルヴィン、ひとつだけ質問するけどいいかい」

いつになく肩で息をしていたエルヴィンは、頷くことしかできなかった。

「君のドラムは、どこで叩いているんだい」

エルヴィンはけげんそうに手足を大げさに動かした。

「いや私は、ソウルの在り処を聞いているんだよ」

エルヴィンは、固く握ったこぶしで、ティーシャツに汗の跡がくっきりと付いたぶ厚い胸を力強く叩いた。

「心だね。じゃあ、大丈夫。麻薬をやめることができるよな」

エルヴィンにはコルトレーンの顔が急にまぶしく感じられた。それは自分自身の涙の所為でもあった。彼になら何でも話せそうに思った。

「コルトレーン、頼む、お願いだ、おれを病院に連れていってくれないか。そろそろムーチが姿を現す頃なんだ。今度ムーチに会ったら、おれは、もうお仕舞だ」

「わかった。エルヴィン、今日は家に泊まるといい。明日ナイーマに手続きをさせよう。だから、もう安心だよ」

エルヴィンは声を上げて泣き出した。決して麻薬の禁断症状のせいではなかった。やっと自由を手に入れることができる。心から嬉しく、ありがたかったのである。

コルトレーンは、スタジオの扉を開いてナイーマを呼んだ。杏子色のセーターに白いエプロンをかけた彼女は、エルヴィンににっこりと笑いかけた。彼はもう泣けなかった。

「エルヴィン、今、何かしてあげられることはない？」

「ありがとう、ナイーマ。おれはもう横になりたいんだ」

翌朝、楽旅に立つコルトレーンを見送った後、病院に電話をして、強引に入院の手筈を調えたナイーマは、ドラッグストアに走ってエルヴィンの身の回りの品をそろえた。

ベッドから起こされ、押し込むように車に乗せられたエルヴィンではあったが、不安にさいなまれた苛々した彼の心はナイーマを急かし続けた。決心が鈍らないうちにできるだけムーチから遠く離れておきたいただそれだけのことだったのかもしれない。後ろを走る車にムーチの姿を見つけたと言ってはシートにうずくまる彼に、

「もう心配いらないわ、今曲がって行ったわよ」

と彼女は優しく声を掛けるのだった。

車は、やっと止まった。周囲の田園風景にそぐわない高い塀に囲まれた、刑務所のような建物であった。鉄格子の扉の縁には「州立精神病院」「麻薬患者病棟」という文字が刻まれていた。

扉の隙間から白衣を着た若い白人の医者と逞しい二人の看護士が姿を現した。ナイーマが医者と話す間に、看護士は断りもなくエルヴィンの腕を取ったが、もはやなすがままの彼であった。ナイーマは、身の回り品の袋を彼に手渡すと、こう囁いた。

「がんばるのよ、エルヴィン」

「ありがとう、ナイーマ。本当に何といったらわからないが、あんたはおれの自由の女神さ」

エルヴィン・ジョーンズは、病棟の一室で高波のように襲ってくる禁断症状のさなかにも、ナイーマのことを思えば、不安が和らぐように感じるのだった。

今夜も、彼は、目を固く閉じて懸命にナイーマの顔を思い浮かべようとした。しかし、もはや自分の意志で記憶を呼び起こすことができる状態ではなかった。

コンクリートの壁を隔てて隣の患者の呻き声が、牛蛙の鳴き声のように不気味に聞こえてきた。その声がエルヴィンの臓腑を抉り始めた。彼の咽からも呻きが漏れた。脅えたように頭を抱えて震え出した。

毛布を被り直して、耳を押さえてもその声は消えなかった。いや、微かに聞こえてくるその音は、テナーサックスの音色にちがいなかった。だんだんと大きく切れ切れに、胸を締めつけるように響いてくるのであった。彼は力を振り絞って両耳を塞いだが、音は鳴り止まなかった。顔を上げ恐る恐る目を開いてみた。部屋の中には男が一人が佇んでいた。

「ジョン、ジョン・コルトレーン！」

声をかけても、男は振り向きもしないで、前屈みの体を揺すりながらサックスの切ない音をしぼり出していた。やがて彼は、扉に向かって歩き始めた。

「待ってくれ、おれを置いて行かないでくれ」

エルヴィンは跳び起き、男を追って扉に体を強く打ち付けた。男は扉をすり抜けて歩き続けていったのだった。扉の向こうにまだ確かにその姿が見えるのだ。

「待ってくれ、おれはお前と行きたいんだ。いつまで

もお前を追いかけて行きたいんだ！」

彼は、扉を叩き続けた。頭を何度も打ち付けた。沸き起こる不安に任せて唸り、叫び吼えるのだった。

扉の向こうには、なおも歩き続ける男の姿が見えていた。遠く遠く遥か彼方まで歩いて行く、前屈みの男の姿だった。エルヴィンの心に懐かしさが込み上げてきた。

「オー、ロード！」

エルヴィンは呟いた。不安がすうっと消えていった。

（あいつは決して見捨てない。見捨てない限り決して見失うことはない。あいつの道を、おれも歩いて行けばいいのさ）

安心した彼は、疲労に襲われ、扉の下に崩れ、深い眠りに落ちた。そして入院して初めて幸せな夢を見た。

♥♡♥♡

ジョン・コルトレーン・カルテットは、意外にもポピュラーなヒットを飛ばした。エルヴィンの入団直後の出来事であった。

それは、ブロードウェイ・ミュージカルの「ザ・サウンド・オブ・ミュージック」から取り上げた「マイ・フェイバリット・シングス」の演奏であった。

もっとも、コルトレーンにしてみれば、その楽曲のリズムとメロディーに、試み始めていたソプラノサックスのエキゾチックな奏法に向く雰囲気と、アドリブの豊かな可能性を感じ取っただけのことであろう。

その成功を更なる金もうけに結びつけようとしたのは、むしろレコード会社の白人たちであった。

コルトレーンがアトランティック・レーベルとの専属契約を更改する時期を見計らって、ずっと大手のインパルス・レーベルが食指を伸ばしてきた。インパルスは、ボブ・シールというしたたかなプロデューサーをコルトレーンに張り付けて、あの手この手で口説き落としてきた。

「なあ、トレーン。我々は、君のわがままを何でも聞こうじゃないか、そのかわり、時々、我々の企画でレコードを作らせてくれないか」

ボブの目には、コルトレーンの唯一無二の音楽世界が、無尽蔵の土壌のように見えたのだろう。その土壌はどんな種をも豊かに育て花ひらかせる力を備えているのだ。しかしその土とは、コルトレーンのサックスであり、エルヴィンのドラムスであり、マッコイのピアノであり、遅れてレギュラーとなったジミー・ギャリソンのベースであった。そのいずれもが、彼らが身を削るような精進を重ねて切り開いた境地だったのである。

歌もの、バラードもの、大家との共演……、ボブが打ち出す、いかにも大衆受けを狙った企画に対して、コルトレーンはいつでも大まじめに、全身全霊を傾けて演奏した。そのソウルフルな演奏に寄り添いながら、エルヴィンはいつも心から、

（たいしたもんだ）

と、感心するのだった。

一方、ライブを柱にしたカルテット独自の演奏は、燃えるような生命感と、聞く者の耳を虜にするような圧倒的な存在感で、ジャズの概念を塗り替えようとしていた。「その情念のほとばしりは、オーネット・コールマンらのフリージャズをも無機質な音のたわむれに過ぎないとすら感じさせるほどの説得力があった・・・」というのは評論家の言葉であって、エルヴィンらは、ただただコルトレーンと一緒に、前へ前へと歩いてきたに過ぎなかった。

理屈抜きだった。だからこそジョン・コルトレーン・カルテットの存在は、まだ根強く残っている人種差別に抗議の主張をし始めた若いジャズメンにとって、何よりの励みであったにちがいない。カルテットは、自らを「ニューシング」と呼ぶ前衛的な一団のカリスマになっていた。

ジャーナリズムはジョン・コルトレーン・カルテットを「ゴールデン・カルテット」と形容し始めたが、まさしく商業的価値と芸術的価値との両面で、その名に偽りのないバンドであった。そのことこそジャズの歴史における奇跡なのさとエルヴィンは頷くのだった。

（そりゃあ、たいしたもんさ。でもカルテットが最高に輝いていたのは、君がいた、クインテットの時期だったとおれは思うよ、エリック）

雪景色の中を車を走らせながら、エルヴィン・ジョーンズは、さらなる回想に耽るのだった。季節によって彩りを変える街路樹も、色とりどりの住宅の屋根も、今は白一色に包まれていた。除雪された車線が一点に消えてゆく、白い果てしない空間から、記憶のかけらがとりとめなく浮かんでは、とめどなく流れていくのであった。とはいえ、このごろの彼がよく昔を思い出すのは、目の前に広がる白銀のスクリーンのせいばかりではなかった。

エリック・ドルフィーは、物腰が柔らかく、控え目で、飄々としたところがある男だった。彫りの深い顔立ちの奥で、伏し目がちな瞳がいつも優しく笑いかけていた。あごの下に茶色いひげを蓄え、いつでも少し前屈みになって歩く姿は、山羊のようであった。

「わざわざ動物に譬えなくたって、もっとふさわしい似姿に出会ったことがあるんだぜ」

と、エルヴィンはエリックに語ったことがあった。

「メトロポリタン美術館の、オリエントギャラリーに行ってご覧よ。そこには……」

中国の聖人達の姿を描いたドローイングがあって、その姿が実にドルフィーにそっくりなのであった。驚いた

ことに彼らは霞を食べて生きていたのだという。休憩時間にパイプをくゆらせているエリック・ドルフィーの姿そのものではないか。

しかもエリックは額に丸いこぶを付けていたが、それこそモーゼの角のように異能の証しに違いないと思わせるのであった。

エリックは、リード楽器なら何でもこなしたし、フルートもすでに独自のスタイルを身に付けていた。クラシックのオーケストラに交じって、初見で演奏することだってできただろう。実際、彼はスタジオミュージシャンとして様々な分野の録音に駆り出されることで生計を立てていたのだ。

しかし彼は、その場では決してソロを取らせてもらえなかった。ひとたび彼がソロを取ったら、そこに全くの異質の世界が存在してしまうことをプロデューサーたちは知っていたのである。同様に彼をレギュラー・メンバーに雇おうという勇気のあるバンドリーダーもいなかったのである。彼が思いっ切りソロを吹けるのは、ニューシングの若者たちとのセッションだけであった。

(でも君は決してフリーを志しているのではなかったよな、エリック)

当然のことながらエリックは、金に縁がなかった。それでも彼は、身銭を切って、気心の知れた仲間とともに、リーダーアルバムをこつこつと世に出していた。どれもタイトルには「かなた」とか「そと」とかいう、彼の心境を感じさせる言葉がつかわれていた。そして彼は、アルバムを出す度に、やせ細っていくのであった。

彼の才能を高く買う男もいた。それはチャーリー・ミンガスであった。名実ともにベースの大御所であった彼は、社会派としても知られていた。公民権運動の盛り上がりの中で、ミンガスはエリックの音色に人種差別への怒りのほとばしりを聞いたのである。メンバーに招き入れられたエリックは、数々の名演を残したが、静かにミンガスの元を立ち去った。

そんな彼が、一度、レギュラーバンドを作ったことがあった。十才年下で無二の親友ブッカー・リトルと組んで、クラブ、ファイブスポットで行った演奏は、伝統に根差した新しさと、何よりその炎のようなサウンドで、いまだに語り草になっていた。しかしそのバンドも続かなかった。二十四歳のブッカー・リトルが、突然の尿毒症でこの世を去ったのであった。

コルトレーンは、エリック・ドルフィーの才能に一目も二目も置いていた。できることなら彼とも演奏したいものだとメンバーに語っていた。しかしその願いをよそに、飄々として我が道を歩むドルフィーなのであった。そこでコルトレーンはアルバムの編曲を彼に頼んだ。出来上がったユニークなスコアを、コルトレーンは大いに喜んだのだった。

だからこそ、彼のレギュラーバンドを心から祝福していたコルトレーンは、無二の親友とともに自分のバンドを失ったエリックの憔悴しきった姿を、見るに忍びなかったのだ。

「なあ、みんな。今のエリックには、何よりジャズとお金が必要なはずだ、そうだろう」

カルテットの他のメンバーに異存はなかった。

早速、コルトレーンは電話を掛けた。

「エリック、これは前から考えていたことなんだが、私と一緒にやらないか」

「ありがとう、君に任せるよ」

ジョン・コルトレーン・カルテットは、新たにクインテットとして出発することになった。

エリック・ドルフィーが加わったことにより、バンドのサウンドは劇的に変化した。彼が持ち込んだ、バスクラリネット、アルトサックス、フルートの新しい楽器は、広い音域と多様な音色によって、サウンドを豊かに彩った。一曲一曲の持つ躍動が、感傷が、異国情緒が、それぞれの個性が、丁度モノクロからカラーへと切り替わったかのように、際立って感じられるのであった。しかしエリック・ドルフィーが加わったことによる変化は、そんなサウンドの表面的な変化に留まらなかったのだ。

コルトレーンの演奏は、音で時間を埋め尽くそうとしていた。時間をねじ伏せて、支配して、永遠を手に入れようとしているかのようであった。しかし、それは、背後から彼の演奏に寄り添い続けるエルヴィンの目には、彼の足掻きが永遠に続くかのような光景でもあった。

それに対してエリックの演奏は、多様な高さの音を空間に散り嵌めようとしていた。音を時間から解放するかのようであった。平坦な時の流れから、一音一音を自由な高みへと飛び立たせ、歌わせるような彼の演奏は、聴く者の耳に、鳥の囀りや、馬の嘶きや、笑いや、怒りや、様々な生き生きとした想像を駆り立て、次の瞬間それを打ち崩していくのだった。彼の演奏の一瞬のイマジネーションは、しかし、永遠を垣間見させるのに十分な力を持っていたのであった。

コルトレーンとドルフィーの、本質的に相容れることのないアドリブソロの応報こそ、この上なくスリリングで奥深いものであった。そして互いの魅力を際立たせ、補いあって一つの演奏を形作っていたのであった。この二人の出会いを天地の合命と言わずに何と言おう。まさに奇跡と言うほかはあるまいとエルヴィンは思った。

クインテットは、クラブ、ビレッジ・ヴァンガードのライブでその存在を国内に示すと、ヨーロッパ・ツアーに旅立った。エルヴィンにとって二度目の、思い出多いヨーロッパであった。

身動きのできない機内で、エルヴィンは、隣に座ったエリックにこう尋ねたのだった。

「なあ、エリック、ヨーロッパ人にも、スピリチュアルな演奏は、わからないんだろうなあ」
「なあに、心配いらないよ、エルヴィン。わかるわからないの問題じゃあないからね」
エルヴィンは、エリックとのこんなやり取りに、なぜか懐かしさを感じるのであった。
「エリック、おれは、ソウルがあれば大丈夫だと信じているぜ。今でもね」
「そうさ、ソウルは大切さ。ソウルは、おれたちが親からもらった生身の体と結びついているからさ。それでもコルトレーンはソウルでは飽き足らないのさ。彼は、生身の体を超えた何かに辿り着くことをめざしているんだ。コルトレーンはそれをスピリチュアルと呼んでいるんだと思うよ。ひょっとすると彼はどこかで神様と出会ったことがあるのかもしれない」
「だけどエリック、ならばどうして静かに教会で祈らないんだい。どうしてあんなに荒々しく前へ前へと歩むんだい。壁にぶち当たっては、自由を手に入れようとするんだい」
「そうなのさ。だからこそ、ぼくはコルトレーンを心から尊敬しているんだ。彼にとっては、もう、生きることは演奏することなんだ。喜びも悲しみも、そして神様と話をすることも。神様に近づこうとしている彼は、音楽の精進を通して、何事にも束縛されない、動じない、自由な男になったんだ。そして自由に生きるためには自由な音楽が必要なのさ。ただそれだけのことなのさ」
「そうだよなエリック。おれにもコルトレーンのフリージャズならわかるんだ。そこにソウルがあるからさ。スピリチュアルとか、フリーとかいう言葉は、おれにはいらない。ただソウルさえあればいい。だけど若い連中のフリーにはソウルが感じられないんだ」
「そうだね。自由とは一人ひとりの生き方にかかわっているのさ。生き方によって大きな自由が必要な者もいるし、小さな自由で十分な者もいる。コルトレーンが大きな壁を破る姿に憧れて、破壊が自由だと思い込んでいる連中が出てきているね。でも彼らの演奏からは自分の生き方のメッセージが伝わってこない。メッセージのない音はただの雑音さ。そしてぼくの演奏も、まあ、そんなところさ」
エルヴィンは、日頃感じていたエリックの心の裂け目を覗いたような気がした。しかもその暗黒の深淵が彼の存在をこの上なく崇高なものに感じさせていたのであった。
「エリック、おれは君のことを心から凄いやつだと思っているんだぜ。でも君の音楽はおれの言葉では言い表せないんだ。この上なくソウルフルなフレーズの後、いななきのような雑音が吹き出してくる。なのにどうしてその雑音までが快く感じられてくるのか、おれにはよくわからないんだ。ひょっとすると、コルトレーンの口にするスピリチュアルという言葉は、君の音楽にこそふさわしいんじゃないかと思うことさえあるんだよ」
エリックは微笑んだ。エルヴィンはこんなに嬉しそうなエリックの表情を見たことはなかった。ジャケットの内ポケットからパイプを取り出すしぐさは照れ隠しのようでもあった。彼の楽器と同じ曲線を描いた愛用のパイプに刻みを詰め、火をつけると、火口が仄かに赤くなった。
「ごめんよ。ぼくは君らのような立派なミュージシャンじゃない。実は、ソウルのことも、スピリットのことも真剣に考えたことはないんだ。ただ音のことだけを考えているんだよ。音が空間に発せられると、空気中を伝わり、そして空気の中に消えていく。ある音は人の耳に届かないまま消えていく。届いても心には届かない雑音もある。でもどの音もぼくが空中に送り出す音なんだ。そう考えるとエルヴィン、音って何かとても愛おしいものじゃないか」
「それでわかったよ、エリック、君の音の一つ一つがソウルフルで自由なわけが。だから雑音は雑音として一つ一つに意味があるんだ。まるで君の音は主の口から発せられる聖霊のようじゃないか。エリック、やっぱり君の音楽はスピリチュアルさ」
エリックはズボンのポケットから小さなアーミーナイフをとり出すと、火口を突ついた。
「エルヴィン、君がそう思うのなら、それでも構わないよ」
それからまた大きく息を吸うと、ゆっくりと煙を吐き出した。
「ぼくは、君が後ろでドラムを叩いてくれていることが心から嬉しいよ」
エルヴィンは、フロントグラスの雪景色が急に灰色に変わっていくのを感じた。あの日から、彼は、エリックのこの言葉を思い出すたびに、咽んでしまうのだった。
(そうさ、エリック、君は死んだのさ)
ヨーロッパ楽旅から帰ったエリック・ドルフィーは、もう一度自分のバンドを持ちたいと語り始めていた。そしてコルトレーンの元から身を引いて、進んで若手のミュージシャンと交流をもち始めた。これはと思ったメンバーとセッションを試み、実験的なアルバムを制作した。しかし彼の前衛的な音楽が経済的に恵まれるはずはなかった。蓄えはじきに底を尽き、彼は再びミンガスのバンドに身を任せた。
本心では、コルトレーンと一緒にやりたかったのかもしれない。でもボブ・シールの企画で次々とヒットを飛ばしていたカルテットに、彼は遠慮をしたのではなかろうか。ヴィレッジ・バンガードのライブ録音から自分のソロだけがきれいにカットされて、カルテットとして売

り出されているのを知った時、エリックはどんな思いがしたことだろう。

あるいは、エリックがミンガスのバンドを選んだのは、彼らがヨーロッパ・ツアーを計画していたことを知ったからかもしれない。事実エリックは彼らと共にヨーロッパに渡り、独りきりで異国の地に留まったのであった。

エルヴィンには、エリックの心境がよくわかった。彼も帰国後のアメリカで、いっそヨーロッパに渡ってしまおうかと考えたことが幾度となくあったのだった。皮肉にも、もしムーチに出会っていなければ、彼は今アメリカにはいなかったかもしれないのだ。

単身ヨーロッパに残って演奏活動を続けたドルフィーの生活はどんなものだったのだろう。痩せ衰えていったのは決して糖尿病だけの所為ではなかっただろう。彼は、彼の地で、本当に霞を食べて生き永らえていたのかもしれない。そして医者にかかった時には、すでに手遅れだったのだ。

エリック・ドルフィーの突然の訃報を聞いたコルトレーンの憔悴ぶりは、とても見ていられなかった。彼は一層無口になり、瞑想の時を過ごすために部屋に閉じこもることが多くなった。しかも彼が瞑想のために選んだ部屋は、ナイーマのいる自宅ではなかった。そこは、アリス・マクラウドという十才も年下の女流ピアニストの部屋であった。

コルトレーンに心酔していたアリスは、彼に教えを請うてきた。彼は彼女の才能を見抜き、弟子として育て始めた。一方アリスが心酔していたのは、彼の音楽ばかりではなかった。彼の生き方が、彼の信仰が、彼の独特の神の解釈が、憧れであるばかりでなく、彼女の血肉となっていったのであった。コルトレーンにとってアリスは最大の理解者であるばかりか、信仰上の同志にもなっていった。そんな彼女が彼の伴侶になるのは、実はわけもないことなのであった。

エリックの死はコルトレーンに命の儚さを思い知らせた。彼の信仰は、音楽は、一層永遠の生命を求めだした。と同時に彼の肉体に宿る生命もまた、血脈の永続性を求めたのであった。少なくともエルヴィンにはそう解釈するほかはなかった。欲望に身を任せるコルトレーンの姿など想像することすらできなかったからであった。

アリスはジョンの初めての子供を妊った。

エルヴィンは、ナイーマが可哀想でならなかった。しかしナイーマはバンドリーダーの妻として何事もなく暮らしていくのだった。エルヴィンの心遣いを感じ取ったナイーマは、物静かに語り始めた。

「ジョンの子供が産まれることを私はとても楽しみにしているのよ。私は二度も流産をしてしまって、もう子供は産めない体だと悟ったの。私はジョンが求めている音楽を手に入れるのを何とかして支えてあげたいのよ。そのために彼がアリスを必要とするのなら、私は喜んで身を引くわ。私はジョンを愛しているのよ。」

エルヴィンは白銀のスクリーンに彼女の顔を思い浮かべた。

(ナイーマ、あんたは、いつだって自由の女神さ。でも本当にそれでいいのかい)

雪道をエルヴィンが向かう先は、イングルウッド・クリフスのルディ・ヴァンゲルダーのスタジオだった。今日はそこで、アルバム「ア・ラブ・シュプリーム（至上の愛）」の録音があるのだ。

すでに何度もリハーサルを重ねてきたが、至上の愛とは、ナイーマに捧げられたものでも、アリスに捧げられたものでもなかった。それは、ロード（主）に捧げられた絶対的な愛なのであった。スピリチュアルな愛なのであった。

しかし本当にそれでいいのだろうか。

(トレーン、これで本当にいいのかい)

エルヴィンのソウルが叫んでいた。

一九六四年一二月九日の早朝のことであった。

社　告（内規）

☆　同人参加へのお誘い

私達はひろく同志の参加を歓迎致します。

「まんじ」は作品発表のための共有の（ひろば）として季刊発行しております。

同人は同人費として月額二、〇〇〇円を拠出し、雑誌発行の経費の一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆　維持会員へのお誘い

本誌愛読者の内、一部有志の方々が、誌友として維持会員になっていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、数カ月分をまとめて前納して頂いております。

季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の紹介等を行ない、また出版記念会や「まんじ」記念号パーティーへのご案内などを差し上げ交流を行なっております。

＊同人費・維持会費の納入は郵便振替口座への振り込みを左記へお願い申し上げます。

郵便振替口座　〇〇二七〇―〇―六四五九二

加入者名　ま　ん　じ

リビング・ウイル

新井　宏

義母が静かに逝った。十ヶ月間の入院生活中、妻や彼女の妹たちが交代で二十四時間付き添った。脳梗塞によって首から下の感覚がなくなり、まぶたの開閉でかろうじて意思の疎通をしていたが、自己の意思を積極的に伝える状態とはほど遠かった。

本当にご苦労様でした、お義母さん！。そして三人姉妹さんたち。

自分の意思を伝えられない。それはおそらく私にとっては耐え難い苦痛だろう。歴史上の出来事に対してさえ、あれこれ何かと意見を述べたがる人物が、自分のことさえ意思表示できないのはアイロニーだ。そうだ。その時のことを想って書いておこう。

延命治療はしないで下さい。でも苦痛だけは取り除いて下さい。

これでおおまかには意思が伝わる。しかし狭義に言えば、延命治療とは心停止あるいは呼吸停止に陥り、生命維持装置をつけることを意味するらしい。それなら、チューブでの栄養、水分補給も望まないと明記した方が確実だ。まあ、これで家族や医師への意思表示としては万全だろう。

だが待てよ。これだけではまだ家族たちが迷う場合もありそうだ。完全な植物人間状態なら、ナンシー・クルーザン事件のように社会的にも認知されようが、少しでも意識があったらどう判断されるだろう。

意識はあるが自分で食事を採れない患者にスプーンで食べ物を口に運ぶことを想定してみる。それを延命行為というだろうか。どうもなじまない。もし食事介護を怠り死にでも至らせれば、例えそれが患者の意思によるものであっても犯罪行為と見なされるであろう。それとチューブで流動食を胃に流し込む行為とはどこが異なるのか。

だから完全な植物状態に至らぬ限り、チューブによる延命治療が行われることになりそうだ。しかしそれでは自分の意志と異なる。

（なお、植物状態については、日本脳神経外科学会の定義がある。これによると、眼を開けとか手を握れとかの問いかけに対して、かろうじて反応する場合でも、意思の疎通が不可能で三ヶ月以上その状態が続いている場合には、植物状態とみなしている）。

そう云えば尊厳死という言葉がある。現在の医学では不治の状態で、死期が迫っている時に延命治療を拒否する概念という。これが認められれば大分自分の意思に近い。しかしまだ不安だ。死期が迫っているとはどう云うことを言うのか。文脈から言えばガンのような進行性の病状が対象であり、「延命治療をすれば生き続けられる」場合は対象外のようだ。そうなると流動食を採り続けさせられることになる。

私はこの人生を「費用対効果比」の行動方針で生きてきたように思う。それは個人生活レベルで見れば「ケチ」だということに過ぎないのだが、社会的に見ると合理主義ということになる。

だから、ドイツで治療の機会は平均余命の長い順に与えると聞くと、無条件に賛同してしまう。年寄りに高価な治療を施しても、得られる余命は限られている。それよりも若者を優先する。それが費用対効果比の論理だ。生命が絶対価値であることを否定はしないが、賞味期間が異なるのだからそれが自然の感情というものだ。

これを突きつめると、日本の老人をひとり延命する費用で、最貧国の子供たちを何人、何十人、いや何百人救えるかという考えにつながる。

お金はいくら稼いでも良いし、それをいくら使っても良い。しかし、ひとの分まで食うな、ひとの分まで浪費するな、というのが持論であった。かくすれば、きっとお金が貯まるであろうが、ケチに徹して、それを他人のために使わなくとも一向に構わない。浪費されない限り、いずれ相続税などによって社会に還元されるのだから、社会としては全く問題ないからだ。医療だって本質は同じだ。

延命治療を費用対効果比で考えてみる。

全世界的な視野で医療費を議論すれば、ひとり当りに許される治療費には限界がある。その額は、おそらく日本人にとって全く不十分なレベルであろう。あるいは日本で一日の延命治療に必要とする十万円程度にも満た

ないかも知れない。

生命にも質がある。希望に満ちた健康な生命と植物状態の生命には明らかに差がある。その価値に差がある。それを「認めない」「認めたくない」のは観念論だ。だれでも「ぽっくり死にたい」「すっと逝きたい」のが本音で、費用対効果比を考える時には、本当はこの生命の質の差が一番問題なのだが、ややこしいのでとり合えず先に進もう。

通常の治療と延命治療とを比較すると、一方は一時費用に過ぎないが、他方の延命治療は、一日いくらの世界である。もし治療によって健康を回復して三十年の余命を得られるなら、たとえ一時経費が一千万かかったとしても、余命一日当りにすれば、それは千円以下に過ぎない。ところが延命治療では一日につき十万円位はかかるという。費用対効果比が百倍も異なっているのである。しかも、延命治療中の生命の質は劣悪である。だれが考えても延命治療は割の合わない計算なのだ。

いま健康保険や社会保険の将来は財政的に極めて厳しい。それは許される経費にいずれ限界があるということだ。何に対して優先的に使うか。ドイツの例を持ち出すまでもなく、そこには費用対効果比の現実的な圧力があるはずだ。

そう述べると、同じ生命に価値をつけるとは何事かという意見もあろう。強いてそれに反論しようというのではないが、私にとっては自分の生命に対してさえも、客観化した費用対効果比の考えを適用したいのである。劣悪な質の生命を維持するため、多額の費用を投入することなどまっぴらだ。

だから私は思う。他人に対してまでは要求しないが、自分に関しては、すくなくともその生命にふさわしいレベル以上の費用を掛けてもらいたくない。現行の制度では延命治療の大部分が健康保険から給付されることを知っている。だから個人的な負担のことを言っているのではない。

そもそも私のイメージでは、延命治療とは病気の治療ではない。意識のない患者でも歯や耳が痛むこともあるかも知れない。まして僅かでも意識が残っている患者なら、頭痛や喉が渇きなどの不快感があるはずだ。それを聴き取り、治療することもせず、ひたすら生命のみを維持するための医療行為を続ける。時には患者にとって拷問である。

この世に限りあるものは、効率的かつ平等に使わねばならない。それは、誰もが納得する理念ではあるが、その実現となると、富の偏在する現代社会では非常に難しいことだ。エネルギー問題がその代表例だ。

我が家では、多少でもその理念に近づきたいと、かなり徹底した省エネ生活をしている。子供を四人育てる際にも、暖房は電気コタツひとつだけ、もちろん冷房はなく、車も持たなかった。電灯はこまめに消すことを励行し、その上に犬も飼っていないとなると、子供たちにはよほど貧乏な家庭と映っていたらしい。

これらは他人の分までエネルギーを使うなという信念に基づいた行動と言うより、単なる節約習慣からスタートしたものだったかも知れない。しかしそれを積み重ねていると、いつのまにか立派な美学になる。「費用対効果比」意識などと名付けてみたくなる。

ヨーロッパを旅行し、石造でもない木造家屋が何百年も使われているのを見ると、とても感銘を受ける。これこそ費用対効果で見れば真の省エネだ。古いタンスを分解して三つのタンスを組立て、それを貴重品扱いする文化がそれを支えている。それに対して日本は……。

いやいや日本も捨てたものではない。法隆寺は世界最古の木造建築で、いまでも柱を一皮むけば、檜の香りがする。桐タンスや着物は、良いものを世代間にわたって使うのが日本の文化であった。第一、日本の江戸時代は、世界で初めて、人口稠密下にあっても、徹底した省エネやリサイクルによって平和共存を達成した代表的な成功例だったではないか。『清貧の思想』がふさわしい国ではないか。

歴史に遊んでいると、全ての事柄を長時間のスパンで見るようになる。

歴史上、もっとも豊かな時代は間違いなく現代だ。その現代にあっても最も豊かなのが日本だ。しかもその日本で最も豊かなのが我が世代だ。三段階論法など持ち出さなくとも、いま私たちが享受しているこの快適な生活は、かっての王侯貴族さえ、思いもよらなかったレベルである。世界を旅行し、世界の食べ物や音楽を楽しみ、しかも先端の医療サービスを受け、冷房のきいた部屋に住まっている。

だから、もし百年のスパンで世界を見るなら、我々の生活は無条件で、とてつもなく恵まれた範疇に入る。平等意識から言えば、これ以上社会から過剰なサービスを受けるのは慎まなければなるまい。社会が豊かになったのは、人類が化石エネルギー源を確保してからのことで、それが無限に続くとも思えない。「ひとの分まで浪費するな」という思想は、将来まちがいなく社会の主流になるはずだ。だから医療だって同様だろう。歴史のスパンで、人の分まで浪費してしまう過剰医療はいやだ。延命治療は明らかにその過剰治療だ。

通常、延命治療について意思を表示する方法としてリ

ビング・ウイルという制度があり、年間数千円の費用でサービスを受けることができるという。割に簡単な手続きのようだ。意思表示のサンプルも整っている。ただ印象的に言えば、それはあくまで個人の尊厳とか権利の問題として取り扱われている。そこには「費用対効果比」などという無機質な話はまったく見かけない。しかし「延命治療拒否」は権利であるばかりでなく、義務でもあるのではないか。ある時代、多くの国で「姥捨て山」伝説があったではないか。だから、私のリビング・ウィルはぜひその観点から書きたい。

そして良いことを思いついた。自分の意志を示すだけなら「まんじ」に書けばよいではないか。かしこまって書く契約書のようなリビング・ウィルよりも、気持ちが良く伝わる。

かくして「まんじ」が私のリビング・ウィルの掲示板となったのである。

幸いなことに「まんじ」は今年から国会図書館に保管されることになったと言う。法的なことは判らないが、これで自分の意思を複数の方々が知ってくれたことになる。リビング・ウィルの手続きより簡単で安上がりだ。そうなのである。私は生まれつきケチなのである。

花火の歴史を楽しむ

吉田忠雄

(一) はじめに

花火は煙火とも呼ばれ、日本では夏の夜を彩る風物詩である。球形の菊花型割物花火は日本で発達し、その芸術性は世界で高く評価されてきた。

現在の花火は、火薬の燃焼または爆発によってその効果を表す。ここでは、火薬を使って、音、光、色、形、動き、煙などを表す娯楽、観賞用のものを花火と考える。

花火は楽しむものである。歴史にはロマンがある。この二つを結びつけたものは、楽しむべきものであると思う。ここでは、いくつかの花火の歴史上の興味ある話題を取り上げたい。

(二) 黒色火薬の発明

花火用に最も永く使われてきた火薬は黒色火薬である。現在の黒色火薬は、硝石、硫黄および木炭からなる火薬である。八世紀後半に唐代の中国で道教の僧達によって発明されたとされている。

この時発明された黒色火薬は原始黒色火薬と呼ぶべきもので、現在一成分として使われている木炭の代わりに薬草を焦したものが使われていた。

当時の黒色火薬の用途は、現在の火薬の用途ではなく医薬品であった。黒色火薬は、たむし、水虫、ペストの治療薬のほかに殺虫剤としても用いられた。

黒色火薬の原料硝石は、炎症、リウマチ、てんかん、泌尿器系の病気に効き、硫黄は、皮膚病と婦人科の病気に効くとされている。木炭は、昔から病万般に効くとされてきた。

原始黒色火薬の組成について記述したいくつかの文書が残されている。書かれた年代の最もはっきりしているのが、唐の煉丹家清虚子の著わした「伏火礬法」(八〇八)である。

黒色火薬の発明については、最近まで諸説があった。

黒色火薬の発明者とされたことのある三人の学者がいる。ベルトルト・シュバルツ、ロジャー・ベーコンと孫思邈である。

シュバルツ（一三五四？～一三八九）はフランシスコ派の修道士としてフライブルクに住んでいたとされる。火薬修道士とも呼ばれた。ヨーロッパでは十九世紀後半までシュバルツが火砲ならびに黒色火薬の発明者とされた。

十五世紀に書かれたある「火工書」では、石砲および粒状黒色火薬の発明者はニガー・ベルトルヴス（シュバルツの別称）とされた。また、一四四四年にウィーンで発見された版では、ニガー・ベルトルヴスが黒色火薬および銃砲を一三八〇年に発明し、そのために一三八九年にカイザー・ベンツェスラスによって断罪されたと述べられている。この本のもとの原稿の著者はベルトルヴス自身であるとも示唆されている。

シュバルツについての古い伝記や多くの戯画が残されているが、彼の生年代や事跡については不明な点が多いようである。また、彼の生年代の前に火砲や黒色火薬が使われていたことから、シュバルツは黒色火薬の発明者から除外された。

ロジャー・ベーコン（一二一四～一二九四）はイギリスに生れ、オックスフォード大学に学び、一二三三年に司祭になった。彼はそれから、当時科学学習の中心であったパリで研究を行い、その大きな知識と創造力によって同世代人の間で「奇跡博士」の名を得た。

一二四二年ベーコンは黒色火薬に関する最も重要な論文を書いた。これは暗号によって書かれた。そのため十九世紀末まで、その内容を理解することはできなかった。

ベーコンもシュバルツと同様に獄につながれている。中世では火薬を扱う人は危険人物とみなされていた。

ロンドンのW. L. Hime砲兵中尉のちに大佐は、彼の著書「火薬と兵器、それらの起源と発展」（一九〇四）の中でロジャー・ベーコンの黒色火薬の暗号論文を解読している。この中で黒色火薬の組成が明快に記述されている。

この結果イギリス国内では、ロジャー・ベーコンが黒色火薬の発明者であるという声が高まった。

これら黒色火薬ヨーロッパ発明説に対して中国人から反論が出てきた。馮家昇は「火薬の発明と西伝」（一九五四）において、火薬は中国の発明であり、その後ヨーロッパに伝わったと主張した。

日本でも、有馬成甫「火砲の起源とその伝流」（一九六二）や南坊平造「火薬は誰が発明したか」（一九六七）が黒色火薬中国発明説を支持した。しかし、黒色火薬の真の発明者は特定されなかった。

かって中国で広く行われていた考え方は、原始黒色火薬は唐初の孫思邈の著書である「丹経」あるいは「孫真人丹経」に記されていたというものであった。

これに対して、一九八〇年前後に次ぎのような考証がなされた。「孫真人丹経」は、唐の粛宗乾元元年から三年までの間（七五八～七六〇）に世に出たものであり、孫思邈は唐の高宗永徽三年（六八二）に没している。

その書は多分後人の輯したもので、孫思邈に仮託したか、孫思邈の伝えるところを後人が改輯したものである。丁鼫「古代火薬技術簡史」（一九八六）は、この誤りは重大な発明を一人の著名な人物の発明にしてしまおうという心理に由来するかもしれないとしている。

丁鼫はそのような考証の上で、原始黒色火薬の発明は八世紀の後半に複数の煉丹家によってなされたものであろうとしている。

（三）火薬を使った花火の始まり

中国では、竹を火にくべて爆音を発することが古くから行われていた。妖気や祟りを追い払うことを目的に元日の朝に行われた。

岡田登「中国の爆竹について（その二）」（一九八七）によれば、火薬を使った爆竹（爆杖）が十二世紀の南宋の首都の臨安（浙江省杭州市）に現れている。

その他、花火（煙火）、仕掛花火、起輪花火（起輪）、走線花火（走線）、流星花火（流星）、水爆花火（水爆）などが行われた。

十三世紀になると地老鼠（ねずみ花火）や五色の煙花火などが現れた。

（四）ヨーロッパにおける花火の始まり

ヨーロッパではじめて花火が行われたのはイタリアのフィレンツェである。十三世紀の終わり頃といわれているが、定かではない。欧米の花火師は今でもイタリア系の人が多い。

十四世紀の末には、イタリアでロケット（ロケッタと呼ばれた）が軍用に使われた。一五〇〇年頃には、イタリアの花火師ルジエリが火薬ロケットを花火に応用し、ロケッタの名前が各地に伝わった。

イタリアで始まったヨーロッパの花火は、各地に広まり、十六世紀には各地で花火が打ち上げられるようになった。多くの画が残されている。

イタリアのフィレンツェを中心とする南欧派とドイツのニュールンベルクを中心とする北欧派ができた。南欧派の花火は、「マシン」と呼ばれる壮大な構造物を作り、これに花火を仕掛けて光で飾る方式を中心とし、大きな宗教行事や王室の祝い事に際して行われた。

北欧派の花火は、花火そのものを打ち揚げる新しい方式を採用にして、ポーランド、スウーデン、デンマークおよびドイツなどの諸国で発展した。

（五）イギリスと日本の花火の始まり

十六世紀末までのイギリスでは花火の打揚はあまり行われず、むしろ花火の後進国であった。この時期〝グリーンマン〟がしばしば文献に登場する。〝グリーンマン〟は火のついた棍棒を持って行列の先頭を行く。棍棒の中には噴き出し花火が仕込まれていて、それが棍棒の先から噴き出す。〝グリーンマン〟はこの火を行列の前に振りまいて、行列の露払いをする。

〝グリーンマン〟はときどき歴史に登場する伝説上の人物である。現在もグリーンマン伝説が復活して、最近二冊の研究書が出版された。

イギリスで花火大会が見られるようになったのは、一五七二年にエリザベスⅠ世女王が花火打揚を見て喜ばれてからといわれる。

一七四二年のロンドンのグリーンパークで行われた花火大会は、当時最大の花火大会であった。ヘンデルが「王宮の花火の音楽」を作った。この花火大会では、その演出にイタリアの花火師たちが腕を振るった。一方、イギリスの花火師もこれに参加した。

キング・ジョージⅡ世の臨席のもと、大観衆で膨れ上がったこの花火大会の裏側では、イタリアの花火師とイギリスの花火師の間で確執があり、喧嘩となり、爆発が起き、北館が焼け落ちた。それでも花火大会は続行され、その後しばらくは、このような盛大な花火大会は開かれなかった。

日本の花火もイギリスとほぼ同時期に盛んになった。日本の花火が始まるのは、一五四三年の鉄砲伝来と同時に黒色火薬が入ってきてからである。

一五八九年に伊達正宗が、一六一三年には徳川家康が外国人の揚げる花火を見ている。日本人が花火を作り、自らの手で花火を揚げるのはそれ以降である。

（六）日本の花火の発展

中国では爆竹が盛んであり、ヨーロッパでは筒型の打ち揚げ花火、ロケット花火と立て火が用いられ、日本では球形の花火と立て火が用いられてきた。

日本の球形花火の代表は、一九二八年に長野の青木儀作によって開発された八重心菊花型花火である。球形の同心円の花が幾重にも咲く華麗な花火で、世界中から高く評価された。

日本は一時世界一の鉄砲生産国であった。しかし徳川時代になると事実上銃砲の生産は禁止され、砲術家は職を失い、合図技術を研究する火術家となった。球形の花火はこの火術家によって開発された。

古い物・遠い夢

忠内正之

第十二章　茶会の顛末

（一）春の茶会

―師恩に感謝しつゝ―

平成十七年三月二十六日（土）、細やかな茶会を催すことゝなった。夫婦揃って未熟者である上に、碌な道具しか持ち合せていないのでおこがましいが、妻は既に長いだけが取柄の三十数年来、茶道の稽古を続けており、夫である私は茶道は殆んど無知ではあるものゝ、夢中で集めた道具類の数だけは不足が無くなった。

時には道具の出番を考えないと死蔵してしまう。妻もお弟子さん達の実力研修の場を設けなければ、とのニーズがあった。

また、日頃大変お世話になっている方々への感謝の心を〝かたち〟に表わさねばならないと思っていた処。そこで茶会のお誘いに乗ることゝした。

幸い、妻が日頃ご指導願っている先生が、高令のため引退されることゝなり、無理を言って譲っていただいた茶杓がお目見えする良いチャンスだと考えた。有難い師恩に報いるためにも明るく楽しい茶会を成功させなければならない。

この年の春の到来は遅かった。開花宣言が出たのは、茶会当日直前であった。

「春は来にけり」の色紙を本席に飾るので、テーマと言うべき春日の出現が願わしい。

お陰様で願が叶ったのか、当日は寒からず暑からず、花曇りの穏やかな茶会日和に恵まれた。

（二）美さゝ苑

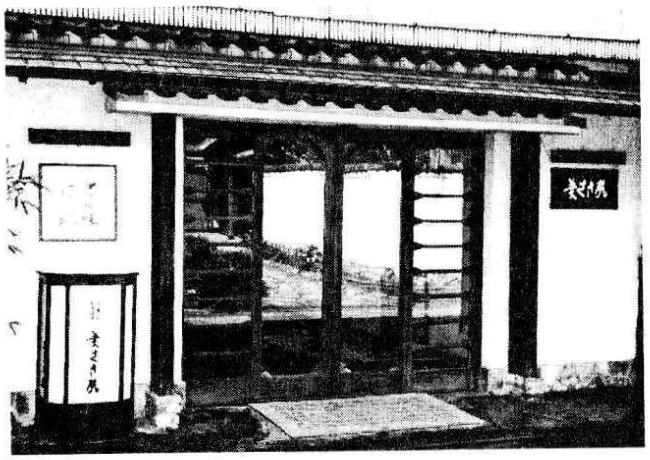
濃茶の釜を懸けた茶席は、八王子市にある「美さゝ苑」

「美さゝ苑」は高級料亭であると共に立派な茶室と名園を持つ、知る人ぞ知る存在である。利休・宗舟・不昧公にゆかりのある「独樂庵」が移築されている。

今は亡き名造園家、藤井喜三郎氏が、オーナーであった故樫崎延子刀自の庇護のもと、見事な名園を造り上げたものである。

「美さゝ苑」を受け継いだ現当主、樫崎櫻舟氏は立派な経営者であると共に茶道発展の良き理解者であり研究家でもある。「樂の会」を結成、代表者となって月例・特別茶会を開催し、また茶道関係その他の講演会、文化サロン等、巾広く開放している。

「文化事業には金が掛かる」と樫崎氏は呟いておられたが、貴重な施設なので、頑張っていただき、名苑の一層の発展をお願いしたものである。



美ささ苑　玄関

(三) 茶　会

さて、私共夫婦は「美さゝ苑」の月例茶会に名を連らねさせてもらう訳であり、同苑は、今回で二度目の出場となる。

予想されるお客様は、私方の友人、知人と「美さゝ苑」の「樂の会」会員の方々である。夫々秀れてレベルの高い方々なので、充分満足して楽しんで頂くためには周到な用意と準備が肝要と考え、道具組み、応待等、心して

の小間、白水亭である。

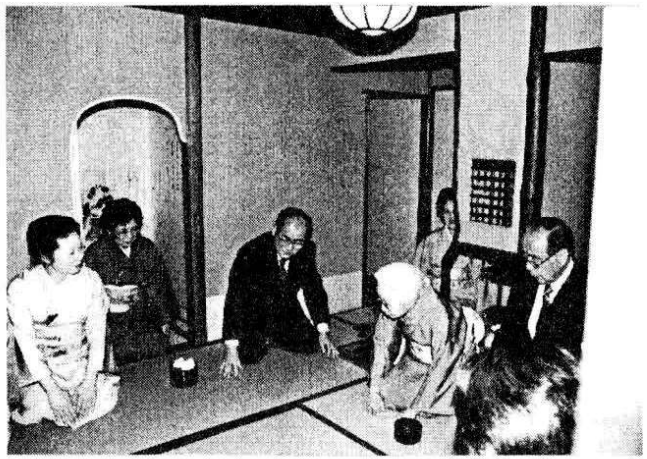
「この様な街中に、こんな素晴らしい場所があったの？」

「俗世間の喧騒が嘘のよう、まるで別世界ですね」

初めて「美さゝ苑」を訪れた人達は驚ろいてよくそんなことを言うそうである。

臨んだ。

好天の故もあってか、約百四十名余のお客様を迎えることが出来た。四畳半台目の部屋で十二回の席を持った。私は専ら挨拶と説明、妻が点前を分担したが、かなりの手応えがあった様に思う。



席中

大方のお客様は道具類をそつなく賞めていただき、またたない説明を熱心に聞いて下さり、明るい雰囲気を醸し出して下さった。その様な中で一人無遠慮な男性客があって緊張した。さして悪意は無い様だが、横柄な態度で中途半端な理屈を並べ立てるので辟易した。こちらもムキになって反論したので一時その場の和やかさに水を指す事となった。今は反省し良い勉強になったと思っている。

本来茶会では眞心をもって接待し、お客様に楽しんでいただくのが大切なのだから、大人の対応が必要だったのである。「一座建立」の精神を忘れてはならない。

私自身も日頃理屈っぽくて、往々にして、嫌味のある態度を取る人間ではなかったか？反面教師として自戒しなければと反省した。

骨董好きからガラクタ集めに熱中したが、後に妻の趣味に合せて茶道具指向に転換して三十余年経つ。多少目星しい品も集まって、この十二年間で不充分ながら漸やく四回目の茶会を開くまでに至った。コツコツと自力で集めた道具類は自慢出来るレベルの品に乏しいが、足で探したもの、親しい美術商の協力によって分割払いで手に入れたもの、或いは自己流乍ら工夫して見立てたもの、すべて汗の結晶の成果であり、夫々思い入れの深いものばかりである。

今茶会の目玉は「本阿弥光悦書の色紙」と「千道安作の茶杓」の二点である。光悦色紙は以前にお目見えしているので省略する。道安作の茶杓は今回妻が永年師事したお師匠さん秘蔵の品を譲り受けることが出来たもの。ひとつには師恩の有難さを感謝して茶会を開く動機ともなったのである。先生を正客としてお招き出来て幸せであった。高令乍ら先生の年季の入った正客ぶりは流石に堂の入ったもので時にユーモアも交えて一段と座を和やかに盛り立てゝ下さった。

（四）K先生との出合い

妻の茶道の師匠「K先生」は、この度九十才となられるのを期にお茶の指導から隠退された。斯道を深く究められ技量、識見共に秀れた先生である。

実は妻がこの立派な先生に師事することが出来たキッカケは私が作った。地方廻りの勤務を終えて東京へ帰って来たのが昭和四十六年であった。「東京へ帰ったらそこで本格的な茶道の勉強を」と望んでいた妻は良い先生を探していた。

私共は帰京時荻窪の社宅に落ち着きいずれは中野にある自宅を改修して、移る予定であったから荻窪周辺が狙いであった。私はたまたま荻窪北口にある美術店を覗いた。その店にはかなり上質の新旧茶道具が並んでいたので信用がおける店と察した。「荻窪地区で「裏千家」の茶道を教えていらっしゃる立派な先生を紹介して下さい」と頼み込んだ。

上品で年輩の女店主はしばらく考えて「K先生に弟子入りをお願いしたら」と紹介して下さり、後に妻とも面談の上、電話して下さった。妻はK先生に入門を許され、基本からもう一度勉強させていただくことゝなった。爾来三十余年を経て漸やく一人前となり、今では十数人を愛弟子に持つ迄に至った。

これはすべてK先生のお陰であり、紹介して下さった美術店に感謝しなければならない。後に聞く処では同様のルートで弟子入りした先輩方が何人もいらっしゃった由である。（今もその店は盛業中で、現在はお孫さんが店主となっている。）

K先生は茶道に造詣が深いばかりでなく、幅広い教養と人格を兼ね備えた方で、心から尊敬できる立派な人物であった。

私も時々お逢いして共通の関心事である茶道具類について薫陶を受けるなどして、夫婦共々ご指導を仰いだ。その様に親しい間柄となったので、今般先生が最も大切にされていた道具の一つである「道安作の茶杓」を無理を言って譲って戴くことゝなったのである。

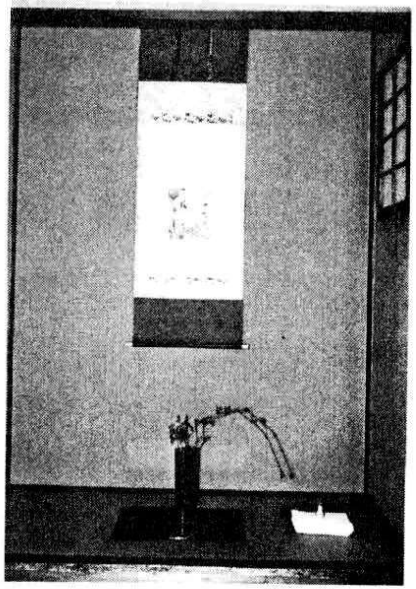
先生にお伺いすると、永年愛蔵するこの茶杓は大変親しくしていた先輩の茶人から譲り受けたもの。その先輩はかなりの好事家であり、この茶杓は戦後間もない頃、東京美術倶楽部の賣立で求められた由。古い包紙には某華族家の名が記されている。古くて由緒ある品であり、先輩から先生に伝わって大切にされたもの。先生曰く「お茶道具に人一倍関心がある、貴方がたに使っていただくのが一番ふさわしいから」と快く譲っていただいた。従って今後は大切に扱って先生の厚志を無にしない様に生かして使い、次代に伝えていきたいと考えている。

（五）茶会記

茶会當日の道具組みの目玉は、譲られた茶杓が一番のご馳走である。また季節に合せて「春」をテーマにまとめて見た。相変わらず勝手流の膳立てである。自身の説明では面はゆいので出席して下さった、作家「三戸岡道夫先生」（畏敬するかつての上司）が「楽の会」、機関紙に寄稿された茶会記を転載させていただく。

数寄者の茶　　三戸岡道夫

忠内正之氏の茶道具に対する造詣、蒐集は、四十年以上の歴史をもつ奥の深いものである。そのすばらしい蒐集を私たちは「忠内コレクション」と呼んでいる。そのコレクションの名品たちが春の到来を待ちかねたように、三月二十六日、美さゝ苑に姿を現わして、茶会が開かれた。



本席　床

まず寄付きに入ると、天祐和尚の薇束一折の礼状の消息が私たちを迎えてくれた。

その早春の雰囲気にうれしく、暖かな気分にひたっていると、はんなりとした菓子が薄作りの白磁の鉢に盛られて出された。器は初代蘇山造りとのことで精緻な作、さすが数寄者忠内さんの眼の高さに感服した。菓子は〝春のやま〟、萌黄色がさわやかなきみあん。石神井公園の著名な菓子舗「新盛堂」の特注品で、おいしくいただくと気持が休まる。

本席は本阿弥光悦筆の春の歌の掛軸である。そしてその下に飾られた古染付都鳥の香合と合して春の息吹を告げていた。

李朝の貴婦人を思わせる刷毛目水指の前に日野資枝歌銘の備前庖肩茶入が座っており、その上に道安作の茶杓がのっていた。その広い樋のあるふき漆の茶杓は静謐で美しい。

この茶杓の筒は寄付に飾ってあった。かつて私は東京国立博物館の展示で、予楽院茶杓箪司の中に、文叔宗守が書いた、紹鷗、利休、織部作茶杓の追筒を拝見したことがある。寄付に飾られた筒はそれらと同種のものであるのに驚き、席主の力量と見識の高さにあらためて感じ入った。聞くところによれば、御師匠様より譲り受けた由、誠に心地良い話である。

銘「一笑」の一入作黒茶碗に練られたお茶は、美しい朱釉とよくマッチしていた。

私たちは美さゝ苑の奥庭で早春のさわやかな至福の一時を満喫することが出来た。

（終り）

この様に三戸岡先生から過褒の言葉を頂戴し、数寄者などゝ煽てられると痛み入るが、永年に亘るお交際で当方の台所事情もよく解っている方なので努力の跡を認めて下さって嬉しい。

もとより私の茶道具集めは「ひとりよがり」で相変らず「見たて」ものが多く、伝来や家元の箱書きの無いものが主体で弱点は大いに自認する所である。

妻は正しい茶道を更に究めるべく勉強を続けており、お弟子さんにも筋目正しい指導を行なう様努力している。

私は自己勝手流ながらマイペースで、側面からお茶の世界に取組んでいる積りである。

今後共夫婦のコンビネイション良く斯道探究に心掛けたいと心を新たにしている。

濃茶席会記

平成十七年三月二十六日

於　白水亭

主　忠内正之

寄付

天祐紹杲筆　消息

床　本阿弥光悦筆　色紙　〝春は来にけり〟

三芳野のおほかわのへの古柳

眼には見えねど春は来にけり

花　あけび　春蘭

花入　箙　緋銅槌目　五郎三郎造

香合　古染付　都鳥

釜　京釜　慶長時代　長野裕極

水指　李朝刷毛目

茶入　備前庖肩　日野資枝　歌銘

仕覆　唐華文

茶杓　道安作　文叔宗守筒　如心斉箱

茶杓　黒　銘「一笑」　一入造　如心斉箱

替　御本御器

蓋置　立鼓　長野烈造

建水　渦雷文　弥五郎造

御茶　錦上の昔　柳桜園

菓子　春のやま　新盛堂

菓子器　鳥の子　蘇山造

以上

（終）

（司馬雑感　五）

「三浦半島記」を歩く

山田嘉久

最近、半年の間に二回も「三浦半島記」を歩いた。いずれも横須賀を起点に鎌倉を歩いたものだが、二回目は久里浜まで足を延ばした。

「三浦半島記」は司馬遼太郎が亡くなる前の年（平成七年）に書かれた「街道をゆく」の四十二作目にあたる。このシリーズの中では数少ない関東を舞台にした作品である。

（一）

○おりょうの墓

初夏のある日、横須賀のホテルにチェックインする前に家内と二人で「おりょうの墓」を探した。三月に横須賀に来たとき、同行のY氏から「市内の何処かに（おりょう）の墓があるはずですよ」と告げられていたからだ。

「おりょう」とはあの坂本竜馬（１８３５―６７）の妻。りょう、龍あるいは龍子ともいった。竜馬が慶応二年、伏見の寺田屋に泊まっていたとき、夜更けて奉行所の捕方に包囲された。そのことをたまたま風呂場で察知したおりょうは、素っ裸で竜馬に急をしらせたという有名な場面は「竜馬がゆく」に詳しい。

「三浦半島記」でも司馬が「おりょうの墓」を訪れたことになっているが、場所は「横須賀の古い市街地」としか記してない。

京急本線を「堀の内」で乗り換え、一つ目の駅「京急大津」で下車して駅員に聞くとすぐに教えてくれた。結構、訪ねてくる人がいるのだろう。駅から歩いて一〇分の信楽寺という浄土宗の寺の境内に彼女の墓があった。予想以上に大きな立派な墓だった。碑には「贈正四位阪本竜馬之妻龍子之墓」とある。

なぜ此処におりょうの墓があるのか。「三浦半島記」によると次のようだ。

竜馬暗殺後のおりょうの運命は変転した。明治に入って一時期、土佐の高知の竜馬の実家に身を寄せたが、竜馬の姉の乙女と折り合いが悪く（お互いの性格が似ていたせいだろう）、ほどなく高知を去る。

司馬は別の随筆で「竜子、家を守らず、邪行を敢てす。乙女、怒って竜子を離別す」という土佐の地元の古い記録を紹介している。（「幕末を生きた新しい女」）

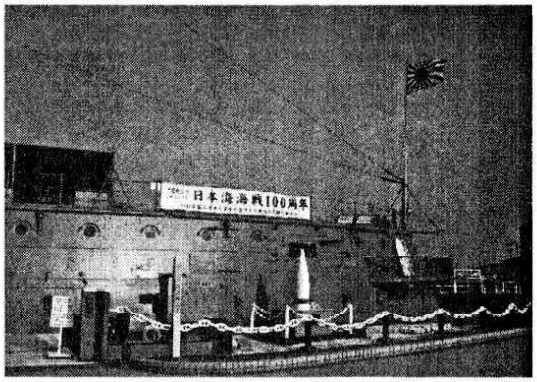
その後のことはよくわからないが東京にいたという。晩年は横須賀に住み再婚して「西方ツル」として過ごした。そして明治二九年に病没するのだが、そのささやかな葬儀には横須賀海軍鎮守府の士官たちが参列したことを司馬は書いている。そしてこの立派な墓もおそらく海軍の有志が献金して建てたらしいという。

多分、当時の海軍内では竜馬の海援隊こそが日本海軍の祖の一つだったと思っていたのではないかとも司馬は考えている。

その足で久里浜のペリー記念館にも行った。ペリー上陸（１８５３）の地には記念碑が立っており今は小公園となっている。

「幕末の騒乱はすべてこの久里浜からはじまったのである。」そしてこのペリーショックがそれまで流行の攘夷にかぶれていた竜馬の運命を変えたことを司馬は書いている。

○記念艦三笠



（記念艦三笠）

午後、横須賀市内のホテルにチェックイン後、タクシーに分乗して「記念艦三笠」の見学に出かける。つい四カ月前にも別のグループと共に行った。

丁度、今年は「日露戦争１００周年」ということで艦体に大きく横断幕が張られていた。

この旗艦は日露海戦に備えて明治三三年（一九〇〇）イギリスで建造された。

排水量一万五一四〇トンで戦艦としては当時、世界の

最新鋭だったが、今見るとまことに小さい。

東郷平八郎司令長官率いる連合艦隊の旗艦として日本海海戦で活躍した模様は「坂の上の雲」でありますところなく描かれているが、その後の三笠は不幸だったと司馬は記している。

日露戦争のあと佐世保に停泊中、火薬庫が爆発して沈没した。のち引き上げられたが、大正一二年、老朽化のため艦籍よりのぞかれ、大正一五年現在地に記念艦としてコンクリート固定化された。第二次大戦後は更に悲惨で、展示品のめぼしいものは進駐軍によって持ち去られ、一時期カフエーにもなっていたともいう。

今回も一番上の艦橋にものぼってみた。

「艦橋はずいぶん高所にある。眼下に前部主砲の砲塔があり、二本の主砲がつき出している。艦橋の床は木製で、スペースは狭く、艦橋のまわりは簡単な柵でかこまれ、ハンモックで防御されていた。それだけである。」（「坂の上の雲」）

高所恐怖症の司馬はその高さに驚いたようだが私はむしろ予想していたよりも低く感じた。船体が洋上ではなく地上に固定されているためだろう。

海戦中、東郷はここに立ちっぱなしで、「海戦がおわってかれが降りたあと、靴の裏のあとだけが白く乾いて残っていたという」逸話は有名である。

艦下の展示室にはこの艦橋に立ち続けた東郷らを描いた「三笠艦橋の図」が飾られていた。東郷の右後ろに参謀長の加藤友三郎、左後ろに先任参謀の秋山真之が立ち、艦橋高くZ旗が掲げられた有名な戦争画は戦前の教科書で馴染み深いが、この画家が東城鉦太郎であるとは始めて知った。

またこの海戦で秋山が考案し東郷が採用した「当時の世界の海軍戦術の常識を打ち破った異様な陣形」（丁字戦法）についても図解入りで説明されていた。

戦勝後、旗艦朝日（この時点で既に「三笠」は事故沈没している。）の艦上で艦隊幹部を集めて東郷が読んだ有名な「連合艦隊解散ノ辞」も掲げられていた。その最後の一句「古人曰く（勝って兜の緒を締めよ）と。」はこの時から三十数年後に起きた太平洋戦争初期において流行語にもなった。この文章は名文家秋山真之の手によるものであり、その後、各国語に翻訳されたが米国大統領セオドール、ルーズベルトはこれに感激し翻訳全文を自国の陸海軍に配布したことを「坂の上の雲」で司馬は書いている。

艦下の「長官室」「艦長室」に混じって「士官室」（中佐以下大尉までの士官が集う）も保存されている。

この部屋で司馬は「坂の上の雲」を執筆中、旧海軍軍人たちに集まってもらって日本海軍にまつわる話を聞いている。その時の模様を司馬は

「私はまだ四〇代だったが、自分の生涯でこういう品のいい集いの中に身を置いたのははじめてだし、再びはないだろうと幾度もおもった」と書いている。

そして三十年後に彼は再び訪れるのだが、その部屋はあの時よりも随分薄暗く、それは倉庫の一隅のように素っ気なくなっていた。

「おそらくあの日、この部屋にいたひとびとの気品が、私の記憶の中の部屋の照度（ルクス）を上げてしまっているのかもしれない」と。

ホテルに帰る途中、少し遠回りしてかっては米兵で賑わったドブ板通りを散策した。「三浦半島記」でもジーンズ生地のズボンをこの本の挿絵を担当していた大柄の安野光雄画伯が買ったことを記している。

この日の夕刻、ホテル内で開かれた交流会には約七十名ほど集まった。

まず司馬遼太郎記念館の上村館長の講演あり。「三浦半島記」にも出てくる青木彰氏の思い出から始まり来年、NHKで放映予定の「坂の上の雲」に関連して司馬作品の映像化がいかに難しいかなどを話された。次いで参加者各自の司馬作品を読んでの感想があい続き、私も今春訪れた「南蛮のみち」について少し発言した。

予定の時間を大分オーバーして九時前散会。余韻を残しながら床に就いた。

（二）

○朝比奈切通

翌日はバスで鎌倉めぐり。まず横須賀方面から鎌倉に入る金沢街道の朝比奈切通しで下車、このあたりを散策する。

鎌倉七切通しの一つ、鎌倉と六浦の港を結ぶ要路で三代執権北条泰時が開いたという。朝比奈の名は朝比奈義秀という豪傑が一夜にして作ったという伝説からきている。司馬も歩いたであろう雨上がりでぬかるんでいる小道を途中まで登る。

この古道を越せばすでに横浜市（金沢区）である。

○御霊神社（権五郎神社）

バスは鎌倉繁華街を横断して市内西端にある御霊神社に向かう。

「御霊神社」は頼朝よりも半世紀前に生きた武将鎌倉権五郎景政を祀った神社だが、権五郎については司馬はわざわざ一章を設けて書いている。

後三年の役に従事した権五郎だが、敵の矢が彼の右目を射抜いた。それを抜こうともせずに相手を射返して倒したのを見た従兄弟が刺さった矢を抜こうと権五郎の顔に土足を乗せ踏ん張ろうとすると権五郎は猛烈に怒る。

「矢に当たって死ぬのは武士の本懐だが、面に土足をかけられるのはあってよいことか」

権五郎こそが鎌倉武士の典型だと司馬は書いている。権五郎の直系の子孫が梶原景時だという。

権五郎神社の石鳥居の手前を江ノ電のレールが横切っているが、その近くの店で家内は名物「権五郎餅」を土産に買った。

此処で長谷寺組と極楽寺坂組の二組に分かれたが、長谷寺には何回も来ているので我々は極楽寺坂組に加わった。

○成就院のアジサイ

ガイドから鎌倉七口の一つ極楽寺坂は健脚向きと驚かされたが、実際歩ってみるとさしたることもなくほどなく成就院に着く。ここのアジサイは評判通り見事で今が真っ盛り。また此処から望む由比ガ浜も美しかった。

司馬は極楽寺駅に近い喫茶店で後深草院二条による「とはずがたり」について考えている。二条も登ったという「化粧坂」はこの極楽寺坂の間違いではないかとも書いている。

○円覚寺

昼食を北鎌倉「鉢の木」の精進料理で済ませた後、午後は円覚寺参拝。

臨済宗円覚寺派の総本山。八代執権北条時宗が文永弘安の役の戦死者の霊を弔うため宋の高僧無学祖元を招いて創建したという。

鎌倉五山の第二位だけに広大な境内に総門、山門、仏殿、方丈などが一直線に並んでいた。特に山門はどっしりとしていて重厚な構えだった。

○鶴岡八幡宮

バスは引き返して「鶴岡八幡宮」へ。このころ小雨が振り出してきた。

鎌倉のシンボルであるこの八幡宮には何回参拝したことだろう。

源頼朝が奥州を平定した際に京都の石清水八幡宮から勧請したのが起源とされている。現在の建物は江戸時代の再建。

この八幡宮の境内で頼朝は徘徊している歌人西行を見つけ、屋敷に招き入れ夜を徹して語り明かしたことを司馬は書いている。頼朝が西行に所望したのは意外なことに詩歌のことではなく牛馬の道を語ることだった。関東武者は戦いは強くても平時の礼式を知らない。そこで前身はれっきとした京侍である西行から「武の文化」を聞き出したことになる。このあたり武家社会を成立させた頼朝が次に欲したのは前時代の貴族文化の継承だったことがわかると司馬はいう。

八幡宮から由比ガ浜までの一、八キロメーターの通りが若宮大通り。

この大通りの二ノ鳥居（当初は一ノ鳥居）から三ノ鳥居まで通りの中央が一段高くなっている歩道が有名な「段葛」である。頼朝が妻政子の安産を祈願して作ったものだという。今では誰でも段葛の上を歩くことが出来るが、昔は神様のほか将軍か執権しかここを通ることは許されなかったそうな。その他の人は数段下の泥道を歩いた。

前回は若宮大通りと平行している「小町通り」を散策したので段葛を歩くのは今回が初めてだった。

この近く大倉山の中腹に頼朝墓がある。作ったのは江戸後期、薩摩藩主島津重豪。意外に思ったがそもそも、島津の家祖島津忠久は頼朝の落胤だという。（島津家の家系はもっとずっと古いが）

このことは司馬も書いているが、前回詣でたときに講師のK先生からも聞いた。

司馬は墓所への長い石段をのぼりながら頼朝の「忍人」ぶりを考えている。

「忍」ということばには儒教でも仏教でも「我慢」といういいことばとされているが一方「残忍」というわるい意味もあり、頼朝は善と悪の両義性を併せ持っていたというのである。それでもなおかつ歴史の開拓者としての頼朝の存在は大きいというのが司馬の頼朝に対する評価なのだろう。

頼朝の存念は「大きくは律令国家から武士団の利益をまもり、小さくは武士団相互の紛争を公平に裁く」ということであったと記している。

近くに頼朝の参謀だった大江広元の墓もあった。

一方、北条正子の墓はその子源実朝とともに寿福寺（鎌倉五山の第三位）にある。鎌倉駅西口近くなので前回は一番先に参拝した。

また八幡宮の近くに「鎌倉宮」もある。此処には「三浦半島記」が連載されていた平成七年秋に訪れた。後醍醐天皇の第一皇子大塔宮護良親王が足利尊氏と対立して幽閉され殺害された場所だが、我々は戦前の日本史で「だいとうのみや」と習ったが此処の宮司は「おうとうのみや」が絶対正しいと強調していた。

なお念のため広辞苑をひくと

「おうとうのみや」＝護良親王の宮号。だいとうのみや

「だいとうのみや」＝①天台座主となった皇族の称号

②護良親王の異称。おうとうのみや　とある。

大和の十津川街道に「大塔」という地名があり、これより先、親王が鎌倉幕府の追捕を避けて逃げ込んだ場所だが、司馬は「十津川街道」の中で親王の呼び方は「だいとう」でも「おうとう」でもどちらでもいいと書いている。

「鎌倉めぐり」の最後は稲村ヶ崎から三浦半島を望んだが、雨模様でどんより霞んでいた。

（三）

○青木　彰氏のこと

「三浦半島記」の後半には、司馬の産経新聞時代から

の親友だった青木彰氏が頻繁に登場する。特に「ミッドウエイ海戦」という章は全編、青木氏に関する記事となっている。

氏自身、海兵出身の海軍大尉だが父君はミッドウエイ海戦で沈んだ空母「赤城」の艦長だった。当然、この本でも日米の戦局を大きく分けたこの海戦に触れているが、日本の大敗の原因は日本側の暗号が八十%アメリカ側に解読されていたためだという。

その艦長の息子が戦後、「情報学」を専門にしたのもミッドウエイ海戦の悔恨と無縁ではなかろうとも司馬は書いている。

青木氏は産経退職後、筑波大や東京情報大で教鞭をとり「情報学」の第一人者となったが、司馬の死後、「司馬遼太郎記念館」の創立に奔走し、同館の専務理事として同館の催し会には常に氏の姿があった。

平成一五年暮れ惜しまれて病没したが、その数年前、私は氏のレクチャーを六回にわたって少人数のグループで聞く機会があった。テーマは「司馬遼太郎と3つの戦争」。

「花神」「峠」などの舞台になった戊辰戦争、「坂の上の雲」で壮大に描き上げられた日露戦争、そしてついに「書かれなかった」太平洋戦争。近代日本を決定づけた3つの戦争を司馬はどう捉えたかの講演だった。（氏の死後、朝日選書として出版されている。）

講演中、合間に話す司馬との私的交友談を聞くのも楽しみだった。

「街道をゆく」は各巻いずれも名著なので是非読んでほしいが「三浦半島記」だけは読まなくて結構といわれたのは意外でその真意が図りかねたが、ほどなくこれは氏の過度の含羞と気がついて氏の人柄が窺われた。

また「三浦半島記」のなかでも日本海軍創設以来のモットーは「スマートであれ」であったと書かれているが、氏によると「司馬さんは海軍をすこし買いかぶりすぎている」と語ったのも印象的だった。たしかに身内の陸軍については戦国時代の元亀天正時代から全く進歩していないと酷評する司馬にとっては海軍は「隣の芝生」と映ったのかもしれない。

「海軍」という「文明」への、元戦車兵の「羨望」だとも氏は書いている。

氏はレクチャー中、司馬を偲ぶあまり涙声となり絶句することもしばしばだった。両者の親密な関係が読み取れる風景だった。

大正から昭和初期にかけて海軍士官の多くは鎌倉や湘南地方に住んでいたそうで、「坂の上の雲」の秋山真之も若い晩年、逗子に住んでいたと「三浦半島記」に書かれているが、青木宅も鎌倉雪の下にあった。

この本には書かれていないが、司馬は日本語に関する

エッセイの中で青木氏が子供時代に両親のことを日常会話のなかでも「父上」「母上」と呼んでいたことに注目している。武家言葉が昭和の時代になってもエリート海軍の家庭では生き続いていたというのである。

このセミナーに通っている頃、世上は「新しい教科書問題」で喧しかった。

国内だけでなく中国、韓国が反発を示したため国際問題化していた。（四年後の現在、また蒸し返されているが）

このグループ（「自由主義史観グループ」といわれていたが）が司馬史観をどう見ているかを青木氏に質したことがあった。「あのグループでもいろいろな考え方がありますからね」と氏は明言を避けたが、同じメンバーでも司馬史観への温度差があったのは事実だった。

このグループの主要メンバーである藤岡元勝東大教授（当時）は司馬史観の特長を①リアリズム②イデオロギー不信③健康なナショナリズム④官僚主義批判と規定してある程度の理解を示した。（「自由主義史観とはなにか」）

しかしあらぬ方面から批判が出た。司馬の熱烈な信奉者である谷沢永一が「司馬史観を弄するなかれ」と噛み付いたのである。（雑誌「諸君」九八年三月号）要は「そもそも司馬史観などは存在しない。たとえ存在してもお前らごときが論ずる資格などない」というもので、司馬ファンからみてもかなり乱暴なヒステリックな主張だった。

はたして批判された藤岡は早速「司馬史観といってなにが悪い」と反論する。（同誌翌月号）「司馬作品は日本人全体の共有財産なのだ。ならば誰でも司馬史観を解釈する自由がある」とまでは格好よかったが「偏屈老人が溜め込んだ自分の排泄物を人の頭に注いたのである。」とまで書いては何をか云わん。お互いの泥試合になってしまって読んでいて一挙に興を逸した。

地下の司馬も苦笑いしたに相違ない。

一方、同じグループでも代表（当時）の西尾幹二は明確に司馬史観を批判する。

「司馬は日露戦争を祖国防衛戦争と捉え、戦後の小児病的反戦平和主義を破壊する上で強力な役割を果たした」と一応、評価する反面、「けれども明治に対する高い評価とあまりいちじるしいコントラストをなす昭和の否定はいったい何であろう」と疑問を呈している。（「国民の歴史」）

たしかに司馬は昭和初期から敗戦までを「別国の感あり、別の民族だった」とし、この期間を「鬼胎の時代」「長い歴史のなかで特に非連続の時代」と捉えたが、西尾は「歴史に非連続などありえない」と反論する。

しかし肝心の昭和の戦争を、西尾がどう捉えたのかハ

ツキリしない。

太平洋戦争（同教科書では大東亜戦争）は太平洋の覇権を巡る日米のエゴとエゴの衝突であり、日本にとっては仕方のない戦争だったと一種の運命論的な捉え方である。

西尾にすれば司馬が折角、日露戦争を防衛戦争と規定したのだから、もう一歩踏み込んで太平洋戦争も同じ視座で捉えてほしいとの心情が働いたのかもしれない。

事実、「新しい教科書」では太平洋戦争については「アジア諸国の開放」に重点を置きつつ「アジア諸国への侵略」にも若干触れた予想以上に比較的穏健な（？）内容となっていた。

同じ執筆者たちにより数年前から発行されていた「教科書が教えない歴史」シリーズを読んで、いささか辟易していた私にとって拍子抜けしたほどだった。

戦後の唯物史観などの「自虐史観」から脱却して、自由主義的観点から日本史を見直さなければならないとの彼らの主張が「教科書が教えない歴史」では自由主義史観どころか戦前の皇国史観に近いエスカレートした内容だったからである。（「満州事変の正当性を主張した石原莞爾中将」「自衛戦争と主張した東條首相」など）

そのため私だけでなく、こんな酷い教科書を作られては困るという世論が「新しい歴史教科書」の発行前から醸成されていったのは彼らにとっては不幸だった。

「新しい歴史教科書」を読んだ作家であり元文化庁長官だった三浦朱門はどの教科書に優る一等の教科書と絶賛したが（「歴史、公民教科書を検証する」）それにもかかわらず同教科書を採用した学校は全国で数校に過ぎなかったという現実はこのような事情があったのではないか。

（なお、今回も同氏は扶桑社の教科書を絶賛している。（「全歴史教科書を徹底検証する」）

今回の改訂版を読み比べてみても彼らの主義主張は前回と殆ど変わっていない。今年、同教科書を採用した学校は多少増えたものの採用率は〇・四％と報ぜられている。世論の健全性を示すバロメーターと捉えてよいのかどうか。教科書採用方法を含めて、考えさせられる問題である。

ベンチャーの先駆者、逝く

――故小倉昌男氏の足跡を辿る

伊治　哲

一、「お別れの会」に馳せ参じた人たち

真夏の太陽が照りつける八月八日、都内のホテルで行われた故小倉昌男氏の「お別れの会」に参列してきた。

小倉昌男氏――いうまでもなく「宅急便の創始者」で、ヤマト運輸株式会社の元社長・会長、ヤマト福祉財団前理事長である。去る六月三十日、病を得て八十歳の生涯を閉じられた。

わたしはもちろん一面識もあるわけではない。一九九〇年代の初め頃、ある講演会で氏の謦咳に接してから、「これぞ真のベンチャービジネスの起業家」とすっかり敬服してしまったのが始まりである。それ以来著書「小倉昌男・経営学」（一九九九年）、日本経済新聞の「私の履歴書――経営はロマンだ！」（二〇〇三年）など、氏の名前の出るものに大きな関心を寄せてきたにすぎない。

そんなわけで、「お別れの会」への案内を受けたわけでもないのに、厚かましくも新聞広告を片手に一小倉ファンとして参会させてもらったのだ。会場正面に清楚な白菊の花に囲まれた氏の遺影は、穏やかな笑みをたたえて静かになにごとかを語りかけているかのようであった。遺影の前に花を供え合掌をして心からの感謝と冥福の祈りを捧げた。

参会者はホテルの大広間を埋め尽くし、立錐の余地もないほどであった。そのなかにはもちろん政官財界の著名人の顔も多く見られたが、わたしのように別れを惜しむ名もなき市民の群れが大半を占めていたのではないかと思われる。このような折の参会者は、通常故人の年齢に近い人たちが多く見られるのだが、この日はなぜか比較的若い年齢層の人たちが多いようだ。なかでも中年と思われる男女のグループが、遺影を仰いで敬虔な祈り

を捧げ、氏の在りし日の写真やビデオに見入っていたのが印象的であった。いったい故人との間でどういう立場にあった人たちなのだろう。氏の歩んだ道を辿っていけば、なんとなく分ってくるように思えるのである。

二、ヤマトの生い立ちと事業転換

いま改めてヤマト運輸と小倉昌男氏の辿った道を振り返ってみる。

同社の創業は一九一四年、会社設立は二九年、東証一部に上場したのが四九年である。一般には若い会社のようにイメージされているが、実は意外に歴史の古い会社なのである。氏は四七年東大卒業後、翌年に父康臣氏の経営する大和運輸（八二年に現在のヤマト運輸に改称）に入社、役員経験を経て七一年に社長に就任した。大量輸送を主業務とする一般の運送業から宅急便業務に進出し、現在の巨大な宅配便市場の先駆けとなったのは一九七六年（昭和五一年）であった。したがって現在のヤマト運輸の実質創業者といってよいし、〝ベンチャービジネスの先駆者〟と呼ばれても決して過言ではない。

それまでは、主として大手百貨店の中元歳暮など贈答品の配達と、大手電気メーカーの部品製品などを工場間、あるいは工場と問屋間を搬送する一般の運送業に携わっていた。氏に言わせれば「定型・定時・定区間を反復する〝目に見える荷物〟の大量輸送」が主要業務であった。いきおい同業他社との激しい競争とコストダウン要求に曝され、日夜頭をかかえる日々であったと氏は回想している。

このままでは会社自体がジリ貧状態に追い込まれ、先行きの見通しが立たなくなると予見した氏は、考えに考えた末、大手業者との競争に巻き込まれない「全く異なった別の土俵」に転換する以外に道はないと考えた。それが「ドア・ツー・ドアの個人物流」、つまり「宅急便」の開発である。

三、まずはやってみよう

七六年当時、ようやく経済の成熟期にさしかかろうとする時代であったとはいえ、世の中の物の流れはメーカー―卸―小売りの企業間物流が大宗を占めており、個人から個人、世帯から世帯への個人間物流は微々たるもので、未だ市場としての萌芽さえみることはできなかった。それを一定規模をもった市場にもっていこうというのである。しかもこの市場は、定時でもない、定区間でもない、いつ、どこから、どこまで、どんな集配ニーズが発生するのか全く分らない、〝目に見えない〟少量個別輸送の市場である。それでも氏はやり方さえ工夫すれば必ずこれらのニーズを掘り起こすことができる、物流は将来企業から個人へ移行するという確信を変えなかった。まさに社運をかけた一大変革というほかない。

当然のことながらこの社長提案に経営陣は挙って反対、誰一人として「やってみよう」という声を上げる者はいなかったそうである。しかし、役職員への粘り強い社長の説得に、いち早く手を挙げたのは労働組合の幹部であったというのだ。彼らは仕事の現場でコスト競争の厳しさを肌身で感じていたということだろうか。

この経験から氏は「経営は常に現場・従業員の近くに」、そして「現場を理解する」ことをモットーとした。

四、需要とは、創り出すもの

しかし、いかに夢を語っても徒手空拳ではゼロの市場に立ち向かうことはできない。そこで考えたのは、個人が荷物を送るときの「消費者・生活者が望む本当の利便性はなにか」、そして「それにいかに応えるか」ということであった。具体的には当時個人物流を一手に取り扱っていた郵便小包・鉄道手荷物を反面教師として、その逆をいく〝逆転の発想〟であった。つまりこういうことだ。

荷物のタテ・ヨコ・タカサや、形状の制限をなくする。

包装、荷札（エフ）、ヒモ掛けは不要にする。

発送人の自宅へ直接集荷に訪問し、受取人の自宅へ直接配達する、いわゆるドア・ツー・ドアで集配する。

チッキといわれた鉄道手荷物の〝駅留め〟などは論外である。

書留、速達の区別はしない。

原則翌日配達とし、配達日を指定することもできるようにする。

受取書を発行する。

配達の遅延、配送中の物品の毀損は無条件で補償する。

などである。今では当り前のことのようにして「クロネコヤマトの宅急便」がわたしたちの日常生活に定着してしまっているが、三十年前の当時、これだけの思い切った発想と決断を敢えて実行に移した事業家は他にいなかった。上記の一つひとつの項目は、いかにも些細なことにすぎないが、実はその小さなことが消費者の欲求を大きく動かしたのである。まさに氏が言う「需要とはあるものではなく、創り出すもの」なのである。

「起業家」といい、「ベンチャービジネス」というのは、本来このように顧客の側に立って、顧客が真に望んでいるニーズを掘り起こすことをいうのだと思う。わたしが心から氏を真の「ベンチャーの先駆者」と敬慕するのは、この故である。

五、受入れ体制を固める

ソフト面での開発に並んで事業展開のカギを握るのが、営業体制と物流システムの構築・整備である。現在の同社の状況を一瞥してみよう。

まず店舗網の整備である。集配所は全国に約三〇万店、日本の人口の九九・九%、面積の九九・七%をカバーし、歩いて一〇分以内の場所に網羅している。全国の郵便局の窓口は約二万五千箇所（七月末現在）、警察署・交番・駐在所が約一万六千箇所というから、その稠密の度合いが分る。

また営業拠点（支店）は全国約三千箇所に設置されている。警察署は約一二六〇箇所である。

今後も顧客との接点を全国くまなく網羅し、既に庶民の生活に密着しているコンビニエンス・ストアのように、宅急便窓口を社会的インフラにまで高度化することを目指している。その一環として、現在集配所網にコンビニ店を組み込もうとするコンビニとの提携争奪戦が、郵政公社の「ゆうパック」との間で激しく展開されていることは衆知のとおりである。

次は荷物追跡システムの構築である。インターネットのホームページに「荷物問い合わせコーナー」を設け、ネットでアクセス可能にするとともに、ネット対応の携帯電話からも問い合わせできるようにシステム化されている。つまり何時でも何処からでも、発送した荷物が今どこを搬送中で、いつ配達できるかを即時に知ることができるのだ。

六、顧客が荷物を創り出す

このようにハード、ソフト両面からの総合的な体制を整備することによって、今度は逆に〝顧客が荷物を創り出してくれる〟ようになった。当初の通常の宅急便に加えて、次々と以下のような新サービスを産み出していったのである。すべて馴染みのものばかりであるが、改めて主なものを列挙してみよう。

クール宅急便
ゴルフ宅急便
二時間刻みの、時間帯指定配達
コレクトサービス（代金集金サービス）
日用雑貨（ミネラル水、トイレットペーパーなどのPB商品）の無店舗販売
ブックサービス
クロネコメール便（信書以外のビジネスレター、カタログ、ダイレクトメールなどの一括配送）
往復宅急便（ゴルフバッグ・スキーなどをゴルフ場、スキー場、空港などへ往復配送、料金割引）
高齢者向け支援サービス（日用品、医薬品、食料品を宅配、異変あれば病院へ通報）
ネット通販業者と提携、代金引換サービス（集金を終

えなくても荷主に代金を立て替え払い）
引越しパック（単身者、若夫婦向けの少量・近距離の引越し荷物を、半日・低料金で）

等々、時宜に合った色々な種類のサービスを開発し、顧客の幅広い需要に応えられるようになった。

七、行政の壁に挑む

ところで、ここまで到達するのには、その裏に永い年月にわたる苦難の道程が秘められている。氏自身が語っているように「宅急便の歴史は行政との闘いの歴史であった」のである。

まず事業免許の問題があった。トラック運送事業は、当時道路運送法によってがんじがらめに規制されていた。九〇年からは新しく施行された貨物自動車運送事業法によって許可制に変更されたが、それまでは路線トラック運送事業免許がなければ営業できなかった。しかも道路ごとの路線免許、都道府県ごとの区域免許、トラックのほかに軽自動車運送の許可などを必要とした。そのうえ、これらの権益をめぐる既存業者との利害の対立と、その上にあぐらをかく官僚の不作為、論拠のない行政裁量に悩まされた。遂には監督官庁である運輸大臣（当時）に対して行政不服審査法に基く不作為の異議申し立てを提出し、申請から五年もかかって漸く免許を取得したことさえあった。

現在同社と行政の間に横たわる壁は、郵政公社独占を規定した郵便法第五条による「信書取扱いの規制」である。二〇〇二年になって漸く郵便事業を民間に解放する信書便法が成立したが、「当社は参入を見送った。同法がポスト約一〇万本の新設を義務づけるなど、参入障壁が高すぎる。当社は顧客のところに出向いて荷物を〝集める〟営業を続けてきた。郵便法第五条を撤廃すれば信書便法は不要になる」（山崎現社長）としている。

行政との闘いはこれからも続く。

八、初日、十一個からのスタート

さかのぼって一九七六年一月、宅急便を初めて世に出した初日の取り扱いはわずかに十一個だった。だが「家庭の主婦が必ず支持してくれる」という小倉社長の信念は決して揺るがなかった。

その信念どおり、二十九年後の二〇〇五年三月期には、宅急便取扱個数・一〇億六千三百万個を実現した。一日平均実に二九一万二千個である。（因みに業界シェアは約三六%）また売上高・一兆七一九億円、経常利益・五三五億円、期末従業員数・一四万一六〇〇人の規模にまで拡大成長した。いま全国を走り回っている配送車の数は実に四万一千台（三月末現在）を数える。わたしたちがほんの数十分近所を散歩しただけでも、一台や二台のクロネコトラックに出くわすのも不思議ではない。

もちろん当社を追って宅配便に参入した企業は、大手を含め四社を数える（佐川急便、ペリカン便、フクツー便、カンガルー便）。当社を含めた上位五社だけで業界全体の取扱個数二九億個の九七・九％（〇四年度）を占める一大市場となった。加えて日本郵政公社の「ゆうパック」を含む小包郵便物（〇四年度・二億一千四百万個、前年度比一七・八％増）が、これを猛追している。今後さらに官民入り乱れての需要創出競争が激化するであろう。しかし、先駆者小倉昌男氏が生涯貫いた創業の信念は、この企業から決して失われることはないであろう。

九、利益はあとからついてくる

小倉昌男氏が生涯貫いた信念を、わたしなりに大きくまとめてみる。

「利益はあとからついてくる」

良い商品、便利なサービスを提供すれば、客が集まり数量が増える。その結果利益が生れる。「利益は結果であって、決してスタートではない」と、氏は繰り返し社員に説いた。ヤマトでは「利益」という言葉は言いたくても口にしない。「お客が集まるか」「個数が増えるか」だけが、事業展開、新サービス開発の唯一の判断基準である。

例えば人里離れた山の奥のゴルフ場にバッグを運ぶためには、五、六千円の料金設定をしなければ採算はとれない。しかしそれを千円にしたから客が集まって量が増え採算がとれるようになった、というのである。

「新サービスや仕事の効率化の発想の原点は、常に現場にある」

ゴルフ宅急便、往復宅急便、コレクトサービス、引越しサービスなどは、もともとドライバーの提案による。クール宅急便、時間指定配達、日用雑貨販売、高齢者向けサービスなどは、女子社員の発想から始まった。そもそもクロネコのデザインそのものも、社員の子供が書いたイラストが元になったといわれている。

またよく街で見る背の高い角張った特別仕様の配送車は、立って作業ができ、即座に伝票やメモの書き込みができるようにという、ドライバーからの要望を採り上げたものだ。

ヤマトでは、毎週一回、役員・部課長とドライバー・女子社員とが、少人数の戦略会議をもち、トップと対等に商品戦略の議論を展開していると聞く。同社では、顧客と接する現場が最高の位置を占める。

「社員の潜在能力を活かす」

トップダウンだけでは、会社全体がトップに寄りかかり、誰もがもっている隠れた能力を発揮することはできない。ましてや、仕事に対する主体的な挑戦意欲も、社会に対する使命感も、充足感も達成感さえも期待できないだろう。

ある二百人ほどの事業所で、十人毎の小集団に分け、グループ長を決めるだけで自由に仕事をやらせたら、集配の処理個数が大幅に増え、ミスも減った。「管理をやめたら能率が上がった」（有富前社長）という。

前向きに働くのと、働かされるのとでは、仕事の品質に大きな差がでるということである。

「不条理は許さない」

宅急便を初めて間もない頃、集配所で段ボール箱からあふれたミカン一個を、ある社員がつい食べてしまうという〝ミカン事件〟があった。社長だった小倉昌男氏は即座に懲戒解雇を言いわたした。周囲の社員は震え上がった。（七月二一日・日経新聞「追想録」）

また業態が軌道に乗った九三年頃、荷物の誤配送、遅延、紛失などのミスを、本社に報告せず現場で善後処理をしてしまうケースが発覚した。既に一線を退いて相談役に就いていた小倉昌男氏は、直ちに再度会長に復帰し、社内規律の引き締めに自ら乗り出したことがあった。

行政の怠慢・不作為を許せなかったと同様に、身内の末端の些細な不条理にも決して手を緩めなかった小倉昌男という人物の真骨頂をみる思いがする。

十、誰もが感動し共鳴した経営者

小倉昌男氏はヤマト運輸を退任後、第二の人生として一九九三年ヤマト福祉財団を設立して自ら理事長を勤めた。働く障害者の余りの低賃金に再び「許せない」現実を知ったからだ。「月給一万円からの脱却」を唱え、福祉施設の経営改革を提唱、焼きたてパンのチェーン店を展開して、月給十万円を達成した。「障害者も立派な人格をもっている。それを尊重して働かせてあげなければ」という信念を貫いた。（前掲「追想録」）

「お別れの会」の会場には、弔問客に焼きたてパンの試食を勧める障害者の生き生きとした顔があった。

不条理には敢然と立ち向かうが、その一方ですべての価値基準を顧客の視点におき、「お客あっての会社」という理念を貫いた人であった。また、トップ自身が社員の目線に下りていき、その素朴な意見に耳を傾けて、会社と社員の共存共栄に努めた人でもあった。

一九七三年のオイルショックで会社が苦境に陥ったとき、氏は労働組合に頼んだ。――いま〝ヤマト丸〟は嵐の真っ只中にいて、いつ沈没するかわからない危機に瀕している。船を軽くしないと沈むおそれがある。だが乗組員に下りろとは言わない。持ち物を捨て、食料も

最低必要なものだけにして頑張ろう。人員整理はしないから、賃金カットなど最低の協力を頼む。嵐が去ったら、その埋め合わせはする――と。（「小倉昌男・経営学」）こうして組合員は一人も整理せず、見事に危機を乗り越えた。

多くの中年男女たちが「お別れの会」に馳せ参じ、小倉昌男元社長の遺影に手を合わせて別れを惜しんでいた姿が、社長のこの訴えと重なり合うのは決して偶然ではないように思えてならない。「ヤマトは、社員そのものが商品であり財産である」という氏の言葉が再びよみがえってくるのである。

――奇しくも八月八日の当日、国会では、郵政民営化法案が参議院で否決されて廃案となり、衆議院の解散という事態にもつれ込んだ。そして九月十一日、郵政民営化の是非をめぐり政権選択を争点として、衆議院総選挙が行われた。いささか乱暴ともいえる今回の解散、総選挙であったが、結果は予想を超えて与党が圧勝するところとなった。

早くから郵便法等の許認可の廃止、そして「官から民へ」「小さな政府」に身を挺して挑んできた小倉昌男氏は、天上からこの推移をどのようにみておられるのだろうか。

ここに改めて心から氏のご冥福を祈る次第である。

（二〇〇五・九・一五・記）

合掌

文化勲章に輝く

赤堀四郎博士の一生

松下魏三

一、出生

赤堀四郎先生は明治三十三年十月二十日、遠州灘の荒波が磯を洗い、日夜波の音が子守歌のように聞えてくる静岡県小笠郡千濱村成行（現掛川市千浜）で生れた。今から百五年前である。明治三十三年は西暦では一九〇〇年であるから十九世紀の最後の年であり、二か月後には二十世紀となる大変意義深い年であった。

先生の年齢は西暦の年の下二桁と同じで、逝去された平成四年は西暦一九九二年であったから満九十二歳の天寿を全うされたのである。

明治三十三年頃のわが国は、日清戦争と日露戦争の中間に当たり、日本は殖産興業と軍備の拡張や官営の軍事工場の拡充に力を入れ、財源は日清戦争による賠償金と増税更には内外の公債が当てられていた。

当時のわが国の産業は一次産業が中心で二次産業や三次産業の従事者は少なく、増税は地租に偏っていたので農村は租税の重圧に苦しんでいた。

この時代の千濱村は半農半漁の純朴な農村で海岸線一帯は砂地であり、冬期の西風は俗にいう〝遠州の空っ風〟で強く吹くが、日照時間は長く、年間を通じて平均十五度程度の温暖な気象条件と適度の降雨量により農業と養蚕業が盛んに行われ、漁業は副業であった。

では、赤堀四郎先生はどのような家庭で生れたのであろうか。

父の名前は秀雄、母の名前はしのといった。四郎が生れた当時父は三十三歳で小笠郡佐倉村（現御前崎市佐倉）の村立佐倉小学校の校長であったが、翌明治三十四年には千濱小学校の校長に就任し、その後大正六年まで十六年間同校の校長の職にあった。

母は同村の篤農家赤堀八太郎氏の長女で聰明で心身ともに強健な主婦として多くの人々から尊敬され慕わ

れた。そして七人の子供を産み育てながら家事一切を切り盛りし、自ら進んで農業に従事した賢夫人であった。

父の秀雄が教育に専念し多忙な毎日であったので、家の農作業は母が中心となり、懸命に働いた。

当時、赤堀家には四郎より十三歳年上の長男郁太郎が将来の進路について真剣に考えていた頃であったが、父の妹しゅんの夫で義理の叔父に当たる沖卯太郎という人が明治時代では人のうらやむ〝官員様〟と呼ばれる大蔵省専売局の役人として長崎の専売局に転勤しており、明治三十四年正月に秀雄の家を訪れた時「郁太郎どうだ長崎に来ないか」と奨められ、郁太郎は千濱小学校を卒業し、長崎に行き沖卯太郎の家に寄寓してカトリック協会の東山学院中等部に入学した。東山学院はキリスト教の経営する学校であったから、郁太郎は次第にキリスト教に深い関心をもつようになり、キリスト教に帰依して洗礼を洗けている。

叔父沖卯太郎が長崎専売局から東京の専売局に転勤すると郁太郎は東山学院を退学して東京に出て横浜税関に勤めたが、京北中学校に編入試験を受けて入学し、明治四十一年に同校を卒業し、更に京都の同志社大学に入学して神学の研究に専念し、大正二年に同志社大学を卒業した。

その後郁太郎は父秀雄の恩師である中島秀清の娘ふじと結婚したが、郁太郎の宗教哲学に対する研究心は堅固で、大正四年単身米国に渡り、苦学をしながらペンシルバニア州立大学に入学し、社会学、教育学、宗教学、人種問題等を研究し、更にクローザー神学校研究科に入学し、比較宗教学や応用社会学を研究した。その後大正九年（一九二〇年）に帰国し、間もなく大阪府知事林市蔵に招かれて大阪府主事を命ぜられたが、翌年には石川県に転出し、社会教育課長・図書館長を歴任した。そして昭和四年、当時わが国はようやく社会福祉事業の重要性に着目し、内務省は中央融和事業協会を創立し、郁太郎を常務理事に任命し、社会福祉や同和対策に関する企画運営に当たらせた。昭和十年には神戸市の要請により社会福祉事業を推進するための社会部長に就任し、労働問題や社会福祉問題に取り組み、優れた実績を残した。その後は戦時体制となり、激務が続き健康を害したので昭和十六年退職し、郷土の千濱村に帰り余生を送っていたが、昭和三十四年九月に七十三歳で逝去された。

二男の昇は明治二十八年五月に生れ、千濱小学校を卒業し、進学を志したが、学費の支援が無理であったので、当時同志社大学に在学していた兄郁太郎が弟昇を同志社大学の食堂の給仕に採用してもらうように奔走し、採用された。昇は働きながら同志社中学に学び、更に京都医学専門学校に入学し、医学を学び卒業後は、友人と大阪で開業の準備を進めていた。その後不幸にも病魔におかされたので郷里に帰って静養していたが、大正十四年

一月に他界した。療養中の昇は母あての遺書の中に「貧しい中から物質的には少くとも精神的には無限の援助と恩愛を注いで下さったことを感謝して居ります。未だ成功の途中にあって何の御慰めもせず早く逝くのは不幸なことでせう。然し私は三十年全く幸福に暮して来ました。精神上には可なりの苦痛があり物質的にはあまり豊とは云えなかったが学業が了りて実地に入ってから死ぬと云ふのは幸でありませう……。死は何人の上にも来るもので私は今丁度よい時でせう。喜びに満されて死んでゆきます。母上様どうかなげかず老後を大切に。さよなら永遠に　昇　千浜母上様」と記されていた。

この昇も兄郁太郎の感化で貧困者の医療福祉を志していたと思われる。後に四郎も大阪府の教育委員長を務め、地域の行政に貢献しているが、このように優れたヒューマニストの長兄や二男たちの感化があったのではないかと推測されるのである。

赤堀家では三男の三郎が早逝し、その後生れた妹三人と五男はまだ幼かったので、母の手伝いは専ら四郎少年が中心になっていた。

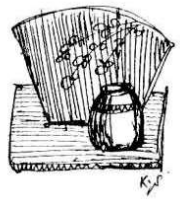
赤堀四郎先生が生れた明治三十三年は十九世紀から二十世紀に移る象徴的な年であった。

奇しくもこの前年の明治三十二年一月には浜松市出身で文化勲章を受賞した高柳健次郎・アメリカの生化学者F・リップマンそして明治三十三年にはイギリスの生化学者H・グレブスが誕生している。そして翌明治三十四年にはわが国第一二四代の昭和天皇・ノーベル賞を受賞した元首相佐藤栄作・磐田郡見付（現磐田市）出身の元建設大臣で静岡県知事を歴任した竹山祐太郎が生れている。

このように明治三十二年から明治三十四年にかけては後世にその名を留める偉大な人々が誕生した時代であった。

これらの事実は偶然に生れたものであろうか。それとも人類の歴史に残る必然的なものであったのであろうか。しばし歴史の流れに感嘆するばかりである。

（つづく）



還暦からの考古学（四）

玉の話（その3）

中山喬央

エジプト文明と玉

エジプト文明のあらまし

古代エジプトでは、アフリカの北東部を北に流れるナイル川が毎年六月から一〇月にかけて定期的に氾濫し、農業に必要な肥沃な土壌と用水をもたらしました。ギリシャの歴史家ヘロドトスはこれを「ナイルの賜物」といっています。

この現象を上手に利用して農産物を沢山収穫する為には、住民の共同作業と、強力な指導者を必要としましたから統一国家が今から五千年前ごろには現れます。そして紀元前三〇年にローマ帝国に征服されるまでの約三千年間に、三十一の王朝が交代します。

この王朝時代は古王国・中王国・新王国の時代に大きく分けることが出来ます。

古王国の時代、国王は行政と祭祀の最高責任者で、その仕事をさせる為に、官僚と神官を使っていました。重要な地位には王族を任命し、地方行政区として州を設けました。

又、自分のお墓としてピラミッドを作らせました。有名なのはクフ王の、舟を埋納（お墓に納める）した第一ピラミッドと、カフラー王の第二ピラミッド、及びメンカウラー王の第三ピラミッドです。

中王国の時代になりますと、首都がカイロの南にあったメンフィスから、ナイル川上流のテーベ（今のルクソール）に移ります。この時代、官僚機構は拡充されますが、末期になるとアジアから侵入した異民族が傭兵として力を蓄えた後、百年間に亘ってエジプトを支配します。

新王国時代、国王にトトメス三世がでて国土をエジプト史上最大にします。彼は有能な軍人であると同時に、統治も巧みな行政官でもありましたから、王国は繁栄します。この後アメンホテプ（アメンヘテプ）四世（アクエンアテン王ともいいます）の時代には、それまでの多神教に代わって、新しく唯一の神アトン（アテン）を崇拝する宗教改革が行われます。この結果極端に写実主義を採用するアマルナ美術が登場します。以後王朝は一時的に繁栄する事はありましたが、次第に衰退していきます。

このような王朝文化の特徴は宗教観にも現れています。エジプト人の宗教は多神教で、人知を超えたあらゆるものを神格化し、部族、都市ごとに守護神を持っていましたが、それらを序列化して、主神を太陽神ラーとします。しかしその後で、テーベの守護神アモン（アメン）と結びつけてアモン（アメン）＝ラーを信仰したこともあります。

彼等は霊魂の不滅を信じ、遺骸をミイラにして保存し、冥界の神オシリスの審判を受ける際の案内書として「死者の書」を添えました。

又彼等は碑文・墓・神殿に刻まれたヒエログリフ（聖刻文字・神聖文字）、宗教書・文学作品に用いられたヒエラティク（神官文字）、法律や商業上の契約に用いられたデモティク（民衆文字）というエジプト文字をもっておりました。

このような文化は、やがてギリシャ・ローマに受継がれていくこととなります。

ここでナイル川が、エジプト人の考え方に影響を及ぼした様々な事柄について述べます。

定期的な氾濫が終わり水が引きますと、上流から運ばれた肥沃なナイル・シルトと呼ばれる黒土が姿を見せます。これが農産物の豊かな実りをもたらすものなのですが、この黒い土地を意味する「ケメト」がエジプト全土をあらわす意味を持つようになります。その結果、古代エジプトの北と南の地理的な境界が、前三千年紀（前三九九九年～前三〇〇〇年）の初めには確立し、国家として自覚されます。近郊の地域である北東のパレスティナやシリア、西のリビア、南のヌビアなどは、後で統治したことが度々ありましたが、エジプトには入らず、古代エジプトの土地を定義する考えに変わりはありませんでした。

次が古代エジプト人がケペレルと呼んだ、聖甲虫のスカラベです。

この虫は、水が引いた黒土の中から最初に現れ、動物の糞を丸めて巣に運び込む習性があることから、古代エジプト人は天空で太陽を運ぶ太陽神として崇拝してい

ました。又それは最初に現れることから、創造神としての属性も持っていました。

その為、護符や装飾品・印章として用いたり、ミイラの心臓の上に、その復活を祈念して置いたりしました。

一方、ナイル川両岸の耕地と砂漠の境界は、特に上流の上エジプトで、緑と赤みがかったピンク色の明瞭なコントラストを呈していました。

その結果、古代エジプトでは、オシリス神をはじめとする、再生・復活に関わる神々の肌が緑色をしており、これは黒い沃土からの植物の芽吹きを表したものであり、砂漠を表す赤は、不毛や死の世界を象徴するものとなりました。

エジプトにおける旧石器時代と新石器時代

旧石器時代とは人類が原始的な石器を作り始めた時代の事ですが、エジプトでは上エジプト（ナイル川上流の渓谷地帯）で、今から七十万年前頃から、ナイル川を見下ろす丘陵部に一時的な居住区の痕跡が発見されています。なかでもテーベ地域で発見された約十万年前の、長さ十五ｃｍのフリント（燧石）製石器は有名です。

又一万七千年前頃の、穀物を挽くために使用されたと思われるひどい磨耗の痕跡が残る、平らな石も見つかっています。

この時期ナイル渓谷に時々訪れた人達は、ナイル川の定期的な氾濫を知ると同時に、野生の穀物を収穫する為に、ナイル川流域に来るようになりました。

このような状態は、最初の定住農耕民と牧畜民がナイル川流域に現れる七千五百年前頃までの約一万年の間続きます。

ナイル川の第一急流と第二急流の中間地点西岸にあるアブ・シンベルの西方約百ｋｍのところにナブタ遺蹟があります。ここでは終末期旧石器文化の包含層の直ぐ上に、初期新石器文化の包含層が見られ、二つの文化が連続していることが分かります。

終末期旧石器文化層からは、小型の石刃（ブレイドともいいます。縦長のナイフ形をした石器です。）や尖頭器（ポイントともいいます。先端が鋭く尖った石器です。）を含む石器群の他、ダチョウの卵殻製ビーズ、骨製の鏃などが出土しています。

発見された動物骨は、大型・小型のガゼル（羚羊）、野兎などの狩猟対象獣の他、鳥類の骨片です。

一方植物遺存体としては、アカシア・ギョリュウ（御柳）・ナツメヤシなどがあり、今よりずっと湿潤で植生が豊かだったことが分かります。

放射性炭素による年代測定法では九千年から八一五〇年前のこととなります。

これに続く新石器文化では、土器の使用を始めます。また六条大麦が二粒、数種の雑草と一緒に見つかっています。これらの雑草は地中海沿岸で栽培種と共にある種類ですから、栽培が開始された可能性があります。

農耕・牧畜を営む新石器文化は七千五百年前頃、エジプト各地で一斉に起こります。

そして先王朝時代が七千年前頃から始まり、五千年前頃までの二千年間続きます。その後半、五千五百年前頃になりますと考古資料に共通性が見られるようになり、地域間の交流が密接になった事が分かります。

新石器時代の農耕民は、ナイル川流域やデルタ地帯の土手に恒久的な住まいを持ち、エンマー小麦、大麦、亜麻を栽培し、牛や羊・山羊・豚などを飼育し、集約的に漁労を営むと共に、狩猟も少し行っていました。

気候は王朝時代や現在よりもずっと湿潤で良好でした。

ナイル川の定期的な氾濫のお陰で大規模な人工灌漑の必要はありませんでした。

先王朝時代になりますと、土器や編籠を作ったり、布を織り、ファイアンス（粉末の石英を加熱して作られたもの。ラピスラズリやトルコ石を模造したもので、銅を混ぜて美しい青色を発色させます。護符・ビーズ・小像・容器に用いられました。）や贅沢な装飾の為には、少量の銅を使用していました。

六千五百年前頃、バダーリで河馬と鷹の護符のついた貝殻とファイアンス製の首飾りが出土しています。

装飾品は、葬送目的だけに作られたのではなく、その持主が生きている間、大きな喜びを与えるものでした。櫛やヘアピン・イヤリング・ビーズ・穴を開けた貝の首飾り・腕輪・指輪・緑や黒のアイシャドウを調整した化粧用パレットなどがあります。

その他、河馬や牡牛・山犬・かがみこんだ鷹のような鳥などの動物の形をした護符（恐ろしい動物から身を守ったり、またその動物の特徴を授かることを考えて身に付けたもの）も見つかっています。

これらの品々はトルコ石・紅玉髄・碧玉・そして恐らくアフガニスタンのバダクシャンから長距離交易によってもたらされたラピスラズリや、象牙・貝・骨・土器・ファイアンス・銅・そして後には金や銀でも作られるようになります。

エジプトには国境付近を除いて、大型建築のための木材を供給する木がありませんでした。しかしこれとは逆に豊富な金属資源があり、ナイル沿岸のすべての地域には、建築の為の石材がありました。その多くは質の異な

る石灰岩とか南方の砂岩などでした。

更に東部の砂漠にあるワーディ・ハンママートでは、彫刻に使われる硬い片岩が採掘できました。大型建物や彫刻の石材として使用された花崗岩はナイルの第一急流の近く、アスワーンの付近で採掘されました。彫像に使用された閃緑岩は東部の砂漠や、南のヌビアから運ばれました。その他エジプトには、美術品に使用された赤色珪岩（緻密で硬い、主として石英の粒でできた堆積岩またはそれが変成された変成岩）、アラバスター（雪花石膏）そして玄武岩（細粒・緻密で塩基性の火山岩。斜長石・輝石・橄欖石・磁鉄鉱などからなり、暗灰色から黒色です。）などがあります。

又、トルコ石・紅玉髄・紫水晶・碧玉は宝飾品の製造に用いられましたが、豊かな土地を取り巻いている砂漠から入って来ました。金は東の砂漠で掘られ、また南のヌビアからも入手できました。

七千年前頃のバダーリ文化の時代、エジプトでは世界に先駆けて黄金の製品が現れます。そしてエジプトの穀物と金は外交的な手紙にもしばしば現れており、軍事力以上に力がありました。

銅は、道具や武器の製造に最も重要な金属で、シナイ半島から供給されていましたが、西アジアやヌビアからの輸入にも多くを頼らなければなりませんでした。

初期王朝（五千年前～四六五〇年前頃）の第一王朝・セメルケト王の時代には、シナイ半島で銅山を開発した記録が残っています。

周辺地域である、シリア・パレスティナ地域の編年体系では一般に、初期青銅器時代一期の年代は、五千百年前～四千九百年前頃と考えられていますが、エジプトでは、銅は貴重品であったため再利用されて遺物として残りませんでした。管見したところでは（自分が見たかぎりでは）、「トードの宝物」を入れていた、アメンエムハト二世（三千九百年前頃）の典礼（儀礼）を納めた青銅製の箱四個が最古のものであります。

一方銀については、最古の銀器がメソポタミアのウルク文化期（前三千年紀前後）に現れますが、エジプト国内では管見するところ産出したところが見当たりません。前述の「トードの宝物」である一四五個の銀製の杯と碗が有名ですが、これらはシリアなどの東地中海から持ち込まれたものだとされています。

エジプトで銀製品が一般的に見られるようになるのは、ずっと時代が新しくなった末期王朝時代（前七五〇年～前三〇五年）のことで、この時代になりますと青銅製品もかなり見られるようになります。

ここで貴重な金属・石材等をエジプトにもたらしたヌビアについて、説明します。

一九六〇年代にアスワーン・ハイダムの建設が行われましたが、この水没地帯にあったのがヌビア地域の旧石器時代から新石器時代の遺蹟でした。

このヌビア地方は「黄金の国」と呼ばれるほど金がとれ、またエジプトに乏しい銅の供給地でもあり、閃緑岩・木材等の輸出地でもありました。

前二千年紀、ヌビアはエジプト化されていましたが、ヌビアの領土がエジプト本土と同じように統治されることはありませんでした。これは前一三三〇年頃、テーベ西岸、クルナト・ムラーイ地区のトゥトアンクアメン王のヌビア太守、アメンヘテプ・フイの墓や、神殿の壁に描かれた貢物を運ぶヌビア人の図を見ても明らかです。これはヌビアとエジプトの関係を正しく伝えたものだとされています。

先王朝時代と次の王朝時代の芸術は、護符が最も貧しい人達でさえも同じように使われ続けた事からも明らかなように、連続したものでした。

しかし社会の最も裕福で影響力のある人々、とくに宮廷ですが、その保護をうけることによって、それは王朝時代に入りますと急速に発展する事となります。

（続く）

参考文献

岩出まゆみ「エジプト発掘史」『世界四大文明・エジプト文明展』東京国立博物館、二〇〇〇年。

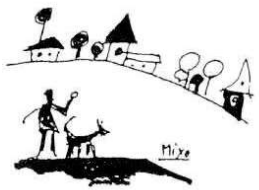
ギーメット・アンドル「エジプト人」『古代エジプト展』名古屋市博物館、二〇〇五年。

近藤二郎『エジプトの考古学』同成社、一九九七年。

近藤二郎「古代オリエント史と旧約聖書―エジプト学を中心として―」早稲田大学史学会大会資料、二〇〇一年。

趙古山「中国における古代金銀器の考古学的発見」『中国の金銀ガラス展』ＮＨＫ大阪放送局、一九九二年。

ヤロミール・マレク著・近藤二郎訳『エジプト美術』岩波書店、二〇〇四年。



遙かなるカメルーン（九）

太田精一

（四十八）

七月のドアラの街は、ひっそりとしている。ヴァカンスシーズンのため街を走る車の数は少ない。日中も人影はまばらである。

昼食後、事務所に戻った桂木は、流れる汗を拭ってエアコンの前に胸をはだけ涼をとっていた。秘書のマダム・ベルトランもヴァカンスで、事務所には、従業員のブーリーと桂木の二人だけである。午後の気怠い暑さの中でエアコンがあえぐような音をたてている。

突然電話のベルが鳴った。受話器から日本語の声が流れてきた。それも日本人の話す日本語と比べ何んとなくぎこちない。

「もしもし桂木さんですか。私は、アラン・ムベングです。覚えていらっしゃいますか。三年前桂木さんが名古屋でフランス語の会話講座を受けていた時の講師です」

「ああ、あの時の先生ですか。大変ごぶさたしています。お元気ですか。いつカメルーンに帰られたのですか」

桂木は、名古屋にいる時、カメルーンに赴任が決まって慌てて朝日カルチュアセンターのフランス語会話講座に通っていたことを思い出した。その時の先生である。

「桂木さん。今お忙しいですか。そちらに伺ってもよろしいでしょか」

「いいですよ。今日は来客もありませんし、日本の様子などお聞かせください」

温厚で憂いを含んだムベングの顔が浮かんだ。

ムベングは、ドアラの有力な部族長の息子として一九四四年に生まれた。父親は、息子に高い教育をつけさせるため、八才のときにムベングをパリに住む友人に預けた。彼は、パリで小学校、高等中学校（リセ）を終え、

パリ大学の東洋語学日本語科に入学した。卒業後、さらに日本研究を深めるため、帰国するこの時まで日本に留学していた。名古屋でのフランス語会話の先生は、彼にとってほんのアルバイトのつもりであったのだ。

「確かムベングさんは、フランス人の奥様と男の子がいらしたと聞いていましたが、ご一緒に里帰りですか」

「妻は、もう少し子供と一緒に日本にいる予定です」

ムベングは家族のことについては、あまり話したがらないようだった。

「私は、当分両親と一緒にドアラで生活するつもりです。もしできれば、ドアラにある日系の会社に就職したいのですが、どこか適当な職場はないでしょうか」

「ムベングさんは、ご存知ないかも知れませんが、現在ドアラには、日系企業は一社もありません。宝幸水産という漁業会社が、二人の日本人駐在員を常駐させ、スペインの漁業会社と提携し、近海で海老を獲って日本に輸出していたことがあります。でも撤退しました。また、ヤウンデ（カメルーンの首都）にあったココアバターの会社ソカカオ社もカメルーンの政府系企業に売却し、日本人社員全員帰国してしまいました」

桂木は、気の毒そうにムベングの顔を見て目を伏せ、しばらく考えた後、再度口を開いた。

「今、バカンスシーズンでフランス人の女性秘書が、休暇を取って帰国しています。彼女が帰って来るまで臨時に働いてくれる人を探しているところです。休暇は二ヶ月ですので、その間この事務所で働きながら新しい職場を探すことにしたらいかがでしょうか」

「分かりました。それで結構ですから、働かせてください。現在、日本にカメルーン大使館を設置しようとする動きがあると聞いておりますので、もし採用されれば、日本に行くことができるかも知れません。折角日本研究をしてきたのですから、カメルーンと日本との架け橋になるような仕事がしたいと思っているのです」

「臨時とは言っても一応東京本部の了解を取り付けなければなりません。すぐ手続をしますが、書類の往復期間を含めて十日程待ってください」

ムベングは、桂木の言葉を聞きほっとしたような表情で事務所を出た。

一週間後にムベングの臨時雇用を承諾する旨の電報が届いた。桂木は早速ムベングに翌日から勤務するよう連絡した。

（四十九）

数日後、桂木は、ムベングを自宅に招いた。

ムベングは、三年間の日本滞在で、すっかり日本食にも慣れ、日本料理を好んで食べるようになっていた。

「本日はお招きにあずかり有難うございます。桂木さ

んのお言葉に甘えて伺いました。ムベングと申します。奥様には大変お世話をおかけします」

ムベングは丁寧な日本語で妻の由美に挨拶した。

「材料が限られていますので、手の込んだ料理はできませんが、どうぞゆっくりおくつろぎください」

由美は、海老と魚の天ぷら、焼鳥、肉じゃが、オクラの澄まし汁、タロイモ（里いも）の煮物、ほうれん草のお浸し、胡瓜の漬物にご飯、デザートには西瓜を出した。

味噌、醤油などの調味料を除いて、肉、野菜、魚などの食材は、ほとんど現地で調達できる。米は、ジャポニカ種の中国米を使った。時々白い石が混っているのでそれを取り除くのがひと仕事である。

「天ぷらは久し振りです。焼鳥もおいしい。奥さん、これならドアラで日本料理店を開くこともできますよ」

「でも、ここでは日本人もいませんので商売にはなりませんわ」

「フランス人は、食べることにかけては貪欲ですからおいしければ少々高くても食べに来ますよ。ベトナム料理店は三軒ありますがどこも繁盛しています。ドアラにはフランス人だけでも六千人いるといわれています。それに高所得のカメルーン人やその他の外国人を加えれば、十分経営が成り立つように思えます」

「それはそうかも知れませんが、私にはとても店を切り盛りするような自信はありませんわ」

ムベングは、由美との会話をしばらく続けた後ふと箸を休め、淋しそうな目をしてぼんやりと遠くを見詰めた。

日本食が、日本に残した家族のことを思い出させたのかも知れない。

「奥様が日本からこちらにいらしたらまたお招きします。今度は、奥様とお子様をお連れしていらしてください」

「はい、近いうちにまた家内や子供と共にお邪魔できればと思っています。両親も孫の顔を見たがっておりますので……」

ムベングは、そう言って、一瞬顔を曇らせた。彼の家庭の事情を聞いていた桂木は、由美の何気ない言葉が、ムベングの悲しみを誘うような気がした。桂木は、ムベングから妻との仲がうまく行っていないことをすでに聞いていたのだ。

「今夜はおいしいご馳走を頂き本当に有難うございました。お陰様で日本にいるような楽しいひと時でした。今度は私の両親が桂木さんの家庭を招待しますので是非いらしてください」

ムベングは、丁重に礼を述べ、桂木の家を辞した。

近くの草叢で蛙が鳴いている。月の綺麗な夜であった。

（五十）

九月も半ばを過ぎたある日のことである。ムベングが桂木の事務所で働き始めて一ヶ月が過ぎていた。

「桂木さん。明日休ませて頂きたいのですけれど……場合によっては二、三日になるかも知れません」

ムベングは、帰宅準備を始めながら桂木に休暇の許可を求めた。

「いいですよ。風邪でも引いたんですか。それともどこかへ旅行でもするんですか」

「ええ、ちょっと遠い処へ……」

「遠い処って、ヤウンデへでも行かれるのですか」

「ええ、まあ……」

ムベングは、言葉を濁した。

「ところで、大使館設立の話はどうなっていますか」

「やはり二、三年は無理なようです。財政状態が芳しくなく先送りとなったと聞きました。だから設立準備のための職員は、今のところ必要ないそうです」

「それは残念です。カメルーンであなたのキャリアを生かせる仕事があればいいのですが…。この事務所では、予算的にみても正規職員をもう一人増やすことはできません。働いて頂くにしてもアルバイト程度になってしまいます。もし、日系企業が進出して来るような話でもあればムベングさんに真先にお知らせします」

「桂木さんの事務所の事情は分っています。どうぞお気になさらないでください」

ムベングは、憂いを隠して笑みを浮かべ事務所を出た。外は夕日が傾きかけ、通りを隔てた建物の影が長く伸びていた。

翌日桂木は、平常通り出勤し書類に目を通していた。十一時頃、ムベングの従兄と名乗る男が桂木を訪ねてきた。ブーリーに案内された従兄は、深刻な顔で椅子に座るなり桂木に言った。

「ムッシュームベングが死んだ」

桂木は従兄の言葉に耳を疑った。何か遠い世界の出来事のようで全く信じられず聞き返した。

「ええ……何ですって。ムベングさんが死んだって…。昨日、この事務所で彼と一緒に仕事していたのに……。何か事故にでも巻き込まれたのですか」

「いいえ、自殺したんです」

「そんな馬鹿な！　またどうしてそんなことになったんです」

桂木には、ムベングが自殺するなんて思いも寄らなかった。

「何んで自殺なんかしたのです。原因は何んですか」

「良く分かりません。家族のこととか、就職のこととか悩みはあったようです。しかし〝まさか自殺するなんて思ってもみなかった〟と両親は言っています」

「そういえば、昨日事務所を出る前に変なことを言っていました。二、三日休暇が欲しい。ヤウンデでも行くのかと尋ねると、ええちょっと〝遠い処へ〟というので す。その時は聞き流してしまったのですが、今考えるとその言葉には深い意味があったのですね」

桂木は、どうしてムベングの発した言葉の意味を察知することができなかったのか悔やんだ。

〝遠い処へ〟は、彼岸の彼方への旅立ちをほのめかすムベングの悲痛な心の叫びだったのだ。

(ムベングは、私に悩みや苦しみを聞いて欲しかったのかも知れない。もっと多くの言葉を交わすことによってムベングの閉ざされた心を聞いてあげられたのではなかったか)

桂木は、ムベングの机を撫で、その椅子に腰を下ろした。彼の温りが伝わって来るようだった。桂木はふと入口のドアを見た。すると鬚面の人なつこいムベングの顔がドアの前に浮んだような気がした。

(五十一)

翌日、ムベングの従兄が埋葬式の案内状を持って桂木の事務所に来た。

「ムッシュー桂木、埋葬式には是非ご出席ください。あなたは家族以外で会った最後の人です。ムベングの両親も会いたがっています。柩に花を供えて頂ければきっと彼も喜ぶでしょう」

桂木は、妻の由美と共に埋葬式に参列した。ムベングの遺体はドライアイスの詰まった柩の中に入れられ霊柩車で自宅から墓地に運ばれて行く。霊柩車の後には長い葬列ができている。数十人の女性が悲しい声を張り上げ歌いながら重い足取りでその後に続いていた。

墓地には、すでに大勢の会葬者が柩の到着を待っていた。

神父の祈りの後、会葬者は柩の中に花を入れた。花で詰まった柩は、蓋が閉じられ、深く掘った穴底に降ろされた。土地の有力者や友人などが弔辞を述べる。

最後に、父親がムベングの生い立ちとその人となりを語り、会葬者にお礼の言葉を述べた。女性たちは、声をあげて泣き叫び、悲しみを全身で表わしている。

由美は、ハンカチを口に当て嗚咽を押さえていた。だが、柩に土が被せられるにつれ、堰を切ったように墓穴の脇に泣き崩れた。

柩の上に土が盛られ、墓穴が埋まり墓標が立った。

ムベングの父親は、桂木に会葬の礼を述べるとともにムベングについて語った。

「息子は、日本が大好きでした。再び日本で暮したいと言っていました。日本語の本が家にたくさんあります。私は、息子にカメルーンの将来を担うような政治家になってほしいと願っていました。それには高い教育をつけることが必要だと考え八才のときに息子をパリの小学校に入れました。それが息子にとってどんなにつらく悲しいことであったのか後で知りました。そのことがずっと息子の心の傷となって残っていたように思えます」

「ムベングさんは、何故日本語を学ぼうとしたのですか。お父さんは聞いていましたか」

「息子は、日本語を通して発展する日本の姿を学び、カメルーンの今後の発展に役立てたいと申しておりました。でも、本当はまだ見ぬ遠い日本への憧れの気持が強かったのだと思います。息子は、いつも幸福を求めて旅をしている〝さ迷える異邦人〟であったような気がします」

「フランス人の女性と結婚し、日本に住みたいと息子さんが言った時、お父さんはどのように思いましたか」

「結婚については、別に反対もしませんでした。息子が好きな人であれば、どこの国の人でもいいと思ったのです。でもいつかは、カメルーンに帰ってきて欲しいと思っていました。それが妻や子供を日本に残し、一人で帰って来るなんて思ってもみませんでした。しかも自から生命を絶ってしまうなんて……今でも信じられません。きっとこのドアラの森の精霊が、息子に〝もうどこにも行くな〟と囁いたに違いありません」

桂木は、参列者の散った墓の前に立ち尽くした。涙がとめどなく流れ、土の中に吸い込まれて行く。

突然閃光が走り雷鳴が轟いて大粒の雨が降ってきた。

(ムベングは、何故自殺しなければならなかったのか。そこまで彼を追い込んだものは何だったのか。それは本人にしか分からない。いや本人も本当のところは分からなかったのかも知れないのだ。衝動的な自殺だったのだろうか。少なくとも昨日事務所を出る時には死を決意していたに違いない。そうでなければあの〝遠い処へ〟という言葉はなかった筈だ)桂木は、父親の言った言葉が妙に頭の中にこびりついて離れなかった。

(ドアラの森の精霊がムベングの〝さ迷る魂〟を故郷ドアラの土に返したのだ)

そう考えることで桂木は心の休らぎを得たような気がした。

雲の切れ間から顔を出した夕陽が真赤に燃え、ムベングの眠る赤土の盛土に立つ墓標を照らし、森の中に沈んで行った。

(五十二)

雨季から乾季へと変わる十月になった。乾季といっても湿気の多いドアラは、カラカラに乾いているわけではない。ウーリー河とその周辺の湿地帯から昇る水蒸気

が、上空で薄雲となって滞留し、ドアラの街を覆っている。その薄雲が強い太陽の熱によって水滴となる前に蒸発してしまうため雨にはならない。こうして、ドアラの乾季は、蒸し暑く薄曇りの日が多くなる。

桂木のドアラ駐在も三年を過ぎ、一九七五年十月末東京本部から後任が決まったとの連絡があった。赴任は十二月末頃になるという。

当時、日本にはカメルーンの大使館や領事館がなかったので、領事業務は、在日フランス大使館や領事館が代行していた。だが、長期滞在ビザの発行は、カメルーン政府の承認が必要であった。このためフランスの大使館や領事館は、提出された長期ビザ申請書をカメルーン政府に送付し、同政府からの許可を得てビザを発給していた。したがって申請から取得まで相当の日時を要し、場合によっては半年を超えることもあったのだ。

こうしたことから東京の人事当局と後任者が協議の結果「フランス大使館・領事館で発行権限のある三ヶ月の短期ビザを取得してカメルーンに入国し、その間に現地で長期ビザを取得する」という方針が打ち出された。

桂木は、後任者の長期滞在ビザ申請をカメルーン政府に提出するよう東京本部からの指令を受けた。

彼は早速、カメルーンの長期ビザ発行の権限を持つ内務省総務局の公安警察（シュルテ・ナスィオナル）当局にビザ取得に必要な書類を取り揃え提出した。

「後任者が十二月中旬に赴任して来るので、是非それまでに長期滞在ビザを発給して頂けませんか。それでないと私も安心して帰国することができません。できるだけ早く発給くださるようよろしくお願いします」

長期滞在許可が下り、身分証明書（カルトゥ・ディダンティテ）を取得しない限り、現地での安定した活動はできない。桂木の帰国は一月に予定されている。後任者に事務所を任せ、安心して帰国するためにも、十二月中にビザを取得しなければならないのだ。桂木は、懸命に発給を急ぐよう申し入れた。

「できるだけあなたの希望に沿うよう努力してみます。必要書類は揃っていますので問題はないと思います。でも二ヶ月以内に発給できるかどうかはお約束できません」

ドアラのビザ発給の担当官は、少し時間はかかるかも知れないが、発給されることは間違いないから安心して待つように言った。

在ガボン日本大使館中谷参事官が転任することになった。ガボンの参事官からギニア・コナクリの代理大使への栄転である。

桂木は、中谷参事官を兄のように慕い赴任以来ずっと親交を重ねてきた。彼がいたからこそ桂木は、アフリカ

への知識を深め、愛着も高めることができたのだ。

中谷参事官は、ブラックアフリカ特にフランス語圏の事情に精通した外務省きってのアフリカ通であった。好奇心、探究心の固まりのような人で、アフリカの奥地まで踏み込み民衆と接し、その声を聞き、外交政策に反映させようと努めていた。アフリカを語る時の彼の目は、当時六十歳近い年令にもかかわらずまるで青年のように輝いていた。

「中谷参事官は、十一月十一日ドアラ経由で、任地に向かいます」

ガボンの大使館から連絡を受けた桂木は、家族と共にドアラ空港で中谷参事官を見送るため空港まで車を飛ばした。

桂木の家族は、トランジット・ルームで中谷参事官と会った。桂木は、出張、来客の送迎など、頻繁に空港の出入りを重ねていたため、入国審査官、税関などの空港係官とも顔なじみになり、ほとんどフリーパスで空港内のあらゆる所に立ち入ることができたのだ。

中谷参事官と桂木は、互いにじっと見つめ合い、万感の思いを込め、固い握手を交わした。

「ドアラに出張して来るたびに大変お世話になりました。特に奥様にはいつも美味しい料理をご馳走になり有難うございました。桂木さんの帰国も間近いと聞いております。残り少ないカメルーンの駐在生活を有意義に過しください」

中谷参事官は、桂木と由美に向って少し薄くなった銀髪の頭を深々と下げた。

「とんでもございません。いつもあり合わせのものばかりで失礼いたしました」

由美の目も潤んでいる。

「いろいろアフリカについて教えて頂いて本当に有難うございました。一緒にバミリケ地方を旅行したことは私たち家族の生涯の思い出として、ずっと記憶に残ることでしょう。ガボンとカメルーンに分かれていて、わずかな時間しか共に仕事をすることはできませんでしたが中谷さんが飛行機で一時間の距離に居るというだけで心強く感じていました。どうぞお元気で、ギニアでのご活躍をお祈りしております」

桂木は、中谷参事官と過した時間に思いを馳せた。そして、彼の家族だけが、取り残されるような淋しさが胸をよぎった。

（あと一ヶ月もすれば、カメルーンを去ることになる。一つの時代が終わろうとしているのだ）

桂木は、中谷参事官を乗せたジェット機が雲の彼方に消え去るまでじっと見詰めていた。

（五十三）

後任の木山弘武が、妻と六才の男の子、四才の女の子

を伴って赴任してきた。
引継期間は二週間。その間に長期滞在許可を得て、身分証明書（カルトゥ・ディダンティテ）を取得しなければならない。
次いで、ドアラ事務所、私書箱、銀行口座などの代表者名義の変更。家主との賃貸住宅契約の借主の名義変更。税務署、市役所への書類提出。木山駐在員の長男の小学校入学手続、長女の幼稚園入園手続、桂木の子供たちの小学校在学証明書及びそれまで学んだ学科の履習証明書など、引継に伴う数々の事務的な手続が必要であった。
また、引継期間中にヤウンデに出張、中央省庁の関係機関へ後任者の紹介を兼ねた新旧交替の挨拶回りも行わなければならなかった。
引継は、十二月三十日に終った。

大晦日と元旦は、カメルーンでも休日である。桂木はドアラ最後の休日を自宅で過すことにした。前任者から引継いだ家から引越して三年余りになる。一〇四平方メートル、シャワーだけの外国人の住むアパートとしては小さく質素な住居だ。だが、住み慣れてみれば、愛着が湧き、いざ立ち去るとなると名残り惜しい。
天井に貼り付いた守宮（やもり）のおどけた仕草も桂木には淋しげに見えるのだった。

年が明けた。一九七六年元旦を迎えた。出発も翌朝に迫った。
桂木は、その夜アパートの回りの木々や芝生にも別れを告げるため庭に出た。その夜も学生たちが、前の道の街灯を囲んで読書に耽っている。その街灯の光に蚊や羽虫が群がっている。風はなく街灯の蛍光灯がジーと音を立てていた。夜空には、かすかに雲がかかっている。その雲の切れ間から南十字星が覗いていた。

出発の日が来た。一月二日早朝、桂木の家族は、木山の家族に見送られながらドアラ空港を飛び立った。
ドアラの街を取り囲む密林が視界から消えるとすぐ前方に雲を突いてカメルーン山が現われた。頂上を薄く氷が覆っている。西アフリカ唯一の四千メートルを超える山だ。その屹立する姿が朝日を浴びて悠然と輝いていた。
桂木は、カメルーン山を眺めながらこの三年半の出来事を追想した。

赴任した夜、暗闇の中で、ガードマンを犬と間違えて踏み付けてしまったこと。摩耶と登が暗闇の中で迷子になり心配していたところに近所の少年たちが、二人の手を引き家に連れてきたこと。子供たちのベッドの下から出てきた蛇を何気なく追い払ったが、後から猛毒を持っ

たグリーンスネークだと教えられぞっとしたことなど……
（思えば多くの危険が家族の前に現われ通り過ぎて行った。幸運に恵まれていたとしか言いようがない）
日頃信仰心を持たない桂木であったが、この幸運をもたらしてくれた天の配剤に感謝した。

次いで在任期間中知己を得た人びとの顔が浮かんでは消えた。
ヤウンデにあった唯一の日系企業ソカカオ社の社長を始めスタッフたち、ヤウンデ出張の都度立寄ったヤンバ統計局長、妹を第二夫人にと薦めた工芸品商のディコンゲ、マラリアに罹った子供たちの命を救ってくれたギリシア人の女医カスカディアーデス、秘書のマダム・ベルトラン、ベルトランの休暇中臨時に秘書をしてくれたマダム・ベルナール、従業員のブーリー、ボーイのアルベール……。
（さようなら）
その顔の一つ一つが別れを惜しんでいるようだった。

カメルーン各地への旅行も桂木の脳裏に蘇ってきた。
中谷参事官と共に西カメルーンのバミリケ地方を旅行し、カムガ二世の居宅を見学した。その居宅の前に並んだたくさんの妻たちの小屋。バムーン王朝の博物館の巨大な象牙。西欧列強のアフリカへの植民地活動が活発化するなかで、独自の文字を創造し、伝統文化と西欧近代文明の調和を図ろうとしたンジョア王の業績とその遺物などその一つ一つがバミリケ地方の豊かな自然の中にあった。

さらに、北カメルーンの乾燥地帯への家族旅行が頭の中をよぎった。
（あれは、今思えば確かに向こう見ずな旅行であった）
桂木は窓に見え始めたサバンナを見て呟いた。
（子供たちには過酷な旅行だった。だが、カメルーンに来たからこそ味わえた貴重な体験だ。）
リュムシキでの月世界を見るような荒涼とした風景。ワザ国立公園内で見た野生の動物たちの生き生きした姿。アフリカ象の巨大な雄姿。いずれも現地でなければ実感できないことだった。
桂木は、この旅行が子供たちの心にどんな想い出として残っているか大人になったとき聞いてみたいと思った。

アンドルーズ夫妻宅訪問の旅も印象深いものだった。
霧の中に包まれた町ブェアにあって、バラとブーゲンビリアの咲く瀟洒（しょうしゃ）な家。そこには暁子夫人の母親を含めた和やかな家族の暮らしがあった。

そしてムベング氏の悲しい出来事が桂木の胸を衝いた。

彼の最後の言葉〝遠い処へ〟に隠された意味を察知できていれば、あんなことにならなかったかも知れない。それだけが桂木には悔やまれた。

（安らかに眠ってほしい。もうカメルーンに来ることはないかも知れないが、もし再び訪れることがあれば墓前に花を供えよう）

桂木は、次第に遠ざかって行くカメルーン山に別れを告げた。

●　●　●　●　●　●　●

中津江村のニュースがテレビの画面から消えて、別のニュースが放映されている。桂木は、ふと我に返り周囲を見回した。テレビのスイッチを消しながら、数々の話題を提供しているカメルーンサッカー選手団のワールドカップでの活躍を祈った。

そして遙か記憶の彼方に遠ざかりつつあるカメルーンの土を再度踏んでみたいと思うようになっていた。

（完）

漢詩

潮騒錄（四十五）

鯨游海

暮春偶成

乙酉季春

伴妻慵春曳杖歸
萬花紅褪綠霏霏
偶來雁帛嫁娘告
伯仲愈長季更肥

押韻・歸霏肥

〈暮春偶成〉

妻を伴ない慵き春　杖を曳きて帰る
万花紅褪せて　緑ひひたり
たまたま来たる雁帛　嫁ぎし娘は告ぐ
「伯仲いよいよ長じ　季さらに肥ゆ」と

〔注　解〕

偶成＝ふと出来上る。漢詩の題に度々用いられる。朱熹・偶成「少年易老學難成　一寸光陰不可輕　未覺池塘春草夢　階前梧葉已秋聲」の如く単独でも用いる。

春は慵い。凡ゆる生命の蠢動する時だが何故か睡い。杜甫・遅日「遅日江山麗　春風花草香　泥融飛燕子　沙暖睡鴛鴦」霏霏＝草が茂るようす。雨雪が紛々と降るさま。霜露がしげく降りるさま。曳杖は散歩の象徴。

雁帛＝雁信、雁書。手紙、信書の意。前漢武帝のとき蘇武は匈奴に使いしたが捕えられ降服を拒否した為そのまま十九年間も拘留された忠臣。帛に書いた信書を雁の足に結んで放った所、この雁が故国で発見され無事が確認され帰還につながった。この故事より信書の代名詞となった。なお鯉も手紙をいう＝鯉書。

伯仲季＝長子、次子、末子。また第三子を叔ともいう。

慵い春の暮長閑に散策する初老の夫婦。眼に写る自然の移ろいの速さと確かさ。若草の生命力に孫達が重なる。

☆外つ国に嫁ぎし吾子の筆躍る
　伯仲長じ季さらに肥ゆと

尼崎鐵路慘禍見一點光明

平成十七年五月

鐵路無慙車列横
修羅場裏見光明
馳來擧社有當救
可學後生君子行

押韻・横明行

〈尼崎鉄路の惨禍に一点の光明を見る〉

鉄路無慙　車列横たわり
修羅場裏　光明を見る
馳せ来たり社を挙げ　救いに当る有り
学ぶべし後生　君子の行いを

〔注　解〕

鐵路＝鉄道（現代中国語）。無慙＝痛ましい。むごたらしい。残酷。なお無残と表記するのは俗用。横＝ここでは動詞で横たわる。修羅場＝悲惨をきわめた場所。阿修羅は梵語でインドの鬼神。戦闘に強い神。後生＝若者。社とは日本スピンドル製造（株）。本社と工場が尼崎で事故現場の近くにあった。事故直後操業を停止、全社員で救助に当った。消防警察より早く現場に到着、斉藤十内社長の指揮でけが人を病院に搬送した。君子なる哉！

☆すわ事故ぞ工場停めよ馳せ救え
　怒声凛々しきナッパ服映ゆ

讀大野晉著日本語之起源有感

平成十七年五月

五百餘言五七歌
甕棺鐵器水田禾
総來太古遙天竺
卓説孤高浪漫多

押韻・歌禾多

〈大野晋著「日本語の起源」を読みて感有り〉

五百余言　五七の歌
甕棺鉄器　水田の禾
すべては来たる太古　遥かなる天竺より
卓説は孤高にして　ロマン多し

〔注　解〕

日本語の起源を探求した一国語学者の畢生の卓論。学会や言論界の冷笑と反論をはね返し、漸やく国際的に認められて来た研究を跡づける（岩波新書・一九九四年）。

万葉以前の大和ことばの基礎語約五百言がインド南東部及びスリランカ北部で用いられていたタミル語と対応するという。その文法はほぼ同じで「係り結び」まで一致する上に、何とサンガムと呼ぶ万葉集に匹敵する歌集の調べは五七調だったことを論証した。

物的な証拠としては死者を葬むる甕棺や農具武器としての鉄器の登場、弥生時代を決定した水田稲作の開始等この文明が人と共に南インドから北上定着したとする。

知的好奇心を大いに満たしてくれる好著であり、覚えず感ずる所生じて一首を作った。

☆遥かなるインドの涯に生るという
　この美しきやまと言葉は

三角縁神獣鏡千古謎

平成十七年六月

凹面凸盤三角縁
祓邪神獣景初年
賜予魏鏡乎贋作
耶馬臺論愈騒然

押韻・縁年然

〈三角縁神獣鏡は千古の謎〉

凹面凸盤　三角縁
邪を祓う神獣　景初の年
賜予の魏鏡か　贋作か
耶馬台論　いよいよ騒然たり

〔注　解〕

女王卑弥呼の治めた邪馬台国は九州か近畿か。古来論争は尽きず百家争鳴する所である。中国の正史三国志の倭人條には「親魏倭王卑弥呼に勅を下す。……遠方より使を遣わし貢献した。これは忠孝であり朕は甚だいとしく思う。今足下を親魏倭王となし金印紫綬を仮りに与え、装封し帯方の大守に付し仮りに授けさせる。よって種人を安んじいたわり勉めて孝順をなせ。……また五尺刀二口、銅鏡百枚、眞珠・鉛丹を賜う。還り到れば目録通り受取り、ことごとく足下の国中の人に示し、国家（魏）が足下をいとしく思っていることを知らしめよ」とある。

さてこの「銅鏡百枚」が面妖なこととなった。

卑弥呼の使いが魏帝から銅鏡を受領した年号の景初三年と刻された三角縁神獣鏡が出土した。この鏡の出土地は近畿を中心に東西に散る。よって京都学派の学者達はこれぞ魏帝より賜予された鏡に違いないと論じ、故に耶馬台国は近畿に在ったと結論ずけた。盤端の断面が三角で道教の色濃い神獣の図柄、周囲に巡る吉祥句の韻文、中央にある鈕孔の形状や大きさ――これによって呉鏡か魏鏡かが判るという――従来に比べ格別に大型で立派な鏡から魏帝の下賜品に相応しいと近畿説を主張した。

これに対しまっ向から反論したのが若き日の森浩一であった。魏の明帝が亡くなり改元した為、景初四年は正始元年となり暦上あり得ない四年鏡とは国産の証拠とし更にこれが中国では一枚も出土しない事等々を挙げる。

☆盤央の神獣すべて見来たれど
　ただ黙念と秘して語らず

〈漢詩の流れ35〉北宋の巨星たち⑦秦観・陳師道

秦観（一〇四九～一一〇〇）、字は少游又は大虚。揚州高郵（江蘇省）の人。進士合格、蘇軾の推薦で太学博士、国史館編修官となったが新法に反対、横州（広西省）に流された。蘇門四学士の一人。

春　日

一夕輕雷落萬絲　一夕の軽雷　万絲（雨）落つ
霽光浮瓦碧參差　霽光瓦に浮かび　碧参差（不揃）たり
有情芍薬含春淚　情有る芍薬は　春涙を含み
無力薔薇臥曉枝　力なき薔薇は　暁の枝に伏す

秋　日

霜落邗溝積水清　霜落ちて邗溝（運河）　積水清し
寒星無數傍船明　寒星無数　船に傍って明らかなり
菰蒲深處疑無地　菰蒲の深き処　地無きかと疑う
忽有人家笑語聲　たちまち人家の　笑語の声あり

陳師道（一〇五三～一一〇一）、字は無己又は履常。自からは後山居士と号す。彭城（江蘇省徐州）の人。曾鞏、黄庭堅に詩を学んで「黄陳」と並称された。苦吟派。

彼には一女二男三人の子があったが、貧しくて養うことが出来ず、妻子を知人に預ける等の苦労をした。次の詩は蘇軾の推薦でやっと徐州教授の職を得、長年別居していた妻子を引とって一家団欒を楽しむ喜びの詩である。

示三子　（三子に示す）

去遠卽相忘　去りて遠ければ　即ちあい忘れ
歸近不可忍　帰り近ければ　忍ぶべからず
兒女已在眼　児女　すでに眼に在り
眉目略不省　眉目　ほぼ省らず（三人の区別が出来ぬ）
喜極不得語　喜びきわまりて　語るを得ず
淚盡方一笑　涙尽きて　はじめて一笑す
了知不是夢　了らかに知る　是れ夢ならざるを
忽忽心未穩　忽忽（ふわふわ）　心未だ穏まらず

絶　句

書當快意讀易盡　書は快意に当っては　読みて尽し易く
客有可人期不來　客に可人有れば　期すれども来たらず
世事相違每如此　世事のあい違うこと　毎に此の如し
好懷百歲幾回開　好懐（いい気持）は百歳に幾回開かん

なお絶句という題は杜甫にも多いが、無題という感覚に近い。類語には即時、偶成、偶作、偶興、題壁、失題、詠懐、有感などがあるが、意味の違いは殆んど無く、単独または他の語と組合せて用いられる。

予　告

「まんじ100号記念傑作選」

2006年５月刊行

小説、詩歌、ノンフィクション、評論、

論考、随筆など多彩な内容の総合文芸記

念号　四六版ハードカバー

乞ご期待！

祝出版

孔子の一生

三戸岡道夫　著

21世紀に生かす〈仁の政治〉〈仁の経営〉

〈仁の教育〉のルーツとなった、孔子の

生涯を描く感動の物語。

栄光出版社　定価（本体1500円＋税）

撞木（しゅもく）

☆九月の衆院選挙で自民党が圧勝した。郵政民営化に焦点を絞り、争点を単純化して選挙戦を戦ったことが効を奏した。かねてから改革の必要性を感じていた国民は、「郵政を突破口としてあらゆる改革を断行する」という小泉首相の強い決意に期待して一票を投じたのであろう。

☆選挙には勝ったが小泉自民党にとってこれからが大変である。郵政民営化はさまざまな改革の入口でしかない。国民は、これをきっかけに多くの改革を望み、官僚支配から脱却した新しい政治システムの構築を期待しているのだ。それを可能にするほどの議席数を今回の選挙で確保した。とはいえ、数に物を言わせた強権政治では困る。公約にもとづき、透明性を高め、何よりも国民へのいつくしみの心を大切にする政治が求められているのである。そうした政治であれば多少の痛みがともなっても国民は小泉改革を支持し続けるであろう。

☆本誌に連載していた三戸岡道夫氏の「孔子の一生」が単行本となった。二千五百年前の中国の春秋戦国時代の大思想家孔子が、民をいつくしむ「仁の政治」を実現しようと君主を求めて諸国を遍歴した物語である。

☆行政の壁は厚い。ヤマト運輸の故小倉昌男氏が宅急便という利便性の高い宅配事業を始めるために「行政といかに闘ったか」を伊治哲氏が本号で紹介している。小倉社長が他界された後もヤマト運輸では、郵政法第五条「信書取扱いの規制」撤廃に向けて闘っているという。小泉首相も大勝に驕ることなく「仁の政治」を根幹に、草莽の声に応える改革路線を貫くことを期待したい。

（O・S）

まんじ 第98号

平成17年11月1日発行（非売）

発行人　三戸岡　道　夫（みとおか　みちお）
編集長　太　田　精　一（おおた　せいいち）
事務局長　鍋　屋　次　郎（なべや　じろう）

（事務局）　〒223-0056　横浜市港北区新吉田町2477－3　太田善朗方
TEL・FAX　045（544）5947

（郵便振替口座）　No.00270-0-64592　加入者名　ま　ん　じ

（印刷製本）　大和印刷株式会社
〒332-0031　川口市青木1－12－20
TEL 048（254）3311　FAX 048（254）3313

表紙の絵について
仏が邪心のない童児の表情を借りて人の世に
あまねく光明をもたらしてくれる。

田寺怜葦（たでられい）　画